
運命と出逢う野球少年

青空の木陰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命と出逢う野球少年

【Nコード】

N8800N

【作者名】

青空の木陰

【あらすじ】

彼は呼び出された。イレギュラーとして、魔術師が聖杯を巡り殺しあう、『聖杯戦争』に、『世界』によってその身に背負わされた『異常』を武器に、彼は運命へと立ち向かう……。

結構異端なクロスなので、支離滅裂な展開になる可能性もあります（努力はしますが）。「それでもいい」という心の広い方のみ読まれることをオススメします。作者の趣味でパワポケのネタが割と多めなので、そちらの知識を仕入れておくことより一層楽しめます。

更新は不定期です。 11/15 キーワード修正、加筆。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

この小説は作者の日々あふれる妄想を感情のままに書き綴ったものです。

初めて書いた文章であるためお見苦しい点が多々あるかと思いますが、寛容な心で読んで頂ければ幸いです。

プロローグ

side ????

「ここは……どこだろう……」

確か……、あれ？ 俺は何をしていたんだっけ？

えーと……ダメだ、思考がまとまらない。

まるで頭に霧がかかっているようだ。

何か考えようとする度に意識が白く染まり、思考が切れ切れになる。

3

辺りを見回してみる。

(暗い……)

目に入ってくるのは漆黒の『闇』。

ただそれだけだ。

どつやら真つ暗な空間に俺はいるようだ。

光が全く届いていないらしく、1cm先すら視認出来ない。

むしろ自分が立っているのか、仰向けに寝ているのかすらも判断出来ない。

身体の感触から想像するに座ってはいないようだが。

(そもそもどうして俺はこんなところにいるんだろう?)

ふと思考がそちらの方に向いた瞬間、それは起こった。

頭の片隅に感じる妙な感触。

「何だこれ? 頭の中に何かが……っ、あっ、あああああ!」

俺の頭に何かが流れ込んでくる!

違う!

俺はこんなことは知らない!

俺は 一緒に暮らしてなんかいない！

と並んで座って夕陽を見てもいない！

ちゃんと付き合ってもいない！

の店を手伝ったこともない！

に振り回されてもいない！

『俺』の知らない俺が流れ込んでくる！！

もうやめろ、やめてくれ！！！！

俺は俺だ！！

これ以上、『俺』以外の俺を刻むんじゃない！！！！

ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ
ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ
ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ
ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ
ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ
ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ
ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ
ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ
ヤメロヤメロ

やがてそれは治まった。

「はあ……はあ……はあ……」

頭が破裂するかと思うほどの情報の奔流はぽつたりと止み、さっきとは違う意味で頭がぼんやりしている。

何だったんだ……今のは？

『俺』の物でない俺の記憶？

それが流し込まれたのか？

「……………ハハッ、何でそんなことをされなきゃならないんだよ？」

乾いた笑い声が漏れる。

それはこの漆黒の空間に不思議とよく響いた。

だがまだ地獄は続く。

それが合図だったのか、『次』が始まってしまったのだ。

「……………ん……………」

意識が戻る。

どうやら気を失っていたらしい。

『あれ』以上のものが流し込まれたのだ。

気を失うのも当然だろう。

しかし……………わかったこともある。

どうやら俺は『俺』ではあるが、厳密な意味での俺ではなくなったらしい。

自分で言っていて何が何だかわからないが、そういつことらしい。

「……………ハハッ」

失笑が口を突いて出る。

そんな訳の分からないモノになるために、あんな殺人級のものを味わわされたというのか？

『俺』という存在が揺らぐほど、頭の中を掻き回されたというのか？

……バカげてる。

本当に、本当にバカげてる。

……まったく、何て理不尽なんだ。

『世界』ってのは。

しかし何よりバカげてるのは俺自身だろう。

何しろあんな廃人になってもおかしくないほどのものを喰らわされても、しっかりと『俺』という意識を保っている。

幸か不幸か、『俺』という存在は、あれだけのものを受け入れられるだけの器だったらしい。

『カオス』

今の『俺』を表す言葉はこれがピッタリだろう。

『俺』の中ではあらゆるものが渦を巻き、形を成している。

そして忌々しいことに、『俺』という存在は、その異常な状態を受け入れ、自身の存在を再構成し、『異常』を『正常』として定着させてしまっていた。

「……………光？」

唐突に漆黒の空間に光が見えた。

「そこに向かえ」と『俺』に刻まれたものが訴える。

言われなくても、こんな気色悪い空間には一秒だって居たくない。

妙に強張って動かしにくい手足をバタつかせ、光の差す方へと向かう。

そしてやっと光に辿り着いた瞬間、『俺』の意識は再び暗転した。

漆黒の空間で味わった、儀式とも呼べない異様な『儀式』。

俺を『俺』として造り変えた、忌むべきモノ。

しかしそれが齎したモノは、決して苦しみだけではなかった。

それは想像を絶する苦痛の中で、ほんの少し、だが確実に垣間見られたひとつの真実。

『俺』という存在は、例えどんな姿になっただとしても、どこ

までも、ただ『野球少年』である、という事。

それを知る事が出来ただけで、『俺』はどこか救われた気分だった。

第一夜 「召喚される野球少年」

side 士郎

弓道場の後片付けを終え帰ろうとしたところ、グラウンドの方から不自然な金属音が聞こえてきた。

気になり見に行ってみると、赤い男と青い男がそれぞれ双剣と朱槍を閃かせ、殺し合いを演じていた。

それはとても人間には真似できないもの。

その戦舞の魔力に魅入られた俺は、その場から動くことができなかつた。

やがて二人が何事か会話を交わし、青い男が距離をとり、槍を僅かに下げて構えると雰囲気が一変した。

先ほどの比ではない濃密過ぎる殺気が辺りに充満する。

青い男の朱槍に周囲から異常なまでの膨大な魔力が集まっていく。

赤いヤツが殺されるビジョンが脳裏に浮かぶ。

あれだけの魔力を使って放たれる一撃だ。

それが防げる筈がない。

あれだけの動きができるのだ。

あれがヒトであるはずがない。

しかしそれでも、ヒトの形をしている。

ヒトではないけれど、ヒトの形をしたモノが死ぬ。

俺は

「ッー!!」

その逡巡のおかげで意識がソレから外れ、金縛りが解けた。

そしてはあ、と大きく呼吸をした瞬間。

「誰だ

」!

青い男に、気付かれてしまった。

そこから先は、細切れにしか覚えていない。

恐怖と生存本能に突き動かされそこから駆け出した俺は、あろう事か校舎の中に逃げ込んでいた。

どこをどう走ったのかわからないほど校舎内を走り回り、やがて追ってくる気配がないことに安堵し、立ち止まった。

そして乱れた呼吸を整え、

「はあ……ふう……。これでともかく」

「追いかけてこは終わり、だろ」

朱い槍を持った、青い男が目の前にいた。

思考が止まり、何も考えられなかった。

そして男は、無造作に槍を振り上げ、

「運がなかったな坊主。ま、見られたからには死んでくれや」

俺の心臓を貫いた。

意識が戻った時には、俺は血の海の中にいた。

「生きている……。なんで……？」

確かに心臓を貫かれた筈。

しかし俺の心臓は、確かに鼓動を刻んでいた。

朦朧とする頭で思い出す。

青い男が去った後、誰かが来たような気がする。

その人が助けしてくれたのかもしれない。

女性のようなだったが……駄目だ、はっきりとしない。

ふらつきつつも近くの教室から持ち出した雑巾とバケツで辺りの血をふき取り証拠隠滅をした後、痛む身体を引き摺りやっと家に辿り着いた。

そして青い男との二度目の邂逅。

殺し損ねた俺を確実に始末するべく、家に襲撃をかけてきたのだ。

侵入者に反応する結界の警鐘で察知した俺は手近にあった（これしかなかった）ポスターを『強化』。

零に近い成功確率にも拘らず成功した『強化』ポスターを引っさげ、ヤツを迎え撃った。

結果は、勝敗以前のものだった。

アイツは遊んでいた。

俺は遊ばれていた。

ただそれだけのことだった。

背後から強襲してきたヤツの隙を突き、窓ガラスをぶち破って外に逃れた俺は、土蔵に向かおうとした。

その瞬間、無防備となった背中へと槍が繰り出された。

あらかじめ予測出来ていたその槍の一撃を振り向きざま弾く。

しかし次の瞬間、

「 飛べ」

唐突に繰り出されたヤツの蹴りをまともに喰らい、吹き飛ばされた。

遊びとはいえ男の槍を何度も凌いだおかげで、本気にさせてしまったらしい。

幸い、飛ばされた先は土蔵の正面だった。

蹴りのダメージでふらついていたおかげで幸運にも追撃の一刺が外れ、それが土蔵の扉に直撃し、衝撃で土蔵の扉が開いた。

「チィ、男だったらシャンと立ってる……!!」

青い男の悪態を尻目に土蔵に滑り込む。

しかしその瞬間、

「そら、これで終いだ ！」

背後から必殺の槍が放たれた。

俺は咄嗟に丸めて棒状にしていた『強化』ポスターを広げ、一度きりの盾にしてソレを防いだ。

しかしそれでチェックメイト。

盾で槍は防げても、受けた衝撃までは防げない。

『強化』ポスターの盾は槍は防ぎはしたものの貫通され元の紙に戻り、俺は土蔵の奥へと吹き飛ばされる。

そして、

「詰めた。今のはわりと驚かされたぜ、坊主」

目前に、槍を突きだした男の姿があった。

男が何事かを喋っているようだが耳に入っていない。

目の前の槍に、俺の意識は注がれていた。

「もしやとは思うが、おまえが『七人目』だったのかもな。ま、だとしてもこれで終わりなんだが」

朱槍の穂先が、俺の心臓に迫る。

つい先ほど味わった、死の感触が思い出される。

槍の穂先は肉を裂き、肋を破り、そして心臓を穿つだろう。

(…………ふざけるなよ)

頭に来た。

死の恐怖に、怒りが勝る。

「ふざけるな、助けて貰ったのに、二度も殺されてたまるか
!!」

猛る感情のままに吼える。

その瞬間、俺の背後で光が爆ぜた。

「え
？」

「なに………!？」

驚愕する俺と男。

そして光の中から『何か』が現れ、俺の胸を貫こうとした槍を打ち弾き、躊躇うことなく男へと踏み込む。

「本気が、七人目のサーヴァントだと………!？」

弾かれた槍を構える男と、手にした“何か”を一閃する『何か』。

その『何か』は、なんと小柄な『少女』だった。

少女の一撃を受けて男がたたたらを踏む。

「ちい　　！」

不利と悟ったか、男は土蔵の外へと後退する。

少女は俺の前に立ち、身体で後退した男を威嚇しながら、静かにこちらを振り返った。

「　　問おう。貴方が、私のマスターか」

凜とした声で、彼女はそう言った。

「……………」

そう問いかけてくる声に対し、俺は何も答えることができなかった。

土蔵に差し込む月の光が、彼女を照らし上げる。

金砂のような髪と深緑の瞳。

銀の鎧と青い衣装の騎士然とした格好。

何より彼女の纏う、侵し難く、荘厳であり、神秘的な雰囲気。

「サーヴァント・セイバー。召喚に従い参上した。マスター、指示を」

その全てが、俺を魅入らせてしまっていた。

そして庭で戦いが始まった。

「卑怯者め、自らの武器を隠すとは何事か……！」

少女の苛烈な猛攻を捌きながら、男が毒づく。

「
」

セイバーと、自らを名乗った少女はそれに対して何も答えず、手にした見えない“何か”を次々と打ち込んでゆく。

「デメエ……！」

男は反撃もままならず、ジリジリと後退してゆく。

何しろ『見えない』のだ。

間合いがわからない以上、迂闊に攻め込むことはできない。

加えて彼女の攻撃は一撃一撃が重い。

“何か”と槍が激突する度、魔力の火花が散る。

それがどれだけの威力を秘めているのか、素人目から見ても容易に想像できる。

そんな常軌を逸した攻撃を男は槍を振るい、確実に、的確に凌ぐ。如何に俺が遊ばれていたかがわかる。

少女も然ることながら、あの男も常軌を逸した実力者だと、改めて思い知らされた。

俺は先ほど火傷したかと思うような熱を一瞬感じた。『左手の甲』をさすりながら、その攻防を呆然と見ていることしかできなかった。

やがて少女は間合いを詰め、より深く男へと踏み込み、渾身の一撃を叩きつけた。

「調子に乗るな、たわけ　！」

男は即座にそれを見切り、後ろに跳ぶことで回避した。

そして少女にできた隙を見逃さず、男はまるで後退した瞬間を巻き戻すように前に向かって跳躍し、少女に仕掛けた。

しかし少女は地面に剣を打ちつけた体勢のまま、身体をコマのように反転させ、男の身体を断ちに行く。

あの叩きつけた一撃は、誘いだったのだ。

男は己が失態を悟り、ギリギリで踏みとどまり防御、弾き飛ばされることで危機を脱した。

両者の間合いが離れる。

双方の顔には不満の色が浮かんでいる。

共に必殺と決めた一撃をかわされたのだからそれも当然だろう。

「どうしたランサー。止まっただけで『槍兵』の名が泣こう。そちらが来ないのなら、私が行くが」

「……は。わざわざ死にに来るか。それは構わんが、その前に一つだけ訊かせろ。貴様の宝具　それは剣か？」

「さあどうかな。戦斧かもしれぬし、槍剣かもしれぬ。いや、もはや弓、という事もあるかもしれんぞ、ランサー？」

「く、ぬかせ剣使いセイバー」

丁々発止のやり取りが交わされる。

と、不意にランサーと呼ばれた男が槍を僅かに下げた。

「？」

少女はそれに戸惑う。

それは戦闘停止の意を示しているようにも見えるが、それがまったく違うものであることを俺は『あの時』に見て知っている。

「ついでにもう一つ訊くがな。お互い初見だしよ、ここらで分けて気はないか？」

ランサーの言葉に少女は目を僅かに見開く。

「悪い話じゃないだろう？ そら、あそこで呆けているオマエのマスターは使い物にならないし、オレのマスターとて姿を晒せねえ大腑抜けとききた。ここはお互い、万全の状態になるまで勝負を持ち越した方が好ましいんだが」

「断る。貴方はここで倒れる、ランサー」

ランサーの提案を、少女は真っ向から否定した。

それに対してランサーはさして表情も変えずに、

「そうかよ。つたく、こっちは元々様子見が目的だったんだぜ？
サーヴァントが出たとあっちゃ長居する気はなかったんだが
」

そう呟いた瞬間、二人の周囲が歪んで見えた。

ランサーの姿勢が低くなり、同時に冷気が巻き起こる。

あの姿勢、この雰囲気。

間違いない、あれは

「宝具　　！」

セイバーが剣らしきものを構え、目の敵を見据える。

俺なんかよりも彼女のほうがその危険性をよりの確に捉えている。

「……じゃあな。その心臓、貰い受ける　　！」

ランサーが地を蹴る。

まるで瞬間移動のようにセイバーとの距離を詰める。

まずい。

いくら彼女でも、あれはまずい。

かわせない。

(……そして喰らえば間違いなく死ぬ)

どうしてそう思うのかはわからない。

だがわかる。

あれはそういう類のものだと。

どうする？／どうにもできない。

どうすればいい？／俺には何もできない。

たとえ彼女の前に立ち、壁になっただとしても、槍は俺を簡単に貫き、そして彼女をも穿つだろう。

「
刺し穿つ」^{ゲイ}

ランサーが発する言葉と共に、彼女の足元めがけて槍が繰り出される。

普通に見ればそれは明らかに下策。

あからさますぎるその一刺は彼女には届かない。

ランサーもそれはわかっている筈。

それでも尚繰り出された、ということはそれは確実に彼女に通用する、文字通り一撃必殺の代物、ということになる。

29

彼女はその一刺を飛び越えながらランサーを切り伏せようと前に踏み出す。

もはや間に合わない。

彼女の死は一瞬の後に確実に訪れる。

俺は祈る。

無駄だとわかっているても、それでも尚、願わずにはいられない。

死の運命から彼女を救うことのできる、

「
“ 死^ボ刺の……”」

起こる筈などない、有り得る筈などない、可能性など“零”の『奇跡』を
！！

「っ！？ ぐあっ……っ！」

その瞬間、『右手の甲』に灼熱の痛みが走る。

そして俺の背後、土蔵の奥から、先ほどの比ではない、光の奔流が迸った。

「なにっ！？」

「ッ！？」

少女とランサーも動きを止め、俺を、正確には俺の背後に振り返った。

俺も光を腕でガードしながら振り返り、光の大元を見つめる。

そこはちょうど、彼女が現れた場所だった。

やがて光が収束し、奔流が止む。

「馬鹿な、ありえねえ……。この気配は、まさか……」

ランサーは一瞬呆然となったものの、即座にその場から跳び退り、少女と光の奔流を警戒している。

「……………」

対して少女は元々の位置からジリジリと後退し、やや俺寄りの位置に立って、双方を警戒していた。

そして消えた光の大元には……、

「……、いたたた……。ここは……？」

「まさか……『八人目』のサーヴァントだとおおーっ!?!?」

背中にバットを背負った、野球のユニフォーム姿の少年が横たわっていた。

第二夜 「困惑する野球少年」

side ????

意識が戻る。

眼を開けると、そこもやはり真っ暗だった。

いや、違う。

どこかから淡い光が差し込んできている。

(これは……月明かりか)

どうやら建物の中にいるようだ。

横たわっていた上半身を起こすが、いまだに頭がふらつき、思わず右手で額を押さえる。

頭を振って、無理やり意識を覚醒させる。

効果はあったようで、まだ少しぼんやりとはするものの、思考することに支障はないレベルまで意識が回復した。

「うっ……、いたたた……。ここは……?」

少しよろけながらも何とか立ち上がる。

その時、背中に妙な重さを感じた。

右手を背中にやる。

すると右手に、慣れ親しんだ感触があった。

これは……。

「バット……か？」

身体の感触から察するに、どうやら鞆らしきものに収められたバットを背負っているようだった。

「うーん……」

とりあえず、背中の鞆からバットを引き抜いてみる。

すると抜いた瞬間、頭の中に何かが流れ込んで来た。

「コイツは……」

それは情報だった。

そして知った。

このバットが唯のバットではない事を。

頭に直接情報が流れて来たにも拘らず、あの時のような苦痛は不思議となかった。

そのおかげか、抵抗もなくすんなりとそれについて理解出来た。

しかし、

「……何の冗談だよ、何でこんな物を」

理解は出来ても、納得はいかない。

僅かに沸き立つ感情。

その感情のまま、吐き捨てるように呟く。

だが冗談ではない。

これは『事実』だ。

覆し様などない。

……俺は既に知っている筈じゃないか。

『世界』が、如何に理不尽なものかということ。

「ククク……」

右手に握った木製の“それ”をだらりと重さのままに下に下ろし、俺は口の端から勝手に漏れる苦笑を抑えられなかった。

「君は……」

「……ん？」

声が聞こえた。

声のした方を振り返る。

外の景色が見えるところから察するに、この建物の入り口だろうか。

そこに赤い髪をした、なぜか服の左胸が紅く染まっている、高校生くらいの少年がいた。

「ああ、ごめん。えっと、ここはどこなのかな？ それと、君は？」

声をかけてきた彼に対し、今必要なことを訊く。

何しろここにいる理由がわからないのだ。

現状を把握するためにも、必要最低限のことは訊かなければならない。

「あ、ああ。俺は……」

若干動揺しつつも、彼が質問に答えようとしている。

離れた距離で会話するのも何なので彼に近づぐ。

しかし、

「マスター！ こちらまで下がってください、危険です！」

扉の外から鋭く響く、凜とした声に彼の返答は遮られた。

(……外に誰がいるのか。しかし、警戒されてるな。それも当然か)
何せいきなり不審人物が建物の中に現れた(らしい)のだ。
警戒しないやつなんてそれこそバカと呼ばれても仕方がない。

「おい、セイバー。そっちを気にするのもいいが、こっちも忘れるんじゃないよ。隙だらけだぜ」

もう一つ、今度は男の声が外から響いてくる。

どうやら外に二人居るようだ。

どう動いていいかわからず硬直している彼のいる扉の方へ向かい、そのまま扉から外を窺う。

どこかの家の庭のようだった。

しかし普通の家の庭には絶対に居るはずのないだろうモノがそこには存在していた。

「随分な言い草ですね、ランサー。隙だらけならなぜ向かって来ないのです?」

青の衣と銀の甲冑を身に纏った金髪碧眼の少女と、

「ハッ、隙があからさますぎるんだよ、セイバー。二度も同じ手に引っかかるほどバカじゃないんでな」

朱い槍を構え、少女と俺に意識を向けている全身青づくめの長身の男がそこに居た。

side ランサー

蔵の奥から出てきたのは変な格好をしたヤツだった。

そいつは赤と白を基調とした上下に帽子、右手に棍棒のような木の棒を持っていた。

それらがヤキユウと呼ばれる、この時代のスポーツの制服と、そのスポーツで使うバットという用具だということが、聖杯から与えられた知識で理解できた。

しかし、

「……テメエが『八人目』のサーヴァントか。これまた妙なヤツが

召喚されたもんだ」

なぜそのヤキユウの格好をしたヤツが、英霊として召喚されたのか。そもそも聖杯戦争で召喚されるサーヴァントは七人の筈。

『八人目』が召喚されることなどまずありえない。

しかし事実として、ソイツからは薄くはあるものの、サーヴァント特有の気配が漂っている。

完全なイレギュラー……か。

(……これ以上、ここにいるのは危険だな)

遠くからもう一つ、サーヴァントの気配を感じる。

さっき学校でやりあったヤツだ。

流石に三対一では生還できるかもわからない。

加えてこの身は令呪による制約によって、全力で戦闘を行うことができない。

俺の理性が早期離脱を訴えかける。

俺はそれに従いセイバーに背を向け、庭の隅へ歩を進める。

「逃げるのか、ランサー。いや、『クー・フリーン』」

セイバーが俺の真名を言い当てる。

「……なぜその名を？」

予想はつくが、一応訊いてみる。

「……あれほどの槍の腕前、獣の如き俊敏性、そして何よりその朱い槍と解放しかけた宝具の真名。そこから該当する英雄はただ一人。魔槍『ゲイボルク』を担いしケルト神話最大級の英雄、アイルランドの光の御子」

「……やはりか。」

イレギュラーに遭遇したとはいえ、真名解放を中断するべきじゃなかったな。

失策だ。

「……ドジったぜ。こいつを出すからには必殺でなけりゃヤバいつてのにな。まったく、有名すぎるのも考え物だ」

庭の隅に辿り着き、塀の上へ飛び移る。

「己の正体を知られた以上、どちらかが消えるまでやりあつのがサーヴァントのセオリーだが……あいにくうちの雇い主は臆病者でな。槍が躲かわされたのなら帰ってこい、なんてぬかしてやがる」

塀の上からセイバーを見据え、次いで蔵の入口にどこかポカンとしているイレギュラーに視線を向ける。

観察すればするほど奇妙な印象を受ける。

「ま、今回は槍を放つても躲されてもいないが、イレギュラーに遭遇した上、真名までバレしまったからな。ここは仕切り直させてもらうぜ」

身体を反転させ、最後に首から上だけを背後に向ける。

「ああ、追つて来るのなら構わんぞセイバー。ただし　その時は、決死の覚悟を抱いて来い」

トン、と跳躍し、屋根から屋根へ次々飛び移る。

目指すはマスターの砦。たぐら

俺には各サーヴァントへの斥候と、それについての報告の義務が命令によって課せられている。

果てしなく面倒で嫌なのだが、主の命は果たさなければならぬ。

主への忠節を誓う騎士サーヴァントの辛い所だ。

ただそのいけ好かないマスターの、『八人目』のサーヴァントが召喚され、ソイツがヤキュウの格好をしていたと知った時の驚愕に歪むだろう表情を想像すると、少しだけ報告が楽しみになった。

side ????

青い男が去った。

明らかにアイツは異常だ。

扉の高さはあの男の身長よりも高い。

しかしあの男はそれを物ともせずあっさりとその上に飛び乗り、あまつさえ民家の屋根から屋根へ忍者のように飛び移っていったのだ。そんなことができる人間などまず居ない。

つまりアイツは人間の領域を超えた力を持っているということになる。

困惑する。

『世界』は俺に何をさせるつもりなんだ？

悪寒が走る。

俺はこれから一体どうなるんだ？

言い知れぬ不安に襲われ、知らず知らずの内に右手のバットを強く握り締めていた。

「おまえ、何者だ」

ふと気がつくと、赤毛の少年が騎士の格好をした少女に話しかけていた。

どうやらあの二人の会話と行動に気をとられていた間に、ジリジリと彼女のほうへ近づいていっていったらしい。

「？ 何者もなにも、セイバーのサーヴァントです。……貴方が私を呼び出したのですから、確認をするまでもないでしょう？」

静かな声で、眉一つ動かさずに彼女は言った。

サーヴァント。

あの男も確かその言葉を言っていた。

それに『イレギュラー』とも。

サーヴァント……、どついう意味だ？

強いて言えば、英語の直訳の『奴隷』が当てはまるが……。

それに彼が彼女を呼び出した？

なら、俺も……？

「セイバーのサーヴァント……?」

どこか呆けた表情で、彼は聞き返す。

「はい。ですから私のことはセイバーと」

穏やか且つ丁寧な口調で、澁みなく彼女は答えた。

すると彼女の顔を見つめていた彼の顔がみるみる紅く染まっていった。

……気持ちはわからなくもない。

セイバーと名乗った少女は超がつくほどの可愛らしい美少女だ。

そんな彼女に対して、無反応でいられる男などまず居ない。

もしいるとすれば、それは「アッー!!」の趣味を持つ方々位のものだろう。

背筋に猛烈な悪寒が走るのはなぜだろうか？

筋骨隆々の大男が、鬼も裸足で逃げ出すだろう表情と、某映画の鮫

もかくやという勢いで迫ってくるというビジョンがなぜか脳裏に浮かぶ。

キミはもっと『若さゆえの劣情』に身をまかせてもいいと思うのだよー！

ソイヤ！ ソイヤ！ ソイヤ！ ソイヤ！

み〜みみみ〜

……全力で思考をカットする。

そのビジョンを即座に脳内ブラックホールに放り込んで闇に葬り去ると、意識を再び二人の方に向けた。

「そ、そうか。ヘンな名前だな」

紅く染まっている顔を手で覆い隠しながら、彼は変な返し方をした。

彼女はどうかやらそのことには気づいていないようだ。

「……俺は士郎。衛宮士郎って言って、この家の人間だ」

「
」
「
」

双方の会話が途切れる。

「いや、違う。今のはナシだ。訊きたいのはそういうことでなくて、つまりだな」解っています。貴方は正規のマスターではないのですね」「え……?」

彼女の言葉が彼の言葉を遮る。

「しかしそれでも貴方は私のマスターです。契約を交わした以上、貴方を裏切りはしない。そのように警戒する必要はありません」

「う……? つそ、それは違う。俺、マスターなんて名前じゃないぞ」

ますます混乱した彼はさらに変な言葉を紡ぐ。

それに対して彼女は、

「それではシロウト。ええ、私としては、この発音のほうが好ましい」

そんな男殺しの台詞をさらりと吐いた。

「っ……………！」

いきなり名前を呼ばれるとは思わなかった彼は、破裂するんじゃないかと思うほど顔を真っ赤にして、眼を白黒させていた。

…………… ちょっと面白いぞ。

「ちょっと待て、なんだってそっちの方を …… つ、い、痛っ…」

彼は何かを言いかけたが、突然顔を顰め、小さく声を上げる。

「熱っ…………… な …… これは…………… ！？」

彼は自らの手の甲を見て、驚愕の表情を浮かべる。

「それは令呪と呼ばれるものですシロウ。私たちサーヴァントを律する三つの命令権であり、マスターとしての命でもある。無闇な使用は避けるように。そして」

彼女はそう言うと、彼の両手を握って、その手の甲を見つめる。

彼は再び顔に血を登らせていた。

「令呪が両手の甲に『二つ』……。やはり貴方も、シロウによって呼び出されたのですね」

彼女の視線が、初めてこちらに向けられた。

「え………？」

彼もつられてこちらに視線を向ける。

）　　やっぱりか（

嘆息する。

どうやら俺は、本当に彼によってここに呼び出されたらしい。

扉から離れて庭へと出る。

振り返って後ろを見てみると、俺が居た場所はどうやら蔵だったらしい。

「……………どうして俺をすぐに攻撃しなかったんだい？」

あの時、俺の近くに居た彼に警告を発した彼女だ。

あの青い男が去った後にこちらに矛先を向けてもなんら不思議ではない。

しかし彼女はその後、こちらに対して何も仕掛けてはこなかった。

彼女と向かい合い、訊いてみる。

「……………最初はあまりに異常な事態だったため、警戒せざるを得なかったのですが、初めて貴方を視認した時に理解しました」

「理解したって……………なにを？」

「貴方が、シロウに呼び出された存在なのだ。貴方とシロウとの間に繋がっているラインが見えたので。それに殺気も感じませんでしたので、特に害はないと判断したのです」

俺の瞳をジッと見つめ、彼女はそう答えた。

俺は彼女の横に居る少年に振り返り、

「えっと、士郎君、だっけ？ 君が俺を呼び出したのかい？」

そう質問をすると、彼は慌てた様に、

「あ、あーっと……そういうことに、なるの、か？」

質問に質問で返してきた。

「いや、俺に訊かれても……」

「……俺にもわからないんだよ。セイバーを呼び出した時はアイツに殺されそうになった瞬間、こんな理不尽に殺されてたまるか、って強く思ったらセイバーが現れて……」

「へえ……。じゃあ俺の時は？」

「……あの時、アイツの槍にセイバーが貫かれて殺されると思った

んだ。でも俺にはなにもできなくて……。だからセイバーが槍を喰らいそうになった瞬間、セイバーを助けられる奇跡を思わず願ったんだ。そうしたら……」

「俺が出てきた、と。そういうことかい？」

「ああ」

「ふうん……」

つまり俺は奇跡の結果、士郎君に呼び出されたということか。

そして俺が呼び出されるといってイレギュラーな事態のおかげで、彼女が死なずに済んだ、と。

ワケがわからん……。

が、まあとやかく言うのはやめておこう。

「とじろで……」

「ん？」

何だろう？

「君の名前は？ まだ訊かせて貰ってないんだが……」

そう言われて、俺はまだ名乗っていないことに思い至った。

「ああ、そうか。まだ名乗ってなかったね。俺の名前は……」

そうして俺は、土郎君と彼女、セイバーに向かって告げる。

「小波。一ノ瀬いちのせ小波こなみ。見ての通りの、野球少年だよ」

自らの名を。

第三夜 「赤の主従と野球少年」 (前書き)

文才が欲しいと、切に願います。

他の作者様方が偉大に見える……。

第三夜 「赤の主従と野球少年」

side 小波

「小波。一ノ瀬 小波。見ての通りの、野球少年だよ」

彼らに自らの名を告げる。

(……何か、妙な感じだな)

普通は会ったその場で自己紹介位はするものだ。

時間が経った後で改めて名乗ることに違和感が拭えない。

やはり最初に会ったその場で名乗っておくべきだったな。

もっとも、あんな事態の中でそれをやれというのも度々無理な話だが。

「そっか。いい名前だな。もう知ってるだろうけど、改めて。俺は衛宮 士郎。士郎で構わない」

士郎君が俺に対して改めて名乗る。

同時に右手を俺に向かって差し出してきた。

「ああ、よろしく、士郎君。」

どうやら少しだが彼も緊張が解れてきたようだ。

言葉に固さがなくなってきた。

右手を彼に向かって差し出し、握手を交わす。

彼とはいい関係を築けそうだ。

「」

そして彼の隣、セイバーと彼に名乗った少女はこちらに目を向けたままなぜか目を丸くし、ポカンとした表情をしていた。

はて、どうかしたんだろうか？

「えっと、セイバーさん、だっけ。どうしたんだ？」

そう問いかけると、彼女ははっとした表情をして軽く頭を振り、改

めてこちらを見返した。

「私のことはセイバーで構いません。……まさかいきなり“真名”を名乗るとは思いませんでしたので」

彼女は少し戸惑った様子ながらも、そう答えを返してきた。

……“真名”ってなんだ？

意味合いから察するに本当の名前、という事なのだろうが……。

……そういえば彼女は彼に“セイバー”と名乗ったよな。

“セイバー”……『剣士』か。

いくら彼女が外国人とはいえ、そんな名前の人間がいるものだろうか？

あの青い男も確か“ランサー”、『槍兵』と呼んでいたっけ。

偽名……ということなのだろうか。

(気になるな……訊いてみるか)

彼女にそのことを訊こうとしたその瞬間、

「ッ!!」

妙な感覚が、全身を駆け巡るのを感じた。

何とも形容し難い感覚。

ざわり、と俺の中の何かが蠢いた。

なにかが近づいてくる

下げていた視線をふと上げると、セイバーの雰囲気が一変していた。

扉の一点を見つめる彼女。

その意識はどつやらその向こう側に向けられているようだった。

「セイバー、もしかして君も……」「外に敵が二人居ます」……敵？」

俺の言葉を遮り、そう彼女は固い声で言った。

「セイバー、敵って一体……」

士郎君がいささか戸惑った様子で問いかける。

それに対して彼女は、

「幸い、先程の戦闘での負傷はありません。この程度の重圧なら数秒で倒しうる相手です。」

そう言って、軽やかに跳躍する。

そしてランサーと呼ばれた、あの青い男と同じように塀を飛び越え、外へと飛び出して行った。

「……ちょ、ちょっと待て、セイバー！」

士郎君は一瞬呆然としていたがすぐさま再起動し、セイバーを追って門へと駆け出した。

俺もその後を追いかける。

あの感覚の正体が何なのかを確かめる必要があった。

おそらくこの先に、その答えがある。

そう直感が告げていた。

「セイバー、何処だ……!?!」

門まで辿り着くと、彼は素早く門を外して門を開き、外へと飛び出して必死に闇夜に目を凝らす。

俺も土郎君に続いて外へと出る。

あの感覚のおかげだろうか。

彼女の居る位置がなんとなくわかる。

そしてその近くに、もう一つ“奇妙な感触”があることに気付いた。

これは一体……?

「ッ!」

土郎君が人気のない小道へと走り寄る。

その方向から何かがぶつかると、鈍い物音がしたのだ。

俺もすぐさまそちらへと駆ける。

「そこか……!」

そして、俺と彼は、それを見る。

道の真ん中で紅い外套を纏った男と、セイバーが対峙していた。

一瞬の後、セイバーは男へと突進する。

その様に、ためらいなど微塵も感じられなかった。

その一撃で体勢を崩される赤い男。

そのままセイバーは、男の命を断ちに行く。

しかしその奥。

人の気配を感じる。

そこに誰かが居るようだった。

赤い男は、その誰かを護っている様にも見えた。

ただ、その他にも何かが勘に引っかけたが……。

ふと隣の彼を見る。

彼は目を大きく見開き、動揺を露わにしていた。

「や
」

彼の震える唇から、掠れたような声が漏れる。

そして、

「止める、セイバー………!!!!!!」

響き渡る咆哮。

その叫びに呼応するように、彼の左手の甲が一瞬輝く。

そしてその瞬間、男に止めを刺す寸前だった彼女が、石化したかのようにその動きを止めた。

その隙をつき、即座に間合いを外す赤い男。

「正気ですか、シロウ。今なら確実にアーチャーとそのマスターを倒せた。だというのに、令呪を使ってまでその機会を逃すとは……」

「
」

彼を睨みつけながら抗議の声を上げる彼女に対して、彼は沈黙で以って応える。

その視線は、セイバーを通り越し、赤い男をも通り抜けてその奥へと注がれていた。

「マスター、指示を撤回してください。貴方がそのような態度では、倒せる相手も倒せなくなる」

構えなおすセイバー。

手にした見えない“何か”の先には、仕留め損ねた赤い男が居る。

「……違う。止めてくれ、セイバー。正直、俺には何がなんだか判らない。それでも おまえが襲いかかろうとしているヤツは、俺が知っているヤツなんだ。それを襲わせるなんて、出来ない」

「何を言うのです。彼女はアーチャーのマスターだ。私たちの敵なのですから、ここで仕留めておかなければ」

「……そんな事は知らない。だいたいな、マスターなんて言うてるけど、こっちはてんで解らないんだ。俺の事をマスターなんて呼ぶんなら、少しは説明するのが筋つてもんだらう」

正直に言って、俺にも何がなんだかわからない。

判断材料が少なすぎるこの状況で、迂闊に裁定は下せない。

ただ今まで見てきた状況の中で、いくつかわかっていることもある。

ここは

「……悪いけど、俺は士郎君の肩を持つよ」

彼女に反対票を投じることにする。

「ッ、何故です!?!」

要請を断った俺に対し、彼女から射殺すような視線が注がれるのを感じる。

正直に言って、怖い。

一体どうすれば、あんな可愛らしい少女がこれほどの殺気の籠った視線を放てるのか。

身体が竦む。

それでも俺は、彼女に答えなければならぬ。

だからそれに耐え、嘘偽りない本心を口にする。

「……正直、俺にも事情が全く判らない。ただ、セイバーの言っていることはおそらく正しいことなんだろう。それは解る。だから、セイバーの行動は間違っていないと、俺は思う」

「……っ、だったら「でも、士郎君は何一つ事情を解っていない」……！」

「事情も理由も理解していない人間が、知人を指して『あの人は敵だ』っていきなり言われて、それでも躊躇せずに襲わせるなんて事、出来ると思うっ?」

「……、しかし」

「それに、さっきから思っていたことなんだけど、何かその人たちから敵意も何も感じられなくてさ。だから問答無用に成敗するんじゃないくて、少なくとも、言葉を交わす位の余地はあると思うんだ」

「……………」

「何より」

「？」

……このことは正直、言っていないものか迷う。

セイバーは次に紡がれる俺の言葉を待っている。

多分、これを言うことは彼女にとって失礼に当たる。

ただ、これも紛れもない俺の本心だ。

だから俺は、彼女に告げる。

「君みたいな女の子が、無闇に血に染まるのは見たくないんだ」

彼女は生粋の武人だ。

おそらく間違いない。

でも彼女に血は似合わない。

それは最初から感じていたことだ。

彼女にはもっと穏やかで、優しい雰囲気似合う。

張り詰めた空気の中、彼女のどこか悲しそうな深緑の瞳を見たその瞬間、ふとそう思ってしまった。

「……………ッ」

ふとセイバーを見返してみると。

何やら大きく目を見開いて、どこか放心したような顔をしていた。

……………やっぱり失言だったか？

(撤回した方がいいかも知れないな……………)

今だ啞然としている彼女に、前言撤回の意を示そうとしたその時、

「ふうん。つまりそういうコトなワケね、素人のマスターさん？」

丁寧だがどこか刺々しい声が、向こう側から降ってきた。

声のした方を見る。

視線の先には赤い男と、それを押しつけて前に出る、これまた紅いコートを着た制服姿の少女が居た。

「遠坂、凜」

隣の士郎君が呆然とした表情になりながらも、彼女のものらしき名前を紡ぐ。

彼女が士郎君が『俺が知っているヤツ』と言った人か。

ジッと観察してみる。

整った目鼻立ちに、艶のある長い黒髪を頭の横二箇所でもリボンで括っている。

そしてその佇まいからは『優雅』と言つべきか、そんな気品溢れる雰囲気醸し出していた。

間違いなくトツプレベルの美少女だ。

ただ……何だろう？

『物凄く厄介な気配がする』

俺の中の何かが、なぜかそう訴えていた。

俺の視線を気にするでもなく、彼女は、

「え？ なに、私のこと知ってるんだ。なんだ、なら話は早いよね。とりあえず今晚は、衛宮くん」

とんでもなく極上の笑顔で、彼に挨拶をしてきた。

「あ　　え？　……ば　　バカかおまえ、今晚はってそんな場合じゃないだろう！　遠坂、おまえは……！」

「ええ、貴方と同じマスターよ。つまりは魔術師って事になるわね。お互い似たようなものだし、隠す必要はないでしょう？」

「魔術師、だって　　？　　そんな、おまえ魔術師なのか遠坂……！？　……あ　　、あ、いや違う。言いたいののは、そういうことじゃなくて」

混乱の極致に居る彼の言動を聞いていくうち、遠坂 凜と呼ばれた少女はみるみる不機嫌そうになっていき、彼をジッと見返している。

士郎君はそれに気付いたようで、慌てて言葉を付け足す。

しかし……今度は『魔術師』ときたか。

……やれやれ、ここまで来るともう「何でも来い」という気になってくるな。

「そう。納得いったわ。ようするにそういうコトなワケね、貴方」

彼女はそう言って俺たちを一瞥する。

ジッと。

士郎君、そしてセイバーへと彼女は視線を送る。

すると俺のところでは何故か彼女の視線が止まった。

「ところで貴方……何？」

そう言って彼女は俺を、正確には俺の格好をジッと訝しげに観察している。

……何だろう、自己紹介でもした方がいいのだろうか。

「……あの」

俺が口を開きかけたその瞬間、

「凜」

今まで一言も発さなかった、彼女の傍らに居る赤い男が彼女の名を呼んだ。

「なに、アーチャー？」

彼女はそう言って彼の方を向く。

……彼はアーチャーという名前なのか。

“アーチャー”……『弓兵』か。

またこの手の名前が出てきた。

“セイバー”、“ランサー”に引き続いて今度は“アーチャー”か。

(……一体どうなっているんだろうな?)

彼を見る。

褐色の肌に、後ろに掻き上げた色素が抜けたような白髪。

何より特徴的なのが、身に纏う血で染めたように真っ赤な真紅の外套と、鷹のように鋭く強い意志を宿す鈍色の瞳。

いかにも歴戦の勇士といった雰囲気をも醸し出している。

ふと彼の雰囲気、というより彼から感じる感触に、妙な違和感を感じた。

(何だ……この感じ。つい最近、どこかで感じたことがあるような……?)

俺の思考を他所に、アーチャーと呼ばれた男は彼女に向かってある意味聞き捨てならない言葉を口にする。

「その少年、サーヴァントだぞ」

「…………え？」

目が点になる彼女。

そしてその目が再度俺に向けられ、また再びアーチャーの方へと方向転換。

一瞬の後、

「ちょ、ちょっとどづいう事よ、アーチャー！」

さっきまでの余裕綽々たる態度はどこへやら、狼狽の表情も露わにアーチャーに食って掛かっていた。

…………もしかして、これが素なのだろうか。

そんな彼女に対してアーチャーはさして表情も変えず、

「…………私に訊かれても困るのだがな。ただ一つ言えるのは、その少年からはかなり薄くはあるものの、サーヴァント特有の気配がするという事だけだ」

非常に冷静な態度で、彼女にそう答えた。

「なによそれ！ もうサーヴァントは七人揃ってるはずでしょう！
？ そこにセイバーが居るんだし！」

セイバーを指差しながら、彼女は吼え続ける。

何か色々台無しだ。

「だから私に訊かれても困るといっ……。まあ、何らかのイレギ
ユラーが起こったと考えるのが妥当だろう。まずは現実を直視した
まえ、リン。そのような風では『常に優雅たれ』の家訓が泣くぞ」

「ぐっ……。い、いいわ、譲りたくないけど百歩譲って八人目のサ
ーヴァントが存在するのは認めましょう。……でもなんで、サーヴ
アントが野球のユニフォームを着てバットを背中に差しているのよ
お……！」

「……これで三度目だが、私に訊かれても困る。知りたければ本人
か、そこで呆けている小僧にでも訊けばよからう」

そう言ってアーチャーは、億劫そうに俺と士郎君に向けて顎をしゃ
くる。

彼女はそれを受けて三度^{みたひ}こちらに向き直り、口を開く。

やたらと無表情だが、それがかえってこちらに恐怖を呼び起こす。

「アーチャー、悪いけどしばらく霊体になっててもらえる？ わたし、ちよつと頭にきたから」

「それは構わないが……いいのかね？」

「わたしが『いい』って言ってるんだからいいのよ。腹いせに現状を思い知らせてやらないと気が済まなくなったの。それまで貴方の出番はないから消えていて。貴方がいたらセイバーだって剣を収められないでしょ」

彼女の、唯我独尊感たっぷりの言葉にアーチャーは一つ吐息を漏らす。

「ふう、また難儀なことを。まあ命令とあらば従っただけが……忠告すると、君は余分な事をしようとしているぞ。そして、そのイレギュラーは君にどう見えていようと仮にも英霊。油断はしないことだ」

そう言うと、彼はそれこそ幻のように消え去った。

……消えた？

(いや違う、この感じは)

「と、遠坂、いまの……！」

ふと横を見ると、今の光景を見た士郎君が驚愕の表情を顔に貼り付けていた。

しかし彼女はそれを気にも留めず、

「いいから話は中でしましょ。どうせ何も解っていないんでしょ、衛宮くんは。安心して、イヤだって言っても全部教えてあげるから」

それにあの意味不明のサーヴァントについても知りたいしね。

その言葉を付け足し、彼女はずんずん門へ向かって歩いていく。

(意味不明って……また随分な言われ様だな)

解らなくもないけど。

「え　　待て遠坂、なに考えてんだおまえ……！」

士郎君が思わず呼び止める。

と

「バカね、いろいろ考えてるわよ。だから話をしようって言ってるんじゃない。衛宮くん、突然の事態に驚くのもいいけど、素直に認めないと命取りって時もあるのよ。ちなみに今がその時だって分かって？」

そう言いつつ振り向いた彼女の顔は、俺に視線を向けるまで浮かべていた笑顔とは別物だった。

何かコワイ。

だがそれ以上に、

（ ）（ ）おまえが言うな（ ）（ ）

そう心の中でツッコミを入れた俺は悪くないと思う。

(……今、誰かと心の声がハモったような?)

そう思い、すぐ目の前にいるセイバーを見る。

彼女は既に放心状態から回帰し、アーチャーが消えたことで剣を下していた。

「「……………」」

彼女と目が合い、視線が交錯する。

貴方ですか。

彼女の目が、そう語っているように見えた。

何か嬉しかった。

しかし、

(……待てよ、もう一人いたような……?)

「それじゃ行こつか。衛宮くんのおうちにね。貴女もそれでもいいでしょうセイバー？ 見逃してもらったお礼に、貴女のマスターと、ついでにその意味不明に色々教えてあげるんだから」

「……ハツ、い、いいでしょう。何のつもりかは知りませんが、貴方がマスターの助けになる限りは控えます。それと、彼は意味不明という名前ではありません」

何か考え事でもしていたのか、セイバーは彼女の言葉にやや遅れながらも同意を示し、ついでに彼女から付けられた、俺に対しての不名誉な呼称にさりげなく抗議を入れていた。

そして先行していた紅いコートの少女は衛宮邸の門をくぐっていく。

「……なんかすげえ怒ってるぞ、あいつ……」

彼とセイバーと並んで、前方の彼女に遅れること数メートル。

門までの道すがら、士郎君は「何でだ？」とでも言いたげな視線を俺に対して向けてくる。

いや俺に聞かれても……どう答えると？

「……………」

とりあえず無言で肩を竦める。

彼はそれを見て、元々そんなに期待してなかったのか、すぐに前方に視線を戻してこう一人ごちた。

「それにしたってあいつ、なんか、学校の時とは180度イメージが違う気がするんだけどなあ……………」

多分猫被ってたんだと思うよ、土郎君。

家主の手により開け放たれた衛宮邸の門をくぐる。

(……………見られてるな)

俺はさっきからずっと、誰かの視線を感じていた。

まるで訳の解らないものを見るような、あの赤い少女とは別ベクトルの疑惑と困惑の視線。

「……………」

無言のままそつと周りを見渡す。

士郎君じゃない。

セイバーでもない。

あの赤い少女でもない。

だがそれ以外に、周囲には誰も居ない。

（ならばおそらくは　　）

その予想に辿り着いた途端、身体に突き刺さる視線がどこか薄ら寒く感じた。

そして、

（ふむ、まさか心が通じ合うとはな。クククッ）

そんな感情が、何故かその視線の中に同時に含まれているようにも感じた。

第三夜 「赤の主従と野球少年」 (後書き)

セイバーフラグその1が立った!!

『ムード』が身に付いた!!

『体当たり』が身に付いた!!

『慎重打法』が身に付いた!!

筋力・技術・変化球が大幅に上がった!!

……書いててちょっと空しくなってきた。

第四夜 「説明を受ける野球少年」(前書き)

グダグダ……。

このシーン、ここまで長くする必要なかった。

己の文才のなさを嘆きます……。

ちなみにこの小説の主人公は、一応デフォルメ体ではなく擬人体(?)で、容姿に関しては完全に作者の趣味です。

第四夜 「説明を受ける野球少年」

side セイバー

『奇妙な少年』

それが私の彼に対する第一印象だった。

マスターであるシロウと彼と共に連れ立って家の門へと向かう道すがら、ちらりと横目で彼を見る。

見れば見るほど奇妙な出で立ちだ。

赤白を基調とした上下に帽子、背中にバット、ヤキユウと呼ばれるスポーツの用具を背負っている。

アーチャーのマスターではないが、確かに彼が英霊とはとても思えない。

彼からは英霊が持つ強者の雰囲気も威圧感も、全くと言っていい程感じないのだ。

君みたいな女の子が、無暗に血に染まるのは見たくないんだ。

彼が私に言った言葉が思い出される。

騎士であるこの私を、彼は女の子だと言った。

心底驚いた。

まさかそんなことを言われるなどとは思いませんでした。

そして何より驚いたのは、彼の言葉に対して驚きを覚えてしまった私自身についてだった。

思えばランサーとの戦いの際、初めて彼を目にした時から私はどこかおかしかったように感じる。

いくらマスターとのラインが見えたからと言って、いくら彼から殺気を感じられなかったからと言って、それが彼を警戒しない理由になど成り得はしない。

ましてや彼は通常ならばあり得ることのない、『八人目』のサーヴアクトとして召喚されたイレギュラー。

あのランサーですらしっかりと彼を警戒していたのだ。

警戒しないなどそれこそ愚の骨頂。

しかし事実、姿を見る直前まではともかくとして、ランサーが去った後でも彼に対して私は警戒心など微塵も抱かなかった。

「……………ふう」

僅かに俯き、吐息を一つ漏らす。

何故私は、マスターから攻撃を止めてくれと言われた際、彼に助けを求めたのだろうか。

何故私は、アーチャーのマスターが呼ぶ彼の呼称に思わず抗議を入れたのだろうか。

何故私は、

彼の事が、ことう気にかかるのだろうか。

(本当に……………解らない事だらけだ)

家の門が目前に迫る。

門をくぐる前にもう一度、彼の顔を見る。

帽子に隠れた黒の短髪にやや幼いがそれなりに整った顔立ち、そして左の頬に貼られた白いバンテージ。

イチノセ コナミ

突如イレギュラーとして召喚され、サーヴァントらしからぬ気配と風体をし、初対面でクラス名より先に真名を名乗り、あまつさえ私が血に染まるのを見たくないと言った少年。

これから先、彼がこの戦争に一体どのような影響を齎すのか。

そして、彼がどのような運命を辿っていく事になるのか。

私はその時、自らの意識の全てが彼に奪われていた事実気付くことが出来なかった。

s i d e 小波

武家屋敷風の家屋の廊下。

やたらと広い建物の中に、足音だけが大きく木霊する。

俺を含めた四人は皆、ただひたすらに無言だった。

赤い少女は初めて上がったであろう他人の家なのにも拘わらず、廊下をずんずんと歩いてゆく。

セイバーは土郎君の背後から淡々と彼について行っている。

そして土郎君はというと、先を進む彼女に視線を向けたかと思えば今度は背後に居る少女に振り返ったりと、なんだか落ち着かない様子だった。

「？ 何かあるのですか、シロウ」

「……ああいや、なんでもない」

不審に思ったセイバーの問いかけにも、生返事で答える彼。

考え事でもしているのだろうか。

心ここにあらずといった様子で、彼は視線を宙に彷徨わせている。

「へえ、けっこう広いのね。和風っていうのも新鮮だなあ。あ、衛宮くん、そこが居間？」

そう言いながら居間に入っていく彼女。

……遠慮の欠片もないな。

「うわ、寒っ！　なによ、窓ガラス全壊してるじゃない」

入るなり彼女はそう叫ぶ。

居間に入ってみるとなるほど、庭に面した窓ガラスが悉く割れており、隙間風どころじゃない寒風が部屋に吹き込んでいた。

「仕方ないだろ、ランサーってヤツに襲われたんだ。なりふりかまっつてられなかつたんだよ」

「あ、そういう事。じゃあセイバーを呼び出すまで、一人でアイツとやり合ってたの？」

「やりあってなんかない。ただ一方的にやられただけだ」

顔色も変えず、彼は淡々と言う。

「ふうん、へんな見栄張らないんだ。……そっかそっか、ホント見た目通りなんだ、衛宮くんって」

どこか嬉しそうに彼女はそう言い、割れた窓ガラスまで歩いていく。そしてガラスの破片を手に取ると、ほんの少しだけまじまじと観察し、

「
M i n u t e n v o r S c h w e i B e n
」

そう呟き、ぷつり、と指先を切り、窓ガラスに血を零した。

すると粉々に砕けていた窓ガラスはそのままひとりでに組み合わさり、数秒とかならず元通りになってしまった。

(へえ……これが『魔術』ってやつか)

その光景に感心はしたものの、驚きはあまり感じられなかった。

何せ

「遠坂、今の
」

士郎君はその光景に目を見開き、口をパクパクさせている。

彼女の言によれば彼も『魔術師』の筈だが、何故驚く？

そんなにすごい事だったのか？

「ちょっとしたデモンストレーションよ。助けて貰ったお礼にはならないけど、一応筋は通しておかないとね。……ま、わたしがやらずともそつちで直しただろうけど、こんなの魔力の無駄遣いでしょ？ ホントなら窓ガラスなんて取り替えれば済むけど、こんな寒い中で話すのもなんだし」

「いや、凄いぞ遠坂。俺はそんな事できないからな。直してくれて感謝してる」

さも当たり前という風に言う彼女に対し、彼は賞賛と感謝の意を述べた。

……なるほど、出来なかったから驚いていたのか。

「？ 出来ないって、そんな事ないでしょ？ ガラスの扱いなんて初歩の初歩だもの。たった数分前に割れたガラスの修復なんて、どこの学派でも入門試験みたいなものでしょ？」

彼女は訝しげな視線を彼に向ける。

「そうなのか。俺は親父にしか教わった事がないから、そういう基本とか初歩とか知らないんだ」

「
はあ？」

さらりと述べる彼に対し、彼女はピタリ、と動きを止めた。

「……ちょっと待って、じゃあなに、衛宮くんは自分の工房の管理もできない半人前ってこと？」

「……？ いや、工房なんて持ってないぞ俺」

「……まさかとは思っけど、確認しとく。もしかして貴方、五大要素の扱いとか、パスの作り方も知らない？」

「おっ」

「……………」

何か異様なものを見るような視線を彼に向け、黙り込む彼女。

……なまじ綺麗なだけにその様子には迫力がある。

「なに。じゃあ貴方、素人？」

「そんな事ないぞ。一応、強化の魔術ぐらいは使える」

「強化って……また、なんとも半端なのを扱うのね。で、それ以外はからっきしってワケ？」

「……まあ、端的に言えば、多分」

彼女の問いに、彼は煮え切らない返答を返す。

ここまで来れば、誰にでも理解できる。

（ああ、つまり彼は……）

「はあ。なんだってこんなヤツにセイバーが呼び出されるのよ、まったく」

呆れの極致に至ったのか、右手で額を押さえ、彼女は盛大な溜息を吐いた。

その様子に、彼はムツとした表情をする。

「どうやら負けん気だけはそれなりにあるらしい。」

「ま、いいわ。もう決まった事に不平をこぼしても始まらない。そんな事より、今は借りを返さない」と

彼女はそう言って、息を一つ漏らす。

着ていた真紅のコートを脱ぎ、そして真剣な表情でこちらに向き直ると、

「それじゃ話を始めるけど。衛宮くん、それと様子を見る限りじゃその意味不明のサーヴァントも。自分たちが今どんな立場にあるのか判ってないでしょ」

話の本題に入った。

彼女の問いにコクリ、と頷く俺と土郎君。

「率直に言つと、衛宮くんはマスターに選ばれたの。どっちかの手に聖痕があるでしょ？ 手の甲とか腕とか、個人差はあるけど三つの令呪が刻まれている筈。それがマスターとしての証よ」

「手の甲って……ああ、これが」

そう言つて、彼は『両手の甲』を彼女に向けてかざす。

左手の甲には変な幾何学模様。

そして右手の甲には野球のボールを象つたような模様が刻まれている。

「……令呪が『二組』、ね。判つていたけど腹が立つわね。それはサーヴァントを律する呪文でもあるから大切にね。令呪っていうんだけど、それがある限りはサーヴァントを従えていられるわ」

彼の両手の甲を見た彼女は口元をヒクつかせ、こめかみに井桁を浮かべながらもそう答えた。

「……ここまでで相当に鬱憤が溜まっているらしい。

「……？ ある限りって、どついう事だよ」

彼女の言葉に疑問を感じた土郎君が尋ねる。

「令呪は絶対命令権なの。サーヴァントの意思をねじ曲げて、絶対に言いつけを守らせる刻印。で、その令呪がなくなったら衛宮くんは殺されるだろうから、せいぜい注意して」

彼の問いに対し、彼女は聞き捨てならない回答を返した。

「マスターが他のマスターを倒すのが聖杯戦争の基本だから。そうして他の六人を倒したマスターには、望みを叶える聖杯が与えられるの」

「な　　に？」

「……………」

その言葉に絶句する土郎君。

対して俺は、どういふ訳か比較的平静で居られた。

まったく混乱していない訳ではないが。

(『聖杯』というところ……アーサー王伝説なんかに出てくるあれの事か?)

手にした者の願いを叶えるという、万能の杯。

いつだったか、 から聞かされたことがある。

アイツはその生い立ちの所為か読書が趣味だったから、その手の物を読んでいたのだろう。

「聖杯というと……よく伝説なんかに出てくるあれの事？ 願いを叶えるっていう……」

確認のため、とりあえず彼女に訊いてみる。

「そうよ。……貴方、意外に落ち着いてるわね。隣はまだ混乱してるっていうのに」

「いや、流石にここまで異常な事態が続けば、ね」

「……貴方が言っても皮肉にしか聞こえないんだけど」

「しゅく……」

俺の言をバツサリと切り捨てた彼女は、いまだ混乱の中に居る彼に向き直る。

「よつするにね、貴方はあるゲームに巻き込まれたのよ。聖杯戦争っていう、七人のマスターの生存競争。他のマスターを一人残らず倒すまで終わらない、魔術師同士の殺し合いに」

なんでもない事のように、アツサリと彼女は言い切った。

(…………殺し合い、か)

ある程度悪い予想はしていたが、まさか最悪の予想に行き着いてしまつとは。

しかし殺し合いという、凄惨極まりない事態にも拘らず、俺は何故こつも冷静で居られるのか。

『俺』自身は人を殺したことなどないし、「殺す」という行為自体に嫌悪も抵抗感も覚える。

それでもこの尋常ならざる事態を真つ向から受け止め、それに適応しつつあることを俺は感覚で理解していた。

何故こうなったのか。

答えなどすぐに出る。

(……………間違いなく、『あれ』のせいだな)

漆黒の空間で行われた、俺を『俺』という存在に変質させたあの『儀式』。

「……………」

俺はそれに対して、感謝とも、嫌悪ともどちらともつかない、複雑な感情を抱く。

その一方、隣ではまだ喧々諤々(けんけんがくがく)と押し問答が続けられていた。

「なんだよそれ、いきなり何言ってるんだ」

「気持ちは解るけど、わたしは事実を口にするだけよ。……それに貴方だって心の底では理解しているんじゃない？ 一度ならず二度までもサーヴァントに殺されかけて、自分はもう逃げられない立場なんだって」

「
」

言い返すものの、切り返された彼女の言葉に黙り込む土郎君。

俺とは違い、いまだに事実を受け入れられないでいるようだ。

「あ、違うわね。殺されかけたんじゃないって殺されたんだっけ。よく生き返ったわね、衛宮くん」

そう言われると、サツと土郎君の顔色が変わった。

……彼の紅く染まった左胸はそういうことだったのか。

推察するに、おそらくあのランサーと呼ばれた男に槍で心臓を貫かれたんだろっ。

（本当、それでよく生きてるな、土郎君。……ん、待てよ？）

「とっくに貴方はそういう立場になってるのよ。逃げる事なんて出

来ないし、貴方も魔術師なら覚悟ぐらい」「……遠坂、俺がランサーに殺された事を知ってるのか？」「……………ッ」

彼女の言葉を遮り放たれた彼の疑問の声。

彼も俺と同じことを感じたようだ。

彼女は明らかに「しまった」という表情をして固まっている。

「チツ。少し調子にのりすぎたか。……………今のはただの推測よ。つまらない事だから忘れなさい」

「……………つままない事じゃないぞ。俺はあの時、誰かに「いいからっ！ そんな事より、もっと自分の置かれた立場を知りなさいっての！……………」」

彼女の態度を不審に思った彼の追及を、彼女は強引に断ち切った。

(話の切り替えが強引過ぎる……………やっぱり何か知ってるな、この娘。いや、案外彼女が治したのかもしれないな)

俺のこの予測は、直球ド真ん中での的を得ていた事を後に知った。

「いい？ この町では何十年かに一度、七人のマスターが選ばれて、それぞれサーヴァントが与えられるの。マスターは己が手足であるサーヴァントを行使して、他のマスターを潰していく。これが聖杯戦争と呼ばれる儀式のルールよ」

居間をのし歩きながら、彼女は訥々と語る。

その様は、まるで教師のようだ。

「わたしもマスターに選ばれた一人。だからサーヴァントと契約したし、貴方だってセイバーと、あとその意味不明とも契約した。衛宮くんは自分でセイバーたちを呼び出した訳じゃなさそうだけど。聖杯の意思如何では、衛宮くんみたいに何も知らない魔術師がマスターになる事だってありえるわ。……それでもサーヴァントをもう一人呼び出すなんてまず有り得ない事態だけど」

そう言いながら、俺を睨んでくる彼女。

俺、別に何も悪くない筈だよな……？

「……ちよつと待ってくれ。遠坂はセイバーと彼を使い魔だっというけど、俺にはそうは思えない」

「使い魔ね　　ま、サーヴァントはその分類ではあるけど、位置づけは段違いよ。何しろそこにいる彼女はね、使い魔としては最強とされるゴーストライナーなんだから」

そう言って、壁際に居るセイバーに視線を送る彼女。

……あれ？

「……あの、俺は？」

「ゴーストライナー……？　　幽霊、って事か？」

「幽霊……ま、似たようなものだけど、そんなモンと一緒にしたらセイバーに殺されるわよ」

「素無視かい……」

俺の疑問の声は黙殺された。

さっきから彼女の俺に対する扱いが酷い。

……泣いてもいいかな？

「……何しろサーヴァントは受肉した過去の英雄、精霊に近い人間以上の存在なんだから」

「　　はあ？　受肉した過去の英雄？」

「そつよ。過去だろうが現代だろうが、とにかく死亡した伝説上の英雄をこう引っ張ってきてね、実体化させるのよ」

無視された俺の嘆きを他所に、話はどんどん進んでゆく。

俺はというと、何故かセイバーに慰められていた。

俺の肩に手を置き、「気にしないように」とても言いたげな慈愛の籠った眼差しを向けてくる。

「……ありがとう、セイバー」

俺の感謝の言葉に対して、彼女は微笑で返答を返した。

「……そんなの不可能だ。そんな魔術、聞いた事がない」

「当然よ、これは魔術じゃないもの。あくまで聖杯による現象と考
えなさい。そうでなければ魂を再現して固定化するなんて出来る筈
がない」

「……じゃあその、サーヴァントは幽霊とは違うのか……？」

「違うわ。人間であれ動物であれ機械であれ、偉大な功績を残すと
輪廻の枠から外されて一段階上に昇華するって話、聞いた事ない？
英霊つてのはそういう連中よ。……約一名は怪しいところだけど」

アカイアクマ
遠坂凜がまた俺に対して何か言っているが気にしないことにする。

これ以上精神にダメージを受けるのはよろしくない。

右から左に聞き流し、いまだに慰めてくれているセイバーを他所に
思考に耽る。

彼女の言葉をまとめると、サーヴァントというのは須らく何らかの
功績を残した人間の靈魂を聖杯を媒介として呼び寄せ、実体化させ
たものであるらしい。

ということはずぐ隣に居る青銀の少女も、アクマ凜の隣に居た赤い男も、
士郎君を一度殺したというあの青い男も、すでに死んでこの世に居

ないかつて偉大だった存在、ということになる。

(……誰が作ったか知らないが、なんてデタラメなシステムだ)

格の高い英雄の靈魂を呼び寄せ、マスターと令呪によって使い魔として使役するなど並大抵の事ではない。

下手すると世界すら歪めてしまいそうだ。

そして願いを叶える聖杯を巡って、マスター・サーヴァント主従が最後の一組になるまで行われるバトルロイヤル。

それが即ち、聖杯戦争。

得た情報から自分なりに解釈し、纏めてみたが……胡散臭い事この上ない。

そう思うなと言う方が無理だ。

『この戦争には何か裏がある』

俺の中の何かがそう訴えてくる。

こういうリスクも高いが見返りも大きい、というハイリスク・ハイリターンの事由に限って、誰かしらの良からぬ思惑が働いているものだ。

警戒しない理由などそれこそ何もない。

俺はまだこの戦争の一端を知っただけ。

安易に考えるのは愚の骨頂だと、警鐘が俺の中で鳴り響いている。

イレギュラーとはいえ、俺も召喚されたサーヴァント。

この戦争に関わらずには居られないだろう。

(まずは生き延びる事が先決だな。幸いその為の力もあるし)

生き延びて、この聖杯戦争の全貌を解き明かす。

そうすれば、『世界』が俺に一体何をさせようとしているのかが解る筈だ。

俺にあんな責め苦を負わせてまでさせようとしている何かが。

そしてこの戦争が無事に収まれば

(また思いつきり野球ができる!!)

野球人たる俺の結論は結局、そこに行き着くようだ。

「……………」

思わず失笑が漏れる。

やっぱり『俺』は俺なのだ、改めて思い知った。

ふと気がつくのと、話はサーヴァントの実体がどうのという話になっていた。

「……………」つまり、サーヴァントは霊体と実体を使い分けられるってことか。……………さっき遠坂に付いてたヤツが消えたのは、霊体になったからか？」

士郎君が尋ね返す。

アーチャーの姿が掻き消えた時か。

……………なるほど、あの時感じた違和感がようやく判った。

(そういう事だったのか……………。多分俺には……………)

「そ。今は」この家の屋根に居るな「そう、この家の屋根に……つて、え？」

「……あ！」

無意識に、つい口を突いて出てしまった。

差し入れられた俺の一言に言葉を切り、ギギギ、と錆びたロボットのように首をこちらに向けるアクマ、もとい遠坂 凜。

しまった、と口を押さえた時にはもう遅い。

一瞬の後、

「ちょっと、どういうことよ！ アンタまさか、霊体化したサーヴアントが見えてるってどういうの!?!?」

鬼気迫る表情と化した彼女に襟首を掴まれ、首を上下に激しくシエイクされた。

「い、いや、ちょっと落ち着いて……!?!?」

その言葉を発しても、揺さぶりのスピードは落ちない。

それどころかますます加速していく。

マズイマズイマズイ！！

このままでは聖杯戦争の真実に辿り着く前に三途の川の向こう岸に辿り着いてしまう！

「落ち着きなさい、アーチャーのマスター。……大丈夫ですか？」

この危機から俺を救ってくれたのは、やはりセイバーだった。

セイバーは冷静に、彼女から俺を引き剥がす。

どうにか命が繋がった。

「……ふう。あ、ありがとうセイバー。助かったよ」

一息つき、助けてくれた彼女に礼を言う。

慰めてくれた事といい、やっぱり彼女はいい娘だ。

「いいえ。……それよりも、貴方は霊体化したサーヴァントが見えるのですか？」

セイバーは、こちらを親の敵のような目で睨みつける彼女と違い、比較的穏やかな表情と声音で同じ質問をぶつけてくる。

「うーん、見えるというより感じる、の方が正しいかな？ 玄関をくぐる時、今まで感じていた気配が彼女の傍から離れて屋根の上に登っていくのを感じてさ。それで……」

「アーチャーが屋根の上に居る、と判断した訳ですか」

「うん」

全てではないが、事実を述べる。

(……俺の推測が正しいとすれば、その気になればそれだけでは済まないだろうな、多分。確証がないから言わないけど)

ふと横に目を向ける。

すると、

「な、なんて規格外……。霊体化したサーヴァントを感知できるな

んて……」

俺の襟首を掴んで振り回した張本人が、シヨックを受けたような表情でブツブツと何かしら呟いている不気味な光景があった。

話によれば霊体化したサーヴァントは己のマスター以外には知覚されないらしいから、彼女の驚きも解るんだが……。

「……………」

士郎君も座った状態から立ち上がり、ススツと元の位置から半歩後ろに後退している。

彼もやはり気味が悪かったようだ。

やがて気を取り直した彼女はふう、と息を一つ漏らすと、話の続きに入った。

ただ表情がちょっとスゴイ事になっている。

多分、予想外のことはかりで終に余裕がなくなったのだろう。

その姿からはアーチャーが言っていた、「常に優雅たれ」の家訓の『か』の字も感じられなかった。

意図的でないとはいえ、俺の所為のようなので多少の罪悪感を感じる。

しかし彼女の話を聞いていく中、この戦争に対する不審と疑念は、俺の中ますます膨れ上がっていった。

「さて、衛宮くんから話を聞いた限りじゃ貴女は不完全な状態みたいね、セイバー。マスターとしての心得がない魔術師見習いに呼び出されたんだから」

聖杯戦争についての説明も終わり、話の矛先が今度はセイバーに向けられた。

「……ええ。貴方の言う通り、私は万全ではありません。シロウには私を実体化させるだけの魔力がない為、霊体に戻ることも、魔力の回復も難しいでしょう」

「……驚いたわ。そこまで酷かった事もだけど、貴女が正直に話してくれるなんて思わなかった。どうやって弱みを聞き出そうかなって程度だったのに」

「敵に弱点を見抜かれるのは不本意ですが、貴女の目は欺けそうにない。ですからこちらの手札を隠しても意味はないでしょう。それならば貴方に知ってもらおう事で、シロウにより深く現状を理解してもらった方がいい」

セイバーは表情も変えずに淡々と語る。

「正解。風格も十分、と。……ああもう、ますます惜しいつ。わたしがセイバーのマスターだったら、こんな戦い勝ったも同然だったのに！」

「む、遠坂、それ俺が相応しくないって事か」

士郎君が彼女の言葉に反応し、噛み付いていく。

が、

「当然でしょ、へっぽ」

もの見事に一刀両断。

彼女は情け容赦なく、へっぽを真っ向から切り捨てた。

「……………」

士郎君は肩を落とし、暗い影を背負って佇んでいる。

その背中から、何とも言えない哀愁が漂っていた。

……やっぱりそうだったのか、士郎君。

「……といったところで、いい加減現実逃避はやめにして。一番頭を抱える問題は、コレよね」

そう言っつて溜息を吐きながら、彼女はこの上なく億劫そうに俺に視線を向ける。

……自分で言うのも何だが、対応、遅すぎやしないか？

一応、イレギュラーの筈なんだが。

「まずアンタは、一体何のクラスな訳？ まだ聞かせてもらってないんだけど」

相変わらず俺を睨みつけるような格好で、殺気混じりにそう聞いてくる彼女。

(……クラス？ 何のだ？)

学級……じゃないよな、やっぱり。

「クラスって……よく判らないけど。……あつ、そういうえげまだ君に名前言っただけじゃなかったよ。俺は「ストップです」ムグッ！……ふえいばあ（セイバー）？」

名前を告げようとした途端、いきなりセイバーが口を塞いできた。

そして名前を告げようとした対象は、どういう訳かポカンとしていた。

一体何なんだろうか。

とりあえず口に当てられた手をどけ、当ててきた本人に向き直る。

「いきなり何するんだよ、セイバー」

「……初対面でいきなり真名を明かすものだからおかしいとは思っていましたが……。もしかして貴方は、自分のクラスが何なのか解っていないのですか？」

「……だから、クラスってどういう意味？ 学校の在籍クラスとかとは違っただけじゃなくわかるけど……。あとは、『階級』とかってどういう意味？ それでもよく知らないよ？」

思ったことを素直に口に出す。

すると彼女とセイバーは二人揃って呆れた表情をしながら、深々と重い溜息を吐いていた。

「流石イレギュラーサーヴァント……。こっちの予想もしないことばかりやらかしてくれるわ」

「……まあ、貴方を罪には問いませんから」

「う……………」

二人の反応に少し傷ついた。

「……………これは本気であそこに行かないとマズイわね」

いまだ呆れの表情のままに、彼女はそう言った。

「行くって……………どこへ?」

「聖杯戦争の監督役のところ。流石にクラス名すら判らない、じゃ話にならないし……。それに衛宮くんも、聖杯戦争の理由について知りたいんでしょ？」

ようやく斬死状態から復活した士郎君にも、彼女は水を向けた。

「それは当然だ。けどそれって何処だよ。時間も時間だし、あんまり遠いのは」

「それは大丈夫。隣町だから急げば夜明けまでには帰ってこれるわ。それに明日は日曜なんだから、別に夜更かししてもいいじゃない。セイバーもそれでいいわよね？」

彼女はそう言い、セイバーに同意を求める。

「ちょっと待て、セイバーは関係ないだろ。あんまり無理強いするな」

「おっ、もうマスターとしての自覚はあるんだ。わたしがセイバーと話すのはイヤ？」

「そっ、そんなコトあるかつ！　ただ遠坂の言うのがホントなら、

セイバーは昔の英雄なんだろ。ならこんな現代に呼び出されて右も左も分らない筈だ。だから「シロウ、それは違う」「え？」

狼狽しながらも彼女の言葉に反論を試みる土郎君に対し、セイバーはその内容を否定の言葉で遮った。

「サーヴァントは人間の世であるのなら、あらゆる時代に適合します。ですからこの時代のこと、自身の置かれた状況もよく理解している。……もつとも、彼だけは例外のようですが」

彼女は彼に視線を向けながらそう訥々と語る。

そして、

「それに、この時代に呼び出されたのも一度ではありませんから」

その一言に絶句する魔術師二人。

「な……」「とか」「うそ、どんな確率よそれ……!?」「といった、呻くような声が耳に響いてくる。

その反応からすると、けっこうとんでもない事らしい。

俺にはよくわからないが。

しかし……サーヴァントは皆そうなのか。

（俺だけが例外とはな……やっぱり、あれの影響か？ まったく、送り込むなら送り込むでアフターケアはしっかりとしろよ『世界』。人の魔改造にかまけてないでさ）

俺の思考を他所に、セイバーの言葉は続く。

「私は彼女に賛成です、シロウ。貴方はマスターとして知識がなさすぎる。貴方と契約したサーヴァントとして、シロウには強くなってもらわなければ困ります。……それに、彼のこともある。監督役に聞けば、少なくとも彼のクラス名くらいは分かるでしょう」

セイバーの意見に、士郎君が溜息を一つ漏らす。

どうやら諦めたようだ。

「……分かった。行けばいいんだろ、行けば。それで、何処なんだ遠坂。ちゃんと帰ってこれる場所なんだろうな」

「もちろん。行き先は……」

言峰教会、それがこの戦いを監督してる、エセ神父の居所よ。

「…………ッ！」

その言葉を聞いた瞬間に俺の中の警報装置が、最大アラートで警告を發した。

第四夜 「説明を受ける野球少年」(後書き)

セイバーの好感度が上がった!!

凛の評価が(色んな意味で)上がった!!

『弱気』になった!!

が、治った!!

『キレ』が身に付いた!!

補足しておきますと、今現在の主人公は例えるなら、道中役に立つ色んな荷物を背負わされてお使いに出されたが、そのお使いの目的と一部を除く荷物の中身を知らないような状態です。ですのでしばらくは色んな意味で手探りの状況が続きます。荷物の中身の理解に關しては次回で完全に解決しますが。

第五夜 「青銀の騎士と野球少年」 (前書き)

話のストックが尽きてきた……。

ストック以降の構想はある程度練ってはいるのですが、文章化に時間が掛かるのなんの。

残りのストックの訂正作業とプライベートの事情も相まって、これ以降更新が若干遅くなりそうです。

なるべく早くするよう、努力はしますが。

第五夜 「青銀の騎士と野球少年」

Side 言峰

「……ふむ、彼が七人目という訳か、凜」

見知らぬ少年を伴って我が教会を訪れた、師の娘に尋ねる。

「そう。一応魔術師だけど、中身はてんで素人だから見てられなくて。……たしかマスターになった者はここに届けを出すのが決まりだったわよね。アンタたちが勝手に決めたルールだけど、今回は守ってあげる」

「それは結構。なるほど、ではその少年には感謝しなくてはな」

相変わらずの態度で嫌味をぶつけてくる妹弟子から視線を外し、彼女の傍らに立つ少年へと向き直る。

少年は私の視線を受けて、半歩ほど後ろに後退る。

「私はこの教会を任されている言峰綺礼という者だ。君の名はなんというのかな、七人目のマスターよ」

「衛宮士郎。けど、俺はまだマスターなんて物になった覚えはないからな」

その名を聞いた瞬間、口元に笑みが浮かぶのを抑える事ができなかった。

「衛宮 士郎」

反芻する。

(衛宮……あの男の息子か)

前回、私と同様に最後まで生き残り、最後の瞬間まで互いに殺しあったあの男の……。

まったく、『あの件』といい今といい、今回の聖杯戦争は私を退屈させないでくれる。

「礼を言う、衛宮。よく凜を連れてきてくれた。……では始めよう。君はセイバーのマスターで間違いはないか？」

俄かに沸きあがる感情を抑え、彼に尋ねる。

すると、

「それは違う。確かに俺はセイバーと契約した。けどマスターとか聖杯戦争とか、そんな事を言われても俺にはてんで判らない。マスターってというのがちゃんとした魔術師になるモノなら、他にマスターを選び直した方がいい」

などと、こちらの予想を上回る愉快的回答を返してきた。

なるほど、これは……。

「これは重傷だ。彼は本当に何も知らないのか、凜」

退屈そうな顔つきで少年の横に立つ凜に問いかける。

まさかあの男から何も聞かされていないとは……な。

「だから素人だって言ったじゃない。そのあたりーからしつけてあげて。……そういう追い込み得意でしょ、アンタ」

気が乗らないような素振りです凜はそう返してきた。

「ほう。これはこれは、そういう事か。よかろう、おまえが私を頼ったのはこれが初めてだ。衛宮士郎には感謝をしても足りないな」

私の言葉が気に障ったのか無然とした表情をする彼女を尻目に、少年を見据える。

少年は硬い表情のまま、それでも眼光鋭くこちらを見つめてくる。

感情が再び沸き立つ。

「まず君の勘違いを正そう。いいか衛宮士郎

」

全てを知ったとき、この顔がどのように歪むのか。

私は久しぶりに昂りを覚える感情のまま、目の前の少年に語り始めた。

彼女の言った教会は、衛宮邸から歩いて一時間程の、隣町郊外の高い丘の上に建っている。

時刻は既に深夜の一時。

点在する家屋の明かりも消え、街頭のみが周囲を照らす。

俺を含めた四人は教会を目指し、宵闇に沈む町へと繰り出していた。

……徒歩で。

先頭を行くリンの提案故だ。

ちなみに彼女をリンと呼んでいるのは、その後彼女にどう呼べばいいかを尋ねた際、「好きにすればいい」との許可を得たので、下の名前で呼ぶことにしたためだ。

“アイツ”と同じ名前なので、この呼び方がしっくりくるのだ。

最初そう呼んだ時は睨まれたが、「好きに呼べって言ったのはそっちだろう」と反論すると渋々ながら許してくれた。

扱いにくいが根はいい娘のようだ。

はじめはリンの提案に土郎君が、「最近物騒だから女の子が夜出歩くというのはどうか」という理由で反対したが、リンが実力のあるセイバーが一緒なのでその心配はない、という事を彼に告げると、

彼はあつ、と今気付いたかのような間の抜けた声を上げた。

どうやらその事を完全に失念していた様だ。

お陰で彼はついさっきまでその事で彼女にからかわれていた。

一方セイバーはというと、出がけに被せられた黄色い雨合羽を揺らし、俺の隣を固い表情のまま無言で歩いている。

彼女がどうしても鎧を脱がないというので、鎧を目立たせないために士郎君が取った苦肉の策だ。

若干不機嫌そうなオーラが隣から漂ってくるのが心臓に悪い。

しかし士郎君。

雨も降らない深夜に黄色の雨合羽を着せるのは、鎧云々関係なしに悪目立ちするような気がするんだが？

鎧のままの方がまだマシなような……。

「あれ、どっちに行くのよ衛宮くん。そっち、道が違っんじゃない？」

突如方向を変え、横道へと逸れる士郎君にリンが怪訝な表情でそう尋ねる。

「橋に出ればいいんだろ。ならこっちのが近道だ」

彼はそう答えて足早に歩を進める。

彼の背中について行くと、川縁にある公園に出た。

そのすぐ先には大きな橋が架かっている。

ここを渡って隣町である新都へ向かうようだ。

「へえ、こんな道あったんだ。そっか、橋には公園からでも行けるんだから、公園を目指せばいいのね」

「ああ。いいから行くぞ。別に遊びに来たわけじゃないんだから」

公園に立ち止まり、どこかはしゃぐようにそう言うリンを尻目に、
士郎君は橋へと続く階段を上って行く。

歩道橋に人影はまったくない。

気持ち早足で黙々と進んでゆく彼に遅れないよう、歩調を合わせながら橋を渡り切った。

新都に入るとリンが、郊外の丘へと続く道へと誘った。^{こたほ}

なだらかな坂道が続く。

坂を上つていく程に建物の棟は減っていき、丘の斜面にある墓地在目に入ってくる。

墓の形からすると外人墓地のようだ。

「……………」

坂を上る度、何故か気分が悪くなっていく。

軽い眩暈を感じ、足元が少しふらつく。

「……………どうしたのですか？ ふらついていますが」

隣にいたセイバーが俺の異変に気付き、心配そうに声をかけてくる。

「あ、ああ。何でもないよ、セイバー。大丈夫」

顔を曇らせるセイバーに対し、努めて明るい声で返事をする。

「……………ならいいのですが」

あまり納得してなさそうな表情のまま、それでも彼女は前に視線を移した。

(……誤魔化しきれてないな、これは。……マズったな)

「この上が教会よ。衛宮くんも一度ぐらいは行った事があるんじゃない？」

「いや、ない。あそこが孤児院だったって事ぐらいは知ってるけど」

「そう、なら今日が初めてか。じゃ、少し気を引き締めた方がいいわ。あそこの神父は一筋縄じゃないから」

前方から、そんな会話が聞こえてくる。

「……くっ!」

どんどん強くなっていく不快感を無理やり押さえ込み、ようやく坂を上り切った。

丘の上にそびえ立つ、豪勢な装いの教会。

それを目にした瞬間、ついに込み上げてくる不快感を押さえきれな

意識が飛びそうになるのを必死に堪えながらも、俺の頭は不快感の元凶を理解する。

つまりは、当てられたのだ。

この教会の放つ、異様な気配に。

それは本来、神の家たる教会が放つ清廉なものとは全く逆のもの。

「……ここは、神聖な場所なんかじゃない。伏魔殿だ。」

小声で呟き、盛大に眉を顰める。

この場所から立ち上るは死の気配。

そして怨念……とても呼ぶべきだろうか。

およそ人間が持ち得るあらゆる負の感情と言い表せるだろう、底なし沼の如き暗き感触。

そこは魑魅魍魎の住まう、間違っ事なき伏魔殿。

（ここまで異様な気配を放つなんて……ここには一体何があるんだ？）

考えたところで答えなど出る筈がない。

『虎穴に入らずんば虎児を得ず』

ここに入れば疑念の答えが出るのだろうが、俺の理性がそれを拒否していた。

いずれは調べなければならぬが、今はまだその時ではないと。

「はあ……はあ……」

口の中の苦いものを吐き捨て、足に上手く力が入らないがそれでも気力で立ち上がる。

野球で培われた精神力は伊達ではない。

「……大丈夫なのか？ いきなり倒れ込むなんて……一体どうしたんだ？」

「……うん、何でかはよくわからないけど、もう大丈夫」

心配そうな表情でこちらを見る三人に、笑みを無理やり作って誤魔化す。

不快感はいまだに感じるものの、意識すればどうにか堪えられるレベルにまで落ち着いた。

震える足を叱咤し、教会を睨みつける事で、掻き乱された精神を鎮めていった。

「シロウ、私はここに残ります」

「え？　なんでだよ、ここまで来たのに……」

士郎君とリンが教会へ入っていかうとすると、セイバーがそう言うて立ち止まり、士郎君が疑問の声を上げた。

「私は教会に来たのではなく、シロウを守る為についてきたのです。シロウの目的地が教会であるのなら、これ以上遠くには行かないでしょう。それに……」

と、彼女は俺に視線を向け、

「それに彼も教会へ立ち入らせないほうがいい。体調もまだ不安定のようです。ですから私は彼とここで帰りを待つ事にします」

俺も教会へ入らないよう、進言してきた。

……言われなくてもあんなところへ入りたくはない。

何しろ近づいただけでこうなのだ。

中に入ったらそれこそ発狂しかねない。

それに監督役とやらに俺の存在を無闇にひけらかすのはどうもマズイ気がする。

俺は土郎君に向かって静かに首肯する。

すると彼の隣にいたリンが何やら含み笑いを漏らしていた。

「?……どうしたんだ、リン」

不審に思い、彼女に尋ねてみる。

すると彼女は笑いを噛み殺しつつ、

「いや、随分とセイバーに気に入られたんだなあ、って思って。衛宮くんの家に行った時もなんか慰めて貰ってたみたいだし」

と、そんな事を言ってきた。

「気に入られたって……？ まあ、セイバーはいい娘だし、優しいのは判るんだけど」

あまりピンと来なかったので思ったままを言ってみる。

「くくく……自覚がないとはね。まあいいわ。それじゃ行ってくるわ。あなたのクラス名もそれとなく聞いてきてあげるから」

彼女は俺の言葉にさらに笑みを深めるとそう言い残し、踵を返すと教会の入口へと向かって歩き出した。

何だったんだ、一体？

「遠坂、ちょっと待って。それじゃ二人とも、行ってくる」

「……え、ええ。気を許さないように、マスター」

「ああ、いつてらっしやい」

士郎君もリンの後を追いかけていく。

教会の前には俺と、何故か少し表情の固いセイバーの姿だけが残されることとなった。

「……さて、一つ聞きたいことがあります。貴方はサーヴァントについてどの程度の事を知っていますか？」

「えー？ あ、ああ。えっと……さっき聞いた説明以上のことは何も」

セイバーからのいきなりの質問に戸惑ったものの、とりあえず素直にそう答えた。

「そうですね……。では今のうちにサーヴァントについて詳しい説明をしましょう。よろしいですか？」

「……ああ、必要なことだし、お願いするよ」

彼女の提案に首肯する。

それを皮切りに、セイバーのサーヴァントについての講義が始まった。

「……つまり、サーヴァントにはクラスが七つあって、それに該当する英雄が呼び出される、って事でいいのか？」

「ええ、その解釈で構いません」

セイバーの説明によれば、聖杯の助けによって聖杯戦争に呼び出された英霊には『クラス』というものが存在し、英霊はそれに該当する者が召喚されるのだそうだ。

クラスは七つ。

剣の騎士『セイバー』

槍の騎士『ランサー』

弓の騎士『アーチャー』

騎乗兵『ライダー』

魔術師『キャスター』

暗殺者『アサシン』

狂戦士『バーサーカー』

時折そのどれにも該当しない、所謂イレギュラークラスが入り込む事もあるものの、基本はそれら七つらしい。

クラスというのはいわば『器』のようなものであり、それに収まることでクラス固有の能力やその時代・地域、聖杯戦争のシステムに対する知識が与えられる、という事だ。

「……そっか、セイバーは『セイバーのクラスの英霊』だからセイバーなんだ」

「はい。そしてサーヴァントはクラス名を名乗る事で、本当の名である『真名』を隠します」

「ああ、本当の名前がバレるって事は、自分の弱点が相手にバレる事と同じだもんな」

伝説に名を残すようなヤツならば尚更だ。

逸話の中にはどのように死んだかなどというようなエピソードもあるのだ。

名前からそれを紐解かれるという事は、自らの特徴・弱点が暴かれるのと同義。

だからセイバーは初めて名乗った時にセイバーというクラス名を名乗ったのだ。

同じ理由でランサーもアーチャーも同様、という事か。

納得したところで、彼女の説明は続く。

「ふーん……あれ？　そういえば、そもそも何で聖杯戦争にサーヴァントが必要なんだ？」

セイバーの説明が粗方終わったところで、ふと疑問が浮かび上がってきたので訊いてみる。

「それは、この地にある聖杯は霊体なので同じ霊体であるサーヴァントにしか触れられないからです。そして呼び出されるサーヴァントも、聖杯に叶えたい願いがあるためその召喚に応じます」

セイバーは澱みなく、すらすらと流れるように答えた。

「サーヴァントにしか触れられない、ね……。じゃ、セイバーにも聖杯に叶えて欲しい願い事があるの？」

「……ええ」

返答の際、彼女がほんの僅かだが表情を曇らせた事に気付いた。

よっぽど願いたい事に後ろめたい事でもあるのだろうか？

「……………貴方は」

「ん？」

「貴方は、どうなのですか？ イレギュラーとはいえ、召喚に応じたのなら叶えるべき願いがあるのでしょう？」

こちらに視線を向けたセイバーが、真剣な表情で俺に疑問の言葉をぶつけてくる。

叶えるべき願い、か……………。

「俺には……………ないな」

簡潔に、明瞭に、はっきりとそう答えた。

それにあれは召喚に応じた、というのとはまた事情が違う。

「……は？」

セイバーに視線を向けると、彼女の目が点になっていた。

なんかこの手の表情がやたら多いな。

それはともかく。

「いや、そんな顔されても……だから叶えたい願いなんてないってまあ、やりたいことはあるけどさ、それも聖杯に願う程の事じゃないし」

「やりたいこと……ですか？」

「うん、野球を思いつきりやりたいなあ、って。けどそれもこの戦争が終わってからだな。イレギュラーとはいえ、俺も一応サーヴァントだから巻き込まれるのは避けられないだろうし、だったら今は最後まで無事に生き残る事に専念するよ」

「……貴方は本当に英霊ですか？」

「アハハ……俺は、ただの野球少年。それ以上でも以下でもないよ」

頬を掻き掻き、苦笑いしながらそう言つとセイバーは俯き、そしてそのまま何も語ろうとせず、黙り込んでしまった。

必然的に俺も口を閉じざるを得なくなる。

……沈黙が非常に痛い。

(……出来れば早く帰ってきてくれ、士郎君、リン。この空気は辛い……！)

冬の寒空の下、思わず教会の中の二人に心の中で助けを求めてしまった。

s i d e 士郎

「マスターとして戦う。十年前の火事の原因が聖杯戦争だつていうんなら、俺は、あんな出来事を二度も起こさせる訳にはいかない」

決意を口にする。

俺の答えが気に入ったのか、神父は満足そうに笑みを浮かべた。

「それでは君をマスターと認めよう。この瞬間に今回の聖杯戦争は受理された。これよりマスターが残り一人になるまで、この街における魔術戦を許可する。各々が自身の誇りに従い、存分に競い合え」

神父の声が教会内に木霊する。

「決まりね。それじゃ帰るけど、わたしも一つぐらい質問していい綺礼？」

神父の宣言が終わると、遠坂が神父にそう声をかけた。

「かまわんよ。これが最後かもしれんのだ、大抵の疑問には答えよう」

神父はそれに対し、肯定の言葉を告げる。

「それじゃ遠慮なく。綺礼、あんた見届け役なんだから、他のマスターの情報ぐらいは知ってるんでしょ。こっちは協会のルールに従ってあげたんだから、それぐらい教えなさい」

遠坂はなんとも図々しい質問をぶつけたが、神父はわずかに視線を逸らし、

「それは困ったな。教えてやりたいのは山々だが、私も詳しくは知らんのだ。衛宮士郎も含め、今回は正規の魔術師が少ない。私が知りうるマスターは二人だけだ。衛宮士郎を加えれば三人か」

言葉とは裏腹にまったく困っていないさそうな、平坦な調子でそう答えた。

「あ、そう。なら呼び出された順番なら判るでしょう。仮にも監視役なんだから」

「……ふむ。一番手はバーサーカー。次にキャスターだな。あとはそう大差はない。先日にもアーチャー、そして数時間前にセイバーが呼び出された。そして……」

「……そして？ なんなのよ、綺礼」

「……セイバーの召喚のほんの数分後に、八人目のサーヴァントが呼び出された」

「……ッ！」

突如告げられた言葉に、俺の身体が強張るのを感じた。

アイツのことだと理解できたからだ。

出来れば土郎君のサーヴァントだという事は伏せておいた方がいい。リンもその辺りは気を遣ってくれるみたいだし、何よりその言峰神父とやらからは嫌な予感しか感じない。

家を出る直前に真剣な表情をした小波から告げられた言葉が脳裏をよぎる。

そう言われたために右手の令呪は巧妙に隠して来たのだ、まだその事はバレてはいない筈。

思わず背中後ろに右手を隠してしまうような、あからさまに過ぎるへまはしない。

……単に緊張してしまって咄嗟に動けなかった、というのもあるが。

「……ふうん。八人目のサーヴァント、ね」

遠坂は俺とは違い、いつもと変わらない平静な態度のままだ。

「ほう、驚かないのだな」

「十分に驚いてるわよ。それで？ 協会側としてはどうするつもり？ そのイレギュラー」

「別にどうもせんよ。すべては聖杯が決めることだ。前例のないこととはいえ、それが聖杯の意思ならばどうしようもないし、そもそも私は監督役にすぎない。勝手に間引く、というような事など出来ようもない」

前例のない異常事態にも関わらず、変わらない調子で淡々と語る神父。

どうやら本気でそのまま放置するつもりようだ。

その言葉に緊張が緩和され、身体が僅かに軽くなる。

「あっそ。で、そのサーヴァントのクラスは？ 知ってるんでしょ？」

「勿論。『カオス』、それがそのイレギュラーサーヴァントのクラスだ」

「　　そう。それじゃこれで」

そう言い残し、神父に背を向ける遠坂。

その間に神父と遠坂の間で何かしらのやり取りが交わされるが耳に響いて来ず、俺ははまだ強張りの残る身体を動かそうと悪戦苦闘していた。

ようやく強張りが解けた頃には、遠坂は既にズカズカと出口へ向かって歩き出していた。

「お、おい、いいのか遠坂」

「いいのよ。貴方も外に出なさい。もうこの教会に用はないから」

そう言うと、遠坂は立ち止まる事なく礼拝堂を横切り、本当に出て行ってしまった。

「まったたく……」

俺も後を追おうとする。

その時、背後に気配を感じた。

「っ
？」

振り返ると、そこには神父がいた。

何を言うのでもなく、俺を見下ろしている。

……コイツはどうも苦手だ。

相性が悪いというか、性質が真反対というか……とにかく好きになれそうにない。

何より、コイツを見ていると嫌な予感が脳裏を掠めては頭から離れない。

無視して教会を出ようと出口に向かう。

その途中、

「喜べ少年。君の願いは、よじやく叶う」

「ッー!？」

背後から神託のように告げられたその言葉に俺の思考は真っ白に染まる。

そして俺の中でナニかが傷付き、血を流した様な気がした。

side 小波

「シロウ。話は終わりましたか」

「……ああ。事情はイヤって言うほど思い知らされた。聖杯戦争の事も、マスターの事もな」

リンが、やや遅れて士郎君が教会から出てきたことで、針の筵のような空気が変わった。

思わず安堵の吐息が漏れる。

理由もわからずいきなり黙りこくったセイバーを相手にするのはやはり辛い物があった。

しかし士郎君の顔色がやや青褪めて見えるのは気のせいだろうか。

「それでは」

「……ああ。俺に務まるかどうかは判らないけど、マスターとして戦うって決めた。半人前な男で悪いんだけど、俺がマスターって事に納得してくれるか、セイバー」

「納得するも何もありません。貴方は初めから私のマスターです。貴方の剣となると誓ったではないですか」

「そう、だったな。……うん、セイバーがそう言ってくれると、助かる」

そんなやり取りがセイバーと彼の間で交わされ、彼がセイバーに向かって右手を差し出した。

「それじゃ握手しよう。これからよろしく、セイバー」

「はい。では今一度誓いましょう。貴方の身に令呪があるかぎり、この身は貴方の剣となると」

そう言って、差し出された彼の手にセイバーも右手を差し出し、それと重ねた。

星が輝く真冬の空の下、契約じみた言葉を交わす少年と青銀の騎士の少女。

その光景はどこかシニールで、何とも言えない違和感が漂っていた。

「ふうん。その分じゃ放っておいてもよさそうね、貴方たち。それと、『カオス』も入れてあげなさいな。仲間外れは流石に可哀想よ」

そう声がした方を振り返ると、どこかニヤついた顔で二人を観察しているリンと、いつの間に姿を現したのか、赤い外套の騎士が立っていた。

士郎君とセイバーは慌てて手を離す。

その直後、士郎君は何か言い訳っぽい事をリンに向かって喋りだしたが、セイバーはハタと何かに気付いたかのようにスッ、とこちらに視線を移してきた。

何なんだろう……あ。

(そういえば、『カオス』って何だ?)

疑問に思い、いまだニヤつく彼女に問う。

「なあ、リン。『カオス』って？」

「貴方のクラス名よ。綺礼……聖杯戦争の監督役に聞いたの。それと、貴方に関して特に何も措置はしないそうよ。よかったわね、いきなり消されるような事がなくて」

リンの言葉を聞き、俺の胸に安堵の気持ち広がっていくのが解った。

イレギュラーということできなり抹消されるという、最悪の事態は避けられたようだ。

しかし……クラス名が『カオス』か。

(何というか……言い得て妙だな)

そう思った瞬間、俺の中で何かガストンとはまり、次いでガチリと噛み合った……様な感じがした。

「……………ッ！」

頭の中が急激にクリアになる感覚。

そして、理解した。

俺の、全てを。

俺のこの身に宿る、チカラの全貌を。

背中のバットを初めて掴んだ瞬間のものとは比べ物にならない情報量が頭の中を駆け巡る。

やはり苦痛はない。

あの時はただ面食らっただけだったが、今では状況と事情が違う。

思わず口元が歪む。

(これで俺は 立ち向かえる。『世界』が与えたこの運命に……まさかクラス名がトリガーになっていたとはな。『世界』……何でこんなまだるっこしい事をする?)

それに気を取られてしまった俺は気付く事ができなかった。

リンの隣にいる紅い弓兵が、鷹のような鋭い視線でこちらを窺っていた事に。

そしてそれを察知出来なかった事が、この後に起こる第一の危機を招く事となる。

「ま、せいぜい気を張りなさい。貴方たちがそうなった以上、わたしたちも容赦しないから」

リンのその言葉にハツとする。

どうやら思考に埋没しすぎていたようだ。

「容赦しない、って……」

士郎君が疑問の声を上げる。

「……あのね。わたしたち、敵同士だって理解してる？ここまで連れて来てあげたのは、貴方がまだ敵にもなっていないからよ。けどこれで衛宮くんもマスターの一人でしょ？なら、やるべき事は一つしかないと思うけど」

「え、なんでさ。俺、遠坂と喧嘩するつもりはないぞ」

繰り返された言葉に、リンはがっくりと肩を落としていた。

その後、士郎君とリンの間でグダグダと互いに平行線のやり取りが続けられ、俺が「いつまでここにいるつもりなんだ？」と言ったのを切欠に帰路に着くまで、それは終わらなかった。

s i d e セイバー

坂を下りる。

先頭はアーチャーのマスター。

その隣にシロウ。

その後ろに私と、そしてコナミ、クラス名カオスがついて行く。

アーチャーは再び霊体に戻っているので姿は見えない。

皆、ひたすらに無言で歩いている。

「……………」

ふと横を見る。

野球帽の下の、やや幼いながらもそれなりに整った顔立ちが目飛び込んでくる。

その眼を見ると、何故か今までとどこか違って見えた。

どこがどう違うかまでは分からないが。

(……………)

彼の横顔を見つめながら、私は思い出す。

彼の望みを聞いた。

聖杯にかける願いなんてないと彼は言った。

彼の望みは唯一つ。

『野球がやりたい』

ただそれだけ。

バカらしいと思った。

呆れもした。

しかし笑うことはできなかった。

何故ならそう言う彼の瞳は純粹で曇り一つなく、そしてその表情と口調とは裏腹に、とても真剣なものだったから。

そして気付いた。

サーヴァントであるにも拘らず、彼はその眼に『未来』を見ているのだと。

それが私には、ひどく眩しく見えた。

『彼が羨ましい』

不覚にもそう思ってしまい、彼を直視できずに口を閉ざした。

何故私はあの時

「どうしたの、セイバー？ 何か聞きたいことでもあるの？」

ハッとする。

意識を戻すと、私の視線に気付いたコナミが怪訝そうな表情で声をかけてきていた。

「……いえ、特には。……ああ、一つだけ、ありました。貴方をどちらの名で呼ぶべきでしょうか？」

何たる愚問。

普通に考えるならばクラス名で呼ぶのが当たり前だ。

この問いかけには何の意味もない。

だがどうしても聞かずにはいられなかった。

……何故？

ワカラナイ

私自身が、解らない。

「うーん……まあ、できれば本名で呼んでくれると嬉しいな。クラス名は何か好きになれないし、俺は名前が知られても、別段不都合はないしね」

彼は、困ったように頬を掻きながらそう言ってきた。

確かに彼のクラス名はどこか不吉な感じがする。

あまり好きにはなれないだろう。

「……そうですね。では「ナミ」と呼ぶことにします」

彼の名前を呼ぶ。

すると彼は本当に嬉しそうに微笑んだ。

純粹な、子供の様な笑顔だった。

つい、つられてこちらも微笑わらってしまう。

彼の名前を呼んで、彼の笑った顔を見て、私は感じた。

感じてしまった。

嬉しい、と。

「遠坂？ なんだよ、いきなり立ち止まって」

「ううん。悪いけど、ここからは一人で帰って。わたしは探し物をして帰るわ」

ふと前を見ると、先頭の彼女が立ち止まり、士郎と何やら話しこんでいた。

「義理を果たした」とか、「遠坂はいいヤツなんだな」といった声が聞こえてくる。

しばらくすると彼女は何故か顔を紅くして押し黙ってしまった。

一体どうしたのだろうか。

「と、とにかく、サーヴァントがやられたら迷わずさっきの教会に逃げ込みなさいよ。そうすれば命だけは助かるんだから」

「ああ、気が引けるけど、一応聞いておく。ただ、どう考えてもセイバーより俺のほうが短命だ」

再起動した彼女が零した忠告に、シロウはやや的外れな返答をした。

すると彼女はふう、と呆れたように溜息を一つ吐くとこちらに視線を向け、

「いいわ、これ以上の忠告は本当に感情移入になっちゃうから言わない。せいぜい気を付けなさい。いくらセイバーが強くても、マスターである貴方がやられちゃったらそれまでなんだから」

捨て台詞のような最後通牒を言い残し、くるりと方向を換えて新都に向かって歩き出した。

その瞬間、

「
ねえ、お話は終わり？」

幼く、歌うような声に、時間が停まったかのような感覚に襲われた。

第五夜 「青銀の騎士と野球少年」 (後書き)

セイバーフラグその2が立った!!

立ってはいけないフラグも立った!!

己の力を全て理解した!!

『打球反応』が身に付いた!!

『初球』が身に付いた!!

ちなみに主人公の具合が悪くなった原因については彼の保有スキルに理由があります。

その内に主人公のステータスも上げる予定です(蛇足として選手能力も)。

第六夜 「白の少女と野球少年」 (前書き)

今回はバーサーカー戦です。

そして、主人公の宝具が出てきます。

第六夜 「白の少女と野球少年」

side 士郎

そこにいたのは異形のモノ。

月明かりを背に佇むソレはまさに悪魔のよう。

3メートルはあろうかという巨体に鉛色の肌。

右手には、岩を削って作られたかのような巨大な斧剣。

そして光の宿っていない、虚ろな瞳。

『死』の象徴が、そこにいた。

「バーサーカー」

遠坂が呻くように声を漏らす。

その言葉の意味は解らない。

だが巨人の異質さだけは嫌というほど感じ取れる。

間違いない。

アレは サーヴァント。

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

巨人の傍らに立つ少女が、無邪気に、微笑みながらそう言った。

背筋が凍る。

白く長い髪に紅い双眸。

人形のように整った顔立ち。

その可憐な容貌は、背後の異形とはあまりにも不釣り合い。

彼女の言葉にふと記憶が蘇る。

数日前、道ですれ違いざま、忠告めいた事を告げていったあの

「 驚いた。単純な能力だけならセイバー以上じゃない、アレ」

舌打ちをしながら、頭上の怪物を睨む遠坂。

そして、

「アーチャー、貴方は本来の役回りに徹して」

前を向いたまま小さく呟く。

「……それは構わないが、守りはどうする？ 流石にアレは凜には防げまい」

「セイバーもいるし、凌ぐだけならなんとでもなるわ」

「……了解した」

そう声がすると、彼女の背後にいた気配が一瞬にして何処かに消失した。

「衛宮くん。逃げるか戦うかは貴方の自由よ。……けど、出るならなんとか逃げなさい」

彼女はこちらに向き直ると、硬い表情のままそんなことを言ってきた。

遠坂……悪いけど俺は、

「相談は済んだ？　なら、始めちゃっていい？」

軽やかな笑い声が思考を断ち切る。

そしてその声の主はスカートの裾を持ち上げ、とんでもなくこの場に不釣り合いなお辞儀をする。

「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォーン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

その言葉に、遠坂が息を呑んだのが判った。

遠坂の反応が気に入ったのか、イリヤと名乗った少女は嬉しそうに笑みをこぼし、

「　　じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

背後の異形に命令を下した。

「　　！！！」

バーサーカーと呼ばれた巨体が飛ぶ。

「シロウ、下がって……！」

セイバーが雨合羽を脱ぐと即座に動く。

それと同時に、流星のような何条もの“弾丸”がバーサーカー目掛けて飛来するのが見て取れた。

否、それは“矢”だった。

その数八連。

機関銃めいた一斉掃射。

しかしそれは、

「うそ、効いてない……！？」

巨人には何の効果も現さなかった。

鉛色の身体に弾かれる矢。

そんな物には目もくれず、狂戦士は剣士の姿のみを意識に捉えている。

そして両雄は激突する。

着地を決めたバーサーカーの大剣と、その落下地点へ飛び出したセイバーの不可視の剣が火花を散らす……！

「ふっ………！！」

「！」

その小さな身体にどれほどの魔力が籠められているのか。

明らかに力負けしている筈のセイバーは一步も譲らず、巨人の剛剣を真正面から受け、弾き、切り崩していく。

「……っ！ アーチャー、援護………！！」

その攻防に息を吞んでいた遠坂が咄嗟に叫ぶ。

それとほぼ同時に、またも何処かから銀光が放たれる。

そしてそれは狙い^{あやま}過たず、巨人のこめかみに直撃した。

途轍もない威力を秘めたアーチャーの矢。

あの巨人が何者であろうとも、無傷でいられる訳がない。

「取った……………！」

間、髪を入れずに打ち込まれる不可視の剣。

しかしそれは、

「……………！！」

あまりにも凶悪な一撃によって、身体ごと弾き返された。

アーチャーの一矢は、やはり巨人には何ら効果を齎もたらさなかったのだ。

「ぐっ……………！？」

アスファルトを滑るセイバーと、追撃をかける黒い巨体。

追撃を阻止するかのように奔る幾糸もの銀光をもともせず、それらを身体で弾き飛ばしながら駆け抜ける。

振り下ろされる大剣。

セイバーは咄嗟に剣で受け止めるも、

「がつ………！」

ボールのように弾き飛ばされ、坂の中頃に落下した。

「セイバー………！」

思わず叫ぶ。

目が眩んでいるのか、セイバーは地面に膝をついたまま動かない。

「トドメね。潰しなさい、バーサーカー」

少女の声と同時に、黒い巨人が猛スピードでセイバーへと突進する。

「アーチャー、続けて………！」

遠坂がそう叫び、石らしき物を取り出しながら坂道を駆け上って行く。

「Gewicht, um zu Verdoppelung」重
圧、束縛、両極硝」

黒曜石を中空にばらまく遠坂と、飛来する無数の銀光。

遠坂の魔術の干渉を受け、威力を底上げされたアーチャーの矢が巨人に迫る。

だがそれを受けてなお、

「！！」

バーサーカーの突進は止まらない。

ここにきて、俺にもその異常性が読みとれた。

あの巨人の頑丈さは次元が違う。

桁違いの魔力で編まれた『法則』に守られた不死身性。

おそらくヤツはそういうモノを身に纏っているのだ。

それでもなければこの八方手詰まりの状況に説明がつかない。

「いいよ、うるさいのは無視しなさい。どうせアーチャーとリンの攻撃じゃ、アナタの宝具を越えられないんだから」

響く少女の声。

その声には余裕が滲み出ている。

バーサーカーが大剣を振り上げる。

それを受け止めようと、視線を逸らさぬまま構えるセイバー。

今まさに凶刃が振り下ろされようとしたその瞬間、

「…………へえ、じゃあこれならどうだい？」

背後からそんな声が聞こえてきた。

一瞬の後、ズドン、と何かが爆発したかのような轟音が周囲に響き渡る。

「うわっ……………！！」

思わず耳を塞いでその場に蹲る。

爆音の余韻が消え、訪れる静寂。

ふと黒い巨人の方を見ると、大剣を振り上げたまま動きを止めていた。

俺も遠坂もセイバーも、あの少女ですら、呆然とした表情でバーサーカーを凝視する。

すると、

「

!!!」

突如巨人が咆哮を上げた。

否、それは悲鳴だった。

なぜなら、

「嘘……、まさかバーサーカーの宝具を越えてダメージを与えるなんて……」

巨人のこめかみから、夥しい量の血潮が噴出していたのだから。

「

!!!」

しかし巨人は倒れず、流血しながらも既に動き出している。

「……まさか死んでないのか？ 頭を撃ち抜かれても死なないって一体……？」

どこか困惑したような声が再び背後から響く。

ここにいる全員の視線が一齐にそちらに向けられる。

そこには、

「何度か殺さなきゃ死なない、ってことか……？ だとしたら、面倒だな……」

右手に回転式拳銃リボルバーを構え、その銃口をバーサーカーに向けているユニフォーム姿の少年がいた。

しかし彼の背中のバットが何時の間にかなくなっていることには、離れた場所にいる一名を除いて誰も気付かなかった。

背中のバット。

これは俺の武器、サーヴァントにとっての宝具、というヤツだ。

名を『オール・イン・ワン全てに通ずる物』。

記憶、知識にある武器に形状を変化させる、という代物だ。

戦闘が始まった瞬間、僅かに後ろに下がって近くにあった物陰に身を隠し、すぐさま誰にも気付かれないうちにバットを引き抜いた。

少女の後ろにいる巨人の殺気を浴びる度に、思考が研ぎ澄まされてゆく。

おそらくあの『経験』の恩恵だろう。

既に『戦闘者』としての意識に切り替わっている。

戦いの推移を見守りながら、

「ロード、『リボルバー回転式拳銃』」

小声でそっと呟き、右手に握ったバットを記憶にあった拳銃に変化させる。

俺以外の人間は皆それぞれの事に夢中で、こちらにまったく気を配

っていない。

狙うは不意を衝いた必殺の一撃。

アーチャーの矢がまったく効果を現さないのには驚いたが、こいつの『特性』と俺の保有する『スキル』を鑑みればおそらくはいける筈だ。

機を窺う。

『殺す』という行為には相変わらず嫌悪感が付き纏うが、既に割り切れていた。

「……ハハ」

普段とは違う、二重人格のような豹変振りに我が事ながら失笑が漏れる。

「いいよ、うるさいのは無視しなさい。どうせアーチャーとリンの攻撃じゃ、アナタの宝具を越えられないんだから」

バーサーカーのマスターであろう少女の、余裕たっぷりの言葉が聞

こえてくる。

それを合図に、そつと撃鉄を起こす。

機が訪れた。

狙うは頭部。

バーサーカーが斧剣を振り上げたその瞬間、

「…………へえ、じゃあこれならどうだい？」

物陰から身を乗り出し、言葉と共に引鉄を引いた。

銃声が響く。

一瞬の後、雄叫びと共に、バーサーカーのこめかみから夥しい量の血が噴出した。

「…………？」

しかし様子がおかしい。

頭を撃ち抜かれたにも拘らず、一向に倒れる気配がない。

それどころか、再び動き出しそうな気配すらある。

「…………まさか死んでないのか？ 頭を撃ち抜かれても死なないって
一体…………？」

『不死』の存在かとも思ったが、あの様子だと一度は確実に死んでいた筈。

という事は…………、

「何度か殺さなきゃ死なない、ってことか…………？ だとしたら、面倒だな…………」

何しろあの脅力じょうりょくに理不尽なまでの防御力。

一度殺すだけでも並大抵の労力じゃ済まない。

幸いなのは遠距離の攻撃手段がないだろう事だが、あそこまで来るとそれすら問題にならない。

堅牢な要塞が猛スピードで肉薄してくるようなものなのだ。

そこに小細工遠距離攻撃など無用の長物。

加えて命のストックがいくつあるのか分からない以上、計略もなしに立ち向かうのはただの自殺行為だ。

「まさかピストルでバーサーカーを殺すなんて……あなた、一体何者？」

呆然としていた白の少女が、突如好奇心が湧いたような表情で問いかけてくる。

その表情と言動から察するに、俺の考察はそう的外れでもないことが判った。

しかし何者って……分からないものなのか？

あ、もしかして……！

「……一ノ瀬 小波。ただの野球少年だよ。ま、こんなもの持つてる時点で既に『ただの』じゃなくなってるけどね」

拳銃をキリキリと指で縦に回しつつ、冗談を混ぜながら真名を名乗ってみる。

すると、

「へえ……ただの人間がバーサーカーを殺したの。ヘンなカッコだけど、見たところ魔術師でもなさそうだし……とするとその拳銃、いや弾丸かしら。一体何なの、それ？」

と、ますます興味深げな表情になった。

（ やっぱりそうだ、この娘は俺がサーヴァントだと気付いてない）

アーチャー曰く、俺はサーヴァントとしての気配がかなり薄いらしい。

リンも、俺がサーヴァントだという事は指摘されるまで気付かなかったようだから、魔術師……人間が一目見ただけで俺をサーヴァントだと認識するのはほぼ不可能だろう。

サーヴァントならばあるいは気付いたのかもしれないが、生憎彼女のサーヴァントはバーサーカー。

セイバーから聞いたところによるとバーサーカーというクラスは、理性を奪い、狂化することで協力者としての側面を排し、より戦闘に特化させるためのクラスらしい。

つまりバーサーカーが俺がサーヴァントだと気付いても、バーサーカーから彼女にそれを伝える事は実質不可能なのだ。

この勘違いを逃す手はない。

「さて、ね。そう簡単に手の内を晒すと思うかい？　ここは」

え、アーチャー………？　離れろってどついう事………？」「………！
？」

リンのその咳きが聞こえた瞬間、全身が総毛立った。

あの時の要領で、即座にアーチャーの気配を探る。

ここから遙か遠くに、アーチャーの気配を見つけた。

濃密な殺気と共に。

「　　全員、バーサーカーから離れろ！　早く……！」

力の限り、大声で叫ぶ。

(……何故気付かなかった、アーチャーがこのタイミングで仕掛けてくると！)

考えてみれば、今の状況は不意打ちには絶好のチャンスだ。

そしてアイツなら、それを逃す筈がない。

リンに警告したのは、おそらく巻き添えを喰わせないためだ。

つまりアーチャーが放つ攻撃は、周囲を巻き込むほどに強力な必殺の一矢！

そしてあわよくば俺たち、更に付け加えればバーサーカーのマスターである彼女をも余波によって一網打尽にするつもりだろう。

俺たちは現在、バーサーカーを中心として円を描くような位置にそれぞれ立っている。

その位置関係上、バーサーカーを狙えば容易く全員を巻き込むことが出来る。

サーヴァントであるセイバーはともかく、土郎君とイリヤと名乗っ

た少女は、たとえ余波でもタダでは済まない。

「「!!」「」

俺の叫びを受け、まずは既に何かに気付いていた土郎君が駆け出し、次いでセイバーがその場を離れる。

リンは既に退避済みだ。

「……………」

しかし少女だけは何故か動かない。

じっとバーサーカーを見つめている。

どうやらバーサーカーが防ぎきることを信じているようだ。

「……………くっ!」

迷っている暇はなかった。

その場から即座に駆け出す。

「うおおおあああーっ!!」

彼女の下へと。

「なっ!?!」

「おっ、おい!」

何処かから困惑の声が上がったと同時に、視界の隅に銀光が奔るのが見えた。

「!!!」

復活したバーサーカーは雄叫びを上げ、迫り来る“それ”を迎撃せんと斧剣を振り上げる。

俺に構う余裕がないのか、近付いてくる俺を襲う気配は感じられない。

バーサーカーの横を全速力で駆け抜ける。

やはり襲っては来なかった。

もっとも襲いかかられたところで対処の仕様などなかったが。

走る。

奔る……!!

(頼む、間に合え　　!!)

「えっ、ちよっ、キヤッ……!!」

いきなり走り寄ってきた俺に戸惑う彼女を左腕に抱え込み、そして、

「ロード、『古代樹の盾』!!」

右手に持っていた拳銃を巨大な盾に変化させて地面に突き立て、抱え込んだ彼女諸共その陰に身を隠す!

「……!!」

雄叫びを上げ、銀光を迎え撃つ巨人。

振り下ろした斧剣と、銀光が接触したその瞬間、

あらゆる音が、轟音によって掻き消された。

「ぐづつづううつ！！」

衝撃波と熱風と撒き散らかされた瓦礫の破片が盾を打ち、その内側にいる俺たち二人にもその余波が迫る。

盾で瓦礫と衝撃波は防げても、盾から届く圧力と、盾を越えて流れ込んでくる熱風までは防げない。

呼吸を止め、吹き飛ばほうとする盾を必死で押さえつけながら左手で胸元に抱え込んだ彼女の口元を塞ぐ。

熱風で気管が焼かれないようにするためだ。

と、唐突にカラン、という音がした。

ついそちらに目を向けると、そこにおかしなものが転がっていた。

それは螺旋状に捻れた『剣』だった。

「……………これはアイツが？」

おそらくアーチャーが『矢』として放ったのだらうと当たりを付ける。

もう一度よく見ようとそちらに目を向けると、既にその剣はどこかに消え失せていた。

やがて衝撃が止み、そつと盾から顔を出す。

「……………あの剣でここまでの惨状を……………？」

爆心地であつたらう地面は抉れ、クレーターが出来ていた。

加えて周囲は炎上している。

この周囲に民家がなかった事が幸いか。

そしてこれだけの破壊を齎した物の標的になってなお黒い巨人はそこに、クレーターの中心に悠然と佇んでいた。

「……バーサーカー……ランクAに該当する宝具を受けて、なお無傷なんて」

セイバーの力がなく、周囲に響く。

つ、と盾に目を向けると目立った破損こそしていなかったが、それでもかなりガタが来ていた。

……まさか余波だけでコレとはな。

『俺』が知る限り最上級の盾なんだが。

「……ちよつと、いい加減放してくれない？ レディーの扱いがなつてないわよ、アナタ」

突如左腕の中から不機嫌そうな声が聞こえ、慌てて腕を放す。

俺の腕から解放された白の少女はフン、と鼻を鳴らし、服についた埃を払い落とし始めた。

そして、

「……アナタ、サーヴァントだったのね。危つく騙されるところだったわ」

速攻でバレた。

……まあ、目の前で思いっきり宝具を使ってしまったからな。
無理もない。

「アハハ……ごめんね、戦闘の流れとはいえ騙そうとして。何でもイレギュラーサーヴァントなんだって、俺」

「イレギュラー？」

「うん。八人目のサーヴァントで、カオスっていうクラス名なんだ」

これ以上隠す意味もないので、正直に告げる。

「ふうん……」

不機嫌そうな表情から一転、彼女は興味深げに俺を見つめてきた。

何となくバツが悪くなり、思わず頬を掻く。

「じゃあ、あの時言った名前もウソなの？」

「いいや、アレは本名だよ」

「……何で偽名を名乗らずに真名を名乗るのよ」

「……いや、俺は英雄じゃないから、知られても別に。一ノ瀬小波って名前の英雄、聞いたことないでしょ？」

一転、呆れた表情でツツコんでくる少女に対し、苦笑いを浮かべることしか出来なかった。

「はあ……確かに聞いた事ないけど。ところで、何で私を助けたの？」

「え？」

更に表情が一転、真顔で問いかけてくる彼女に、思わず身体が強張る。

「えっと……助けちゃダメだった？」

緊張のあまり、思わず間抜けな返答を返してしまった。

彼女は再び呆れ顔になりながらも、

「……仮にも私は敵なのよ。どうして危険を冒してまで私を助けるようなマネをしたの？ 私が死ねば、一人敵が減るのに」

問いかける声だけは真剣味を帯びていた。

(敵をどうして助けたか……か)

……考えるまでもないな。

俺は……、

「……君が死ぬのが許容できなかったから、かな」

セイバーの時と同様に、本心を目の前の少女にぶつけた。

白の少女の姿に、一人の少女の姿が重なる。

頭に爆弾を抱えた、純粹無垢な野球好きの少女。

少女に突き付けられた死の運命を、俺は享受できなかった。

少女の運命を覆すために、抗あらがい続けた。

だから俺は許容できない。

目の前の、白の少女が死ぬ事を。

善と悪の色分けすら付いていない、真っ白で、無垢なこの少女が死ぬ事を。

俺の言葉に彼女は一瞬ポカンとした後、何やら複雑な表情を浮かべ、

「……………そう」

と一言、ポツリと呟き、下を向いた。

「……………？」

何だろう、今の表情は。

懊惱、寂寥、怒り、諦念。

それら色んな物がごちゃ混ぜになったような表情。

こんな若い少女がそんな顔をするとは思わなかった。

そもそも魔術師（だろっ）とはいえ、若い少女がこんな血生臭い戦争に参加している事自体おかしいのだ。

（この娘は一体、何を抱えているんだろっ）

無性に気になったが、聞くのは憚られた。

「バーサーカー、もういいわ。戻りなさい」

不意に顔を上げた少女がそう言うと、彫像のように佇んでいたバーサーカーは陽炎の様にその姿を歪め、やがて見えなくなった。

そして彼女は踵を返し、こちらに背を向ける。

「逃げる気かしら？」

「興が削がれたから見逃すだけよ、勘違いしないで。バーサーカーが本気を出せば、ここにいる全員すぐにも皆殺しに出来るんだから」

リンの挑発じみた言葉にも、背を向けたまま淡々と返答を返す。

と、彼女は不意に振り返り、俺の方へと向き直った。

その顔は無表情で、どんな感情があるのか読み取れない。

「……一応、お礼は言っておくわ。助けてくれてありがとう、ヘンなサーヴァントさん」

「……できれば名前、クラス名じゃなくて真名で呼んでくれると嬉しいな、イリヤちゃん」

彼女の表情が一瞬、揺らぐ。

そして、

「……そう、わかったわ。ありがとう、コナミ」

それと、アナタも私のことはイリヤでいいわ。

そう言い残して、彼女は暗闇に溶けるように姿を消した。

確たる善悪の判断を持たず、ただただ純粹で、真っ白な少女。

一体誰が、何が彼女をこんな闘争の渦へと参加させたのか。

イリヤが去った闇をジッと見つめる。

周囲の炎は粗方消え、僅かな残り火といまだ立ち上る煙だけがそこにはあった。

「アーチャー、アイツ……！！！」

どこからか発せられた、士郎君の怒りを含んだ声が周囲に木霊した。

第六夜 「白の少女と野球少年」(後書き)

イリヤフラグその1が立った!!

筋力・技術・変化球・素早さが大幅に上がった!!

『盗塁』が身に付いた!!

『走塁』が身に付いた!!

『クイック』が身に付いた!!

『ピンチ』が身に付いた!!

『チャンス』が身に付いた!!

今回出てきた武器防具についての詳細は、近々上げる予定の主人公設定にて。

ちなみに主人公がイリヤとの場面で「運命を覆すために抗い続けた」云々を回想で言っていますが、どう抗ったかはパワポケ3をやった方には分かるかと思います(笑)。

第七夜 「朝の光景と野球少年（前編）」（前書き）

申し訳ございません。

プライベートが猛烈に忙しくなってきたので、今回は今まで書き貯めたストック分を全放出します。

そのため誠に勝手ながら、次回の更新が遅れます。

第七夜 「朝の光景と野球少年（前編）」

Interlude 7 - 1

side 凜

「凜」

隣から霊体化したアーチャーが話しかけてくる。

その後、何とはなしにお互い無言で別れ、それぞれ帰路に着いた。

衛宮くんはアーチャーのあの一撃にかなり憤慨していた。

下手をすればバーサーカーを狙撃したあの一撃の余波で命がなかったのだからそれも当然だ。

加えてセイバーと、見た目が幼いバーサーカーのマスターも巻き込もうとした事も彼の怒りを増幅させる一因になっていた。

その事でお互い気まづくなってしまったのだ。

無言のまま別れたのもある意味当然の成り行きだった。

「なに、アーチャー」

「……いい加減機嫌を直してはくれまいか。あの時はあれが最良の手段だったのは君も解っているだろうに」

「……ええ、わかってるわよ。だから腹が立つのよ」

「……やれやれ、女性の心ほど難解で不可解な物もないな、まったく」

アーチャーが呆れたような声を漏らす。

確かにあれが戦略的に完全に理に適っていたのは理解できる。

だが理解できるだけ。

感情が納得してはくれない。

なんとも言葉に表しにくい、どこか歯がゆい感情が私の中で渦巻き、それが私を苛立たせていた。

アーチャーを意識から外し、家を目指す。

黙々と歩いてゆくとやがて近くの住民が『幽霊屋敷』と呼んでいる、見慣れた我が家が見えてきた。

あと数十mで辿り着こうかとしたその時、

「ところで凜、あのイレギュラーをどう思っ

た。何の前触れもなく、霊体化した従者がいきなりそんな事を聞いてきた。

「……なによ、藪から棒に」

唐突に繰り出された質問にやや戸惑いはしたものの、アーチャーが何を意図してこの質問をしたのかはおおよそ理解できた。

「なに、我々の攻撃が一切通じなかったバースーカーを、たかだか銃弾一発で殺したのだ。警戒するのは当然だろう」

「……そうね。確かにあれは脅威ね」

アーチャーが言う事は至極もつともだ。

Aランクに匹敵するアーチャーの最後の一矢を受けても無傷だった巨人が、少年の放った銃弾にいと也容易く撃ち抜かれた。

サーヴァントである彼が放った物が、ただの銃弾である筈がない。

加えて彼は発砲した後、右手に握った拳銃を盾に変化させていた。

その盾の強度も神秘性も、普通の物とは桁違いのものだった。

あれは間違いなく彼の宝具だ。

「ヤツがバーサーカーに発砲した時、背中のバットが消えていた。おそらくあのバットが宝具なのだろう」

「！……ただの野球道具じゃなかったのね」

「凜、私は言った筈だぞ。『君にどう見えていようと仮にも英霊』だと」

「……そうだったわね。見た目が見た目だから、まだ認識が切り替わってなかったみたい。それで？ 逆に聞くけど、貴方から見た力オス……一ノ瀬小波はどうなの？」

「ふむ、少なくともバーサーカーにとってヤツは天敵だろう。……
そしておそらくは、我々サーヴァントにとっても、な」

「……？ ちょっと、それってどういう意味？」

アーチャーの最後の言葉に疑問を覚える。

バーサーカーの力の全貌は見えていないものの、高威力且つ多彩な攻撃手段を用いることが可能であるうあの宝具は、確かにバーサーカーにとって天敵だろう。

しかしサーヴァントにとっても天敵とは、一体どういう事なのだろうか？

「……何となく、そんな感じがしたただけだ。深い意味はない。が、警戒するに越したことはない。『イチノセコナミ』などという英雄聞いた事もないし、何より『本来有り得ざる者』だ、転び方次第では鬼札ジョーカーにもなりかねん」

「……そうね」

全面的に頷かざるを得ない。

『一ノ瀬小波』という英雄など確かに聞いた事がない。

あの野球のユニフォーム姿といい、とにかく得体が知れなさ過ぎる。

その上、アーチャーにはまだ話していないが、クラス名も真名も知っているにも拘らず、彼のステータスが全く分からなかったのだ。

本来、マスターならばサーヴァントのクラス名さえ知っていれば、実物を見る事でサーヴァントのステータス情報を自ずと知ることが

出来る（と言っても分かるのは筋力・耐久・敏捷等の表面的なステータスのみで、マスター情報や保有スキル・宝具等は実際に見聞きするなりして理解する必要がある）。

だが小波のステータスだけは、クラス名どころか真名まで知ったにも拘わらず、いくら目を凝らしても全く見えて来なかった。

宝具の特性か、クラス・保有スキルの恩恵か、はたまたイレギュラーだからか。

原因は定かではないが、その一事だけでも十分警戒するに値する。

言葉を交わす内に家の門に辿り着いた。

呪文を唱え、家に張った結界を解除する。

「……ふう」

流石に今日は疲れた。

次から次へと異常事態が続いたのだ、疲労もする。

特に精神的消耗が酷い。

玄関のドアノブに手をかけて、ふと明日も学校がある事に思い至った。

(まさか……何の準備もなしにノコノコと学校に来たりしないわよね、衛宮くん)

そう思いはしたが、あの様子からしてその可能性が高い。

仮にそうだとするなら、彼を目にした瞬間ブチ切れてしまわない自信はない。

脳裏によぎった一抹の不安を振り払い、疲労回復のための睡眠を確保するべく自室のベッドへと足を向けた。

I n t e r l u d e o u t

s i d e 小波

「ん……う、……朝か」

まどろみから意識が覚醒し、布団からゆっくりと身体を起こす。

窓の外に目をやると、空が白みかかっていた。

ひんやりとした空気が残っていた眠気を奪う。

時計を見ると、長針と短針は午前五時半を指していた。

「んん〜っ！ ……ふうっ。さて、と」

その場でググツと伸びをすると布団から出てドアへ向かい、昨日あてがわれた部屋から出た。

その後、アーチャーに今だいきり立ったままの土郎君をなんとか宥め、三人で衛宮邸へと戻った後、「もうこれ以上の襲撃はないだろうし疲れもあるから、諸々の話は明日まとめてする」という事となり、床に就く事となった。

その際セイバーが、「万一の襲撃に備えて土郎君と同じ部屋で寝ると言い出すという珍事があったが、間に入って説得した末、最終的に俺が提案した「土郎君の部屋の隣の部屋で寝る」という妥協案を渋々ながらも受け入れるという形に落ち着いた。

土郎君は俺の手を取り、「ありがとう、本当に、本当にありがとう

！！」と涙を流さんばかりに感謝の意を示してきた。

まあ、いくら警戒が必要とはいえ、士郎君の安眠と精神の安定、そして男としての尊厳を犠牲の上で、というのもあんまりだからな。

あと、セイバーは男女が同じ部屋で寝るといふ事が、男にどんな影響を及ぼすかという事を理解していないのだろうか。

(……してないんだろうなあ)

それとも理解していて、その上でさして問題にしていないのか。

そのどちらにしろ、夕チが悪い。

ちなみに俺は離れの客間の一室をあてがわれた。

「おはようございます、コナミ」

居間へと続く廊下を歩いていると、セイバーと出くわした。

鎧は着ておらず、その下に着ていた青いドレスのような服を着ている。

……もしかして昨夜それで寝たんだろうか？

「あ、おはようセイバー。よく眠れた？」

「ええ、その様子からすると貴方もよく眠れたようですね」

「うん、まあね。士郎君はもう起きてるの？」

「私が目覚めた時には既にシロウの姿が布団にありませんでしたから、起きているかと」

「ふうん、とりあえず居間に行こうか」

「はい」

朝の挨拶を交わし、セイバーと連れだって居間に入ると、その奥の台所に士郎君の姿があった。

エプロンを身に纏った出で立ちだったが、その姿に驚くほど違和感がなかった。

むしろ何年も着こなしているようで、かなり様になっている。

「おはよう（いびき）、 土郎君（シロウ）」

セイバー共々、挨拶をする。

「ああ、おはよう二人とも」

コンロの火を止めると、土郎君はこちらに向き直った。

この香りからすると、味噌汁を作っていたのかな？

「朝食作ってたの？」

「ああ、仕込みを少しな」

「へえ、美味そうな匂いだね。……そういえば土郎君は親御さん居なくて一人暮らしなんだよね。だから自炊できるのか」

「まあ、数年前に死んだ爺さん……親父も、よく海外に出掛けて家に居ない事が多かったからな。必要に迫られて料理が出来るようになっただよ」

(…………爺さん?)

妙なフレーズにはて、と首を傾げてしまう。

父親なのに『爺さん』って…………。

「何で『親父』が『爺さん』なの？ 御年配だった、とか？」

気になったのでそう聞くと、彼はさして気にする様子でもなく、

「ああ、俺は養子なんだよ。親父…………衛宮切嗣えみやぎしじつぐって言う名前なんだけど、十年前初めて会った時にそう呼んじゃってさ。それで、な」

どこか昔を懐かしむような表情でそう答えた。

ふと隣のセイバーを見ると、眉を擡めて何やら複雑な表情を浮かべていた。

「…………セイバー？」

表情が気になり声をかけると、彼女はハツとしたようにこちらに向き直り、

「……いえ、何でもありません。それよりシロウ、朝食の前に話しておくことがあります」

そう言って、すぐに土郎君に視線を移した。

「話しておく事？」

「ええ、私達サーヴァントについてです」

居間のテーブルに場所を移し、三人分のお茶（お茶菓子付）を土郎君が用意して始められた土郎君へのサーヴァント講義はひとまず終了した。

内容は、昨夜彼女が俺に語った事とほぼ同じだった。

土郎君は合間合間に疑問に思った事を質問しながら、熱心に聞き入っていた。

一方セイバーは、時折視線を土郎君ではなく、テーブルの真ん中に置かれたお茶菓子のチラチラと向けながら講義していた。

そのおかげで、大事な内容を語っているにも拘らず、今一つ空気が締まらなかった。

ちなみに俺はというと、既に知っている事ばかりだったので終始のんびりとお茶を啜っていた。

「大まかな話は以上です、シロウ。……ところで、昨日貴方がバーサーカーを殺した拳銃、あれが貴方の宝具なのですか？」

一通り話を終えたセイバーが、不意にこちらに向き直って質問をぶつけてきた。

「ん……？ セイバー、宝具って？」

「ああ、それを説明してませんでしたね。宝具というのは我々英霊が生前愛用していた武器防具、道具や能力を総称したもので、いわば我々の切り札です。そしてその英霊の象徴でもあります」

士郎君の疑問の声にセイバーが簡潔に答え、再びこちらに向き直る。

「……………ふっ」

息を一つ吐きつつとりあえず持っていた湯呑を机に置き、背中に背負っていたバットを鞘ごと外す。

そして鞘からバットを抜き放ち、

「これのこと？ ロード、『リボルバー回転式拳銃』」

その言葉を紡ぎ、バットを拳銃に変化させた。

「なっ……っ！」

「うわっ！」

訝しげにこちらを見ていた二人が、驚愕に目を見開く。

そんな二人を尻目に、キリキリと右手で拳銃を回して弄ぶ。

「……驚いた、ただのバットじゃなかったんだな」

「まあね。コイツは『オール・イン・ワン全てに通ずる物』と言ってね、記憶・知識にある武器に形状を変化させるっていう代物だよ」

呆然と呟く土郎君に軽く拳銃を持ち上げて見せながら説明をする。
すると、

「……………それだけではないのでしょうか？」コナミ」

驚愕の表情から一転、真面目な表情でセイバーが核心を突く問いをぶつけてきた。

「いくら宝具とはいえ、あのバーサーカー相手に唯の拳銃では、本来ならば明らかに火力不足です。アーチャーの矢すら無効化していたあの肉体に通用するとは思えません」

……………やっぱり気付くか、セイバー。

この宝具の異質さに。

「流石にセイバーには分かる、か。……………推察の通り、これはただ形が変わるだけの宝具じゃない。これで変化させた武器防具は、たとえどんな物であろうと全てCランクの宝具として扱われるんだよ」

「なっ……………！？……………何ですか、その規格外の宝具は」

「そうでもないよ、これはこれでデメリットもあるし」

確かにCランク以下の物ならCランクにランクアップするけど、Cランク以上の物に変化させた場合でも同様にCランクになってしま
うんだからな。

複数の物に同時に変化させる事も可能だが、それにも限界があるし。

(……………まあ、それを差し引いてもメリットの方が大きいのも確かだ
な)

もう一つの特徴と『裏技』もあるし、やっぱり規格外かな……………これ。

「……………なあ、それってそんなに凄いのか？ 今一つよく判らないん
だが」

セイバーの更なる驚愕を余所に、事の重大さを読み取れなかった土
郎君がセイバーに問いかける。

「……………宝具のCランクは単純に威力で示せばAランクに匹敵します。
そして、昨夜アーチャーが放った最後の一矢はAランクの威力があ
りました。これだけ言えば分かるでしょう？」

「それって……」

「ええ、彼の言葉が正しいとするなら、あの銃弾一発がAランクに匹敵する威力を秘めていた、という事になります」

セイバーの言葉でようやくその異質さが理解できたのか、士郎君の表情が徐々に驚愕に染まっていった。

しかし即座に表情が怪訝としたものになり、

「……あれ、でもちょっとおかしくないか？アーチャーの攻撃はAランクだったんだろう？バーサーカーが迎撃して、爆発を至近距離で受けてたけどアイツ無傷だったぞ」

もう一つの核心を突いてきた。

「まあ迎撃した分、多少威力が落ちたのもあるんだろうけど、それでもやっぱりAランクはあったしね。士郎君が言いたいのは、アーチャーの攻撃と俺の拳銃が同じ威力なら、あの効果の差はおかしいってことなんだろう？」

俺の言葉にコクリ、と彼が一つ頷く。

まあ、俺が放った銃弾は頭をアッサリ貫通したからな。

片やアーチャーの矢は、迎撃して多少威力を逸らしたとはいえ直撃同然でほぼ無傷。

爆発はおそらく元々の頑強さで耐えきつたのだろうが、そうになると俺の放った銃弾を耐えきつてもおかしくはないという理屈になる。

爆発と銃弾では簡単に比較はできないが、確かに訝しむのも解る。

「それは多分、俺の保有スキルのせいだと思う」

「保有スキル？」

「ああ、俺には『霊力』のスキルがあるんだ。これの御蔭で俺の攻撃は妖・魔・霊体に対して強力になる。所謂特効効果。具体的に言えば威力2割増ぐらいの計算になる、かな」

「……………」

今度こそ二人は絶句した。

俺を見る二人の目は、何か異様な物でも見るかのような目つきになっている。

幸い、そこに嫌悪などは感じられないが。

（ちょっと傷付くなあ……まあ、自分でも規格外だなんて解ってるんだけどさ。ただ俺は、なあ……）

自分自身の事は自分が誰よりも分かっている。

自分がどれほど異端で、そして滅茶苦茶な存在なのか。

「……ククッ」

その自分自身の現状に対して、色々な意味で思わず苦笑を漏らした。

「……驚いてるトコ悪いんだけど、俺、サーヴァントとしては最低辺もイイトコロだよ？」

そう言って、未だ再起動を果たせていない二人の額に人差し指を当てる。

これで俺のステータス情報が伝わった筈だ。

「これは……」

「……確かに」

今度は二人とも微妙な表情になっていた。

「まさか筋力・耐久・敏捷が軒並みDに届いていないとは……一般人より多少マシといったレベルですね」

「代わりに幸運と保有スキルが馬鹿みたいに多いな……」

半ば呆れたように評価を下す士郎君とセイバーの主従。

と、

「ん……『単独行動：EX』？ ……！！ 貴方は受肉しているのですか!?!」

呆れ顔から一転、クワツと目を見開いたセイバーがそう叫び、俺に視線を向けた。

……ちよつとコワイぞ。

「うん、どうもそうらしい。御蔭で霊体化はできないけど自給自足で活動が可能だから、実体化にも存在維持にも魔力供給は必要ないし、士郎君にも負荷が全くない筈なんだけど、その辺どうなの？」

「ん、ああ、えーと……特に何ともないぞ。というより召喚した時も特別負荷なんて感じなかったし」

「ハア……どこまで規格外なんですか、貴方は……」

俺の問いに少し間を置いて士郎君がそう答え、その答えを聞いてセイバーが深々と嘆息した。

その後セイバーのステータスも見せて貰ったが、如何に俺が非力であるかが証明される能力差だった。

しかもこれで不完全な状態らしいのだから、一体セイバーはどれだけ強力な英霊なんだろうか？

そんな事を考えながら話を進めっていると、

ピンポン

と、唐突に玄関の呼び鈴が鳴った。

「しまった、桜だっ！ セイバー、小波、とりあえず奥に下がって
てくれ！」

居間に掛けられた時計を見て、土郎君は急に慌てだした。

時計は午前六時を指していた。

「土郎君、桜って？」

「俺の学校の後輩だ。いつもこの時間に朝食を作りに来るんだ
よ。すっかり忘れてた」

「後輩か……うーん」

首を捻り、腕組みをしつつセイバーを見やる。

……俺の格好はともかく（ユニフォーム姿です、念のため）、セ
イバーの格好はちよっとアレだな。

知らない人が見たら確実に不審に思われるだろうし、説明にも困るよな（ 貴方もです、念のため。BY 作者）。

さっき『魔術は秘匿するもの』って土郎君が言ってたから、その関係での説明は出来ないし。

話がややこしくなるか。

「分かった、引っ込んでるよ。あ、でもセイバーの格好をどうにかしないと、流石にこれじゃその桜って娘に会うにしる会わないにして、いろいろ不都合だし」

「なら俺の部屋に行って俺の古着の中から着れる物を探してくれ、押入れの箆笥に仕舞ってある筈だから。俺が呼びに来るまでそこで待っていてくれ」

「了解、行こうセイバー」

その言葉を合図に三人同時に立ち上がる。

証拠隠滅のため、湯呑を流しへ持って行ってすぐに洗うよう土郎君へ告げた後、セイバーの手を引いて土郎君の部屋へと向かった。

何故かセイバーの歩みがややぎこちなかったが、どうかしたんだろうか？

side セイバー

「これでどうでしょうか、コナミ」

あの後シロウの部屋へと戻り、押入れの中からコナミが適当な服を見繕ってくれた。

手を握られた事に何故か動揺してしまい、移動の途中から意識がやや上の空だったが……。

(やはりどうかしていますね、私は……)

あれでもない、これでもないと散々悩み、彼が取り出したのは白い長袖のシャツと青いジーンズだった。

彼が私が寝ていた隣の部屋へと移動した後、早速それに着替えた。

このような服を着るのは初めてだったが、悪い感じはしなかった。

「ああ、どうセイバ……ッ!??」

襖が開き、私の方を見たコナミは何故か言葉を不自然に途切れさせて頬を赤らめ、ササツと視線を逸らした。

はて、何故だろうか？

「あの、どうかしたのですか？ 何か変な所でも？」

すると彼は視線を横に逸らしたまま、

「あ、あのさ、その……その服を奨めた俺も悪いんだけどさ……あーっ、と、その、セイバー、下着は？」

慌てたようにたどたどしく、そう聞いてきた。

「いえ、私の居た時代にはそういった物はありませんでしたし、用意されてもいなかったもので着てはいませんが」

正直にそう答えると、彼は「えっ!？」と驚いたようにこちらに振り返ったが、すぐまた顔を背けた。

本当に一体何なのだろう？

「あの、その……自分の胸元、見てもらえる？」

「胸元……？」

そう言われたので自分の胸へと視線を落とす。

女性として豊かさに幾分か欠ける膨らみが目に入る。

やや暗澹とした気分になりながらもとりあえず注視すると……

両胸の最先端部が、その存在を自己主張していた。

「きゃあっっ！！」

思わず胸元を両手で隠して蹲る。

頬がみるみる紅潮していくのが自分でも解る。

(うう、見られた……コナミに見られた……)

羞恥心が津波のように押し寄せてくる。

……騎士である自分が、まさかこんな乙女のような反応をするとは思わなかった。

「ご、ごめん！ セイバーは色白だから白が似合うかなと思って白いシャツを渡したんだけど、まさか下着を付けてなかったなんて……と、とりあえずコレ着てて！」

そう言っただけで彼がこちらに上着を渡してきた。

慌ててそれに腕を通す。

「み、見ないでくださいね!？」

「わ、分かってるよ!」

言い合いながら着込もうとするが、中々袖に腕が通らない事にもどかしさを感じる。

やっと腕を通し終わって前を閉じると、ふわっ、と何かが鼻をくすぐった。

これは……

(コナミの……匂い……?)

思わず着込んだ上着を見る。

以前召喚されたときに着せられた、スーツのような上着だ。

ただし前回は黒だったのに対し、今回は緑色だったが。

「これは貴方の服なのですか？」

下から見上げるような形で彼に尋ねると、

「ん？ ああ、そうだけど」

という返事が返ってきた。

「……………ッ!？」

今度は別の意味で頬が紅潮し出したのがハッキリと解った。

side 小波

「ぶっ……」

息を吐く。

まさか着替え一つでこんなにドタバタするとは思わなかった。

「……………」

セイバーはいまだに頬を紅くし、身体を抱くような恰好でその場に座って俯いている。

思い切り見ちゃったからなあ……………。

「その……………ごめん、恥ずかしい思いをさせて……………」

「い、いえ、それはもういいのですが……………」

そして共に黙り込んでしまう。

……いかん、堂々巡りだ。

何とか流れを変えないと……。

とその時、

「……ん？ あの、コナミ。これはどこから出したのですか？ 貴方は何も持ってなかった筈ですが……」

何かに気付いたような表情で顔を上げたセイバーが、今着ている、俺が渡した上着を指し示しながらそう尋ねてきた。

「え？ ああ、それは……こういう事だよ」

彼女にそう答えると、被っていた帽子を右手で押さえて目深に被り直す。

そして眼を閉じ、イメージする。

次の瞬間、俺の服装が身体を中心から順に、そして一瞬で変化した。

「なっ……!!」

セイバーから驚きの声が聞こえてくる。

今の俺の格好は白の長袖カッターに紺に近い青のスラックス、緑のネクタイを身に付けゴーグルの付いた白いヘルメットを被っている。

元々顔立ちが幼いから、これで外見は見事に中学生だ。

(……実年齢考えると、ちょっと悲しくなってくるなあ。 怨むぞ、
『世界』)

心の中で呪詛を送りつつ、室内なので頭のヘルメットを取って彼女に説明する。

「とまあ、タネを明かせばこういう事さ。こんな風に任意で衣装替えが出来るんだよ。まあ種類はそんなにないけどね。で、そのブレザーは元々これの上着で、ササツとそれだけ取り出したんだ。あ、ちなみにデフォルトはあのユニフォームだから」

「……………」

あれ、セイバーからの反応がない。

不審に思って彼女を見やると、何か珍しい物でも見つけたかのよう
に、マジマジとこっちを見つめていた。

「どうかしたの、セイバー？」

「……あ、いえ。何も被っていないコナミを初めて見たもので」

不審に思ってそう聞いてみると、そんな答えが彼女から返って来た。

(そういえば会ってからずっと帽子を被っていたっけ……)

室内でも帽子を被ったままているのが癖になっているからな。

「しかし……こうしてよく見ると、意外とコナミは可愛らしい顔立ちをしているんですね」

と、何を思ったか、セイバーが表情を柔らかくしていきなりとんでもない事を口走った。

「男に対して『可愛い』って……あのねセイバー、それは褒め言葉じゃないよ？ むしろ失礼に当たる言葉だ。……ちよつと自分でも気にしてるんだから」

『可愛い』というフレーズに少々ムツと来たので反論するがそれは、

「フフ……褒めているんですけどね。しかし、やはり可愛いですよ
コナミは」

こちらを見て微笑むセイバーの目尻を、ますます柔らかくさせるだけに終わった。

そうこうしていると、

「おい、二人とも。ちょっといいか？」

部屋の外から、士郎君の声が響いてきた。

「そういえば、彼の最後の保有スキルが見えませんでしたが一休…」

第七夜 「朝の光景と野球少年（前編）」（後書き）

セイバーフラグその3が立った！！

弾道が上がった！！

球速が上がった！！

筋力が大幅に上がった！！

うちのセイバーさんは原作よりも若干乙女です（やや主人公限定ですが）。

ちなみにセイバーの着ている服は、H O I E Wで子供たちとサッカーをしていた時に着ていた物と同じ物です。

その上から主人公が渡したブレザーを着ています。

そして主人公の服装は…… 11裏の格好そのものです（ブレザーは作者の捏造設定ですが）。

第八夜 「朝の光景と野球少年（後編）」（前書き）

この回で主人公の二つ目の宝具が出てきます。

第八夜 「朝の光景と野球少年（後編）」

side 小波

「俺達を紹介する？」

部屋にやって来た土郎君は開口一番、そんな事を俺達に告げた。

「ああ、このまま隠しておくのもどっちにも悪いような気がしてな。だから一度紹介して、一緒に朝飯を食べようかと」

至って真面目な表情で土郎君はそう言った。

確かに気持ちは分かるが……。

「シロウ、それはリスクが大きすぎます。察するに貴方の後輩とやらは一般人なのでしょう？ 我々の事を知られると、色々と不都合が生じる可能性が」

セイバーが土郎君の提言に抗議を入れる。

今は聖杯戦争という異常事態の最中だ。さなか

セイバーの苦言は至極もつともな話。

俺もどちらかと言えばセイバー寄りの意見だ。

勿論本当の事を言わずに嘘を交えて俺達を紹介するのだろうが、それとは関係なく存在自体を知られるのがまずい。

何しろ俺達はこの街では異邦人、見知らぬ人間だ。

ただそれだけで目立つ。

「見慣れない人間がいる」と知り、それが口伝に広がれば他のマスターがいずれその情報を手にするだろう。

そうなればその後輩に危険が及ぶ可能性も出てくるのだ。

巻き添えを出さないためにも出来るだけ俺達の存在は秘匿するべき、という考えは正しい。

「…………でもなあ…………」

俺達の懸念を知ってか知らずか、士郎君は尚も食い下がってくる。

あ
(…………この様子だと絶対諦めないだろうな。…………はあ、仕方ないな

心の中で嘆息する。

そして、

「……わかったよ、士郎君の好きにするといい」

俺は早々に白旗を振る事にした。

「コナミ、いいのですかそれで」

セイバーが納得の行っていない表情で問いかけてくる。

「仕方ないよ、士郎君の意思は固そうだし、これ以上ここに留まらせたら桜って後輩も訝しむだろうし。それに士郎君頑固だよ？ 昨日の問答でそれは分かってるでしょ」

「それはそうですが……」

「何より、よく考えたら俺達は霊体化出来ない。だから遅かれ早か

れ俺達の存在は周囲に知られると思うよ？ いずれにしろリスクは一緒だと思う」

「……解りました、納得はいきませんがマスターの意思ですし、従う事にします」

俺の言葉に、渋々ながらセイバーも了承した。

「悪い、それじゃ行こう」

部屋を出て、士郎君を先頭に居間へと続く廊下を歩く。

「ところで士郎君、俺達の事は何て紹介するの？」

道すがら、士郎君にそう尋ねてみる。

一応作り話の流れを知っておかないと、いざという時に口裏を合わせにくいからだ。

「ああ、親父の知り合いで、久々に親父に会いに外国からこっちに来た、という事にしようと思ってる」

「それで大丈夫なの？」

「ああ、親父は海外をあちこち飛び回ってたヒョウロク玉だし、そういう事ならセイバーも不自然には思われないうつから」

「そういえばそんなこと言ってたね。なら大丈夫かな」

その路線で行くなら俺が一番怪しくなるが、まあ相手の出方を見ながらその場その場で合わせていこう。

幸い英語も喋れるし、仮に疑われても躲しきれ自信はある。

「……なあ、さっきから気になってたんだが、その服どうしたんだ？ さっきまでユニフォームだったのに中学の制服っぽいを着てるし。俺、そんな服持ってないぞ、セイバーの着てるブレザーもだけど」

士郎君が俺を振り返って懐疑的な視線を向けてくる。

……そういえば服を替えたっけ。

「ああ、俺の能力に衣装替えがあつてね、さっきそれで着替えたんだ。セイバーのブレザーはこの制服の上着」

ちなみにメットは邪魔になるので今は消してある。

「……そんな事も出来るのか。つくづくサーヴァントって非常識だな。……ん？ そういえば何でセイバーが小波の上着を着てるんだ？ 他に服あつた筈なのに」

「……………ッ!？」

士郎君の唐突な疑問の声に、隣のセイバーの顔がサッと茹でダコのように赤く染まった。

(……………これはマズいな、助け船を出す必要があるか)

主に俺の精神と、セイバーの名誉のために。

「……………まあ、それはホラ、男には言えない乙女の事情ってヤツで……深くは聞かないでくれると主にセイバーが助かる」

フラッシュバックしそうになる先程の光景を思い出さないようにしながら、努めて冷静に忠告する。

「……あ、ああ。まあ聞かない方がいいなら深くは聞かない」

いまだに頬の赤いセイバーを見て何を思ったか、やや頬を赤くしながら彼は追及を止めた。

……何か変な誤解をされてるような気がするが。

一体何を考えたんだろう……？

「あ、そうだ。小波達が部屋に引っ込んだ後にもう一人、俺の姉？
が来てるから」

もう少しで居間に着くという時、士郎君が振り返りざま唐突にそう告げた。

既に紅潮から立ち直ったセイバーがピクリと眉を動かしたが、同意した時既に一切を諦めたのか、特に何も言う事はなかった。

「何で疑問形なの？ というよりもう一人いたんだ」

「正確には姉のような人、なんだけどな。藤ねえ……藤村大河ふじむらたいがって名前なんだけど、桜と同様、家族同然の付き合いなんだ。親父が生きてる頃からのな。朝晩、飯はこの家で食ってる」

「ふうん……どんな人なの？」

「あー、一言で言い表すなら……トラ？」

「……………は？」

その思わぬ返答に目が点になる。

『トラ』って……何て評価だ。

しかもまた疑問形……。

色んな意味で気になるぞ。

「一応教師で俺のクラスの担任だから、割とまともな人物……なのかなあ？ ま、まあ悪い人間じゃないから、後は実物見て判断してくれ」

「あ、ああ……」

最後まで疑問符の尽きない、微妙な評価を聞いているうちに居間へと辿り着いた。

士郎君が襖を開き、居間へと入る。

「桜、藤ねえ。今日からこの二人も一緒に飯食うから」

「……………」

士郎君の後ろから居間を覗くと、そこにはテーブルに着いたまま硬直する二人の女性がいた。

一人は紫の長い髪の一部をリボンで括った学生服の女の子。

もう一人は茶色のショートカットでピアスを耳に付け、虎縞の服を着た二十代の女性だった。

（多分あの髪の長い娘が桜って娘で、もう一人の虎縞の服を着た人が藤村さんって人だな）

伝聞情報から人物に当たりを付け、士郎君に続いて居間へと入ろうとしたその瞬間、

「
　　って、後ろの二人は一体誰なのよしろおおおおお
――！！！！！！！！！！」

女性にあるまじき大音声だいおんじょうが虎縞服の女性から発せられ、その咆哮が居間全体を揺るがした。

襖や窓が小刻みに振動し、テーブルに並べられた食器がカタカタと音を立てる。

発声源たる女性は両の拳を握りしめ、何とも形容しがたい、だが異様な圧力を感じさせる表情のまま土郎君に向かって呐喊、彼の襟首に掴みかかっていた。

「~~~~つ、お、落ち着けふ「これが落ち着いていられるかー！
！ 説明しなさいよしろおおおー！！！！」ぐああああ、揺するなあああー！！」

その様、正に怒れる虎の如し。

(間違いない、この人が藤村さんだ)

食らいつかれて^{イケエ}いる士郎君を余所に、鼓膜が破れないようしっかりと耳を塞ぎながら確信する。

そして士郎君のあの微妙すぎる評価が、決して間違っていないかった事を認めざるを得なかった。

「成る程、正に虎ですね」

「わたしをトラと言つなああああ————！！！！！！」

先程の音響兵器染みた声にも平然とした様子のセイバーがポツリと呟いた俺と同じ感想に、虎から再び雄叫びが発せられ、それが今度は家全体を揺るがした。

side 士郎

「へええ、切嗣さんを訪ねて、ねえ。確かにあの人、海外にしょっちゅう行ってたからそういふ事もあるか」

「ああ、昨夜遅くに二人が訪ねてきたんだ。二人は知り合いらしくて、両方とも親父が死んだ事知らなかったみたいでな。しばらくこっちに滞在するって言ってたから、空いてる部屋を貸して家に泊まってる貰ったんだ」

猛り狂うトラ……もとい藤ねえを何とか宥めすかした後、即興ででっち上げた二人の嘘話を話して聞かせた。

セイバー一人だけだったならともかく、男である小波も居た御蔭か、どうやら特に妙な疑いも抱かず信じたようだ。

藤ねえが単純でよかった……。

ちなみに二人は爺さんが海外に行った時に偶然知り合い、共に親が居なかったため爺さんが後見人に名乗り出て、援助していた事にした。

(……我ながら、かなり胡散臭いな)

セイバーはともかく小波は明らかに日本人だし、今に至っては中学の制服っぽい服を着ており立派な日本の中学生に見える。

その点を突っ込まれた時は焦ったがそこは小波が、自分が少し前から日本に移って来た帰国子女であり、今通っている学校から特別に許可を得てここに来ている、という嘘を藤ねえに語ってくれた事で窮地を脱する事が出来た。

庇う相手にフォローされる辺り、おそらく俺には詐欺師の才能はないだろう。

元よりそんなものにはなりたくもないが。

「あ、この味噌汁美味しいな。 土郎君、料理凄く上手なんだな」

「当然です！ 何たって先輩は私の料理の師匠なんですから！」

「サクラ、おかわりです。 大盛りで」

「はいはい、ちょっと待っててくださいねセイバーさん」

「……………ハア」

「どうしたの土郎？ 溜息なんか吐いて」

「……………何でもないよ藤ねえ」

訝しげに俺の顔を覗き込んでくる藤ねえを誤魔化すため、ごはんに口を詰め込む。

俺の苦勞を知ってか知らずか、隣では小波・セイバー・桜がかなり打ち解けた様子で和氣藹藹わきあじあじと朝食に舌鼓を打っていた。

スポーツマン（多分）は伊達ではないのか、小波は朝にしては結構な量を既に胃に収めている。

しかし何より驚いたのはセイバーだ。

朝食を前にし、目をキラキラと輝かせたセイバーは一口食す度にコクコクと頷きながら、小波以上の食欲で瞬く間に自らの器と皿を空にしていた。

その勢いたるや、俺の皿から急遽おかずを支援しなければならなかった程だ。

もっとも食事量・スピードはアレだが、食べ方は意外とキレイだった。

きちんと箸も持っていたし。

「セイバー、余計な事を言うようだけどそれ、三杯目だよな。日本には『居候はおかわりの三杯目はそつと出す』という風習があるんだよ。美味しいから食が進むのは解るけど少しは遠慮したら？」

「うっ！ ……す、すみませんでしたコナミ。 ……サクラ」

「ふふ、大丈夫ですよセイバーさん。まだ沢山ありますから、そつ

と出さなくてもいいですよ。小波さんも、あんまりイジワル言っちゃダメですよ？」

「いや、一応釘を刺しておかないとエンゲル係数急上昇で、衛宮家の財政が破綻しそうな気がしてさ……」

(……確かにあの勢いを見るとなあ、下手すれば財産が底を尽くのを通り越して底すら尽きそうだな)

小動物のような素早さで箸を動かし、モキュモキュとごはんを頬張るセイバーを横目に、桜へと視線を移す。

桜も小波・セイバーに負けず劣らず健啖家だ。

本人はそれをひた隠しにしているようだが、俺と藤ねえにはしっかりとバレている。

現に桜の茶碗はごはん大盛りだ。

しかしこの短時間であの二人と打ち解け合えるとは思わなかった。

今も笑顔でセイバーの食べっぷりを見ているし、これなら問題なさそうだな。

(……ただ、セイバーの名前を聞いた時、微かに反応していたようだな……?)

唯一、そこだけが微かに引っ掛かった。

やがて時間が過ぎ、桜は弓道部の朝練へ、藤ねえは職員会議があるため早めに衛宮邸より学校へ出発した。

そしてそれからやや遅れて俺も学校へと繰り出すべく、玄関で靴を履く。

「士郎君、本気で学校に行くのか？ 休んだ方がいいよ。今の状況が状況だし、仮に襲撃を受けたら……」

靴を履き終えたところで、明らかに不満気な表情で小波が忠告してきた。

「そこは大丈夫だろう？ 襲撃してくるとすれば夜だ。昼間で、しかも人目の多い学校で襲撃を仕掛けて来るバカはいないよ」

自分の予測を素直に告げると、今度はセイバーが、

「シロウ、それは楽観的に過ぎます。何事にも例外があるということを忘れてはいけない」

やはりどこか不満気な表情でそう返してきた。

……心配性過ぎるぞ、二人とも。

「分かったよ、いざとなったら令呪を使って呼ぶから。じゃ、行ってくる。留守番頼むな」

二人に向かって言いながら外へ出て玄関のドアを閉め、学校へと足を向けた。

(……そういえば、遠坂も学校来るのかな?)

家を出て数分後の道すがら、ふとそんな事を思ってしまった。

そして俺はこの数時間後、この愚かな選択を激しく後悔することになる。

正にその遠坂自身の手によって、とんでもない状況に陥るハメになるのだから。

side セイバー

「……………行ってしまいましたね」

「……………ああ、行っちゃったな」

シロウが去った後の玄関に小波と二人して佇む。

「……………ハア」

そしてお互いから同時に溜息が漏れた。

「……………まさかあそこまで警戒心が薄いとは思いませんでした」

「ああ……………士郎君も頭では解ってるんだろっけどな。昨日の今日で実感が伴ってないというか……………とにかく、あれじゃちょっとまずいな。どうにかしないと、その内にエライ目にあっぞ」

「ええ……………」

難しい顔をして唸るコナミ。

それに同意するようにコケリ、と頷く。

コナミの懸念は確かに的を得ている。

今朝、教会での会話をシロウが話してくれたが、その中に聞き捨てならない事柄があった。

今回のマスターは正規の魔術師が少ない。

監督役の神父が言ったというこの言葉だ。

(それにこうも言っていた……「知っているだけでも正規の魔術師は俺を含めて三人らしい」とも)

残る魔術師は二人。

アーチャーのマスターであるリン。

そしてバーサーカーのマスターであるイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

他はおそらくモグリの魔術師か、魔術師ですらない一般人だろう。

(もしそうだとするなら、魔術師の常識に則って行動するのは危険すぎる。何しろ半数以上に魔術師の常識が通用しない可能性があるのだから)

白昼堂々人目も憚らず、いや、むしろ一般人をも巻き込んで事に及ぶかもしれない。

サーヴァントがマスターを諭す可能性もあるが、サーヴァント従者である以上、そこまで強くは言えない筈なので確実とは言えない。

シロウはどうやらその可能性に考えが及んでいないようだ。

だからあんなにも能天気且つ不用心に学校に行く、等という事が出来るのだろう。

「……仕方ないな、出来ればまだ使いたくはなかったけど、これを使うか」

ふとコナミの方を見ると、何処から取り出したのか彼の手には一枚の画用紙が握られていた。

「……画用紙、ですか？」

中を覗き込んでみる。

そこには何も描かれてはいなかった。

しかしそれでもジッと観察していると、何やら絵が浮かび上がってきた。

その絵は、まるで子供が思いつくままクレヨンで描いたような、ひどく乱雑な物だった。

「この絵は……？ 子供のラクガキのようですが……」

怪訝な表情の私を見て彼はニヤリと笑うと、

「 変身、『^{ヒーロー}五人の英雄・^{ブラック}黒の英雄』！！」

その言葉を紡ぎ、その絵の描かれた画用紙を握り潰す。

次の瞬間、握り潰された画用紙から光の粒子が溢れ出し、その粒子に彼の身体が包まれた。

「え……っ!？」

突然の事に動揺が隠せない。

数秒の後、粒子の輝きが消える。

そこには、

「
変身完了、是、^{ブラック}『黒の英雄』也」

黒い服を纏い、顔をフルフェイスのヘルメットで覆った小波が悠然と立っていた。

「……………」

目が点になる。

そのあまりに奇怪過ぎる格好に、だが。

「……………あの、セイバー？ いい加減こっちに戻ってきてくれ、頼むから」

「……………ッ！ す、すみませんコナミ」

予想外の事にしばらく意識を手放してしまっただが、様変わりしたコナミによって引き戻される。

「……………」

改めてコナミを観察する。

黒を基調としたボディースーツに白い手袋。

顔を覆うフルフェイスのヘルメットには額から頭部にかけて一本、口元に二本、白いラインが走っている。

額の部分に赤いアンテナの様なV字の角飾りと、両目を覆う部分にこれまたV字状の青色のバイザー。

そして首元には紫の長めのマフラーが巻かれていた。

「あの……………コナミ、これは一体？ 今朝の衣装替えとは少々違うようですが」

意を決し、彼に尋ねる。

今朝見せて貰った衣装替えとは明らかに一線を画している。

今の彼からは今まで感じられなかった、ある種のオーラが放たれて

いた。

「ああ、これは俺の宝具だね。『五人の英雄』^{ヒュー}っていう名前で、これみたいなの、一種のパワードスーツの様な物を身に纏うんだよ。で、この形態は『黒の英雄』^{ブラック}って言うて、コイツの効果は……」

そう言うて、彼はしばし沈黙する。

次の瞬間、彼の姿が忽然と消え失せた。

「なっ！」

慌てて眼を凝らすけどやはり消失したように彼の姿は目に入っていない。

しかも、

「気配が……感じられない!？」

彼の気配までもが、まるで最初から居なかったかのように感じられなくなっていた。

これではまるで……、

(……アサシンの、『気配遮断』のようだ……)

あまりの事に思わずゴクリ、と唾を呑み込む。

「……とまあ、こういうことさ。こんな風に姿と気配を完全に隠蔽出来るんだ。ちなみに戦闘能力も多少は向上するから、戦闘になっても大丈夫だよ」

と、唐突に彼の声が背後から聞こえて来、右肩に手を置かれた感触がした。

「ッ!」

思わず振り返ると、そこにはやや困ったような雰囲気を出した小波が立っていた。

おそらくそのマスクの下では苦笑いをしている事だろう。

「……常識外れですね、それは。しかも貴方の口振りからすると、その宝具にはまだ他の要素があるようにも聞こえる」

動揺を押し殺し、努めて平静を装いながら彼に問いかける。

すると、

「ん？ ああ、あと四つ形態があるな。まあそれぞれ特徴が違うから、色んな場面で対応が可能なのがこの宝具のミソかな」

と、何でもなような風に彼は言い切った。

「……………!!」

その瞬間、表情が盛大に強張ったのが感じられた。

side 小波

答えた後、セイバーはいきなり怖い顔でこちらを見たかと思うと、やがて何かを諦めたかのように肩を落として、やれやれと首を振りながら嘆息し、

「……………はあ、そういえば『規格外』が貴方の特徴でしたね。もう何も言わない事にします。いちいち驚いていては、主にこちらの精神

が持たない」

気の抜けたようにポツリとそう言った。

「あ、あははは……」

俺はそれに対し、乾いた笑いを漏らす事しか出来なかった。

「……と、とにかく土郎君の後を追いかけるから、セイバーはここで留守番しててくれ」

どこか気まぎれになった空気を誤魔化すためにそう言い置いて玄関へと向かう。

とその時、

「……あ、ちょ、ちょっと待って下さいコナミ。それはいいのですが、大事な事を忘れています」

慌てたようにセイバーがそう告げ、俺は玄関の戸を前にして制止せざるを得なかった。

セイバーを振り返ると、いやに真剣な表情をしている。

「大事な事……？」

はて何だろう？

特に何も問題はない筈だが……。

やがてセイバーが重々しく口を開いた。

「はい、私のお厚い飯です」

「……………」

結局土郎君を追いかけて家を出たのは、それから三十分経った後だった。

第八夜 「朝の光景と野球少年（後編）」（後書き）

士郎に死亡フラグが立った！！

『ヘッドスライディング』が身に付いた！！

技術が上がった！！

今回の主人公の宝具の元ネタは、7と12です。

特に7は奥深い作品でした（博士の『正義』についての話とか）。

主人公設定

【クラス】 カオス

【マスター】 衛宮 士郎

【真名】 一ノ瀬 小波

【性別】 男性

【身長・体重】 167cm 58kg

【属性】 中立・善

【筋力】 E+ 【魔力】 C

【耐久】 E 【幸運】 A+

【敏捷】 E+ 【宝具】 C

【クラス別能力】

騎乗：C

騎乗の才能。

大抵の乗り物なら人並み程度に乗りこなせる。

単独行動：E X

マスター不在でも行動できる能力。

完全に受肉した状態であり、マスターからの魔力供給を必要とせず自給自足での活動が可能。

【保有スキル】

心眼（真）：B

修行・鍛錬において培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場に残された活路を導き出す“戦闘論理”。

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

武芸の心得：B（C）

剣・槍・弓・格闘術等、武芸十八般をはじめとする武術の技能。

一流の使い手とも渡り合うことができる。

心眼スキルによってランクが上昇している。

火器使用：B（C）

火器の取り扱いに関する技能。

専門的な使用法と整備法・運用法までほぼ熟知している。

心眼スキルによってランクが上昇している。

魔術：C（D）

オーソドックスな魔術を習得。

得意なカテゴリは不明。

扱うには魔導書等を媒体とする必要があるが、媒体を用いるためにランクが上昇している。

霊力：C+

妖怪・魔物・霊体に対する干渉能力。

攻撃が妖魔・霊体特効になり、それらに対しての最終ダメージが1.2倍になる。

また第六感が非常に鋭敏になり感知能力が向上、霊体化した英霊を感知、視認、あるいは干渉することさえも可能となる。

さらに「対魔力」スキルと同等の効果を得る（ランクは「霊力」スキルのランク-1、実質D+）。

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

また、不利になった戦闘を戦闘開始ターンに戻し、技の条件を初期値に戻す。

戦闘続行：A

往生際が悪い。

瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

カリスマ：D+

軍団を指揮する天性の才能。

一個師団相当の統率能力を持つ。

また同性、異性を問わず人に嫌われにくくなる。

????? : A

彼のみが持つ稀少特性。

彼のその出自故のものだが具体的な効果は不明。

【宝具】

『オール・イン・ワン
全てに通ずる物』

ランク：C

種別：対人・対軍宝具

レンジ：?????

最大補足：?????

通常は野球のバットの形状をしている。

武器の名称を唱えることで、その名称通りの武器に形状を変化させることができる。

その能力は、オリジナルの物と遜色ない。

また、変化した武器の本来のランクがC以下の場合、Cランクの宝具として扱われるというメリットがあるが、Cランク以上の物に変化した場合でも同様にCランクの宝具として扱われてしまうというデメリットも存在する。

変化させられるのは、剣・槍等白兵戦用のものから、ライフル・手裏剣等の射撃・投擲武器、魔術使用のための魔導書まで幅広い。ただし、記憶・知識にない武器には変化させられない。

二種類以上の物に同時に形状変化させることもできるが、変化には『コスト』が存在し（最大コスト100）、高能力あるいは形状が複雑になるほどコストが高く、コストを超える武器の複数変化・使用はできない。

特性として、変化の際にランダムで性能が上下する『性能変動』がある。

LCK（幸運値）が高いほど高性能の効果が表れやすい。

これらの他にもう一つ、『裏技』が存在するらしいのだが……？

『サーヴァント・システム』

『オール・イン・ワン全てに通ずる物』に隠された、もう一つの特異機能であり“裏技”。

自身と縁を持つ者を、サーヴァントとして呼び出す事が出来る。

但し、召喚にはいくつかの条件がある。

まず、召喚に際して『オール・イン・ワン全てに通ずる物』の最大コストの8割（80）と、自身の魔力を触媒にする必要がある（結果、一時的に魔力に補正が掛かる）。

加えてこの方法で召喚される者にはサーヴァント・システムが適用されるため、七つの基本クラスに該当する者のみが召喚対象となる。そして召喚された者は『単独行動：C』のスキルを無条件で取得するが、現界維持にはこのスキルと自身の魔力に依存するため最大で24時間しか現界出来ない。

宝具はその人個人が所有する物か、適当な物がなければ『オール・イン・ワン全てに通ずる物』内の情報から、その人に相応しい武具が宝具として選出される。

この時、触媒となった『オール・イン・ワン全てに通ずる物』のランク固定は例外を除き適用されない。

あくまで『オール・イン・ワン全てに通ずる物』を介した一機能であるため、令呪は発現しない。

『ヒーロー五人の英雄』

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

一種のパワードスーツ。

戦隊物のヒーローが着ているような意匠をしている。

5種類あり、それぞれを装着することで自身の能力を向上させることができる。

装着できるものと効果は以下の通り。

『レッド赤の英雄』

筋力・耐久・敏捷がBに上昇、かつ宝具ランクに+補正。

???

???

『ピンク桃の英雄』

筋力・耐久がC、敏捷がAに上昇、かつスキル「未来予測：A」を追加。（「未来予測」：確率の高速演算によって数秒先の未来を予測する。一言で言えば「パワポケ版ゼ システム」。F a t e 的には「直感」とほぼ同じ）

「^{ブラック}黒の英雄」

筋力がD、敏捷がA+に上昇、かつスキル「不可視化：A」 「気配遮断：A+」を追加。（「不可視化」：透明になれる能力。ランクが高いほど精度が高く、持続時間も長くなる）

「?????」

【パーソナルデータ】

「容姿・格好」

黒髪短髪に黒眼、左頬にバンテージを貼っている。

見た目は中学二・三年〜高校一年程度、それなりに整った顔立ちで童顔気味。

セイバー曰く、「可愛い顔立ち」（本人も自覚アリ）。

ちなみにデフォルメ体ではなく、所謂擬人（？）体。

『性格』

普段は気の優しい、それこそ何処にでもいるような凡庸な少年だが、戦闘時には完全な『戦闘者』としての意識に切り替わるため、普段と有事とで性格のギャップが激しい。

しかしその本質は意志が強く、自らの力で道を切り開いて行ける逞しい少年。

異性、同性を問わず、人から好かれやすい。

『備考』

英霊としての格と身体能力は最低クラス（身体能力は一般人のトップアスリートレベル）だが、保有スキルと宝具が理不尽なまでに強力。

どうやら厳密な意味では『英霊』ではないらしいのだが……？

【蛇足】

『選手能力(初期能力)』

右投両打 オーバースロー/スタンダード打法

守備位置 メイン：投手

サブ：捕手/遊撃手

投手能力

球速 125km/h

スライダー LV:1

コントロール F(100)

スタミナ F(15)

投手特殊能力

(なし)

野手能力

弾道 L V : 1

ミート G (1)

パワー F (2 0)

走力 E (6)

肩力 E (6)

守備力 E (6)

エラー率 E (6)

野手特殊能力

(なし)

投手・野手共通特殊能力

センス

『備考』

聖杯戦争を最後まで生き残ればオール A + 1 6 0 k m / h オーバーの最強選手が誕生する……ハズ。この能力は召喚された直後のもの。

最低格とはいえ一応英霊（厳密には少し違う）なので普通は成長しないのだが、それに反して聖杯戦争中、有り得ないスピードで成長する（野球選手として、であるが。そのため『センス』を最初から持っている）。

ちなみに英霊としての能力と選手能力に関連性はなく、あくまでそれぞれ別の能力であるため、選手能力が上がったからといって英霊としての能力が上がるわけではない（例えオールAであろうとも、一般人の域を出る事はない、というのが主な理由）。

（四十夜時点）

投手能力

球速 141 km/h

スライダー Lv・4

コントロール C（150）

カーブ Lv・2

スタミナ C（100）

投手特殊能力

ピンチ	クイック	打たれ強い	回復	打球反応	キレ
牽制	リリース	逃げ球	勝ち運	フルカウント	

野手能力

弾道 LV:2

ミート C(10)

パワー C(100)

走力 C(11)

肩力 C(10)

守備力 B(12)

エラー率 C(11)

野手特殊能力

チャンス 体当たり 初球 粘り打ち 流し打ち 連打
盗塁 走塁 ブロック ヘッドスライディング ゲッツー崩
し ムードメーカー チームプレイ 慎重打法

投手・野手共通特殊能力

センス ムード 安定感

主人公設定（後書き）

話が進むに連れて随時更新していきます。

士郎と身長・体重を同じにしたのは特に理由はありません。

単に基準としていいと思ったのでパパッとそれを採用して当て嵌めました。

あと守備位置に関しては適当です（投手にするとというのは最初から決めていましたが）。

ちなみに保有スキルの元ネタが分かった方は、相当パワポケをやりこんでいる方です。

主人公武器・宝具設定（前書き）

設定は元ネタを基準に作者の考えたオリジナルの物です。

主人公武器・宝具設定

『リボルバー回転式拳銃』(初出：第六夜)

ランク：E

種別：対人宝具

レンジ：1～15

最大補足：1人

コスト：10

パワポケシリーズ全般に登場。

種別は不明。

どこにでもあるような(?)普通のリボルバー拳銃。

ちなみに神秘の全く宿っていない武器防具は必然的にランクがEに固定される。

『古代樹の盾』(初出：第六夜)

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

コスト：40

パワポケ12(裏)に登場、作中最強の盾。

長い年月を経た古代樹を加工して造り上げた巨大な盾。

古代樹に宿る神秘と古代樹そのものが持つ堅牢さで、盾として破格の強度を誇る。
自らのランク未満（B未満）の攻撃を無条件で無効化する。
また一度耐えきった攻撃に関しては耐性を得るといった特性を持つ。

『解析モノクル』（初出：第九夜）

ランク：E+

種別：対人宝具

レンジ：

最大補足：

コスト：15

パワポケ11（裏）、12（裏）に登場。

その名の通り、対象の情報を解析出来るモノクル。
巧妙に隠蔽された物を発見したり、対象の欠点を探り出したり出来る。

但し、あまりにも高度すぎたり複雑な物だったりした場合、詳細までは調べられない（推論を出すことは可能）。

また意外に耐久力があり、防具としても割と優秀。

『騎士の盾』（初出：第九夜）

ランク：D-

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：2人

コスト：20

パウポケ12（裏）に登場。

希少金属で出来た巨大な盾で、その大きさから使用者を含めて二人程度なら楽に覆い隠せる。

そのため誰かを『かばう』事に向いており、誰かをかばった際宝具ランクが1ランク上昇するという特性を持つ。

『知識の教典』（初出：第十夜）

ランク：D

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

コスト：20

パウポケ12（裏）に登場。

魔術の入門書的な魔導書で、基礎的な魔術が網羅されている。

しかし記録されている魔術はなかなかに応用範囲が広く、使い勝手がいい物が多い。

魔術発動の媒体として使用する事も可能で、実際にはこちらの機能の方が主である。

『日本刀』（初出：第十夜）

ランク：E

種別：対人宝具

レンジ：1～2

最大補足：1人

コスト：10

パワポケ7（裏）、11（裏）に主に登場。

仕様は戦国時代以前の太刀たちではなく、江戸時代以降主流となった打うち刀がたな。

無銘の数打ち物であり、そこその質ではあるが名刀とは言い難い。パワポケのサクセス（表・裏）では、登場キャラクターの何名かがこれをメインウェポンとしている。

その事から、パワポケの中で比較的登場頻度の多い武器でもある（一番はやはり『拳銃』）。

『小太刀』（初出：第十夜）

ランク：E

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

コスト：10

パワポケ11（裏）に登場。

通常の刀よりも短く、脇差わきざしよりも長い日本刀。

そのため取り回しが容易で、比較的防御に向いている刀。

またその刀身と軽さから、利き手と逆の手に持ち二刀流として運用する事にも適している。

『救急キット』（初出：第十六夜）

ランク：

種別：

レンジ：

最大補足：

コスト：20

パワポケ11（裏）、12（裏）に登場。

通常の医薬品から魔法薬の類まで、種々雑多な治療道具が収められている救急箱。

中には見るからに怪しげな薬や、誰かがノリで魔改造したと思われる医薬品もあつたりなかつたり……。

ちなみに救急箱の側面には、誰かの名前と思しき文字が書かれているが掠れてしまっていて解読は不可能。

僅かに『南』、『瑠』という文字だけがようやく見て取れる程度である。

『ボール』（初出：第十七夜）

ランク：

種別：野球宝具

レンジ：

最大補足：

コスト：1

何の変哲もない野球のボール。

イリヤでも扱いやすいように硬式ではなく軟式のC球。

宝具の特性で、このただの軟球がCランクの宝具となっているのは最早ギャグの領域である。

もともと本来の用途で使用する以上、何ら意味のない要素なのではあるが。

『グローブ』（初出：第十七夜）

ランク：

種別：野球宝具

レンジ：

最大補足：

コスト：1

何の変哲もない野球のグローブ。

イリヤに渡した物は少年用の物で、サイズは小さめ。手入れは完璧に施されている。

ちなみに野球道具への変化は須らくコストが1であり、この1のコストで同じ物ならいくらでも出す事が可能。

『ウインドブレイカー』（初出：第十七夜）

ランク：

種別：

レンジ：

最大補足：

コスト：

宝具ではないが一応説明。

衣装替えの能力で出したウインドブレイカー。

小波の意思で体温調節機能が付加されている。

イリヤの身体が温まったのはそのため。

ちなみに小波の着ているユニフォームにも、同じ機能が加えられている。

『バット』（初出：第二十一夜）

ランク：

種別：野球宝具

レンジ：1～2

最大補足：

コスト：

『オール・イン・ワン全てに通ずる物』のデフォルト形態。

敵密には第一夜から登場している。

『弾き返す』事に特化しており、投擲物・射撃物ならどこに当てようが確実に打ち返せる。

但し、それらから派生した物（衝撃波や爆風など）は例外。

主人公が戦闘に野球道具を使う事を忌避しているため、滅多にこの状態では使用されない（もっとも原作中では演出のために使用されたりしているが……）。

『ヴェンデッタ』（初出：第二十二夜）

ランク：C+

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

コスト：40

パワポケ12（裏）に登場、作中最強の暗器系武器。

諸刃の紅い短剣で、この剣で付けられた傷は決して癒える事はなく、負傷者の体力の衰える速度も通常に比べて遥かに早い。

また人に対して特効効果があり、最終ダメージが1.5倍になる。

元々二刀流で運用する事を前提としている暗器で、逆手でも扱えるように重量は意外と軽い。

尚、これを作成する際の素材として『復讐鬼の刃』、『呪いの瞳』という“いかにも”な代物が使われているが、特に使用者が呪われるというような事はない。

『自在剣』（初出：第二十二夜）

ランク：C-

種別：対人宝具

レンジ：1～15

最大補足：1人

コスト：30

パワポケ11（裏）に登場。

使用者の意思によって自在に操る事が可能な投げナイフ。

その特性上、奇襲や不意打ちに向いている。

ちなみに操れる範囲は使用者が『自在剣』を視認出来る範囲まで。

『カネサダ（兼定）』（初出：第二十二夜）

ランク：D+

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

コスト：25

パワポケ13（裏）に登場。

江戸時代に製作された名刀で、新撰組副長土方歳三の愛刀として知られている。

主人公が士郎に渡したのはその脇差タイプ。
13（裏）では暗器系武器に分類されていた。

『デュアルガン』（初出：第二十三夜）

ランク：E

種別：対人宝具

レンジ：1～25

最大補足：1人

コスト：25

パワポケ11（裏）に登場。

小型・短銃身の目方の軽い拳銃で逆手でも扱え、二丁拳銃が可能な仕様となっている。

元々逆手での運用を前提として製造されているため、その信頼性は高い。

また威力も相応にあり、弾丸の直進安定性も高いので総合的には非常に優秀なハンドガン。

『アポカリプス』（初出：第二十三夜）

ランク：E

種別：対人宝具

レンジ：4～50

最大補足：1人
コスト：45

パワポケ11（裏）に登場。
作中最強のハンドガン系武器。

地球にやって来た凶悪宇宙人（笑）、『ギヤスビゴー星人』由来の
技術と素材を用いて製造された拳銃で、一言で言ってしまうえば簡易
型の『超電磁砲』。
レベルガン

ハンドガン大の大きさ故に出せる威力には限界があるが、それでも
戦車の主砲クラスの破壊力がある。

さらにその特殊な構造上、弾丸を撃ち出す際に使用者に対して反動
がほとんどない『無反動砲』でもある。

素材に『念動石』を使っているため厳密には多少の神秘があるが、
弾丸射出機構の一部に使用されているのに留まっている上、神秘の
強さも無視できるレベルなのでランクはEとなっている。

『干将・莫耶』（初出：第二十三夜）

ランク：C-

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

コスト：35

アーチャーが好んで使っている双剣とまったく同じ代物。

主人公が実物を見、銘を知ったため変化させられるようになった。

ただし、『オールインワン全てに通ずる物』の恩恵で宝具ランクが上がっているため、

神秘の面ではアーチャーの持つそれを上回る。

主人公武器・宝具設定（後書き）

こちらも話が進むに連れて随時更新していきます。

第九夜 「結界とガンドと野球少年」 (前書き)

お待たせ致しました。

今回、意外な人物が登場します。

第九夜 「結界とガンドと野球少年」

Interlude 9 - 1

「……という訳で、俺が今まで知った聖杯戦争の知識はこんな物だ。ここまでで何か質問はあるか？」

「……毎度毎度、アナタは厄介事ばかりに首を突っ込むわね。いつその事自叙伝でも書いたら？ 下手な三文小説よりも売れると思うわよ？」

「好きで厄介事背負い込んでる訳じゃない！ 毎回向こうからこっちにやって来て巻き込まれてるんだよ！！ 今回だって……！！！」

「はいはい、興奮しないの。今からカリカリしてたらこの先、とても身が持たないわよ」

「誰のせいだと……はあ」

「ふふふ……さて、本題に入るけれど。私を“呼び出した”って事は……」

「……ああ、“情報屋”のお前の力を借りたくてな。俺だけで調べようとも思っただが、流石に限界があつてな……それで」

「『餅は餅屋』つて事ね。……それで？ 情報を集めるのはいいけれど、いくらで買ってくれるのかしら？」

「……金を取る気か？ 言っておくが、“今ここに居るお前”に金はあまり意味がないぞ。それ以前に今、一円も持っていないし」

「解ってるわ。“いくら”とは言ったけれど、別に対価は金銭じゃなくてもいいのよ。そうね……例えばだけど、アナタの『愛』でも構わないわよ？」

「……もう一つ言っておくが、『俺』は」

「それも解ってるわ。アナタが厳密には『彼』ではないという事も……でもアナタはある意味では『彼』でもあるのよね？ 『私』も同じような身の上なんだから、そこは気にならないわ。アナタとはまた少し事情が違うけれどね」

「……まあ、見方を変えればそう捉える事も出来なくはない、か。……が、とりあえずお前の挙げた例だけは採用しない方針だからな」

「あら、残念ね。……ま、見返りの話は後でいいわ。それで、私に調べて欲しい事は何かしら？ 前振りもあつた事だし、大方予想は付くけれど」

「まずは聖杯戦争のもつと深い情報、これが第一だな。そして聖杯戦争の監督役、言峰綺礼に関する情報。これも欲しい所だな。あとこれは可能ならでいいんだが……遠坂、アインツベルン、そして……間桐まとうという一族についての情報も」

「……最初の二つは解るけれど、最後についてはどういう事？ それに間桐と言ったら……」

「ああ、遠坂・アインツベルンについてはあの娘達の口振りと様子から、この二つの一族は聖杯戦争に大分深く、もしかしたら彼女達の先祖の代から関わってる可能性があると思つてな。間桐については……桜ちゃんにちょっと、な」

「？ あの娘がどうかしたのかしら？」

「あの娘な……どうも何かに“寄生”されてるようなんだ。しかも夕チの悪いナニかに」

「“寄生”って……何だか穏やかじゃないわね」

「ああいや、何となくそう感じたただだから、杞憂かもしれないけどな。ただ、やっぱりちょっと気になってな」

「……そう、解ったわ。とりあえず今言った全部の情報を集めるわね」

「……自分で要求しておいて何だが大丈夫なのか？ リミットは今から“二十四時間”しかないんだぞ。いくらお前だって流石に……」

「……あまりプロの情報屋を舐めない事ね。何なら今言った事柄に加えて他のマスターの居所も見つけ出して、早々にこの戦争の決着を付けて来てもいいのだけれど？」

「本当に出来そうだから怖いな！！ 流石にそれは止めてくれ。マスターやサーヴァントどころか聖杯戦争の真実諸共、闇に葬りそうだ……。その辺は色々兼ね合いとかもあるから自重してくれ」

「ふふふ……まあいいわ。じゃあ早速行ってくるけど、アナタも気を付けなさい。私を呼び出した事で“ハンディ”を背負ってる状態なんだから。報告は明日の早朝、五時頃になると思っわ」

「分かった。頼んだぞ

“リン”」

I n t e r l u d e o u t

s i d e 小波

「はっ、はっ、はっ………!!」

街中を不可視のまま駆け抜ける。

セイバーに昼食を強請^{ねだ}られたせいで時間を大幅にロスしてしまった。

現在、全力で士郎君の学校である『穂群原学園』へ向かっている。

士郎君とのレイラインを辿ればいいのだから道に迷う心配はない。

ちなみにセイバー用の昼食を作った際にちゃんと自分の分も弁当として用意してきた。

「それにしても……何だかでかい家が多いな。金持ちが多い町なのか？」

地理を確認するため、支障のない範囲で寄り道をして住宅街を駆け抜ける途中、何軒も民家を見てきたがやたらと敷地が広く、大きい家が多かった。

特に洋館なんかはその最たる物だ。

その中の二軒ほどは「どこの貴族の家だ？」と思わず唸ってしまう程の物だった。

ただ、雰囲気になんか少し違和感を感じたが……。

（さつきはリムジンも見かけたし……そういえば士郎君の家も、いやにだだっ広い武家屋敷だったな。やっぱり小金を持ってる人が多く住んでる土地なのかな）

そんな事を考えているうちに、やがて学校の正門と思しき物が視界の正面に飛び込んできた。

「ここが土郎君の学校か……何だか落ち着いた雰囲気の学校だな。
……ん？」

敷地に入ろうと校門に一步足を踏み入れた瞬間、何か妙な感触を感じた。

首を捻りながらも門をくぐる。

その途端、むせるような血の臭いが鼻腔に飛び込んできた。

「ぐっ……！ な、何だこの臭いは！？」

そのあまりの臭いに思わず眉を顰めて鼻を手で覆う。

下手すると涙すら滲んできそうだ。

マスクのせいで手で鼻を覆っても意味がない事に気付き、慌てて手を離して意識を宝具に向け、血臭のある程度シャットアウトする。

これで多少はマシになった。

「はあ……これで何とか。しかし……これは一体どういう事なんだ？」

息を吐きながらも思考を広げる。

いくら何でも学校からここまで濃い血の臭いがするなど、普通なら考えられない。

明らかにここは異常だ。

(そういえば、さっきの妙な感触……もしかして、これは……！)

もしこの推測通りならば、今朝からの懸念が正に大当たりということになる。

そうなれば土郎君の判断ミスは最早重罪レベルだ。

帰ったらセイバーにお説教して貰おう、肉体言語も可で。

「……調べてみる必要があるか。土郎君が気になるけど、とりあえずこっちを優先しよう。来い、『オール・イン・ワン全てに通ずる物』」

バットを鞘ごと背中に顕現させ、引き抜く。

そして、

「ロード、『解析モノクル』」

そう言葉を紡ぎ、バットを奇妙な形をした片眼鏡^{モノクル}へと変化させる。

しかし、

「……あ、しまった。マスクの上からは付けられないや」

自分が『五人の英雄・黒の英雄^{ブラック}』を展開していたため、マスクを付けていた事に気付く。

仕方ないのでマスク部分の宝具具現を一時解除し、むき出しになった顔の左眼の部分にモノクルを付ける。

この状態でも隠蔽状態を保つことは可能だが、臭いをシャットする効果は消え失せる。

そのためモノクルを付ける間は呼吸を止め、装着し終わるとすぐさまマスクを展開し、血臭を遮断する。

(……別の道具にするべきだったな、一秒でもマスクを取るとキツイ。……何て夕チが悪いんだ、これは)

どういつ訳か嗅覚だけにではなく、五感全てに影響が響いてくるのだ(一番ひどく響くのが嗅覚)。

正直、たまったものじゃない。

ちなみにマスクのバイザー越しでもモノクルを付けるのに支障はない。

「さて、何処から当たるか……とりあえず、無難に校舎からかな」

俺の予測が正しければ、これはおそらくサーヴァントの仕業だ。

問題は、この血の臭いの原因は一体何で、どういつ意図を持ったものなのか。

この異常な事態の原因を探るべく、俺は校舎に向かって歩き出した。

「……まいったな、まさかここまで厄介な代物だとは」

校舎の屋上で佇みながら、思わずボヤキが口から漏れる。

校舎を始め、運動場から体育館、果ては弓道場まで、学校の敷地内をくまなく調べて回った結果、頭を抱える結果が出た。

どうやらこの血の臭いの原因は、学校にいくつもの基点を持った結界を張られている事が原因であるようだ。

結界の基点を見つけるのに、『解析モノクル』は非常に役に立った。

『解析モノクル』はその名の通り、対象物の情報を詳細に解析する事が可能な特殊なモノクルで、レンズに映った映像を分析する事で巧妙に隠蔽されたものを見つけ出す事も出来る。

まず建物内で血臭の異様に濃い場所を見つけ出し、その周囲を『解析モノクル』で分析してみた。

するとその場所からは何らかの魔法陣らしきものが見つかったのだ。

しかもそれは一つではなく、学校の建物のあちらこちらに同じ物がいくつも存在していた。

その数、実に二桁以上。

この事からこの学校には結界が張られていて、その魔法陣は結界の基点だと判断出来た。

数の多さと位置関係からすると、学校の敷地全体をスツポリと覆ってしまえる規模。

そして一番厄介な所は、この結界の性質だった。

『解析モノクル』で基点の情報から術式を解析してみたところ、詳細までは解らなかったものの、これは吸収型の結界だという事が分かった。

『吸収型結界』

文字通り結界内から特定のものを『吸収』する代物。

そして何を吸収するかというと……、

(人間の魔力を吸収する結界……か。しかも遅効性ではなく即効性発動すれば一般人なら一瞬で骨の一片すら残さず溶かされ、魔力に還元される。……道理で血の臭いがする筈だ)

ギリッ、と奥歯を噛み締める。

ここは『血の牢獄』と化している。

怪物の腹の中、と言い換えてもいい。

既に結界の影響も現れ始めている。

俺は始めこの学校を『落ち着いた雰囲気为学校』だと思った。

だが校舎内を歩き回り、生徒の顔を見て行くうちに段々と違和感を
感じ始めた。

生徒の誰も彼も、眼に光が宿っていなかったのだ。

明らかに生氣のない人間が多く、唐突な気だるさや眠気に襲われて
いる生徒もいた。

つまりここは『落ち着いた雰囲気为学校』ではなく、『生氣を吸わ
れた生徒の過ごす学校』という事。

(明らかに発動寸前だな……いや、一度術式が破壊された跡があつ
たから、引き延ばされながらもやっとここまで来た、ってところか)

おそらくリンあたりがやったのだろう。

あの娘の性格からして、こんな性根の腐ったような結界を自分のテ
リトリーに仕掛けられたら盛大に腹を立てるだろうし。

意趣返しに出る様は想像に難くない。

「……もう放課後になっちゃったな」

フェンスの向こう側を見る。

オレンジ色に変わった太陽が、西の地平線に向かおうとしていた。

とその時、

「……ん？」

下の階で、何かが脈動するのを感じた。

side 士郎

足が震える。

喉が渴く。

身体が言う事を聞いてくれない。

「……ここまで腹が立ったのは初めてよ。衛宮くん？」

目の前の、修羅の如き憤怒のオーラを醸し出し、階下の廊下に居る俺を睨み据える遠坂凜の眼力によって、身体中の筋肉が委縮してしまっていた。

「本当に呆れたわ、まさかサーヴァントも連れずに学校にノコノコ来るなんてね」

俺を射抜く眼光と、澄んだ声に含まれる威圧感。

気押しされそうになりながらもどうにか意志を奮い起こし、反撃を試みる。

「い、いやだつてセイバーは霊体化出来ないし……学校に連れてくるわけにもいかないだろう？ それに魔術師なら人目のあるところ
で騒ぎは起こさないだろうし、襲撃される心配もない」

だがその拙過ぎる反撃は、

「ふうん……じゃあ聞くけど、今ここにその人目はあるのかしら？」

彼女の放ったカウンターに粉微塵に粉碎される。

「えっ……」

周りを見渡す。

そこには人影など一つもなく、それどころか外からの喧騒すら耳に響いては来ない。

我が目に人は映らず、耳に響くは静寂のみ。

「ようやく気付いたようね。ここに人目などないという事に」

遠坂はそう言うと、おもむろに左腕の袖を捲り上げる。

その左腕には奇妙な文様が浮かび上がり、淡く発光していた。

それは魔術師の家系が代を重ねる毎に子孫に伝え残してきた、過去からの遺産。

（魔術……刻印？ 遠坂のヤツ、何を……？）

「はあ……せつかく教会に連れて行って現状を深く理解させてあげようとしたのに、それすら無駄にされるとはね……。衛宮くん、忠

告した筈よね？ 『今度会ったら敵同士』って」

そう言っただけで彼女は左手を俺に向ける。

そして、

「衛宮くん、あなたはここで消えなさい」

言葉と共に左手の指を拳銃の型へと形作り、俺目掛けて『ナニカ』を放った。

「待ちなさいっ！！ 悪いようにはしないから！ このっ、このっ
！！」

「だったらまずはその狂悪すぎる射撃を止める、遠坂！！ うわっ
！ かすった！ かすったぞ今っ！！」

今現在、咄嗟に危険を察知した俺に初撃を躲された事で完全にキレた遠坂と、全階の廊下を舞台に絶賛鬼ゴッコ中だ。

遠坂は俺に向かってガンドと呼ばれる、呪いを凝縮した一種の魔弾を機関銃の如く乱射しながら逃げ回る俺を追跡（追撃？）している。対して俺は持っていた鞆と制服の上着に『強化』の魔術を掛け、それが幸運にも成功。

それらを使って魔弾の嵐をひたすら防御し、あるいはその間隙を縫うように動き、全速力で廊下を駆け抜けていた。

あの夜同様、元々成功確率が零に等しい『強化』をいとも容易く成功させた事に疑問を感じないでもないが、この際それを考えるのは後回しだ。

（遠坂のガンドを一発でも喰らえばアウトだ！ あんなものをマトモに喰らえば、冗談抜きで昇天間違いなしだ！！）

逃走の途中、ふと廊下の曲がり角の壁を見やった時、ガンドを喰らったであろう壁の痕が尋常な物ではなかった。

ガンドの効用はあくまで病気を悪化させるもので、ごく間接的なものだ。

本来なら人体のみに効果を齎し、他の物質には干渉しない筈のガンドで、コンクリートの壁にまるでガトリング砲の一斉掃射でも受けたかのような凄惨な爪痕を残していた。

魔力の密度が半端じゃなく高い。

あんなモノをマトモに喰らおう物なら昨夜のバーサーカーよろしく、廊下に脳漿をブチ撒ける事になる。

間違っても止まってなどやれない。

(くそつ、もつと真剣に二人の忠告を聞いておくべきだった!!
俺の馬鹿野郎!!)

今更悔やんでも仕方がないと思いつつも、あの時の自分に蹴りを入れてやりたい衝動に駆られる。

こんな温い認識で、聖杯戦争を生き残れる筈などないだろうに。

十数段ある階段を一足で飛び降り、再び駆け出そうとしたところでふと空き教室のプレートが目に入る。

これ幸いとばかりにその教室に飛び込み内側から扉に鍵をかけ、ついでに開いていた反対側の扉も同じく閉めて施錠したところで、

「!?!? しまった!?!」

己の失策を悟った。

その教室に漂う気配が一変し、外界と切り離されたという認識が頭を駆け巡る。

「まさか、結界か!？」

遠坂が結界でこの教室を隔離、いわば魔術的密室に作り変えたのだ。

(もしかして……ここに誘導されたのか!? くそっ!)

一縷の望みを抱いて窓の方へと向かうが、そこも完全に外との繋がりが断たれていた。

外の景色は見えているが、おそらく窓を叩き割る事は出来ないだろう。

(八方塞がりか……仕方ない)

覚悟を決め、急いで手近にあった机椅子を適当に倒して簡易バリケードを作り、自分はその奥に一つの机を上を前の面を前にして寝かせ、

「『トレース同調・開始』」

その机に『強化』の魔術を掛けて強度を上げ、その陰に伏せた。

結界を張って袋のネズミにした以上、やる事は一つだ。

出来ればバリケードの方にも『強化』を掛けたかったが、また成功するかどうか分からないし、それ以前に物量が多く、明らかに魔力が足りないし掛ける時間もない。

己の才能のなさに泣きたくなる。

やがて教室の空気が徐々に冷たくなってきた。

外界と断絶された筈の教室内に、扉の方から濃密な殺気が伝わってくる。

(……いよいよ来るな。仮にこれを防いだとしてももう後がない。

遠坂に見つかった時点で「詰み」だったか……)

数瞬の後に来るであろう、ガンドの嵐に備えて机の陰に深く身体を入れ込む。

と、その時、

「だから行くなって言ったのに……帰ったら説教だ、士郎君。ロド、『騎士の盾』」

そんな声が聞こえ、ふと顔を上げようとした次の瞬間、教室内に鼓膜を破らんばかりの轟音と共に大量の魔弾が飛び込んで来た。

「~~~~~!!」

机の陰で身を小さくし、必死に耳を塞ぐが耳を抑える掌を超えて轟音が鼓膜を揺さぶってくる。

俺の鼓膜は既に許容範囲を超えていた。

あと少しで気絶しそうになった所で、突如嵐のような轟音が止む。

教室に静寂が戻り、今度は別の意味で耳が痛くなってくる。

「……うわぁ、やり過ぎだろ遠坂」

机の陰から顔を出すと、教室は悲惨な事になっていた。

バリケードは木っ端微塵に崩壊、教室の壁・床・天井には幾つもの銃痕（？）がクツキリと刻まれていたが、身を隠していた机だけは何故か傷一つ付いていなかった。

その答えはこの惨状のただ中、俺のすぐ目の前にあった。

「……はあ、流石に音がキツかったな、鼓膜が破れそうだった」

俺の前に巨大な鉄の盾を片手に構え、やれやれと疲れたように肩を
竦める黒いヒーローがいた。

結界は、いつの間にか解かれていた。

side 小波

「……やれやれ、何とか間に合ったな」

変身を解き、元のユニフォーム姿に戻って嘆息する。

一応、万一の襲撃に備えて盾だけはそのまましてある。

あの後、すぐさま下の階へ駆け下りた俺が目にした物は、リンが放
つ漆黒の弾丸を鞆で防ぎながら廊下を爆走する土郎君の姿だった。

遅かれ早かれこうなるだろうと思っていたが、まさか初日にしてその光景を拝む事になるとは思わず、その様に半ば呆れてしまった。

とりあえず反省と罰の意味も込めてしばらく放置する事にし、追いかけてつ安全地帯から状況を見守る事にした。

やがて彼が空き教室に飛び込んだのと同時に、士郎君が飛び込んだ反対側の扉から同じ教室に入ったのだが、彼の叫んだ言葉でリングが次に何を狙って来るのかが予想できた。

そして士郎君がバリケードを築き始め、扉の向こうから殺気が伝わって来た事で予想が確信に変わり、咄嗟に彼の前に立って盾を展開して庇った、という訳である。

「えっ……って小波！？ 何でここに！？ っていつか今ヒーロー……ええっ!？」

黒いヒーローの衣装が消え、正体が俺だと解ると明らかに混乱した様子で士郎君が近寄って来た。

そして捲し立てられる質問の数々。

「まあ落ち着いて士郎君……ちゃんと説明するから。っと、その前に……」

そう一言言い置いて形作る右の握り拳。

そしてそれを土郎君の脳天目掛けて勢いよく振り下ろした。

ドゴン、とイイ音を立てる土郎君の頭蓋。

思わず彼はその場に頭を押さええて蹲る。

「~~~~っつづつ~~~~っ！ いきなり何し」言わなきゃ分からない？」「……………」

自覚はあったのか、思わず出しかけた抗議の声を口を嚙む事^くで取り消す土郎君。

「……………あ、その……………悪かった。せつかく忠告してくれたのに……………」

「……………まあ、俺はともかくとしてセイバーにも謝るんだね。心配して一番割を食ったのはセイバーなんだから」

「ああ……………」

立ち上がりながらも顔を下に俯けたまま、彼は小さな声で返事をする。

真剣に反省しているようだ。

「まあ、今はそれはさておいて……とりあえず外に出ようか。流石にこれ以上待たせる訳にもいかないし」

そう言つて扉の方へ視線を向ける。

「あ、ああ……それはいいけど、その前に一つだけ、聞かせてくれ。あの正義の味方みたいな格好は一体何だったんだ？」

「ああ、時間がないから詳しい説明は後でするけど、一言で言つとあれは俺の宝具で、あの姿になった時は姿を隠せるんだ。この能力を使つてこっそり士郎君の後を追つて学校に来た、という訳。とりあえずこれでいい？」

「……ああ、今はそれでいい」

いまだにどこか釈然としない表情をしながらも、一応の説明に納得してくれた。

(……どうしたんだろう、何か変だな?)

俺は彼のその表情に、何とも言えない違和感を感じた。

この時の疑問が氷解するのは、この時からしばらく経った頃だった。

「ようやく出てきたわね、衛宮くん……って、小波！？　なんで貴方がここに居るのよ!？」

士郎君を伴って廊下に出ると、予想外の人物の登場に驚愕の表情をしたリンが唐突に叫び声を上げた。

気持ちは解るが、仮にも『常に優雅たれ』の家訓を背負う身なら少しは冷静になったらどうだろうか？

「居ちゃダメなのか、リン？　マスターがサーヴァントを連れてくるのはごく当たり前の事だろう？　そっちこそアーチャー……は、連れてないみたいだな、気配を感じないし。アイツに何かあったのか？」

「ッ！　……別に、貴方に説明する必要があるのかしら？」

「まあ……ないな。リンが言った通り、俺達は今敵同士なんだから」

「……………」

リンの周囲にサーヴァントの気配が感じられなかった事を疑問に思い、その事について尋ねてみるとリンは途端に先程までの動揺を引っ返め、まるで能面を被ったように無表情になった。

しかしどれだけ表情を隠そうと、彼女のその姿勢と雰囲気は何よりも雄弁に物事を語っている。

どうやら何か思惑があって、アーチャーと別行動を取っているようだ。

(リンほどの魔術師がサーヴァントと別行動を取る……………よっぽどの事だな、多分。おそらくはアーチャーに何か重大な事をさせている……………いや、もしくは……………)

明らかに不審なリンの反応を基に思考を巡らせていると、スツと士郎君が俺の前に立ち、リンと相對する形になった。

「遠坂、昨日も言ったけど俺はお前と争う気はないぞ。まあ、さっきまでの争うというより一方的に追い立てられたって感じだけど」

「呆れた……………まだそんな寝言言ってるの？ あのね衛宮くん、わたし達は……………」

厭戦の意思を示す士郎君に対し、深々と脱力したリンは言い返そうとするが、

「キヤアアアアアアアッ!!」

「「「!?!?!」」」

絹を引き裂くような悲鳴が下の階から廊下に響いてきた事で、リンの言葉は中断を余儀なくされた。

第九夜 「結界とガンドと野球少年」 (後書き)

士郎の死亡フラグを破壊した!!

筋力・技術・素早さが上がった!!

『ブロック』が身に付いた!!

ステータスが更新されました。

第十夜 「二人の美女と野球少年」 (前書き)

戦闘シーンの描写は難しいです。

第十夜 「二人の美女と野球少年」

Interlude 10 - 1

side アーチャー

「さて……貴女は何者だ」

人気の全くない路地裏に自分の声だけが異様に響く。

今朝、霊体化して凜と共に学校へと向かう途中、妙な雰囲気を感じた女性を見かけた。

その女性に何か引っかかる物を感じた私は、凜と別行動をとり、彼女を尾行する事にした。

しかしその女性は異様に気配に敏感なようで、少しでも目を離せばあっという間に撒かれてしまいそうですらあった。

霊体化して尾けていたのでこちらの姿を見られる危険性はなかったが、見失ってしまったのは元も子もない。

苦労の末、彼女が人気の少ない路地裏に入ったのを見届けると、即座に簡易型の結界を張り彼女の背後に回って実体化、首筋へ夫婦剣の片割れを突き付けた。

「……………」

女性は黒いコートを身に纏い、長い金の髪を首元で無造作に束ねている。

そして彼女は前を向いたまま佇んでいるが、その背中からは微塵の動揺も感じられない。

その様に警戒を一段階強める。

「…………… やつと出て来たわね、今朝から視線は感じていたわ。私を見つけただけじゃなく、尾行して尚且つ背後まで取ったのは素直に感心するけれど、女性に取る対応じゃないわね、これは。そこは減点よ」

「ふむ、耳が痛いな。しかしそちらに原因があるのだからこの対応も致し方ない、という点は理解して貰いたいのだが。それで先の質問に戻るが、貴女は何者かね？」

殺気をぶつけるこちらに対し、前を向いたまま飄々と言葉を紡ぐ彼女。

そのどこまでも自然体で、しかし欠片も油断などしていないその様相は正直、感嘆に値する。

首筋に突き付けた右の陽剣『干将』に僅かに力を込め、先程より強めに刃を押し付ける。

「そうね、答えてあげてもいいのだけど……」

彼女がそう呟いたその瞬間、その背中から凄まじいまでの威圧感が噴き出してきた。

「　　ッ!？」

あまりの圧力に思わず剣を引き、彼女から距離を取る。

しかしそれは失策だった。

彼女は即座に前方に駆け出しざま、クルリとこちらに振り返る。

整った目鼻立ちに肌理細やかな白い肌、そして強い意志を秘めた鋭い双眸。

女性の割に高い背丈も相まって、まさに極上の美女だ。

しかしその美女の手には、

「……まだ、こちらの事を知られる訳にはいかないのよね、残念だ
けど」

どこから取り出したのか、鈍い輝きを放つ二丁のサブマシンガンが
握られており、そしてその銃口がこちらに向けられていた。

「チイツ……！」

銃口が火を吹くと同時に、右横の角に身を隠す。

魔力の籠っていないただの銃ならば、例え当ろうとサーヴァントで
あるこの身には何ら効果を及ぼさない。

しかし彼女の出したその銃を見た途端、猛烈に嫌な予感に襲われて
咄嗟に身を隠した。

そしてそれは正解だった。

ふと視界に自身の纏う聖骸布の裾が目飛び込んできた。

が、その惨状に驚愕を覚える。

「……バカな、サーヴァントに干渉するだど!？」

マルチーアの聖骸布の裾に、幾つもの穴が空いていた。

身を翻した時、いまだその場に留まっていた裾に銃弾がいくつか当たっていたのだ。

本来、サーヴァントに干渉できるのは神秘を纏った存在か、余程の魔力が込められた物のみ。

すなわち強力な魔術的代物か、元が霊体であり、存在そのものが神秘の塊である同じサーヴァント位にしかまともに干渉出来ないのだ。

しかし彼女からはサーヴァントの気配が全く感じられない。

かといって見る限りでは魔術師でもないようだ。

(一体どうなっている……!? クツ、考えるのは後だ。まずはこの状況をどうにかするのが先決か)

ここは建物の密集する路地裏。

簡易の物だが人払いの結界を張っているので、誤って一般人が入り込む心配はない。

だから思い切った行動を採る事が可能なのだが、ここで場所が路地裏という点が自身にとってネックになってくる。

アーチャーたる自分の最良の攻撃手段が弓である以上、この狭い路地裏で扱う事は出来ない。

他の方法がない事もないが、魔力の消費が激しい上に威力が大きすぎるため、無力化には不向きでこちらも却下。

壁を駆け上がって建物の屋根から狙撃する、という選択肢もあるがその場合、登っている間に逃げられてしまうだろう。

尾けている間に解ったのだが、彼女の隠行は神技に迫る物がある。

見失ってしまったえばその時点でアウトだ。

そういう点では小さく取り回しの容易な、彼女の小型サブマシンガンはこの場所では非常に有利だ。

自然、接近戦を挑むしか選択肢がないのだが、そのためにはあの銃弾の嵐を掻い潜る必要がある。

いまだに間断なく銃撃が続いている所を見ると、どういった理屈なのかは分からないがあサブマシンガンに弾切れという概念はないようだ。

(強行突破しかないか……面倒な。だがやるしかない、か)

この間僅か数秒の思考。

自身が使える数少ない、そして異端な『魔術』。

それで以て、

「　　こんな物が。さて、行くぞ！」

全身を覆える位に巨大な盾を造り出し、即座にそれを前面に翳しつつ銃弾の雨に飛び込む。

大量の弾が盾を打つが、幸いにして盾が破壊される事はなかった。

「ふっ………!!」

彼女との距離を自分の間合いまで縮めると盾を前方に投げつけ、両手に双剣を創り出す。

これでチェックメイト。

そう思った。

しかし、

「　　かかったわね」

そのどこか笑いを含んだ声が聞こえた事で、己が二度目の失策を悟る。

駆ける勢いは止められず、咄嗟に双剣を身体の前方でクロスさせて防御姿勢を取ったその瞬間、

「シッ……!!」

いつの間にか空手になっていた彼女の左手が盾を弾き、続いて繰り出された掌底が身体の前に翳した双剣を捉えた。

「ぐっ……!!？」

異様に重い一撃に吹き飛ばされながらも何とか踏ん張り、地を滑りながらも転倒を防ぐ。

即座に双剣を構え直す、どこか剣の感触が妙だったので前方に向けた剣に目を移すと、

「なっ……!？」

幾つもの亀裂が走り、いつ砕けてもおかしくないほどに刀身が破壊されていた。

これでは完全に使い物にならない。

(まさか贗作とはいえ『干将・莫耶』がここまで破壊されるとは……)

しかも『強化』の魔術を使って質を底上げしていたのにも拘わらずにこの様では、もはや苦笑すら出て来ない。

前方に視線を移すと、口元に微笑を浮かべた彼女が無手のまま、構えもせずに悠然と佇んでいる。

「残念だったわね。銃は義妹いもつとに口やかましく言われて持たされただけで、こっちはいわば『副業』。本当は格闘戦が一番得意なのよ……さて、覚悟はいいかしら?」

彼女がそう言い放った途端、視認出来そうなほどの凄まじいオーラが彼女の身体から溢れ出し、身体に鉛でも巻かれたかのような重いプレッシャーが押し掛かる。

「……………ッ！」

プレッシャーを無視し、即座に両手の夫婦剣を修復しつつ身構える。

が、

「ハッ！」

「がはっ……………！」

いつの間にかこちらの懐に潜り込んだ彼女の拳が、ガードをすり抜けて鳩尾に突き込まれた。

途轍もなく重い一撃。

肺の中の空気が全て強制的に吐き出される感触が気管を熱くする。

女性の身でここまでの威力を出せる実力に、感嘆を通り越して畏怖すら覚える。

しかし彼女は止まらない。

流れるような動きから蹴り・突きの嵐が次々と放たれこちらの肉体を損壊せしめる。

無慈悲に、そして冷徹に。

人体急所に的確に叩き込まれる機関銃の如き乱撃。

双剣を繰り、防御に徹しようとも相手はこちらの防御を容易くすり抜け連撃を放ち、時には防御の上目掛けて凶撃を放つ。

こちらの防御など紙同然と言わんばかりの一撃は防御を容易く破壊し、容赦なくダメージを蓄積させる。

攻勢に転じるなど「不可能」の一言。

身体は既に満身創痍だ。

一方的な攻防がしばらく続き、彼女は徐に身を沈めると、

「フツ………！」

全身をバネのように弾ませ、強烈な回し蹴りを放った。

「ぬっ………！」

しかしこちらとて英霊たる身。

攻撃を唯喰らっていた訳ではない。

蹴りの直線上に双剣を交差させてあえてその一撃を受け、その威力を利用して後ろに飛び彼女と距離を取る。

身体の各所が悲鳴を上げるが、意志でそれをねじ伏せ膝立ちの状態から立ち上がり、構える。

対して彼女は息一つ乱さず、ゆったりと腕を下げた体勢のまま佇んでいる。

「へえ……まさかここまで喰らって尚立ち上がれるなんて。その頑丈さには素直に感心するわ」

「……生憎と、この身は剣で出来ているのでね。容易く折れはせんよ」

微笑む彼女の口から飄々と放たれる言葉に、皮肉で以て返答をする。

言葉通り、この身はまだ折れてはいない。

まだここからだ、と自身に言い聞かせ気力を充実させる。

すると彼女はごく自然に懐に手を入れ、

「もう少し付き合っただけなのに、こっちにも時間がないの。じゃあね、『同業者』さん？」

そう言い放ち、抜く手も見せずに地面に何かを投げつけた。

次の瞬間、地面から光が爆ぜる。

「ぐっ　　閃光弾か!？」

咄嗟の事で目の防御が間に合わず、視界が白く塗り潰される。

キィィ　、ンと耳障りな音が同時に響き鼓膜をも揺さぶられる。

どうやら音響効果も込みの代物のようだ。

やがて光が収まり、視界が元に戻るとそこにはもう彼女の姿はなかった。

慌てて気配を探るが何も感じ取ることが出来ない。

物の見事に撒かれてしまったのだ。

「……………クッ！　全ては彼女の掌の上だった、という事が」

拳を強く握りしめ、天を仰ぐ。

我知らず、歯がギリギリと音を鳴らす。

あの銃撃の間に逃走しなかったのも、接近戦に持ち込むための布石であり誘い。

そして接近戦に持ち込んでこちらの精神を高揚させ、思考を狭めた所で隠し玉の閃光弾。

追おうとしたところでこの体たらくでは追跡など論外だ。

最初から殲滅を目的とせず、完全なる撤退を主眼に置いた戦闘運び。思えば路地裏に足を踏み入れた時点で、この結果は確定していたのだ。

おそらく彼女はこちらの手の内を知っていたのだろう。

そうでなければ末席とはいえ英霊相手にこんな芸当をこなすなど、到底不可能だ。

「『同業者』……と言ったな。どついう意味だ……?」

思わず口を突いて出たその言葉は、人影のない路地裏にいやに虚しく響いた。

I n t e r l u d e o u t

s i d e 小波

悲鳴を聞いたその瞬間、二人に先んじて階下へと駆け出す。

「お、おい小波！？ 待てって！」

「ち、ちょっと待ちなさい！ 今人避けの結界を解くから……！！？」

後ろから二人の声が聞こえて来たが、それらを無視する。

今の悲鳴に何か不吉な物を感じたからだ。

一秒でも時間が惜しい。

そしてトップスピードを維持したまま、一階へと駆け下りた。

「どこだ……!?!」

悲鳴の出所を探す。

一階の廊下をグルリと見渡すと、何故か開けっ放しの非常口の前に制服姿の女の子が倒れていた。

「おい、大丈夫か!?!」

急いで駆け寄り、抱え起こすとその女生徒は気を失っていた。

しかし、その顔色は蒼白だ。

(……………? 何か変だな? 少し調べてみるか……………)

不審に思い、さっきバットに戻しておいた宝具を背中から引き抜き、

「ロード、『知識の教典』」

その言葉を紡ぎ、バットを一冊の本に変化させた。

この本は『知識の教典』という魔導書で、中には基礎的な魔術が網羅されている。

そして魔術を使用する際の媒体としての機能も兼ね備えている代物だ。

士郎君やリンと同じく、俺自身も『とある理由』によって魔術を扱えるのだが、行使するには媒体が必要なので、こうして宝具でいち媒体を造り出さなければ魔術が使えないのだ。

「どれ……『術式展開・解析』。……なんだこれ！？ この娘、魔力が空っぽだ！」

再び横たえた彼女の額に指を当て、魔導書を介して彼女の身体に『解析』の魔術を掛けてみると、何とその娘の身体から魔力がすっかりなくなっていた事が分かった。

おまけに血液の量も少なくなっている。

おそらく血を抜かれると同時に魔力も根こそぎ奪われたのだろう。

魔術と血液には密接な関係があるのだし。

（まずいな……このままじゃこの娘死ぬぞ。何か魔力を回復させるものは……）

一般人にも発現は出来ないが魔力がある。

しかし一般人が持つ魔力というのはある意味で生命エネルギーと同意なので、底を尽きれば生命活動に支障が生じ、最悪の場合は死に至る。

魔術師にもほぼ同じ事が言えるが、一般人と違って魔力の発現ができ、制御が可能である分一般人のそれよりはリスクは格段に少ない。すぐに魔力回復の道具があったかどうか記憶を探る。

別に道具がなくても出来ないこともないが、それは倫理的に非常にマズイ行為なので最低でも当人の許可が必要だ。

意識がない以上勝手に処置を施す訳にもいかないのです、これはどうしようもなくなった時の最終手段とすべきだ。

頭を捻って思考に埋没していた次の瞬間、非常口の向こう側から唸りを上げて何かが飛来してきたのが視界の片隅に映った。

野球選手にとって視野を広く保つのはごく当たり前の事なので、今回はそれが幸いした。

「　　ッ!？」

反射的に閉じた魔導書を盾代わりにそちらに翳すと、それは分厚い魔導書の真ん中を貫きながらも途中でピタリと止まった。

その貫いた物をよく見てみると、

「……釘？ いや杭か？」

鉄灰色の、無骨な杭を模した短剣のような物が刀身の半ばまで魔導書に突き刺さっていた。

よく見ると柄の部分に鎖が付いており、それが非常口の向こうまで続いている。

「……鎖？ 何でこんな物が……う、うわっ!？」

一体なぜ鎖が付いているのか。

ふと頭を過った疑問に気を取られていると、突如非常口の向こう側にグイと強く引っ張られる感触がした。

慌てて魔導書を手放した事で向こう側に引き摺られる事はなかったが、その結果『知識の教典』は非常口の向こう側へと持っていかれてしまった。

「ちっ、『リロード』!」

一言呟くと、背中の中の鞘にバットがどこからともなく現れ、そこに収まる。

『オール・イン・ワン全てに通ずる物』で一度変化させた物は、『リロード』のキーワードで解除が可能だ。

その際、自分の身からバット（あるいは変化させた物）を離していれば自動的に鞘に戻ってくる。

元々この宝具はバットと鞘で一組の代物なので、例えばバット（変化させた物）が破壊されても鞘さえ無事ならすぐさま再生が可能なのだ。

勿論逆も然りだが、両方が破壊されれば修復には相当な時間が掛かってしまう。

ちなみに拳銃等で弾切れを起こした際にも、『リロード』のキーワードで再装？が可能なの仕様になっている（勿論同じワードで解除も可能、言葉に込める意味によって効果が変わる）。

（いるな……サーヴァントが）

非常口の外から感じられるサーヴァント特有の気配に、肌が粟立つ。

「はっ、はっ……や、やっ

と追い付いた」

「はっ、はっ……そ、その娘なの？ あの悲鳴を上げたのは」

その時丁度、息を切らしながら二人がこちらに追い付いてきた。

ナイスタイミングだ。

「二人とも、この娘を頼む！ 外に敵……サーヴァントがいるんだ。それと、その娘は魔力が空で死にかけてるから処置をお願い！ 特にリン！ あとここを絶対動くなよ、二人も庇いきれないからな！」

二人にそう言い置いて、非常口の向こうへと駆け出す。

「っつて、またか!!」

またも置いて行かれた二人の、シンクロしたツツコミが冴え渡るがキツパリと無視する。

士郎君には釘を刺しておいたし、リンはああ見えて冷静な判断が出来るから心配はないだろう。

しかし二人の御蔭で適度に心に余裕が生まれた。

さっきまでの緊張感がいい感じに解ほくれてきている。

(……ダダ漏れの気配といい、さっきの牽制といい、明らかにこつちを誘ってるな。先手を打たれている以上、例え罠だとしてもこつちは誘いに乗るしかない、か)

外へと飛び出すと、その先の林の中から強く気配を感じる。

そこに踏み込む前に左手の中に絵を顕現させ、

「変身、^{ヒーロー}『五人の英雄・赤の英雄』！」

絵を握り潰し、深紅のスーツを纏ったヒーローへと変身する。

『^{ブラック}黒の英雄』とほぼ同じ構成だが細部の色合いが違う。

V字のアンテナが紫に、マフラーは黄色になっている。

「続けてロード、『日本刀』、『小太刀』！」

そして続けざまにバットを引き抜き、今度は複数変化。

右手に日本刀を、左手に小太刀を持つ。

意識を二つに通して情報を読み取り、通常のものより性能(特に強度)が上がっている事に気付いた。

特性である『性能変動』が上手く働いたのだ。

これは素直に有難い。

「よし、行くぞ！」

気合を入れ、林の中へ一歩足を踏み出す。

さっきからジャラジャラと鎖の音が、林のそこかしこから響いてきている。

おそらく敵は木から木へと飛び移りながら、さっきと同様に短剣でこちらを攻撃する隙を窺っているのだろう。

(……焦るな、まずは相手の出方を見る。幸い気配で位置は解るが、スピードが速すぎて追ってもおそらく捕まらない。ひとまず受けに徹して、チャンスを待つんだ)

逸る気持ちを抑え、自分の周囲360度全てに意識を配る。

両手の刀はダラリと下げたままだ。

下手に構えを取るより、こちらの方が対応しやすい。

そして、

「……ッ！ 後ろだっ！」

後方から、唸りを上げて短剣が飛来するのを感じ取った。

即座に振り返り、刀身が短い分、防御に秀でた小太刀で横薙ぎに弾く。

ガキンツ、と鈍い音が響き、弾かれた短剣は弧を描いてあらぬ方向へ吹っ飛んでゆくが、柄に付いた鎖によりすぐさま軌道修正、そのまま木々の間へと消え去った。

そしてすぐさま別方向から繰り出される短剣。

それを今度は右手の日本刀で弾く。

鎖によって引き戻される短剣。

しばらくその消極的な攻防が続く。

「……ふっっ」

息を吐き、徐々に固くなる身体を脱力させながらも集中は切らさない。

既に都合二桁以上短剣を弾いているが、『性能変動』の恩恵で両刀には刃毀れも湾曲もない。

やがて段々と相手の攻撃が単調になってきた。

そして好機が訪れる。

「……来た、ここだっ！！」

相手の気配と短剣の軌跡が一直線に重なる。

今までは投擲された後には既に移動していて、短剣と敵の位置関係がズレていたのだが、今回はピッタリと直線上だ。

いつまで経っても変わらない戦局に、相手も焦れて来ていたようだ。

即座に手に持っていた日本刀と小太刀を投げ捨てる。

そして、

「見切った！ そおりゃあああっ！」

身体を半身はたみにする事で短剣を避け、すぐさま後ろに付いている鎖を掴んで思い切りこちらに引っ張った。

筋力がE+しかない普通の状態ならば、こんな人間の一本釣りみたいな芸当は出来ない。

しかし今回は可能だ。

『赤の英雄』を纏っているのだから。

『赤の英雄』の特徴は、『五人の英雄』の中で最もステータスのバランスが取れている事。

その効果は筋力・耐久・敏捷のBランクまでの上昇。

能力だけならセイバーと同等以上だ。

加えて敵は木の枝を飛び移りながら攻撃していた。

当然ながら足場は不安定。

空中に浮いているも同然だ。

よってさしたる抵抗もなく、鎖の先に居るサーヴァントがこちらに向かって飛んできた。

投擲する以上前方に遮蔽物があつては不都合なため、短剣の軌道の一直線上にいたこの時、何の障害物もない。

「よし！ 捕まえた……って、え？」

こちらに向かってきたサーヴァントに自分からぶつかっていき、自由
に身動き出来ない空中で捕らえ、そのまま地面に組み敷く。

しかし仰向けに拘束したサーヴァントの、一種異様な出で立ちを見
て思わず目を見開いた。

そのサーヴァントはボディコンシャスな際どい格好をした、紫の長
い髪をした女性だった。

おそらく結構な美人なのだろう。

何故「おそらく」なのか。

それは

「……………」

押さえつけられても何も反応らしい反応を示さないその女性は、両
目を覆うほど大きく、そして異様な雰囲気を持つ眼帯を身に付けて
いたからだ。

第十夜 「二人の美女と野球少年」 (後書き)

『粘り打ち』が身に付いた!!

筋力・技術・素早さ・変化球が上がった!!

ステータスが更新されました。

次回の更新はやや遅れます。

第十一夜 「魔眼と同盟と野球少年」 (前書き)

お待たせ致しました。

忙しいプライベートの合間を縫って少しずつ書いています。

資格を取るのって面倒ですね……。

勉強と準備に大童おおむすこです。

よって今回はやや短めです。

第十一夜 「魔眼と同盟と野球少年」

side 凜

「ふう、これでよしと」

大きく息を吐いて無意識に入っていた力を抜く。

たった今、小波から任された娘の処置が終わった。

単純に魔力が枯渇してただけであり、それ程時間も経っていないかった事もあって幸い命に別条はなかった。

少なくなった血液は自然治癒に委ねることにする。

「なあ、遠坂。本当に大丈夫なのか」

と、隣で見ていた衛宮くん「ハッ」がそんな戯けた事を訪ねてきた。

「なによ、わたしを信用できないっての？ 安心しなさい、魔力純度の高い宝石を使って魔力を補充したんだから何も問題はないわ」

「いや、そっちじゃなくて、小波の方だ」

「……あ」

そういえばそうだった。

小波は今、たった一人で敵サーヴァントと戦闘をしている(らしい)のだ。

彼の慌てた口振りからすると、治療ばかりにかまけてはられない状況のようだ。

処置が終わった以上、こちらも今すぐアーチャーを呼び戻しておいた方がいい。

念話を用いて従者に連絡を取ろうとしたその時、

(……凜)

正にドンピシャのタイミングで向こうから連絡が来た。

しかし、

(すまない、逃げられてしまった……正体も何も分からず終いだ)

続けて放たれたその言葉に目を見開く。

まさかサーヴァントを撒けるヤツがいたとは驚きだ。

しかもアーチャーの声は、心なしか張りが無い。

おそらく何か手酷い目にでも遭わされたのだろう。

そのあまりの非常識さに声を上げたくなるが、今はこちらを優先しなければならぬ。

湧き上がる激情を鎮め、冷静に言葉を紡ぐ。

(そう……詳しい報告は後でいいわ。とにかく今すぐこっちに戻ってきて。学校にサーヴァントが現れたらしいの)

(何!? ……了解だ、すぐに戻る。しかし、何故すぐに令呪を使って呼び戻さなかった? それに『らしい』とは?)

(今、小波が迎撃に出てるのよ。サーヴァントが居るって言ったのは小波だし、わたしはサーヴァントとは離れた位置に居るから襲われる心配は今のところないわ。それに令呪もあと二つしかないからね。無駄遣いはしたくないの)

(……今一つ状況が掴めないが、解った。そこが安全ならば不用意にそこから動くな)

その言葉を最後に、念話はプツリと途切れた。

あまりの展開の性急さに頭を抱えなくなるがグッと堪える。

まだ気を抜いてはいけない。

敵が近くに居るのだから。

「どうしたんだ、遠坂？ 何か深刻そうな顔してたが」

「……いいえ、何でもないわ」

隣の衛宮くんが、心底心配そうな声で尋ねてきた。

こんなへっぴり魔術師に心配されるとは。

我ながら度し難い。

その時ふと、昨夜から懸案していた事柄が頭に浮かんできた。

考えてみれば、今が丁度いいタイミングかもしれない。

幸い当人が横に居るのだし。

「ねえ、衛宮くん。一つ提案があるんだけど」

「……何だよ、改まって」

彼の方へ向き直り、告げる。

「わたしと組まない？」

s i d e 小波

「がはっ！」

腹部に響く鈍い衝撃。

組み敷いたサーヴァントの装いに動揺していた隙を突かれ、鳩尾に鋭い蹴りを貰ってしまった。

結果、彼我の距離が離れる。

相手は紫の髪を靡かせ、短剣を両手に引き戻しながらこちらと相対

する。

幸い、そこまでの痛手ではなかったので動くのに支障はない。

「……やりますね。アナタもサーヴァントなのでしょう？ 気配がやたらと薄いですが。クラス名を窺っても宜しいでしょうか」

あくまで無感情のまま、彼女は問いかけてくる。

「……一ノ瀬小波、クラス名はカオス。イレギュラーサーヴァントだ」

問いかけに答えつつも、油断なく状況を分析する。

さっき投げ捨てた日本刀と小太刀はすぐ脇に転がっているが、睨み合いのこの状態では回収は不可能。

となればリロードで鞘に納め直すか、徒手空拳でいくかの二つに一つ。

しかし各々の武器の間合いと特性を考えれば、徒手空拳ではいささか不利だ。

機を見てリロードするしかない。

「……いきなり真名を名乗るとは、よろしいのですか？」

と、僅かに動揺した声が向こうから返って来た。

決してまったくの無感情、という訳でもないらしい。

「知られたところでデメリットはないから別に構わないよ。それにクラス名の響きは好きじゃないし。ところでそっちは何のサーヴァントなんだ？」

「……『ライダー』のサーヴァントです、以後お見知りおきを」

その反応に目を見開く。

まさか素直に返答してくるとは。

「そんなにあっさり答えていいの？」

するとライダーは不敵な笑みを口元に浮かべ、

「構いませんよ。先程の真名の返礼でもありますし、何より……」

そう言つて徐に目元に手をやり、

「自分を殺した者の名前も知らずに死ぬというのも、いさゝか不憫に思いますので」

両の目を覆っていた、不気味な眼帯を外した。

一種、異様なまでに美しいアメジストの瞳。

眼帯の下から現れたそれが、こちらの目を捉えて離さない。

どこか無機質であり、しかし魂の宿る宝石のようでもある。

そんな二律背反の様相を秘めた、異質な瞳。

「……綺麗な瞳めだな。まるで宝石みたいだ」

我知らず、そんな言葉が口から漏れる。

明らかに見当はずれな、間の抜けた言葉。

しかしそれが、

「　　ッ、ま、魔眼が効いていない!?　一体なぜ……!?」

紫の美女を驚愕の坩堝みづぼへと叩き込んだ。

「……魔眼?　……!　その眼帯はそういう事だったのか!」

その言葉で理解できた。

あの眼帯は、彼女の持つ魔眼を自ら封じるための物なのだ。

おそらく、強力すぎる代物であるが故に自分でも制御できないのだろう。

そのための『魔眼殺し』。

それがあの眼帯の正体なのだ。

(しかし……その強力すぎる魔眼が俺に効かない?　魔眼の特性と原理が分からない以上、何とも言えないけど……多分『あれ』のせいかな?　まったく、怒るべきか感謝するべきか判断に困るな。これですます人外染みてきたぞ。……まあ、実際に今サーヴァントなんだから今更か)

無意識的に溜息を漏らす。

魔眼が効かない原因にはおおよそ見当が付いたが、確信には至らない。

しかしこれだけは断言できる。

『世界』が俺に施したモノのせいだ、と。

「くっ！」

これ以上、魔眼を展開していても無意味だと悟ったらしいライダーは唇を噛み締め、眼帯を付け直すと後ろに跳躍、木の上へと飛び移った。

「……切り札の一つが無効化されるとは思いませんでした。どうやらもう一人、サーヴァントが近付いているようですのでここは引かせていただきます」

そう言い置いて踵を返すライダー。

その声は先程の激情に駆られた物とは違い、昂る感情を押し殺した物だった。

(でも……何だろう?)

しかしほんの僅か、妙な感情の響きが混じっているようでもあった。

それが何なのかまでは分からなかったが。

彼女は音もなくその場で身を屈めると、瞬く間に木々の向こう側へと飛び去って行った。

「……………ふう」

嵐は去った。

大きく息を一つ吐き、宝具を全解除する。

ライダーの言った通り、サーヴァントの気配が一つ、近付いてきて

いる。

この感覚には覚えがある。

アーチャーだ。

大方リンが呼び戻したのだろう。

やがて赤い外套を纏った弓兵が、未熟な魔術師（士郎君）と共に主アカイアクマに連れられ姿を現した。

「……どうやら既に終わっていたようだな」

「そうみたいね。小波、相手は誰だったの？」

「ああ、ライダーだった」

「へえ、どんなヤツだったんだ？」

「紫の長い髪で、結構露出の多いボディコンみたいな服を着てたな。あとは鎖付きの杭みたいな短剣を使っていて、魔眼を持ってた」

「『魔眼！？』」

俺の言葉に三人は声を揃えて驚愕の表情を露わにする。

「といつても俺には何故か効果がなかったから、結局何の魔眼かは解らなかつたんだけど。魔眼殺しの眼帯してたから、かなり高ランクのヤツなんだろうな。多分」

「ハア!?」

本日何度目かの驚愕のシンクロが冴え渡る。

三人とも結構ノリがいい。

「アンタ、なんで魔眼喰らったのに無傷なのよ!? 魔眼は『概念』をぶつける代物なんだから、高ランクのヤツなら防御なんてほぼ不可能よ!? しかも防いだんじゃなくて無効化!? 何よソレ!？」

驚愕から一転、憤怒の表情に変わったリンがこちらに掴みかかってきた。

そして襟を掴まれ、ガツクンガツクンと凄まじいスピードで首を下に揺さぶられる。

「し、知らないよ! そんなの俺が一番知りたいわ! だから揺す

るなあああ！！」

このままでは遠からず、首がもげるかもしれない。

死の恐怖に駆られた俺は全力で抵抗の意を示す。

士郎君は修羅と化したリンの行動にただオロオロとするだけで、この場では何ら役に立ちそうもない。

「……凜、落ち着け。コイツの非常識さは今に始まった事ではないだろう？ このまま続けてサーヴァントが一体消えてくれるのなら私としては好都合なのだが、しかし先程の件を自分から反故にする気かね？」

結局アーチャーが助け船を出してくれたのだが、もう少し他に言い様がなかったのだろうか。

皮肉屋なのは解っているが。

しかし『先程の件』って、一体何なのだろうか？

「うっ……わ、わかったわよ」

アーチャーの言葉にリンは矛を収め、俺から手を離す。

解放され、一息吐いて首をさする。

幸いムチ打ちには至っていないようだ。

「はあ……酷い目に遭った。……そういえばアーチャー、さっき言
つてた『先程の件』って？」

そうアーチャーに問うと何故か苦りきった表情になり、

「……その小僧と同盟を結ぶそうだ。バーサーカーを倒すまでの、
な。まったく、一番叩きやすい相手と同盟など、私には理解出来ん
よ」

溜息交じりにそう答えた。

「同盟って……そうなのか士郎君？」

「ああ、遠坂からの提案でな。俺としても、遠坂とは戦いたくなか
つたから一応承諾したんだが」

「ふうん……俺達には何の相談もなしに？俺はいいけど、セイバ
ーが聞いたら怒りそうだよ。「何故そんな重大な事を何の相談もな
しに決めるのですか！」って」

そう言うと、士郎君はバツの悪そうな表情になり、乱暴に髪を掻きむしった。

「あー……それは悪かったと思ってるんだけど……な。でも確かにバーサーカーは厄介だし、遠坂だったらなんだかんだで信用できるし」

「いや、俺はそれで構わないと思ってるから別にいいけど。ただリン、アーチャーが物凄く不服そうなんだがいいのか？」

「……いいも悪いも、それがマスターの意思ならば私はそれに従うだけだ」

リンに尋ねたつもりだったが、意外にもアーチャーから肯定の返答が来た。

マスターの決定だからと、理性で以て無理矢理自分を納得させたようだ。

顔はやはり渋面だったが。

その後、リンは「いろいろと準備があるからまた後でね」という言葉を残してその場からサツサと立ち去って行った。

結局最初から最後まで、彼女に場を掻き乱されっ放しだった。

まるで“アイツ”の姉妹か何かみたいなヤツだ。

まあ、アイツよりもアグレッシブさが幾分控えめなのが、救いと言えれば救いと言えるが。

(しかし「また後で」って……この後どうするつもりなんだろう？
まさかいきなり家に押し掛けてくる、なんて事は……ないよな？
似てるとはいえ、“アイツ”じゃないんだし)

そして林の中、取り残された男が二人。

「……とりあえず家に戻ろうか、士郎君」

「……ああ、そうだな」

去りゆく赤の主従を見送り終えた士郎君とお互い顔を見合わせ、頷

く。

士郎君の顔には、若干の疲労の色が浮かんでいる。

流石にいきなりの襲撃・同盟と、立て続けに激動が続けば疲労もするだろう。

とりあえず、不法侵入者である俺はそのまま出ていく訳にはいかないので、『黒の英雄』^{ブラック}を展開し、姿を隠蔽する。

そして弓道場の前まで共に移動したその時、

「やあ衛宮、少し時間、いいかい？」

「……慎一？」

弓道場の玄関横に、軽薄そうな笑みを浮かべた制服姿の少年が立っており、士郎君に声をかけてきた。

第十一夜 「魔眼と同盟と野球少年」 (後書き)

筋力・技術が上がった!!

凜と同盟を結びました。

魔眼の設定については作者自身、うる覚えです。

この解釈でよかったのかな……？

次回も更新がやや遅くなります。

申し訳ありません。

第十二夜 「ワカメ会談と野球少年」 (前書き)

今回は視点が何度も変わります。

お陰で話の内容に矛盾点がありそうな気が……。

戦々恐々です。

第十二夜 「ワカメ会談と野球少年」

side 士郎

「 !? 慎二、そいつは……!?!? 」

(……………)

慎二に連れられ、間桐邸へと誘われる。

間桐邸には何度か来た事があるが、相変わらず中は薄暗く、不気味だ。

何故ここまで妙な気配が漂っているのか昔は解らなかったが、

「ここに来るのは久しぶりだったね、衛宮は。そのリビングに入ってくれ。多分それで僕の用件の見当が付くと思うから」

今この時、漸く僅かに理解できた。

慎二に言われ、リビングへ足を踏み入れる。

そこには異様な雰囲気放つ眼帯で両の眼を覆い、やたらと露出の

多い黒のボディコンのような服を着た長身の女性が部屋の隅に佇んでいた。

しかしただの女性ではない。

小波から聞かされた通りの風貌に、何より彼女から放たれる、明らかに並みの人間とは一線を画した気配。

彼女は明らかに……

「驚いたかい、衛宮。つまりはそういう事さ。僕もマスターなんだよ。彼女、ライダーのね」

僕と手を組まないか？

慎二の話を端的に要約するところという事だった。

side 小波

彼、間桐慎二（その髪型からワカメと心の中で呼んでいた）が言う

には元々間桐は魔術師の家系で、今は廃れてしまった一族らしい。何でも外国から移住して来たはいいが土だか水だかが合わなかった所為で、彼の代で遂に魔術を扱うための体内機関、魔術回路が発現しなくなった、とか。

それで魔術を扱う事は出来なくなったが、今まで伝わって来た資料等はいまだ残っているそうだ。

士郎君同様、偶然マスターに選ばれてしまい、家に残されていた資料を漁って聖杯戦争についての知識を仕入れたと彼は言った。

正直に言っつて、本当かどうか判断しづらい。

(……もう少し情報を引つ張り出す必要があるな。といつても、士郎君はこの手の事は苦手そうだしな……まあ、出来るだけ会話を引き延ばしてもらうしかないか)

とりあえず、現状で糸口を掴むとするならそこしかない。

ワカメ(信用できないのでこの呼称)の座るソファの横に移動して静かに佇むライダーを警戒しなければならない所為で、屋敷の中を探索する訳にもいかない。

『ブラック黒の英雄』の御蔭で、いまだに俺の存在は向かい側の主従にバレていない。

士郎君の腰掛けたソファの横に移動して彼の手を取り、会話を引き

延ばす旨を掌に指で書いて指示する。

それに対して士郎君はとりたてて何も反応はせず、代わりに素早く瞬きを二、三度繰り返す事で返答した。

一発殴って反省させた事が効いているのか、かなり慎重になっている。

この異様に息苦しい雰囲気のせいもあるのだろうか。

「……ライダーが学校内に居たのはお前を護るためか」

「ああ、そうさ。何の備えもなしに学校へ行くなんてバカのやる事だよ。仮にも聖杯戦争の最中なんだから」

「……ッ！ それで慎二は、どうするつもりだ？ お前まで聖杯が欲しい、なんて言わないよな」

痛い所を突かれた士郎君が、厳しい表情で問い質す。

「そうだね、僕は聖杯には興味はないよ。とにかくこの戦争を無事に乗り切ることが第一さ。その為のライダーだし、いくつか策も練ってる。衛宮に声をかけたのもその一つさ。心配の種は、摘めるのなら早めに摘んでおきたいからね」

そう言うと、隣に立つライダーの太腿に手を這わせた。

ライダーはそれに対してなんら反応はせず、彫像のように突っ立ったままだ。

「……学校の妙な気配もお前の仕業か？」

「……ああ、あの結界か。さて、ね。まあ、ライダーが言うにはあの学校にはマスターがもう一人いるみたいだけど。案外ソイツがやつたんじゃないのかな？」

「マスターがもう一人……？」

士郎君はその意外すぎる言葉に目を見開く。

「ああ、言っておくけど遠坂じゃないよ。僕と、衛宮と、遠坂。それ以外のマスターさ」

その言葉を受けて、士郎君がライダーに目を向ける。

するとライダーは首をカクン、と一度前に倒した。

「どうやら肯定、という事らしい。」

しかし……

(……変だな。ライダーはここまで無感情だったかな？ もう少し振れ幅があったような気がするんだが……)

初めて対峙した時以上に、感情の振れを感じられない事に違和感が生じる。

もしかして、ワカメ嫌いなのか？

まあ、見るからに小物っぽいからそれなら解らなくもないが。

(……というより、どうしてそのマスターの事が分かったんだ？ それにワカメも、土郎君のあの言葉でどうして『結界』だと解った？)

先程の話からすれば、ワカメに魔術的素養はない筈。

となるとライダーから教えて貰った、という事か？

(いや、それとも……まさかコイツが？)

むしろ『そっち』の可能性の方が大きい。

その推測に行きついた所で、唐突に士郎君の唇が動く。

「慎二……悪いが、組む事は出来ない。遠坂と同盟の先約があるからな。ただ、慎二が動かないって言うのなら、敵対しない限りこっちも慎二には手を出さないと約束する」

その言葉を聞いたワカメは一瞬、ピクリと口の端を歪めたがすぐに元の余裕たつぷりの表情に戻り、

「……そうかい、交渉は決裂、か。でもまあ、互いに不干渉の約束が出来ただけでも十分か。重ねて言うけど、僕は積極的には動かない。自衛くらいはするけどね。だから衛宮が敵対しない限り、こっちも衛宮には手を出さないと約束するよ」

そう言葉を続けた。

「……慎二、もう一つだけ訊きたい事がある。桜はこの件には……」

ソファから立ち上がった土郎君が、向かい側のソファに座ったままのワカメを見下ろしながら尋ねる。

「ああ、桜は『この件』には関係ないよ。魔術師の家は、基本的に継承は一子相伝。後継者以外の子供は何も知らされず、一般人として一生を送るのが常さ。だから桜は何も知らないし、関わり様がない」

「……そうか、良かった。じゃあ、俺は帰るぞ」

そう言って、土郎君はドアへと足を向ける。

すると、

「ライダー、門まで衛宮を送ってやれ」

いきなりワカメがそんな事を言いだし、今までワカメの横で微動だにできなかったライダーが土郎君に向かって歩き出す。

「おい、慎二……」

土郎君が胡乱気な視線をワカメに送るが、

「なに、桜を心配してくれた礼さ。それに早々約束を破るような真似はしない。ライダー、解ってると思うが衛宮には手を出すなよ」

当のワカメは何でもない事のようにライダーに釘を刺す。

一応、ライダーから不穏な気配は感じられないので大丈夫だろう。

「ああそれと、礼ついでにもう一つ、情報をやろう。ライダーが調べた事なんだけど、どうやら柳洞寺にサーヴァントが居るらしい」

「なっ……」

ライダーに先導されてリビングのドアから出る直前、土郎君の背中に向かってワカメが爆弾発言をした。

一瞬で驚愕の表情を露わにした土郎君が、すぐさま背後を振り返る。

発言の主は相変わらずの余裕の笑みだ。

「今新都で起こっているガス漏れ事故は、ソイツの仕業らしいってさ。詳しくはライダーに訊いてくれ。じゃあな衛宮、約束忘れるなよ」

side ライダー

「ライダー、慎二が言った事、本当なのか」

「…………ええ」

玄関の先、屋敷の門の前で目の前の少年、エミヤシロウが先程のシンジの言葉の真偽を尋ねてくる。

こちらを見るその眼は真っ直ぐだ。

しかし真っ直ぐすぎる。

どこか危ういまでに。

まあ、どうでもいい事だが。

「…………そうか、ありがとう。…………っと、それから、慎二を頼む。あれで危なっかしいヤツだから」

家の門を出ようとしたその時、振り向きざまに彼はそんな事を言っ

てきた。

まさかサーヴァントたる私に礼を言い、あまつさえ頼み事をするとは思わなかった。

「……はい。それと、柳洞寺に行くのなら気を付けなさい。あれは男というものを熟知していますから」

「……？ ああ、わかった。覚えておく」

礼に多少面食らった所為か、リップサービスをしてしまった。

許容範囲内の、だが。

彼は首を傾げながらも門を出、家路への道を歩き去って行った。

門の前で一人佇む。

そして、

「……出てきたらどうですか、いるのでしょうか？」

虚空へ向かい、声を投げかけた。

私の思い過しでなければおそらくは……。

「……よく判ったな。俺がいるって」

その時唐突に背後から声が響いた。

まさか真後ろに居るとは思わなかったが、どこかに居るだろう事は解っていた。

慌てずゆっくりと振り返る。

するとそこには、

「まあ、半分程度はただの勘だったのですが。あれだけ用心深いあなたなら、あの少年に付いて来ない筈はないと思ひまして」

「……ハア、つまり確信はなかった、と。姿を現したのは失敗だったかな……」

学校の林で刃を交わした少年が、右手で頭を抱えながら佇んでいた。

「……………それで？ 俺に何か用か？」

後頭部の帽子の隙間から覗く短めの黒髪を乱暴に掻きむしりつつ、半ば気だるげに彼は問うてきた。

ハメられた事が余程悔しかったらしい。

しかしその眼だけは雰囲気とは裏腹に鋭い。

「ええ、いくつか聞いておきたい事がありました」

「予想は付くけど……………答えられる事ならその範囲で答えるぞ。こっちも聞いておきたい事があったし、だからここに残ってた訳なんだけど」

「ではこちらも答えられる範囲で答えるとします。まずは、あなたが姿を現した時の違和感についてです」

ピクリ、と彼の片眉が跳ね上がる。

そして「続きを」とでも言いたげな視線をこちらに送って来た。
遠慮なく疑問をぶつける事としよう。

「先程あなたが姿を現した時、サーヴァントが実体化する感覚とは違っていました。むしろ『アサシン』のサーヴァントが『気配遮断』を解いた時のそれに近い」

そうでなければあの違和感の説明が付かない。

彼は瞑目したままこちらの話を聞いている。

(さあ、どう答える？)

この時の私は、ある種異様なまでに精神が昂っていた。

シンジと相対する時とは全く違う、感情のうねり。

何故かは後でいくら思い返してみても、結局解りはしなかったが。

やがて彼はハア、と溜息を一つ吐くと目を開き、

「……まあ、それ位ならいいか。おおよその見当もついてるみたいだし。俺は完全に受肉したサーヴァントでね、霊体化出来ないんだ。だから宝具を使って姿を隠蔽していた。答えられるのはここまでだな」

そんな、こちらの予想を上回る答えを返してきた。

「……ッ、そうですか。規格外なのですな、あなたは」

動揺が表に出そうになるが辛うじて抑え込む。

まさに規格外。

そうとしか言う事が出来ない。

完全に受肉したサーヴァントなどまず存在しないし、あの時見せた赤いバトルスーツ（？）の様な物を身に付けた彼の強さは本物だっ

今の状態ならいざ知らず、完全な状態であれば宝具を使わずに倒す事もどうにか可能だろうが。

それに加えてアサシンか、あるいはそれ以上の隠行を可能とする宝具を彼は所持していると言う。

もしあの時、彼が姿を隠したままで接敵してきたらと思うとゾッとしない。

おそらく何が何だか分からないうちに真っ二つに切り裂かれていただろう。

それをしなかったのはアサシンの『気配遮断』と同じく、攻撃行動に出れば気配を隠せないという欠点があるのだろう。

勿論、こちらが常に移動しつつ姿を容易に見せなかったのもあるのだろう。

それが判っただけでも僥倖か。

「……あのさ、その『規格外』って言うの、やめてくれないかな？
もう何人からも同じ事を言われてるんだ。いい加減泣きたくなくなってくるよ……」

ますます自分が人間から離れていくみたいでさ……サーヴァントなんだから今更だけど。

と、ふと前を見るとどういふ訳か、彼はガツクリと肩を落して頂垂うなだれていた。

深々と脱力したその背中からは、妙な哀愁が漂っている。

……はて、そこまでひどい事を言っただろうか？

「あ、その……すみませんでした」

思わず謝ってしまった。

何故か謝らなければいけないと思ってしまったからだ。

彼は「ああ、いいいいよ。気にしないで」と明らかに覇気のない表情で笑い返してくるが、先程までの彼とのギャップが著しく、いささか戸惑ってしまう。

先程までの彼はかなり強かで抜け目のない、冷静沈着な切れ者、という印象だった。

しかし今の落ち込む彼は見た目の年相応の少年の様な、柔らかく、気の優しい雰囲気醸し出している。

個人的には、このような彼はどこか好ましく思える。

思わず微笑ましさから頬が緩みかけるが、口元を強く引き締める事でそれを防いだ。

まだ話は終わっていないのだから。

「ハア、さて……他に質問はない？」

何とか気を持ち直した後、ライダーに問いかける。

さっきのやり取りのせいか、どこかしらライダーの表情と雰囲気
柔らかくなっている気がする。

「ではあと一つだけ。あなたには私の魔眼がどういう訳か効かなか
った様ですが、それは何故ですか？」

……やっぱりそれを聞かれるか。

一応原因の見当はついてはいるが、確信には至っていない上にこれは
『俺』という存在に深く関わっている。

だから容易に答える事は出来ない。

「……悪いんだけど、それには答えられない。まあ、俺の特性だと
でも思っていてくれ」

「……そうですか。元々答えはそんなに期待していませんでしたか
ら、別に構いませんが」

ライダーはそうなる事が分かっていたのか、さして表情も変えずにそう言った。

さて、今度はこちらの番だ。

「じゃあ、次は俺の番だな。そっちが質問を二つして来たから、こっちも二つ、質問する」

ライダーは俺の言葉に僅かに首肯する事で答えた。

「まず一つは、なんでライダーはそんなに“弱い”んだ？」

「ッ！？ ……それは、どついう意味ですか？」

俺の言葉に、ライダーは表情を一瞬だが強張らせた。

怒っているというよりは、動揺しているといった表現の方が適切だ。

「学校で戦った時、俺を蹴っただろ？ あの時、思ったよりもダメージがなかったから何か変だと思ったんだよ」

「……それは、あなたのあの赤いスーツが頑丈だからでは？」

「それは考えたさ。でもあれの事は俺自身が一番よく解っている。何せ“担い手”だからな。見た所、ライダーは俺みたいな最底辺の英霊じゃない。魔眼を持つてる位だからな。しかも強力なヤツを。それとスーツの性能を考えてもあれはおかしいんだよ。本当ならあの蹴り一発で肋の数本は持つていかれても不思議じゃなかった」

あの時はライダーの装いに気を取られて、防御の事を完全に失念してしまっていた。

『赤の英雄^{レッド}』の耐久力がBランクだとはいえ、それは防御を意識して初めて意味がある物だ。

どれだけ腹筋を鍛えていようと、腹筋が緩んだ所にパンチを貰えば悶絶するのと同じ事。

そんな状態ならば、いくら組み伏せられていた体勢だったとはいえ、英霊が本気を出せば『赤の英雄^{レッド}』の耐久力を超えてダメージを与える事は出来た筈だ。

加えて彼女は俺よりも5cmほど背が高く、身体能力もかなりの物だ。

おそらくあのランサーといい勝負だろう。

背が高いという事は、身体が纏う筋肉の量も多いという事。

つまり女性という点を考慮しても、パワーはそれなりにある筈なのだ。

しかし彼女の蹴りは俺を数メートルふっ飛ばすだけに留まった。

これは彼女が全力を出さなかった、いや出せなかったという事に他ならない。

「……………」

ライダーは先程の僅かな動揺を完全に殺した無表情で、こちらを見つめたまま沈黙している。

どうやら答える気はないようだ。

(うーん……ちょっとカマを掛けてみるか)

屋敷の中でライダーを注視していた時、ふと視点をズラした際に見えた物。

多分あれが関係しているのだろう。

「もしかして……ライダーにレイラインが“二つ”くっついている事と関係があるのか？」

「……ッ!？」

ライダーが眼帯の下で目を剥いたのが分かる。

俺が投下した爆弾は、見事にライダーの無表情を打ち砕いた。
ボーカーフェイス

「俺の感覚は特別でね。ライダーをジッと見ていたら何故かレイラインが二つある事に気付いたんだ。一つはそれなりに太いけど死んだような色をしていた物。もう一つは糸かピアノ線並に細いけど、生きていた物」

「……………」

淡々と事実を語る俺。

ライダーはただ只管に沈黙を貫いている。

「そのうちの、生きている細い方はマスターのワカメ……じゃなかった、間桐慎二に繋がっていた。彼は魔術回路を持たない一般人だ。それならあの細さも納得出来る。ラインが細いって事は、魔力供給が十分に出来ていないって事だからな。じゃあ、死んだ色をしたも

う一本は一体……何なんだ？」

「……………」

ライダーはそれでも沈黙を崩さない。

しかし彼女から感じる雰囲気は、徐々に剣呑な物になりつつあった。

どうやら俺の予測は、かなり真実に近い所を行っているようだ。

ある程度予想もついたし、ここら辺が潮時か。

両手を上げ、息を吐きながら降参の意をライダーに示す。

「……………判ったよ、もう聞かない事にする。だから殺気をぶつけて来ないでくれ。……………悪かったな、不快な思いをさせて」

「……………いえ」

謝罪すると、ライダーは殺気を引っ込めた。

しかし、これで確信できた。

ライダーには“本当のマスター”が存在しているのだと。

あのワカメはライダーを借りている“だけ”の、仮初のマスターなのだろう。

そしてライダーの真のマスターはおそらく……。

(……何とも複雑だな。間桐家……一体何があるんだ?)

ふとそんな事が脳裏を過るが、考えるのは後回しだ。

それは“いずれ”判る事なのだから。

改めてライダーに向き直り、もう一つの質問を口にする。

「二つ目、何故学校にもう一人マスターが居ると判った?」

「ああ、それですか。使い魔ですよ」

「使い魔?」

先程の殺気を放出した時とは違い、雰囲気は柔らかいままだ。

この質問は彼女にとってさほど重要ではないらしい。

「ええ。あなたと戦う少し前にそれを見つけて、潰しておいたのです。その使い魔からサーヴァント特有の匂いがしたので、そう判断しました」

「でも、それだけで他のマスターがいると判断するのは流石に無理があるぞ」

「そうですね。しかしその匂いは柳洞寺で感じたものと同じ物でした。おそらくキャスターが造ったのでしょう」

しれっと、ライダーは聞き捨てならない事を口にした。

「えっ、柳洞寺に居るサーヴァントってキャスターなのか!？」

「言いませんでしたか？」

「聞いてないよ! ……しかし、それなら納得もできる、のか? つまりは学校に使い魔を送るだけの何かがある、って事。ライダーはそれがキャスターのマスター関連だと判断した、という事か」

「はい。ざっと見た所、あの学校にいる魔術師はあの少年とトオサカリンと呼ばれる少女のみ。キャスターのマスターが一般人で、且つ学校関係者であるならば、マスターの動向を監視するために使い

魔を放った、とも考えられますから」

コクリ、とライダーは頷き、肯定の言葉を口にする。

どうやら嘘ではないようだ。

しかし……、

「成る程。つまり確定情報じゃないんだな？」

「ええ、あくまで可能性の話です。だからシンジにも『らしい』と報告しました。不確定なのに確定の様に言うのも何なので」

「ふむ……」

やはり可能性の話だったようだ。

参考程度の情報として留めておくのが適当だろう。

(しかし……)

ライダーには明らかに隠している事がある。

説明に穴があったからだ。

気付いているのか、解っていてあえて言わないだけなのか。

まあ、牽制だけは入れておこう。

彼女の脇をすり抜け、門へと歩き出す。

「さて、これで話は終わりだな。ああ、それと一つ忠告だ。あの結界、無暗に作動させるなよ。作動させたらこっちも敵対行動を取らざるを得なくなるからな」

背後で息を呑む気配が伝わって来た。

まさか即座に見抜かれるとは思わなかったらしい。

レイラインを見抜かれた時点で、悟られる可能性を考えなかったのかな？

「言っただろ？ 俺の感覚は『特別だ』って。あの結界からは血の臭いがした。そして、ライダーからも同じ臭いがするんだ。多分、ワカメが言ってた『策』の一つとして張らせた物だろうけど、あれはタチが悪すぎる。『吸収型結界』なんてバカげた物張るなんて。目的は他の敵への牽制と、魔力供給が追い付かずに弱体化しているライダーを補うための物ってところかな？ 非常扉の前で生徒を襲ったのも、魔力補充のためなんだろう？ ライダー自身の意思か、ワカメの指示かは知らないけどさ」

「……全てお見通し、ですか。一応、謹んで受け取っておくと思います。イチノセコナミ」

僅かに肩を落としたような気配と共に、ライダーが言葉を紡いだ。

「ああ、俺もライダーとは出来れば戦いたくはないからな。一応知らない仲じゃなくなっただし、あの眼は綺麗だったから好きだしな」

「……っ!？」

背後で何故か動揺したような気配を感じつつ、沈みかけた夕焼けの光の中、土郎君の後を追いかけるべく間桐邸を後にした。

side 土郎

「どこに行ってたんだ小波？」

「ちょっと世間話をね」

「世間話？」

慎二の家を後にした後、何故か小波が居なくなっている事に気付いた。

探しに行こうか迷っていると、十分もしないうちに姿を現した小波がこっちに向かって走って来るのを見つけた。

そして小波の口から帰ってきたのが『世間話』という答えだった。

「誰と世間話してたんだ？」

「ライダーとだよ」

「ハア！？」

実にあっけらかんと言い放った小波。

俺でもライダーに話しかけた時は、かなり緊張したというのに……。

見た目はアレだが、意外とコイツは大物なのかもしれない。

「まあ、色々と有益な情報も手に入ったから、それは帰ってから話すよ」

「あ、ああ」

そんな事を話しているうちに、我が家の門が目の前に映る。

そして玄関を開けると、

「お帰りなさいシロウ。そして、覚悟はいいですか？」

身体の前で竹刀を床に突き立てたセイバーが、実に“イイ笑顔”で仁王立ちしていた。

どつちから今日の激動は、まだ終わってはくれないようだ。

第十二夜 「ワカメ会談と野球少年」 (後書き)

ライダーフラグその1が立った!!

『牽制』が身に付いた!!

技術・変化球が上がった!!

ステータスが更新されました。

さて、メインヒロインを誰にするべきか……。

今の所の筆頭はやはりセイバーですかね。

ちなみに土郎×凜は確定です。

この二人の場合、それ以外が有り得ないような気がして。

第十三夜 「夜の食卓と野球少年」 (前書き)

今月は地獄です……忙しすぎて。

下のおまけは何となく気紛れで書いた物で、読まなくても特に問題ありません。

第十三夜 「夜の食卓と野球少年」

side 小波

「い、生きてるか……？ 士郎君」

「な、何とかな……」

その後、問答無用で道場に強制連行され、セイバーによる吊るし上げが始まった。

……何故か俺まで参加させられて。

家を出てからの一部始終を語ると、「何故私を呼ばなかったのですか！」と予想通りにセイバーの雷が士郎君に落ちた。

そしてどういふ訳か俺にも飛び火。

セイバー曰く、「呼ぶように指示しなかったコナミも同罪です！」「、という事だった。

結果、道場の冷たい板張りの床に正座させられ、一時間もお説教を聞き続ける羽目になった。

そして今、ようやく解放された所だ。

「うおおお……あ、足が……」

思わず床に蹲る。

長時間の正座で足が痺れてしまい、動くに動けない。

「ぬおおおお……」

士郎君も横で悶絶している。

すると、

ピンポーン

「む、誰か来たようですね」

玄関から呼び鈴の音が鳴り、説教で多少溜飲の下がったセイバーが反応する。

持っていた竹刀は既にどこかにしまったようで、今は空手だ。

ただセイバーの持っていた竹刀には、何故かデフォルメされた虎のストラップが付いていた。

士郎君はそれを見て、「よ、妖刀・虎竹刀……！？ 何でここにあるんだよ！？」とか言っていたが一体なんだっただのらう？

「お、俺が出る……時間的に藤ねえや桜じゃないと思うから」

士郎君は喘ぎながらもそう言うと、いまだ痺れる足で無理矢理立ち上がり、ヨタヨタとした動作で道場から出ていった。

途中で転んだと思しき物音が幾度か響いてきたが大丈夫だろうか？

「ふう……しかし、リンと同盟ですか。私もそれに関しては異論はありませんが、やはり相談の一つも欲しかった所ですね」

「まあ、今更言っても始まらないだろ。これだけやれば、次からはキツチりするさ。何か妙にあの竹刀に怯えてたしな」

「確かにそうですが……その間抜けた姿で言われましても格好が付きませんよ」

「誰のせいだよ……」

いまだ足を庇いつつ蹲る俺を見下ろしつつ、呆れたような視線を送ってくるセイバー。

まるで「なってますね」と言わんばかりだ。

……今度、カレーを作る機会があったらスイカでも混ぜてやるうか。

「お……ちょ……って……坂！」

「これ……協……るんだ……然でしょう？」

と、外から土郎君ともう一人、女性の声がこちらに近付いてくるのが聞こえて来た。

「この声は……シロウと、はて、どこかで聞いたような声ですね」

セイバーが首を傾げるが、俺には誰なのか判った。

あれはそういう意味だったのか。

やがてスパアン、と道場の扉が勢いよく開かれ、

「へえ、ここには道場まであるのね……って、あなた何してるの？」

「……セイバーにちょっと、な」

「成る程、リンでしたか。道理で」

セイバー曰くの『間抜けた姿』を、来襲したリンに怪訝な目で見られる事になった。

同盟を組んだため、リン（+アーチャー）が衛宮邸へと居候する事となった。

士郎君が何かブツブツと抗議をしていたが、結局はリンに押し切られた形になった。

その代わりに、士郎君の魔術の師になってくれるそうだ。

リン曰く、「聖杯戦争で勝ち残ってもらったため」に強くなって貰うのだそうだ。

この流れに乗じて、セイバーも士郎君に稽古を付けると言い出した。

俺としても、士郎君には必要だと思っていたため反対はせずに終始静観していた。

士郎君はやる気を見せているが、果たして耐えられるのだろうか？
物凄くスパルタで叩き込まれる気がするぞ。

二人とも、やるからには徹底的にやる性格だし。

ちなみにリンの部屋だが、昨夜俺が使った離れを勝手に占拠されてしまった。

しかもリンが運び込んだ荷物が既に広げられており、簡易工房と化していた。

……今晚、寝る所どうしよう？

「どうしたのですか、コナミ？ 箸が進んでいませんが」

「いや、何でも……」

そして今は四人で食卓を囲んでいる。

藤村さんと桜ちゃんは、それぞれ用事があって今日は来ない。

アーチャーは屋根の上で見張りをしている。

アーチャーはいらないのかとリンに訊いた所、サーヴァントに食事は本来必要ないのだそうだ。

俺とセイバーだけ例外らしい。

まあ、受肉している俺はともかくとして、セイバーはむしろ趣味に近いのだと思う。

朝、セイバーの昼食を用意していた時、セイバーの居た時代の食事風景について尋ねたところ、

「……………雑でした」

と、苦々しげな表情をしてポツリと呟いたのだ。

嫌な予感がしてそれ以上は聞かなかつたのだが、セイバーの食べっぷりを見ていると何となく昔の食事に対する不満の反動なんだろうな、と察する事が出来る。

俺の向かい側に座るセイバーは今朝と同様、一口一口丁寧に咀嚼しながらコクコクと頷いているのだから。

顔もやはり幸せそうだ。

しかし一体どんな食卓事情だったのだろうか？

流石に『あの島』や、『戦時中』よりはマシだったのだと思いたい。

あれはセイバーだったら発狂モノに違いないだろうから。

ちなみにセイバーの服装が白のシャツと青のジーンズから、白のブラウスに青の長めのスカート、黒のストッキングといった格好に変わっている。

ちぐはぐなセイバーの服装を見て不思議がったリンに俺が事情を話すと、自分の持ってきた服をあてがってくれたのだ。

何でも教会の言峰神父が送って来た物で、自分には似合わないからずっと筆筒の肥やしにしていたのを、折角だからセイバーに着せてみようと思って持って来ていたらしい。

今朝大騒動の原因だった下着関係もリンが何とかしてくれた。

ただどういふ訳か、俺が渡したブレザーだけはそのまま上から着ている。

理由を聞くと、「せっかくコナミがくれた物ですから……」なのだそうだ。

別にあげた訳じゃないんだが……まあ、いいか。

閑話休題。

「よし、勝った……！」

一方リンはというと、卓上に乗がっている料理を一口食べてはガッツポーズやら、唸ったりやらを繰り返している。

どちらかというとガッツポーズの比率が多いが。

「ふふふ、明日を見てなさいよ」と言いながら食事を続ける光景は何か不気味だ。

「……遠坂、作った本人の目の前でそういう事言うのはやめてくれ」
リンの向かい側（俺の隣）に座っている土郎君が、ゲンナリした顔でリンに言う。

確かに自分の作った料理の評価を聞きながら食事をするのは、精神的にキツイ物があるだろう。

それがリンなら尚更だ。

ゲンナリするのも解らなくはない。

「あら、別にいいじゃない。結構いい線行ってるわよ?」

士郎君の抗議にも平然とした様子で答えるリン。

言うだけ無駄のようだ。

士郎君も同じことを察したのか、ハア、と一つ吐息を漏らすとごは
んを口に詰め込み始めた。

「そういえばコナミ、貴方の作ったお昼は大変美味でした」

「あ、それは良かった。急いで作ったからもしかしたら口に合わな
いかなと思ってただけだ」

ごはんを粗方食べ終わった頃、セイバーが俺が今朝作った昼食の感

想を述べて来た。

思いの他好評だったようだ。

「あ、そういえば昼飯作るの忘れてたな。小波が作ってくれたのか。悪かったな」

「へえ、あなた料理出来たんだ」

残り二人もこちらに食いついてきた。

「で、何作ったのよ」

「チキンチリシチューだけど」

「えっ！？ そんなもの作れるのか！？」

「いや、チームメイトのお父さんに御馳走になった事があったね、その時にレシピを貰って自分で何度か作ってたんだ。父子家庭で、父さんが家を空ける事が多かったからな。幸い、材料が揃ってたから作ってみたんだけど」

「何その普通の一般家庭？ アンタほんとに英霊？」

「……だから俺は英霊じゃないって。ごくごく普通の高校球児だったんだよ。夏の甲子園で優勝した事もあるし、ドラフトでも一位指名されたけど」

「なあセイバー。そのシチュー、残ってないのか？ ちょっと味を見てみたいんだが」

「ああ、それなら冷蔵庫の中に鍋ごと入れてあります。流石に全部は食べきれなかったので」

「……って、人の話聞いてないし」

「……ハア、重大発言よりもシチューとはね」

俺の問題発言もスルーし、目下シチューに興味津々の土郎君にリンが溜息を漏らす。

リンに呆れられた土郎君はそれを露とも知らず、いそいそと鍋を冷蔵庫から取り出している。

料理に関してはかなり目がな^{タチ}い性質らしい。

「遠坂、食べるか？」

「……貰うわ、ちょっと興味あるし」

温め直して皿に取り分け、「いただきます」と食す二人。

次の瞬間、二人は揃ってその場に崩れ落ち、「ま、負けた……」と悲痛な声を漏らしていた。

「ここまでの物を作るなんて……レシピはその人の自作なんだろう？ 一体どんな人だったんだ？」

「南米系の皮膚の色と顔立ちで、家族共々アメリカから日本に来ていた実は日本人？」

「何よその訳の解らない人……」

俺もそう思う。

知った時はショックだったからな……。

ちなみにセイバーはというと、いまだ立ち直れない二人を余所にせつせと残ったシチューを自分の皿に取り分けていた。

よっぽど気に入ったようだ。

夕食の後、作戦会議が始まった。

これまで知り得た情報をそれぞれ持ち寄り、これからの行動を模索する。

「ふーん、慎二がライダーのマスターとはね。……うん、有り得なくもなかった可能性ね。廃れたとはいえ、魔術の名門だったんだし」

「一応慎二とは同盟こそしなかったけど、互いに不干渉の約束を取り付けた。とりあえず積極的に動くつもりはないって言ってたぞ」

「……その言葉がどこまで信用出来るか解りません。用心はしておいた方がいいかと」

居間のテーブルを四人で囲み、お茶を啜りながら語る。

「ま、今はそつちは放っておいて大丈夫でしょう。目下問題なのは、バーサーカーとキャスターよ」

「む、リン。バーサーカーは解るのですが、キャスターですか？」

「ああ、セイバーは知らなかったのね。今冬木で、ガス漏れ事故が多発しててね。死者は出てないんだけど、意識不明や昏睡状態になる人が続出してるのよ。で、それが……」

リンの言葉に疑問を感じたセイバーに、補足説明が付け加えられる。

セイバーはそれにピクリ、と片眉を跳ね上げた。

「……成る程、それがキャスターの仕業だと。確かに死なない程度に魔力を吸い上げればそうなるでしょうし、それを大規模に行えるとしたらキャスターのサーヴァント位でしょうね。それで、キャスターの居所は判っているのですか？」

「ああ、それなら柳洞寺だ」

「「は？」」

俺がキャスターの居所を答えた事に、土郎君とリンが反応する。

「アンタ何でそんな事知ってるのよ!？」

「帰り際にライダーに訊いたんだよ」

「え!？ 慎二が言ってた柳洞寺に居るサーヴァントって、キャスターだったのか!？」

「ライダー自身が『偵察した』って言ってたから」

「『世間話』ってそういう事だったのか……」

啞然とする二人を余所に、徐にセイバーが立ち上がる。

その眼は妙に殺気立っていた。

「ちょっとセイバー、何処に行くのよ」

「愚問ですねリン。柳洞寺に決まっていますでしょう?」

「待てセイバー、今から乗り込むつもりか!？」

「ええ、シロウも何を言っているのですか？ 敵の居所が知れたのならばこれを討つ。当然の事ではないですか」

士郎君の問いにも平然と返すセイバー。

嫌に無表情なのがこちらの危機意識を無駄に煽る。

「止めておきなさいセイバー。キャスターのサーヴァントは最弱つて言われてるけど、実際はそうとも言えないわ。むしろえげつなさという点ではサーヴァント中最強と言ってもいい位よ」

お茶を啜りつつ、澄ました顔でリンが言う。

「実際、町中の人間から『魂喰い』で魔力を吸い上げている訳だしね。おそらく柳洞寺はキャスターの『神殿』と化してるわ。並の魔術師の工房なんかとは比較にならないレベルでね。そして魔術師の工房は、己の秘奥を護るための備えが盛り沢山よ。ましてそこが冬木の霊地であり、龍脈の終着点である柳洞寺なら尚更ね。加えて、キャスター自身も特A級の魔術師よ。こんな大魔術に相当する事を平然とやってのけてるんだし、たかがキャスターという色眼鏡で見ると痛い目に遭うわよ」

「……………」

いちいち尤もなりリンの言葉に返す言葉もないセイバー。

その端正な顔を悔しげに歪めている。

……ちょっと危険だな、これは。

一応、しっかりと釘を刺しておくべきか。

「なあ、セイバー。何をそんなに焦ってるんだ？」

「コナミ……」

視線をこちらに移すセイバー。

今にも泣きそうに見えたのはこちらの気のせいだろうか？

「聖杯戦争はまだ始まったばかりなんだ。焦らないで、じっくり事に当たらないと痛い目にあう。特にキヤスターなんかはな。腕がなければ頭で勝とうとするのは、人間もサーヴァントも変わらないんだ」

おそらく柳洞寺は地雷原同然の状態となっているだろう。

だからこちらも、頭を使って慎重に対処しなければならない。

何も考えない特攻にこそ、策が真価を発揮するのだから。

「俺も小波に賛成だ。キャスターをどうにかしたいのは山々だが、今は情報が少なすぎる。迂闊に動くのは自殺行為だ。もう少し、情報を集めない事には柳洞寺に行くのは許可できない」

士郎君の援護射撃に、セイバーはもうしばらく押し黙ると、

「……判りました。マスターの意志には従います」

硬い表情ながらも、こちらの意志を受け入れてくれた。

ゆっくりと、その場に座すセイバー。

思わず安堵の吐息が漏れる。

「……とにかく、柳洞寺に関しては情報収集が第一として。で、肝心のバーサーカーなんだけど……」

そう前置きをすると、リンの表情が変わった。

より真剣味を帯びた表情だ。

「……ええ、正直に言ってあれは厄介です。並の攻撃ではダメージを全く与えられませんが、それに加えて圧倒的なスピードと膂力。さらには殺されても自動的に蘇生^{レイズ}がかかる不死同然の肉体。真正面からぶつかればこちらが確実に押し負けます」

セイバーも硬い表情をしたまま訥々と口を開く。

純粋にバーサーカーには危機感を抱いているようだ。

「まあ、最低でも命のストック？ がいくつあるのかが解れば多少はラクなだけだねえ……。それでもこっちが不利なのは変わらないけれど。こっちが勝っている点は数だけだもの」

その数にしたって大した脅威には思わないだろうし、とぼやくリン。

と、

「む、リン。あまり私を侮らないで頂きたい。厄介とは言いましたが、宝具さえ解放すれば勝算は十分にあります」

一転、不機嫌そうにセイバーが反論する。

どうやらバカにされたと思っただけらしい。

「セイバーの宝具って……あの視えない剣だろう？ あれでどうにかできるのか？」

「確かにそれも私の宝具ですが……あれは私の本来の宝具を隠すための物です。本命ではありません」

士郎君から疑問の声が上がるが、それも一刀の下に斬って捨てる。

余程の自信があるようだ。

「それに、コナミの宝具はバーサーカーにとっては天敵です。それは先の戦いを見れば判ります」

セイバーはそう言うと、こちらに視線を向けて来た。

まあ、確かにそうなんだが……、

「買い被りすぎだよセイバー。いくら宝具が天敵って言うても、俺自身はザコもいい所の力しかないんだから。他の英霊と引き比べてみても、多分どうにかこうにか渡り合う事が出来るだけ。完全に倒すまではいかないと思う」

あの時、バーサーカーを殺せたのは奇跡に近い。

無警戒だったせいで、偶々不意打ちが上手く行ったただけだ。

『五人の英雄』を展開して能力を大幅に上げたとしても、まともなぶつかれば技術・練度という点から考えて一歩も二歩も後れを取ってしまうだろう。

勿論、狂化された弊害で水準が下がっているだろうが、俺にとってはそれでも相手が上手である事に変わりはない。

次からは宝具も行動も、確実に警戒される。

奇襲の二番煎じが通用する事はまずないのだ。

同じ手は使えない。

一番ベストな戦闘方法としては、前衛がセイバーで白兵戦を仕掛け、遠距離から後衛のアーチャーが狙撃、そして俺が中距離から遊撃・攪乱を行うという方式だろう。

これならバランスが取れているし、お互いをフォローするのも容易くそれぞれの生還率も高い。

リンとの同盟は、ある意味で大正解だったのかもしれない。

「……どっちにしろ、今は迂闊には動けないって事よね。バーサーカー、ライダーはともかくランサーのマスターが誰なのか判ってないし、キャスターとアサシンに至っては姿すら見てない。結局、しばらくは情報を集めるしかないのよね」

それに、“妙なヤツ”が何やら嗅ぎまわっているようだしね。

結局、結論としてはこんな物になった。

まあ、それが一番無難だろう。

正体と宝具の詳細が判明しているのは今の所ランサー、『クーフーリン』のみ。

バーサーカーとライダーは姿を見てはいるが宝具の詳細や正体は判っておらず、ライダーとは互いに干渉状態で攻められないし、バーサーカーは厄介すぎる。

キャスター、アサシンに至っては論外だ。

先手を打とうにも半数の連中の拠点が不明のまま。

やはり材料が足りなさすぎる。

それに今はまだ、戦争が始まったばかりの序の口だ。

強いて危ない橋を渡る必要はない。

一部、こちらの不安を煽るような発言が聞こえた気がしたが、口に出さぬが華だろう。

……そういえば言い忘れていた事がまだあったな。

ある意味こっちが最優先事項かもしれないし、やはり言うておくべきだな。

「なあリン。学校の結界なんだけど、基点を一度壊したのはお前だろ？」

「え？ 確かに壊したけど……何であんたが結界の事知ってるのよ？」

「ああ、学校に着いた時に異様な血臭がしてな。それで色々調べたら、結界の基点を幾つも見つけたんだよ。で、術式を解析してみたら、どうも一度壊されたような形跡があったな。それで」

「調べたって……簡単に言ってくれるけど、そんなに簡単な事じゃないわよ。わたしですら、宝石を幾つも使って漸く見つけ出したのよ。まして術式の解析なんてとても出来なかったわよ。高度すぎて」

胡乱気な表情をしたリンが不機嫌そうに言う。

俺はバットを引き抜いて『解析モノクル』に変化させ、これを使って解析したとリンに説明する。

リンは一応納得したようだが、何故か物欲しそうな表情になっていた。

何でそんな顔をしているのかと尋ねたところ、ちよつと剣呑な雰囲気と共に『魔術は金喰い虫』という答えが帰って来た。

宝石を用いた魔術なんて使ってるからだと思っただが……経費もバカにならないだろうし。

『オール・イン・ワン全てに通ずる物』の事についてもやはり聞かれたが本題からズレてしまうので、色んな物に変化できる、という当り障りのない所で留めておいた。

その答えに如何にも不満気なリンだったが、本題が最優先なので無視だ。

同盟関係とはいえ、手の内を早々晒したくもないし。

「あー、話を戻すぞ。その学校の結界なんだが、張ったのはライダーだ。本人が認めたから間違いない」

そう言うと、リンとセイバーの眼が細まった。

「おい、それって本当なのか？ 学校に結界があつて、それをライダーが張つたつて」

俺の言葉に、士郎君が問い返して来る。

頷き返すと、何やら思案に耽り出した。

「そつか……何か甘つたるいような匂いが学校から漂つてきてたけど、あれが結界の気配だったのか？ ……でも小波はそれを血の臭いとして感じたんだらう？ 俺が感じた物と全然違つぞ」

「感じ方は人それぞれよ。わたしの場合はうつすらとした違和感だったし。衛宮くんは世界の異変なんかの感受性が強いみたいね。小波はそれ以上みたいだけど。結界の異常性すら感知してるんだし」

「異常性？ どういう事だよ遠坂」

「学校に張られてる結界は、『吸収型』の結界なのよ。発動すれば中に居る人間は骨まで溶かされ、『魔力』として還元、吸収される。この上なく厄介で外道なシロモノよ。それをライダーが張つたんだとすると……成る程。むしろ今はこつちを警戒しておくべきね。何せマスターが慎二なんだし」

リンの述懐を余所に、士郎君は膝の上に置いた拳を強く握り締め、

表情を盛大に歪める。

ワカメがこんな外道染みた真似をするとは思ってなかったのだろう。見通しが甘いとも思うが、まあ気持ちは判らなくもない。

ワカメを信用していたようだったしな。

「ま、士郎は明日から学校を休みなさい。学校には私が行くわ。結界の事もあるし、アナタのサーヴァントは霊体化出来ないんだから。小波は別みただけ。とりあえずセイバーにみっちりしごいて貰いなさいな。魔術関連の事は私が帰った後でね」

残っていたお茶を飲み干し、息を一つ吐いてからリンが告げる。

確かにその方がいいだろう。

士郎君はサーヴァントと対峙する事に、警戒心が薄くなりがちだからな。

ランサーとバーサーカー、アーチャーからあれだけの目に遭わされているというのに、だ。

俺とセイバーからの制裁以来、多少は慎重になっているようだがそれでもなお危うい。

見方を変えれば、自身の命を軽視しているようにも感じてしまうその性格。

どうも生来の気質から来ているようだが……今回においてそれは致命的だ。

マスターないしサーヴァントは、敵マスターを狙う事を常道として
いる。

人間とは一線を描く力を持つサーヴァントを相手取るよりその方が
遙かに容易いし、楽だからだ。

当然、マスターもその事は承知しているから自身への備えは万全に
する。

しかし士郎君の場合、備えすらせずに出歩く無警戒ぶり。

これでは「さあ、殺して下さい」と言っているような物だ。

セイバーとの鍛錬は、修正のいい切欠になるかもしれない。

ギリギリまで追い込んで貰う事によって人間、いや生物が持つ『死
への恐怖』を喚起できれば、条件反射で採るべき行動（危機回避行
動）を事前・事後において選択出来るようになるだろう。

といっても精々が付け焼刃レベルだろうし、士郎君の負担が物凄い
事になりそうだが死のリスクを多少なりと減らせる可能性があるの
ならば、躊躇いなどフルスイングで場外だ。

「ああ、そうする。俺自身、今までの認識が甘かったと思っている
からな。足手まといにならないように、セイバーに鍛えて貰う事に

する」

否やはなし、と土郎君が首肯する。

……何か少し勘違いしているような気がしないでもないが、まあそれも含めてセイバーに任せるとしよう。

いざとなれば俺が何とかできるしな。

『裏技』で。

そうして深夜零時、諸々の疲れを取るため就寝と相成った。

ちなみに、リンによって占拠された部屋の代わりとして、中庭に面した母屋の空き部屋をあてがわれた。

……まあ、ここなら“色々”都合がいい、か。

おまけ

side ????

暗闇の中、私は『それ』と対峙する。

背後から差す月明かりが私と『それ』を照らし出し、影が長く伸びる。

静寂と月光が支配する、荘厳とも呼べる宵闇の中。

我知らず、ゴクリ、と喉が鳴る。

柄にもなく緊張しているのが自分でも解る。

しかしそれも致し方ない事。

聞けば『それ』は“あの二人”をも退けたらしい。

私としては癪なのだが、相応の実力を持つと認めざるを得ない“あの二人”をだ。

『獲物』を握る手に思わず力が籠る。

しかし私は、それ故に『それ』に挑む。

決して仇討ち等ではない。

私自身、『それ』を超えるべき壁として認識したが故に、だ。

「…………ふっ」

息を吐き、意を決す。

これ程「勝ちたい」と思ったのは何時以来だろうか。

久しく忘れていた、勝利への渇き。

それが私の心の中で、残り火の様に燻っている。

思わず口の端がつり上がる。

「…………ク」

口から漏れる苦笑もそのままにッ、と一步を踏み出す。

さあ、勝負の時だ。

私は“あの二人”とは年季も場数も桁が違う。

貴様が相手取って来たヤツらとは一味違つぞ？

私を超えられるか？ 貴様は。

そして私は、『獲物』を掴んだ右手を振るい、いざ『それ』に『獲物』を振るい落とさんとし

パチッ

「…………む？」

唐突に光が広がる天井。

そして、

「喉が渴いたから水を飲みに来てみれば……何してるのアーチャー。湯気が出てるその皿、匂いからして小波の作ったシチューよね？何でそんなに真面目な表情でスプーンを皿に突っ込んでるの？シチューと決闘でもするつもり？」

我がマスター、凜が台所に面した居間の入り口で、傍らの電気のス
イッチに指を掛けながら怪訝そうな表情で突っ立っていた。

そして私はその晩、いまだに湯気の立つ皿の前で、膝を屈する事と
なった。

後日、『敗残兵』が『勝利者』に深々と頭を垂れ、レシピを授けて貰う事になるのだが、それはまた別の話だ。

第十三夜 「夜の食卓と野球少年」 (後書き)

アーチャーを(ある意味)倒した!!

『勝ち運』が身に付いた!!

技術・変化球が上がった!!

ステータスが更新されました。

主人公は、一部のレパトリィのみ『料理：EX』レベルです。

それ以外は並か、よくて士郎のやや下くらいの腕です。

11 / 15 一部を修正しました。

幕間 「〜夢、そして始まり〜 垣間見る野球少年」

夢を見る。

燃える、燃える、燃える。

より赤く、紅く。

どこまでも、いつまでも。

そこは地獄だった。

燃え盛る倒壊した家屋。

その下から誰かの呻き声が聞こえてくる。

苦悶の声か、怨嗟の叫びか。

それは声の主にしか解らない。

しかしそれも段々と小さくなり、やがて虚空に掻き消える。

空は地上の炎に照らし出され、厚い雲が煌々と紅い輝きを放つ。

その炎より次々と生み出される黒煙が、撒き散らされる熱風によってたなびき、空へと駆け上ってゆく。

そこはまさしく現世に現れた灼熱地獄。

このただ中に放り込まれば、誰一人として生きていられる者はいない。

その煉獄の中で、唯一つだけ蠢く影があった。

歳の頃は七、八歳くらいだろうか。

短く切った紅い髪を所々煤けさせ、何処を見るでもないように前方に向けた瞳には何も映っていない。

意思の光も、輝きもなく、あるのは『虚無』。

ただそれだけを宿す双眸。

身体のあちこちから血を流し、焼け爛れた全身を引きずりながらも前へと進む。

その先にも、後ろにある光景と同じ物しかない。

それを知ってか知らずか、ただただ少年は道を行く。

辺りに立ち込める死の気配と、ヒトがモノへと変貌していく過程を目にしながらも。

骸となり果てた、或いはなろうとしているモノの声なき声をその身に受けながらも。

少年が歩みを止める事はなく。

黙々と、その場に残る唯一の生命として蠢き、存在し続けていた。

やがて、それも終わる。

力尽きたのか、少年は足をふらつかせ、膝から地面に崩れ落ちる。

仰向けになり、空を見上げる少年の目にはやはり何もなく。

曇天から降り始めた雨にも、何の反応も示さなかった。

少年は仰向けのまま、ゆっくりと右手を虚空へと伸ばす。

まるで空を掴み取るうとでもするかのように。

しかしその手も、力を失い地面へと落ちる。

それを、直前で掴み取った者がいた。

良かった……生きていてくれた。

コートを着込み、無精髭を生やした中年の男は少年の手を両手で固く握り締めながら、泣きそうな表情で呟いた。

その時、少年の双眸にほんの一瞬、だが確実に、光が灯る。

少年の前に跪き、抱え上げたその男の腕の中で少年は目を瞑り、意識を閉じた。

雨を降らせながらも依然として紅く染まる空。

その天井には、黒い太陽の様なモノがボンヤリと浮かんでいた。

（ そうか、これが…… ）

（ 彼の『始まり』、ですか…… ）

夢を見る。

どこまでも広がる草原の丘。

吹き抜ける風が緑の大地を優しく揺らす。

暁の空を、その光に染められた雲がゆっくりと流れる。

その緑の丘の頂に、彼女は立っていた。

遠くを見つめるその姿は、見る者に溜息を吐かせるほどに自然で。

纏う銀の鎧と青い服は、その様をより鮮明にさせる。

金砂の髪は蒼い風を受けて揺らめき。

宝石のような深緑の瞳には、黎明の空の光が宿っていた。

そして何よりも目を引くのは、彼女が地面に突き立てているその剣。豪華な装飾を施されたその剣は、間違いなく名剣。

もし銘を聞く事が叶うならば、聞き覚えのある位に名のある剣なのだろうと思われる。

彼女が持つ事で、その剣の威容が増しているように見えるのは果たして気のせいだろうか？

それ程に、その剣は彼女に似合っていた。

まるで、彼女の為だけにその存在が許されているかのように。

そんな彼女の背後には、幾万もの騎士達が群を成していた。

彼らは銀色に光る鎧を纏い、腰に大剣を差して彼女につき従っていた。

ある者は馬に跨り、またある者は槍を携え。

剣以外にも様々な武装の者がいたが、彼らはある一点のみ、共通した物を持っていた。

彼らの前に立つ彼女に向ける、その眼だ。

それに宿るは彼女に対する絶対の信頼。

彼女が一度声を上げれば彼らは一片の躊躇いも迷いもせず、雄々しく雄叫びを上げて草原を駆け抜け、草原の彼方にいる敵を討ち果たすだろう。

それは一点の曇りもない、主従の絆。

主に誠の忠誠を誓う、真の騎士の姿がそこにあった。

背後に多くの騎士を従え、暁の丘に剣と共に佇む彼女。

それはまさに騎士を束ね、その頂に立つ『王』のようで。

それ故に、彼女は美しかった。

(成る程、彼女は……)

(……『騎士の王』、だったんだな)

そして『二人』は、その夢を見る。

I n t e r l u d e E x t r a 1 - 1

『四番、ピッチャー、

』

ウオオオオオオオオ！！

場内アナウンスが、響き渡る歓声によって掻き消される。

『さあ、第 回、夏の高校野球甲子園大会決勝戦、聖皇学園 対 極亜久高校もいよいよ大詰め！ 九回裏、エラー、ヒット、フォアボールでツーアウト満塁、バッターはキャプテンの です！ 現在 2 - 0、聖皇学園のリード！ このままゲームセットか、それとも奇跡という名のドラマが待っているのか！？ 今、バッターボックスに が入ります！』

観客のポケットから、ラジオのアナウンサーの実況が響いてくる。

「キャプテン、頼むぜ！ 一発出ればサヨナラなんだぜ、サヨナラ！！」

「センパイ……お願い、打って！」

「むっん、一発頼むんだな」

「むっん、サヨナラなんだな」

「むっん、絶対勝つんだな」

「君、ここまで来たら後悔のないように、思いっきり行きなさい！　あなたなら出来るわ！！」

ベンチから、必死の声援が投げかけられる。

「キャプテン、ワシらは信じとるぞ！！」

「hey、キャップ！　ガツンといくネ！！」

「うん、君なら出来るさ！　決めてくれよキャプテン！！」

「キャプテン、ガッツツす！　根性ツす！　度胸ツす！　アンタなら絶対出来るっす！！」

「ふむ……こんな展開も悪くない、な……。僕を、いや僕らを野球部に引きずり込んで、ここまで引つ張つて来たキミに全てを託す、か。キミで終わるのならどんな結果でも受け入れる……でも、願わくば最高の終わり方を。頼むよ、キャプテン！」

ベース上に、コーチャーボックスにいる仲間から彼へ向けて檄が飛ぶ。

掛ける言葉は違えど、彼らが一樣に思っている事は唯一つ。

彼を信じている。

マウンドに立つ、目元をメガネの様にも見える妙な赤いマスクで覆い、左頬に白いバンテージを貼って緑の長髪を首の後ろで束ねた投手と、バッターボックスでバットを構える打者の視線が交差する。

互いの気迫が、視線の直線上で火花を散らさんばかりにぶつかりあう。

万の言葉を投げかけるよりも遙かに多く雄弁に、それは互いの心情の交錯を表していた。

やがて投手のボールを握る右腕に、打者のバットを握る両腕に力が

籠る。

観衆のざわめきが瞬時に静まり返り、一瞬の後に、所々から漏れる興奮気味の囁きと両サイドのベンチとアルプスから怒涛のように響く応援のみが、真つ向勝負のBGMとして超満員の甲子園球場に響き渡る。

「行くぞ、

」

「来い、『野球マスク』！！ 正真正銘、最後の勝負だ！！」

その言葉を合図に投手は大きく振りかぶり、次いで身体をこれでもかとはかりに後方に捻る。

やがて打者に対して完全に背を向けた体勢になった次の瞬間、猛烈な勢いで身体が捻り戻され、その勢いを駆って右腕からボールが放たれる。

その威力たるや、まさしく『剛球』。

バァン、と捕手のキャッチャーミットを大きく鳴らした後に、投手の背後にある電光掲示板が表示を示す。

『155km/h』

それと同時に揺れる場内。

次いで灯る黄色のランプ。

ワンストライクだ。

「
」

眼差し鋭く、無言で投手を見やる打者。

その身に纏う闘志はいささかも揺るぎを見せない。

むしろ、打者の闘志は色合いを変え形を変え、一段高い次元へ昇華していた。

無論、そんな物は言葉の綾であり、実際にはそんな物など見えない。
がない。

だが解るのだ。

例えるならば赤かった色彩が青へと、身体の周囲で揺らめいていたのが体の表面1mm付近で密度を増し、見事に凝縮されていた。

それは、それぞれ道は違えど一流の域にまで辿り着いた者のみがい得るモノ。

即ち、極限まで研ぎ澄まされた集中の果ての、静かだがどこまでも熱い烈火の闘志。

彼は間違いなく、野球において一流の域にまで辿り着いた力の持ち主だ。

それが天賦の才によるものなのか、はたまた永い努力の果てに辿り着いたものなのかはおそらくバッターボックスに立つ本人にしか解らないだろうが。

二球目。

キィィーン、と甲高く鋭い音が打者の振るったバットから響き渡り捕手の背後、バックネットの金網にボールが叩き付けられる。

次いで二つ目の黄色のランプが灯り、打者が追い込まれた事を告げ

る。

しかし、真に追い詰められたのは果たしてどちらなのか。

投手と打者、二人の表情からは判断出来ない。

電光掲示板に示されているのは打者側の不利だが、最早それだけでは測れないのだ。

これ程までの極限の死闘は。

投手がボールを持った右手を打者に突き付ける。

打者が右手に掴んだバットを投手に突き付ける。

場内が水を打ったように静まり返る。

決着の瞬間ときが来た。

静かに、だが力強くモーションに入る投手。

トルネード
竜巻を髣髴とさせる投球フォームから生み出される、ある種暴力的なまでの運動エネルギーで以て剛球が繰り出される。

しかし唯の剛球に非ず。

それは空気を切り裂きながらホームベース付近に辿り着くと、ファン、と投手の利き腕と反対の方向にほぼ直角にスライドした。

剃刀の如く切れ味鋭いスライダーだ。

並の打者ならばそれだけで空振りに終わる。

それどころか下手をすれば、この球がトラウマとなり野球を辞める者すらいるかもしれない。

しかし左打席に立つのは、決して凡庸な打者などではない。

彼はそれに対し、全力のフルスイングで立ち向かう。

しかし彼のフルスイングは尋常ではなかった。

ヒュン、という軽快な音と共に大気が歪み、そして真つ二つに切り裂かれる。

決して大柄とは言えない体躯から、まるで達人の居合でも見ている

かのような鋭いスイングを繰り出したのだ。

その勢いたるや、金属バットを日本刀と見紛う程だ。

剃刀と日本刀。

最高の切れ味を誇る物同士のぶつかり合いは、

果たして日本刀に軍配が上がった。

キィィーン、と金属バットの音が響き、白球はバックスクリーンへと飛び込んだ。

サヨナラ満塁ホームラン。

次の瞬間、割れんばかりの大歓声が球場全体を包み込む。

彼はベースを回りながら、眩しいほどの笑顔と共に右手を高々と天に突き上げていた。

ホームベースで歓喜の表情を露わにしながら、彼の名を叫ぶ仲間達。

天から降り注ぐ興奮混じりの歓声は、いまだ途切れる事はなく。

まるで全てのものがつながっているかのような、不思議な一体感。

抜けるような晴天の青空と、白く輝く太陽の下、その全てを包み込む野球少年の夢の聖地、『甲子園』。

そこには完成された、ひとつの確かな『世界』が存在していた。

(これが……)

(『彼の……』『原点』……)

I n t e r l u d e o u t

第十四夜 「真相を知る野球少年」 (前書き)

主人公の宝具のチートレベルが上がります。

まあ、主人公は弱いままなのですが……。

むしろさらに弱体化？します。

第十四夜 「真相を知る野球少年」

side 小波

「……………うあ！」

唐突に目が覚める。

辺りはまだ暗い。

布団から起き上がるが微妙に頭が重い。

二、三度首を横に振り、それを元に戻す。

「……………変な夢を見たな。……………あれ、間違いなく二人の過去だよな」

溜息と共に思わず呟きが漏れる。

三者間でレイラインで繋がっているから、そんな事もあるのだろう。

「こじった事はよくある事らしいし。」

「……………って、待てよ」

という事は……俺の過去も一人に見られた可能性が……。その可能性に行きついた瞬間、サーッと血の気が失せる。

アノ記憶ダケハ、見セテハイケナイ。

脳裏に自身の最大の黒歴史が再生される。

ふふーん。

「ぐあああああ……」

思わず頭を押さえ、畳を転げ回る。

それだけは、ソレダケハ知ラレルノハダメダ。

ナゼツテ、言ワナクテモワカルダロウ？

『アレ』以上ノ悪夢ナドアルカ？

イヤ、ナイ！！

勝手に放映される、史上最悪の脳内デジタル放送をすぐさまOFFにするべく、さらに激しくのたうち回る。

知らない人が見れば、確実にアブない人認定される事請け合いだ。

すると、

「……なにやってるの、アナタ。傍から見てる分には面白いけど、まだ朝の5時なんだから流石に他の家人の安眠妨害よ」

部屋の隅から涼やかな声が響いてきた。

その声に『放映終了』のテロップが脳内に表示され、安堵からふと顔を上げる。

「とりあえず、お望みの物を持って来たわよ。“マスター・小波”？」

「 ああ、リンか。御苦労さん、首尾は？」

「 言うまでもないけど、上々よ」

そこにはうつすらと微笑を浮かべた金の長髪の美女が、数枚の紙の束を持って壁に寄り掛かっていた。

「 ……成る程な。サーヴァントが敗れてエーテルから純粋な魔力に還元され、聖杯を通じて『英霊の座』へと戻る際の力と道を逆利用。龍脈から得た莫大な魔力で以て『世界』の壁を無理矢理こじ開け、そして『根源』へと至る一連の儀式。それが……」

「 そう。それが『聖杯戦争』の真の姿。願いを叶えるというのも嘘じゃないけど、英霊と龍脈から得た膨大な魔力を利用したあくまで副次的な物。隠れ蓑としてこれ以上都合のいい物はないわ。英霊は聖杯の『願いを叶える』という副産物を餌に召喚され、魔術師が『根源』に至るための、いわば『生贄』として利用されている、哀れな道具なのよ。この戦争の仕掛け人達にとってはね。そしてその仕掛け人というのが……」

「 アイツベルン、遠坂、そして間桐……いや、正式な家名は『マキ

リ』。人呼んで『始まりの御三家』か……ハア」

リンから渡された資料をパラパラと捲りながら嘆息する。

まさかこの戦争が『根源』などという、よく解らないモノに至るためだけに開催された出来の悪い喜劇だったとは。

『根源』というのはこの世の理の外にある、魔術師の系譜が何代にも渡って追いつめる至高の領域なのだそうだが、俺に言わせればそんなワケの解らないものに執着する魔術師の執念が理解出来ない。

リン（アクマの方の）から聞いた話では、魔術師は魔術の秘匿さえ問題なければ外道な事を平気でやるような連中ばかりらしい。

ロンドン
倫敦の時計塔にある魔術師を統括する機関、『魔術協会』も似たような考え方であるそうだ。

そんな倫理観のぶっ飛んだ連中の思想なんかは、理解など示せる筈がない。

リン（同上）自身はその性格故か、そういう奴等の行動を理解は出来ても許容は出来ないようで、嫌悪と忌避を露わにしている。

アイツらしいと言えばアイツらしい。

資料によれば、儀式に際してホムンクルス製造の大家であるアインツベルンは聖杯が宿る『器』を用意し、冬木の霊地の管理者である遠坂は聖杯降臨の土地を提供、マキリは英霊を使役するための令呪とサーヴァント・システムを考案した、との事だ。

聖杯戦争というのは、『戦争』という名前こそ付いているが実際はサーヴァントを純粋な魔力に還元するための儀式の事。

英霊七人分の魔力を器に注ぐ事によって、聖杯は完成する。

令呪も本来の使用法は、サーヴァントを呼んだその場で自害させるためのものであるらしい。

確かによく考えてみれば、それが最も効率がいい。

わざわざ七人の主従で以て争う事で、命を落とすリスクを背負う必要などどこにもない。

それが何故『聖杯戦争』という、非常に回りくどく危険な手法に切り替わったのか。

実はこの戦争は今回で五回目だ。

第一回は本来の手順で行われていたようだが利権を巡って御三家が争いを起こし、結局聖杯が顕れるまでに過程が至らず、参加者の全滅を以て幕を閉じる事になったそう。

二回目以降から利権抗争を防ぐため、そして抗争の火種である本来の目的を隠すために、『魔術協会』の人間を監督役として受け入れ

『聖杯戦争』としての体裁が整えられたが、第三回まで結局最後まで生き残れた者が皆無で聖杯が完成しなかったらしい。

第四回でようやく聖杯が顕現したようだが、それもどっいう訳か参加者の一人によって破壊されたんだとか。

それが10年前の事。

第四回までは60年周期で行われていたのだが、今回は10年後。

一体四回目で何があったんだ？

戦争中の秘匿と混乱のダブルパンチで、さしものリンもそこまで詳しくは掴み切れなかったようだ。

魔術師関連の秘匿情報は、某国の特A級国家機密よりも入手難易度が高いからな。

むしろ知識に乏しく専門外の機密情報を、よくぞここまで集めてくれたと頭が下がる思いだ。

「言峰綺礼。父言峰璃正ことみねりせいは第四次聖杯戦争の監督役。自身は魔術協会と聖堂教会の二つに籍を置く。魔術協会側の立場として聖杯戦争の監督役。そして旧教の総本山、聖堂教会の立場として……」

「『代行者』……神の教えに反する異端の存在を狩る殺し屋としての顔を持つ。そして第四次聖杯戦争において教会側の意向を受け、マスターとして聖杯戦争へと参加する……。正直、何を考えてるのか解らないわね、この男。得体が知れなさすぎるわ。この経歴一つとってもね」

資料から読み取った情報の中で最も腑に落ちなかったのが、教会に居る聖杯戦争の監督役、言峰綺礼に関する情報だった。

確かに経歴から見てもコイツは明らかに得体が知れず、嫌な気配しか感じられない。

魔術協会と聖堂教会は互いの思想と利害が全く一致しない、本質が正反対の組織だ。

その二足の草鞋わらじを履いている時点で、一体何がやりたいのか全く想像出来ない。

解るのは、代行者という異端の始末屋をやっている事からかなりの実力の持ち主であるという事と、父が監督役だった前回の聖杯戦争でマスターとしてサーヴァントを率いていた事から、この戦争でも監督役以外のリアクションを起こす可能性があるという事だけだ。

あんな伏魔殿染みた気配を放つ教会で、平然と神父をやっているよなヤツだ。

実際、人格が破綻してるんじゃないかと思えて来て仕方がない。

そしてそういうヤツほど、突如として思いも寄らない行動を起こす

ものだ。

「あの教会の異常な雰囲気といい、油断出来ないな。正直、現状では不用意に近付かない以外の対処法がないし、手詰まりだ。ただ、あの教会にだけはもう一度行ってみる必要があるな」

明らかにあの教会には何かがある。

陰惨で厄介なモノの気配しかしないが、それでも確かめておかなければならない。

「確かにね……でも、行くなら時期には気を付けなさい。タイムミスを誤ると、取り返しが付かないわよ。相手が相手だからね」

「解ってる」

真剣な顔で忠告してくるリンに対し、深々と頷いた。

「それから……厄介な相手と言えばもう一人いるわ。間桐臓硯……」

まどうぞうけん
間桐臓硯……

あなたが言っていた桜って娘の義理の祖父よ。……表向きは」

「表向き……？ それに義理？ どういう事だ？」

「間桐桜の旧名は『遠坂桜』……私と同じ名前の、あの凜って娘の一つ下の妹よ。およそ十年前、聖杯戦争が始まる直前に当時の遠坂家当主で二人の父、遠坂時臣とあさかときぢみの下から間桐まどうに養子に出されたの。それは別段不思議な事じゃないわ。魔術師の家系という事と当時の間桐家の状況を考えればね。ちなみに、遠坂時臣は第四次聖杯戦争に参加して命を落してるわ。問題はその娘を引き取った妖怪爺さん。その年齢は500を超えていると言われてるわ、勿論裏でね。そしてもう一つ、『蟲』を使うそうよ。」

「『蟲』？……蟲毒か何かか？」

「いいえ。これを調べるのには苦労したんだけど……『刻印虫』って知ってる？」

「いや……ん？ 待てよ、『蟲使い』……ッ、まさか！？」

「そう……自分の身体を何百匹もの蟲で形成しているのよ。だから『妖怪』。本当の肉体はとうの昔に捨て去ってるらしいわ。そしてその蟲達に人間を襲わせて、喰らわせたその血肉で以て自分の身体を構成する。そうやって500年を生きて来たそうよ。」

「…………『あの魔族』と似たような存在、って事か…………厄介だな。その手の相手の定石として、靈魂の宿った核がある筈だからそれをどうにかすれば倒せるんだが、あの時桜ちゃんから感じたものが正しかったとすると…………難しいな。下手に手を出せば、桜ちゃんが危ないし…………こつちも現状では手の打ち様がないな」

おそらく、その核は桜ちゃんの体内にあるのだろう。

間桐臓硯が話の通りの人外なら、あの時感じた感覚は決して間違っているのではないと断言出来る。

死体に寄生して己の肉体とする『パラサイト』というヤツを知っているから、それを察知出来たのだろう。

そして外道な人間というのは、総じて狡猾でもあるのだ。

しかも御三家の一ならば尚の事。

年齢を考えると第一回から聖杯戦争へ関わってきている筈だから、その執念は尋常ではないだろう。

この戦争でも何かしら動いてくるに違いない。

間桐家、加えて桜ちゃんの動向にも気を配らないといけなくなったな。

「あと、これはさして重要な事じゃないかもしれないけど……アイ
ンツベルンの情報を漁っていたらあの土郎って子の養父……衛宮切
嗣の情報もいくつか見つけたわ。どうやら衛宮切嗣はあの子を引き
取る以前、アイツンベルンの女性と結婚していて、子供も女の子が
一人いたそうよ。女性の名はアイリスフィール・フォン・アインツ
ベルン。そして女の子の名が、イリヤスフィール・フォン・アイン
ツベルン……ちなみにその頃には一桁後半の年齢だったみたいよ、
書類上ね」

「ちょっと待て、それって……」

ある意味、一番の驚くべき情報がそれだった。

まさか土郎君の養父である衛宮切嗣に娘がいたとは。

そしてその娘の名前がイリヤスフィール……つまり俺が呼び出され
た夜出会ったバーサーカーのマスター、イリヤだ。

しかしそれだとしてもおかしな点が一つある。

幼少の土郎君が衛宮切嗣に引き取られたのが十年前。

その頃のイリヤが既にその年齢だったのなら、イリヤの年齢は土郎
君と同じか、それよりも若干上だという事になる。

しかしイリヤの見た目は、ほんの十歳程度の少女のそれだった。

精神面に関しては幼さも割と目立っていたものの、それでも大人と同じような思考も併せ持っていたからどちらが本当だとは判断出来ないが、肉体と精神のギャップがありすぎている事実が残る。

「どういう事なんだ、と首を捻った所でアインツベルンがホムンクルス製造の大家だという事を思い出した。

つまり……、

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは、人間の父親とホムンクルスの母親の間に生まれたハーフ……って事なのか？」

「ええ、ホムンクルスは魔術による人工生命体。だけど完全な一個の生命体としては不完全な存在だから、肉体に何らかの不具合が起こるらしいわ。人間とのハーフであるその女の子も、それを受け継いじゃったのね。まあ一説では、ホムンクルスの存在そのものが神祕の塊だから、それに圧されて肉体に不具合が起こるとも考えられるらしいけど、実際の所はどちらだとも解っていないそうよ」

俺の導き出した答えに深く頷き、補足を入れるリン。

「そして衛宮切嗣は、アインツベルン側のマスターとして第四次聖杯戦争に参加していた……サーヴァント・セイバーのマスターとして」

「……セイバーだって？」

続けて放たれた言葉にハッと頭を上げ、リンに向き直る。

リンはもう一度頷くと、

「アナタがセイバーから聞いた『この時代に召喚されたのは初めてではない』という言葉と、十年前セイバーのマスターだった衛宮切嗣、そして最後の戦闘の結果起こった火災の現場から救い出され、養子として引き取られた衛宮士郎と、衛宮切嗣の实の娘で半ホムンクルスのイリヤスフィール・フォン・アインツベルン……遠坂・間桐も含めると、縁も辻褃も因縁も、見事に整い過ぎてるわね……この戦争、色々と根が深いわよ。もしかしたらもっととんでもないモノが出て来るかもしれないから、くれぐれも慎重にね」

警告と共に、報告を締めくくった。

「……さて、報告も終わっただし、報酬を頂こうかしら」

どこかに書類を焼き捨てて戻って来たリンは、唐突にそんな事を言
ってこちらに近付いてきた。

ちなみに入りは窓からだ。

あ……そういえばそれを忘れてた！！

「……悪い、ツケにしておいてくれ」

両手を合わせ、リンを拝むような形で頼み込む。

正直、あの提案だけは乗れそうにないからな。

いや、あれでも構わないといえは構わないのだが、でもなあ……。

『諸々の事情』を鑑みると、やはり躊躇してしまうのだ。

「……ハア、大方そんな事だとは思ってたけど、分かかって言ってる
の？ その場合、『利子』が高く付くって」

俺の言葉に、リンは首を振りつつ溜息を吐く。

「解ってる。でも、それでも頼む。やっぱりあの提案には乗れない。
俺にとってもお前にとっても、それじゃダメな気がするんだ。今度
また別の形で返すから、頼む！」

俺がそう言つとリンはしばらく沈黙した後、苦笑を浮かべながら、

「フフ……『アナタ』らしいわね。男女を問わず皆、『アナタ』のそんな所に惹き付けられているの、解ってるのかしら？ だからあの時『構わない』って言ったんだけどね」

何かしら、小さな声で呟いた。

「えっ、何だつて？」

よく聞き取れなかったので聞き返す。

だからリンは苦笑を顔に貼り付けたまま、

「何でもないわよ……まあ、今回はそれでいいわ。元々報酬は安めにしておいてあげるつもりだったし」

と、こちらの提案を受け入れてくれた。

思わず安堵の溜息を吐く。

「でも結構大変だったのよ。今屋根の上で見張ってるサーヴァントに襲撃を受けたりしたし、土地勘も伝手も知識もないから情報を拾うのも骨が折れたわ。ハニートラップなんかは使わなかったけどね。安心したかしら？」

すると一転、悪戯っぽい表情を浮かべながらリンが愚痴ってきた。

一瞬、同じ名前のアカイアクマと重なって見えたのは気のせいだろうか？

「いや、安心して何だよ……というか、お前いつもハニートラップで情報集めてたのか？」

「失礼ね。私はそんなに安くはないし、甘くもないわ。私に言わせるなら、ハニートラップを使ってるようじゃまだまだ一流よ」

「まあ、そうだろうけど……って、あれ？ ……おいリン、お前今サラッと聞き捨てならない事を言わなかったか？ ハニートラップの方じゃないぞ？」

「ああ、屋根の上のサーヴァントに襲撃されたって所？」

さして表情も変えずに、あっさりとリンは言い放った。

「それだ！ 襲撃されたって……アーチャーにか！？」

……道理でリン（アクマの方）が昨夜あんな発言をした訳だ。

あれにはかなり肝が冷えた。

というより……、

「……よく無事だったな、仮にも英霊相手に」

「まあ、戦闘スタイルはアナタから聞いて解ってたから、路地裏に誘い込んで最大の攻撃手段の弓を封じたのよ。接近戦は一応出来るようだけど、それなりでしかないようだったし。尤も私の隠行を見破れる、その眼力と技量は素直に感心出来るけど。相当場数を踏んでるみたいね、彼」

呆れる俺を余所に、やはり平然と述懐するリン。

確かにリンに接近戦に持ち込まれたら、アーチャーではまず勝てないだろう。

セイバーでも多分危ないし、もしかするとバーサーカーすら有利に相手取れるかもしれない。

リンの格闘技能は、それ程凄まじいのだ。

銃器を使う時点で却って弱体化している位に。

しかし……アーチャー、リンの隠行を見抜いたのか。

リンの隠行は最早“宝具”の域にまで達しているといつのに。

「……そろそろ時間ね。じゃあ、私は『還る』とするわ。機会があれば『あの子』によるしく言っておいてね」

薄く微笑を湛えながらそう言うと、リンの身体が発光し出す。

『タイムリミット』が来たのだ。

本当ならもうしばらくは大丈夫の筈だったんだが、おそらく相当無茶をしてきたんだろう。

おかげで僅かばかり『還る』のが早まったのだ。

「ああ、色々と助かった。ありがとう、“サーヴァント・アーチャー”……“リン”。また会おうな」

頭を下げ、心から感謝の言葉を述べる。

彼女は笑みを浮かべたまま全身が光の粒子に還元され、やがてそれは傍らに置いてあった鞆に納められたバット、『オール・イン・ワン全てに通ずる物』に吸い込まれていった。

さっきの彼女、リンは『サーヴァント』だ。

といっても、聖杯戦争に参加したマスターによって呼び出された者ではない。

“俺自身が呼び出した”サーヴァントなのだ。

これが『オール・イン・ワン全てに通ずる物』に秘められた反則的な“裏技”……『サーヴァント・システム』だ。

『オール・イン・ワン全てに通ずる物』の本来の機能の中に付随し、コストの八割と俺の魔力を触媒として『俺』と縁を持つ者達をサーヴァントとして召喚出来るこの機能。

一見、反則的な力のようにも思えるが、しかし使い所の難しい機能でもあるのだ。

まず、誰でも彼でも呼び出せる訳ではなく、聖杯戦争における七つのサーヴァントの基本クラスに該当する者のみが対象となる。

そして召喚された者は『単独行動：C』のスキルを無条件で取得す

るが、マスター（つまり俺）からの魔力供給で現界している訳ではなく、自前の魔力とスキルによる現界であるために、最大24時間しか現界出来ない。

加えてこの機能を使用中の『オール・イン・ワン全てに通ずる物』にはコストが20しか残っていない状態のため、変化できる武装に制限が掛かり、俺自身の戦闘能力が極端に減少してしまうのだ。

勿論、『サーヴァント・システム』を使用中でも『ヒーロー五人の英雄』を展開する事は出来るのだが、この宝具自体の効果は身体能力の向上及びスキルの追加。

つまり、あくまで『オール・イン・ワン全てに通ずる物』を使う事を前提としている宝具なのだ。

武器が制限されれば、いくら身体能力を上げてても手段が限られてしまったため、より効率的な戦闘手段を採る事が出来ず危機に陥ってしまう。

しかしそんなデメリットを上回るほどメリットが大きいのも確かだ。

『アーチャー』のクラスで召喚されたリンは、同じクラスであるアーチャー（アクマの方の）を圧倒した。

『俺』と縁を持つ者達は、俺なんかより遥かに強い実力者が腐るほどいるのだ。

それら呼び出して、サーヴァントとして共に戦う事の出来るメリットは計り知れない。

数の上での戦力アップ（その上良質）が可能だが、俺自身の戦闘力はアップさせるどころか逆に半減させてしまう。

使い所が難しいと言った理由はここにある。

一歩間違えれば呼び出した仲間より先に、弱体化した俺が倒されかねない。

そうなれば本末転倒もいいところだ。

こんな荒技が可能な理由。

それは『俺』自身の存在概念と、そして……。

「……………ッ！！」

「……………、……………」

「……………ん？」

と、思考に耽っていたら玄関の方から何やら言い争う声が襖越しに

聞こえて来た。

この声は……リンと桜ちゃん、か？

もう来ていたのか、桜ちゃん。

どうも玄関で二人がかちあったようだ。

しかし……一体何を言い合ってるんだろう？

「……行ってみるか、何か嫌な予感がするし」

一人呟くとゆっくりと腰を上げ、襖をそっと開ける。

気が付けば既に日は昇り、窓から差しこんでくる暁の太陽の光が俺の身体を緋色に染め上げていた。

第十四夜 「真相を知る野球少年」 (後書き)

『チームプレイ』が身に付いた!!

ステータスが更新されました。

リンのステータスについては「主人公召喚サーヴァントステータス」にて。

主人公召喚サーヴァントステータス（前書き）

身長・体重は作者の捏造設定です。

ネタバレ注意！！

主人公召喚サーヴァントステータス

【クラス】 ランサー

【マスター】 一ノ瀬小波

【真名】 大江（茨木）和那

【性別】 女性

【身長・体重】 192cm 78kg

【属性】 混沌・善

【筋力】 B 【魔力】 C

【耐久】 D 【幸運】 B

【敏捷】 A 【宝具】 C

【クラス別能力】

対魔力：D

シングルアクション

一工程による魔術行使を無効化する。

魔力避けのアミュレット程度に対魔力。

【保有スキル】

心眼（偽）：A

視覚妨害による補正への耐性。

第六感、虫の報せとも言われる。

天性の才能による危険予知である。

重力制御：A

自身、または触れている物の重力の働く方向を自在に変更できる『超能力』。

この能力を完全に使いこなせれば、自らが飛ぶ事はおろか戦艦をも持ち上げ、果ては山すら動かす事が出来る。

なお、重力制御が及ぶのは自分を中心とした半径5mの範囲まで。

居竦みの術：C

鋭い眼力によつて相手にプレッシャーを与える、古武術の技法。

幸運・宝具を除く相手のパラメーターにマイナス補正を掛ける。

仕切り直し：B

戦闘から離脱する能力。

また、不利になった戦闘を戦闘開始ターンに戻し、技の条件を初期値に戻す。

不殺の誓い：A

彼女自身が殺す事そのものを嫌い、立てた誓い。

自分の意思次第で、たとえ致死性の攻撃を直撃させたとしても相手を殺す事はなく、ダメージのみを与える事が出来る。

一種の制約ガッシュに近いが、リスクを背負う事はない。

“殺せない”という事そのものがリスクであるとも言える。

【宝具】

『ダークスピア漆黒の槍騎士』

ランク：C

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

彼女が纏う黒のパワードスーツ。

16インチの砲弾をも防ぐ耐久力を誇るが、仮に装着時に着弾した場合、果たして中の人間が衝撃に耐えられるのかというのは不明。耐久が2ランク上昇する。

加えて対物理防御力が大幅に上昇し、さらに魔術等の概念的干渉を受けにくくなる。

『ゲイ・ボルク突き穿つ死翔の槍』

ランク：B+

種別：対軍宝具

レンジ：5〜40

最大補足：50人

英雄『クー・フリーン』の持つ物と全く同じ代物。

ゲイボルクの呪いを最大限に解放し、渾身の力を以って投擲する特殊使用宝具。

もともとゲイボルクは投げ槍であり、使用法はこちらが正しい。

『ゲイ・ボルク刺し穿つ死棘の槍』と違い、こちらは心臓命中より破壊力を重視し、一投で一部隊を吹き飛ばす。

その様は炸裂弾そのものだ。

ダメージ、形状、共にケルトの光神ルーの持つ“ブリューナグ轟く五星”に迫る

が、「幾たび躲されようと相手を貫く」という能力から北欧の主神

オーディンの“ケングニル大神宣言”よりの宝具と言えよう。

尚、『ゲイ・ボルク刺し穿つ死棘の槍』は本来の使用法ではなく、クー・フリーンが独自に編み出したものなので彼女が使用する事は不可能である。

【詳細】

パワポケ10（表）で初登場。

2 mに届かんとという程の高い身長とそれに見合わない童顔、そして関西弁が特徴の女子高生。

祖父に仕込まれた古武術・茨木流の使い手で、こと槍の扱いに長けている。

また高い身長に伴って身体能力も異様に高く、バスケットボールを握り潰せる程の握力がある。

獰猛なドーベルマンすらも恐れることなく、容易に手玉に取れる猛者。

ただし性格は非常におとなしく、多少男性恐怖症の気がある。

10の舞台となった親切高校の裏の事情に巻き込まれ、重力操作の超能力に目覚める。

それが切欠で11（表）、12（表）では裏の世界へと足を踏み入れ、戦いの日々を送る事となる。

裏の世界での通り名は『スピア・ア・ロット千本槍』、『ダークスピアダークスピア』。

戦いそのものを楽しむ傾向があり、一つ間違えば『墮ちる』危険性がある事を彼女が身を寄せる組織のリーダーに見抜かれている。

実は彼女の年齢は“とある事情”から、10の主人公より1歳年上である。

『大江』という名字はその事情を鑑みて便宜上付けられた“通称”であり、本名は『茨木和那』なのだが10の主人公は本人が言い忘れたせいでその事を知らない。

ちなみに彼女の一族は、『酒吞童子』の一の配下であった『茨木童子』の子孫を自称しているが事実かどうかは定かではない。

10（裏）では『ヤシャ』という名で犯罪組織『レッドドラゴン』の凄腕の槍使いとして、13（裏）では『カズーイ』という名で新大陸『ニューホープ』の原住民の娘として登場した。

ランサーの他に、バーサーカーのクラスにも該当する。

【クラス】 アーチャー

【マスター】 一ノ瀬小波

【真名】 リン

【性別】 女性

【身長・体重】 168cm 55kg

【属性】 中立・中庸

【筋力】 B 【魔力】 B

【耐久】 C

【幸運】 B

【敏捷】 B

【宝具】 C

【クラス別能力】

対魔力：C

魔術発動における詠唱が二節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法など大掛かりなものは防げない。

単独行動：C

マスターからの魔力供給を断つてもしばらくは自立できる能力。

ランクCならば、マスターを失つても一日間現界可能。

【保有スキル】

心眼（真）：B

修行・鍛錬において培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場に残された活路を導き出す“戦闘論理”。

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

火器使用：C

火器の取り扱いに関する技能。

おおよその使用法と整備法・運用法まで習得している。

無窮の武練：A+

一つの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手續。
心技体の完全な合一により、いかなる精神的制約の影響下にあつても十全の戦闘力を發揮できる。

威圧：B+

オーラを纏い、相手に『重圧』を掛ける。

宝具を除く相手のパラメーターを1ランク下げる。

義妹愛：シスコンA

義妹に対する、秘めたる感情の発現。

義妹が近くに居るか、義妹の事が絡めば宝具を除くパラメーターが1ランク上昇する。

諜報：A++

情報収集能力。

その気になれば、某国の特A級国家機密すら入手が可能。

【宝具】

『サウザント・ウェポン幾多の銃火器』

ランク：C

種別：対人・対軍宝具

レンジ：1～40

最大補足：20人

コートの下に仕込んでいる武器を好きな銃火器に変更できる。
但し銃火器のみにしか変更できず（バズーカやランチャー程度は可能だが、弾道ミサイル等は不可）、ランクは必然的に神秘の宿って

いない物、すなわちランクEに固定される（但し、サーヴァント相手にも効果はある）。

その代わり弾数は無制限になり、弾切れを起こす心配はない。

『マイ・ライフワーク 全ては情報のために』

ランク：B

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1人

彼女自身はその身に纏う概念。

その効果は自身の完全なる隠行を可能にする事で、発動すれば気配は勿論の事、匂いや足音、果ては指紋の痕跡まで残す事はなく、機械・魔術如何を問わずあらゆる警報装置にも引掛からない。

但し『直感』や『心眼（真・偽問わず）』のスキルを持つ者で、そのランクがこの宝具のランクと同等以上だった場合、この宝具の効果は半減し認識されやすくなるが、本人の技量次第でカバーはいくらか可能。

【詳細】

パワポケ8（表）に初登場。

年齢不詳、経歴不明の超一流の情報屋。

8の主人公とは何やら因縁があるようで、腐れ縁。

義理の妹がおり、溺愛している。

格闘において右に出る者が居ない程の猛者だが、10（裏）では徒手である事を心配した義妹によって銃火器を持たされ、その技能は

封印されている。

その他9（裏）、10（裏）、12（裏）にも情報屋・連絡員として登場し、10（裏）では主人公の仲間として、戦闘において活躍する。

8以降の表作品（11裏も）でも、名前や立ち姿のみではあるが度々登場する。

8（表）のとあるルートで、8の主人公の事が好きだったという事が語られるイベントがある。

アーチャーの他に、バーサーカーのクラスにも該当する。

主人公召喚サーヴァントステータス（後書き）

新たにサーヴァントが追加されれば随時更新します。

第十五夜 「それぞれの意図と野球少年（前編）」（前書き）

何でこのクソ忙しい時に小説なんて書いてるんだろう……？

心理描写はやはり難しいです。

第十五夜 「それぞれの意図と野球少年（前編）」

Interlude 15 - 1

side イリヤ

「じゃあ行ってくるわね。リス、セラ」

背後に立つ二人に声を掛けつつ、大広間から門へと向かう。

「……今日も行かれるのですか、お嬢様？ 昨日も申し上げましたが今は聖杯戦争の最中。バーサーカーも連れずに外出されるのはあまりに危険です。出来れば御自愛頂きたいのですが……」

セラが心配そうな声を上げる。

でも……、

「……ごめんねセラ。でも解ってるでしょ、私には“時間”がないの。これが最初で最後の我が儘になる。だから……」

この聖杯戦争に勝っても負けても、わたしの人生の幕は下りる。

それはわたしが生まれた瞬間から、既に決まっていた事。

だからこそ、ほんの少しだけ我が儘を許して欲しい。

せめて僅かなりとも、悔いの残らないように。

それが例え、何の慰めにもならない事だとしても。

「……そこまであの男、エミヤシロウが気になるのですか？」

セラのその言葉にピタリ、と足が止まる。

あのアインツベルンにとって忌むべき男、エミヤキリツグの息子であり、わたしの義理の弟にあたる少年、シロウ。

確かにお兄ちゃんの事は気になっている。

だがお兄ちゃんに向けている感情が一体何なのか、それが今一つ良く解らない。

憎悪？ 渴望？ 執着？ ……どれも近いけど、しかしじっくりと来ない。

ただ、何かしらの感情をお兄ちゃんに対して抱いているのは自覚している。

だからあの時、家の前で待ち伏せしてサーヴァントを早く呼び出すよう警告をしたのだし、セイバーを呼び出したその夜にも襲撃を掛けた。

……もつとも、私の“預かり知らない”サーヴァントも一緒に呼び出したのは流石に予想外だったけど。

「違うわセラ。確かにお兄ちゃんの事は気になってるけどもう一人、それ以上に気になってる……ううん、興味を持ったのがいるの。今はそっちが優先……かな？」

背後に振り返り、セラに告げる。

その時、自分がうつすらと微笑んでいるのが自覚出来た。

すると何故か、セラが目を大きく見開いたまま固まっていた。

どうかしたのかしら、セラ？

イチノセコナミ。

クラス名カオス。

あの夜、アーチャーの矢から身を呈して護ってくれたイレギュラー
サーヴァント。

そしてその際、「わたしが死ぬのを許容できない」と言った。

それを耳にした瞬間、自分の中の何かが震えた。

勿論彼、コナミのその言葉はわたしの立場を理解した上で発言した
物ではない事は分かる。

あくまでコナミの倫理観に基づいた物だったのだろう。

しかし彼のその言葉は、確かにわたしの心を大きく揺さぶったのだ。

その時から、イチノセコナミの事が頭から離れなくなった。

寝る際に眼を閉じてても、彼の少し困ったような、それでいて穏やかな
微笑を湛えた顔が脳裏に浮かび上がってくる。

そして、コナミにもう一度会ってみたい、と強く願うようになった。

本当はお兄ちゃんが気になっていた筈なのに、今ではそれ以上にコ
ナミの事ばかりが気になっている。

だから昨日も、車を駆って冬木へ赴いたのに結局空振りに終わって
しまった。

(今日は、会えるといいな……)

玄関をくぐり、車へと向かう道すがら、灰色の空を見上げつつボンヤリとそんな事を考える。

我知らず口から漏れた吐息が、冬の冷たい空気に冷やされ目の前を白に染め上げた。

この時の自分が、まるで恋を知った少女みたいだと実感したのは、この時からもうしばらく経った後だった。

「イリヤ、嬉しそうだった」

「あんなに屈託なく笑われるとは……明らかにエミヤシロウの時とは違う。一体何がお嬢様を……？ 嫌な予感がします。リーゼリット、頼みましたよ」

「うん、わかった、セラ。お土産、買ってくるから。いつものでいい？」

「……え、ええ。くれぐれも、頼みましたよ」

I n t e r l u d e o u t

s i d e 士郎

……最悪の顔合わせだ。

「……どうして遠坂先輩がここに居るんですか？」

「おはよう間桐さん。こんなところで顔を会わせるなんて、意外だった？ わたし、今日からここで下宿する事になったから」

「……………ッ!？」

互いに廊下と玄関の土間でにらみ合う、二人の美少女。

その背後からは何とも言えない緊張感が立ち上っている。

玄関の呼び鈴がなった後、幽鬼のような表情で牛乳を飲んでいた（それを見た時はかなりショックだった）寝起きの遠坂がいなくなっていたのに気付き、嫌な予感がしたので咄嗟に駆けつけたものの、俺が間に入る余地などなく声がかげられない。

空気を読まずに立ち入れれば、ナイフでも飛んできかねないような不気味な緊張感が辺りを支配している。

「……………本当なんですか先輩？ 遠坂先輩が下宿するって……………」

いまだに驚愕が抜け切らない表情のまま、俺に気付いた桜が問いかけてきた。

「あ、ああ。ちょっとした事情があつてな。ごめんな桜。連絡し忘れてて」

動揺しつつも何とか答えを返す。

……………何というか、爽やかな朝には明らかに不釣り合いな、異様極ま

る緊張感で胃が痛くなりそうだ。

「まあ、そういう事よ。納得いかなそうな顔してるけど、家主である士郎が同意した事なんだから、これは決定事項なの。この意味、分かるでしょう?」

「分かるって……」

「今まで士郎の世話をしていたみたいだけど、しばらく必要ないって事。来られても迷惑だし、来ないほうが貴女の為よ」

突き放すような口調で「来るな」と釘を刺す遠坂。

桜は顔を俯けたまま、沈黙している。

と、不意に、

「……………わかりません」

小さな声で、しかしハッキリと呟いた。

そして俯けていた顔を上げる。

遠坂を見据えるその眼には、強い意志の光が宿っていた。

遠坂はそれに目を丸くする。

「え　　桜？　今、何て……？」

「……わたしには、遠坂先輩のおっしゃる事が分からないと言いました。先輩、台所お借りしますね」

啞然とする遠坂を尻目に桜は家に入り込み、スタスタと居間へ歩き去っていった。

「……………」

いまだに呆然と立ちつくす遠坂。

かく言う俺も、桜のあまりに意外な行動に何と言ったらいいのか判断がつかない。

だがそれよりも気になるのが……、

「遠坂。お前、桜が家に来てるって知ってたのか？　言った覚えは

ないんだが……」

遠坂の、桜が現れた時にも変わらず平静を保っていたその態度だ。

明らかに桜が毎回家に来て知っている事を知っていなければそんな事は出来ない。

「え　　？　　ああ、ちょっと小耳に挟んだだけよ。ただの偶然。それよりあの子、ここじゃあんなに元気なの？　学校とは大違い」

話し掛けられてようやく驚愕から立ち直った後、今度はやや不機嫌そうに呟く遠坂。

どうやら学校でも互いに顔見知りのようだ。

それならまあ、納得出来なくもない、か。

「いや、俺も今の桜には驚いてる。あんな桜は初めて見たな。家でも学校と特に変わりはないし……」

「そう……まずったわね。士郎に説明させるべきだったわ。まさか桜があんなに意固地だったとは」

「まずいって……何がさ？」

「これからこの家は戦場になるかもしれないよ。そんな所に桜を置いとけるわけないでしょ？ だからここに来ないよう^{たしな}窘めたんじやない」

……あれで窘めてたのか。

それにしても随分と挑発的だったが。

(しかし……あの分じゃ帰ってくれそうにないな)

確かに桜を巻き込む訳にはいかないし。

……遠坂には損な役回りをさせちまったな。

本当なら俺がやるべきだったのに。

「それで？ 桜はどの位の頻度でここに来てるの？」

「朝は毎日だな。夕方にも来るけどそう多くない」

「そう……ハア、これからは毎日になりそうね」

(毎日って……何がさ?)

首を傾げていた俺を見て、遠坂はもう一度深い溜息を吐いていた。

何でさ?

その時、既に起きていた小波が廊下の陰から、こちらを複雑そうな表情で窺っていたのには気付く事が出来なかった。

その後、小波とセイバーを加えた五人で朝食のテーブルを囲む。

俺がいない間に何かあったのか、遠坂と桜の間の緊張感は薄れている。

まあ、表面上は、だが。

桜はせっせと居間のテーブルにおかずを並べていく。

結局、桜に朝食を任せっきりにさせてしまった。

心持ち、セイバー（と桜）のおかずの量が多いのはご愛嬌だ。

あれ？ そついえば……。

「遠坂、お前さつき、「朝食は食べない主義」とか言ってなかったか？」

あの寝起きのひどい有様で牛乳を飲んでいた時に朝食抜き宣言をしたにも拘らず、ちゃっかりと席についている遠坂。

まさかいきなり前言を撤回するとは思わず、ついツツコミを入れてしまった俺は悪くない……等。

「……流石にこれだけ人数がいて、私だけ食べないっていう訳にはいかないでしょ？ そこまで空気が読めない女じゃないわよ」

不機嫌そつに鼻を鳴らす遠坂。

まあ、それもそつか。

「ええ、朝食は一日の活力源です。しっかり取らなければ元気が出ませんよ、リン」

相変わらずキラキラと目を輝かせ、目の前にある卵焼きをジッと見つめるセイバー。

「うん、朝飯は大事だぞリン。そんな事言っただんじゃ大きくなれないぞ」

昨日も着ていた中学の制服っぽい服を着込んだ小波の何気なく言った発言に、何故か遠坂の眉間にシワが寄る。

「アンタ……それは桜と違って胸に栄養が行かなくて大きく負け越しているのを知ってて言ってるのかしら？」

どこかしら怨念が籠っているような視線で桜の胸部と、次いで発言の主を睨み据える遠坂に対し、小波はつい今しがた、ハッと何かに気付いたかのように遠坂と桜、二人の胸部にそれぞれジッと目を向け、そしてゆっくりと瞑目しつっ一言。

「……」

深々と頭を下げ、遠坂に向けて誠心誠意、陳謝した。

「ちょっと!?!? そんななどことなく哀れみを含んだ謝罪はやめなさ

いよー」

バカにされたと思ったらしい遠坂が小波に食って掛かる一方、桜は両腕で抱きしめるように胸元を隠しながら、

「遠坂先輩……先輩の前でそれは……」

と、真っ赤になって何やらブツブツと言っていた。

そしてセイバーは小波に対して、どことなく非難めいた視線を送っていた。

まあ、何が、とは言わないが、セイバーも“遠坂寄り”だからな。

ほんの少しだけ騒々しい、だがいつもと変わらない満ち足りた雰囲気、朝の食卓。

(……あれ？ いつもこんな物だったかな？ 何か一つ、大事なことを忘れてるような……)

喉の奥に魚の小骨が引っかかったような、微妙にスツキリしない感触。

しかしそんな些細な感触にも拘らず、今度は放っておくと何かとんでもない事態を呼び起こしてしまいそうな、漠然とした不安感が脳

裏を過ぎる。

思い出せそうで思い出せない、微妙なもどかしさ。

だがしかし。

「ま、いつか。思い出せないんなら大した事じゃないんだろ
うし。じゃ、いただきます」

思考を放棄し、目の前の朝食に箸をのばす。

と。

「おはよー。いやー、ごめんごめん。寝坊しちゃった」

パタパタと音を立てて、藤ねえがやって来た。

「「「「おはようございます、藤村先生（藤村さん）（タイガ）」

「」

恐ろしい程ユニゾンする、俺を除く四人の挨拶。

……そうか、思い出せないことじゃなかったんだ。

ようするに、思い出さないことで問題を先送りにしたかっただけなのだ。

「土郎、ごはん」

行儀よく、いつもの席に正座する藤ねえ。

そこに桜がいつもの通りの、笑顔でお茶碗を渡す。

「？」

茶碗を受け取り、首を傾げながら静かにまによまによとご飯を食べる藤ねえ。

何か不思議なのだが、どうして不思議なのか理解出来ていないという顔だ。

そして一杯分のご飯をきっちり平らげてから、ボソボソと俺に耳打ちをしてきた。

「……ね、土郎。どうして遠坂さんがいるの？」

「それは、今日から家に下宿する事になったからかな」

淡々と事実だけを述べる。

藤ねえは、「へえ、そうなんだあ。今日から下宿ねえ。遠坂さんも変わったことをするのね」と、うんうんと頷きながら納得がいった表情でぐぐぐと味噌汁を飲み干す。

そして次の瞬間、

「って、下宿ってなによ士郎ーーーーッ!!」

大喝一声。

居間に虎の咆哮が響き渡り、どっかーんとテーブルが引っくり返る。

桜は風上に、遠坂は既に退避済み、そして小波とセイバーは幸運値高ランクは伊達ではないのか、座ったままの状態にも拘らず余波すら皆無で被害なし。

結果、俺に向かったのみ机の上から色々なモノが押し寄せる。

「あちー！ー！　ななななにすんだ藤ねえ！　味噌汁だぞ炊きたての飯だぞつくね煮込んだ鍋物だぞ！？　こんなんかけられたら熱いだろうっ　　て、何故に朝っぱらから鍋物なぞ……！？」

横合いから、「土郎君、ツツコミが遅すぎるぞ……まあ知ってて放置してた俺も俺だけど」と、どこか呆れたような表情で小波が呟いたのが聞こえたが、そんな些細なツツコミにいちいち反応する余裕なぞない！

「うるさい！　アンタこそなに考えてるのよ土郎！　同い年の女の子を下宿させるなんてどこのラブコメだい、ええいわたしゃそんな質の悪い冗談じゃ笑ってやらないんだから！」

「だあー！　笑いを取るつもりはないぞ、落ち着け藤ねえ！　桜、タオルタオル……って、襟元からつくねがあー！　必要以上に加熱されたつくねがあー！」

ドタバタと一気に騒がしくなってしまった朝の食卓。

……うん、これぞいつも通りの朝の光景だ……あれ？

おかしいな、涙が出てきたぞ？

閑話休題。

「とにかく、お姉ちゃんは女の子の下宿なんて許しません！ 遠坂さんにはちゃっちゃんと帰って貰いなさい！」

「でも、それならセイバーはどうなるんだよ藤ねえ」

「セイバーさんは事情が事情だし、小波君っていう彼氏が一緒にいるからいいの！ 遠坂さんは同じ学校でしょ！ 教師として保護者として、遠坂さんは絶対ダメ！」

「ちょ、ちょっと待ってくださいタイガ！ 私とコナミは別にこ、恋人同士、では……！？」

「……小波のブレザー着て言い訳しても説得力ないわよ、セイバー。よかったわね、小波が今ここにいないくて。というか藤村先生の発言、それはそれで問題あると思っただけどね」

怒涛の混乱が収まった後もやはりカオスだった。

居間にいるのは俺と藤ねえ、遠坂にセイバーだ。

桜と小波は無残な姿に変わり果てた居間を片付けるため、雑巾を探しに洗面所に行っておりここにはいない。

……判つてはいたが手強いな、藤ねえ。

こうなると生半可な事じゃ動かないぞ。

「ハア……しょうがないわね、これじゃ学校に遅刻しそうだし。助け舟、出して欲しい？」

平行線続きの説得状況に業を煮やしたか、遠坂が俺に耳打ちしてきた。

確かに遠坂ならばあるいは……。

「……頼む、遠坂の政治手腕に期待する」

躊躇いなどない。

俺は即座にバトンタッチを決断した。

「オツケー。それじゃサクッと解決しましょうか」

そうしてセイバーの横に立っていた遠坂は藤ねえと向かい合い、交

渉に入る。

結果は遠坂の圧勝。

遠坂邸の全面改装に伴いホテル暮らしを余儀なくされた所、それ位なら俺の家を使えばいいと言われたという嘘を中心に話を展開。

巧みな話術で押し切られそうになった藤ねえは、間違いが起こるのは嫌だからという理由で抗うが、屋敷の広さと俺の倫理観の高さを藤ねえに確認したところで勝負あり。

俺の育ての親として誇りを持っていた藤ねえは、その誇り故に敗北を喫したのだ。

結論としては、学校では極力秘密にして、家では藤ねえ自身が監督するということで落ち着いた。

最初は敗北に涙ぐんでいた藤ねえだったがそこは藤ねえ。

頭の切り替えは（良くも悪くも）早いほうだ。

そうと決まってしまうえば人数が増えたことが嬉しいのか、終始上機嫌だった。

「それじゃ、行って来ます。士郎も遅刻しないようにね」

玄関先、学校へ向かうため藤村さんと桜ちゃん、それにリンが靴を履く。

現在時刻は朝の七時。

学校へ向かうには少々早い時間帯だが、藤村さんは職員会議、桜ちゃんは弓道部の朝練がある。

リンは二人に便乗するようだ。

「悪い、藤ねえ。俺、しばらく学校休むから」

三人が玄関から外へ出ようとした矢先、唐突に士郎君の口から放たれた言葉にリンを除く二人の足が止まる。

藤村さんと桜ちゃんは怪訝な面持ちで士郎君に振り返った。

「先輩、どうかされたんですか？ 具合が悪い、とか」

「いや、他にやる事が出来たんだ。これは学校よりもずっと大事な事なんだ。少なくとも今においては。だから藤ねえ……」

「……………」

士郎君の強い視線を黙って受け止め、ジッと見据える藤村さん。

「……………士郎はもう決めちゃってるの？」

「ああ」

士郎君が力強く頷く。

それを見た藤村さんは一瞬の後、深々と盛大な溜息を吐き、

「ハアア……………士郎の頑固さときたら、一度決めたら梃子でも動かないのは切嗣さんにソックリ。どうしてそういう所だけ似ちゃうのかなあ……………。いいわ、士郎がそう決めたのなら何も言わない。学校の方は何とかしておくから。何をするのかは聞かないけど……………その代わり、やるからにはキツチリやり遂げなさい」

呆れた表情を浮かべながらも、士郎君の我が儘を受け入れてくれた。

……………いい先生だ、本当に。

「……………ありがとう、藤ねえ。しばらくしたらちゃんと復帰するから」

深々と藤村さんに頭を下げる土郎君。

そんな土郎君を、桜ちゃんが複雑そうな表情で見つめていたのを俺は見逃さなかった。

「……さて、行きましょうかシロウ」

三人を送り出した後、セイバーは道場へと歩き出す。

昨日言っていたように、土郎君に稽古を付けるのだ。

「……ああ、よろしく頼む。セイバー」

セイバーの後に従って歩きながら、力強く答える土郎君。

気合が入っているのはいい事なんだが……。

「ああ、言い忘れていましたがシロウ、今から私があなたに教えるのは剣ではありません。第一、今からでは余りにも時間がなさすぎます」

「え？」

と、唐突に振り返りざま、真顔で士郎君にそう告げたセイバー。

士郎君はセイバーの真意が読み取れず、ポカンとした表情を浮かべている。

「剣じゃないって……じゃあ、一体何を？」

「そうですね、一言で言い表すなら……“己の死のイメージ”でしょうが」

「……は？」

やはり真意を読み取れずに呆然としたままの士郎君。

彼が文字通り“骨身に染みて”それを理解するのは今から十数分後の事。

(……とりあえず、『救急キット』を用意しておくか。がんばれ、士郎君)

セイバーの真意と意図を既に理解していた俺は、士郎君とセイバーを見やりながらボンヤリとそう考えつつ、前に行く二人の後について行った。

第十六夜 「それぞれの意図と野球少年（後編）」（前書き）

やっとプライベートで一区切りがつかまりましたので更新です。

まだまだ忙しいのに変わりはありませんが。

第十六夜 「それぞれの意図と野球少年（後編）」

side セイバー

「はっ……!!」

「がっ……!!」

私の突きに吹き飛ばされ、道場の壁へと叩きつけられるシロウ。

……まったく、あれほど無暗矢鱈に突っ込んでくるなど言っているのに。

彼我の実力差は明らかなのだから、仮に隙を衝いたからといってシロウの攻撃など通用する訳がない。

「シロウ、先程も言いましたが、相手に隙が見えたからといって突っ込んでくるのはお止めなさい。むしろ敵が隙を見せたら逃げる好機と捉えるように」

「……そうは言っけどなセイバー。そんな事してたら倒せるヤツも倒せないだろ」

……呆れた。

まだそんな世迷言を。

「いいですかシロウ。何度も言うようですが、貴方がサーヴァントと戦う必要などどこにもありません。それは私たちの役目です。始めて数十分で、一撃で気絶しなくなったのは進歩と言えますが、それでサーヴァントとまともに戦えると思っているのならそれは勘違いも甚だしい」

「……………」

「貴方がサーヴァントと戦う状況というのは、我々が敗退した時です。そして貴方が身一つで戦えるほど、サーヴァントは甘くありません。ランサーやバーサーカーを見て、しかも一度ならず二度までも襲撃を受けていれば、それは嫌でも解る筈です」

シロウは床に崩れ落ちた姿勢のまま、顔を俯けている。

しかし手の中の竹刀を離さず、しっかりと握りしめている所を見るとまだまだその闘志は健在のようだ。

……やれやれ、骨が折れますねこれは。

やる気があるのは結構ですが。

「ですから私は貴方を限界まで追い詰めます。それこそ“死”というものを実感できるほどに。貴方のその危機感のなさは致命的だ。本来、生物ならだれもが持っている“死への恐怖”を覚えれば、貴方が真に採るべき行動をしつかり理解出来る筈です。この稽古はその為のものです」

「……解ってる。つまりセイバーは俺に“はつきりとした危機意識”を持たせようとしてるんだよな。“自分の死”のイメージが出来れば、否が応でも身体が危機回避反応をする。平時でも、有事でもな。俺には決定的にそれが欠けてるから、それを形成させようとしてるんだろう？　俺が聖杯戦争で生き残れるように」

「……解ってるのなら、立ち合いの際にがむしゃらに呐喊するのはお止めなさい。はつきりと言っておきますが、貴方には剣の才能はない。突っ込むだけでは逃走の機会も、勝機も逸する」

「そんな事、自分でも解ってるさ……。でもなセイバー、俺だって男なんだ……。意地があるんだよ、男には！！　負けっぱなしでいられるか！！　絶対にセイバーから一本、奪ってやる！！」

言葉と共に、弾かれたように立ち上がるシロウ。

そして雄叫びと共に竹刀を振りかぶり、私に立ち向かって来た。

その意気やよし………と言いたい所ですが。

「せい」

「がふつつー！」

この点に関しては全く進歩していない。

特攻の勢いを逆に利用し、自ら半歩前に出て高速の突きを鳩尾に向け放つ。

自分の加速力を利用され威力が倍加した突きをまともに受け、シロウは再び壁板に勢いよく叩きつけられた。

意図を理解していながらどうしてこうも同じ事を繰り返すのか……頭が痛い。

「つつ……！ 悪いな小波、手当てして貰って」

「いや、別に構わないけど……そう思うんだったらもう少し駆け引きとか考えたら？ あんな猪突猛進じゃいい的だよ。どうしてこう視野狭窄になるかなあ？ はい次、これを飲む。疲労回復に効くから」

あれから数十分打ち合い、シロウが本日何度目かのノックアウトをした所で小休止と相成った。

目の前ではコナミがどこから持って来たのか、救急箱の中身を使ってシロウの傷の手当てをしながらアドバイスしている。

ちなみにシロウに渡した液体の入ったビンのラベルにはドクロマークのプリントと共に、『パワビタD：Dr・ダイ……』と書かれていたのがチラッと見えた。

……効くのでしょうか、あれ？

何かイヤな予感がヒシヒシと伝わってくるのですが。

まあ、それはコナミを信じるとして。

「それは解ってるんだけど、な……どうもセイバーと向かい合っていると、段々焦ってくるんだ。実力が違い過ぎてるのが嫌でも伝わってきて、このままじゃマズいな……って」

「そういう時こそ焦りは禁物です、シロウ。才能のない貴方が仮に私から一本取れるとしたら、どこまで自身と相手の状況を冷静に読み取れるかが鍵になってきます」

それが出来るようになれば、この戦争でシロウが生き残れる確率は

格段に跳ね上がる。

しかしそれが身に付く確率は、あまりにも低いと言わざるを得ない。時間が足りない事もそうだが、何より経験と、“己が死ぬかも知れない”という事から来る恐怖感が希薄、あるいはないという事が致命的だ。

だからこそこの訓練なのだが、今までの様子を見てるとやはり望みは薄い。

本来、人間が恐怖に駆られるというのは何も恥すべき事ではない。

何故ならそれは、どんな生物も等しく持っている『生存本能』のなせる業だからだ。

死への恐怖から来る“死にたくない”、“死ぬわけにはいかない”という強い感情が、自らが生き残る最善・次善の道を本能的に教えてくれる。

戦場における『機微を読み取る事』とは、そういった物を背景としている。

しかしシロウにはどういふ訳かそれがない。

いや、ないという事はないのだろうが、しかしそうと感ぜられるほどに自らの命への執着心が薄いのだ。

まるで己の命に価値などない、とでも言うかのように。

何がシロウをこうさせたのか。

……実はある程度、見当は付いている。

『あの時』見た光景が確かならおそらくは……いや、それは今考えるべき事ではない、か。

とにかくどうすれば……、！……ふむ、機会としては丁度いいかもしれないですね。

「そうですね……コナミ」

「ん？ どうした、セイバー」

処置を終え、諸々の薬品と道具を救急箱にしまい込んでいるコナミに提案する。

「ひとつ、私と勝負をしませんか？」

「え？」

「コナミは剣も扱えるのでしょうか？ いつかはコナミの剣を見たいと思っていましたし、いい機会です。今までのコナミの行動を鑑みるに、貴方からはシロウも学ぶ所が多いと思います」

side 小波

躲す、合わせる、弾く。

「はっ………！」

「……………ッ！」

パン、パンと竹刀の乾いた音が道場に響き渡る。

セイバーの斬撃は一撃一撃がとんでもなく重く、そして正確無比だ。

受ける度に伝わる衝撃に手が痺れ、鋭く無慈悲に叩き込まれる竹刀に恐怖を呼び起こされる。

しかしそれでも、

「くっ………！」

迫りくる強撃の軌跡を確実に捉え、両の手に握った獲物でやり過す。

野球選手にまず必ず必要とされるものは何か？

完成された肉体？

卓越した技術？

否。

『強靱な精神力』

これに尽きる。

強靱な精神は極限までに研ぎ澄まされた集中力を自身に齎す。

それがすべてのパフォーマンスを高みへと昇華させるのだ。

肉体の動作に集中を振れば無駄のない、効率的な身体操作を可能にする。

見ることに集中すれば視野が広がり、主観的な時の流れを操作することすら造作もなくなる。

そしてそれは野球に限った事ではない。

「……大したものです。私の剣を技量のみでここまでやり過ぎすとは、一般人並みの身体能力しかない者とはとても思えない。手は抜いていないつもりなのですが」

「……これでも一杯一杯だよ。あらゆる点でセイバーは俺の上を行ってるんだし」

刹那の剣戟の後に互いの距離が離れる。

熱を持った吐息を吐きながらもセイバーから目を離さない。

俺の言った事は厳然たる事実だ。

俺自身の肉体的スペックはセイバーに遠く及ばない。

パワーも、スピードも、技術も、およそ剣の打ち合いにおいて必要とされる能力では何一つ。

唯一、分があるとすればそれは『眼』だ。

バッターはピッチャーのモーションの一挙手一投足、そして放たれる一球に全集中力を傾ける。

極限まで高められた集中力は相手の動作の全貌を脳に投影し、ボールが到達するまでの刹那の瞬間を永遠にまで引き延ばす。

すなわち、視野・動体視力を極限まで引き上げるのだ。

そして視覚から得られた情報を元に、反復練習の果てに反射の域にまで至った無駄のない身体操作でバットを振るい、真芯でボールを捉える。

今まで幾度となく繰り返し返してきた事。

『観る』事に極限まで集中力を集め、攻撃が繰り出される刹那の間までセイバーを観察する。

腕の位置、足運び、視線、筋肉の動き、気配。

それらのあらゆる情報を元に攻撃を予測、最善・次善の対処法を即座に導き出す。

『心眼』

蓄積された経験が造り上げたそれが、セイバーに遠く及ばない俺の実力を補い、互いの力を拮抗せしめていた。

但し、作りだせる状況はあくまで『拮抗』のみ。

「くっ……」

セイバーには未だに一太刀も加えていない。

いや、加えられないのだ。

セイバーの苛烈な猛攻は、こちらに攻撃に移るチャンスを与えてくれない。

必然的にこちらは防戦一方になる。

「せいっ!」

「……ああっ!」

目にも止まらない速度で再度踏み込んできたセイバーの上段の剣を、僅かに見て取れた情報と勘のみで辛うじて受け止める。

受けた竹刀がミシミシと有り得ない音を立てて軋むのが伝わってくる。

(……まったく、解つてはいたけどなんて剛剣だよ! これじゃ明らかに竹刀が持たない!)

下手をすればこのまま折られてしまう。

即座に両手の竹刀を僅かに傾けて半歩踏み込み、威力を流す事で剣閃を逸らす。

その御蔭でセイバーに僅かな隙が生まれる。

……が、それは『誘い』。

踏み込めば死ぬぞと本能が警告を発している。

士郎君はセイバーの隙を読み取る事は出来たが、それが罠だとまでは読み切れなかった。

故に、一撃を打ち込まずに即座に身体を引き、セイバーと距離を取る。

結果出来上がる、始まって何度目かの距離を置いての睨み合い。

完全に双方手詰まりの状況だ。

「……………」

「……………」

お互いに無言のまま構える。

機先を制そうとする互いの気迫がジリジリと空気を焦がす。

そして制するのはやはり、こと剣においては何者にも勝る剣の英雄、セイバー。

「ッ！」

こちらの呼吸を読み、それに合わせて重心を前方へと移動させ、剣戟の初動に入る。

今まさに均衡が破られようとしたその瞬間。

グウ~~~~ッ
.....

セイバーのお腹から、緊迫した雰囲気を真っ二つにへし折る盛大な音が鳴り響いた。

「.....」

「……………」

動作の途中でピタッ、と固まる俺とセイバー。

さっきまでとはまた違った、微妙な沈黙が場を支配する。

えーと……………何だ、とりあえず……………。

「……………もうお昼前だし、こころで切り上げようか」

「……………はい」

羞恥で顔を真っ赤にしたセイバーは、俯きながら首肯した。

「……………カッキーン!! ………………ってね」

鼻歌を歌いながら青空の下、道を歩く。

「しかし……ここ、娯楽施設がないなあ。ざっと見て、かろうじて本屋があるくらいか……何か勿体ないような。でもまあ、こういうのも悪くないな」

ここはマウント深山商店街。

冬木の住宅街、深山町住人御用達の昔堅気の秀囲気漂う商店街だ。

士郎君も買物にはここをよく利用しているそうだ。

何故俺がこんな所に居るのか。

一言で言えば、『お使い』だ。

セイバーの腹の虫の御蔭で早めの昼食にしようとした所、丁度食材が切れてしまっていたのを士郎君が思い出したのだ。

まだ疲労が抜けきっていない士郎君に代わって俺が買い出しを買って出、財布を預かりここに来ている。

ただご飯のお預けを喰らったセイバーにお土産を要求されたが、別に俺の懐が痛む訳ではない（それ以前に一文なしだが）ので適当に何か見繕って帰るつもりだ。

まだ十二時になっておらず、道のおちこちには昼の買い出しをする主婦の方々がチラホラと見受けられる。

流石にあの学生服では奇異の目で見られてしまったため、家を出る前に衣装替えて服を替えている。

今現在の俺の格好は、羽を一本アクセントに差した茶色の鍔の広い帽子に同じく茶色の外套を纏い、黄色の長いマフラーを首に巻いて後ろに流している。

パツと見ると、昔の映画なんかに出てくる風来坊みたいな恰好だ。

……一歩間違えればどこかの小汚いホームレスだが。

そして数十分後。

「はあ……やっと終わったぞ。しかし……おばちゃんを筆頭とする主婦のパワーは凄まじいな。まさか昼のタイムサービスで死闘を演じる事になるとは……」

ヨレヨレになりながら買った荷物を引つ提げスーパーから出る。

店に入ると同時に十二時のタイムサービスがアナウンスされ、これ幸いとそこに向かったのだが甘かった……。

向かった先で目にした物は、主婦の悲鳴と怒号が飛び交い、幾人もが押し合いへしあいを繰り返すまさに泥沼の戦場だった。

飛び交う罵声の中、躊躇しながらも覚悟を決めて死地に飛び込み、もまれにもまれながらブツをどうにかゲット。

しかし、そこを抜け出した後にも至る所が戦場で。

買い物物を全て終えた頃には、もはや精も根も尽き果ててしまった。

……あの人達のあの勢いなら、聖杯戦争なんてあっという間に勝ち抜けるかもしれない。

「ふう……さて、買う物も買ったし、適当にお土産を買って帰るかな」

呼吸を整え、気分を切り替えた俺はたまたまスーパーの近くにあった大判焼き屋の屋台から、大判焼きを十数個購入。

とりあえず購入者権限で一つ先に失敬し、齧りつく。

……うん、うまい。

「……ですからお客様、この紙幣では……」

「……………」

「…………ん？ 何だ？」

大判焼きを齧りながら歩いていると、自分の右手にある店からどこか困惑気味な声が聞こえてきた。

看板を見るとどうやらケーキ屋の様だ。

入口の傍に異様に頭の大きい、可愛く舌を出した女の子のマスケット人形が置いてある。

ん、名札が付いてるな……『ベコちゃん』？

(…………どれどれ?)

ちょっと気になったのでガラス越しに中を覗くと、カウンターを挟んで二人の女性が向かい合っていた。

一人はエプロンを身に付けた店員らしき人(結構若い)。

そしてもう一人は…………。

(……何だ、あれ？メイド服……？でも“アイツ”が着てたのとは随分違うな。……いや、あの“なんちゃって腹黒メイド”と比べる事自体間違ってるか。そもそもあれも“アイツ”が自分で勝手に作って着てたヤツだし)

天使のような笑顔から繰り出される、容赦なく心を抉る毒舌。

“アイツ”に聞かされた悪口雑言が頭の中を駆け巡るが無視して、店員さんと向かい合っているその女性を観察してみる。

頭巾まで付いている、白を基調とした本場っぽいメイド服を着たその女性は、明らかに日本人ではなかった。

透き通るような白い肌と赤い瞳。

そして無表情、というかどこかぼんやりとした表情をしている。

美人といえば美人なんだが、何というか……所謂『お人形さんみたい』といった形容が一番しっくりくるな。

「これは明らかに日本のお金ではありませんし……あの、日本円はお持ちではないんですか？」

「……これしかない」

今にも泣き出しそうな表情の店員さんに対して、変わらず無表情のメイドさん。

声に張りがない辺り、申し訳ないとは思っているようだ。

(えーと、つまり……あのメイドさんが間違っって外国のお金を持って来ちゃってて、それでケーキを買おうとしたから店員さんが困ってるって事か?)

状況からして当らずとも遠からず、といった所だろう。

うーん……どうしたものかな？

とりあえず、懐から財布を引っ張り出し中身を確認。

……うん、これなら多分大丈夫か。

(ごめんよ土郎君、これも人助けのためだ)

心の中で陳謝しつつ、俺は店の中へと入っていった。

「ありがとうございますー！」

色々な意味が込められた店員さんの感謝の声を背にケーキ屋から出る。

……メイド服の女性と一緒に。

女性の手にはケーキの箱が握られている。

「今度はちゃんと日本のお金を持って来るようにね。あれじゃ買い物出来ないから」

「うん、わかった。ありがとう」

そう言うと彼女はほんの少しだけ、表情を柔らかくした。

無表情がデフォルトラしい彼女だが、無表情なりに表情はあるようだ。

「でも、よかったの？」

「あのお金とこっちのお金を交換した事？ 大丈夫だよ、気にしないで。……あとでちゃんと謝つとかないとな。まさか半分近く中身が吹っ飛ぶとは……」

「？」

俺の様子に小首を傾げるメイドさん。

どうやら後半の方が小声だったため、聞き取れなかったようだ。

「ところで、キミの名前は？ 流石に“メイドさん”じゃ何だし」

「……リゼリット。リズでいい」

「そっか。俺は小波。一ノ瀬小波だよ」

「コナミ……うん。コナミはいい人」

「あはは、それはどうも。ケーキ屋にいたって事は、リズはケーキが好きなのか？」

「セラが気に入ってるから。こっついう庶民の味」

「……庶民？」

まあ、メイドさんの居るようなところじゃ、あの『ベコちゃん』のケーキ屋も庶民階級の店になるのか。

お抱えのシェフとか居そうだからな。

「あ、そうだ。これ食べる？ 一個100円もしない安物だけど」

そう言っつて大判焼きの袋をリズの前に差し出す。

流石に自分だけ食べるのもアレだし。

「……………いいの？」

「ああ、もしかしたら口に合わないかもしれないけど」

あんこを使ってるし、カテゴリとしては和菓子だからな。

外国人にはちょっとキツイかもしれない。

まあ、セイバーなら多分大丈夫だろうが。

何せあの食欲だ。

「……ありがとう」

リズはそう言うと袋に手を伸ばして大判焼きを一つ取り上げ、そのまま口に運ぶ。

もきゅもきゅと咀嚼し、飲み込むとリズの目じりが僅かに下がっているのが判った。

どうやら口に合ったみたいだ。

そうしてリズと二人で大判焼きを食べながら歩いていると、

「……えっ！？ リ、リムジン！？ 何でこんなどこにもありませんな公園の路肩に！？」

帰り道の途中にある公園脇の道路の路肩に、いかにも高級そうなリムジンがデンと停めてあった。

不用心にも程があるんじゃないか、これ？

車泥棒とか車上荒らしにとっては格好の獲物に違いない。

……あれ、待てよ？

確かこの車って昨日……。

「……あ」

「ん？ どうしたリズ？」

ふとリズの方を見てみると、何やら真剣な眼でリムジンをジッと見つめ、次いで公園の方にその視線を向けていた。

つられて俺もフツと公園に視線を移す。

公園の片隅に一つだけポツンと置いてあるベンチ。

そのベンチに、誰かが座っていた。

「あれは……」

雪のように白く長い髪。

ルビーのような紅い眼。

そしてベンチから足が地面に付いておらず、ブラブラと揺らしてい

る小柄な少女。

間違いない、あれは……。

「……イリヤ？」

あの夜、アーチャーの矢から身を呈して護った白の少女がそこにいた。

俺の声が聞こえたのか、顔を下げているイリヤはパツと顔を上げて俺を見つけると、何故か心底嬉しそうに顔を綻ばせた。

「あ、コナミ！ 良かった、やっと会えた……って、え？ どうしてリズがコナミと一緒にいるの？」

そして俺の隣にリズがいる事に気付くと、今度は不思議そうな表情をしながら首を傾げた。

この時の邂逅が、後に少女の運命を大きく変える事になる。

第十六夜 「それぞれの意図と野球少年（後編）」（後書き）

筋力・技術・変化球・素早さが上がった！！

ステータスが更新されました。

11月25日についに発売されたパワポケ13、現在プレイ中です。

やはり面白いですね、パワポケは。

しかし12に引き続きまたしてもバグが……しかも今度はアルバム
の。

今日初めて知りました。

回避方法はあるようなのですが、それでもかなりシヨックです。

第十七夜 「白の少女と野球少年」？（前書き）

今年はあと一話が限界かな……？

第十七夜 「白の少女と野球少年」?

Interlude 17-1

side 士郎

「ふっ……」

道場から引き上げた後、セイバーと二人、居間でブレイクタイム。

口に持っていた湯呑を置き、一息吐く。

まだ身体中がギシギシと悲鳴を上げているが、小波の処置と薬の御蔭でそこまでひどくはない。

しかし何だったんだ、あの薬？

確かに効き目はあったがラベルにドクロマークとか、本当に薬として扱う気があるのか、あれ？

むしろ劇薬指定のラベルだろう、どう考えても。

まさかどっかのマッドな博士が作った試作品……とかじゃないよな？

「どうでしたかシロウ。コナミの剣を見て」

向かいに座ったセイバーが尋ねてくる。

……片手に齧りかけの煎餅を持って。

そしてテーブルに置いたセイバーの湯呑の前には、煎餅の袋が散乱している。

昼食までのつなぎにと思って出した茶菓子だったが、目下食い尽されかけている。

それはもうエライ勢いでバリバリと。

どうやらよっぽど空腹なようだ。

「……いや、凄いな小波は。アイツ、セイバーの剣をしつかりと目で捉えてたし、セイバーに出来た隙に一切打ち込んで行かなかった。判ってたんだ、あの隙は“わざと作られた隙だ”って事に。それに……」

ホント、アイツには毎回驚かされる。

俺と大して変わらない身体能力しかないのに、あのセイバーの剛剣を見切って見事に防ぎきっていた。

そして俺と決定的に違うのは、セイバーに出来た隙を絶対に突こうとしなかった事だ。

普通なら唯ひたすらに臆病な姿勢に見える小波の戦法。

しかしそれは全く違う。

アイツはしっかりと見抜いていたのだ。

『あそこに踏み込めば死ぬ』という事に。

……あれが“自らの死の気配を感じ取る”って事なのか。

仮にそうだとして、果たしてあの芸当が俺に出来るのだろうか？

そのためにセイバーは俺を鍛えてくれている訳だが、自分の今の惨状では到底無理なのではないかと思えてくる。

確かに俺だって死ぬのは怖いし、なりすぎな位慎重になっているつもりだ。

しかし、それでもまだ足りないって事なのか？

だったら俺に欠けている物って一体……何なんだ？

「そうですね。実はあれは私の全力ではありませんでしたが……しかしまさかあそこまで見事にやり過ぎられるとは思いませんでした」

セイバーは俺の言葉に深く頷き、湯呑に手を伸ばす。

「そうなのか？ 俺には二人とも全力で打ち合ってるように見えただが。ちなみにあれでどれ位の力だったんだ？」

「本来の七割程度、といったところでしょうか。ですがあれなら、仮に全力で打ち合ったとしても十分渡り合えたと思います。勿論最終的には私が勝つでしょうが……しかし」

するとセイバーは不自然に言葉を切り、湯呑を口に持って行きかけた所で何やら難しい顔になった。

一体どうしたんだ？

「どうしたんだセイバー？ いきなりそんな顔して」

気になったので尋ねてみると、セイバーはその表情を崩さなのまま、

「……いえ、大した事ではないのですが……彼の太刀筋に妙な違和感を感じまして」

そんな不可思議な事を言ってきた。

「違和感……？」

「ええ、彼の剣は、何と言いますか……誰かの剣技を“使っている”ような、ふとそんな感じがしたのです」

右手に持った湯呑を左右に揺らしながら、セイバーは訥々と言葉を紡ぐ。

「ブレ、ムラ、不慣れ……色々な表現が出来ますが、しかしどれもしっくりと来ない。確かにあれはコナミ自身の剣の技だ。ただ誰かの剣技を模倣……『借りている』だけではあの實力は発揮出来ない。それは解るのですが、やはり何度思い返しても違和感が拭えない。まるでコナミの身体を使って“別の誰か”が剣を振るっているような……ううむ、やはり上手く言い表せない」

上手い表現が思い浮かばなかったセイバーは、低い唸り声を上げて遂には頭を抱え込んだ。

(…………ふむ)

腕を組み、思い返してみる。

剣の素人である自分からは、小波の剣には違和感など感じられなか

った。

しかし剣の英霊であるセイバーから見ると、小波の剣はどこか不自然だと感じられたらしい。

まあ、そもそも高校球児だったらしいし、それなら違和感位……あれ、待てよ？

「なあ、セイバー」

俺の呼びかけに、抱えて込んでいた頭を上げるセイバー。

「……はい？　どうかしましたか？　シロウ」

「小波って……一体いつ、どこで剣を学んだんだ？」

「……は？」

俺の言った事が上手く飲み込めないのか、セイバーは目を点にする。

「いやほら、アイツ昨夜、自分を“高校球児だった”って言ったんだろ？　それにプロにも指名されたらしいし。まあ、呼び出した時からユニフォーム着てたしそれは解るんだが、もしそうなら剣なん

て鍛錬する暇があったと思うか？」

「……………！ それは……………確かに」

俺の言わんとする事がようやく飲み込めてきたのか、セイバーはしきりに頷く。

「私はヤキユウの事は詳しくは知りませんが、仮にコナミが自分の時間の多くをヤキユウに割いていたとすると、あれだけの芸当が身に付くのは明らかに不自然です。ヤキユウに対してかなり思い入れを持っていたようですから、ヤキユウに長年携わっていたでしょうし……………確かに剣を学んでいる暇があったとは思えない」

「ああ、しかもそれだけじゃない。アイツは拳銃も平気で扱っていたし、盾も難なく運用してた。それに『霊力』のスキルと、あの宝具もだ。ただのいち高校球児が持つてるといいうのは明らかに何か間違ってる気がする」

「ええ、それに咄嗟の判断力と危機回避能力、そして戦術眼……………間違いない、コナミは戦闘の玄人だ。しかもかなりの修羅場をくぐつて来た」

それが俺達が至った『結論』。

「「……………」」

セイバーと顔を見合わせ、互いに口を閉ざす。

野球のユニフォームなんて有り得ない物を着ているから惑わされがちになるが、今までの事を総合してみれば明らかに小波は“異常”だ。

そんな事はあの夜、イレギュラーサーヴァントとして召喚された時から解っていたというのに、何故そうだと上手く認識していなかったのか。

高校球児でありながら、それに似つかわしくない高い戦闘能力を持ち。

その奇異な見た目に反して、異様に“戦い慣れ”ている。

一般人と殆ど変わらない身体能力しか持たない身であるにも拘らず、いつでもどこから得たのか解らない技量のみでセイバーと渡り合った。

その存在も、力も、宝具すらも、何もかもが認識の枠を外れた『規格外』。

(小波……お前は一体、何者なんだ?)

天井を仰ぎ、思わず心の中で問いかけるが当然、答えなど帰って来

る筈がなかった。

「しかし……遅いですね、コナミは。あれから一時間は経つというのに」

「……そういえばそうだな。もしかして、迷ってるのか？」

いつの間にか煎餅をすっかり胃の中に収めてしまったセイバーが、時計を見やりながら呟く。

煎餅を喰らい尽しても、空腹は誤魔化しきれなかった様だ。

限界が近いか？

居間の時計は、午後の一時に差しかかるうとしていた。

(……俺も腹減ったな、早く帰ってきてくれ小波)

目の前の黄金の獅子が、空腹に耐えかねて癪癪を起こさないうちに。

Interlude out

side 小波

「はむ……何でイリヤはこんな公園に一人で来たんだ？」

「あむ……ここに来たらしかしたらコナミに会えるかなあって思
つて。でもまさかりズと一緒にだとは思わなかったけど」

「んむ……ケーキ屋で偶然、会った。コナミはいい人」

俺とイリヤとリズ、三人並んでベンチに座る。

どうやらバーサーカーを連れていないようなので余計な警戒はせず、
普通に接する事にする。

それぞれの手には大判焼きが一つずつ握られており（俺が分けた）、
食べながら言葉を交わす。

どうやらイリヤも和菓子は大丈夫だったようだ。

笑顔で頬張ってるし。

しかしまさかりズがイリヤのメイドさんだったとは。

何というか、世間は狭いな。

「そういえば、あの車ってイリヤのか？」

公園横の路肩に止めてあるリムジンを指さして問う。

「そうよ、自分で運転して来たの」

「そ、そうか……よく足が届いたな」

「調整してるからね」

それ以前にあんな高級外車を買える程の経済力を驚くべきなんだろうが、仮にも『始まりの御三家』の一だ。

“表”の方でもそれなりの地位と財力があるのだろう。

子供が運転していいのかという問題もあるが、イリヤの実年齢を知

っているので免許くらい持っている……答だ、多分。

……そこは深く考えない方がいいかもしれないな。

俺だって“アイツ”と二人、着ぐるみ超能力者二名を相手取って夜の首都高(?)を舞台にド派手なカーチェイスをやったんだし……無免許で。

人の事は言えない。

「昨日もあのリムジンを街中で見かけたんだけど……えーと、もしかして、昨日もここに来てたのか？」

「うん」

俺の問いにイリヤは何でもない事のように答えると、残っていた大判焼きを口に放り込んだ。

イリヤの向かいに座るリズの方を見ると、既に食べ終わっていてこちらをジッと見ている。

「……バーサーカーも連れずにか？」

「ええ……って、え？ 何で判つたの？ バーサーカーを連れて来てないって。霊体化してるだけかもしれないのに」

「ん、まあ……ほら、生まれつき幽霊が見えるヤツとかいるだろ？俺も一応そんなカンジなんだ。サーヴァントってカテゴリとしては幽霊と一緒にだし」

「ふうん……」

感心しながらジツとこちらを見つめてくるイリヤ。

……い、いかん、会話が続かないぞ。

「え、えーと……あ！ そうだ、何でイリヤは俺に会うのにこんな所に来たんだ？ 真冬の公園じゃキツイだろうに。 士郎君の家に来ればすぐに会える……いや、それはダメか。 聖杯戦争中だもんな。 士郎君はともかくとしてセイバーが黙ってないし、リンとアーチャーもいるからな」

そもそも何で俺に会いたかったんだ？

士郎君ならまだ解るが。

「えっと……そうね、まずは……」

イリヤはしばし視線を宙に彷徨わせ、何事か考え込むといきなりベ
ンチから立ち上がり、俺の目の前に立つ。

そして、

「まずはお礼を、ミスタ・コナミ。あの夜、身を呈して私を護って
くれた事、感謝いたしますわ」

スカートの裾を持ち上げ、膝を折るお辞儀をする。

西洋式の、しかも最上級の礼の作法だ。

流石にこれには面食らった。

「えー!? いや、ええと……どう、いたしまして?……で、いいの
かな?」

多分、アーチャーの矢から庇った事を言ってるのだろう。

それは理解出来たが、しかしここまで礼を尽くされると、どう対処
していいものか解らない。

しどろもどろに返答するのが精一杯だった。

「……クスクス」

そんな俺の狼狽ぶりが余程可笑しかったのか、イリヤは姿勢を解いて笑う。

思わず見とれてしまう位の、綺麗な笑顔だった。

（御三家の出とはいえ……こんな顔で笑える娘が、何でこんな物騒な争いに参加してるんだ？）

屈託なく笑うイリヤ見て、あの夜抱いた疑問が再び浮かび上がって来た。

「おじい様の言いつけだから」

一連のやり取りが終わって再びベンチに座ったイリヤに訊いてみた所、そんな答えを返して来た。

……その際、嫌に無表情だったのが気になるが。

「おじい様っていうと……アハト翁か？」

確かリンが持ってきた資料に名前があった。

本名、ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルン。

八代目アインツベルン当主、だったっけ。

「……………どうしておじい様の名前を知ってるの？」

すると、訝しげな表情でイリヤがこちらをジッと見てきた。

……………あ！ しまった、口が滑った！

「え、ええと……………リンに聞いたんだよ」

嘘は言っていないぞ、嘘は。

但し、アカイアクマの方じゃなくて腐れ縁の情報屋の方の、だけだな。

「ふうん……………まあ、確かにリンなら知っててもおかしくないわね」

俺の答えに一応納得が言ったのか、イリヤは頷いて俺から視線を外

した。

ふう……危なかった。

この手の事を迂闊に話すと変な誤解を与えかねないし、気を付けないとな。

「……じゃあ、イリヤ自身はどう思ってるんだ？ 聖杯戦争に参加する事には」

そう問いかけると、イリヤの顔が僅かに翳ったのが見て取れた。

本人は隠そうとしたようだが、全然隠し切れていなかった。

「……別に何とも。わたしはこの戦争のためだけに生まれてきたんだから……」

「……なんだって？」

この戦争のため“だけ”に？

……どついう意味だ？

「なあ、イリヤ。それって……」

もう一度詳しく訊こうとしたが、どういう訳か自分の膝に視線を落とし俯くイリヤを見ると、訊くのは何となく躊躇われた。

ならばとリズの方に視線をやるが、さっきと変わらずただこちらをジッと見ているだけだ。

何かしら事情を知っているようだが話す気はないらしい。

……単に話すのが面倒なだけかもしれないが。

片言だし、会話苦手そうだな。

「「「……………」」」

冷たい沈黙の間が続く。

……イヤな空気になっちゃったな。

何とか空気を変えないと……あ、そうだ！

「よし！ イリヤ！」

「えっ、な、何!？」

沈黙を突き破り、突然立ち上がった俺にイリヤが驚いたように顔を上げる。

聖杯戦争の事なんて抜きで普通に接しようって決めたんだ、徹底的に『俺』らしく行こう。

何より……イリヤにこんな顔をさせたままではダメじゃないか。

「野球しようか！」

「……え？」

唐突な俺の誘いに、イリヤは呆気にとられてポカンとした表情を浮かべていた。

side イリヤ

ベンチから立ち、コナミと向かい合う。

（野球って……確か『Baseball』の事よね。ルールはとも

かく、やった事ないんだけど)

結局、勢いに流されてコナミのいきなりの提案に乗ってしまった。

Baseballが何なのか位は知ってるが、やった事など当然ない。

そもそも城の外に出た事すら数えるほどしかないのだ。

外での運動の経験なんてほぼ皆無と言える。

そんなわたしにとってスポーツなんて、全く未知の領域だった。

正直言つて、不安だ。

でも興味が湧かない訳じゃない。

ううん、むしろ……。

「……さて、誘ったはいいけど二人じゃ出来る事は限られてるし、その格好じゃちょっと動きにくいかな。それに陽があるとはいえ、肌寒いし。……うん。イリヤ、ちょっといいかな？」

そう言つてコナミはわたしの頭にそつと右手を乗せる。

仮にも敵であるサーヴァントに触られてるのだ。

普通なら恐怖を感じるべきなんだろうけどそんな事はなかった。

むしろその掌の熱が、どこかほっとするような、安らいだ気持ちにさせてくれる。

自然と、わたしは眼を閉じた。

「……うん、これでよし、と。 あ、でも少し大きかったかな？」

(……あ)

数秒の後、そんな言葉と共にコナミの手が離れた。

頭の上の熱がなくなる。

それを何故かひどく残念に思った。

そして眼を開けると、

「……え！？ 何これ!？」

自分の服が、今まで着てた物とすっかり変わってしまっていた。

「一応、俺がイリヤ位の背格好の頃の物なんだけど……もうちょっ

と小さいサイズの方がよかったかな？ まあでも、似合ってるな、イリヤ。ユニフォーム」

いきなりの事に思考が追いつかない。

あの夜、コナミが着ていた物と同じような赤と白の服……多分野球のユニフォームね……をわたしは身に着けていた。

しかも帽子まである。

頭から取ってよく見てみると、赤い鍔に白のキャップ部分、そして鍔のすぐ上の真ん中の部分に赤い糸で刺繍されたボールのマークがあった。

「あと冬だし冷えるから、このウィンドブレーカーを着るといいよ。はい」

コナミはそう言って、今度はオレンジと黒のジャンパーを渡してきた。

……一体どこから出してるのかしら？

とりあえずそれを受け取って腕を通す。

するとさっきまで冷たかった指先が、じんわりと痺れてきた。

血行が良くなってきたのだ。

やがてそれは指先だけに留まらず、全身がくまなくポカポカと温まり始めた。

「……あつたかい」

「そっか、身体が冷えたまま運動するのは毒だからな。あ、リズはどうする？ 寒くないか？」

「大丈夫。寒くない」

「ん、そうか……じゃ、俺も」

コナミはそう言うと、鰐広の帽子を目深に被り直す。

そして次の瞬間、あの夜と同じ赤と白のユニフォーム姿に変わっていた。

帽子も、わたしの物と同じような物になっている。

なるほど、任意に服を変えられるのね。

……あれ？ じゃあこれももしかして……。

「ねえコナミ。この服って……」

「ああ、それも今俺がやった事の応用さ。ただ、ジャンパーは更に応用を利かせてるけど。さて、次は……っと、その前に、髪は纏めておいた方がいいんじゃないか？」

「……それもそうね。リズ、お願い」

「うん」

ベンチに座ってこちらを見ていたリズに頼み、背中まである髪を纏めて貰う。

リズはわたしの後ろに立つとポケットからリボンを取り出し、丁寧に首の後ろで一つに束ねてくれた。

……うん、まあ合格点ね。

冬は髪が傷みやすいから丁寧に扱わないといけないけど、これなら大丈夫。

「よし、次は野球の道具だな。来い、オール・イン・ワン『全てに通ずる物』」

コナミが言葉を発すると同時にコナミの手の中に、鞘に納められた

バットがどこからともなく現れる。

え、それって……宝具!?

「あー、気持ちは解るけど、警戒しなくてもいいぞ。別にイリヤをどうこうしようって訳じゃないから。ただこうするだけ。ロード、『ボール』、『グローブ』」

わたしが思わず後ずさった事に気付いたコナミが、こちらに笑いかけながら鞘からバットを抜き、何事かを呟く。

するとバットが発光し出し、光が収まるとそこにはバットではなく、二つのグローブとボールがあった。

「イリヤは右利きだったっけ？」

「え? ……うん」

開いた口が塞がらない……ってこんな感じなのかしら。

宝具の使い道が余りに衝撃的過ぎて、グローブを手渡してきたコナミに生返事しか返せなかった。

まさか野球の道具を削り出すために切り札である宝具を使うなんて

……。

サーヴァントにあるまじき所業を平然と行うイレギュラーサーヴァント。

協会の魔術師達が見たら卒倒しかねないわね……リンならキレるかも。

お兄ちゃんは……むしろ感心するのかな？

「とりあえず、二人で出来る野球の定番って言ったらキャッチボールだな。リズはやらないみたいだし。イリヤは野球、やった事あるのか？」

「ううん、ないわ。外にはあまり出させて貰えなかったし。ルールくらいは知ってるけど」

「そっか……ならこれが初めてなんだな。キャッチボールのやり方は解るか？」

「……何となく」

「よし、じゃあまずはイリヤからだ。最初は肩が温まってないから、力まないでゆっくりとやろう。俺がグローブを構えた所目掛けて投げるんだ。球が逸れてもちゃんと捕るから変に遠慮しない事。いいか？」

「……………うん」

ボールを受け取り、左手にグローブをはめる。

グローブはよく使い込まれていて、小さいわたしの手に丁度ピッタリとはまった。

使い心地も悪くなさそうだけど……………このグローブ独特の匂いがちょっと気になるかな。

(でも……………嫌いじゃないな。この匂い)

コナミが後ろに下がり、数メートルの間隔を隔てて向かい合う。

そしてコナミは大きく両手を広げた後、胸元で左手に付けたグローブを大きく広げた。

(あそこに向かって投げろ、って事ね。……………ちゃんと届くかな?)

僅かな不安が頭を掠め、思わずコナミの顔を見る。

穏やかに、優しげに微笑っていた。

まるで「心配ないよ」「とでも言うかのように」。

「……………」

ドクン、と胸が大きく高鳴る。

不安が吹き飛び、心が決まった。

大きく息を吸い、振りかぶる。

そして、

「えいつ！」

フォームも何もない、滅茶苦茶な投げ方で生まれて初めてボールを投げた。

「……………すごいな、見事にド真ん中ストライクだ。イリヤ、ホントに野球初めてか？」

「……………え？」

どこか呆けたようなコナミの声に、投げ終えた姿勢のまま下げている頭をおそろおそろ上げる。

すると、コナミが最初に構えた所にあったグローブに、ボールが収められていた。

「……………あ」

ドクン、と再び胸が高鳴る。

何だろう……………この感覚。

心の奥があったかく……………いや違う、もっとこう……………“熱くなる”よ
うな……………。

「投げ返すぞ、イリヤ！ 胸の前でグローブを大きく広げて構えて、ボールから目を離さないでキャッチするんだ。右手を添えると捕りやすくなるぞ。行くぞ、それっ！」

コナミはそう言つとフワツと、大きく山なりにボールを投げ返してきた。

えっ、と……！

（ボールから目を離さないで……手を添えて、グローブを大きく広げて……、キャッチ！）

コナミの言葉を反芻しながら、ボールを捕る事だけに集中力を傾ける。

そして、

パシツ、と小気味よい音が響き、グローブの中に確かな重みがあるのが伝わって来た。

（捕れ……た……？）

キャッチ出来た事がすぐには信じられず、おそろおそろ左手のグローブを開いて中を覗きこむ。

するとそこには白いボールが確かにあった。

「…………ッ!」

再度あの胸の高鳴りが襲ってきた。

身体の奥から溢れ出すような、そんな熱い感情のうねりが身体を震わせる。

(…………ああ、そっか)

やっと解った。

この身体を震わせるような、熱い気持ちは何なのか。

これが…………。

(“楽しい”って、感情なんだ…………)

いつからか、久しく忘れていたモノをわたしは思い出した。

わたしはその時、この先に待っている自分の運命の事も、聖杯戦争の事も何もかも忘れて、その心地よい感情に身を任せ自然と笑みを浮かべていた。

side 小波

……すごいな、イリヤ。

まさか初めてでここまで出来るなんて。

俺でもこうはいかなかったぞ。

「やっ！」

俺の投げ方を真似しながら、徐々にフォームを整えつつ楽しげにボールを投げるイリヤ。

そして見事に俺の構えた所にボールが届く。

最初は緩い放物線を描きながらグローブに辿り着いていたボールが次第に直線に近くなり、今ではグローブからパン、といい音を鳴らすまでになっている。

投げ返されたボールも難なくキャッチしており、未だ一球も捕り零しはない。

(……才能があるな、イリヤには。何より“眼”がいい。ちゃんとボールの位置と距離感を正確に掴んでる。それに無駄な力みがないせいで、スピードもそれなりに出てきてるしコントロールもいい)

俺が初めてやった時にはこうはいかなかった。

何球も捕り零したり後ろに逸らしたりしながら、自分とボールの距離感を身体に覚え込ませていったものだ。

ボールを投げた時も狙った所に行くどころか、相手の所に届く事さえ出来なかった。

そしてようやく届くようになったかと思えば、今度は大暴投の繰り返し。

悔しさをバネに練習に練習を重ねて、ようやくここまで域に至ったのだ。

普通ならそれら幾つものハードルを少しずつ乗り越えていくものを、イリヤはたった数十分で一足飛びに越えて行っている。

「…………ふふっ」

俺が投げ返したボールを手を添えずに片手でキャッチし、イリヤは心の底から嬉しそうに笑う。

(……まあ、何だ。うん、よかったよかった)

思わずクスリと笑ってしまう。

またイリヤに笑顔が戻って来た事が何より嬉しいと感じられる。

しかしそれとは別の所で、「やっぱり何かの間違っている」と頭の片隅で自分の中の冷めた思考が訴えていた。

「なあ、イリ……？ どうした？」

イリヤに声を掛けようとしたが、イリヤは何故か俺には反応せずじつと視線を虚空に彷徨わせていた。

そして、

「……もう帰らなきゃ。バーサーカーが起きちゃった」

そう名残惜しそうに、寂しげに薄く微笑んだ。

グローブから手を引き抜き、俺に向かって歩いてくる。

「いめんねコナミ、もう行かなきゃ」

「……そっか。楽しかったか？ 野球」

グローブを受け取りながら、感想を聞いてみる。

「うん！ あんなにドキドキしたのは久しぶりだった！」

満面の笑みを湛えてイリヤが頷く。

……訊くまでもない事だったな。

「あ、そうだ。帰るんなら服、戻そうか？」

ボールとグローブを消して、服をどうするかを尋ねる。

流石にユニフォームのままじゃ、な。

「んー……」

イリヤは口元に指を当て、視線を上に向けてつつ考え込む。

と、

「……別にこのままでいいわ。せっかくコナミがくれた物なんだし、それにあつたかいから」

自分の身体を両手で抱き締め、嬉しげに笑いながらそう言った。

……なんか前にも似たような台詞を聞いたような気が。

「じゃあね、コナミ！ 今日ありがとう！ また明日ね！ リズ、行くわよー！」

「うん」

イリヤはそう言うつとベンチに座っていたリズに声を掛け、リムジンに向かって駆け出して行った。

……つて、『また明日』？

明日もここに来るつもりなのか、イリヤ？

……まあ、とりあえず明日もう一度来てみるか。

「コナミ」

「……ん？ リズか」

去りゆくイリヤに気を取られていると、いつの間にか隣にリズが立っていた。

「ありがとう。イリヤ、本当に楽しそうだった。あんな顔見たの、久しぶり。それに、ケーキも……」

「ああ、気にしないでいいよ。それより早く行ってあげたら？ 待たせたらアレだし」

「ん、コナミも」

「ん？」

一瞬、リズが何を言っているのか解らなかった。

しかしリズがある一点を指差した事で、ようやく解った。

リズの指の先にある物。

それは……。

ベンチの片隅に無造作に置かれたスーパーの買い物袋と、冬空の下、すっかり冷めきってしまった大判焼きの入った紙袋だった。

「……あ！」

慌てて公園の片隅に備え付けられていた時計に目をやる。

時刻は、二時に差しかかるうとしていた。

その後、教えてくれたリズへの礼もそぞろにそれらを引っ掴み、衛宮邸へと全力疾走。

空腹のストレスから爆発寸前だったセイバーを宥めるのにひたすら平身低頭する事となった。

第十七夜 「白の少女と野球少年」？（後書き）

技術・変化球が少し上がった！！

『ムードメーカー』が身に付いた！！

イリヤフラグその2が立った！！

イリヤが野球に興味を持ちました。

ステータスが更新されました。

第十八夜 「『正義』を語る野球少年（前編）」（前書き）

年末は書き入れ時。

しかし小説の書き入れははかどらず……。

年の瀬は他の事に時間を取られがちです。

第十八夜 「『正義』を語る野球少年（前編）」

side 士郎

「ただいま」。はあ、疲れたあ」

「お帰り遠坂。随分疲れてるみたいだが、どうかしたのか？」

日も西に傾き、遠坂が学校から帰って来た。

しかし何か様子が変わだ。

着替えを終え、居間に入って来た遠坂は肩に手を添え、首をゴキゴキと鳴らしながら体をほぐす動作を繰り返している。

「ん、ちょっとね。今日一日で色々あったのよ。朝、桜に絡んできた慎二とやりあったのに始まって、その後に柳洞君と出くわして衛宮がどうのこうのと言われたり、わたしたちと慎二以外に怪しいヤツがないか探ってみたり、張られてる結界の状態をチェックしたり、慎二にナックルパート喰らわせたり……」

成る程、確かにイベントが目白押しだな……って、ちょっと待てええええーっ！

「おい遠坂！ 他のはともかく最後のは何だ！？ 慎二にナツクルパートって……！？」

遠坂の口から出た、余りに予想外の言葉に思わずツッコむ。

一体遠坂と慎二の間で一体何があったんだ！？

「帰り際に慎二がね、「衛宮より僕と組んだ方が得だよ」とかなんとか言って、二人で士郎を倒そうって誘ってきたのよ。同盟組んでる今がチャンスだからって」

ぶすつとした表情で腕組みしつつ、遠坂は語る。

「って……それはまた。それで？」

慎二の行動にどうコメントしていいのやら判断に迷う。

ナツクルパート喰らわせた位だから結果は判り切っているが、とりあえず続きを聞くでしょう。

「あまりにバカげた提案だったから最初は無視してたんだけど、あんまりしつこかったから返答代わりに叩きつけてきたって訳」

「ナツクルパートをか？」

「そうよ」

「……ベアか？」

「ベアよ」

フン、と鼻を鳴らしながら瞑目する遠坂。

どうやら未だ怒りを処理仕切れていないらしい。

あな恐ろしや遠坂凜。

これが穂群原で『高嶺の花』と称される美少女の本性だとは、誰もが予想だにしていまい。

僅かに天敵である現生徒会長、柳洞一成が薄々気付いている位だ。

一成と遠坂の中の悪さは有名だからな。

例えるなら冷戦時の旧ソ連とアメリカ位に。

更に厄介なのは、“雪解け”の時期が遠いどころか全く来そうにな
いという事だ。

二人の間には前世からの因縁か何かがあるのかもしれない。

「そついえばセイバーと小波は？」

「ああ、道場にいる。セイバーが小波にお説教してる最中なんだよ」

「……またなんかやったの？ 昨日もだったじゃない」

「……昼の買い出しから帰ってくるのが遅くなって、昼飯が遅れた」

「……なる、納得」

テーブルに付き、俺が出した湯呑に手を伸ばしつつ合点がいった表情で頷く遠坂。

怒らせたら怖いのは遠坂だけではない。

セイバーも同様だ。

「食い物の恨みは恐ろしい」とはよく言った物だと思つ。

セイバーの場合は若干ベクトルが違う気もするが。

しかし……セイバーって小波にだけは何故か遠慮しないよな。

「ふう……さて、それじゃ台所を借りるわよ、士郎」

「え？」

お茶を一息で飲み干した遠坂はそう言つと徐に立ち上がり、奥の台所へと歩いて行く。

遠坂の置いた空の湯呑からはいまだ湯気が立ち上っている。

かなり熱かった筈なんだが……なんで一気に飲み干せて、尚且つ平気なんだろうか？

どうやら遠坂は内臓器官も唯者ではないらしい。

「昨日言つたじゃない。食事は当番制にするって。だから今夜はわたしが作るわ。構わないでしょ？」

「あ、あゝ、そんな事言つてたな。じゃ、宜しく頼む」

「はいはい」

袖を捲りつつ、冷蔵庫の中身を確認する遠坂。

その陰で遠坂の口元に不敵な笑みが浮かんでいた事に、俺は気付く事が出来なかった。

ふふふ、明日を見てなさいよ

昨日の夕食の際、俺の料理を口にしてそうのたまった遠坂の真意を、この後の夕食時に痛切に思い知る事となった。

「……………くっ、あの時の台詞はこういう事だったのか」

「……名答。切り札は最後まで取っておくのが定石よ。更に敵の戦力まで把握しておけば盤石って訳。覚えておきなさい」

夜、桜と藤ねえが揃った中で遠坂の作った夕食はなんと中華だった。

俺が和食、桜が洋食が得意だと聞くと、その裏をかくように躊躇い

なく中華を選択してくる辺りが遠坂らしいと言えばらしい。

そしてジャンルは違えど、遠坂の料理の腕は確かだった。

悔しいが……美味しい。

下手すれば俺以上に。

「やゝ！ おいしいわあゝ。遠坂さんも料理上手なのねえゝ。しかも中華！ これで和・洋・中全制覇って事よね！」

猛烈な勢いで卓上の料理を平らげていく飢えたトラ……もとい藤ねえ。

「サクラ、おかわりを。大盛りでお願いします」

「はいはい。ちょっと待ってて下さいね、セイバーさん。藤村先生はどうされます？」

早々に空になった茶碗を笑顔で桜に差し出すセイバーと、しゃもじを片手にこれまた笑顔で茶碗を受け取る桜。

「……………」

背中に何とも言えない影を背負い、精も根も尽き果てたような顔でモソモソと料理を口に運ぶ小波。

それぞれ遠坂の料理に舌鼓を打っているが……しかし小波は大丈夫か？

よっぽどセイバーの説教が堪えたらしい。

「小波……」

「うん……大丈夫、この位。何とかセイバーの怒りも解けたし。料理は美味しい」

声を掛けるも、小波は酷く憔悴した様子で黙々と箸を動かしている。帰ってきた答えもどことなく要領を得ない。

やたら規則的に、一定間隔で箸のみが動くその光景はかなり不気味だ。

「セイバー……一体小波に何をしたんだ？」

非難の眼差しをセイバーに送ると、セイバーは動かしていた箸をピタリと止め、気まづげに視線を逸らした。

……本当に何したんだ？

何となく聞くのは怖いからあえて聞きはしないが。

「……それでね、士郎ったらその時なんて言ったと思うっ？」

料理も粗方食べ終え、食後のお茶を飲んでいたところで何故か藤ねえが俺の昔話を暴露していた。

もっと他に話題があるだろうに……何で俺の話なんか持ち出すんだろう？

止めさせたいが、そんな事をすれば後が怖いので放っておく事にする。

耳を傾けているのは遠坂・桜・セイバーの女性陣。

特に桜はどういう訳か眼をキラキラと輝かせている………なんでさ？

小波は一応聞いてはいるのだろうがさして興味もない様子で、お茶受けの煎餅を齧りながらテレビの画面をぼんやりと眺めている。

顔色はとりあえず元に戻っているようだから一安心だ。

「それで、先輩は何て言っただんですか!？」

「ふっふっふ、そこまで知りたいか桜ちゃん。土郎ね、真面目な顔で「俺、『正義の味方』になる!」……って言ったのよ! 堂々と胸を張って! はっきりと!!」

嬉々とした表情で語る藤ねえ。

三人はそれぞれ「ほおっ」といったような表情を浮かべている。

「ふむ、正義の味方ですか……それはまた」

セイバーは何やら感心したように深々と頷き、

「正義の味方ですかあ……何か似合ってますね、先輩には。よく学校で人に色々頼まれてあちこち動いてますし」

桜は我が事のように嬉しげに笑い、

「ふーん、意外と子供っぽい夢持ってるのね。で、今でも目指してる訳?」

遠坂は最初は感心したものの次の瞬間には、にししと悪戯っぽく笑いながら呟いた。

「当たり前だ。爺さんとの約束だからな」

遠坂の言い様にちょっとムツと来たので思わず反論してしまった。

(僕はね、士郎。正義の味方に憧れていたんだ)

(爺さんの夢は俺が……)

親父との最後の夜、俺は誓った。

爺さんの夢を受け継ぎ、形にしてみせると。

だから俺は『正義の味方』になる。

その意思だけは今でも変わらず、この胸にある。

「正義の味方……か」

懐かしい気持ちで回想に耽っていると、不意に横から声がした。
思わずそっちの方に目をやる。

声の主は 小波だった。

しかし小波の様子がどこかおかしい。

何というか……無表情なのだ。

ここまで表情がないというのも珍しいという位に、何の感情もその顔に映していない。

こんな小波は初めて見る。

「コナミ……？」

小波の様子を訝しんだセイバーが声を掛けるが、小波はそれには何も返さず食べていた煎餅をテーブルに置くと、スッとテレビの画面から視線を外して俺の方に向き直り、

「なあ、士郎君……」

「何だ？」

『正義』って……一体何だと思う？

どこまでも無表情のまま、しかし真剣な眼差しで俺にそう問いかけた。

それを聞いた瞬間、

ジクリ

と、俺の中の何かが疼いた気がした。

side 小波

「正義って……それは……」

いきなりの問いに言葉に詰まる土郎君。

まあ、いきなり漠然とした質問をされたら普通はこうなるよな。

でもこれはとても大事な事なんだ。

『正義の味方』を目指すというのなら、これだけは伝えておかなければならない。

『アイツら』のように、『正義』という言葉に振り回されてしまう事のないように。

「……質問を変えようか。『正義』の反対って、何だと思っ？」

「……『悪』じゃないのか？」

切り口を変えた質問に予想通りの答えが返ってくる。

俺も『前』はそう答えた。

……でも、そうじゃないんだよ、士郎君。

ゆっくりと頭かぶりを振り、士郎君の目を見据えて答えを口にする。

「『悪』の反対は『善』、『善』の反対は『悪』だ。『正義』の反対は……別の『正義』、あるいは『慈悲・寛容』なんだよ」

「……………」

目を見開く士郎君。

その様子を眺めつつ、“ある人”からの受け売りだけどね、と前置きして話を続ける。

「『正義』というのは、人が従わなければならない道理の事を言う。そして『正義』を行う、となれば、『道理を守らせる』という事にもなるんだ。そして問題は……道理が一つじゃない、という事なんだ」

「……………」

俺の言葉に真剣な眼をしながら耳を傾ける土郎君。

ふと気が付くと、いつの間にか他の女性陣もこちらの方を見やり、話に聴き入っているようだ。

そして部屋の片隅にもう一つ、明らかに異質な気配が。

とりあえずそれらを無視して話を進める。

「『殺すな』、『奪うな』まではほとんどの思想で共通だけど、その先はバラバラ。例えば『男女は平等』かもしれないし、『女性は守るべきもの』かもしれない。『どんな命令でも忠実』が正義なら、『悪い命令に逆らう』のもまた正義。道理に関する限り、正しい事は一つとは限らないんだ」

「でもそれじゃ困るじゃない。何が正しいのか解らないし」

話を聞き入っていた藤村さんが反論してくる。

確かにそうだ。

道理に関する限り正しいというのなら、採れる選択肢は膨大だ。

そうなれば一体どれを、何を守っていけばいいのかが判らなくなってしまう。

「ええ、だから『法』というものがあるんです。何をしてはいけな
いのかの約束が。……コレも正しいとは限らないんですけどね。だ
からその時毎に何が正しいのか、よく考えてみる事が必要なんです。
結局のところ、皆にとつて最も良い事を探して選択するのが『善』
なんでしょう。だから……」

一呼吸置き、目の前の彼にハッキリと告げる。

「『正義』は『善』とは限らない。そして『正義の味方』が『善』
であるとも限らないんだ。ともすれば自分の信じる道理を、他人に
押し付ける事になるんだから」

「……ッ!？」

士郎君が一体何を思つて『正義の味方』になろうと決めたのかは解
らない。

ただ、人によつて『正義』というものは千差万別。

立場や状況によつてその様相を変える、ひどくあやふやな物だ。

場合によつては士郎君が信じているだろう『正義』も、他の人から
見ればただの害悪と捉えられるかもしれない。

そして『正義』によつて引き起こされる軋轢は、あらゆる所に想像

を絶する影響を齎す。

彼自身はおるか、彼の周りにいる人達をも巻き込み、傷付けてしまいかねない。

『正義』を行う『正義の味方』というのは、その耳障りのいい言葉の響きと違って決して軽く扱っていいものじゃない。

「……じゃあ、『悪』って何なんだ？」

「一般的な定義から言うと、ルールを破って他に迷惑を掛ける行為かな。……まあ、つまり何が言いたかったかというところ、『正義の味方』になりたければ、そして『正義』を行おうとするのなら、『正義』という言葉とルールに囚われてはいけない、という事なんだ。『正義』は本質的に妥協を禁じる。だから善悪の判断が不安定な者がとにかく『正義』を行おうとすれば……」

「成る程ね、自分に逆らうもの全てを排除する……って事かしら」

「あるいは同じ価値観に洗脳するか、暴力なりで強制的に従わせる……といったところですね」

「……とんでもない話ですね。先輩」

さっきまで騒がしかった居間が嘘のように、シンと静寂に満たされる。

皆もまさか『正義の味方』の話が、ここまでの物になるとは思ってなかったのだろう。

……失敗したな、ここまで雰囲気悪くするつもりじゃなかったのに。

後で士郎君が一人になった時にでも話せばよかったな。

……どうもこの手の話題になると説教臭くなってしまう。

何せ『アイツら』は……『俺』の……。

(……どうしよう。沈黙が痛いぞ)

今更悔やんでも後の祭り。

どうにかして空気を変えたくても、この静寂の原因は俺なのだから流石にやりづらい。

完全にお手上げ状態だ。

……そして時間にしてほんの数秒後、だっただろうか。

この重苦しい空気を吹き飛ばす切欠をくれたのは、やはりと言っていいのかどうなのか……今まで幾度となく空気を壊してきた『エア・

ブレイカー』、藤村さんの一言。

室内に満ちる重い空気をまるで気にも留めず、あっけらかんと言葉を紡ぐ。

「そついえば小波君は“これは受け売りだ”って言ってたけど、誰からの受け売りなの？」

「あ……、えーつとですね、この世の真理を探求せんとする、自称『悪の天才科学者』です」

「……は!?!」

俺の回答に、藤村さん以外の全員の目が点になる。

いや、そんな顔されても……事実なんだから仕方がない。

「ふーん、『悪の天才科学者』ねえ。自分でそついう事言ってる人に限って意外といい人だったりするんだけど。ねえ、どんな人なの？ その人」

他四名を置き去りに、またしても空気を読まずに思った事を口にする藤村さん。

何気に本質を言い当てているのがスゴい。

まあ、この人の実家も『藤村組』っていう組をやってるらしいけど、士郎君から聞いた話じゃ、その人達は長を始めとしていい人達ばかりみたいだからな。

だからだろう。

……でも『悪の天才科学者』自体にツツコミは入れないんですね、藤村さん。

「うーん、機械工学から生物科学まで扱いこなすくらい範囲が手広くて、本当に掛け値なしの天才科学者なんですけど、かなりマッドですね。で、『悪はロマン』というのが座右の銘です。結構危ない橋を渡ってる人で、一時期は世界征服を目指してたみたいです。まあ、色々あって方針転換したみたいですけど」

「……世界征服!?!?!」

更なる驚愕を受ける、目を点にしてた四名。

胡散臭さ全開のツツコミ所に対するものだろう。

「いやまあ、その反応も解らないでもないけど、でもあの人の技術なら間違いないく世界を征服出来たと思うぞ。何せロボットから怪人、サイボーグにアンドロイドまで何でもござれだったからな」

何しろ片手間で巨大ロボ作ってた位だし。

惜しむらくは『この世界』ならいざ知らず、『あの世界』ではそれだけでは足りなかったという事と、博士が造った手下（予定）が野球に目覚めたせいでそれどころではなくなっちゃった事かな？

『ロボット』、『サイボーグ』、『アンドロイド』と来て更に『超能力』に『想像の具現化した存在』、果ては『タイムマシン』に『宇宙人』だからな。

……自分が言うのも何だが、なんて世界だよ。

博士の下にいた『彼ら』を野球に目覚めさせちゃったのは……ある意味俺のせいかな？

「ただそんな物騒さと言動とは裏腹に性格は至って善良でしたよ？ 困った時はよく助けて貰いましたし。まあ、家を訪ねる度に「ふははははは！ 少年よ、今日も科学の進歩のために協力しに来たのかね？」とか言っつて、俺を人体実験に参加させたがるのがタマにキズですけど」

本当、そこさえ直してくればいいんだけど。

でもそれがなくなっちゃったら博士じゃないよな。

実験を迫ってこない博士……うん、不気味だ。

一応、『時』と共にその悪癖もだいたい落ち着いてきてたみたいだが。

「…………『悪はロマン』と言い切る善良なマッドサイエンティスト、ね…………非常識、非常識と思ってたけど、交友関係も非常識だったみたいね」

「そうですね…………『さいぼーぐ』とか『あんどろいど』とかいうのはよく知りませんでした、その人物も飛び抜けて非常識だというのはよく解りました」

頭を抱えながら深々と溜息を漏らすリンとセイバー。

いや、博士はどちらかというとき常識人だぞ？

あと二人のその言い方だと俺も非常識認定されてるような気が…………今更か。

藤村さんと桜ちゃんは「へえー、すごい人なのねー」「そうなんですかー」とか言いながらしきりに頷いている。

…………って、内容にツッコミは入れないの!？

ロボットはともかく、サイボーグにアンドロイドなんて『この世界』じゃ明らかにオーバーテクノロジーなんだけど…………。

何のかんでさっきまでの重い空気は去った。

今は和やかな空気が広がり、前と同様にワイワイと藤村さんを中心に話に花が咲いている。

俺も煎餅片手にお茶を啜りながら、ボンヤリとテレビを見る作業に戻る。

まるで時間を巻き戻したかのように再現された、十数分前の居間の光景。

しかし例外として戻っていなかったものもある。

「……………」

士郎君は複雑な表情を浮かべ、チビチビとお茶を飲みながら言葉少なに顔を俯けている。

それは藤村さんと桜ちゃんが帰路に着くまで続いた。

そして、居間の片隅にあった気配。

多分アーチャーだ。

おそらくこちらの話をコッソリ窺っていたのだろう。

話の最中は終始無反応。

正直、話を聞いているのかいないのかすら判然としなかったが、問題はその去り際。

最後まで感じられなかったアイツの感情が、その時僅かに感じ取れた。

ほんの僅か、だが確かな感情の揺らぎ。

それはアイツの中の何かが、俄かにグラついていくように感じられた。

第十八夜 「『正義』を語る野球少年（前編）」（後書き）

今年の更新はここまでです。

第十九夜 「『正義』を語る野球少年（後編）」（前書き）

新年、初投稿です。

原作キャラの内面描写はやはり難しいものですね。

第十九夜 「『正義』を語る野球少年（後編）」

side 士郎

『正義の味方』

かつて爺さんとの最後の夜に誓った、“俺”の夢。

俺は爺さんの夢を受け継ぎ、正義の味方になると決めた。

その決意は爺さんの死から数年経った今でも色あせる事はなく、この胸にある。

だからこそ、これまで色々な努力を重ねてきた。

日課となっている朝の鍛錬も、夜中に行っている魔術の訓練もそう
だ。

もつとも魔術は誓いを立てる随分前に、好奇心から爺さんに無理矢
理頼み込んで教えてもらったのだが。

全ては正義の味方になるため。

その為に俺はこれまで歩いてきた。

でも……

） 『正義』は『善』とは限らない。そして『正義の味方』が『善』であるとも限らないんだ）

） 『正義の味方』になりたければ、そして『正義』を行おうとするのならば、『正義』という言葉とルールに囚われてはいけな
い、という事なんだ）

あの時の小波の言葉が思い出される。

『正義』は『善』であるとは限らないと、アイツはそう言った。

未だ頭から離れない、その言葉。

（俺が目指していた物は…… 『正義の味方』）

そうだ、それだけは間違いない。

誰かを護れる、誰かを助けられる、そんな爺さんの様な正義の味方に、俺はなりたいたいと思った。

あの地獄の様な炎の中から、俺を救ってくれた爺さんのように。

ああ、間違っではないない。

でも

じゃあ俺は一体“何”にとつての、“誰”にとつての『正義の味方』になりたいと思っただらろう……？

「……るつ……土郎！！ ちよつと、ちゃんと聞いているのー!？」

「ッー？ ……あ、ああ悪い遠坂。少しポーツとしてた」

「まったく……人が親切心から懇切丁寧に魔術の講義をしてあげてるっていうのに、やる気あるの？」

「……すまへ」

遠坂の怒声によって意識が現実に戻される。

どうやら相当の間、意識が離れていたらしい。

よく見ると遠坂のこめかみに青筋が浮いている。

明らかに爆発寸前だ。

とりあえず頭を深々と下げる事でなんとか怒りを収めて貰った。

(とにかく余計な考えは後回しだ。せつかく遠坂が魔術の師匠になつてくれたんだし)

頭を振って意識を切り替える。

藤ねえと桜が帰った後、昨日の約束通りに遠坂に魔術を教わる事になった。

そしてここは離れにある遠坂の(元小波の)部屋。

元々は客間だったその部屋には遠坂が持ち込んだと思われる、試験管やら本やらの種々雑多な代物が机の上やベッドの脇に置かれている。

様相は完全に遠坂の私室状態だ。

たった一日で、ここまで他人の家の部屋を己の自室同然まで仕立て

上げるとは。

しかも明らかに異質であるにも拘らず、既に元からこの家の一部であったかのような雰囲気まで醸し出しているのだから、おそろべし遠坂凜。

そのうち衛宮邸全てが乗っ取られるような事が……なければいいなあ。

「はあ……さて、話を続けるけど、あなたが扱えるのは『強化』の魔術だけなのよね」

「ああ」

「ふうむ……とりあえず、このランプを『強化』してみてください？」

遠坂はそう言って座っていた椅子から立ち上がり、傍らにあったバツグから古いランプを取り出し、俺の目の前に置く。

……何でランプ？

そして何でそんなモン家に持って来てるんだ？

まあいいか。

「分かった。『強化』すればいいんだな？」

「ええ、いつも通りにね」

「ん、『^{トレース}同調・^{オン}開始』」

遠坂に頷いた後ランプに人差し指を置き、全精神力を以て自身の中に魔術回路を構築する。

長い集中の果てに顕れる焼けた鉄の棒を背中に差し込んでいく感触と共に、全身から珠のような汗が噴き出す。

そしてランプを『強化』しようとする神経を今度はランプに集中させ……

パキッ

「……………あ」

……………ようとした所でランプのガラス部分に亀裂が走った。

『強化』に失敗したのだ。

力が抜け、身体の熱が急速に冷めていく。

……おかしいな、昨日、遠坂に追いかけられた時はあんなに簡単に成功したのに。

やっぱりあれは偶然か、さもなければ所謂『火事場の馬鹿力』だったって事か？

「……成る程ね。へっばこな訳だわ、ここまでお粗末なんて。土郎、手を出しなさい」

ジツと様子を見ていた遠坂は溜息を一つ吐くと、今度はバッグからドロップの入れ物みたいなブリキの缶を取り出し、その中から赤い飴玉の様な丸い物を取り出した。

そして出した俺の手の上にそれを乗せると、それを飲み込むように言ってきた。

とりあえず素直にそれを飲み込もうと口に入れる……か、固ッ！？
何だこれ、石かっ！？

「んん……んぐっ！」

疑問に思いながらもどうにかこうにか飲み込んだ。

……喉が痛い。

「な、なあ遠坂。今のは何だったんだ？ やたら固かったし、明らかに飴じゃなかったぞ。むしろ石だ」

「当然でしょ。それ、宝石だもの」

「成る程、宝石か……宝石ツ！？ な、何てモン飲ませるんだよ！ そんな消化出来ないだろ！？」

余りにも自然な遠坂の口調に、危うくそのままスルーしてしまいそうだった。

なんで宝石なんぞ飲ませるんだよ、後で金でも取る気じゃないだろうな。

モノがモノだけに。

「……もう少し別の所にツッコみなさいよ。大丈夫、毒じゃないから。そろそろ効果が出てくるんじゃないかしら？」

「効果って何の……うぐあっ！？」

呆れ顔で無害だと嘸ひんく遠坂に身を乗り出そうとした所で、突如とし

て身体中が焼けるように熱くなった。

思わず床に手を突いて蹲る。

(一)、この感覚は……“失敗”か!?)

魔術回路の生成に失敗した時さながらの灼熱の感觸。

この状態に陥ってしまえば最悪、“死”が訪れる。

突然の出来事に戸惑いながらも、激痛を伴う熱の奔流にただ只管齒を食い縛って耐える。

「毒じゃない」って……毒よりタチが悪いぞ、遠坂!

「ぐ……うぐぐ……!」

身体の中で荒れ狂う熱と痛みを意思の力で押し伏せ、少しずつ呼吸を整えていく。

「はぁーっ、はぁーっ……ふう……ふ」

ほんの数秒、だが自分にとっては永劫とも呼べる時間の中でようやく呼吸を整え終え、それと同時に滾っていた身体の熱が治まり始

めた。

危機を脱したのだ。

「へえ……まさか魔術回路の強制解放からたった一分程でも回復するなんてね。ちよつと意外」

「……強制解放だつて？」

今だに火照っている身体を無理矢理起こし、感心しきりでこちらを見ている遠坂を見上げる。

遠坂は涼しい顔のままだ。

「そうよ。あなたに飲ませたあの宝石は魔術回路を強制的にONにさせる物なの。あなたは何か勘違いしてるみたいだけど、魔術回路つてのは一度作ってしまえば後は切り替えるだけでいいの。にも拘らず、あなたは魔術を行使する度にいちいち魔術回路を生成していた。これじゃ命が幾つあっても足りないわよ」

「……む、そうなのか？ 親父に方法を教わって以来ずっと同じ工程を踏んでたんだが」

そう言うと遠坂は一瞬俺をキッと強く睨みつけるとすぐに溜息を一

つ漏らし、

「ハア……呆れた。あなたってよっぽど師匠に恵まれなかったのね。毎回、死と隣り合わせの訓練をさせられるなんて。ま、あなたのお父さんも同じ勘違いをしていたのかもしれないけれど、とりあえず今ので魔術回路のスイッチが作られた筈よ。今、あなたは強制的にONになった魔術回路を本能的に自分の意思で閉じた。なら逆の事も簡単な精神の作用で出来るようになってる筈よ」

「そうか……ちなみに遠坂は魔術回路をONにする時、どうしてるんだ？ 参考までに」

「自分の心臓をナイフで貫くイメージを思い描くわね」

「……物騒だな」

まだ頭がクラクラしているが、どうにか遠坂の言わんとしている事が理解出来た。

つまり俺は今まで遠回りの方法で魔術を行使していたらしい。

どうりで成功率が1%を切ってた筈だ。

余計な労力を他で掛けてしまえば、その分『強化』の精度が落ちて当然。

そう思っているよ、

「あ、ちなみに今はスイッチを作った“だけ”で、魔術の腕そのものは別問題よ。そこを勘違いしない様にね」

遠坂からの情け容赦なしの切り返し。

……つまり俺は今だに『へっばこ魔術師』のままらしい。

爺さん……俺、泣いてもいいよな？

「さて……大見栄切ってはみたものの、実は士郎に出来る事ってここまでなのよね。次のステップに移ろうにも時間が足りなさすぎるし……やっぱり『強化』の魔術を万全にして貰うしかないか」

顎に手を当てて、思案に耽っていた遠坂がポツリと漏らす。

まあ、確かにそうか。

一朝一夕で新しい魔術が身に付く程、魔術はそう簡単じゃない。

物によっては当人から子孫へと、何世代にも渡って完成を目指すよ

うな大掛かりな物も存在する。

それなら既存の物を訓練していった方がより賢明であり、确实だ。

「まだ魔力の熱が残ってるでしょ？ とりあえずここにあるランプ全部に強化を掛ける事。それが終われば今日はお終いにしましょう」

遠坂はそう言つたとさっきと同じ古いランプを、今度は二十個ほどバッグから出して俺の目の前に並べ始めた。

……っつて、おい！

だから何でそんなモン家に持って来てるんだ！？

しかも一個じゃなかったのかよ！？

激しくそこをツッコミたかったが、今の身体の状態ではそこまでの余裕はまだないので声には出さずに、黙ってランプの一つに指を置く。

「『トレース
同調・開始』」

そして紡ぐ暗示の言葉。

今から自分は魔術という神秘を成すための『部品』と化す。

“そう”するということ意識を認識したと同時にガキン、と頭に撃鉄を打ち下ろすイメージが脳裏をよぎる。

「……ッ！」

形作られていく、身体に通る魔力とその通り道の感触。

魔術回路が起動したのだ。

「基本骨子、解明……」

そして『強化』最初の段階、ランプの構造を詳らかにする工程へと移行。

『強化』の魔術を完遂するべく、己が意識を針先のように細く鋭く研ぎ澄ませていった。

side 小波

「士郎君、リン。お茶入れたから休憩に……うわっ!? な、なんだこの一列にズラッと並んだ大量のランプは!？」

「魔力の残滓が濃い……成る程、魔術を使っていたのですか。しかし……この物の見事に砕けたランプは一体……？」

お盆に四人分のお茶とお茶受けを携え、セイバーと一緒にリンの部屋とされてしまった元俺に割り当てられた部屋のドアを開けると、そこには大量の古ぼけたランプと睨めっこしている土郎君と、それを泰然と眺めているリンが視界に飛び込んできた。

ちなみにお茶受けは昼間買ってきた大判焼きだ。

イリヤとキャッチボールしてたせいで寒空の下、ベンチの上に放置しっ放しですっかり冷めきってしまったが、レンジでチンすればまったく問題はない。

文明の利器って便利だなあ、ホント。

ただ、チンし終わってレンジから大判焼きを取り出した時、セイバーがどこか物欲しそうに俺の方を見ていたのでこっそり先に一個手渡したのはここだけの秘密だ。

俺へのお説教に夢中で食べ損ねてたからな。

そしてその一個は既にセイバーのお腹の中だ。

勿論、「口の周りにあんこが……」というベタなミスを犯すへまはしていない。

差し入れのたこ焼きをコツソリつまみ食いして、歯に付いた青のりでバテてしまった野球部顧問の『先生』の二の轍は流石に踏まないよ。

「ああ、ありがとう。ま、一言で言うと、士郎の『強化』の成果がこれって訳。……まったく、まさか十個に『強化』を掛けて一個も成功しないなんて……。才能がないなんてレベルじゃないわよ、これ。やっぱり学校で服と鞆を『強化』して私のガンドを防いだのは偶然ってことかしらねえ。……もう一回ガンド浴びせたら出来るようになるかしら？ いや、いっそ……」

腕を組んで溜息を漏らしたリンは俺が差し出したお茶を受け取りつつ、おしゃカになったランプの残骸に目をやって何やら物騒な事をブツブツ呟いている。

いやいや、ちょっと待てリン。

それだと多分聖杯戦争とまったく関係なしに死ぬと思うぞ、士郎君。

あんな殺人（喜）劇、オーバーユースなんてレベルじゃないし。

何より当人の顔が盛大に引きつってるし、すごい冷や汗掻いてるし、必死に首を横に振ってるし。

「ふむ……私は魔術は専門外なのですが、思うに力が入り過ぎてい

るのではないですか？ 成功させようとし過ぎるあまり」

自分の分のお茶と大判焼きを片手に、部屋の隅に陣取って発言するセイバー。

「いや、もうそれ以前の問題なのよセイバー。『何よこれ、もう成功なんて絶対に有り得ない』って思うぐらいに酷いから」

「……おい遠坂。必死にやってる本人を前にしてそこまで言うか？
いくら俺でも終いには泣くぞ」

それに対するいつそ清々しいまでの酷評をするリンに、土郎君が恨みがましい視線を向けていた。

「うーん……」

お盆を脇に置いて、ガラクタと化したランプの破片を摘み上げてみる。

『強化』するのに必要な魔力は確かに通っていたようで、魔力の残り香が僅かに漂ってきた。

「なあ土郎君、『強化』する時にどういつ手順を踏んでるんだ？」

「んん？ あー、まずは物の構造を細部まで把握して、それが出来たら魔力の通しやすそうな所に魔力を流し込んで『強化』してるな」

「ふーん？ つまり『強化』する物体の『解析』は出来てる訳なんだよな？」

「ああ。それだけは得意なんだ」

「うーん……構造が解つてても『強化』出来ない、か……。ここまできると他の魔術に才能が偏っちゃってるのかもなあ。なあ、ホントに『強化』しか出来ないのか？」

“かつての仲間”の中には魔術の素質があるのに炎系統の魔術に特化しすぎてて、他の魔術が並かそれ以下の力しかないというヤツもいた。

ある一点の魔術にのみ素質が偏り過ぎていて、その反動で他の魔術に適性がないという可能性は捨てきれない。

すると、

「あー……あとは、そうだな、出来損ないだけど『投影』なら」

「……ッ！？」 『投影』ですって!?!？」

何気なく答えた士郎君の言葉に、項垂うなだれていたリンがクワツと目を剥いた。

『投影』って……確か、物を複製する魔術だったっけ？

前使った『知識の教典』にはそう書いてあったような……使った事はないけど。

「ちよつと、何で『強化』が出来ないのに『投影』が出来るのよ！
？ 『投影』って『強化』より遥かに難しいのよ！？」

「熱ッ！？ ま、待て遠坂！ 落ち着け！ お茶が！ お茶が零れるしこつちにかかる！ だからせめて湯呑は置け！ 言っただろ、
“出来損ない”だって！」

「リン、預かります」

湯呑片手に士郎君に掴みかかるリンから、部屋の隅で大判焼きをパクつきつつ眺めていたセイバーが湯呑を受け取り、士郎君は怒れるアクマを宥めつつ詳しい説明をし始めた。

「……成る程ね。つまりアナタの『投影』で作った物は外側だけで中身が出来てない、いわば“ハリボテ”って事なのね」

「ああ。偶に『強化』の鍛錬後に手慰みでやってたんだが、出来るのは全部それ。昔、親父に投影っぽい事をやって見せたら、『強化』の方が効率がいいからそっちにしろ」って言われてな。それで『投影』じゃなくて『強化』の鍛錬をずっとやってたんだ。それに『投影』しても出来るのが『張り子の虎』以下の代物じゃ意味ないだろ。プラモデルで殴り合うようなもんだ」

「そうね。中身のないガラクタなんて作れてもしょうがないし、お父さんの言い分も解るわ。確かに一から全てを作る『投影』より元からある物を補強する『強化』のほうが手間もかからないし、魔力も少なくて済むしね。わたしだってどっちかと聞かれたら『強化』を推すわよ」

「まあ、実際に見てみないと何とも言えないけど。士郎君、とりあえずそこに沢山あるランプを『投影』してみてくれないか？」

「ん」

俺の提案に士郎君は軽く頷くと、右掌を上に向けて目を閉じ、何やらブツブツと呟きだした。

するとその手の上にランプの輪郭がボンヤリと描かれていく。

リンとセイバーはその光景に目を見開いている。

かくいう俺だって驚いてる。

凄いな、これが『投影』か。

「……………ふう、出来た。って、やっぱりダメか。いつも通り中身がない。小波、ほいつ」

一仕事終わった、という風に土郎君が息を吐くと、その掌の上にはいつの間にかランプが一つ出来あがっていた。

しかし土郎君はチラリとそれに目をやると首を振りながらやれやれと呟き、俺にランプを放り投げてきた。

「よっ……………」

パシッと両手でキャッチしてよく見てみると成る程、外側の部分、つまり金属の土台や取っ手、ガラスの部分は完全に再現されているのに対し中身の部分、ガラスの中のフィラメントや台座の中の仕掛けなんかはそこからスッポリ抜かれたかのように存在していなかった。

確かにこれじゃハリボテ以下だな。

しかしこれだけでも『強化』よりは遥かに凄い出来だと思っただけだな。

同じ失敗とはいえ、こっちは完成に近い段階まで行ってるんだし。

「……何よこれ、こんなの『投影』じゃないわよ」

と、俺の横に移動して投げ渡されたランプを見ていたリンの表情が固まった。

その眼はどこか信じられないものを見ているような、そんな困惑と疑念がない交ぜになったような光を宿していた。

「『投影』じゃない……？ どういう事ですか、リン？」

「言葉の通りよ。『投影』魔術は魔力を加工して物の形に固定する事で物を複製する。でもそれは“形を変えた魔力”であって“物質”じゃない。そして作り出した物は完成と同時にそれを構成する魔力が徐々に気化していくから、ほんの数分間しか形を保てないの。でもこれは違う。これは魔力によって編まれた物だけど、完全に“物体”として世界に存在してる。魔術の根幹である『等価交換』の原則を完全に逸脱してるわ」

セイバーの疑問の言葉にリンはランプに目を向けたまま、固い声で訥々と語る。

「無から有を生み出す魔術。それは有り得ない……いいえ、あつてはいけないモノなの。何故ならそれは、この世界の法則を犯し、歪めてしまうモノだから。だからこれは『投影』なんかじゃない。おそらくこれは現実を侵食する、とある魔術の劣化した代物。だとすると多分それは……」

リンはそこまで口になると、唐突に口を閉ざした。

そして二、三度首を横に振るとふう、と一つ息を漏らし、

「……ま、仮にわたしの推測が正しかつたとしても、今の状況じゃどうしようもない、か。太郎が“そこ”に至れたとしてもかなりの時間と努力が必要だし、そこまで至れる保証もない。あくまで素質と可能性がある“だけ”。それになんかシャクだしね。どうしても今教える必要もない……か」

「……遠坂？ どうした？」

「何でもないわ。今の話は忘れてちょうだい。一応太郎の現状は理解出来たし、今回はここまででいいわ。お茶を飲み終えたらお開きにしましょう。次までには方策を考えておくから」

不自然に話を切られた事に首を傾げる俺達三人を余所に、リンはそう言って話を締めくくり今夜の凜先生主催の魔術講座は終了した。

……なんかスッキリしない終わり方だな。

二人も狐につままれたような表情をしてるし。

まあ、リンにはリンの考えがあるんだろうけど。

「……………なあ、小波」

「ん？」

散らばっていたランプの破片を片付けた後、四人でリンの部屋でのお茶会となった。

しばらくはめいめい大判焼きを摘みながらお茶を啜っていたが、やがて土郎君がどこか迷ったような表情で俺に尋ねてきた。

リンとセイバーは湯呑を傾けつつジッとこちらを見ているだけだ。

どつちら静観する気らしい。

「さっきの話なんだが……その、『正義』がどうのこうのってヤツだよ。言いたい事は解ったけど、なんでいきなりあんな事言ったんだ？」

「……あ、あれか。うーん、なんと言ったらいいかな……」

思わず頭を掻いてしまう。

あの手の話にはどうも過剰反応してしまうから、ついつい勢いで思った事を口走ってしまふ。

仕方がない面があるとはいえ、悪い癖だ。

ただ、士郎君にとって必要だと思ったのも事実。

これは俺の勘だが、士郎君はどこか歪んでいる。

“あの夢”の光景が本当ならあの地獄から救ってくれた、死んだ養父の衛宮切嗣に相当憧れていただろうし、その養父に誓った約束ならば必ず成し遂げようとするだろう。

でもそれだけじゃダメだ。

「父親との約束だから」というだけじゃ、“アイツら”と同じ道を歩んでしまう事になりかねない。

『正義の味方』であり続けようとしたあまりに、自らが『悪』を行っようになっっていた“アイツら”と同じ道を。

士郎君にはそんな事にはなつて欲しくはない。

だから語るとしよう。

彼が道を誤らないように、彼自身に確固たる“彼”を築いて貰うために。

「そうだな……俺の宝具は知ってるよな？」

「ああ、あのバットと、後は変身ヒーローみたいな格好するヤツだろ？」

「うん。あの時言ったのは、そのヒーローにまつわる話なんだ。驚くかもしれないけど、『五人の英雄^{ヒーロー}』は本物の変身ヒーローの“肉体”を纏う宝具なんだよ」

「本物の変身ヒーローの……“肉体”だつて？」

「……これから話す『お話』は、自分達が『正義の味方』であり続けるために、自ら『悪』を行うようになっていったヒーローのお話。そのヒーロー達は……」

とある少年の妄想から生まれた、愚かで尊い、本物の『英雄』の話を。

Interlude 19 - 1

side アーチャー

日付が変わろうとしている深夜。

月明かりの下、土蔵へと足を踏み入れる。

月の光が窓から注ぐがそれでも薄暗い土蔵の中には、至る所にどこからか拾ってきたようなガラクタが散乱している。

その土蔵の中央、青いシートの敷かれた一画にガラクタに囲まれて鎮座しているこの土蔵の主……小僧が一人。

小僧は一振りの木刀を両手で掴み、目を閉じて何かに集中している。

「誰だ……って、お前かアーチャー。何の用だよ」

小僧はいきなり現れた背後の気配に気付いて振り返る。

しかしそれが私だと判ると明らかに不機嫌そうな表情に変わった。

ふん……嫌われたものだな、まあこちらとしてもその方がありがたいのだが、な。

「ふむ……随分と棘のある対応だな。一応私達は同盟関係である筈だが」

「それとこれとは話が別だ。確かに遠坂と同盟を結んではいるけど、お前が俺達にやった事は忘れてないぞ」

「ククツ、これは異な事を言う。あの時はまだ同盟関係ではなかった筈だが。ならば敵であるマスターとサーヴァントを討ち取るうる事のどこにおかしな点がある？」

「……ッ！……今ので判った。俺はお前が嫌いだ。生理的に受け入れられない」

「奇遇だな、私もだ」

同族嫌悪、という奴だろう。

もっとも私の場合、それだけではないのだが。

「……………」

共に睨み合ったまま口を閉ざし、仄暗い土蔵に沈黙が満ちる。

小僧が敵意を向けてくる事自体は一向に構わんが、しかしこれではここに来た意味がない。

(……………フウ、やれやれ)

内心で溜息を吐き、小僧の握っている物を見遣る。

その手に握られた木刀で、この小僧が何をしていたのかがおおよそ理解出来た。

何しろ“自分も”散々通った道だ、微かな記憶くらいはある。

随分と摩耗してはいるがな。

「魔術の修行中だったか？ ならば邪魔をしてすまなかったな。もつとも、成功率がゼロに等しい魔術に無駄に力を注ぎ込み続ける事

が修行と言えるなら、の話だな」

「……ッ！ お前はいちいち皮肉を言っていないと気が済まないのか！？ ああそうだよ、お前の言う通り成功率がゼロに等しい『強化』の魔術の練習をしたんだよ。何せ日課だったからな。遠坂に教えて貰ってるとはいえ、やっておかないと気持ちが悪い」

「ふん……『強化』か。……まったく、呆れるな。そもそも貴様はそんなに器用な性質タチか？」

「……なに？ どういう意味だアーチャー」

私の言葉に違和感を持ったのか、小僧が訝しげな視線をこちらに向ける。

「言葉の通りだ。元からあるモノに手を加えるなど、貴様にとつてみれば無駄な行為、徒労に等しい。貴様は精々、頭の中で想像するイメージ程度の事しか出来ないのだからな」

「余計な御世話だ。で、言いたい事はそれだけか？」

結局バカにされたただけだと受け取ったらしい小僧は、不快気に表情を歪めながらこちらに背を向け、木刀に意識を向け直した。

「……チツ、自分がどれだけ異端な魔術師なのか気付かんとは、我が事”ながら度し難い」

小僧に聞こえぬよう、小声で毒づく。

そもそも『強化』がまともに出来ないのに、出来損ないとはいえ『強化』より難しい『投影』を行えるという時点で異質なのだ。

魔術の知識に乏しいとはいえ、何年も修行を重ねていながら己の才能のなさ故にと思いきみ、それに気付かないとは……。

結論として、コイツは救いようのないアホとしか言い様がない。

いや、それは今更か。

「「……………」」

再び満ちる沈黙。

……これ以上話をする意味はないな。

小僧に背を向け、入口へと向かう。

すると、

「……なあ、アーチャー」

先程とは違ってかわって神妙な様子で、小僧が声を上げた。

立ち止まり首だけで振り返ると、小僧は相変わらず背をこちらに向けたままだったが、その背中からは明らかに敵意が減っているのが見て取れた。

（なんだ？ コイツがいきなりこんな態度になるとは）

少し意外に思いながらもとりあえず対応する。

「……なんだ？」

「お前は……『正義』について考えた事はあるか？」

「……………なに？」

思わず目を見開いてしまった。

まさか小僧の口からこんな言葉が飛び出してくるとは。

この小僧は……………“この”小僧は、もしや“揺らいでいる”、のか？

「……………あるかないか、と問われればある、と答えるが。しかし、何故そんな事を訊く？」

逸る感情を抑え、静かに言葉を紡ぐ。

私にとって『正義』という言葉は一種の呪いの様なものだ。

私が英霊となったのも、その『正義』故に、という部分もあるのだから。

「……………俺は『正義の味方』を目指してた。親父と、死に際に交わした約束だったから。だからこそこれまで努力を重ねてきた。『正義の味方』になるために。でも……………」

「……………でも」？　なんだ？」

「『正義の味方』って、一体何なんだ？ 『正義の味方』でも、間違える事があるのか？ ……分からなくなってきたんだ。小波の話を聞くうちに」

「イレギュラーの話……？」

おそらく小僧が言っているのは、あの時居間でイレギュラーが語った事なのだろう。

『正義』が『善』とは限らない、という。

確かに、解らない話ではない。

この小僧は父親の約束に“縛られている”。

父親と約束したから『正義の味方』を目指す。

しかしそれは“約束したから”というだけであって、自分自身から芽生えたものではない。

思いはあっても、中身がないのだ。

その憧れから、他者の願いを引き継いだだけの、あまりにも軽い代物。

だからこそ、ほんの些細な切欠で……真理を説かただけでこうも簡単に揺らいでしまう。

それ程脆弱な代物なのだ、コイツの『正義』は。

いや……それは私も同じか。

「……そのヒーロー達は、とある子どもの妄想から生まれた。ヒーロー達はその子どもが書いた、変身ヒーローの絵をベースにこの世に生まれ落ちた。しかしそれ故に、ヒーロー達は一部の例外を除いて自分の肉体を持たなかった。ヒーローという殻だけを仮初の肉体とした、がらんどろのヒーローだった。そして彼らは、何のために自分達が生まれてきたのかを知らなかった」

と、突然小僧は何を思ったか、そんな事を口にし始めた。

その話は初耳だ。

おそらく凜から魔術を教わった時にでも、セイバーと一緒に部屋を訪れていたイレギュラーから聞かされたのだろう。

私はその時屋根の上に戻っていたから、気配から判る四人の位置関係のみを把握していたにすぎない。

(しかし……イレギュラーの語った話か)

おそらくアイツは『平行世界』の英雄だろう。

居間で語っていた話の内容からすると、与太話でない限りはそう判

断せざるを得ない。

この世界の現代科学でサイボーグやらアンドロイドやらの技術は確立されていないし、今後も出来るかどうか怪しい。

……どうやらそれだけでもなさそうだが。

そんなヤツが話した事に興味がない訳ではないので、しばらく語らせておく事にする。

「やがてヒーローの存在は周囲に知れ渡り、人々は彼らを『正義の味方』だと思ふようになった。そしてある日、商店街の福引を襲撃していた悪人を見ていた知人にこう言われた。「せつかく変身ヒーローがいるんでやんすから、もっとすごい悪事を働いて欲しいでやんす」……と。周囲の人間は弱きを助け、悪を挫く正義のヒーローとなる事を彼らに期待していた。彼らがなまじヒーローの格好で生まれてきたために。そして純粋な彼らはその言葉の通りの行動を起こした……自分達の本来の役割を、自分達が一体何をしたいのかを知らぬまま」

……“やんす”？

なんだその語尾は。

そんなしゃべり方をするヤツが本当にいたのか？

……いかん、思考が逸れてしまった。

「元々彼らには倒すべき『悪』がいなかった。当然だ、彼らがいたのは裏側はともかくとして、ごく平和な世の中だったのだから。表側に存在していた彼らには倒すべき『悪』が存在しなかった。だから彼らは周りの人々が望んだ『正義の味方』であるために……自らの手で『悪』たる存在を作りだした」

「……!？」

ピクリ、と片眉が跳ね上がる。

馬鹿な、それでは本末転倒だ。

『正義の味方』を望まれた者が、『正義の味方』であるために自ら『悪』を行うなど。

……いや、私も……そして“父親”も、似たようなものだったか。

「そして始まるのは自作自演の“茶番劇”……彼らとはある研究者の下から悪の特徴たる『怪人』を作りだす機械を盗み出し、次々に怪人を生み出していった。そして作りだした怪人を送り込んだ『悪の組織』を設立し、裏で結託。今までとはスケールの違う、派手な犯罪行為を行わせた。後は自分達が出張って鎮静化を図る……。出来あがるのは『正義の味方』対『悪の組織』の構図。すべては周囲の望んだ、『正義の味方』であるために」

小僧は相変わらず背を向けたままだ。

しかしその小僧の背中から感じられるものは……。

「だがその一方で、リーダーを始めとした一部のヒーロー達は悩んでいた。自分達は何のためにこの世に存在しているのだろう、と。自らの存在意義を見出せずにいた彼らは、茶番を演じながらも日々考えていた。『正義の味方』とは……そして『自分』とは一体何なのか。やがて彼らは、遂に自分達の生まれた意味を知る。他でもない、彼らを生みだした少年自身によって」

『我思う、故に我あり』というヤツか。

しかし……生まれた意味、か。

私が生まれた意味とは……さて、なんなのだろうな。

少なくとも、『世界』の使いっぱしりなどではないと思いたいが。

「彼らヒーローの生まれた理由、それは……少年の抱いた夢を叶える力を貸すため、そして少年に立ちはだかる最後の『壁』となるためだった」

……何？

「少年は彼らヒーローが今までやってきた事を知ると、それまで仲間としてやってきた彼らを見限り、仲間と共に彼らの前に立ちはだかった。そして彼らはその少年に敗れた。役目を終えた彼らは姿を消し、そのまま終わる筈だった……。ところが、ヒーローを打ち破った少年が夢を叶えた瞬間、その感情の爆発を引き金として再びヒーロー達は姿を現し、最後の障害として少年の前に立ちはだかった。結果は少年の辛勝。そして消えゆく寸前、彼らは……。いや、自らの存在意義を探していたヒーローのリーダーはようやく気付いた。自分達は、少年の願いを叶えるために呼び出され、そしてその代償として……。少年は自分達を越えなければならなかったのだという事を」

「彼らは『正義の味方』でも何でもなかった。しかしヒーローの姿形をしていたため、『正義の味方』である事を期待された。本来なら、そんなものになる必要などどこにもなかったのに。そして彼らは自分達が何のためにここにいるのかを知らなかった。確固たる自分を持たなかった。その結果周囲の期待に振り回され、悪事に手を染める事となった。周囲の期待通りの『正義の味方』であらんとしたために。結局のところ彼らは、『正義の味方』であれという周囲の願いに振り回された、哀れな連中だった。……。でも」

「それでもそのヒーローのリーダーは、少年との別れの際にこう言った。「願い事を叶えるために召喚された者は数あれど、俺のように満足して退場して行ける者は数少ない」と。少年の願いのために生まれた事も、この結末にも後悔はない、と。そして彼はその時初めて、『英雄』^{ヒーロー}になった。少年の夢を叶えるために、そして自らの存在意義を求めて走り続け、そして“答え”を得た……。愚かで尊い、本物のヒーローに。全てが終わった後には、少年とその仲間以外の人達からヒーロー達の記憶がスッポリとなくなり、彼らの存在は忘

れられた。それでもその少年は、そのヒーロー達に感謝した。ありがとう……と。そして彼は生涯、ヒーロー達の事を忘れる事はなかった」

「……………」

語り終えた小僧はフウ、と息を一つ漏らすとそのまま口を閉ざす。

三度の沈黙がこの薄暗い空間に満ちる。

……小僧は黙したまま、何も語らない。

だが理解出来た。

コイツは今、葛藤しているのだ。

己の目指す『正義の味方』が、果たして正しいのかどうかという事に。

確固たる意思を持たない、がらんどこの『衛宮士郎』は。

その話のヒーローと同じように。

「……………何故、今の話を私などに語った？」

「……………別に、深い意味はない。ただ誰かに愚痴を聞いて貰いたかつ

ただけなのかもしれないな。そして目の前に偶々お前がいた。それだけだ」

「ふん……。期待させて悪いが、生憎私には貴様の疑問に答えられる回答など持っていない。精々、思い悩むがいい。……。ただ」

「「ただ」？ 何だよ」

私の言葉に小僧は振り返る。

敵意が薄れ、どこか覇気がなく悄然としている小僧の顔を横目に、私は背を向けた。

「……。少しは自分の周りをよく見渡してみる事だ」

そう最後に言い残すと、私は霊体化してその場を離れた。

あのままだと、あの小僧に引き摺られてしまいかねなかったからだ。

……。衛宮士郎に共感などしてどうする。

私の目的は、あの小僧を消す事なのだから。

そのために、どれ程の時を過ごしてきたと思っている？

「…………チッ」

屋根の上へと戻る途中、思わず舌打ちをし、脳裏によぎった淡い期待を振り払う。

あのイレギュラーめ…………余計な事を吹き込んでくれたものだ。

いつそ消すか？

…………いや、焦るな、まだ早い。

ヤツはもうしばらく泳がせておく必要がある。

せめてヤツの底を見るまでは…………。

「…………ッ、チッ」

もう一度、舌打ちを漏らす。

それはイレギュラー、一ノ瀬小波に対して、無意識のうちに僅かばかりでも淡い期待を寄せてしまった、自分に対しての物だった。

I
n
t
e
r
l
u
d
e

o
u
t

第十九夜 「『正義』を語る野球少年（後編）」（後書き）

感想を頂けると嬉しさのあまり、踊るかもしれません……胸が。

そしたら執筆スピードも……多分、上がらないです。

ゴメンナサイ。

第二十夜 「柳洞寺と野球少年」(前書き)

ここからだんだん佳境に入ってきます。

第二十夜 「柳洞寺と野球少年」

Interlude 20 - 1

side 士郎

「ん……」

意識が暗闇から頭をもたげる。

どうやらアーチャーと（不本意ながら）話をした後、そのまま眠ってしまったようだ。

どろりで肌寒い訳だ。

しかし……アーチャーは一体何しに来たんだろうか？

俺に嫌味を言うためか？

……いや、アイツがわざわざそんな事のために土蔵に来るとは思えない。

じゃあ、何で……？

(……ま、考えたところで解る訳もない、か)

そもそも俺はアイツではない。

他人の思考が読めるような芸当が俺にはない以上、回答など導き出せようもない。

とりあえず、閉じたままだった目を開いて……。

「……え？」

瞬間、思考が固まった。

本当なら目を開いた俺の眼前には、見慣れた土蔵の薄汚れた壁がある筈だ。

しかし俺の目の前にはそんな物はなかった。

いや、土蔵の中ですらなかった。

何故なら俺の目の前には……。

「じ、ここは……柳洞寺!？」

今まで何度も見てきた荘厳な雰囲気醸し出す立派な御堂が、威風

堂々とそびえ立っていたのだから。

「何でこんな所に……ッ!？」

思わず身を乗り出そうとしたが、どれだけ力を込めてもまるで磔にされてでもいるかのように身体が動かなかった。

……つて、磔？

「……ッ!？ 腕が……固定されている!？ ……くっ、脚もか!」

思わず動く首を動かして自分の姿を見る。

そして自分の態勢が、まるで十字架に磔にされ、今まさに処刑される寸前のキリストのような体勢になっている事にようやく気付いた。もっとも掌に釘を打ち込まれている訳ではないし、磔に必要な十字架も後ろには存在してはおらず、俺の両腕は空中に肩と水平にして固定されていたのだが。

「あら、ようやくお目覚め?」

と、突然誰かの声が虚空に響いた。

高さからして女性のようだ。

それも幾分若い。

「…………ツ、誰だ!？」

叫びつつ、動かない身体を無理矢理動かそうとあらん限りの力を込めるが、無情にも身体は動いてはくれなかった。

…………クソ!

「ふふ、威勢のいいボウヤね。いいわ、教えてあげる…………冥土の土産にね」

「…………え?」

最後の言葉に思わず目を見開く。

そして次の瞬間、一瞬にして目の前に黒と紫のローブを纏い、フードで頭部を覆った小柄な人影が現れた。

その体格と声からして、おそらく女性。

フードのせいで口元しか顔が見えないが、しかしその気配、そして存在感が尋常じゃなかった。

素人でも解る。

目の前にいるのは、明らかにヒトとは隔絶したモノ。

そして俺はこの異様な気配を知っている。

ここ最近、ずっと触れ合ってきた物と同じ。

「……サーヴァント！ そしてここは柳洞寺……、！ お前はキャスターか！」

「あら、間抜けだと思ってたけど、意外と頭は悪くないのね。でも、魔術師としては三流以下の問題外。私の『誘導』にアツサリ掛ってしまう位にお粗末な抗魔力じゃ、ねえ？」

「……くっ！」

言い返したいが正しくその通りなので何も言い返せない。

せめてもの抵抗にと、目の前のキャスターを睨みつける。

しかしキャスターは俺の視線にも怯むどころか、むしろ口元につっすらと底冷えするような笑みを湛えている。

……この場で一体どちらが強者なのか、火を見るより明らかだ。

「……俺をどうする気だ？ わざわざこんな事をしなくても、ここから俺の家まで干渉できるんなら俺を殺せた筈だろう？」

「そうね、否定はしないわ。でもそれじゃあまりにも意味がないもの」

「……なに？」

キャスターの言わんとしている事が解らず、首を傾げる。

わざわざ俺を柳洞寺まで引つ張って来なくても、あの場で俺を殺害すればセイバーと小波、二人のサーヴァントを容易く脱落させられた筈だ。

しかしそれでは意味がない、だと？

「私にはアナタが……正確にはアナタの持っている物が必要だった。だからこうしたのよ。これなら余計な手間は掛らないしね」

「俺の持っている物……だって？」

俺がそう言うと、キャスターはニッと口の端を吊り上げ、

「そう……アナタの持つ魔術回路と、令呪。その二つが必要なの」
至極愉快気に、そのたまった。

「な……に？」

魔術回路と……令呪だと！？

そんなもの、一体何に……？

「その顔は、「何でそんなものが必要なんだ？」という顔ね。まあいいわ、教えてあげる。簡潔に言えば、アナタの魔術回路をマスターに移植するのよ」

「移植……！？ バカか、そんな事出来るもんか！ 第一、何でそんな事する必要があるんだよ！ お前のマスターには魔術回路がないとでも言っつもりか！？ 慎二みたいに！」

「その通りよ」

「……!？」

アツサリと言い切ったキャスターを思わず凝視してしまう。

この場で一番の強者たるキャスターの顔（といっても見えるのは口元だけが）には、勝利を確信しているが故の優越感と高揚が浮かんでいる。

それが彼女を饒舌にさせているようだ。

今の自分は正しく『まな板の上の鯉』。

文字通り捌かれるのを待つだけの存在だ。

それ故に、多少の内情を明かしてもなんら問題はないのだろう。

「我がマスターは魔術回路を持たない一般人。それ故に採れる選択肢にも制限がある。でもマスターに魔術回路が備われば、それも随分緩和されるわ。だから魔術回路が必要な。まあ、あの小娘でもよかつただけ、ああ見えて高い素質があるから手を出し辛かつたのよ。その点、ボウヤは条件を揃えていて尚且つ手間なんてないに等しい、これ以上ない物件だったわ」

バカにしたような調子で語るキャスター。

いや、実際バカにしているんだろうが。

仮にも魔術師の英霊だ。

こと魔術に関しては絶対の自信と実力があるのだろう。

だからこそこの態度か。

「そしてこの優良物件にはもう一つ、素晴らしい特典が付いていた。
“最優のサーヴァント”と呼ばれる剣の英霊、セイバーが」

「ッ!? お前は……セイバーを利用するつもりか!? 俺から今
呪を奪って!」

遠坂とセイバーから聞いた話を総合すると、一般的にキャスターの
クラスで召喚されたサーヴァントは『最弱』だと言われている。

特に高い対魔力を備えるセイバー、ランサー、アーチャーの、所謂
『三騎士』との相性はその互いの特性上、最悪だ。

更に呼ばれた者にもよるが、魔術に秀でている者が呼び出されるが
故に、武で頭角を現した他の英霊達と引き比べて純粋な戦闘能力が
低いのだ。

自然、策謀を張り巡らせて勝ちを拾うしか選択肢がなく、今代の魔術師と同様に自ら作った『工房』に引きこもって漁夫の利を虎視眈々と狙う、消極的なスタイルを採らざるを得なくなる。

『最弱』と呼ばれている理由はここにある。

しかしここに、それらの欠点を補うファクターが付加されれば話は別だ。

要は自分に力がなければ、余所から力のある者を引っ張ってくればいいだけの事。

それが俺が召喚した、『三騎士』の一にして最優のサーヴァント、セイバーだったという訳だ。

確かにこれ以上の好条件はないだろう。

「そういう事よ。それと、魔術師の英霊をあまり舐めない事ね。アナタは「出来る訳がない」と言っただけ、私にしてみれば魔術回路や令呪の移植なんて、霊薬を作るよりも遥かに簡単な事なの」

キャスターはそう言うのと右手を上げ、人差し指を俺に向ける。

すると俺の左腕が勝手に前に突き出された。

まるでキャスターに令呪を差し出しているような構図。

いよいよ鯉が捌かれる時が来たようだ。

「くっ……!!」

必死に身体を動かそうとしても、やはり身体は微動だにしない。

くそっ、まだ……まだこんな所で終われるかよ!

「無駄よ、いい加減に諦めなさいな。悪あがきは見つとも無いわよ。さて、それじゃさようなら。怨むなら、その程度の実力で愚かにもこの戦争に参加した己の浅慮と不運を怨みなさい」

酷薄な笑みを浮かべた魔術師が歌うように別れの言葉を告げ、突き出した俺の腕に手を触れようとして……。

突如飛来した銀光に、その手を阻まれた。

「なっ……!!?」

「ぐっ……!!」

キャスターはいきなりの事に驚き、咄嗟に後ろに下がる。

対して俺は目の前で起きた何かが着弾した事による衝撃と爆風に目を閉じ、只管それを耐え忍ぶしかなかった。

今のは……まさか!?

「何者……!?!」

突然の襲撃に狼狽しきりのキャスターはそう呻きながら、銀光の来た方向を睨みつける。

するとそこからさらに数本の光条が奔った。

「ちっ……!!」

キャスターは舌打ちを漏らし、更に後方に退避する。

結果として、俺とキャスターの距離は大幅に広がった。

代わりに俺の前にある地面に小規模なクレーターが数個出来上がった。

ていたが。

(……明日、一成が見たら何て言うんだろっな?)

場違い且つ不謹慎にも、そんな事を考えてしまう俺だった。

「下らん事を考えてないで、少しは動くなり何なりしたらどうだ？
今ので戒めは断った筈だが」

後ろから皮肉のたつぷりこもった男の声が聞こえてくる。

やたら聞き覚えのあるその声に内心イラツとしながらも、とりあえず身体に力を込める。

すると先程までの硬直が嘘のように、身体を思い通りに動かす事が出来た。

「……お前なのが気に入らないけど、助かった。一応、礼は言っておく」

「……ふん、礼などいらん。第一、まだ早すぎる。まずはこの状況から生き延びることだけを考えている。この状況に陥ったのは、私の落ち度でもあるのだしな」

いつの間にか俺の前に、赤い外套を纏った長身の男……アーチャーが立っていた。

まるで俺を護るように。

それが何故かひどく腹立たしく感じながらキャスターの方に目を向ける。

キャスターはいきなり乱入してきたアーチャーに、酷く狼狽を露わにしていた。

「アーチャー……！？ 何故アナタがここに！？ アサシンは何をやっているの！？」

……アサシンだって？

なんでアサシンがここで出てくるんだ？

「ふむ？ ああ、門の所にいたサーヴァントの事かね？ それなら無視して来たが」

「……無視、ですって？」

「ああ。ここ柳洞寺はサーヴァントにとっては鬼門といえる。それ

はこの御山一帯を覆っている、自然霊以外の霊的存在を遮断する結界が存在するが故だ。しかしそれを突破する方法がない訳ではない。いかに強力な結界といえど限界はある。力が落ちるのを覚悟で強引に突破する事は可能であるし、張つてあるのが結界である以上、『結界破り』を行えばその防壁はないに等しい。それ以前にここは『敵地』だ。敵地に堂々と玄関から侵入してやる義理はない。よつて山門の横にある脇道から、結界を無視して強引に押し通らせて貰つた。唯一結界を張れない山門に罾が仕掛けてあるだろうと判断しての選択だったが、まさか“協力者”であるサーヴァントを配置しているというのは予想外だった。しかしそれがアサシンとはな。拠点防衛のサーヴァントとしては少々力に欠けると思うのだが。向こうもこちらに気付いていたようだが、どういう訳か山門から動かさずこちらを見逃していたぞ」

立て板に水のようにスラスラと答えるアーチャー。

しかし聞き逃せない単語が中に混じっていた事に気付いた。

「おいアーチャー。さっきの言い方だと、アサシンがキャスターと組んでいるように聞こえたんだが」

「そつだ、それでもなければ山門にサーヴァントがいる説明が付かない。おそらく、キャスターのマスターとアサシンのマスターは裏で繋がっている。お前と凜のようにな」

アーチャーは俺の問いに訥々と述懐する。

すると唐突に、

「……クク、フフフフ……アーツハハハハハ！」

「……む？」

「な、なんだ？」

アーチャーの言葉を聞いていたらしいキャスターが突如笑い声を上げる。

そのいきなりの事に俺とアーチャーは思わずお互いに目を見合わせしてしまう。

「……………」

……それに気付いた瞬間、二人して即座に視線を元に戻したが。

何が悲しくて男同士で見つめ合わなければならぬのか。

しかもアーチャーと、とくれば最早気持ち悪いというレベルを超越してしまっている。

アーチャーもどうやらそう思ったらしく、若干表情が苦み気味だ。

「どうかしたのかね、キャスター？　ワライタケでも食べ過ぎて、今頃になって発作が……という訳でもなさそうだが」

渋面のまま、本気なのか冗談なのか判断が付かない声音でアーチャーが問いかける。

対してキャスターは笑いを収めつつ、しかしいまだにお腹を押さえながらそれに答えた。

「フフフフ……ごめんなさいね。あまりにもバカげた推理だったからおかしくしておかしくて」

「……む、なんだハズレだったのかね？　てっきりそうだと思ったのだが」

「ええ、勘違いも甚だしいわ。どうしてあんな駄犬が“協力者”なのかしら。あれは私の単なる“手駒”よ」

「……手駒、だって？」

ますます解らなくなった。

山門にいるだろうアサシンをけな貶す罵詈雑言からして、キャスターの立場がアサシンより上なのは理解出来る。

しかし手駒って………どういう意味だ？

「……もしやキャスター、貴様、ルールを破ったのか。サーヴァントがサーヴァントを召喚するなど、反則どころの話ではないぞ」

それを聞いた瞬間、アーチャーからキャスターに向けて凄まじい殺気が放たれた。

「ぐ………っ!？」

そのあまりの威圧感に思わずたじろぐ。

あのアーチャーが………怒っている？

「あら、どこが反則なのかしら？ 聖杯戦争に参加する“魔術師”はサーヴァントを呼び出すものでしょう？ なら魔術師である私が呼び出したところで何ら問題はないじゃないの」

アーチャーの濃密な殺気にキャスターは些かの動揺も見せず、むしろそれがさも心地よいとも言つかのように、朗らかにそう告げた。

「…………！」

アーチャーの殺気がさらに密度を増す。

刺すような、それでいて粘つくようなそれは最早瘡気に近い。

意志の弱い人間なら間違いなく卒倒しているだろう。

だが事情はおおよそ解った。

つまりアサシンは“キャスターが呼び出した”サーヴァントなのだ。

サーヴァントがサーヴァントを召喚するなど、ルール違反以前に普通はそんな事、まず出来はしないだろう。

それをいとも容易くこなすところに、キャスターの魔術師としての非凡さが窺い知れる。

「……………今回は小僧を連れ戻すだけに留めておくつもりだったが、少しばかり灸をすえねばならんらしいな」

「アーチャーの分際で私に勝てるつもりなのかしら？ 『三騎士』の癖にその程度の対魔力では話にならないわよ。それにセイバーは言うに及ばず、ランサーにも、外のアサシンにも実力は遙かに劣ってるわね、アナタは。その貧弱なステータスを見る限りでは」

どうやらキャスターには俺達マスターと同じように、アーチャーのステータスがおおよそ見えているようだ。

流石は魔術師の英霊、といったところか。

小波とセイバーにステータスを見せて貰って以来、俺も各サーヴァントのステータスはある程度把握出来るようになってる。

確かに総合的に見て、アーチャーの各パラメータはそう高くはない。しかしそれがアテにはならない事を、アイツを通じて俺は知っている。

……あれ、待てよ？

そういえば……。

「……言ったな。では一撃だけ、実力を見せてやろう。私がとるに足りない英霊かどうか、その目でしかと判断したまえ、“魔女”」
アーチャーはそう言い切ると殺気を極限まで鋭くし、無手のまま十数メートル先に佇むキャスターに向かって駆け出していった。

（ キャスターは何も言ってなかったけど、もしかして小波の

事、知らないのか？)

疾駆するアーチャーを眺めつつ、ボンヤリとそんな疑問が脳裏を掠めた。

I n t e r l u d e o u t

s i d e 小波

「コナミ！ 起きてくださいコナミ！ 寝てる場合ではありません
！！」

「うわああっ！ 何だ、火事か地震かつ！？ って、セイバーか？」

布団の中で安眠を貪っていると、突如部屋に呐喊して来たセイバーに叩き起こされた。

セイバーは表情が青褪め、酷く落ち着きがない様子。

はて、何かあったのかな？

「どうしたんだ、セイバー？ こんな夜中に」

「シロウが、シロウがいません！」

「……なんだって!？」

いないって……どういう事だ？

確か士郎君の部屋とセイバーの部屋は隣同士にあったよな。

そこにいないというのならあの土蔵にいるかもしれない。

そこで魔術の鍛錬をしていたと言ってたしな。

布団から跳ね起き、衣装替えで服を着替えながらセイバーに尋ねる。

「土蔵には？」

「見てみましたが、やはりいませんでした。ただ、かすかに異質な魔力の残滓が残っていましたから、おそらく外部から何らかの魔術行使を受けたのではないかと……」

「魔術行使……？ 確かこの家には簡易の結界が張られてた筈だよな。異物が侵入してきたら警告が鳴る程度の。それにも引っ掛からないで魔術をこの家に叩き込んだんだとすると……」

「 キャスターの仕業よ、十中八九ね。アーチャー曰く、気が付いたら土蔵目掛けて柳洞寺から金の糸のような物が伸びていらしいわ。士郎はそれにフラフラと引っ張られていったそうよ」

と、唐突に廊下の奥から声がした。

着替えが終わってセイバーと共に廊下に出てみると、欠伸を噛み殺しながら壁に寄り掛かっているリンがいた。

ただかなり切迫している状態であるにも拘らず、リンの顔色からは焦りや動揺といったものは見受けられない。

「……やっぱりそうか。そういう芸当はキャスターの得意分野だもんな。しかしアーチャーがそれを見逃すなんて、らしくないな。何か考え事でもしてたのかな？ まあそれはともかく、その様子だともう手は打ってあるみたいだな」

「当然でしょ。アーチャーに士郎を追わせてるわ。そもそもこれはアーチャーの失態でもあるんだしね。もう士郎を捕捉してる筈よ、まだ連絡はないけどね」

「そうか……。とりあえず、俺達も急いで向かった方がいいな。アーチャー一人じゃ流石に不安だし、柳洞寺はキャスターのテリトリだ。そこに二人だけじゃ脱出も難しいだろうからな」

「ええ、急ぎましようコナミ。リンはどうするのですか？」

「わたしは留守番してるわ。行った所で出来る事なんてあんまりないし、足手まといになりそうだしね。余計な荷物は置いて行くのが賢い選択よ」

「……そうですか。では行きましよう」

セイバーはそう言うと、リンから貰った普段着から青いドレスと銀の鎧を一瞬で纏う。

セイバーの鎧と服は魔力で編まれているから、意識すれば一瞬で身体に纏う事が可能なのだ。

俺の衣装替えと似てるが、厳密には俺の服は魔力で出来ている訳じゃない。

「あ、ちょっと待ったセイバー。俺は『黒の英雄』^{ブラック}を纏ってから行くこうと思っただけど」

玄関へ向かおうとしたセイバーを呼び止める。

『黒の英雄』^{ブラック}は『五人の英雄』^{ヒーロー}の中で最も戦闘能力が低い、代わりに全形態の中で最速のスピードを誇る。

さらに『気配遮断』と『不可視化』の能力は敵地の潜入時にはかなり有利だ。

纏っておいて損はない。

「……ふむ、確かにその方がいいかもしれませんね。解りました。但し、姿と気配を消すのは柳洞寺に入る直前にしてください。そうでなければ色々と不都合がありますから」

「ん？ ブラックって何？」

俺の提案にセイバーが一瞬思索した後首肯し、『黒の英雄』^{ブラック}の事を知らないリンは頭の上に疑問符を浮かべた。

「ああ、時間がないから手短かに説明するけど俺の宝具の一つで、簡

単に言えばアサシンの能力を身に付ける事が出来るんだ」

そうリンに告げると右手の中に絵を顕現させて握り潰し、黒いヒーローへと変身する。

そして即座に『気配遮断』と『不可視化』を発動し、リンの背後に回り込んだ。

リンは俺が一瞬で姿を消した事に目を見開いていたが、それを尻目に『気配遮断』と『不可視化』を解いてリンの肩に手を置く。

即座に振り返ったリンが肩に手を置いたのが俺だと解ると、さらに驚愕の表情を露わにした。

「……成る程、敵地潜入にはもってこいの宝具ね。でもその格好は……ひょっとしてあの時のヒーローの話って……」

冷や汗を浮かべながらも探るような視線を向けてくるリン。

抜け目がないのは流石だけど、今はそんな問答をしてる場合じゃない。

「……まあ、リンの想像に任せるよ。じゃあ行こうセイバー。これ以上、余計な時間は食えない」

「はい。ではいつてきます、リン」

そうして俺とセイバーは、柳洞寺を目指して夜の町へと飛び出していった。

「ここが柳洞寺か……。山の上にお寺があるのか。なんか霊山みたいな感じがするな」

長い階段が続く山門への入口に俺とセイバーは立っている。

あの後軽く打ち合わせをしながら全速力で町中を駆け抜け、もの十分もしないうちに柳洞寺の入口へと辿り着いた。

「はい。ここには自然霊以外の霊的存在を遮断する結界がこの山を囲むように張られています。よって無理なく侵入するにはこの階段を上って、その先にある山門から入るしかありません」

「ふーん、じゃあ罫があるとすればこの階段の途中か、先だな。とりあえず、セイバーは普通にこのまま行ってくれ。俺はセイバーの三歩後ろから姿を消してついていくから」

セイバーには『直感』のスキルがあるから畏があっても俺より対応が出来る筈だ。

こう言うつては何だが、セイバーが畏探知機の代わりに務めてくれれば危険はグンと減る。

あの時強硬に柳洞寺に乗り込もうとしたのは、ひよっとしたら本当に自分だったら大丈夫だと踏んだからかもしれない。

もっとも土郎君を抱えた状態だったら、むしろ『デッド・エンド』だったかもしれないな。

土郎君に『直感』のスキルはないし、畏に関する知識も皆無だろうし。

「解りました。それでは行きましょう」

セイバーは頷くと、油断なく周囲に気を張りながら山門へと続く階段を数段飛ばしで駆け上り始めた。

俺はそのキツチリ三步後ろを、『気配遮断』と『不可視化』を展開した状態についていく。

そして階段を上り始めてからしばらくして、

(……おかしいな。畏がない、だって？ もう階段は半分登ったぞ？ 普通ならそろそろ何かが出てきてもおかしくないんだけどな)

飛ぶように階段を駆け上がるセイバーの背中を追いかけながら、ふと疑問が頭をよぎる。

ここまでは何事もなく、順調に歩を進めている。

だからこそ首を傾げてしまう。

あまりにも何もなさすぎるのだ。

仮にも敵の本拠地なら、侵入者に対するえげつない罠が所狭しと仕掛けられていてもおかしくない。

それこそトラバサミとか、アラームとか、地雷とか……って、流石にそれはないか。

「……妙ですね」

どこか戸惑いを含んだ小さな声が前方から聞こえてくる。

セイバーも同じ疑問を抱いたようだ。

しかしだからといって引き返す事は出来ない。

俺達に出来る事は、不安を抱えながらもこの階段を突き進む事だけだ。

やがて何事も起こらないまま、ゴールである山門が見えてきた。

しかし、

「「……！」」

山門まであと少し、という所で俺もセイバーも足を止めざるを得なかった。

正面からここ数日で嗅ぎ慣れた、独特の気配が漂ってきたからだ。

そして、

「ふむ、どうも今宵は来客の多い日のようだ。その鎧と研ぎ澄まされた、それでいて澄んだ気配から察するにセイバーとお見受けするが、相意ないか？」

「……サーヴァント！」

山門の前に悠然と佇み、異様に長い日本刀を携えた群青の侍が俺達の行く手に立ち塞がった。

第二十夜 「柳洞寺と野球少年」 (後書き)

素早さが少し上がった!!

『安定感』が身に付いた!!

ステータスが更新されました。

第二十一夜 「侍と魔女と野球少年」 (前書き)

お待たせいたしました。

文字数が現時点で過去最高になっています。

第二十一夜 「侍と魔女と野球少年」

side 小波

「侍……か」

セイバーが目の中の剣士を見据え、一人ごちる。

群青の着物を身に纏った長髪的美丈夫は涼やかな、それでいてどこかしら雅な雰囲気を漂わせている。

しかしその手に持つのは明らかに異様な凶器。

五尺はあるつかという日本刀を右手に持ち、山門の前に佇む彼はまさに城の門番。

男は笑みを浮かべながら山門からセイバーを見下ろし、どこか嬉しげに言葉を紡ぐ。

「ふむ……どうやらこの門の先が気になって仕方がない、といったような顔だな。察するに、貴公の主がこの向こうにいる、という事かな？」

「……ッ！」

「……ふっ、そう殺気立たずともよかるうに。む、そういえばまだ名乗っておらんんだな。これは失敬した。アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎と申す」

「(なっ!?)」

セイバーの驚愕の声と、俺の内心の動揺がシンクロした。

あまりの事に、危うく声を上げてしまっ所だった。

まさかアツサリと真名を名乗るなんて。

無名の俺ならともかく、普通のサーヴァントが真名を名乗るのは当然ながらリスクが高い。

しかもアイツは自分を『佐々木小次郎』と名乗った。

俺でも、いや日本人なら誰もが知っている。

日本屈指の剣豪、『宮本武蔵』と巖流島で死合をした最大の好敵手。

それが自分の正体だと目の前の男は言い切ったのだ。

……何を考えてるんだ？ コイツは。

「……よろしいのですか？ 真名を明かしても」

「別に構わんさ。私にとっては『佐々木小次郎』の名など隠す必要もない程度の物故、な。そも、私は『佐々木小次郎』などではないのだからな」

「……？ どういう、意味ですか？」

「私はな、この上にいる同類の“女狐”に呼び出されたのだよ。しかしながら、サーヴァントがサーヴァントを召喚するなど真つ当な事ではない。当然、どこかに少なからず支障が生じる。その結果が私だ。本来なら存在する筈のない『佐々木小次郎』という架空の英雄をアサシンとして呼び出し、この山門に縛り付ける事でその存在を定着させた」

「……?? いくつか聞き捨てならないところもありましたがそれはさておくとして、ますます解らない。貴方は『佐々木小次郎』なのでしょう?」

「確かにこの身は『佐々木小次郎』だ。そして『佐々木小次郎』という人物は確かに存在したのだろう。しかし、それはとある剣豪の伝承でのみ伝えられる酷く曖昧な存在。それ故に、『佐々木小次郎』たりえる存在として私が『佐々木小次郎』として呼ばれたという事だ」

「……………」

セイバーはそれでもよく解らなかつたらしく、難しい顔をしたままだ。

だが俺には何となく解った。

つまりアイツは『佐々木小次郎』本人ではなく、『佐々木小次郎』という“殻”を被った存在という事なんだろう。

言葉から推察するに、本来なら不可能であるサーヴァントがサーヴァントを呼び出すという行為を、キヤスターが無理矢理やった際の弊害としてそういった存在を呼び出してしまい、山門を所謂『依代』にして彼を山門の番人にしたという訳だ。

そんな不安定な存在をこの世界に安定させるには、この世界のモノに縛り付ける必要があるからな。

サーヴァント
似たようなモノであるキヤスターじゃ『依代』になれなかった、という事か。

本人は『佐々木小次郎』としてかつて生きていた訳じゃなく、ただそれを名乗るのに相応しい力を備えていたから『佐々木小次郎』という役割で召喚されたのだ。

だがそれは中身は別物でも、その実力は本人と遜色ないという事でもある。

多分山門から大きく離れる事は出来ないんだろうけど、それでも決して油断していい相手じゃない。

「……………何故その話を敵である私などに？」

「なに、私をここへ括りつけた“女狐”へのささやかな意趣返しよ。ここに括られたおかげで存在こそ安定したが、代わりにこの山門から離れる事は叶わなくなった。自然、苛立ちも増そうというものだ」

相変わらず笑顔のまままで語るアサシン、佐々木小次郎。

その表情を見ていると本当に苛立っているのかどうなのか、判断が付かない。

すると一転、小次郎の醸し出す気配が不穏な色を帯び始めた。

これは……………殺気！

「……………さて、問答はこれまでだ。このまま引き返すのならばそれによし。そしてここを通りたくば我が屍を越えよ。選択は如何に？
セイバーよ」

(ぐ……………！)

浮かべる笑みとは裏腹に、まるで全身を切り裂くような濃密な殺気をぶつけてくる小次郎。

セイバーのやや後方にいる俺にまで影響が来るほどの相当な物だ。

これ以上ここにいれば、下手すると殺気に当てられて『気配遮断』が解けるかもしれない。

(まずいな……その前に山門の中に入ってしまったわないと、このアドバンテージが崩れてしまう)

そう考え、急いでセイバーに近寄って左肩に指で文字を書いて意図を伝える。

『今のうちに山門を超える。アサシンの足止めをお願い』

「……………」

セイバーは了承の返答の代わりに不可視の剣を顕し、両手に握りしめて小次郎へ向かい構える。

アサシンはそれに対してニヤリとその笑みを深くした。

「小次郎、と言いましたね。確かに我が身はセイバー。しかし真名

を明かせぬ非礼をどうか許してほしい」

「よい。我ら剣を振るう者同士においては、一度剣を合ひつたひわせれば万の言葉にも勝る言の葉となる。そこに名など不要の物だ。それになセイバーよ、そなたが私と死合うと決めくれた事こそ私にとって何よりの返礼なのだよ」

「そうですか。それでは貴方の言う“女狐”に用があるので、ここは貴方を倒して押し通らせて頂きます。“いざ”！」

「……ふむ、“尋常に”」

「「勝負”！！”」」

そうしてセイバーが小次郎目掛けて呐喊していくと同時に、俺も山門をくぐるべくセイバーと同じタイミングで駆け出す。

そしてセイバーの不可視の剣と小次郎の長刀が触れ合い、火花を散らすと同時に両者の脇を気付かれないようにすり抜け、どういう訳か開けっ放しにされている門をくぐり抜けて柳洞寺へと潜入した。

……門番が門を開けっ放しにするなよ、ありがたいけど。

（さて、潜り込めたはいいけど士郎君は一体どこに……ん？ この気配はアーチャーと……もう一つあるな、多分これがキャスターだな。って事はアーチャーは士郎君を奪還したのか？ ん？ なんだ、殺気……？）

隠密モードを維持したまま境内の隅にある植え込みに身を潜めつつ、『霊力』のスキルから派生する第六感と視覚情報を頼りに状況を把握しようとする、突如濃密な殺気が向こう側から伝わって来た。

目を凝らしてよく見てみると、境内の中央辺りに紫のローブを纏った小柄な人影があった。

そしてその人影に向かって赤い外套を身に纏った長身の男が、殺気を撒き散らしながら呐喊していく。

（あれは……アーチャー？ するとあの奥のヤツがキャスターなのか。士郎君は……いた！ アーチャーの後ろだ。ふう、よかった無事か……って、何で退避しないんだよ！ ボーツと突っ立ってないでそこから離れる！ そこが危険地帯だって解ってるのか！？）

士郎君が無事だったのはいいが、その場から即退避しないのは問題だ。

今まさにキャスターとアーチャーの間で戦闘の火蓋が切って落とされようとしている。

なのにずっとそこに突っ立って傍観してるなんて……死にたいのか、士郎君!?

(くそっ、いつそ飛び出すか……いや、ダメだ。今飛び出したらせつかくのアドバンテージを失ってしまうし、アーチャーの戦いに水を差す事になる。そうなたら戦況がどう動くか解らない! もしかしたら士郎君に飛び火するかも……)

どう動くべきか迷っているうちにキャスターの懐に飛び込んだアーチャーが両腕を振り下ろし、キャスターの身体がX字状に切り裂かれてローブが宙に舞い、四散する。

そのアーチャーの手にはいつの間に取り出したのか、白と黒の中華剣が握られていた。

「……………」

アーチャーは今の手応えにどこか納得がいかないといった風に眉間に皺を寄せている。

その時、士郎君の目がそのアーチャーの双剣に釘づけになっているのが見えた。

いや、だから剣に見惚れてないで逃げろってば士郎君！

確かにあれが名剣なのは解るけど。

第一まだアイツは……。

「……威勢のいい言葉を吐いた結果がこれ？ 期待外れもいい所よ」

「……チッ」

「……えっ!?!」

頭上から落ちてくる声に二人が空を見上げる。

俺も二人に倣って視線を上へと向ける。

そこには、

「まったく、これなら試す価値もなかったわね。もういいわ、消えなさい……目障りよ」

たった今切り裂かれた筈の魔術師の英霊が、蝙蝠の羽のようにマントを広げて空中に浮かんでいた。

……やっぱりやられてなかったか、キャスター。

そしてキャスターは銀に輝く巨大な杖を地面へと向け、何事かを一言呟く。

「『
』」

(……なんだ？ 聞き取れなかったぞ？ 『高速詠唱』の類か？)

首を捻った次の瞬間、キャスターの周りに数えるのもバカらしいほどの大量の魔力弾が形成されていた。

ゲッ、あれは……マズイ！

(くそっ、来い！ 『オール・イン・ワン 全てに通ずる物』！)

慌ててバットを顕現させ、腰だめに構える。

臨戦態勢に移行した事で『気配遮断』が解けるかもしれないが、そんなものはこの際無視だ。

あんな凶悪な代物を出されたんじゃ、四の五の言ってる暇はない！

「私を“魔女”と謗った罪、その命で贖いなさい。それじゃ、さようなら」

鞘からバットを抜き放ったと同時にキャスターがそう呟くと、一瞬後に頭上から凶弾が豪雨のように降り注いできた。

「おい小僧、いつまでそこに突っ立っている！？ さっさと退避しろこの間抜けめ！」

「……ハッ。わ、解ってるよそのくらい。俺だつてまだ死にたくはないんだ！ 俺の事はいいから自分の事に専念しろよ！」

「貴様はバカか！？ るくに自分の身も守れないヒヨッコが何を血迷った事を言っている！？ ええい話にならん！ とにかくこつちに来い！ クソツ、魔女め。相当町から魔力を吸い上げて溜め込んだな。全てAランクの魔力弾とは、オーバークイルもいい所だろうが

「！」

「ぐっ！ お、お前何で俺を抱えて走ってるんだよ！？ それじゃ剣一本しか使えないだろ！ ただでさえ防ぐので忙しいのに意味ないだろうが！ 降ろせ！ 苦しいんだよ！」

「チツ！ ここまで愚かだとはな！ つくづく自分に嫌気がさす！ 少し黙っている、このバカが！ 気が散る！」

「バカ！？ またバカって言ったな！ バカって言ったヤツがバカっていうのを知らないのか！？」

「貴様はガキか！？ ええい、せめてどちらかにしろこのたわけが！」

……おいおい、なんというか。

随分と余裕があるな、二人とも。

まさか支離滅裂な言い合いをしつつ、あの魔弾の雨を全力疾走で掻き潜るとは。

案外、二人は意外と大物なのかも……つと！

「てえい！」

即座に“それ”に気付いて足を踏みしめ、腰の捻りと共に両手を一閃する。

キャスターの死角に回り込んだ俺に向かって落ちてきた流れ弾を、コッソリとキャスター目掛けてカキンと弾き返したのだ。

バットで。

(……ふう。まさか『オール・イン・ワン全てに通ずる物』をデフォルト形態で使う事になるとはなあ。出来れば野球道具を戦闘には使いたくなかったんだけど)

野球人としてこれだけは譲れない。

物には正しい使い方というのがある。

野球は、そして野球道具は決して争いの道具ではないのだ。

……今更だけど。

『オール・イン・ワン全てに通ずる物』のデフォルト形態はバットだが、それが戦闘に全く使えないかといえはそうではない。

見た目はアレだが、これも立派な宝具だ。

その特性は、『弾き返す事』。

つまり自分に向かって飛んできた投擲物や射撃物、さっきのような魔力弾ならどんな物であろうと問答無用で打ち返す事が可能なのだ。勿論、どこでもいいがキツチリとバットに当てないとダメだし、例えば爆弾を打ち返したとしてもミートした瞬間に爆発すればそれはもう投擲物ではなく爆風だから、これでは防げない。

使う機会がかなり限られてくる宝具なのだ。

オマケに野球用具だし、かなり手にシックリくるバットだったから余計に戦闘では扱いづらかった。

ただイキナリの事だったし、他にこの状況で使えそうな宝具を思いつかなかったからこれを使用するしかなかったのだ。

(……ゴメン)

心の中で謝りつつ、迫り来る魔弾を次々とキャスターの死角目掛けて打ち返していく。

これで多少の援護にはなるだろう。

両打ちでよかったよ、右とか左だけだと対処が難しかったからな。

この轟音で弾き返す音も掻き消されるし、常に植え込みから植え込みへと隠れて動き回ってるから、例えば気配が漏れていても位置の特定は難しい筈。

『気配遮断』が解けていても、『不可視化』はそのままだしな。

もっとも射線を読まれば話は別だけど、相手がキャスターならそのリスクは低い。

「……妙ね、何故私の撃った弾が跳ね返って来るのかしら？ アーチャーが何かしているとでもいうの？」

轟音轟く中、上空からキャスターの困惑気味の声が聞こえてくる。

打ち返した魔弾はキャスターの魔力障壁によって掻き消されているが、それでも頭の上の八エみたいに集中を掻き乱されるようで苛立ちを隠し切れていない。

どうやらキャスターには俺の存在はまだ気付かれないようだ。

……ただ、アーチャーにはバレているかもしれないな。

さっきからこっちに向かって訝しげな視線を向けて来てるし。

「小賢しいわね……いいわ、それなら」

と、そんな事をポツリと呟いたと同時に、にわかにキャスターの雰囲気が変わった。

そしてアーチャーに向かっておもむくに指を向け、何事かを呟く。

「！　　くっ！」

キャスターの変化を察知したのか、アーチャーは突然走るのを止めたかと思うと抱えていた土郎君を御堂の方目掛けて思い切り蹴り飛ばした。

「ぐは……っ！」

吹っ飛ばされた土郎君は地面に叩きつけられ、勢い余ってそのまま派手に転がって行き、そしてようやく止まった。

「ぐ……くそつ。おい、いきなり何するんだよアー……チャー……？」

よろよろと起き上がり、文句を言おうとした土郎君がアーチャーに視線を向けた所で固まる。

視線の先のアーチャーは、まるで無機質な彫像のように微動だにせ

ず、その場に立ち尽くしていた。

その上、アーチャーの周りが奇妙に歪み、何かが凝固しているように見える。

これは……。

「ふふ、これならどうしようもないでしょう？ 腐っても『三騎士』
とはいえ、周囲の空間ごと固定されてしまえば、ねえ？」

上空から、キャスターの勝ち誇ったような声が降ってくる。

どうやらさつきボソツと呟いたのは、魔術行使のための呪文だった
ようだ。

嘘だろ、こんな事まで出来るのか！？

(くそっ……あれ？ アーチャーの手に……剣がない？)

思わず焦るが、キャスターの魔術に晒されて固められてしまったアーチャーをよく見てみると、さつきまで握っていた剣が手から消えていた事に気付いた。

士郎君と一緒に投げ捨てたのかな？ ……いや、そんな事しても意味ないしな。

俺ならどうせ投げ捨てる位なら、いつその事投げつける……あ！

「
」

「あら、何かしら？」

と、その時固められたアーチャーが何事かを呟いた。

多少ながら対魔力があるため、完全固定とまではいつてないようだ。

聞き取れなかったキャスターが愉快気に問い返すが、

「
たわけ！ 躲せと言ったのだ、キャスター！！」

ガシャン、とガラスが砕けるような音と共に魔術師の束縛を振り切った、アーチャーの咆哮が響き渡った。

「な、何を……きゃあ！」

アーチャーの雄叫びにキャスターは面食らったが次の瞬間、彼女の背後から唸りを上げて飛来して来た“何か”が魔術師の英霊のマントの両翼を切り裂いた。

目を凝らしてよく見てみると、それはアーチャーが握っていた白と黒の陰陽剣だった。

やっぱり、あの一瞬の間に二刀を投擲してたのか……。

「くっ……」

アーチャーにしてやられた事に唇を噛みしめながら、落下していくキャスターは何とか体勢を立て直そうとする。

しかしアーチャーは既に次の動作に、そしてチェックメイトに入っていた。

「I am the bone of my sword 我が骨
子は、捻れ狂う」

そんな言葉と共に地面に片膝をついたアーチャーの手には、いつの間に取り出したのか弓矢が構えられていた。

しかし問題は、その弓に番えられている矢。

（あれは……バースーカーの時の？）

その矢は螺旋状に捻れたひどく歪な『剣』。

あの夜、バーサーカーを射殺さんとしたこれ以上ない位凶悪な代物だった。

「
『カラド・ホルグ 偽・螺旋剣』
」

そして死の刃が、落下中のキャスター目掛けて放たれた。

「あ……あああああ———！」

大気を捻じ切り、紫電を放ちながら直進する矢にキャスターは断末魔の悲鳴を上げる。

しかし……。

(…………え！？ 逸れてる！？)

螺旋状の剣の穂先は、どういう訳かキャスターからほんのわずか横に逸れていた。

結果、矢はキャスターの脇を掠めるに留まり、キャスターは直撃を免れたが代わりに剣から発生した、渦を巻く凄まじい衝撃波に身を晒す事となった。

キャスターは全身をズタズタに切り裂かれ、雷に焼かれながら檻褸ほろ屑同然の体で地面へと落下する。

矢は尚も上昇を続け、飛行機雲のような煙をたなびかせながら空へと吸い込まれていった。

（な、何て威力だ……直撃してたら間違いなく身体を擦じ切られていたぞ、キャスター。もし『空間転移』してたとしてもその空間ごと。あれはバーサーカーでも死ぬぞ、絶対……でも何で直撃させなかつたんだ？）

その威力の凄まじさに背中に冷たいモノが流れるのを感じながら、一方でそんな疑念が頭を掠めた。

今のを直撃させてたら、間違いなくキャスターを殺せた筈。

でもアイツはそうしなかった。

仮にも弓の英霊だ、仕損じたというような事はまず有り得ない。

つまり、アイツはわざと外したのだ。

一体なんで……？

「ぐふ……っ。く、な、何故……外したのか、しら？ 仮にも『^{アー}弓兵』で、しょう？ ミス、という、事はな……い筈、よ」

打ち捨てられたゴミくずのように蹲っていたキャスターが、息も絶え絶えにヨロヨロと起き上がりながらアーチャーに尋ねる。

……よく生きてたな、あの衝撃波の中で。

きつとあのロープの下では、町から溜め込んだ魔力で無理矢理身体を構築し直しているんだろう。

あの高威力の魔弾の嵐が出来るのなら、それ位の事は訳はない筈だ。

うーん……こうして考えてみると、キャスターって意外と何でも出来るんだな。

どこが『最弱』のサーヴァントだよ。

「ふう……何かと思えばそんな事か。最初に「一撃だけ」と言っただろう？ 初めに斬りかかった時点で既に一撃だ。後のは単なる才マケだな。それとも何か？ 当てて欲しかったとでも？」

心底「呆れた」とでも言いたげな表情で腕組みし、溜息交じりにアーチャーはそう答えた。

……って、ええええええええ！？ それで！？

「ほ、本気で言っているのかしら?」

その思いもよらない返答にキャスターは啞然とした表情を晒している。

多分俺も、それから士郎君も同じような顔をしてるんだろうな。

「自分の言葉には責任を持たねばなるまい? それとキャスター、キミはいささか口が軽すぎだ。勝利を前に気分が高揚するのも解るが、「獲物を前に舌舐めずりは三流のする事だ!」と、どこぞの軍曹殿が言っていたぞ?」

記憶が遠いがな、と皮肉気に口の端を吊り上げながら飄々と嘯うそくア
ーチャー。

気負いの全くなさそうな所を見ると、どうやら本気で言っているようだ。

「……フ、フフ……成る程ね。さっきの矢といい、どうやら口だけではなかったようね。前言を撤回するわ」

再生が終わったのか、お腹の辺りを押さえて前屈みになっていたキャスターの背筋がスツと伸び、次いで微かな含み笑いを漏らした。

声にも張りが戻っている。

「ふむ、それはありがたいな……と、そうそう。いい加減出てきたらどうかね？ 隠れたままでは流石に失礼だろう？」

と、その時唐突にアーチャーがそんな言葉と共に、俺が隠れている植え込みの方へと視線を向けてきた。

……やっぱり気付かれていたか。

キャスターの魔弾の一斉掃射が途切れた後に『気配遮断』をし直したけど、念のためにあえてそこから不用意に動かなかつた事が裏目に出たな。

でもまあ、今のところキャスターにもアーチャーにも敵意はないようだし、俺が出ていった所で戦闘は起きないだろう。

これ以上の戦闘行為はどっちも消耗していて無理だろうし、今回は双方の『痛み分け』みたいなものだ。

家にいた土郎君にキャスターが干渉出来た事から俺の存在がバレている公算も高いし、不用意な言動をしなければ問題ない、か。

不安が全くない訳じゃないけど。

「……『^{ブラック}黒の英雄』、解除」

小声で呟いて宝具を解除する。

戦闘能力的には不安が残るが、わざわざ宝具をジックリ見せてやる必要はない。

そして自分がいつものユニフォーム姿にバットを背中に背負った状態なのを確認すると植え込みから出て、キャスターとアーチャーの方へ向かって歩き出した。

さて、鬼が出るか蛇が出るか。

side キャスター

「……一応聞くけど、なんで解った？」

「キャスターの魔弾が何故か下から上に向かって行くのがチラツと見えてな、何かあるなと思ったら射線の丁度真下に知った気配を微かに感じたのだよ。私が固められたすぐ後に気配が消えたが、意外に用心深い貴様の事だ。おそらくそこからあえて動いてはいないだろうと踏んでカマを掛けてみたところ見事に当たった、という訳だ。大方小僧を奪還しに来たのだろうか？ この通り、小僧は無事だ」

「見事に引っ掛けられた、って事か……ハア、まあいいや。やあ、

士郎君。迎えに来たよ」

「小波！」

壁際にある植え込みから一人の少年が現れ、こちらへ向かって歩いてくる。

アーチャーの横に立っていたボウヤが声を上げた。

しかし……相変わらず妙な格好をしてるわね、分かっただけ。

「ふう……まさかアーチャーに引き続いてこのボウヤのサーヴァントまで侵入させてしまうとはね。門番失格よ、あの駄犬」

アーチャー以外にも侵入者がいた事には今更驚かない。

私の魔弾がこちらに向かってきた時からうすうすは感じていたし、それがあれならむしろ有り得た可能性だ。

あの夜、セイバーに引き続いて召喚された八人目の、本来有り得ざるイレギュラーサーヴァント。

クラス名『カオス』、真名を『一ノ瀬小波』。

魔術師の英霊たる私の想像を超えた、あらゆる意味で『規格外』の存在。

まったく……厄介なモノが現れてくれたものね。

そして 興味深くもある。

「？ いや、そんな事はないんじゃないか？ セイバーがここに来てないって事は、まだセイバーと戦ってるって事だ。少なくとも腕は確かだぞ、仮にも『佐々木小次郎』なんだし」

「え、セイバーも来てるのか！？ それに佐々木小次郎だって!？」

「ああ、自分からそう名乗ってた。なんか色々と事情が複雑、みたいな事も言ってたな、笑顔で」

「……まったく、この戦争は非常識が常識として通っているのか？ 自分から真名を明かすなど、バカとしか言えん」

（ あの腐れ侍！ ）

口の軽い門番を心の奥で呪いながら現状を分析する。

今現在、この柳洞寺にいる敵サーヴァントは目の前のアーチャー、カオス、そして門の外のセイバー。

実に三体ものサーヴァントが侵入してきている。

……もう少しこの防衛には力を入れるべきかしらね。

天然の城壁である御山の結界を過信しすぎていた。

この分だと、他のサーヴァント達も入り込んでいるかもしれない。

ここはやはり、使える手駒を出来るだけ引き入れておくべきね。

出来ればセイバーがよかったのだけど、この状況では高望みもいいところ、か。

幸い、ここにいる一人は意外と使える事が解ったし、あのイレギュラーサーヴァントは……“後学のために”ね。

ボウヤはまあ……どうでもいいわね。

「さて、役者が揃った所で提案があるのだけど」

話を切り出すと三人の視線が一斉にこちらに向けられる。

それぞれ視線の質は違うが、明らかに警戒の色を示している。

「ふむ、察しはつくが一応聞いておこうか。何かね？」

「私と組む気はないかしら？ 私と組めばこの戦争でかなり優位に立つ事が出来るわ。悪い話じゃない筈よ」

「「「……………」」」

私の提案に、それぞれが無言で以て答える。

アーチャーは腕を組んだまま瞑目し、ボウヤは明らかな敵意の籠った目でこちらを睨み据え、カオスは「何言ってるんだコイツ？」とでも言いたげな視線をぶつけてきた。

「考えてもごらんなさい。この戦争で一番厄介なのはバーサーカー。アレを相手取ろうとすればサーヴァントが一体ずつ挑んでも何ら勝ち目はないわ。そちらもそう考えて同盟を組んだようだけど、正直言ってボウヤみたいな三流魔術師じゃ、ねえ。二人にとってあまりにもマイナスの存在よ？ でも私には町から吸い上げた有り余る程の魔力がある。それを使えばアナタ達に色々と力を与えてあげられるわ」

「ふざけるな！ 大体、そんな事をしている時点で誰が手なんて組むと思う！？ 勝つために何の関係もない人達を犠牲にするなんてそんな事絶対許すものか！」

「ボウヤには聞いてないの。聞いてるのはその二人。ねえ、どうかしら？」

激昂するボウヤを無視してアーチャーとカオスに視線を向ける。

アーチャーは相変わらず腕組みしたまま目を閉じ、カオスは溜息を吐きつつどこか呆れたような表情で後頭部を掻きむしっている。

……そうね、もう一つチップを上積みしてみましようか。

「何なら聖杯を譲ってあげたっていいのよ。アナタ達も聖杯を求めたからこの戦争に呼ばれた筈だし、この戦争の裏に隠された真実はおおよそ把握出来ているしね。聖杯へグツと近づけるわよ？」

「隠された真実……だって？ それに聖杯を譲る？ お前だって聖杯に掛ける願いがあるからこの戦争に参加してるんじゃないのか？ それなのに聖杯を譲るなんて……何を考えてるんだ？」

「ボウヤには聞いていないと言ったでしょう？ 聞き分けのない子ね。……まあいいわ。仮にも私は魔術師キャスターよ、今代の魔術師が作り上げたこの戦争のカラクリを知る事くらい何でもないわ。それに私の願いは、もう既に叶っているようなものなの。だから聖杯なんてどうでもいいわ」

そう、何よりも大切な“あの人”と出会う事が出来た。

それだけでいい。

それだけで、私の願いは叶えられたようなもの。

後はこの“仕組まれた茶番劇”の勝者として聖杯を手に入れ、幕を下ろせばいい。

でもその時こそが “ユメノオワリ”、か。

……ままならないモノね。

「……一つだけ」

「あら？ 何かしら？」

と、頭を掻きむしっていたカオスが突如ピタリとそれを止め、口を開いた。

帽子の下から覗く、こちらに向けられる目には敵意はなく、どこかしら何かを探るような光を宿している。

……へえ、見た目とは裏腹になかなかどうして、こんな目も出来るのね。

「一つだけ、聞きたい事がある。この聖杯戦争、いつから狂い始めたんだ？」

ヒクリ、と眦まなじりが一瞬跳ねたのが解った。

……まさか。

「……なぜそんな事を聞くのかしら？」

「ここに来るまでにずっと考えていたんだ。この聖杯戦争は前回の聖杯戦争から10年後に開かれた。でも前回までの聖杯戦争、第一次から第四次までは60年周期で開催されていた。この大幅なズレが一体何を意味するのかを。ここで重要なのは、前回の第四次聖杯戦争で顕れた聖杯が最後まで勝ち残った参加者の手によって破壊された、という事。多分、願いを叶える直前に破壊されたから結果的に開催期間が縮まったんだろうけど、だとしてもまだ疑問が残る」

「え……小波、お前、何でそんな事知って……」

「……明け方にアナタの部屋に出入りしていた金髪の女から、かしら？」

「見てたのか？ 趣味が悪いぞ」

「町中に放ってる使い魔でね。監視のためにアナタ達の所にも複数付けてあったわ。もっとも、そのアーチャーに殆ど潰されたのだ

けど」

一瞬、アーチャーが目を開き剣呑な眼でカオスを睨みつけたが、すぐに視線を戻して再び目を閉じた。

何か因縁でもあるのかしら？ その金髪の女に。

それにしても……成る程、この聖杯戦争の大筋は掴んでいる、という訳ね。

何者かしらね、あの女。

「ま、それはさておいて話を戻すけど。そもそも聖杯戦争に参加する人間は、基本的にマスター・サーヴァントを問わず聖杯が欲しいって思ってる。聖杯に叶えたい願い事がある筈だからな。じゃあ何で前回の聖杯戦争で顕れた聖杯は破壊されたんだ？ 破壊したヤツ……多分マスターが自分のサーヴァントにやらせたんだろうけど、ソイツが何を考えてそうしたのか俺には解らない。でも理由は幾つかは予想出来る。急に心変わりして聖杯がいらなくなっただか、他のマスターに横取りされそうになったから「それならいっそ壊してやる！」と思っただか……あるいは、最初から壊すつもりだったか」

「最初から壊すつもりだった？」

「考えてみるとそれが一番しっくりくるんだよ、士郎君。急に「聖杯なんていりません」なんて普通思う訳がないし、横取りされそう

になつたんなら壊そうとするより前にまず自分が願いを先に叶えようと動く筈。だったら聖杯に願いを叶えて貰う事が目的だったんじゃないくて、願いを叶える聖杯を破壊する事そのものが目的だったと考えれば説明が付く」

「どうして壊そうなんて……？」

「さあね、そこまでは解らない。でも参加者が聖杯を破壊しようなんて考えてる時点で、この戦争はどこかしら破綻してるんだよ。その原因が聖杯にある……と俺は考えたんだけど、その辺どうなんだキヤスター？」

……驚いたわね、まさかここまで考えが回るなんて。

ふふ、いいでしょう。

その意外に切れる頭に敬意を表して、少しだけ答えを上げましょうか。

「その通りよ。この聖杯戦争はずっと前から破綻している。そして破綻した結果、あのセイバーのような真つ当な英霊だけでなく、私やアサシンのような歪な英霊まで呼び出す事となった」

「歪な英霊？ ……そうか！ お前は『反英雄』なのか！ リンが言ってた！ ……そしてアサシンは存在しない『架空の英雄』……確か

にイカレてるな。正常な聖杯ならそんなモノをわざわざ呼び出す筈もないし」

「そう。そしてこの狂いが生じ始めたのは第三回から……言えるのはここまでね」

「原因は聖杯なのか？」という疑問には答えない。

それはこの狂った戦争の根幹に関わるものだから。

それをここで教えたのでは面白くない。

それに、彼がこちらに協力するにしろしないにしろ、一体どこまでこの茶番劇の深淵に迫れるのか、見てみたくもある。

勿論、この上ない“神秘”の塊である『彼』の存在そのものに対しても。

ステータスすら欠片も見通せず、私だからこそ悟り得る、あらゆる「モノ」が『圧縮構成』されたような隔絶した存在感を纏うモノ。

（まったく、興味は尽きないわね
（^{ウシター}止力）
ねえ、『世界』からの抑^カ

side 小波

「それで、ボウヤはともかく二人の返答をそろそろ聞かせて欲しいのだけど？」

「……………あ」

思考に耽っていた所をキャスターの声に引き戻された。

そういえば勧誘を受けてたんだった。

(うーん……………)

キャスターと組む……………か。

はっきり言って、有り得ない。

物凄く嫌な予感がするから、というのもあるがまず士郎君が100%首を縦に振らないし、セイバーも多分そうだ。

それに、何というか……………キャスターはこれ以上なくよく知っている、ある意味『最凶』の女性に雰囲気……………というか、気配が物凄く似てるのだ。

不用意に関わると男をダメにする類の。

間違ってもお近づきになりたくはない。

情報提供は感謝するけど、あれは睨み合いの末の舌戦の結果拾ったような物だし。

そもそもキャスターからすれば、あの程度の情報提供したところで別段自分に不利益になるような事は何一つないのだ。

それに肝心の部分に関しては口を閉ざしている。

こつちの持っている情報はリンが集めて来てくれた、彼女の専門から外れてはいるが深く、ごく客観的な視点から集められた物。

対してキャスターの持っているだろう情報は、魔術師の英霊たる自身から見た高度な魔術師的見地から得られた物だろう。

どちらがより正確か、という点では比べがたいが、どちらがより真実に近いか、という点で見ればそれはやはり後者だ。

キャスターの持つてる情報は魅力的だが、組めない以上は別アプローチからコツコツ探っていくしかない。

セイバーもリン（アクマの方の）も言っていたけど、偶然で呼び出される英霊はいない。

呼ばれたからには何かしらの理由と意味があるのだ。

『世界』から、このイカれた聖杯戦争に呼ばれ、送り出された意味。予想は付くが……キツイぞ、これは。

明らかにいち野球少年に頼むには荷が勝ち過ぎている事だし……まあ、だからこそその『俺』という存在と、力なんだけどな。

「遠慮しとく。士郎君が反対してるし、聖杯も別に欲しいとは思ってない。それに俺もそっちがやってきた事にはちよつとムカツときてるし、何より『毒婦』と組むのは勘弁してほしいんだ」

「……毒婦、とは随分な言い草ね」

「それ程間違ってはいまい？ 男に何の恨みがあるのかは知らんが、町中から魔力を集めていた時、事のついでにドクニンジンで男を不能にしていただろ？ 数日前に凜と見回りに出た際に現場に居合わせたのでな、証拠はあがっているぞ」

「う……不能か。男にはキツイな、それって」

俺の返答にキャスターはフードの下で盛大に顔を顰め、アーチャーは片目を開いて口の端を吊り上げながら、衝撃の新事実と共に皮肉を飛ばした。

そして士郎君は顔を若干青褪めさせ、一歩下がってキャスターから

距離をとる。

砕け気味に腰が引けているのは男として仕方がないと思う。

「ま、まあ、断られるだろうと予想してはいたけれど、流石にその理由までは予想出来なかったわ。女に何か嫌な思い出でもあるのかしらっ。」

何故か頬をヒクつかせながら話すキャスター。

……イヤな思い出、ね。

「いや……その、ある意味人生をダメにされてしまったというか、もれなく芋づる式に不幸にされた方々がいらっしやっただとか…」

…」

自分で言っていて物凄くゲンナリする。

本当、正体を知った時は驚いたが、“あの人”もあの一族の奥さんじゃなければさぞや幸せな警察官人生を送れた筈だろうに、刑事としてかなり優秀だった人だから。

“あの人”も多分、あの一族の奥さんを貰わなければ、ストレス発散のためにあんな恥ずかしい偽名を使って竹刀一本で殴り込み道場破りなんてせずに済んだかもしれない。

かくいう俺が一度死んだのだから、元はといえばあの「ふふーん」が遠因だ。

あの一族ほど、男の人生をダメにする“女怪”を輩出した家はないだろう。

まあ、毒婦・女怪といえど他に該当者が“あと数人”ほど記憶にあるけどどれも悲惨だった。

……どこで間違っちゃったんだろう。

「……苦勞してたんだな」

「放つといってくれ……」

労わりのこもった土郎君の言葉がやけに身に染みた。

「それで、アナタはどうなの？　アーチャー？」

切り替えたらしいキャスターは俺から視線を外すと、今度はアーチャーに視線を向けた。

「……………」

あれ？

「おい、アーチャー……………」

アーチャーを注視していた土郎君が戸惑いを見せる。

アーチャーはキャスターの誘いを否定も肯定もせず、ただ腕を組みジツと瞑目したまま微動だにしない。

僅かに吹き抜ける風がアーチャーの紅い外套をゆらめかせるだけだ。

コイツ、まさか……………。

「……………ふう、せっかくだが、断らせてもらう。メリットはともかく、組む理由がない。先程キミはバーサーカーを引き合いに出していたが、この小僧との同盟は確かに不服だ。とはいえ、その意義を早々と無意味には出来まい？ 何より、キミと私のマスターとはとてもウマが合うとは思えんのでな」

と、唐突に息を吐きながら何だかすごくやる気なさげに組んでいた腕をほどいて姿勢を崩し、NOと返答した。

俺の傍らで士郎君が安堵の吐息を漏らしている。

「あら、だったらマスターとの契約を断ち切ってあげましょうか？」

「ふむ？ ……いや、結構。例えキミにそれが可能だったとしても、私も三騎士の一だ。そうそう主を裏切れんよ」

「そう……なら交渉は不成立、という事ね」

「そうだな。で、だ……物は相談なのだが、ここは分けという事で互いにこのまま退く、というのはどうだろうか？」

「お、おいアーチャー！？ それ、本気で言ってるのか！？」

アーチャーの提案に士郎君は目を剥いた。

いや、キャスターを放置出来ないのは解るけど……。

「いいのかしら？ ここで私を倒さなくても。そのボウヤは不満のようだけど」

「小僧の意思など却下だ。私も先程の戦闘で魔力をゴツソリ持って

行かれた。敵地でこれ以上の戦闘行動は自殺行為だ。しかし、今ならば当初の目的通り小僧を確保して撤退が可能だ、と私は判断しているのだが。そうだろうキヤスターよ？」

「そうね……こちらも少なからず消耗してるし、まだ完全にダメージが抜けきってないから極力戦闘は避けたい。アナタの判断は正しいわ。まあ一応収穫もあった事だし、今回だけは見逃しましょう」

キヤスターはクスリと笑うとロープの裾を翻し、こちらに背を向けてスタスタと御堂の方へ歩いてゆく。

背後から不意打ちされる事をまったく考慮していない、完全な無警戒だ。

こちらの言葉を信用している……いや、違うな。

疑う余地がないのか。

こちらがなまじ計算高いだけに、下手を打つマネはしないとキッチリ理解している。

「待て、キヤスター！」

「ッ、ダメだ士郎君！」

いきり立ってキャスターの方へ向かおうとした土郎君の肩を掴んで引きとめる。

気持ちは解るけど、ここで逸ってはダメだ。

ハッキリ言っつて脱出のチャンスは今この時をおいて他にない。

キャスターは狡猾だ。

個々の戦況ではなく、聖杯戦争という大局の状況をコントロールして最終的に勝ちを拾いにいく、正に『策謀の魔術師』。

だからこそ、無駄な事は極力しない主義だともいえる。

キャスターが「見逃す」と言った以上、含む物はあれど嘘ではない筈だ。

それにキャスターにダメージを与えたとはいえここはまだ敵地、アドバンテージははまだ向こうにある。

加えて俺はともかく、アーチャーが疲弊しているのも疑いのような事実。

ここを逃せば、間違いなく俺達はお終いだ。

「バカが。生き残れる好機を自らドロに捨てる気か？」

「ぐっ……！」

アーチャーが皮肉を飛ばしつつも士郎君の進路に腕を翳して行く手を塞ぐ。

アーチャーは流石に解ってるか。

今のこの状況がまさに薄氷を踏んでいるような物だという事に。

「そうそう、私が「見逃す」と言ったのはこの御山を降りる瞬間まで。それまでにこちらに不利になるような真似をすればどうなるかは……解るわね。まあ、役立たずの門番にお灸を据えるくらいは構わないけど。余計な事をしなければこちらからは一切何もしないと約束するわ。それじゃあ、さようなら。またいつか、どこかでね」

足を進めながらキャスターが忠告を送ってくる。

そしてある程度互いの距離が離れたところでキャスターの足が止まり、次いでサツとロープを身体に巻きつけるように纏ったかと思うと、次の瞬間には影も形もなくその場から消え失せていた。

「……………行っただか」

ホツと息を一つ吐く。

これで第一目標は達成出来た。

あとはここから撤退するだけなんだが、さてセイバーと小次郎をどうしたのか……。

「……、くそ」

ふと士郎君の方に目を移すと、彼は心底悔しそうにギリギリと歯を砕けんばかりに食い縛りながら、キャスターが消え去った空間をジツと睨みつけていた。

「……士郎君。気持ちは解るけど、今しなきゃいけない事は一刻も早くここから撤退する事だ。だから……」

「……解ってる。けど、やっぱり俺は……また、何も出来なかった。……くそっ！」

激情を含んだ声が境内に響き渡る。

みすみすキャスターに捕らえられてしまった事、キャスターの非道を解っていて尚止められなかった事、ただ逃げる事しか出来なかった事、そしてサーヴァントにまったく相手にされていなかった事。

それは偏に、自分に力がなかったから。

多分、士郎君はそう思っているんだろう。

士郎君も、自分とサーヴァントがどれだけかけ離れた存在なのかはとうに解ってる筈だ。

それでも尚、自分にも何かが出来ると足掻いている。

成る程、『正義の味方』か……まさにその通りの行動原理だな。

かなり危なっかしいけど。

「チツ、僅かながらも期待を持たせておいてこれが。所詮、『衛宮士郎』は『衛宮士郎』だったという事か」

とその時、すぐ隣からそんな小さな声が聞こえて来、次いでほんの僅かな、しかし確かな“殺気”がにじみ出てきたのを感じた。

これは アーチャー！

「士郎君ッ！！」

咄嗟に前方に手を伸ばす。

直後、何かに突き当たるような感触と共に、

柳洞寺の境内に、
紅い鮮血が舞った。

第二十一夜 「侍と魔女と野球少年」 (後書き)

筋力・技術・素早さが上がった!!

『連打』が身に付いた!!

ステータスが更新されました。

感想待ってます。

第二十二夜 「二局攻防と野球少年」 (前書き)

また文章が長く……。

少しは表現力が進歩していると思いたい。

第二十二夜 「二局攻防と野球少年」

side 小波

「ぐっ……痛っ！」

灼熱の痛みが全身を駆け巡る。

突き出した左腕を何かで切り裂かれた。

だが幸いそこまで深くはない。

バツと虚空に血飛沫が舞い、左手の先にいた士郎君の上着を紅く染め上げる。

士郎君は自分の身体に降りかかる生温かい液体を目にすると、ギョツと眼を見開いて弾かれたように飛び起きた。

「小波！ ……くっ、アーチャー！ どういうつもりだ!？」

「……………」

士郎君の視線の先にいたアーチャーの手には、キャスターとの戦い

の際に見たあの陰陽剣が握られていた。

士郎君の声にアーチャーは何も答えず、無言のまま手にした二刀の中華剣を振りかぶり、再び士郎君目掛けて振り下ろす。

くそっ……そうはさせるかっ！

「ロード、『ヴェンデッタ』、『自在剣』！」

無事な右手で肩からバットを引き抜き、即座に二振りの短剣に変化させる。

変化させた武器の一つは『ヴェンデッタ』。

復讐の鬼と化した人間が用いていた凶器の刃を打ち直し、呪印を刻んだ紅い短剣。

もう一方は『自在剣』。

意思の力で自在に操る事の出来るナイフ。

それをそれぞれ右手と左手、両方に握り込んでアーチャーの剣を防ぐ。

そしてそのままアーチャーと士郎君の間に身体を無理矢理ねじ込み、鏢迫り合いへと突入。

ギリギリと剣同士が擦れ合う音が響き渡り、時折火花が飛び散る。

くっ……左腕に上手く力が入らない、か！

「アーチャー、どういつつもりだ！ どうして士郎君を殺そうとする！？」

「……その小僧に失望した。それだけだ。衛宮士郎はこちらの利益にはならないと、先程の言葉で理解した」

「さっきの言葉……！？ あれで何が解ったっていうんだよ！？」

するとアーチャーは終始無表情だった顔を僅かに歪め、

「……貴様の存在で、少しは運命が変わったと思ったのだがな。結局は何も変わらないまま、衛宮士郎はいずれ決定的な過ちを犯す。そうなる前に、その芽を刈り取る」

そんな言葉を口にした。

「！？ お前、一体何を言って……」

アーチャーの言葉の意味を図りかねていると、アーチャーはその隙

を突いて俺の腹部目掛け強烈な蹴りを見舞って来た。

「が……っ！」

「うわっ！」

対処が遅れ、俺は背後にいた土郎君諸共一気に数メートルは吹き飛ばされた。

即座に受け身を取って体勢を立て直すか、如何せん喰らった蹴りが強烈過ぎた。

左腕からの出血もあって、意識が少しだけ霞む。

「ぐふ……っ、く……そっ、土郎君！ 絶対に俺の後ろから離れるなよ！」

「あ、ああ！」

起き上がった土郎君を庇いつつ構え直し、今だ殺気を撒き散らしながら二刀を構えるアーチャーを見据える。

どういう訳か、アーチャーは本気で土郎君を殺しに来ている。

殺意の質が尋常じゃなく“黒い”。

何だコイツ……なんでこうまで士郎君に拘る？

思い返せばバーサーカーと戦った時から、アーチャーは士郎君を執拗に狙っていたように感じる。

あの時はただ単にイリヤと士郎君、二人の敵マスターを纏めて抹殺するために攻撃したのだと思っただが、この行きすぎなまでの執着振りを見るとそれにも首を傾げたくなってくる。

コイツのこの執念……まるで最初から、士郎君を殺すためだけに動いているような……？

一体どうして……いや、今考えるべき事はそれじゃない。

だとしたら……。

「士郎君」

「なんだ？ 小波」

アーチャーに聞こえないよう、腕で自然に口元が隠れるようにしながら小声で話しかける。

士郎君もそれに倣って小声で応答する。

勿論視線は合わせない。

そんな事をすれば途端に俺の首と胸は上下に泣き別れた。

「俺が『走れ』と言ったら、山門の外まで一気に走るんだ。セイバ
ーの所まで全速力で」

「……なんで」

「アーチャーの狙いは土郎君だ。それも何故か執着心が尋常じゃな
い。だから土郎君さえ逃げ切れればこっちの勝ちだ。外で小次郎と
戦ってるセイバーと合流して、家まで急いで戻るんだ。リンだった
らアーチャーを抑えられる」

「じゃあ、小波は？」

「ギリギリまでアーチャーを足止めする。その後は……小次郎辺り
にでも放り投げるかな？ 勝負に水を差されて不快に思うかもしれない
けど、意外に奇矯なヤツみたいだし多分何とかしてくれる。キ
ャスターのお墨付きもあるしな」

「……行き当たりばったりだな」

「仕方ないよ、まさかこうなるなんて思いもしなかったんだから。文句ならアーチャーに言ってくれ」

「確かにな……大丈夫なのか？」

「傷の事なら心配ない。出血はともかくそこまでの深手じゃないし、撤退手段も考えてある。それより士郎君、この“勝負”に勝つには、士郎君が何より大事なんだ。自分のやるべき事を、絶対に見誤らないように。それと、念のためにこれを渡しておくよ。ロード、『カネサダ』」

残ったコストを使って背中 of 鞆側から武器を顕し、士郎君がそつとそれを受け取る。

変化させた武器は『カネサダ』。

江戸時代に作られた良質の名刀で、その脇差タイプのヤツだ。

刀の扱いに慣れてない士郎君でも、これならそれほど苦労せずに扱える筈だ。

「自分の役目は解ってる……もうへマはしないさ」

「よし……、！ 来るぞ！ 『走れ』！」

こっちの内緒話が終わったと同時にアーチャーが突っ込んで来た。

掛け声と同時に土郎君が背後の山門へ向かって駆け出し、俺はアーチャーを押さえつけるためにアーチャーへと向かって行く。

しかし、

「……見え見えだ、たわけが！」

アーチャーはこちらにぶつかる直前に、抜く手も見せずにとっていた双剣を投擲した。

陰陽剣は大きく弧を描き俺を追い抜くと、俺の背後にいる土郎君を囲い込むように接近していく。

「土郎君ッ！ キャスターの時みたく剣が二つ、そっちに行ったぞ！ 身を低くして、切り払うんだ！」

「解ってるッ！」

土郎君の声と共に金属同士のぶつかる音が聞こえた。

しかしそれからどうなったのかは解らない。

何故ならそれと同時に、俺とアーチャーは真正面からぶつかり合ったのだから。

背後は振り返れない、振り返れば即座に俺の命は断たれる。

俺がやるべき事は士郎君があれを凌ぎきれる事を信じて、この目の前で火花を散らす二振りの刃を抑えきる事だけだ。

つて、ん？ 二振りの刃……なにいつ！？

「アーチャー、お前その剣は！？ さっき投げた筈じゃ……！！？」

何とアーチャーが握っていたのは、つい今しがた士郎君に向かって投擲したあの双剣と全く同じ代物だった。

どういう事なんだ、これは！？

「手品のタネを明かす奇術師マジシャンがいると思うか？ それに、貴様では私を抑える事は出来ん。私は剣を扱う事に関しては二流だが、それでも貴様より実力は上だ！」

アーチャーがそう言い放ったと同時にこちらにかかる圧力がグンと強くなった。

「ぐ……あつ！ お、重い！」

何とか耐えようと、腰を落して足に踏ん張りを効かせるがそれでも姿勢が保てそうにない。

確かに俺の実力はアーチャーに劣っている。

剣の技量はともかく、純粋な身体能力という点ではアーチャーに軍配が上がるからだ。

かたや英霊、かたや一般人に毛が生えた程度の力しかないサーヴァント。

この差は如何ともしがたい。

加えて左腕を負傷している今の状態は、更にそれを悪化させている。

正直、ジリ貧どころか文字通りの土壇場だ。

このままでは首を両断される未来しか用意されていない。

そう　　このままならば。

「……………貴様、この状況で何故笑っていられる？」

「ハハッ、こ、こついう事さ！　変身、ヒトロ五人の英雄・赤の英雄！」

俺の表情に疑問符を浮かべるアーチャーに対し、俺は互いの顔の間に画用紙を顕すと無理矢理身を乗り出して、それに喰らいつき“噛み破った”。

両手が塞がっていて、掌に顕わしたのでは握り潰せないからだ。

アーチャーが俺の奇妙な行動に眼を見開いている間に、俺の身体が赤いヒーローのパワードスーツに覆われる。

傷は塞がっていないけど、処置なしでもしばらくは大丈夫な筈。

さあ、反撃開始だ！

「うおおおおおっ!!」

「ぐ……っ!? バカな、押し返される、だと!?!」

再び下半身に力を込めて踏み込み、今度はアーチャーを逆に押し返す。

アーチャーは突然の俺のパワーアップに面食らい、対応が遅れた。

圧力に姿勢が崩れ、かろうじて膝立ちの態勢を保ちながら俺の両剣を全力で以て何とか抑えつけている。

「それが……貴様の宝具か！ あの小僧が土蔵で漏らしたヒーローの話が貴様の『原典』だったとはな！」

「……正確にはちょっと違うんだけどな。俺はアイツらの力を一時的に借りてるだけだ。『原典』というのも間違っではないけど、かといって正確でもない。俺の『原点』は　　だからな」

「……？」

小声だったため、聞き取れなかったのかアーチャーは僅かに眉根を寄せる。

聞こえなかったならそれでもいい。

わざわざ説明してやる義理もないし、状況が状況だ。

「とにかく、士郎君を殺させはしない。まだやると言うんなら、リオンには悪いけど腕の一本くらいは覚悟して貰うぞ！」

「ふん、図に乗るな。それに、既に賽は投げられた。最早変更など効かん」

「そつかよ……ならっ！」

更にアーチャーに深く踏み込み、倒れる寸前の状態まで持っていくとそのまま腰を落とし、左足を軸に蹴りを叩き込む。

さっきのお返しだ！

「うぐ……っ!?!」

体勢上、防御が不可能だったアーチャーは為す術なく吹き飛ばされ、彼我の距離が離れる。

ここで気を付けなければならぬ事は、アーチャーに対しては絶対に間合いを取ってはいけない、という事だ。

アーチャーのクラスで召喚された者は、基本的に遠距離攻撃を得意としている。

そしてそれはこのアーチャーも例外ではない。

バーサーカー・キャスターとの戦いを見ればそれは明らかだ。

ならばアーチャーと対峙する場合はどうすればいいか。

簡単だ、接近戦に持ち込めばいい。

クロスレンジでの応酬ならばアーチャーの得意とする弓を封じる事が出来る。

アーチャーもさっき自分で言っていた、「剣を扱う事に関しては一流だ」と。

つまり接近戦でなら、こっちにも勝ちの目が出やすくなるということだ。

現にリン（俺が呼んだ方の）も似たような手法でアーチャーとやり合ったらしいし、これならいける！

「まだまだ行くぞ、アーチャー！」

そして体勢を立て直すアーチャーに対して接近し、更に追撃をかけるようにしたその時、

「うわっ！　なんだこの剣！？　キリがないぞ！」

背後から士郎君の悲鳴に近い、必死な声が聞こえてきた。

「ッ！？　士郎君！？」

思わず足を止め、振り返ってしまった。

士郎君は走っていた足を止め、自分を中心にして襲ってくるアーチャーの双剣を必死に渡した剣で弾き返していた。

しかしその双剣の動きがおかしい。

剣は弾かれても弾かれても、再び士郎君目掛けて飛来して来るのだ。まるで磁石同士が引かれ合うように、剣と剣を結ぶラインの中心にいる士郎君にしつこく喰らいついてきている。

……もしかしてあの剣、互いに引き合う性質があるのか!?

「……余所見をしていていいのか?」

「えっ!?!」

と、唐突に後ろから声がして咄嗟に振り返る。

次の瞬間、光が爆発して視界が白く染まった。

「うあっ!?! ふ、フラッシュ・グレネード閃光弾!?!」

「あの金髪の女も私に対して持ち出してきた、古典的だが効果的だ。どういふ経緯か知らんが貴様の仲間らしいな。見当違いだが、借りを返すぞ」

英霊らしからぬ不意打ちだった。

何とアイツはどこからか取りだした閃光弾でこちらの目を潰しに来たのだ。

各種『五人の英雄』には多少の五感調節機能があるが、こついった物に対しての緊急防御機能は付加されていない。

結果、俺の両目はものの見事に使用不能にされてしまった。

くそっ……まさかまともな英霊が現代兵器を使うなんて！

「しばらく寝ている」

「うわっ!?!」

目を潰されてフラついているところに、勢いを取り戻したアーチャーが横を通り抜けざま拳を鳩尾に叩き込んだ。

多分来るだろうと予測して視界を奪われたと同時に防御体勢を取っていたから、『赤の英雄』の耐久力で何とかダメージは耐えきったが代わりにバランスを崩される。

俺の身体は背中側から地面へ向けて仰向けに倒されてしまった。

「ちっ……小僧め、存外にしぶとい。『干将・莫耶』を相手取って

まだ粘っているとはな」

「……『干将・莫耶』？」

それがあの剣の名前か。

それはともかく、何とかして士郎君を……！

「士郎君！ アーチャーがそっちに行つたぞ！ ダツシュで山門へ急ぐんだ！」

何とか視力が戻つたのですぐさま起き上がりつつ、士郎君へ向かつて叫ぶ。

士郎君は慌てて止めていた足を動かし、今度は『カネサダ』だけではなく左手に掴んでいた鉄拵てつこえの鞘も使って何とか双剣を防ぎながら山門へと一気に加速した。

しかし英霊の速度に比べれば士郎君のダツシュなんてアリの全力疾走みtainなものだ。

みるみる内にアーチャーに距離を詰められていく。

追いつかれるのも時間の問題だ。

だつたら……！

「 行け、『自在剣』！」

左手に持っていた『自在剣』に意識を通してアーチャー目掛け助走をつけて全力で投擲し、それと同時にアーチャーを追うべくスタートを切った。

激烈に傷が疼くが意思の力で抑えつける。

これを見越して『自在剣』を出したのだ。

『自在剣』は元々投げナイフ。

投擲する事自体に問題はないし、利き手じゃない方で投げてもアーチャーに届きさえすればどこに行こうが関係ない。

一番大事な要素はこの剣の『特性』……！

「ぬ……っ！」

『自在剣』にアーチャーは即座に反応し、疾走しながら振り返り剣を一閃して叩き落とす。

それで終わりだと思ったのか、アーチャーは再び前に向き直ったが……甘い！

「もう一度！」

走りながら叩き落とされた『自在剣』に目を向け、念じる。

『自在剣』はカタリ、と一瞬震えるとひとりでに宙に浮き、そして再びアーチャー目掛けて呐喊していった。

「なっ……くっ！ 面倒な物を！」

再度自分に向かって飛来してきたナイフに気付いたアーチャーが慌てて振り返り切り払うが、『自在剣』は何度切り払われようと飢えた狼のようにしつこく喰らいついていく。

士郎君の追跡と『自在剣』への迎撃、そして追いかけてくる俺への警戒。

この三つの対処にアーチャーの余裕は削られ、徐々に疾駆するスピードが落ちてきている。

『自在剣』の特性、それは使用者が念じれば自由自在に操る事が出来るという事。

だから何度叩き落とされても俺が「アーチャーに向かって突撃！」と念じれば、あの通り盲目的なストーカーよろしくアーチャーを追いかけていく、という訳だ。

止めるには剣自体を破壊するか、使用者である俺を妨害ないし抹殺するしかない。

これで何とか足止め出来る！

急げ、士郎君！

「よし！ これなら……！」

あと少しで山門に辿り着ける所まで来た士郎君が更に加速を付ける。

しかし、

「ちっ…… 『ブローケン・ファンタズム壊れた幻想』」

舌打ちと共にアーチャーがそう呟いたのが聞こえたのと同時に、士郎君の周りを飛び回ってた『干将・莫耶』が突然爆発した。

「うわああああっ!?!」

「ああっ、士郎君ッ!?!」

爆風に吹き飛ばされ、士郎君の身体が宙を舞う。

そして勢いそのままに、士郎君の身体が山門の外へと投げ出された。

「っな！？ くそっ、どこまで悪運の強い……！」

剣を爆発させたアーチャーが悔しげに顔を歪めている。

どうやら士郎君を仕留め損ねたみたいだ。

あ、危なかった……。

……外に出た事は出たけど……大丈夫かな？

アーチャーはアーチャーで完全に逆上してるみたいだし。

……よし、ならとりあえず……。

side セイバー

「くっ！」

不覚。

そうとしか言う事が出来ない。

石段の上に横たわった身体を無理矢理持ち上げるが、階段から転げ落ちたおかげで身体中が軋みを上げる。

特に痛みがひどいのは左腕……血がポタポタと流れ落ち、石段に幾つもの赤い斑点が出来る。

アサシンの剣は私の左腕の小手を砕き、肉を裂いた。

あと一瞬遅ければ左腕だけではなく、全身を確実に三枚に下ろされていた。

躲けたのは偏に自分の足場と相手の足場の高低差と自分の持つ『直感』のスキル、そしてほんの些細な幸運が絡み合った結果に他ならない。

「ほう……咄嗟に自ら階下に落ちる事で我が秘剣を躲したか。まさか初見で見切られるとは思わなんだ。くくっ、そうではなくては面白くない」

石段の上からアサシンの心底嬉しそうな声が聞こえてくる。

視線を上げるとアサシンが肩に刀を担いでくつくつと、まるで「楽しくて仕方がない」とでも言わんばかりに笑っているのが見て取れた。

「……『燕返し』、と言いましたか。私見ですが、あれはおそらく
『多重次元屈折現象』キシユア・ゼルレツチを応用した、複数の刃で敵を囲い込み断ち斬
るものでしょう？ これ以上なく凶悪な、魔性の剣技だ。斬撃が同
時に繰り出されるなどかなり面食らいましたが、しかしあれでは片
手落ちです。もう一太刀、逃げ道を防ぐ第三の刃があつてこそあの
剣技は完成する。貴方が段上にいたおかげで踏み込みが足りず、剣
の軌跡が二つしかなかったために何とか避けられた。ほんの僅か、
こちらに幸運があつただけの事です」

アサシンの笑みを無視し、構えを取りながら淡々と事実だけを述べ
る。

あれが繰り出された時は一瞬ヒヤリとさせられた。

凌ぎきつた今でもまだ背中が冷たい。

『多重次元屈折現象』を用いて別次元から剣を呼び寄せ、三つの斬
撃を同時に繰り出す事で『剣の牢獄』を作り上げる。

文字通り、回避不能の必殺剣だ。

足場のおかげで不完全だったためにどうにか命拾いしたが、しかし
よくよく考えてみればおかしな話だ。

『多重次元屈折現象』など第二魔法の領域の代物だ。

魔術師でもないアサシンがそんな大それた奇跡を自在に操れるもの

だろうか？

あの長刀が宝具であり、その恩恵による物だとも考えられるが、一見したところあの刀は名刀ではあるが、宝具と呼べるほどの神秘を帯びている訳ではない事が解る。

つまりあれはアサシンの所有物である“唯の刀”なのだ。

これが意味するものとは一体……？

「そこまで見抜くか。流石は劍の英靈。」セイバー「多重次元屈折現象」が一体何なのかはよく解らぬが、生前、偶に燕を斬ろうと思いつき立ち、刀を振るっていたらいつの間にか出来るようになっていた。燕は思いの外素早くてな、ほぼ同時に三撃、三つの円で囲ってやらねばすぐに逃げられてしまう。他にやる事もなかった。唯そのみを只管追求し、永い時間の果てにそれはいつしか三つの斬撃で敵を仕留める『牢獄』を創り上げるに至った。ただそれだけの事だ」

笑みを更に深め、事もなげに述懐するアサシン。

……成る程、つまりはそういう事ですか。

「『多重次元屈折現象』を引き起こす純粹なる“劍技”……ただの“技”を宝具の域にまで昇華するとは、その執念には頭が下がる思いです」

他意はない。

私の場合、仮にそれが出来るかと聞かれれば答えは「否」だ。

そして、他のどの英霊にもきつと出来はしない。

ただ燕を斬るためだけに思いのまま刀を振るい、その果てに第二魔法を体現する。

世の魔術師からすれば噴飯モノだろう、リンならば……まあ、おそらく逆上するのでしょうかね、目に浮かぶようです。

それくらいの離れ業をアサシンはやってのけているのだ。

その飽くなき剣への執念には感嘆の念を禁じえない。

「世辞など不要……と言いたい所だが、せつかくだ。素直に受け取っておくでしょう。……さて、今度はそちらの番だぞ？ いい加減手の内を隠すのは止めよ。その見えない剣の間合いは既に見切った。これ以上、鞘に納めておく意味はあるまい？」

その言葉と共にアサシンは先程までの笑みを引っ込め、刀を下ろしざま殺気を叩きつけてくる。

……そうだ。

幾度もの剣戟の末、『風王結界』で覆い隠した剣の間合いは見破られた。

アサシンは「大道芸のような物だ」などと嘯うそぶいていたが、剣を合わせる事で不可視の剣の尺を測るなど大道芸といった言葉では到底済まされない。

それは最早『神業』の領域だ。

こと剣の技量において、アサシンは他の剣の英霊達と比べても遜色ないどころか、それよりも一步も二歩も抜きん出ている。

『風王結界』の主たるアドバンテージを失った今、残された選択は……。

「……宝具」

両手に握り締めた剣に僅かに目を移す。

それしか選択肢が残されていない。

（だが……リスクが大きすぎる！）

確かに私の宝具を解放すればアサシンを倒せる。

しかしこの宝具は燃費が非常に悪いのが欠点だ。

不完全な召喚のツケでシロウからの魔力供給がなされていない以上、

使用出来るのは精々一回か二回。

しかも二回使用は魔力枯渇による自らの消滅を加味した上での計算だ。

使用を一回に留めても、ギリギリ存在を保てる程度の魔力しか残らないだろう。

それにリスクはそれだけではない。

宝具とはいわば英霊の“シンボル”だ。

宝具を開帳するという事は、裏を返せば自らの正体が露見する危険を冒すという事でもある。

自分の真名に頓着しないアサシンや真名を知られてもリスクの少ないコナミならばともかく、私の場合は大いに問題がある。

私の真名と宝具は切っても切り離せないものだ。

そしてどちらもあまりにも有名に過ぎる。

どちらか一方でも知られてしまえば私の全てが暴かれてしまう。

アサシンだけならまだいい、そんな事にはさして興味を持たないだろう。

だがここはキャスターのテリトリー。

柳洞寺内部の状況は解らないが、既にこちらの状況を把握している

と考えていい。

策略によって勝ちを拾いに行くキャスター相手に、こちらの手の内を知られるというのはアサシンを打倒する対価としては破格すぎて釣り合いが取れない。

(……………それでも、やるしか……………ないのか!?)

剣を握る両手に力がこもる。

汗が額を伝い、顎から滴り落ちて左手からの赤い滴と共に石段を濡らす。

……………覚悟を決める、

!

「くっ!」

僅かばかりの逡巡の末、決断。

真剣な眼差しでこちらを見据えるアサシンを見上げ、剣を掲げようとして……………。

突如山門から響き渡った轟音に、その動きを止めざるを得な

かった。

「え!？」

「……む？」

私はおろかアサシンまでが硬直し、揃って山門の方を見上げる。

山門からは明らかに爆発と思しき赤い炎と黒煙が凄まじい勢いで迸っている。

一体何が……？

「うわああああっ!？」

「!？」

と、山門から絶叫と共に何かが転がり落ちてくる。

……あ、あれは!？

「シロウ!？」

なんとそれはシロウだった。

シロウは石段に身体を強かに打ちつけながらそのままアサシンの脇を通り抜け、私の方へと真っ直ぐ向かってくる。

「うぐっ! がっ! ぎっ!」

「シロウ!」

慌ててシロウを受け止め、彼を見遣るとその惨状に目を剥いた。

シロウの上着は所々が赤い血に染まり、さっきの爆発にでも煽られたのかあちこちが焼け焦げていた。

さらによく見ると彼の手には一振りの短刀が握られていた。

しかしその業物らしい短刀は刀身が半ばから真っ二つにへし折れている。

いったい中で何が……それにコナミは？

「シロウ! 血が……それにこんなにボロボロに。キャスターに手酷くやられましたね」

突如山門の方から、聞き覚えのある男の声が響いてきた。

声の主は鬼気迫る表情で石段を駆け下り、こちらへ向かって疾駆してくる。

その両手には、薄暗いこの場所においても月光を反射し鈍く輝く、見慣れた二振りの中華剣が握られていた。

それを見た瞬間脳髄に紫電が走り、全てが繋がった。

「アーチャー！ 貴方が何故シロウを襲う!？」

双剣の男……アーチャーと目が合った刹那、思わず声を荒げた。

私達は 正確にはシロウとリンは 同盟を結んでいる。

アーチャーも不服だったとはいえ、一応は承諾した筈だ。

なのに突然ドサクサまぎれに同盟相手であるシロウを襲うなど……
血迷ったのですか、アーチャー！

「……セイバーと合流されたか。結局イレギュラーの目論見通りに事を運ばされたな。……出来れば合流前に始末したかったが、やむを得ん。危険だが、セイバーを相手取っても小僧を……!？」

双剣を煌めかせ、こちらに一気に飛び掛かろうとしていたアーチャ

一の動きが突然止まった。

いや、止められたと言つべきか。

いつの間にか私とシロウ、アーチャーの間に抜身の長刀がごく自然に差し入れられていた。

「……アサシン？ どういうつもりですか？」

「なに、仔細は解らぬが想像はつく。その童はそなたの主なのだろう？ ならば死なす訳にはいくまいて。どうやら“女狐”からは首尾よく逃げおおせた様だが、救出に來た仲間から突然裏切られるというのは流石に想定の外であつたか」

「……貴様は、セイバーを逃がすというのか。アサシン」

「このまま童を死なせてセイバーを消させるのはあまりに惜しいというものだ。この“死合”に横槍を入れたのはそこな童だが、そもそもその発端はお主の様だからな。そして“死合”を潰された以上はせめてその首なりとも収めねば私の気が済まん。もつとも、セイバーと比べて随分と雅さに欠ける首だがな」

「ふん、キャスターの飼犬風情が随分と大口を叩く。幸い、キャスターの許しもある事だしな。小僧が始末出来ん以上は……」

これ以上シロウを狙うのが事実上不可能だと悟ったアーチャーが対象を変えた。

アサシンに対して尖った殺気をぶつけながら双剣を構える。

「くくつ、では順序は逆だが門番の責務を果たすでしょう。行きは見逃したが、帰りは逃がさん。我が剣の錆となるがいい」

そして相変わらず涼しげな顔で殺気を受け流すアサシンがゆらりと構え、辺りの空気が凍る。

一瞬の後、苛烈な剣戟の舞台の幕が切って落とされた。

「セイバー、今のうちに離脱するんだ！ 早く！」

息も絶え絶えの状態から幾分か回復したシロウが私の肩を掴み、急かしてくる。

そのあまりの必死さに思わず首を縦に振っていた。

勿論否やはない……が。

「は、はい！……しかし、コナミはどうするのですか？ 一緒ではないようですが。それに負傷しているのでしょうか？」

「多分アイツなら大丈夫だ。離脱手段はあるらしいし、あまりに遅いようだったら令呪で呼び戻す。そもそもこれは小波が提案した作戦だからな。遠坂のいる家まで戻れば俺達の勝ちだ。詳しい事情は戻ってから話す……」

そう言いながらもシロウの目はアーチャーとアサシンの剣舞に真っ直ぐ向かっている。

警戒心もさることながら、それに魅入られつつある気配が漂っていた。

無理もない。

「ふむ、随分と泥臭い剣だ……が、なかなかどうして。どうやら口だけではなかったようだな」

「ぐっ……！……私に剣の才能がない事くらい、百も承知だ。どれだけ努力を重ねても、結局は二流にしかなれなかった。才能があればアーチャーではなく、セイバーのクラスで呼ばれていただろうよ。……だが、二流が一流に勝てん、などという道理はない！」

アサシン自らが『邪道』と評した天賦の剣を、シロウでも努力すれば何とか届きそうな技量で以てアーチャーは悉くいなしていく。

それは剣、魔術共に才能のないシロウからしてみれば、この上なく眩しく映るのだろう。

超一流に、二流が拮抗する。

凡人の誰もが夢想するだろう出来事が、私達の目の前で展開されていた。

……とはいえ、それに見惚れてばかりもられない。

「礼を言います、アサシン。この借りはいつか必ず……行きますよ、シロウ」

「ああ……って、ちょっと待て！　この方が速いのは解るけど、なんでよりによってこの体勢なんだよ!？」

「?　何か……ああ、そういう事ですか。我慢してください。私とシロウとでは体格に差があり過ぎるのでこの方が都合がいいのです」

私の目の前でシロウが顔を紅潮させてわたついている。

今、私はシロウを自分の身体の前で抱えている。

身長差が20cm以上あるため、背中に背負う事は出来なくもないがそれだとバランスが悪い。

自然、身体の前で両腕で抱え込む体勢……所謂『お姫様抱っこ』で
すか?……の方がまだしっくり来る。

本来とは立場的に逆である事に羞恥心を感じているのですが、
この際無視させていただきます。

まあ、私自身された事はありませんし……まったく憧れがないとは
言いませんが……相手が……。

(……………)

「……どうした、セイバー? いきなり黙り込んだりして。それに
なんか顔、赤くないか?」

「……ッ!? い、いえっ、何でもありません! ……ふう、行き
ますよシロウ。しっかりつかまっていてください!」

いけないいけない、思考が逸れてしまった。

気を取り直し、腰を僅かに落して両足に力を込める。

そして一気に足を伸ばし、スタートを切った。

「ぐっ……これは、なかなかキツイな」

「少し辛抱してください。それ程時間は掛りませんので」

魔力を解放し、それを推進力とする『魔力放出』のスキルで以て爆発的な加速を得つつ来た道を駆け戻る。

風圧と勢いに顔を顰めるシロウを横目で見つつ、既に背後の彼方に過ぎ去った柳洞寺に意識を向ける。

（山門に括られた架空の英霊であるアサシン・佐々木小次郎、サーヴァントを呼び出せる程の魔術師の英霊・キャスター、そして突然シロウに牙をむいたアーチャー……ランサーといい、バーサーカーといい今回の聖杯戦争“も”一筋縄ではいかないようですね）

加えてコナミという“異端”の存在……根拠のない想像だが、今回の聖杯戦争では今までにない“何か”が起こるのかもしれない。

それが良い事なのか悪い事なのか、はたまたそれが一体何を齎すのか、それはまったく解らない。

（だが……その中心にいるのはおそらく……）

自身の持つ『直感』が、如実に訴えかけていた。

覚悟せよ、この聖杯戦争で起こる波乱は過去の比ではないと。

(コナミ……どうか無事に戻ってきてください)

胸の中に渦巻く黒いざわつきに蓋をしつつ、柳洞寺から視線を切り衛宮邸へと飛ぶように駆け抜けていった。

side 小波

(……ふう、なんとかうまく行ったか。やれやれ、これであとは脱出するだけだな)

士郎君を抱えたセイバーが離脱したのを山門の陰に隠れて見送った後、心中で安堵の吐息を漏らす。

小次郎にアーチャーをぶつけるのはある意味賭けだったけど、状況が上手い具合に転がってくれた。

「しかし……こうして改めて見ると、アーチャーも俺と似たような戦闘スタイルなんだな」

小声で一人ごちる。

視線の先には今だ刃を交わす小次郎とアーチャーがいる。

小次郎は弧を描くように長刀を閃かせながらアーチャーの首を狙う。アーチャーはそれを見透かしているかのように、首“のみ”に防御を集中して小次郎の刃を捌きながらギリギリと接近していつている。目標部位を変えられたら即死モノの綱渡りめいた剣捌き。

見ていてハラハラする攻防だが、アーチャーはそこから活路を導き出そうとしている。

格下が格上に対して拮抗するには、相手が見せる一分の隙を絶対に見逃さず、徹底的にそこを突いていくしかない。

さっきのやり取りから、小次郎が狙っているのが自分の首“だけ”なのだ。アーチャーは理解している。

そこが小次郎の第一の隙。

徹底的に自分の首のみ守りを固くすれば、小次郎の剣戟を凌げると踏んだのだ。

そして第二の隙、長刀は超接近戦に対してはそのリーチの長さ故に不利だという事。

アーチャーの動きの全ては、その絶対的な隙につけ込む事に繋がっている。

自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場に残された活路を導き出す“戦闘論理”。

逆転の可能性が1%でもあるのなら、そのチャンスを死に物狂いで、そして確実に手繰り寄せる。

確かにアーチャーは“剣士としては”二流。

() だけど『戦闘者』としては超一流だ。多分、これまで戦ってきた相手が自分より格上のヤツらばかりだったんだらうな。その点では『俺』も同じだし、似てると思ったのも自然な流れなのかもな)

野球でも、それ以外でも。

“俺達”が戦ってきたのは自分達とは隔絶した実力を持つヤツらばかりだった。

それでも仲間と力を合わせて何とか切り抜け、そして勝利して来たんだ。

アイツとの決定的な違いがあるとすれば、多分それは……。

「……おっと、いけない。早いとこ脱出しないとな」

逸れていた思考を元に戻し、視界を階下から切り離して境内へと向ける。

脱出ルートは既に決まっている。

『赤の英雄』^{レッド}を解き、山門の陰から駆け足で移動。

柳洞寺の境内の真ん中を中心として、御堂が12時の方向、山門が6時の方向にある。

俺が目を付けたのは御堂のすぐ脇、9〜10時の方向だ。

そこから柳洞寺を囲む壁を乗り越え、大きく迂回して山を降りる。

そうすればこちらを監視しているだろうキャスターに対しても角が立たず、自然な形で探りを入れながら脱出を図る事が出来る。

多少探りを入れられる分にはキャスターも諦めているだろうし、探れる範囲に限界はあるけど何も探れないよりは大分マシだ。

『赤の英雄』^{レッド}を解いたのはこれ以上キャスターに宝具を見せたくなかつたため。

切り札をジックリ見られるのはあまり気分のいいものじゃないし、

万が一にも宝具を解析される事だけは避けたい。

キャスターからは明らかにあの“マッド博士連中”と同類の匂いがするし、『五人の英雄』や『ヒーロー全てに通ずる物』の“曰く”や機能は一流の魔術師からしてみれば垂涎モノだろうしな……いや、それは『俺』の存在もか。

あの分だと、アーチャーは小次郎を倒すまではいかなくても逃げおせるくらいは出来そうだ。

早めに行動しないとな。

「よし……と」

傍らにあった石を土台に、白い漆喰の壁をよじ登り外へと脱出。

やや駆け足気味に、そして感覚を研ぎ澄ませながら山を迂回するルートへと入る。

この山は御堂以外にも他の施設があるのか（墓地とかかな？）、あの山門へと続く道以外にも舗装なんかはされていないが道があった。

今のところ、畏も特に見当たらない。

出来れば『解析モノクル』辺りを使ったかったけど、それだとあまりに露骨に過ぎる。

「……ん？」

とその時、何か第六感に引っ掛かるモノを感じた。

それは自分の足元 地面の下から這いずり上がるようにジワジワと伝わってくる。

思わず足を止め、地面に視線を落とす。

(この感じ……なんだろう、あまりよくないモノのような……待てよ、確か柳洞寺は聖杯降臨の場所のひとつ……)

周囲への警戒もそこそこに思考に埋没する。

そのせいで“それ”に気付くのが遅れ、咄嗟の判断が間に合わなかった。

「そらっ！」

「えっ!?!」

ドガン、と何かを打ちつけたような音が辺りに木霊した。

意識が引き戻され、その音のした方を見るとまるで製造過程で人間

の生き血でも大量に混ぜ込んだかのような深紅の槍が、深々と俺のすぐ横に立っていた木に突き刺さっていた。

これは……俺が呼び出された時に見た……、ッ!?

「ゲイ・ボルク!？」

「ほう……我が魔槍の名を知っているか。まあ、あの晩に一度面合つらわせてるし当然か。あの時は非常事態だったから撤退せざるを得なかったが、今回はテメエが標的だ。ひとつ付き合っあて貰もらうぜ、イレギュラー!」

暗闇からいつぞや聞いた威勢のいい声が響いてくる。

警戒レベルを即座にMAXに移行し、辺りに目を配るが姿は見えない。

ならばと気配を探ると、俺の真正面辺りにサーヴァントの反応があった。

そして数秒の後、俺の目の前に青い服の男が徐々に浮かび上がって来る。

その手にはさつき見たあの赤い槍が握られている……って、な!?

「い、いつの間……!？」

反射的に隣の槍が刺さっていた木に目をやると、いつの間にか槍は忽然とそこから消え失せていた。

木には槍が突き刺さった跡の、ぽっかりと開いた丸い穴だけが残されている。

「あん？ 何言ってるんだテメエ、ランサーは『最速』のサーヴァントって言われてるんだぜ？ これぐらい出来ないでどうするよ。ま、それはともかくさっさと構えな。でなきや 死ぬぜ？」

目の前の男 ランサーはそう言うのと槍を軽々と振り回しながらゆっくりと構えを取り、まさに突き穿つような鋭い殺気を俺に向かって放ってくる。

どっちらまだここでの俺の波乱は終わっていないようだ。

……はあ、あの“バカ”じゃないけど、こう言いたくなる。

『やれやれだぜ』

第二十二夜 「二局攻防と野球少年」(後書き)

筋力・技術・素早さが上がった!!

『打たれ強い』が身に付いた!!

『ゲッツー崩し』が身に付いた!!

ステータスが更新されました。

感想は筆者の執筆のエネルギー源となります。

第二十三夜 「二人の槍兵と野球少年（前編）」（前書き）

筆者の中では、ランサーを野球選手に例えるならイローです。

どことなく、特徴的に似てますしね。

チローとランサー。

第二十三夜 「二人の槍兵と野球少年（前編）」

side 小波

準備も何も整っていない中、中腰の体勢を取りながらジッとランサーを見据える。

目の前のランサーは不敵な笑みを浮かべたまま、それでいて油断なく俺の様子をうかがっている。

どうやら俺の準備が整うまで待つつもりようだ。

……いったい何を狙っている？

（……焦るな、まずは時間を稼ぐんだ。せめて相手の意図が掴めるまで）

そしてその中で、作戦も含めた戦闘の準備を整える。

一般人ならそれだけで卒倒するような殺気をやり過ぎつつ、フツと浮かんできた疑問を口にする。

「……なんでこんなところにいるんだよ？ ここはキャスターのテリトリーだぞ」

「んな事は知ってるよ。……ああ、結界の事を言ってるのか？ だったら答えはこれだ」

ランサーはそう言うと槍を構えたまま片手を離し、俺に向かって何かを放り投げてきた。

反射的に受け取ってそれをよく見てみると、何かしらの宝石のようだった。

ただし何やら変な文字が彫られていて、ただの装飾品という訳ではないみたいだ。

……ん？ これって……。

「……ルーン？」

パツと頭に思い浮かんだ言葉が口を突いて出る。

ランサーこと『クー・フリーン』は北欧、ケルト神話の英雄だ。

正直、ケルト神話なんてドが付くほどのマイナーな神話はほとんど知らない。

知ってる神話・逸話といたらギリシャ神話の話が幾つかとアーサー王伝説、あとは……日本の神話のメジヤールなどところと逸話のいく

つか、他ちよつとくらいだ。

聖杯の恩恵も受けていないし、その手の知識の程は一般人とそう変わらないくらいだからそんなものだ。

ただ、確かヨーロッパには石に象形文字みたいな文字を刻んで魔術を行使する『ルーン魔術』というのがあった筈。

『クー・フリーン』の出身地を踏まえて考えてみると、それくらいしか思いつかなかった。

「ほう、流石に知ってるか。そういうこつた。そいつで結界を無効化したって訳さ。キャスターはよほどここの結界を信用してたようだが、ハッキリ言つてそれだけじゃあな。『結界破り』をされる事くらい考えつかなかったのかね？ 魔術はキャスターの専売特許じゃねえつてのによ」

こつちを監視してるだろうキャスターをボロクソにこきおろしつつ、クツクツと笑うランサー。

……後でどうなっても知らないぞ？

「やっぱりそうなのか、ランサーなのに多芸なんだな……って、俺が聞いたかったのはそこじゃなくてだな」

ポイツと後ろに渡された石を放り投げつつ、質問の焦点を変更する。

ランサーは「あーあ、もつたいねえ」みたいな顔をしてるけど、俺のじゃなくて敵の持ち物だから別に気にしない。

そもそも敵に渡してる時点で「惜しい」なんて思っただろ、ランサー。

捨てられたというのに相変わらず笑顔だし、あの石からは魔力の欠片も感じられなかった。

どう考えたってあれは使用済の使い捨てカイロ同然の代物だ。

魔力を込め直せば別かもしれないけど、使い方がぜんぜん解らない以上持つてたって仕方がない。

「どうして柳洞寺にいるのに狙いが俺なのかって聞きたかったんだよ。普通なら小次……アサシンかキャスターだろ？ それとも俺がここに来るって解ってたのか？」

「なんだ、そつちか。俺にはマスターから令呪でこう命令が出されてるんだよ。「敵サーヴァント全てと交戦して、必ず生きて帰れ。ただし殺す事は禁ずる」ってな。ふざけた命令だと思わねえか？ まあそれでも命令は命令だし、令呪まで持ち出されちゃあイヤとは言えねえ。で、残ったのがお前さん一人だけなんだよ。厳密に言えばキャスターもだが、あの状態じゃあ手の出し様がなかったしな。どうにかならんもんかと忍び込んで様子を見てたら、坊主とアーチャーがキャスターと戦闘をおっ始めたんでな。これ幸いとルーンで気配を消してコッソリ見物してたって訳だ」

「……………それでよかったのか？ 命令は『交戦』なんだろう？」

「この命令の趣旨は威力偵察と斥候みたいなもんだしな。キャストーに関してはそれで条件が満たせたのが感覚で解った。だがお前さんに関しては別らしくてな。どうもちゃんと闘りあわねえといけねえらしい。で、お前さんが脱出するのを見届けて先回りして待ち構えてた。まあ、つまりこうしてるのは偶然の結果だな。俺にとつちやラツキーだったか」

「こつちにはアンラツキーだよ、まったく。ただでさえ色々立てこんでるっていうのに。……………えーっと、一応聞くけどこのまま見逃すって選択肢は」

「ないな」

「即答かよっ！ まあ解ってはいたけど」

「ハッ、じゃあ聞くんじゃねえよ。……………で、いい加減腹は決まったか？ このやり取りも時間稼ぎなんだろう？」

……………流石に見透かされてるか。

でもこれで十分時間は稼げた。

「やっぱり気付いてるか……ふう、ようやく覚悟が出来た。手の内を曝すのは痛いけど　　ここでやられる訳にはいかないからな！」

そう宣言するとともに右手を背中中のバットに添えて身構え、左手に顕した絵を握り込む。

ランサーは『三騎士』の二にして『最速』のサーヴァント。

獲物の長さで接近戦に関しては相手よりも広範囲の間合いを制し、自らのスピードを利用して多角的な高速戦闘を行う。

野球で言えば守備範囲が広く、足も速くてミートも上手い俊足巧打の外野手タイプ。

死角が少なく、相手にするにはかなり厄介なタイプだ。

最低でもこちらにも相応のスピードか、よほどの防御力がなければ即座に殺られる。

だが、ランサーに防御を無視して心臓を問答無用で貫く魔槍『刺し^ゲ穿つ死棘の槍』がある以上、防御力を上げたのではダメだ。

自然、スピード重視で行くしかなくその点ではランサーの土俵に立つしかない。

その上で考え付く戦法は二つ、槍の間合いよりも遠い遠距離から攻

撃するか、槍の懷に飛び込んでクロスレンジで組み合うか。

前半は比較的安全な作戦、後半はかなり危険が伴う作戦だ。

そして俺が選んだのは。

「変身、『五人の英雄・桃の英雄』！ 続けて、ロード、『アポカリプス』、『デュアルガン』！！」

絵を握り潰し、次いでバットを引き抜き形状変化。

角が丸みを帯びたピンクのパワードスーツを身に纏い、両手に月光を反射して尚黒く鈍く輝く二丁のハンドガンを構える。

『桃の英雄』は『五人の英雄』の中で最も高速戦闘に向いている。

特にコイツの『特殊機能』は、『最速』を誇るランサーに対してはかなり有効だ。

「……あん？ よりによって何でその色なんだよ。強力な宝具なんだろうが、さっきの赤い姿の方がデザイン的にまだマシだぞ？ 男にピンクはないだろ」

「うぐ……反論出来ない」

怪訝顔のランサーのツッコミが容赦なく心を抉ってくる。

しかし決して油断している訳ではない点は流石だ。

仕方ないだろ、仕様なんだよ！

「そ、それはともかく、油断してると痛い目に遭うぞランサー！
いくぞー！」

言い置きざま、ランサーと相対したまま後方へ全速力で後退し、両手の拳銃をランサーに向けて同時に発砲した。

片方からはパン、と軽い音が、もう片方からはキシュン、とまるで空気の抜けるような音が鳴り響く。

軽い音の方は『デュアルガン』。

二丁拳銃で運用する事を前提として製作された、目方の軽い小型の拳銃。

もう一方、拳銃にしてはらしくない音の方は『アポカリプス』。

とある宇宙人由来の技術と素材を用いて製作された特殊な造りをし

た拳銃で、戦車の主砲並の威力の弾丸を撃ち出す『無反動砲』だ。

元々どつちも神秘のない現代兵器だが、『オール・イン・ワン全てに通ずる物』の恩恵でCランクの宝具になっているのでまともに喰らえばタダでは済まない。

「おっと……！ 当たるかよ！」

だがランサーは超反応で即座に横っ跳びし、銃弾を躲した。

外れた銃弾は片方はランサーの後ろにあった木のひとつに喰い込み、もう片方はランサーの後ろにあった木のひとつを文字通り、“木っ端微塵”に撃ち砕いた。

幹の半ばが吹き飛ばされ支えを失った、木の上方部分がメキメキと音を立ててその場に崩れ落ちる。

そのすぐ後に倒れた木の後ろから、ズズンとまた何かが倒れ伏すような音が聞こえてきた。

ちなみに撃ち抜いた木の幹の直径は確実に1mはあった、奥にあった木々も同様だ。

そして弾丸が通り過ぎたところは発生した衝撃波で悲惨な事になっている。

それを見たランサーは僅かに顔を青褪めさせた。

「……マジかよ。当たったらザクロどころじゃすまねえぞ、こいつは」

「 いや、まさかここまでだとは……」

ついでに俺も。

なんだ、このデタラメな威力は？

『アポカリプス』ってここまでスゴイヤツだったっけ？

いくら簡易型の『超電磁砲^{レールガン}』とはいえ、これは明らかに威力過多だ。間違ってもトリガーハッピーには持たせられない、特に“緑の髪の毛のトラブルメーカー”とかには絶対に。

アイツ、面白がって基地の中で光線銃振り回してたからなあ。

「っておい！ テメエ、自分の使ってる武器の威力も知らなかったのかよ!？」

「い、いや、普段より強力すぎたんだよ!」

俺の独り言を聞き咎めたランサーからのツッコミが入る。

慌てて両武器に意識を通すと、『デュアルガン』は特に変わったところはなかったが、『アポカリプス』には『性能変動』の恩恵で『貫通』の能力が付加されているのが解った。

『アポカリプス』は材質や構造こそ特殊だが、総合的には純粹なハンドガンでそれ単体で高い攻撃力を誇っていたのだが、『貫通』の性能を得た事でさらにそれが強化されていたようだ。

成る程、だからか……それでいつの間にか劣化ウラン弾並の破壊力になっちゃってたんだな。

しかし……これは嬉しい誤算かな？

割を食う周りの自然と柳洞寺の方々、ついでに事後、隠蔽に奔走する事になるだろうキャスターには申し訳ないけど。

「……果たしてコイツに『加護』が働くのか？ こりゃアテにならないのを前提でいくしかねえな！」

ランサーが小声で何かを呟くと同時にこちらに猛スピードで突っ込んで来た。

『加護』ってなんの事だ？

気にはなったが、まずは対処が先だ。

「近寄らせるか！ “見えている”ぞ、ランサー！」

バイザー越しに目の前に投影される“情報”を頼りに右前方へとランサーの突撃を避ける。

ランサーと同程度のスピードで。

「なっ！？ 俺とほぼ互角のスピードだと！？」

ランサーの表情がまたしても驚愕に染まる。

そして一瞬の動揺につけ込んで即座に振り返り、両手の拳銃をランサーに向ける。

「喰らえ！」

「喰らってやれるか！」

ランサーは突っ込んで来た勢いのまま前方へ走り抜け、その後ろを凄まじい衝撃波が通過し木々をなぎ倒していく。

だが残念、さつき撃つたのは右手の『アポカリプス』だけだ。

残った本命、左手の『デュアルガン』をランサーの進行方向へと向ける。

これも既に“見えていた”展開だ。

即座に左手の引鉄を引く。

『アポカリプス』のインパクトが印象付いている今なら、コイツの対処は難しい筈……！

だが。

「ちっ！」

ランサーはそれを難なく防ぐ。

こちらを見据えたまま舌打ちをしつつ、紅の魔槍を横薙ぎに一閃。

キーン、と甲高い音が響き、次いでビシッ、と何かが突き刺さるような音が近くの木陰から聞こえてきた。

「げっ！ 弾丸を見切って弾き返したのか!？」

今度はこっちが驚愕に染まる番だった。

なんて動体視力してるんだよ!?

「んな訳ねえだろ。引鉄を引く指の動きと銃口の向きから、弾の軌道と発射のタイミングを予測しただけだ。もっとも、『加護』の補助がなければこんな芸当は出来なかっただろうがな。冷や汗モノだつたぜ」

「『加護』……?」

言動とは裏腹に、いたって平静な表情のまま構えを取るランサーに對してふと疑問が浮かび上がってきた。

『加護』……さっきも言っていたな。

いったい何の『加護』なんだ?

「ひとつ言っておくぜ。俺には『矢避けの加護』ってのがあってな。射撃武器や投擲武器に関しては絶対に当たる事はなく、すべて回避する事が出来る。つつ訳で、俺に對してソイツらは通用しない。さっきのを見てれば解るだろ?」

不敵な笑みを浮かべつつ、ランサーはいきなり自らのスキルを明かしてきた。

“飛び道具絶対回避”のスキル。

それが本当だとすると、確かにこの装備じゃギリ貧かもしれない。

……でも、飛び道具を封じるためのブラフという可能性もある。

(……確かめてみるか)

警戒姿勢を維持したままやや視点をずらし、『靈力』のスキルから派生する第六感を最大限に解放してランサーを凝視する。

するとランサーの周囲に白っぽい靄みたいなものが浮かんでおり、それがランサーを包み込むように取り巻いているのが見て取れた。

あれがランサーの言う『矢避けの加護』なのかどうかは解らないが、少なくとも何らかの『加護』を受けているというのは間違いない。

……ブラフの線は消えたか。

「 ……ふうん？ 嘘じゃなさそうだな。じゃあ少なくともコイツはあんまり意味がないな」

そう言つて『デュアルガン』を破棄、光の粒子となって左手の拳銃が霧散する。

並の拳銃じゃ確実に無効化される以上は、持っていたって仕方がな

い。

ただし、『アポカリプス』は破棄しない。

弾丸は当たらないかもしれないが、副産物である衝撃波だけはおそらく別。

多分だが、ランサーの『矢避けの加護』は俺のバットと似たような効果を齎す代物なのだ。

弾丸や矢などに効果はあってもそれから派生する衝撃波や爆風……それら二次的な現象に関しては意味をなさない。

ならば無視出来ない破壊力と相まって、少なくとも牽制と足止め程度にはなる筈だ。

……その証拠に。

「……ちっ、それはやっぱりそのままか」

「当たり前だろ？ 上手く隠してるつもりだろうけど右脚、ちょっと震えてるぞ？ つまりお前の『矢避けの加護』は衝撃波までは防いでくれないんだ。だったらコイツだけは出しておいて損はない」

おそらく『アポカリプス』を避ける際にスパートを掛けた時、残っていた右脚が衝撃波の有効範囲に残ったままだったのだろう。

構えの軸足にしているランサーの右脚は、微かにだが震えていた。

すぐに回復する一時的なものだろうけど、間違いなくあれは衝撃波が僅かなりとも通用している事の動かぬ証拠だ。

『アポカリプス』を厄介だと判断したランサーはこれを封じるために自分からスキルを明かしたんだろうけど、結果は完全に裏目に出た。

思惑を外されたせいか、ランサーは少しだけ表情を険しくする。

「……思った以上に厄介な相手だな。あの境内の時でもそうだったが、ふざけた格好とは裏腹に頭の回転は速いし、何より戦闘勘と戦略眼が尋常じゃねえ。テメエ自身の力は英霊の足下にも及ばないが、宝具と技術と経験、そして『弱者の兵法』で強者と渡り合えるだけの力を持ってやがる。“弱いが強い”。そんな表現がしつくりくるヤツも珍しいっっちゃあ珍しいな。俺の生きてた時代じゃあそんなヤツはほとんどいなかったからよ。ま、この聖杯戦争でもだが」

俺に対してかなりの高評価を下すランサー。

声に若干嬉しそうな気配が漂っている辺り、戦闘狂の才能がありそうだ。

「それはどうも。といつても俺は元々野球選手だから、どうも誉められてる気がしな……い……？」

ランサーの軽口に返答を返したその時、突如として視界がグラリと揺れた。

次いで意識が僅かに霞み、俄かに足元がふらつきだす。

(な、なんだ突然……… いったいどうして?)

咄嗟に思い当たる原因を探るが、それよりも早く目の前の槍兵がこちらの異常を見抜き、即座に動き出した。

「おらぁっ！ どうした、突然ふらつき出しやがって！」

隙を突かれ、決して入れてはならなかった槍の間合いに戦闘領域を強制移行された。

これでは『アポカリプス』は使用出来ない。

「……………っ！？ くそっ……………ロード、『干将・莫耶』！」

気合いで意識を立て直し瞬時に状況判断、『アポカリプス』をその場に捨て、残ったコストを使って近接用の武器を一瞬で創り出す。

武器は右手に『陽剣・干将』、左手に『陰剣・莫耶』。

中国の刀工、干将が妻の莫耶の身と引き換えに鍛え上げた珠玉の夫婦剣。

強い絆を持つこの二刀は、例え離ればなれになっても互いに引き合う性質を持つ。

アーチャーが使っていた、あの剣だ。

既に何度も実物を見て、銘まで知ったため『オール・イン・ワン全てに通ずる物』に詳細とともに登録され、変化させる事が可能になった。

ランクは元々C、コストにして35。

コイツでなんとか捌き切れるか……！？

「そろそろそろああっ！！」

「うっ……ぐっ……このっ！」

ふらつく足元を叱咤し、ランサーの神懸かり的な神速の刺突の嵐を強く握り締めた双剣でなんとかいなしていく。

ガキーン、カキンと鉄同士がぶつかり合う音が周囲の木々に反射して木霊となり、時折飛び散る火花が辺りを一瞬照らす。

「剣術三倍段」という言葉がある。

簡単に言えば間合いの関係上、剣で槍と渡り合うには三倍の技量が
必要だという意味だ。

つまり何が言いたいのかというところ……攻勢に転じきれない！

なんとか防ぐので精一杯だ　　けど！

「……？　なんだコイツの動き……解せんな。まるで俺の攻撃を先
読みして捌いてるような……？」

攻防の最中、俺の動きにどこか違和感を覚えたのか訝しげな表情で
ランサーが呟く。

まさか気付くとは思わなかったが、それも当然だ。

実際にランサーの動きを“予知”した上で動いているのだから。

そうでもなければこんな最悪のコンディション下で、『最速』を誇
るランサーの猛攻など捌ける筈がない。

各種『五人の英雄』にはパラメータの上昇と共にもうひとつ、それ
ぞれ個別に特別な能力が扱える『特殊機能』が付随している。

『赤の英雄』なら宝具ランクのプラス補正、『黒の英雄』なら『不可視化』、『気配遮断』のスキルという風に、各パラメータの特徴に合わせた強力な能力を併せ持つ。

そして『桃の英雄』の特殊機能は『未来予測』。

現在の状況とこれから起こるだろう事象の確率を基に、高速演算で数秒先の未来を瞬時にはじき出す。

導き出された予測はバイザーに簡略化された情報として投影され、その他にも脳に直接、瞬間的なビジョンが送り込まれる。

それを利用して、ランサーの槍を防いでいるのだ。

スピードと咄嗟の判断がものをいう高速戦闘において、この能力ほど役立つものはない。

刹那の瞬間瞬間で、常に先手を取り続けていられるのだから。

事実、これのお陰で判断に寸分の狂いもないし、未だにかすり傷ひとつ負わされていない。

攻勢に転じるには難しい状況だが、守勢を維持するには十分だ。

(……とはいえ、いつまでも攻撃を捌いていられる訳じゃない。早いところなんとか状況を打開しないと……！)

スピードと手数はともかく、ランサーのパワーはこちらを上回って

いるし何よりこの劣悪なコンディション状況が問題だ。

さつきから意識が何度もとびかけるし、徐々に全身に力が入らなくなりつつある。

立っているのもやつとなのを、気力と根性で奮い立たせてなんとか持ち堪えているような状態なのだ。

なんでいきなりこうなったんだ……！？

（まだランサーからは何の攻撃も喰らっていないし、ましてやこんなフラフラになるようなひどいケガなんて負わされてもいない……ケガ？）

防御に専念する傍ら、原因の心当たりを探っているうちに“ケガ”という単語に引っ掛かりを覚えた。

そういえばさつきから左手の感触がおかしい。

なんか素手とパワードスーツの間にタプタプと温かい感触が……まるでぬるま湯に手をつっ込んでいるみたいな……ッ、あ！

（しまった、止血か！ 血を失い過ぎたんだ！）

やっと原因に思い至った。

確かにランサーからは何も喰らっていないが、それ以前に手傷を負わされていた事を今更ながら思い出した。

柳洞寺の境内で、士郎君を庇った際アーチャーに左腕を切り裂かれている。

その後のドタバタでアドレナリンが全開になっていたらしく、いつの間にか気にならなくなっていた。

傷は浅いと思っていたが、どうやらそれなりに太い血管を損傷していたようだ。

今まで止血をしていなかったせいで血が止まらずに流れ出続けた結果、ここに来て失血量がレッドゾーンに突入したのだ。

迂闊だった……このままじゃランサーとの勝負とは関係なしに死に至る。

通常のサーヴァントなら失血死のリスクはおそらくない。

肉体の構成・構造こそ人間と同じだが魔力をエネルギーとしている以上、それこそ急所をやられるか魔力枯渇、もしくは身体を粉微塵にでもされない限りは死なない筈。

ただ俺は受肉したサーヴァントで、しかも肉体スペックはほぼ一般人の間準拠だ。

つまり人間の死因の大多数が当てはまる筈だから、失血死しないとは言い切れない。

『俺』自身はかなり“生き汚い”性質だが、ここまで血を失ってしまえば流石に致命的だ。

そして限界は思いの外早く来た。

(右! ……最後に左……あ、マズい、意識が……!)

『未来予測』のビジョンと情報を頼りに何度目かの槍衾を凌ぎきったその時、目の前が一瞬真っ暗になった。

そしてガクガクと両足が震え出し、体重を支えきれなくなった左脚が崩れ落ちて片膝を突く体勢となる。

(く……っ、こんな、時にッ!)

気合で身体を叱咤するが、俺の身体は最早それでも言う事を聞いてくれない程に疲弊していた。

とうにレッドゾーンを超えてデッドラインに突入してしまっている。

そしてこの致命的な隙を見逃してくれるランサーではない。

「おおらあああっ!!」

チャンスとみたランサーの全身全霊を込めた、本日一番の最速の刺突が繰り出される。

だがそれより早く、未来のビジョンが俺の脳裏を掠めた。

……狙いは俺の心臓だ!

させ、るかっ!

「こ、のおっ!」

心臓の手前で『干将・莫耶』をクロスさせ、刺突を身体の直前で受け止めた。

ガギイン、と鈍い金属音が辺りに響き、紅の魔槍が俺の身体の1cm手前で停止している。

そして受け止めると同時に後ろに向かって地面を蹴る。

刺突の勢いも利用しつつ半ば吹っ飛ばされるように跳躍して、一旦ランサーから距離を取った。

「だあっ！ リロード、『閃光弾』！」

フラッシュ・グレネード

そして着地と同時に最後の力を振り絞り、両手の『干将・莫耶』を再度こちらに突っ込んでくるランサーへ向かって投擲。

迎撃される寸前に『干将・莫耶』を閃光弾へと変化させ、即座に起動させた。

追撃を加えようとこちらを見据えていたランサーは光の爆発の直撃を受け、物の見事に両方の視界を奪われる。

「ぐあっ！？ くそっ……目が……！ 味な真似を！」

そして悪態を吐きつつ片手で両目を抑えてすぐさま進路変更、後方へと退いた。

回復にはしばらく時間がかかるだろう。

……本来なら逃げるチャンスなんだろうけど、こっちはそんな余裕はない。

何しろ立っていられないほどの状態なのだ。

逃げたくても逃げられない。

「はあ……はあ……くそっ、血が全然足りてない。急いで止血しと

くんだった」

『桃ピンクの英雄』を解除し、片膝をついて即座に左腕の止血作業に入る。アンダーシャツの左腕の部分を引きちぎり、それを使って今だ血が溢れてくる傷口の上を固く縛る。

血濡れのアンダーシャツが絞れて、真っ赤に染まっていた左腕がさらに赤く染まりついでに地面をも赤色に変える。

今更遅いかもれないが、これで一応血が流れる量はグンと減った。

……つて、ここまで出血しておいて今までよく気付かなかつたな。

左手の爪の中まで真っ赤になってるし、雑巾みたくアンダーシャツ絞ったらなんだかスゴい事に……。

「っと、ランサーは……ああ、まだ目潰しが効いてるか。でも警戒は解いてない……その点は流石だな　おっと、さて、進退窮まったぞ」

離れた場所で目を押さえて蹲るランサーを見据えたまま、途切れそうになる意識をギリギリで繋ぎ止め現状を分析する。

この体たらくではこれ以上の戦闘は無理だ。

止血はしたから戦闘を続行しない限りしばらくは問題ない筈だが、

ランサーは絶対それを許してくれない。

令呪の命令があるから殺される事はないとはいえ、今の状況はそれ以前の問題だ。

このままジツとランサーと睨み合っているだけでも、出血量が限界を超えた今では遠からず確実に昇天する。

そして隙を見て上手く逃げられたとしても、追跡されて追いつかれでもしたらその時点でもアウト。

その上で導き出される理想的な展開は唯ひとつ。

“ランサーを即刻叩きのめして急いで帰って即治療”

これしかない。

（　　）　　って、それが出来れば苦労はないんだよ！　せめて土郎君が令呪で俺を呼び戻してくれたらいいんだけど、パスを介しての通信はやり方が解らないから使えないし……それ以前にパスもレイラ

インもほとんど形骸化してる状態だしなあ……。ここにセイバーがいてくれれば何とかなっただかも……。ん？ 待てよ……。あ！)

あつた。

あるじゃないか、この状況を打開出来る反則級の切り札が。

ここで開帳するにはかなりリスクがあるけど……。仕方ないか。

もうランサーも立ち直り始めてるし、迷ってる時間はなさそうだ。

「…………よし！」

覚悟を決め、背中の鞘にバットを再度出現させる。

さらにさつき打ち捨てた『アポカリプス』を破棄しコストに再還元。

『干将・莫耶』から再変化させた閃光弾の分は起動と同時に既に戻っているから、これでコストは最大値の100。

「…………んっ！」

鞘から右手でバットを抜き、逆手に持ち替えてドン、と地面へと突き立てる。

そしてそれを杖に無理矢理身体を起こし、呼吸を整えつつランサーに対して身構える。

（ さあ、いくぞ！ 覚悟しろ、ランサー！ ）

side ランサー

「ぐ……ん、やっと回復したか……」

奪われた視力がようやく元に戻り、視界が鮮明になる。

しかし、まさか目潰しを使ってくるとはな………ついさっきアーチャーの例を見た事だし、警戒しておくべきだったか。

イレギュラーは逃げてはいないようだが、あの目潰し以降何故かそこから動こうとする気配がない。

何のつもりだ………？

「……テメエ、どうして仕掛けて来なかった？」

「そこまでの余裕がなかったんだよ。血を失くしすぎたんでね。これは俺の凡ミスだけど……お陰で攻撃も逃走も出来ないくらいに身体が参ってしまったる」

「はぁん……急に動きが悪くなったのはそのせいか。確かにあの時アーチャーに腕斬られてたし、止血もしてなかったようだからな。しかしサーヴァントが失血で体調不良になるモンなのかね？ まあそれはともかく、その割には随分と余裕そうだな？」

油断なく構えを取り、離れた位置でバットを杖に立っているイレギユラーを見据える。

顔色は蒼白で、今にも倒れそうな雰囲気だ。

しかしそれとは裏腹に、その顔には強気的笑みが浮かんでいる。

苦し紛れの笑み……という訳でもなさそうだ。

その割には自信が漲ってやがるからな。

「まさか。立ってるのがやっつとだよ……ところで、俺こんだし、万一俺が死んだら任務達成出来ないだろ？ だからこの辺でお開きにするって事は」

「ねえな」

「……やっぱり即答か！ はあ……キヤスターの監視下で使いたくはなかったけど……コード入力、『One for all, all for one（俺は一人じゃない）』」

「!?!」

イレギュラーがその言葉を呟いたと同時にヤツの身体から魔力の奔流が迸り、次いで突き立てたバットを中心として地面に赤く発光する線が走り、幾何学模様が描かれていく。

周囲の大気がヤツを中心に渦を巻き、木々がざわめく。

これは……魔法陣!?!

「接続……完了、検索……該当、クラス……適合、召喚準備……完了！
来い！ “サーヴァント・ランサー”!?!」

「なっ!?! サーヴァントを呼び出すつもりか!?! それに

“ランサー”だと!?”

開いた口が塞がらない、とはこの事だ。

なんとコイツはサーヴァントを呼び出そうとしているのだ。

しかもそれが“ランサー”だという。

そもそも新たにサーヴァントを召喚しようにも既に枠は全て埋まっているし、普通なら「何をバカな」と一笑に伏すところだが、この主であるキャスターはサーヴァントの身でありながらアサシンを召喚する事に成功している。

加えて目の前の魔法陣と異様な気配……間違いない!

今コイツは……本当にサーヴァントなのかどうかは解らないが、確実に“何か”をこの場に呼ぼうとしている!

「く……っ!?”

逡巡していた僅か数秒の間で地面の幾何学模様が五芒星を描き切ると同時に、魔法陣の中心で光が爆ぜる。

思わず腕を翳し、目に飛び込んでくる光の奔流を遮った。

やがて光が収まり、そっと手をどけ光源を見やる。

そこにいたのは……。

「サーヴァント・ランサー、召喚に従い、参上や！ ……つて、な
んやエライ事になつとるなあ、小波。顔真つ青やで、ちゃんとゴハ
ン食ってるん？」

「召喚直後の第一声がそれが、“カズ”……。お前らしいといえ
らしいけど、『俺』を通じて状況は解ってるんだろ？ ホントにピ
ンチなんだよ、今。緊張を解ほぐしてくれるのはありがたいけど、最低
限TPOは弁えような？ ……という訳で、頼む。力を貸してくれ」

「ああ、名前言うたらアカンって！ こういう時はまだ本名明か
さんのが“お約束”やる！？ ……まあ、頼られるんはむしろ望む
トコなんやけどな……」

「えっ？ なんだって？ 後半聞こえなかつたんだが」

「！ あ、あくなんでもあらへんよ？」

「 なんだコレは？」

水色のショートカットをした、この時代でよく見かけるような学校の制服を着たやたらデカイ童顔の女が立っていた。

（って、オイ……ちょっと待て。コイツが“ランサー”……だと？）

まだ何とも判断出来ないが、少なくとも見た目からしてコイツが英^{サー}霊^{アント}だとはとても思えない。

だが油断は出来ない。

あのイレギュラーが呼び出したヤツだ。

油断などしようものなら命がない、くらいに思っていた方が丁度いい。

だが。

（ それにしても……えらく気の抜ける掛け合いだな、オイ）

この手の感想が頭を掠めるのは仕方のない事だと思う。

緊張感が台無しだ。

力が抜けるぜ、まったく……。

第二十三夜 「二人の槍兵と野球少年（前編）」（後書き）

筋力・技術・素早さ・変化球が上がった！！

『フルカウント』が身に付いた！！

ステータスが更新されました。

やっと二人目のポケサーヴァント、“ランサー”登場です。

この回を書くのが第一の目標でした。

しかしここまで長引くとは……。

第二十四夜 「二人の槍兵と野球少年（後編）」（前書き）

また文字数が……15000字を超えてしまいました。

第二十四夜 「二人の槍兵と野球少年（後編）」

side 小波

「……あー、なんだ。そろそろいいか？」

呆れたようなランサーの声で現実に引き戻された。

……あ、そうだった。

今はそれどころじゃなかったな。

姿と声があまりに“懐かしく感じた”から、つい気が緩んでしまった。

状況を再認識し、意識を切り替える。

「え……あ、ああ悪い。とりあえず、俺の代わりにこの“ランサー”が戦うという事で。……それじゃあ、頼む」

「あいよ、任されたわ。ほんじゃ行ってくるで！」

俺に向かって微笑みながら手を振りつつ、ブレザーの制服に身を包

んだ長身の少女……カズはスタスタとランサーの方へ歩いて行く。
水色ショートの髪を靡かせ、堂々と歩くその後ろ姿には気負いがま
ったく感じられない。

……背中を預ける状況になったら頼りになるんだよなあ、コイツは。

(……今のうちに応急処置だけはしておくか)

息を吐き、近くにあった木に寄りかかって座り込んだところでそう
考え、残ったコストを使って『救急キット』を出し出来る限りの
手当てをしていく。

出来れば造血剤があればよかったが、流石にそれは『救急キット』
の中にはない。

治療を続ける傍ら、二人の方をジッと見つめる。

……どっちにしろ、急がないと本当にマズい。

任せっきりになるのは情けないけど……頼んだぞ、カズ。

「 という訳で、選手交代や。動けん小波の代わりにウチが相手する事になったさかい。よろしゅう頼むわ、ランサー」

「 テメエ……本当に“ランサー”なのか？ というかそれ以前にサーヴァントか？」

まるで親しい友人に街角で声をかけるような気軽さで話しかけるカズに対し、ランサーは構えを崩さないまま訝しげな視線を向ける。

警戒心もさることながら、この理解不能な現象と現状に困惑しているようだ。

そんなランサーに対し、今度は不敵な笑みを浮かべながらカズは言葉が続ける。

「 なんや、疑つとるんか？ まあ、ウチをサーヴァントだと認識出来へんのも解るんやけどな。サーヴァントの気配がまるきり感じられん筈やし。それも当然や、ウチは“聖杯戦争のサーヴァント”やのうて“小波のサーヴァント”なんやからな」

「……………」

その説明にもやはり合点がいかなかったのか、ランサーは頭の上に疑問符を浮かべる。

しかしカズは口を閉ざし、それ以上の説明はしなかった。

それでいい、この場で必要以上の情報を明かすのはマイナスにしか働かない。

ここの状況を把握しているのは当事者だけではない。

俺を何らかの方法で監視しているキャスターもだ。

カズ自身も察しは悪くない方だし、こういう事に関しては意外と神経が細かい。

ちゃんと俺が不利益を被らないよう言動に気を遣っている。

「解らんかったらそれでもええ。それにこの状況で気にするんはそことちやうやる？ でも……そうやな。ウチが歴れっきとした“ランサー槍使い”やっちゅう事は証明しとこか。……“これ”で解るやる？」

カズはそう言うのと笑みをそのままに、右手を肩と水平になるまで持って来ておもむろに掌を開く。

次の瞬間、右手が空を掴みカズの手には一振りの長槍が握られていた。

だが、ランサーはその槍を目にした途端表情を一変させる。

「なっ！？ ソイツは……！」

「そういうことじゃ、これでウチが“ランサー槍使い”やと解ったやろ？
この槍の銘は……言わんでも解るよな？　クク……ちなみに本物や
で？」

「『ゲイ・ボルク』だとお！？」

ランサーが驚愕のままに目を見開き、叫ぶ。

それも当然だ。

カズの手握られている槍は紅の魔槍

『ゲイ・ボルク』。

ランサーが今構えている槍と、見た目も存在感も感じられる神秘も
まったく同じ代物だ。

代名詞を奪われたランサーは驚愕から一転、今度は憤怒の表情で力
ズを睨み据え、殺気を叩きつけてくる。

無理もないな。

「なんでテメエがそれを持ってやがる！？」

「それは言えへんな。言うたら色々問題があるし、仮に言ったところでアンタに理解出来るとも思えん。まあこっさりこっちを見とる“覗き魔”に関しては別やろうけど」

「……………」

もつともな理由で飄々と追求を躲すカズに対し、ランサーはさらに殺気を重ねそれだけで人を呪い殺さんばかりの眼光で睨みつける。

しかしカズは相変わらず笑顔のまま。

槍を肩に担ぎ、まるで堪えた様子も見せず涼しげにランサーの殺気を受け流している。

「ま、この辺で問答はやめにしよか。生憎、こっちには時間がないねん。早いトコ小波をなんとかせな死んでまうからな。それに アンタも話し込むよりこっちの方がええやろ？」

そう言った途端、カズは槍を肩から降ろしてヒュンヒュン、と準備運動でもするかのように振り回すと、徐に槍をスツと構える。

表情も笑顔から一転。

眼差し鋭く、まさに獲物を狙う猛禽類を思わせる好戦的な表情へと

変わっている。

俺と戦っていた時のランサーとそっくりだ。

ふうん……こうして見ると意外と似た者同士なんだな、この二人。

戦いが好きなところとか特に。

……でもカズ、とりあえず服装を考えような？

制服なんだし、スカート履いてるから下手するとパンツ見えるぞ？

「ハッ……確かに、それが一番手っ取り早い。そういう事なら遠慮はしねえ。昔から女は殺さねえ主義だが、槍の件もある。テメエだけは例外だ……最初から全力で殺しに行く。仮にもその魔槍を担ってるんだ、知ってるだろうが一応名乗っておくぜ。ランサーのサーヴァント、『クー・フリーン』だ」

構えたままのランサーから届く殺気が僅かに薄れ、ついで今までより厚く、鋭く凝縮される。

完全な臨戦態勢……ここに来てランサーも己の激情を制御し、冷静さを取り戻したようだ。

カズはその様子を見て、ニヤリと口の端を吊り上げる。

「ならウチも名乗るとしよか！ ランサーのサーヴァント、

古武術『茨木流』^{イハラキ} 継承者、『茨木和那』や！ 訳あつて普段は『大江』^{ダイクスピア} って名乗つとるけどな！ 変身！ 『漆黒の槍騎士』！！」

叫ぶと同時にカズの全身が黒いパウードスーツに覆われる。

頭全体を覆うフルフェイスのヘルメット、身体全体を覆うボディスーツに身体各所をガードする、肩部が大きく張り出した軽鎧のようなアーマーという出で立ちだ。

ただし暗夜のためなのか、ヘルメットのバイザー部分に色はなく透明で両方の目が見えている。

……あれ、おかしいな？

確か夜でもバイザーには色が入ってたような……？

「ほう……イレギュラーが着ていた宝具と似てるが、少し感じが違うな。大方防御専門の鎧なんだろ？ それは」

「まあそやな。ウチはあの格好のままやと、どうしても防御力が低いままなんよ。そもそも普段着のまま戦闘とか、アホらしいやろ？ だからこんな着込む訳なんやけど、その代わりコイツは16インチの砲弾喰らうても破壊されん特別製や！ これと比べたらこちらの鎧なんて濡れた障子紙みたいなモンやで！ それに仮にもウチの宝具なんやしな！」

「そうかよ、ならテメエの実力込みで確かめさせて貰うぜ！ おら
ああっ！！！」

戦闘の準備が整ったと見るや、ランサーは先手必勝とばかりに最速の踏み込みでカズの間合いに侵入してくる。

だが。

「 ツ！！！」

「ツ！？」

間合いに入るまであと少し、というところで僅かにランサーのスピ
ードが落ちた。

というより、カズの間合いに踏み込むのを急に躊躇った、といった
方が正確か。

しかし如何に英霊とはいえ、あらゆるものに等しく働く慣性の法則
からは逃れられない。

急制動も間に合わず、ランサーは僅かな隙を携えてカズの槍の領域
に一步踏み込んでしまう。

「はあっ！！」

そしてそれを見逃すカズではない。

機先を制したカズは目にも止まらない速さで刺突を繰り返す。

『グデイツダイ』。

原型となった槍の高速二段刺突からさらにそれを昇華させた、カズ
お得意の神速の三段刺突だ。

狙いは眉間・喉頭・鳩尾の三カ所。

まともに喰らえばランサーといえども即死は免れない。

「ぬ……っ！」

だがランサーはそれを凌いだ。

槍を器用に操り、瞬時に攻撃の矛先を見切って逸らす。

それと同時に即座にバックステップ。

カズに対してひとまず距離を置いた。

「……テメエ、いったい何しやがった？」

「別に何もしとらんよ、ただ睨んだだけや。そやけどあの状況で『グディツダイ』をカンペキに凌がれるとは思わんかったわ。もっとも、喰らうとったらそれはそれで面白いけどな」

「……………」

ランサーの疑問の声には答えず、獰猛な笑みを浮かべながらランサーの動きを褒めるカズ。

ランサーはいかにも納得がいつてなさそうな表情でカズを睨みつけている。

「成る程、そういう事か。“メンチを切る”ためにバイザーに色を入れなかったのか」

ランサーのその不信感丸出しの表情とカズの言葉から“ある事”に思い至り、納得がいった。

古武術の中には、時として普段なら何でもないような技術が奥義として扱われている事がある。

例を上げるなら重い物を持ち上げるコツ、なんかがそうだ。

そしてランサーがカズの間合いに踏み込もうとしたその瞬間、カズは古武術の技法を使ってランサーの動きを制限したのだ。

すなわち“メンチを切る”という技法で……それっぽく言うなら“居竦みの術”ってところかな？

鋭い眼力で相手の目にプレッシャーを叩きつける事で僅かながらも相手を怯ませ、動きを鈍くする。

もっともランサーほどの相手ならその効果は微々たるものだろうけど、戦いのレベルが高ければ高いほど僅かな違和感だけでも致命的だ。

ランサー自身の持つ神懸かり的な感覚と相まって動きは自然と鈍くなる。

ただし、これには相手の目と自分の目を合わせる事が必要だ。

だからカズは『漆黒の槍騎士』ダークスピアを展開した際、バイザー部分の色をなくしてランサーから自分の目が見えるようにしたのだ。

「次はこっちの番やな　　いくでえ！」

今度はカズの先手必勝。

独特の下段の構えでランサーに向かって呐喊していく。

だが、その普通なら有り得ない移動方法にランサーは大いに困惑した。

「んなっ!?!」

「驚いてるヒマはあらへんでエ！ おりゃあああっ!?!」

「ぐっ……くそっ、流れが読み辛い!」

カズはランサーに向かって“地面を滑るように”突撃した。

比喩じゃない、文字通りの意味で、だ。

足運びも体重移動も何もなく、まるで高いところから落下しているような慣性任せの移動法。

その常識外れの接近手段にランサーは面食らいながらも、卓絶した反射神経で繰り出される槍衾を見切って捌いていく。

カズが繰り出したのは助走をつけた槍の特攻五連撃、『ラスオブツエイ』。

より正確に言うならその一連の流れに、特殊な体捌きから放つ徹甲

弾さながらの貫通力を持った刺突『鎧貫き』を加えた『ラスオブツエィ』発展型。

ランサーはそれを見事に凌いでいるが、正直言ってかなりギリギリだ。

想定外の移動法のせいで攻撃前の予備動作がほとんどなかったので見極めが付かずに初動への対処が遅れたのだ。

加えてメンチを切られた事による動きの鈍さと初見の技である事、さらにカズの技量も相まって対処難易度は急角度で跳ね上がっている筈なのに、それでも凌ぐ辺りは流石槍の英霊だ。

そして最後の五撃目、沈んだ体勢からの勢いと回転を付けた右薙を槍の柄で受け止めたランサーとカズが鏖競り合う。

「テメエ、あの移動法はなんだ！？ まるで飛ぶように動きやがって……俺でもあんな動きは出来ねえぞ！ 魔術でも使ってるってのか！？」

「禁則事項や……と言いたいところやけど、ま、ヒントだけはあげとこか。ウチは厳密には“空を飛ぶ”事は出来ん。せやけど“落ちる”事は出来るんや。さっきのはその応用やな」

「……どういう意味だ！？」

「“ヒント”言ったやる？ 後は自分で考ええ。そんな余裕があればの話やけど なっ！」

「むっ！？」

やり取りの最中、突然カズが槍から右手を離し、ランサーの左肩目掛けて掴みかかる。

ランサーは咄嗟にそれを察知し、体勢を僅かにズラす事で回避したがカズは右手を蛇のようにくねらせ、今度は人体急所の水月目掛けて突き入れる。

「ちいっ！」

舌打ちをしたランサーは槍から左手を離し、右腕を迎撃すると左脚を軸に蹴りを繰り出す。

カズはそれを察知すると高くジャンプして蹴りを回避し、身体を捻ってそのままランサーの背後へと着地。

再度ランサーへと突撃し、互いに刺突の応酬へと突入する。

「ランサー槍使いの攻撃手段が槍だけと思わん事や！ “下手な先入観は命取り”！ そんな戦いの常識やって知ってるやる！？ イバラキ流、ナメたらあかんで！！」

「ハン、女だてらに想像以上の腕してやがるな！ まさか組み合った途端に関節と内臓を潰しにくるとは思わなかったぜ！ もしかしたらスカサハとも鬪り合えるんじゃないやねえか！？」

「初見でそれを見切るアンタもアンタやけどなああ！ 『クー・フリリン』……！」

高揚していく精神のまま、言葉をぶつけあう二人。

カズの槍が、ランサーの槍が互いに刺突をいなし、薙ぎを逸らし、払いを崩す。

二振りの紅の魔槍は互いが触れ合う度に火花を散らし、獲物を襲う肉食獣の如き笑みを浮かべあう二人を照らし出す。

「ちっ……ラチがあかんか。なら　これはどうやっ！」

数十合目の刺突を渾身の力で弾き返したカズは、舌打ちをひとつ漏らすと徐に姿勢を低くし、ランサーの頭上目掛けて跳び上がる。

そしてアクロバティックな動きで体勢を維持しつつ、ランサーの真上から馬上の騎兵が地面の敵兵に向かって突き下ろすように槍を繰り出した。

「ハッ、喰らうかよっ！」

だがほぼ死角から放たれたにも拘らず、ランサーはそれを瞬時に見切って槍を合わせ、弾く。

そして重力に従い、落ちてきたところを狙うために身構えるがカズの動きはその予想を裏切った。

「まだ終わりやないでえ！」

カズの身体が落下運動に入ろうとした次の瞬間、クンと空中で跳ねるように飛び上がった。

そしてランサーを中心として円を描くようにグルリと旋回し、ランサーの背後上空に回り込むと再び槍を突き下ろす。

「なにっ!?!」

ランサー
槍使いらしからぬその戦法にランサーは一瞬目を見開くが、瞬時に動揺を意思の力で封殺すると腰を落とし、右脚を軸に身体を捻って向かってくる槍を迎撃し凌ぐ。

しかし今度はまた別の方向から槍が瞬時に繰り出される。

カズは槍を弾かれると同時に再び円運動で旋回し、新たな死角に回り込んだのだ。

「……………ッ！」

ランサーは超反応でそれにも対応するも、苦々しげに口元を歪めている。

それも当然だろう。

槍使いランサーの本来の主戦場は言うまでもなく地上。

そこでこそ槍の威力は十全に発揮されるし、現代でアサルトライフルが普及するまでの間、銃剣等に形が変われど槍はずっと地上での主力武器として君臨してきた。

刀や剣に勝る“長さ”の恩恵による広範な間合いを利用して縦と横、二次元の空間を制する事が出来たからだ。

だからこそ、槍使いランサーの最も対処の苦手な場所と言える頭上を取られるというのは相当キツイ筈。

そもそも槍というのは、作られた当初から対空戦など想定していない。

元々二次元だった槍同士の戦闘にさらにもう一次元、「高さ」を加えた三次元の戦闘をカズは仕掛けているのだ。

ランサーの槍の技量でも、流石にこの迎撃には骨が折れるだろう。
ランサーにとってみればある種の侮辱とも映っているかもしれないが、生憎そんな事を言っていられる状況でもない。

少しでも気を緩めれば確実に頭蓋に穴が開く。

そうならば如何にランサーといえどもひとたまりもなく絶命だ。

「うーん……やっぱり使いようによっては反則だな、あの『超能力』」

ボンヤリと霞む頭でそんな事を考えつつ、深呼吸しながら状況を見守る。

（おっと。あぶないあぶない、意識が飛びかけた）

ふう……っ、これ以上は……厳しいな。

早めに決着をつけてくれ……。

side ランサー

「そろそろ、どうしたあ！？ 動きが鈍つとるでエ！？」

「ぬっ……ぐっ！」

真上から女特有の高い、しかし感情の昂った声が響いてくる。

しかし答えている余裕はない。

あの妙な移動法から、もしかしたらこんな事も出来るだろうとは思っていたが、実際にやられる身としてはたまったものではない。

地上での迎撃は慣れている……というより元々俺の動けるフィールドはそこしかない。

だがヤツは俺の頭上から槍で攻撃を仕掛けてくる。

そもそも空中……それもほぼ真上からの敵の攻撃を迎撃するなど、地上でのそれと比べたら圧倒的に経験が少ない。

加えて槍の攻撃は刺突が中心だ。

攻撃が“線”ではなく“点”。

これ程見切り辛く、捌き辛いものもない。

おまけに……。

「くそっ……、ッ!? なんだ!?!」

「ハハッ、なんやビミョーにフラついとるなあ? ウチからは槍に振り回されとるように見えるんやけど。修行が足りひんのとちゃうか!?!」

「ぬかせ!」

何やら含みのありそうな物言いの直後に、背後上空から後頭部目掛けて放たれた薙ぎを頭の後ろに差し入れた槍で受け止める。

そして体勢を立て直そうと槍から片手を離し、身体の前へ持ってこようとするが、

「ッ!? ……またか、どうなってやがる!?!」

何故か槍が手の中でヒクヒクとこちらとは違う方向へ動くようにするのだ。

いや、とこしよ……。

（おかしい……なんだこれは？ まるでコイツだけ物理法則が“真逆”で働いてるような……そんな感じた）

さっきから槍を上に向けようとすれば勢いをつけ過ぎた訳でもないのにスツポ抜けそうになるし、右に動かそうとすればグラリと左に傾く。

扱いは慣れている筈の槍のコントロールがどういふ訳が定まらない。

お陰で防御や迎撃にブレが生じ、結果としてギリギリのタイミングでの対処しか出来なくなっている。

（またアイツがなにかしてるのか？ ……まったく、主がクセ者ならサーヴァントもってか？）

これだけはハッキリ言える。

槍の腕自体は俺の方が上だ。

サーヴァント特有の気配がないせいで、令呪の制約は働いておらず現在は100%の力を振るえている。

実際、このまま槍のみでまともに闘り合えば手古摺る上に負傷もするだろうが最終的には俺が勝つ。

これは身臍屑でも何でもなく、客観的な戦力分析から導き出した純

然たる事実だ。

だがそれはアイツも解っているんだろう。

だからこそこんな小細工を仕掛けて来ている（証拠がない以上、そうだとはいハッキリと言えないが）。

そのお陰で地力の差はほぼなくなったと言っていい。

いや、むしろ制空権を掌握された事でこちらの死角を押さえられた以上、向こうが俄然有利な状況だ。

（ちっ、そろそろこの攻防もキツくなってきたな……体力的にはともかく、精神力の消耗が半端じゃない）

真上から連続で繰り出される刺突・薙ぎ・払いの嵐を、槍を合わせ逸らし続けるこの作業。

鎬を削ると同時に集中力もガリガリと削られていく。

現状では防戦に徹するしかなく、空を飛ぶ術のない俺は攻勢に転ずることも出来ない。

だが向こうも向こうでこちらに未だ決定打を与えられず、攻めあぐねている。

どちらもジリ貧の状況だ。

この状況……均衡を打開出来た者が勝者となるのは明白。

そしてその“鍵”となるのは……。

「ッ！ 仕掛けるなら……！こっつ！ はあああっ！！」

「！？ くっ！」

何事かの呟きが聞こえてきたと同時に、ヤツは俺の頭上でクルリと縦に一回転し、その勢いを乗せた渾身の打ち下ろしを放ってきた。

そのあまりの速さに回避が間に合わず、思わず槍を横にかざして受け止めようとしたが、それが失敗だった。

かざした瞬間、槍がヒクリと上方向に引っ張られるような感触がして、結果腕に込めた力が分散する。

「ぬっ……くおっ！？」

女ながらに俺よりも背が高いヤツは、俺とほぼ同等のパワーがある。

さらにそこに回転の勢いを加えた痛烈な打撃。

力を上手く槍に乗せられなかった俺がそれを受け止める事は出来ず、体勢が思い切り崩されてしまった。

「……………くっ！」

咄嗟に受けた勢いそのままその場に転がって衝撃を逃がす。

そして受け身を取り、起き上がると構え直して視線を上げるが、

「……………！？ いねえ！？ どこに行きやがった！？」

いつの間にかヤツの姿が消えていた。

気配を探ろうとするが、さっきの衝撃がまだ抜けきっていないため正確に探れない。

さっきの隙にイレギュラーのところに行ったのかと思いきや、そこらを見ると、イレギュラーは木に寄りかかって蒼白な顔を俯けながら、一人座り込んでいる。

（違うか……………ならどこに）」どこ見とんねん！？　ここやあああああ
っ！！」「！？」

唐突にヤツの叫びが響き、周囲の木々に木霊した。

慌ててその声の発信源を見遣る。

声は先程の位置よりも遙か上

高度数十mの上空だった。

そこから凄まじいスピードで黒いパワードスーツがこちらに向かって急降下してきている。

(ちっ、さっきの間にあそこまで飛んだのか……しかし何故今さらそんな事を……、ん?)

目を細め、油断せず構えを取ったままジッと上空を見上げていると、ふとヤツの様子に違和感を覚えた。

こちらに向かって数十mのフリーフォール敢行中のヤツは今、右手に槍を掴んでいる。

だがその掴み方がおかしい。

槍を逆手に握っているのだ。

(逆手……、ッ!? まさか!?)

逆手に持った槍、数十mの直滑降。

このたった二点の事象、普通ならばこれだけでは何が何だか解りは

しないだろう。

だがまったく同一の宝具、紅の魔槍を担う俺にとってはそれで十分、一瞬で全てが頭の中で繋がった。

単純にして明快なひとつの答えが導き出され、そして理解した。

ヤツが既にこの戦いの“チェックメイト”に入っているのだと。

そして悟った。

最早俺には何一つとして、対抗し得る手段が残されていないのだと。

side 小波

「やっと気づいたようやな！ けどもう遅い！ 事ここに至って採れる手段は残ってへんやろ！」

遙か天空から響くカズの雄叫び。

その声は勝利の確信に満ち溢れている。

そしてランサーの顔には、カズのそれとは正反対の確信がハッキリと浮かんでいた。

（ そうか、“あれ”を解放するためにあそこまで行ったのか）

声が答えを導き出し、カズの狙いが瞬時に読めた。

カズの宝具は彼女の“二つ名”にちなんで、ひとつは自前、もうひとつは『オール・イン・ワン全てに通ずる物』内のデータベースから選出された物だ。

その二つ名のひとつが『ダークスピア』。

槍を片手に、黒いパワードスーツを身に纏って戦う姿からそう呼ばれるようになった。

今カズが身に付けているパワードスーツ、『ダークスピア漆黒の槍騎士』がそれだ。

そしてカズの二つ名はもうひとつある。

『ダークスピア』と呼ばれるようになる以前、呼ばれていた二つ名が。

「いくでえええええー！ー！ー！ー！！！」

気合を込めた咆哮を發しカズは両腕をクロスさせ、さらに両脚を引き寄せ身体を縮める。

そしてその反動で身体を大きく弓形に逸らすと、右手に持った槍を大きく振りかぶった。

伝説に曰く、敵に放たれたその槍は千の鏃を撒き散らしたという。

「^{ゲイ}突き穿つ

」

彼女、大江……いや、茨木和那のもうひとつの二つ名は

『^{ニア・ロケット}本槍』。

『^{スピア}千

ある意味では、これ以上なく彼女に相応しいと言える。

あの魔槍が宝具として選出されたのは、もしかしたら必然だったのかも知れない。

「
死翔^{ホルク}の槍ウウー……ッ!!!!」

大地を揺るがしかなない程の大音声と共に真名が紡がれ、全身全霊を込めて紅の魔槍が下方のランサー目掛けて投擲される。

大気を切り裂かんばかりの速度で放たれた槍は空間が軋むほどの禍々しい存在感を放ち、流星のように落下していく。

そして地上まで、正確には地上にいるランサーまで残り10mを切ったところで僅かに槍がブレ始める。

次の瞬間、一本だった槍が数十数百の槍に分裂し、その全てがランサーを目標として一気に降り注いだ。

「うおおおおおおあー……ッ!!!!」

ランサーの断末魔の叫びが着弾の轟音に掻き消され、凄まじい衝撃波が周囲の木々を吹き飛ばし天高く噴き上がった爆炎が夜空を紅く染め上げる。

ほんの僅かの咆哮の余韻のみを残し、ランサーの姿は眩い閃光の中へと消え去っていった。

「……あれが『ゲイ・ボルク』の本当の力か。恐ろしい破壊力だな……」

ある程度分かっていたとはいえ、実際に見ると思わずゾワリと背筋に悪寒が走る。

『突ゲイ・ボルクき穿ゲイ・ボルクつ死翔の槍』は、以前ランサーがセイバーに対して使用しかけた（と後で聞いた）『刺ゲイ・ボルクし穿ゲイ・ボルクつ死棘の槍』とは違い、心臓命中よりも破壊力を重視した使用法だ。

『ゲイ・ボルク』は元々投槍だから使用法としてはこっちの方が正しいし、あれはランサーが独自に編み出した使用法のようなから力ズが使う事は出来ない。

ただしこっちは問題なく使用出来るし、燃費は後者より悪いがその威力は見ての通りだ。

しかも破壊力重視ながらも『心臓命中』の呪いは健在で、たとえばーゲットが射線上から回避しても地の果てまで追いかけていくという、まさに『ホーミング機能付核弾頭』だ。

放たれれば文字通り“一撃必殺”。

肉片の一部でも残れば儲け物、といったところか
わっ!?!? っと、う

「え!?!? ちょ、あああああっ!」

急に身体が何かに引き寄せられるように宙に浮き、自分の意思とは関係なしに頭からどこかへと吹っ飛んでいく。

そして次の瞬間、俺の身体は周りの武骨な固い木に……ではなくほんのりと暖かく、それでいて柔らかいなにかに優しく受け止められる。

「わぶっ!?!? ……うっ、ん?」

何かに埋もれた顔を上に向けるとそこにあっただのは……カズの顔だった。

カズは『ダークスピア漆黒の槍騎士』も『ゲイ・ボルク』も引っ込め、最初の制服姿に戻っている。

ああ、戦闘が終わったから宝具を解いたのか。

「カ、カズ!?!? まったく、驚かすなよ。ただでさえ身体がキツイ

つていうのに、いきなりコレはないだろ？」

「いや、スマンスマン。決着もついたし、善は急げや思てな。でも役得やる？」 『お姫様抱っこ』されとるんやから」

「いや、普通は逆だろ……とはいえ、体勢的にこれが一番楽と言えば楽だからいいけど」

限界が近かったしな、気を張って堪えるのも一苦勞だった。

深く脱力し、抱え上げてくれているカズに完全に身を委ねる。

奇しくもセイバーに運ばれた際の士郎君と同じ体勢。

男として少し恥ずかしいが状況的に仕方がないから、別に文句はないけど……なんでカズは心なしか嬉しそうなんだろう？

「なんや、面白みのない感想やなあ。こんな美人に抱かれとるんやで？ もうちよつとこう、なんかあるやろ？」 『やっぱり女のカラダは気持ちいいなあ』とか」

「誤解を招くような言い方をするな！ それと自分で美人って言っ
な！……ふう。まあ、それはともかく お前、ランサー
殺してないだろ？」

「あ、バレてたん？」

「気配が消えてないからな」

タハハと苦笑いするカズから視線を外し、『ゲイ・ホルク突き穿つ死翔の槍』の爆心地へと顎をしゃくる。

カズもそちらへ目を移す。

周辺の木々は粗方吹き飛ばされ、またはなぎ倒されほぼ更地同然の状態だ。

そしてその中心にはまるで隕石が落下したかのような巨大なクレーターが形成され、いまだもうもうと土埃が舞い上がっている。

「う……が……っ、ぐう……」

と、クレーターの中から唸るような低い呻き声が聞こえ、ついでズルズルと何かが這いずるようにクレーターから出て来た。

息も絶え絶えといった体で、全身に傷を負いながらも眼光は衰えていない。

「はあ……はあ……うぐっ！」

自分の心臓の位置を左手で押さえながら、ヨロヨロと槍を杖にして立ち上がったその男
ランサー。

『ゲイ・ボルク突き穿つ死翔の槍』の直撃をその身に受けながらも、アイツは生きていた。

ランサーは表情を怒りに染めながらも、瞳にどこか納得がいかないような光を宿している。

『ゲイ・ボルク』の特性上、普通なら確実に心臓を抉られ、ついでに爆発で木っ端微塵に消し飛んでいた筈。

自分の宝具だ、ランサーもそれは解っている筈。

だからこそ、この表情なのだろう。

「な、何故殺さなかった……、いや、なんで死んでねえんだ!？」

口元から流れる血の雫もそのままに、ランサーは疑念を口にす。

隠す事は許さん、と言わんばかりの気迫のこもった雄叫びだ。

カズはそれを受けてキョト、と一瞬目を見開いた後、カラカラと笑いながらなんでもない事のように答えを口にした。

「ウチは“殺し”は好かん！　せやから『不殺の誓い』を立てとらんや。まあ、アンタに解りやすく例えるなら一種の『誓約』^{ゲッシュ}みたいなモンやな。それで『突き穿つ死翔の槍』^{ゲイ・ボルク}をダメージのみまで抑え込んだんや。ちなみにコレのスイッチのON・OFFは任意で可能やで」

つまりこういう事だ。

『ゲイ・ボルク』という宝具はその特性上、発動すれば対象者はセイバーみたいに余程の幸運を持っているか、呪いを薄めるほどの強力な加護を持っているかしない限りは確実に心臓を貫かれる。

これで生きていられるのはバーサーカーみたいな不死関係の能力・スキルを持つてるヤツくらい。

つまり『ゲイ・ボルク』の力を解放すればどうしても致死性の攻撃になってしまうのだ。

しかし、カズはそれをひっくり返す事が出来る。

カズは決して人を殺す事のない、“殺し”が常套手段となる聖杯戦争では絶対的に不要とも言える特異な“スキル”を持っている。

それが『不殺の誓い』。

カズ自身が、“殺し”が嫌いだったために立てたものだ。

そのお陰で『ゲイ・ボルク』の呪いや威力をそのままに、たとえオーバーキルでも相手を殺す事なくダメージのみを与える事が出来る。

ただし、死ぬ事がない代わりにダメージは死ぬほど辛いものになるのだが。

何しろ『心臓を貫く』という呪いは健在なのだから、死なないにしても槍に心臓を貫かれる“苦痛”は確実に味わう事になる。

加えて“喰らって問題なし”と判断され得るダメージは容赦なく喰らうので、結果として辛うじて生きている“瀕死”の状態まで追い込まれるのだ。

まさしく『キツチリ半殺し』状態。

ある意味殺すよりタチが悪い……と言えなくもない、あの満身創痍のランサーを見る限りでは。

苦痛が一瞬で済む即死か、死ぬほど辛い激痛が絶え間なく襲ってくる瀕死……果たしてどっちが幸せなのか。

「ふ、『不殺の誓い』、だと……！？ 『ゲイ・ボルク』の呪いを上回る程のか!？」

「あゝ、厳密にはちょっと違うで？ 『ゲイ・ボルク』の呪いはそのままや、実際に一度心臓に槍は刺さつとる。せやけどそれだと確実に死んでまうから、そこら辺をこのスキルが補正しとるんよ。だから心臓自体は傷ついてへん筈や。ただし、痛みや死なへん程度のダメージはそのまま残るけどな。今、アンタが大ケガだらけで心臓押さえとるんがその証拠や」

さっぱりとした気持ちのいい笑みを浮かべながら解説するカズ。

ランサーはそれでも納得がいていないといった表情で、さらに言葉が続ける。

「……なぜそれを俺に対して持ち出してきた？」

「死なすんが惜しい思ったからや！ 純粹な槍の腕ではウチ以上の使い手やしな。そない勿体ない事、誰がするかっちゅうねん。それにウチは、人殺すんはあんまり好きやないねん。殺す必要があるんやったらまた別やけどな」

まるでセイバーを逃がした小次郎と同じような事を言うカズに、ランサーは一瞬ポカンとした後、糸が切れた人形のようにドサリとその場に腰を下ろした。

その脱力しきった姿からは殺気が消え、顔には苦笑のような笑みが浮かんでいる。

「……ハ、そうかい。コイツは一本取られたな。いいぜ、この場は俺の負けだ。“今は”この屈辱に甘んじてやらあ。一度でも俺に土をつけたんだ、誇っていいぜ」

「そら身に余る光栄やな！ ……でも“今は”なんやろ？」

「当たり前だ、次はこうはいかねえ……と言っても、聖杯戦争中だしな。“次”があるかどうかは正直なところ、判らねえが……俺が借りを返すまで、死ぬんじゃねえぞ」

「それはウチやのうて小波に言うべきセリフやで？ ま、“次”を楽しみにしとくわ。ならこの辺でウチらは行かせてもらうで。アンタも動けるようやったら早よ離脱せえ。テリトリー荒らされたキヤスターが腹いせに何かしてくるとも限らんしな」

「いや、やった張本人がそれを言うか……？」

カズの言葉に思わずツッコんでしまう。

厳密には俺も主に自然的損害を出したが、カズのそれと比べれば雲泥の差だ。

明らかに『ゲイ・ボルク突き穿つ死翔の槍』が出した損害の方が大きい。

クレーターは流石にやり過ぎだろう。

ツッコまれたカズはバツが悪そうに苦笑いをして、チロリと可愛らしく舌を出した。

ランサーはそれを無視して答えを口にする。

「死ななかつたとはいえ、「ゲイ・ボルク『突き穿つ死翔の槍』の直撃を受けたからな。動けるまでにはもう少しかかりそうだ。ま、仮に襲われてもなんとかするさ」

「そか。アンタなら今の状態でもまだ戦えそうやしな。もうまともにしやべれるくらいに回復しとるし……」

「『クランの猛犬』は伊達じゃねえんだよ……っと、最後にひとつ、いいか？」

「なんや？ スリーサイズは教えへんで？」

小波は知つとるけど、と相変わらず笑顔である意味とんでもない冗談を飛ばすカズ。

つて、え！？ いやいやいやいや、知らないぞそんな事！？

……でも背が高い分、スタイルはいいんだよな……抱えられた状態だとよく解る……ハッ！？

つとと、イカンイカン、思考が逸れた。

とりあえず……無視に徹しよう、うん。

「そうじゃねえよ……あの“禁則事項”の答えを知りたいだけだ。ヒントから、空を飛んでる訳じゃないというのは解ったが……やっぱり答えは解らねえ」

カズの冗談を右から左に流しつつ、ランサーは「教えてくれや」とでも言いたげな視線をカズに向ける。

カズも戦闘が終わったから教える事に抵抗はなくなったのか、納得したように軽く頷くとアツサリと解答を口にした。

「ああ、あれは『重力制御』つちゆう“超能力”の一種や。簡単に言えば自分が触れている物、あるいは自分自身なんかにかかる重力の方向を自在に変更出来る能力やな。ちなみにこれは魔術やないであくまで“超能力”やからな。その証拠に魔力は感じられんかったやろ？」

「……なに？」

ポカン、とした表情を晒して驚愕の意を表すランサー。

余程意外な答えだったらしい。

そもそも重力の方向を操る力など、ランサー槍使いであるカズが持つにしてはあまりに突拍子もない力だろう。

しかしこの能力は使い方次第で恐ろしいほどに“化ける”。

何しろ実際に山（大きさとしては丘レベルだったが）一つ持ち上げてたくらいだし、聞いた話では海上の戦艦も素手で放り投げたらしい。

カズがこの能力に目覚めていなかったら、“あの世界の裏側”ではあつという間に闇から闇へ葬り去られていただろう。

まあ、そもそも目覚めていなかったら“裏側”に入り込む事自体なかったんだけど。

ちなみにカズの『重力制御』は正確には、『自らと触れている物、そして自らを中心とした半径5m以内の物体の重力の方向を自在に操る』というものだ。

これを利用して、ランサーの槍の重力の方向を逐一変える事でランサーの動きを制限していたのだ。

ついでに言うなら俺をいきなり自分の方に引き寄せたのもこれの応用だ。

「……はあん、成る程な。“落ちる事は出来る”っていうのはそういう事か。その能力で空中から“落ちて”宝具の解放に必要な助走距離も稼いだのか。で、俺の槍にもそれで細工を……」

納得がいったのか、ランサーはうんうんと頭を上下させる。

どこか力なさげなのはまだダメージが抜けきっていないせいか。

「ま、その辺は想像に任せるわ。せやけど宝具に関してはその通りや。『突き穿つ死翔の槍』^{グレイ・ホルク}の解放にはどうしても助走が必要やからな」

「ああ……さて、そろそろ行った方がいいぜ。イレギュラーは俺以上に余裕がない筈だからな。失血死寸前なんだろう？ それにしちや大概しぶといがな」

「あゝ！ そやった！ スマン小波！」

「……謝るのはいいから、出来れば早くしてくれと助かる」

カズに抱えられている事で精神的余裕が生まれ、結果的に気を張り続ける事が難しくなっている。

しつこいようだが、身体は既に限界を超えているのだ。

最低限の処置はしたが、絶対的に血が足りていない。

早く何らかの方法で血の量を元に戻さない限りは、確実に死ぬるといふ自信がある。

……イヤな自信だなあ。

「あいよ！ ならいくでえ！ しっかり掴まっときゃ！」

カズはそう言うと俺を抱える腕に力を込め、膝を軽く曲げると一気に跳躍。

即座にカズが重力の方向を斜め上へと変更し、俺達は空中へと“落ちていく”。

視線を地面に落とすと、「あーあ、しっかし負けを認めたのはいつたいいつ以来かねえ？」とぼやきながらもどこか清々しい表情で、その場に寝っ転がるランサーの姿が見えた。

「どっちの方向や？」

「このまま真っ直ぐでいい、少ししたら大きい武家屋敷が見えてくる筈だから。そこが衛宮邸だ」

「あいよ。小波はしばらく休んどき。正直なトコ、こうして話すんもツライんやろ？ でも寝るんやないで。そのまま永遠の眠りに…
…なんてシヤレにならんからな」

「解ってる……ありがとう」

。礼を言い、カズの肩を枕にして目を閉じる（別に寝るわけじゃない）
地上から数十m上空の風を切る感触を全身で感じつつ、柳洞寺で起こった諸々の事を思い返す。

（……アサシンの佐々木小次郎に、超一流の魔術師キャスターとの戦い。いきなり土郎君に襲いかかったアーチャーとやり合って、強襲してきたランサーに奥の手を使った。一日……いや、たった数時間だけでこれだけの激動が起こるとはなあ……）

改めてこの戦争の厄介さを噛み締める。

そしてこの先、これ以上の困難がまだまだいくつもあるんだろうなと俺の勘が切実に訴えていた……。

第二十四夜 「二人の槍兵と野球少年（後編）」（後書き）

筋力・技術・素早さ・変化球が上がった！！

ステータスが更新されました。

サーヴァント“ランサー”が登録されました。

「ランサー兄貴はこんなに弱くない！！」と思う方もいらっしゃると思いますが、結局こうなりました。

というか、互いの作品の強さのバランスを考えるのが難しい……。

Fate勢も大概バケモノじみた強さを持っていますが、パワポケ勢は“いろんな意味で”バケモノじみてますし……というか、ぶっ飛んでますし（勿論いい意味で）。

それにしても……ギャグが少ない（泣）。

第二十五夜 「深夜会議と野球少年（その1）」（前書き）

感想に「文字数多すぎ」というご指摘がありましたので、一話をちよつと短くしてみました。

代わりに展開が遅くなっちゃってますけど……本末転倒かなあ？

第二十五夜 「深夜会議と野球少年（その1）」

side 小波

「小波、ここでええんか？」

カズの声を含図に目を開ける。

建物が視界の下に見えたから、まだ上空にいるようだ。

真下に視線を向けると、古めかしい武家屋敷の瓦屋根が見えた。

どうやら着いたみたいだ。

「ああ、ここだ。あの正面に見えてる玄関に向かってくれ」

「あいよ……ん？ なあ、門の前に誰かおるで？」

「えっ？」

そう言われて玄関の門の方に目をやると、確かに玄関の前に人影のようなものが見て取れた。

ただ、背丈がやけに小さい。

「あれは……セイバーか？」

「うーん、見たところ出迎えみたいやな……ウチは引っ込んだ方がええんやろか？」

控えめな声でカズが提案してくる。

俺の力がバレるのに気を遣っての判断だろう。

「あ……いや、いい。遅かれ早かれ、解る事だしな。いい機会だから、ある程度説明しておこうと思う。だからこのまま行ってくれ」

この数時間でいろいろな事が起きすぎた。

早急に体調を元に戻すと同時に、これからの事を話し合わないといけない。

アーチャーがあの後どうなったかも気になるしな。

「……了解や。ほな、降りるで」

カズはほんの少し間を開けた後にひとつ頷くと、俺を抱える腕に僅かに力を込め、門前へと向かって落下し始めた。

すると眼下のセイバーは、何かがちらに接近している事に気づいたのか視線を上へと向け、即座に臨戦態勢へと移行する。

姿を見るに、銀の鎧は始めから着込んでいたようだ……おそらく俺の帰りを待つと共に門番の役割も兼任していたんだろう。

手には何も持っていないように見えるが、腕の所作からその手には不可視の剣が握られている事が解る。

セイバーはカズが着地すると同時に、警戒心と殺気を露わにして剣を正眼に構えた。

しかしカズに抱えられた血みどろの俺を見るとギョツと目を丸くして殺気を引っ込め、すぐさまこちらに駆け寄って来た。

「コナミ！ いったいどうしたのですか！？ 顔が真っ青ではないですか！ それにその女性は……」

「ただいま、セイバー。ちょっといろいろあってね……血が全然足りてないんだ。悪いけど、話は治療の後でな。リンはまだ起きてるんだろう？」

「は、はい……」

セイバーは戸惑いと疑問が抜け切らない表情だったが、素直にこちらの言葉に従ってくれた。

カズから降りた後自力で立って門をくぐり抜け、セイバーを先頭にガラガラと玄関の扉を開けると上がりかまちに土郎君が立っていた。

「あつ、小波が戻って来たのかセイバー……って、うわつ、デカッ!? 誰だ!?!」

「初対面でイキナリ人の事デカイって、失礼なやつちなあ。ウチかて一応気にしとるんよ……アイタっ!?!」

『ガッン!』と大きな音がしてカズが額を抑えてその場に蹲る。

玄関の扉よりカズの上背が僅かに勝っていたために、思い切り頭をぶつけたのだ。

土郎君に自分が気にしている事を言われて若干へこんでいたのも、マイナスに働いたのだろう。

「す、すまん。大丈夫か……って、その声、女……!?!」

まさか女だと思ってなかったのか、土郎君の目が丸くなっている。

額を押さえながら顔を上げたカズは、瞳に涙をにじませながら何やら恨みがましげに土郎君を見据え、「うっっ」と唸っていた。

そういえば教室に入る時もよくぶつけてたな……急いでる時とか特に。

「なんや、気づいとらんかったんかい!? 普通服装で解るやろ!? ブレザーにスカート履いとる男がおるかい! ドコの変態や! いくらウチでも終いには怒るで!?!」

「い、いや悪い! 小波の陰になって解らなかつたから……つて そうだ小波! 大丈夫だったのか……おい! 何だよその腕!? 血塗れじゃないか! それに顔色も悪いし……!」

「ゴメン、ちょっと静かにしてくれ……限界が近いんだ。それに近所迷惑……夜中なんだし」

玄関でギャーギャー騒いでいると、奥の方から足音が近づいてきた。やがて足音が止み、廊下の角から何かが顔を出す。

それは何やら不機嫌そうな顔をしたリンだった。

「何だかうるさいわね……あら小波、帰って来たの……ふうーん、

女連れで。この非常事態に、どこで引っかけて来たのかしら？」

俺が戻って来たと認識するや否や、俺の隣にいたカズに視線を移すとニヤリ、と意地の悪い笑みを浮かべる。

……っておい！

「人を女たらしみたいに言うな！

うう、眩暈が……」

「あながち間違っへんやんか」

いきなりの暴論に思わず反論するが、いきり立ったせいで立ち眩みを起こしてしまい、次の瞬間には膝に手をつけてへたり込む。

くそっ、さっさと何とかしないと……これ以上は粘れないぞ。

ちなみにいまだに涙目のカズが何を呟いたかはよく聞こえなかった。

だからなんと言ったかさっぱり解らない……ホントダヨ？

「……………」

脇から視線を感じたので振り向くと、右隣にいたセイバーがこちらをジッと見つめていた。

何故か視線の質が針みたいにチクチクとしたものだったが。

「セイバー、なんで俺を睨んでるんだ？」

「……いえ、別に何でもありません」

片膝立ちの姿勢のままセイバーに聞いてみるが、セイバーはそれだけ言っとフィツと視線を元に戻す。

表情は普段となんら変わりなかったが、どういつ訳か雰囲気微妙に苛立っているように感じた。

なんか戻って来てからずっとカズの方を見てたようだったけど……いきなり知らない人間と一緒に来ればそりゃ警戒もするかな？

「ニブチン……やっぱり女たらしやんか、トコトン罪作りなやつちやなあ」

カズがまたしても何かを呟いたようだが、今度のは鼓膜を震わせもしなかった。

「はい、これで大丈夫な筈よ。……しっかしまあ、サーヴァントが出血多量で死にそうになるなんてねえ。そんな事ってあるのかしら？」

「普通ならないでしょうね。しかしコナミは受肉したサーヴァントですし、肉体スペックも一般人並です。そういう事もあり得るのでしょう。しかし……止血を忘れていたとは、迂闊にも程があります。抜け目がないかと思えば、変なところで抜けていますね」

「うぐ……気をつけるよ。ま、まあ、それはいいとして……治療ありがとな、リン。助かった」

「別にいいわよ、このぐらい。……こっちはむしろ謝らなきゃならない立場なんだから」

リンはそうポツリと漏らすと口を閉ざし、無言になって俯く。

どうやら事のあらまは聞き及んでいるようで、アーチャーの暴走に相当責任を感じているようだ。

さっきまでは普段通りだと思ってたけど、結構無理してたんだな。

（うーん、そこまで責任を感じなくてもいいと思うんだけどなあ……

…)

血染めのユニフォームを衣装替えて着替えて居住まいを正し、何とはなしにポリポリと頭を搔きながらそんな事を考える。

あの後すぐ玄関から居間へと移動し、リンに自分の状況を伝えて何とかならないかと聞いてみたところ、手持ちの宝石と薬で何とかならそうだという事だったので治療を頼むと、申し訳なさそうな表情をしながらも引き受けてくれた。

しかし傷口を塞ぐ塗り薬はともかく、まさか宝石を丸飲みさせられるとは思ひもしなかった……もつとも、しっかり効果はあった訳なだけで。

どうやら造血作用を齎す宝石だったようで、飲み込んだ瞬間身体に巡る血の総量が増したのが解った。

お陰で大分気分が楽になった……もう大丈夫だろう。

あ、そういえば……。

「なあ、リン。アーチャーはどうしたんだ？ 気配を感じないし、まだ帰って来てないのか？」

「！」

ビクッ、と肩を震わせるリン。

膝に置いた両手が僅かに震えている。

うーむ……まさかここまでとは……。

「えっと……？」

「あーっと……俺が説明する。いいよな、遠坂」

普段のリンらしからぬ態度のリンを見かねたか、隣に座っていた土郎君が助け船を出す。

コクリ、とリンが頷いたのを見て、土郎君が口を開いた。

「あの後、何とか無事に家まで戻ってこれた。で、まだ起きていた遠坂に事情を説明したら、遠坂は血相変えてすぐに念話でアーチャーを呼び戻したんだ」

「その数十分後に、アーチャーはボロボロの姿で帰ってきました」

「ボロボロ……というか、一回帰って来たのか!？」

士郎君の言葉を継いだセイバーの説明にギョツとする。

よく帰って来れたもんだな……俺だったらまず合わせる顔がないからしばらく戻って来ないぞ。

「アーチャーには、「遠坂の言う事を聞け」っていう令呪が掛ってるらしくてな。強制力とまではいなくても、逆らうと身体が若干重くなるらしいんだ」

「あ……成る程。だからか」

それは帰って来ざるを得ないな。

下手に逆らうと動きが鈍くなるから、小次郎にやられるかもしれないし……何よりマスターがリンだしな。

無視なんてすれば後が怖い、何しろ“アカイアクマ”だ。

流石にへこんでいる今はこんなだけど。

「アーチャーが戻って来た時、私とシロウは一旦奥へ引っ込みました。その後、リンがアーチャーに何故救出に向かったシロウを救出先で殺そうとしたのかを聞いた但しでしたが、アーチャーは終始謝罪の言葉を口にするだけで、理由は終ぞ明かさなかつたそうです」

「あまりにもそればかりが続いたから、最終的に遠坂がキレてな。二つ目の令呪で「俺達に危害を加える事を禁ずる」って命令したんだ」

「令呪で!?　じゃあ、リンには令呪があとひとつしか残ってないのか!？」

「はい。その後、リンが回復と反省、隔離も兼ねてアーチャーをリンの家へと返しました。ですので現在、アーチャーはここにはいません」

「そうだったのか……でもよかったのかリン?　貴重な令呪を使っても。同盟をなかった事にすれば使わずに済んだんじゃ……!？」

そう言った途端、リンはピクリと反応し、徐に伏せていた頭を上げるとジロリと俺を睨みつけてきた。

妙に殺気を孕んだ視線に、一瞬たじろぐ。

そして。

「出来る訳ないでしょう!?　そもそもこれはわたしが提案した事なのよ!　それを自分の手落ちで反故にするなんて情けないマネ、死んでもやらないわよ!」

ドンッ、と足を踏み鳴らして立ち上がると、某放射能怪獣の咆哮もかくやという勢いでがーっ、とまくしたてるリン。

士郎君もセイバーも、リンの突然の豹変振りにポカンとしている。

「それともナニ!? アンタ達だけでバーサーカーを何とか出来る
とでもいうつもり!? いえ、バーサーカーだけじゃない、その
へっぴこ魔術師が誰かの助けなしにこの聖杯戦争を勝ち残れると
も!? 小波とセイバー二人ならともかく、士郎がいたんじゃ勝算
にプラスじゃなくてむしろマイナスを掛けるようなもんよ!？」

「お、落ち着けリン!? これ以上、士郎君の傷口を抉るような発
言をするな! 言いたい事は解ったから!」

はあーっはあーっ、と荒っぱく息を吐くリン。

その横で士郎君が膝を抱えて蹲り、「どーせ俺なんて、俺なんて…
…」とまるでこの世の終わりみたいな表情をしながら畳に『』の
字を書いていた。

背中には哀愁が漂い、吹けば簡単に飛ぶ灰のように真っ白に煤けて
いる。

「シ、シロウ……そう落ち込まないでください。リンも別段悪気が
あって、ああいう発言をした訳ではない筈ですし……」

セイバーが慌ててフォローに入るが、結局は『の』の字が『の』の記号に変わったただけだった。

(あーあ、手遅れだったか……)

思わず額を手で押さえ、天を仰ぐ。

まあそれはともかくとして、とりあえずはリンの事だ。

リンの主張を要約すると、つまりは「自分の管理不行き届きでこっちから言い出した同盟を破棄するくらいなら、令呪ひとつなど問題にならない」と、こういう事らしい。

義理堅いというか何というか……少なくとも『外道上等』がデフォルトのそこの魔術師とは、性質が全く違う。

良く言えば仲間や知り合いを放っておけない、一本芯の通ったお節介焼き。

悪く言えば弱みや弱者を切り捨てられない、甘さを持った人間。

……とことん魔術師っぽくない魔術師だな、士郎君とは別の意味で。

外道連中よりは好感が持てるのは確かだけだな。

「えっと……結局結論としてリンは今まで通り、俺達と一緒に行動するって事でいいのか？」

「当たり前でしょ！ 自分から進んで背負った荷物を途中で投げ出すようじゃ、遠坂の家名が泣くつてもものよ！」

「ハハ……そっか」

フンツ、と鼻息も荒く宣言するリンを見て自然と苦笑が漏れる。

どうにかこうにか、いつもの調子に戻ったようだ。

アーチャーに関しては疑問の残る点が多々あるが、せっかくリンが元に戻ったのだから言うのはやめておこう。

今言ったところで混乱を誘うだけだろうし……この雰囲気には水を差すのも、な。

士郎君もリンを慮ってか、アーチャーの事については特に何も言うていないようだ。

けど……いつかは問い質さなければならぬだろう。

リンではなく、アーチャー本人に。

貴様の存在で、少しは運命が変わったと思ったのだがな。結局は何も変わらないまま、衛宮士郎はいずれ決定的な過ちを犯す。そうなる前に、その芽を刈り取る。

柳洞寺の境内、アーチャーと剣を交えた際にアイツの口から漏れた言葉。

どこか悲痛に感じられる、喉の奥から絞り出すような声が思い出される。

怒りか諦念か……あるいは自嘲か、そんな仄暗い感情の響きがあので声には織り込まれていた。

何かに急きたてられるような真に迫った表情と、ある種の揺るぎ無い意思を秘めた眼光。

そして士郎君に対する、常軌を逸した妄執の念……それらが示す、あの言葉の真意を。

第二十五夜 「深夜会議と野球少年（その1）」（後書き）

『回復』が身に付いた！！

ステータスが更新されました。

第二十六夜 「深夜会議と野球少年（その2）」（前書き）

今回はギャグ回です、あまり上手くないですが。

よく考えたらこの小説を書いててシリアス以外を書いたのって数えるほどしかないんですね（小ネタやオチ含む）。

まあ舞台の都合上、無理もないんですけど。

よってこの回は着休め的な話、あるいは閑話みたいなものとしてご覧下さい。

第二十六夜 「深夜会議と野球少年（その2）」

side 小波

「さて、今度はあなたの番ね。とりあえずキリキリと説明しなさい、士郎とセイバーを逃がした後の顛末を。それとあのノツポの女……まずあなたの治療が先だったから今まで聞かなかったけど、雰囲気からして明らかに唯者じゃないわ。道すがら引っ掛けて来たんじゃないとすれば、いったい何者なの？」

リンの心理に一応の決着が付いたところで攻守交替。

今度は俺に対して話の矛先が向けられた。

もつとも俺としても始めからある程度は喋るつもりだったし、とりたてて不都合はないのだけれど。

「お、ようやっと終わったか。危うく寝てまうところやったで」

と、居間の隅で壁に身を預けていたカズが組んでいた腕を解き、ゆらりとこちらに近づいて来た。

その顔にはまるで「しょうがないなあ、まったく」でも言うつかの

ように、柔らかい微笑を浮かべている。

カズのその緊張感の欠片もない泰然とした様子に、一同から様々な感情のこもった視線が向けられるが、カズは平然とした様子でそれを軽く受け流している。

そしてカズがテーブルについたと同時に、不審気に目を細めているリンが真っ先に口を開いた。

「えっと、まずは……あなたの名前は？」

「大江和那。カズでええよ」

「そう……それでカズは、小波とはどういった関係？」

「せやな……」

ふとカズは顎に手をやり、何か考え込むように首を僅かに捻る。

そして数秒の後、何故かニヤリと笑うと顎から手を離し、うんうんと二、三度頷くと言葉を發した。

「ウチは 小波の奴隷やな！」

シン……と凍り付いたように静まり返る衛宮邸の居間。

そして一瞬の沈黙の後。

「「「……………」」」

「えっ!? いや違っ……って、なんでその三人は俺を睨んでるんだ? 特にリンとセイバーからは殺気みたいなものを感じるんだけど……!?!」

まるで刀か拳銃でも突きつけられたかのような感覚に襲われ、背筋に冷たいモノが流れる。

どうやら三人はカズの言葉を真に受けたらしく、俺を女の敵だと認識しているようだ。

特にリンとセイバーは女性だからか、汚らしい物でも見るかのような軽蔑の眼差しで俺を睨みつけてきている。

そしてその表情たるや、いつガンドと不可視の剣が迫ってきてもおかしくなくらいに鬼気迫る物だ。

……つて、ちよつと待て!!

それはカズの夕子の悪い冗談だ、真に受けるんじゃない!!

……あー、うん、でも確かに他人から見れば何らかの曰くありげだしな……。

ええい、こうなる事を解つててあえてあんな言い方をしたなカズのヤツ!

俺に何か恨みでもあるのか!?

「いや、だから違うからな!? カズが言おうとした事は本当は……!?!」

カズの冗談で人間のクズ認定されるなんてそれこそ冗談じゃない! 冷たい視線を向けてくる三人に対し、その認識は誤解だと説くために口を開こうとするが、

「なんや? そない間違つてへんやろ? 小波はウチの『ご主人様』やし、ついさつきまでウチを使役して働かせとったし。クク、それにウチのカラダ、気持ち良かったやろ?」

「だああああ!! だからその誤解を招く言い方は止めるおおお!! 特に最後! まだそのネタを引つ張るか!?!」

笑顔で火に油どころかダイナマイトをぶち込むような問題発言。

言ってる内容自体は確かにそれ程間違っではないが、いかんせん言い回しと表現がアレすぎる。

三人の、既に氷点下にまで冷え切った視線が、今の発言で絶対零度にまで達した。

視線だけで人を殺せるんじゃないかと思うぐらいのプレッシャーが襲いかかってくる。

ああ、リンの宝石で増えた筈の血の気がグングンと失せていく感覚が……。

「すみませんが、ちょっと道場まで来てもらえませんか？」

と、唐突に声が上がから降って来たかと思うと、いきなりグイと身体が引つ張られる感触がした。

そして物凄い力でズルズルと廊下の方へ引き摺られていく。

「なっ、なんだなんだ!？」

どうも上着の首の部分を掴まれているようだ。

何故か言い様のない恐怖を感じ、慌てて抵抗を試みるが万力でガツシリ固定されているかのようにビクともしない。

嘘だろ！？　なんて力してるんだ……って、あれ？

（　　）　待てよ？　今の声って確か……それにこの異様な力強さ……ま、まさか！？）

猛烈にイヤな予感に襲われ、おそろおそろ背後に振り返る。

そこには……、

「　　」　少々、込み入った話があるのですが……構いませんよね、コナミ？」

セイバーという名の、夜叉がいた。

「あ、あの……セイバーさん？　込み入った話っていったい何なんですか？　あと、なんかその笑顔がヤケに怖いんですけど……！？」

さっきまでの軽蔑の視線とは打って変わってそれはもう、十人中十人が見惚れるようなキレイな微笑を浮かべている。

……背後に漂う、瘴気と呼んでも差し支えない程の黒い雰囲気を纏ってなければ、の話だが。

しかも目だけが笑っていない……。

なまじ整い過ぎている容姿だけに、さながら般若の面を被っているようにさえ見えてしまう。

あれも確か美人の怒りの表情だった筈だしな……って、今はそれどころじゃないっ！

「ええ、貴方の人としての倫理観について少々……あの時の要領で多少拷も……もとい話をしようかと」

「今ちよつとシヤレにならない事を言いかけたよな！？ ……ちなみに、あ、あの時の要領って？」

「聞きたいですか？ ……お昼と大判焼きが遅れ「待ったあああああああつ！ それだけは勘弁してくれ！ だから、誤解なんだつてば！」「」

天使の微笑みを浮かべたセイバーの口から飛びだした悪魔の託宣。

それは事実上の死刑執行宣言以外の何物でもない。

ああ、思い出したくもないのに思い出してしまう……あの地獄のよ

うな……いや、地獄すらも生温いかもしれない。

のどかな昼下がり、衛宮邸道場で練り広げられた『説教』という名の悪夢のような惨劇。

その凄惨極まる内容は、口に出す事すら憚られる……。

それをこの短いスパンでもう一度……味わえと？

（断固お断りだ！ 二度と味わってたまるかあんな拷問！）

恐怖が逃走への決意を後押しした。

そうと決めれば、あとは全力で行動するのみ！

「まったくコナミは……確かに私は女性としての魅力に欠けていると自覚していますが……剣を取ったあの日からずっと騎士として生きてきた訳ですし、成長も……それでもまったく見向きもされずに別の女と……何故だか無性に腹が立ちます」

「ぐぐぐぐぐぐぐ……！」

何とかセイバーの拘束から逃れようと、両手を畳にベッタリとくっつけて爪を立てるが無残にささくれを作っただけ。

「うっうっうっ……！」

ならばと投げ出された形の両脚を無理矢理踏ん張らせるも、それでもまったく効果なし。

「んげんげんげん……！……！」

一縷の望みを懸けて歯を食いしばり、全力で身を擦じらせるが結果は見事に玉砕。

「……………」

万策尽き、首を落として頂垂れる。

それ以外にどうしようもなく、最早虚脱と諦めるしか選択肢が残されてない。

結局、努力の甲斐なく俺の身体はセイバーの思いのまま、廊下の向こうの道場へと強制連行を余儀なくされる。

途中、セイバーが何やら小声でブツブツ呟いていたようだが、抵抗するの**に**必死でよく聞き取れなかった。

(ああ………**い**っ**た**い**ど**う**な**る**ん**だ**ろ**う………俺、生きて**い**ら**れ**る**の**か
な?)

そしてとうとう、セイバーが居間から廊下へ一歩踏み出そうとした
その時、

「あゝ、いや冗談なんやけど」

「………は？」

「うわっ!?!」

いきなり拘束されていた襟首が解放され、勢い余って背中からゴロンと転がる。

しかしその途中で、後頭部を何か堅い物に思い切りぶつけてしまった。

「はっ!?!」

『ガーン!』と金属特有の余韻の残る音が居間中に響き渡り、目の前にチカチカと星が飛び散る。

うう……あれ、これってもしかして？

「いててて……」

後頭部を擦りながら、ムクリと上半身を起こして視線を上にあげると、背後にポカンとした表情でテーブルについているカズを見つめるセイバーがいた。

位置関係を考えるに、どうやらセイバーの着ている鎧に頭をぶつけたようだ。

やっぱりな、どうりで音が凄い筈だよ……。

「せやからさっきのは冗談やって。どんな勘違いしたかはおおよそ見当付くけど……というよりそうなるようにわざと誘導したんやけど……考えてもみい。小波がそない鬼畜みたいな事を平気で出来るんでも？ 案外単純でニブチンな小波に？ アツハハハハ、出来ひん出来ひん！ 会ってから一週間も経ってへんやろうけど、そんな性格やないゆうのは解ると思うけどな」

寝ているのか眨しているのかよく解らない、微妙な評価。

「ないない」と手をヒラヒラと横に振りながらカラカラと笑うカズを見て、俺を除いた三人は呆気にとられた表情だ。

しかし数秒の後、三人は誰からともなく、顔を見合わせあう。

「「「……………」」」

やがて三人は頷き合うつと、それぞれ俺の方へと向き直る。

俺の隣に立つセイバーは、ゆっくりと膝立ちの体勢のままの俺の眼前へと片膝をついてしゃがみ込み、俺の肩に右手をポン、と置く。

そしてニコツ、と笑顔を浮かべ、三人が一斉に口を開いた。

「コナミ。私は貴方を信じていましたよ」「俺も」「わたしも」

「嘘つけええええええ！！ 思いっきり疑ってたたる！！」

理不尽なまでに図々しい一言。

半眼でツッコミを入れる俺に対し、三人はアハハハと誤魔化し笑いをしながらササツと視線を逸らしていた。

って、話が全然進んでないよ、まったく……。

第二十七夜 「深夜会議と野球少年（その3）」（前書き）

作者の中ではカズはスタイルがいい方に分類されています。

「身長が高いのならその分肉付きもよくなるのでは？」と考えたからです。

実際、ライダーがそうですしね（ライダーの身長は172cm、ここでのカズは192cm）。

第二十七夜 「深夜会議と野球少年（その3）」

side 凜

「はあ……いきなり話が脱線したわね。とにかく閑話休題。仕切り直すけど、結局あなたは一体何なの？」

微妙になってしまった空気を無理矢理断ち切って、再度テーブルの対面、小波の隣に座る水色の髪の子……カズに問いかけた。

『大江和那』と名乗ったその少女（という割には身長が高すぎるけど……2m近くあるし）は、タハハと申し訳なさそうに笑いながらワシャワシャと自らのショートカットの髪を無造作にかき回している。

手の動きに合わせてサラサラと艶のある髪が抵抗なく動き、その質の良さを窺わせる。

女性にしては異様に高い身長だがそれがプラスに働いているのかスタイルはよく、制服を大きく押し上げている胸元や腰回り、さらにそれとは真逆の細いウエストについて目が行ってしまふ（単に身長の高低差による視点の位置もその一因だったりするのだけど……）。

やや幼さも目立つが目鼻立ちの造形バランスは整っていて、間違いない美少女（というより可愛い、と表現した方が正確？）と太鼓判を

押せる程の器量だ。

……でも。

(……惜しい。身長がもう少し低かったら、ガラにもなく嫉妬全開になってたかもしれないけどこれじゃちょっと、ね。他は桜並……あるいはそれ以上なんだけどね、色々)

そう、その高すぎる身長がある意味で全てを台無しにしていると言っても過言ではない。

初対面ならまず間違いなく真っ先に背の高さに度肝を抜かれ、その結果顔やスタイルといったプラスの部分に目が行かない。

これでは色気を感じる前に威圧感を感じてしまうだろう。

もつともその見た目に反する、割にサツパリとした穏やかな気性と関西弁のお陰で、最初のインパクトさえ乗り切ってしまえば親しみを感じやすくはあるだろうけど……そっち方面にはなかなか発展しにくいでしょうね。

「あゝ、その説明の前に柳洞寺での顛末話した方がええんとちゃう？ 順番的に」

するとカズが若干申し訳なさそうに小波に振り返る。

「ちよつとからかいすぎたかな」と小声で呟いている辺り、あらぬ誤解を招いた事を多少なり反省はしているようだ。

……かくいうわたしも、まあ……乗せられたとはいえ疑った事、ちよつとは反省してる……かな？

「、はあ……そうだな。その方がいいか」

小波はジーツ、とこつち（正確にはわたし達三人＋カズ）に恨めしげな視線を向けていたが、ひとつ溜息を吐くとおもむろに口を開いた。

「士郎君を抱えたセイバーを見届けた後、柳洞寺を囲ってる塀を乗り越えて山をグルリと迂回するようなルートで降ってたんだ。ちよつとでも何かを探れるようにな」

「ふうん。で、何か解つたのか？」

わたしの隣、ポットからお湯を急須に注いでいる士郎が口を挟む。

つてコイツ、こんな風にチョコマカと小間使いみたいな事してないと落ち着かないのかしら？

料理の腕といい、まるで主婦みたいな思考回路をしてるわね。

いや、主婦じゃなくて……主夫？

「うーん、解ったような解らないような……いや、まあ今はとにかく最後まで話を聞いてくれ。気持ち駆け足程度のスピードで変に疑われない程度に周囲を探ったら、いきなりランサーに襲われたんだ」

「ランサーにですか!？」

士郎と小波の隣、テーブルの角側に座っていたセイバーが目を見開く。

流石に空気を読んでか、テーブルの中央に置かれたお茶菓子には手を付けていない。

……でも視線は偶にチラつとそつちに行ったりしてるのよね。

まあ夜中だし、太るからわたしは食べないけど。

「ああ、何かキャスターを偵察に来てたらしくてな。運悪く出くわしちゃったんだ。で、そのまま崩し的に……」

「……負傷していたのによく無事でしたね。一度交戦したから解るのですが、ランサーの槍は並の腕前では対抗出来ませんよ？ 相手は仮にもあの『クー・フリーリン』ですし」

「うん、普通ならな。でもアイツがマスターから受けてる令呪付の命令のお陰で何とか命拾いした」

「令呪による命令で命拾い……？」

その言葉に「はて？」と首を傾げる。

そもそも令呪の用途の常道としては、サーヴァントに強制的に命令を聞かせるか、サーヴァント自身を強化するかの基本二つしかない。

前者なら『マスターの命令には絶対に服従しろ』といったような物（もっとも、このように定義が広範すぎる場合だと大概効きが甘くなる。実際わたしの時がそうだった）、後者なら『次の一撃は絶対に外すな』といったような物だ。

マスターないしはサーヴァントのどちらか、あるいは両方に利を齎すのが“令呪”と呼ばれる、三回の絶対命令権なのだ。

だからどんなに判断能力に乏しいマスターでも、少なくとも自分達の陣営が不利になるような令呪の使い方は絶対にしない筈。

一体どんな命令を受けてたのかしら……？

「ランサーが言うには、『敵サーヴァント全てと交戦して、必ず生きて帰れ。ただし殺す事は禁ずる』っていう命令だったらしい。だ

から全力で戦う事が出来なかつたみたいなんだ」

「……………何ですって？」

一瞬、声が裏返りそうになった。

なによその命令は……………それじゃランサーがまるで……………。

「ランサーはこの命令の趣旨は威力偵察と斥候みたいなものだって言つてたけど、まあ今はそれは置いとくよ。とにかく、そのハンデがあつたお陰で何とか対等に渡り合う事は出来ただけ……………」

「けど？ どうしたんだ？」

今度は隣の士郎が首を傾げた。

疑問を差し挟みながらも五人分のお茶を湯呑に注ぎ終わり、それぞれ目の前に配っている。

脳裏をよぎつた言い様のない予感を一旦頭の隅に追いやりつつ湯呑を受け取り、口元へと運ぶ。

火傷しそうなほどに熱された液体が喉を潤し胃を満たし、内臓から熱が全身に伝わっていく感覚が身体を徐々に弛緩させてゆく。

……ふう、今はこの熱さが心地いいわね。

「……出血ですか？」

「セイバー、正解。止血を忘れてたせいで血を失い過ぎたんだ。戦ってる最中に眩暈に襲われて、死ぬかと思った」

「そんなアツサリと言つなよ……」

「アハハ……と言われても、もう過ぎた事だし、ある意味慣れてるし。それに殺される事はないって解ってたから」

苦笑しながらそう述べる小波に対し、士郎が呆れたような視線を向ける。

ふうん、案外図太い神経してるのね小波って。

伊達に英霊はしてない……って事か、格好からしてとてもそうは見えないけど。

でもその割にはセイバーの“アノ笑顔”には気圧されてたわね……
まあ“アレ”は別問題か。

「とはいえ、時間が経てば失血死は免れないような状況だったから、

隙を見て閃光弾でランサーの目を潰して時間を稼いだ。その後急いで止血して、迷ったけど『奥の手』を使ったんだ。まともに戦ってられる状態じゃなかったしな」

「奥の手……宝具か？」

「うーん、まあそうとも言えるんだけど……『オール・イン・ワン全てに通ずる物』も『ヒーロー五人の英雄』も既に全開で使つてて、それでやっと互角つてところだったからね。早い話、宝具を使つてもこれ以上“自分が”戦うのは無理だったから、『奥の手』で助つ人を“呼んだ”んだ。で、それが……」

と、そこで小波が視線を隣に向け、

「ウチっちゆうこつちゃ！」

視線を受けたカズがシュバツ、と右手を上げてニツと笑った。

助つ人……つて、カズが？

見た感じちよつと……どころじゃないか、かなり背が高いだけの女子高生にしか見えないんだけど？

両隣りの士郎とセイバーもどこか胡散臭そうな目をしてるし……うん？ でもセイバーは胡散臭いというよりはむしろ警戒の視線……

かしら？

「なんや、疑つとるんか？ って、これランサーにも言ったな。まあええけど。とりあえず、証明書代わりに……これでええやる？」

疑いの視線を向けられたカズは苦笑しながらそうこぼすと、スッと何故か空中に右手をかざす。

そしてパチン、と軽く指を弾くと、次の瞬間には血で染め上げたかのような真紅の長槍がその手に握られていた。

「「「……………」」」

そのあまりの出来事に、驚愕の念を禁じ得ないわたし達……いや、違つわね。

士郎と……とりわけセイバーの驚愕振りは尋常じゃなかった。

「ま、まさかその槍は……………！？」

「バカな……………何故それを貴女が……………！？」

まるでここにあってはいけない筈の物でも見つけたかのように、カ

ツと目を限界まで見開いたまま凍りついている。

残念なくらいに色々足りていない士郎はともかくとして、百戦錬磨の剣の英雄たるセイバーがこんな表情をするのは珍しい。

でも……それも解らなくはない。

表情に出さないよう自制してるだけで、わたしもまったく同じ気持ちだから。

何せ、出したモノがモノだ。

「どうして貴方が　その槍、『ゲイ・ボルク』を持つてるのかしら？　以前ランサーとやり合った際に実物を見ているから、それが本物だっというのは解るわ。でもそれはランサーの　『ク　ー・フリーン』の槍の筈よ。どういう事なのかしら？」

驚愕の山を通り越して、スツと目が細まる。

ここに来て、不信心と警戒心がやっとレッドゾーンに達した。

考えてみれば小波が……イレギュラーサーヴァントである小波がふらりと連れてきた人間なのだ、それがただの人間である可能性は限りなく低い。

なんで今の今までそんな事に思い至らなかったのか……わたしって実は意外と抜けてるのかしら？

「えっと、物凄く簡単に言うと、ウチは厳密には純粹な人間ではないんだよ。小波の“呼び出し”に応じてここに召喚された、いわば“小波のサーヴァント”なんや」

手の中の長槍を消しつつ、カズは曖昧に笑いながら言葉を並べる。

「小波の……サーヴァント、だつて？」

「ああ。で、カズを呼び出した際に使ったのが……これ」

小波はそう言って傍らに置いていた鞘付きのバットを持ち上げた。

確かそれって……。

「『オール・イン・ワン全てに通ずる物』……ですか？ それは確か記憶や知識にある武器に形状を変化させる宝具では？」

「うん、基本的にそれで間違つてはいない。ただ、より正確に言うなら「内包コストによる物体の完全再現」ってところかな？ そして、コストを使って再現出来るのは何も武器や防具、道具だけじゃない」

「え、ちょっと、それってまさか……!?!」

示唆された事柄に再び驚愕の念が湧き上がる。

わたし達の動揺を見て取った小波は僅かに目を閉じ、ひとつ頷いて言葉を続けた。

「そう、人間も……『俺』と縁を持つ、自らの人格や意思を持つ者すらも再現出来るんだ。もつとも、条件はかなり厳しいんだけどね。何せコストの八割は持つていかれる上に現界出来るのは最大で二十四時間。その上召喚出来るのは、七つの基本クラスに該当するヤツだけなんだ」

「七つの基本クラス？」

「セイバー・ランサー・アーチャー・ライダー・キャスター・アサシン・バーサーカーの七つや。ちなみにウチはランサーのクラスで召喚されとる。槍見たら解ると思うけどな」

「ちょっと、それって聖杯戦争のサーヴァントのクラスじゃないの!?!」

あまりにも突拍子のない話……とは言えない。

他のサーヴァントならいざ知らず、イレギュラーサーヴァントである小波ならばたとえ何を持っていてもおかしくないと思わされる…
…何しろ見た目からしてアレだし。

まして聞いた話では、キャスターはサーヴァントの身でありながらアサシンを召喚したという。

それらを踏まえて考えてみれば、疑いを通り越して逆に変に納得がいくという物だ。

「ああ、だから俺はこの機能を『サーヴァント・システム』って呼んでる。『オール・イン・ワン全てに通ずる物』に付属してる一機能だけど、これだけは明らかに別次元だからな。……で、話を元に戻すけど、カズをその場で呼び出してバトンタッチ。『ゲイ・ボルク突き穿つ死翔の槍』を解放してランサーを瀕死の状態まで追いやって、動けない状態にした後その場から離脱したんだ」

「普通、あの槍喰らうたら心臓抉られて死んでまうけど、そこはまあ……ウチのスキルの関係で、な。ランサーは死んでへんよ。で、ウチは空が飛べるから小波を抱えてここまで運んできた、とそういうこつちゃ」

「……はあ、どこをどうツッコめばいいのやら」

最早呆れて言うべき言葉が出て来ない。

目の前にいるカズが小波が呼び出したサーヴァントだという事はともかく、ランサーを瀕死にまで追い込んだ実力の持ち主だとは普通なら到底信じられない。

けれど。

「『ゲイ・ボルク』を宝具としているのは、小波の宝具で『ゲイ・ボルク』が再現可能になったから、という事ですか？」

「ああ。実物を見てるし、銘も効果も知ってるからな。『サーヴァント・システム』では『オール・イン・ワン全てに通ずる物』のデータベースから召喚対象の宝具が選ばれる事があるんだ。どっちも『オール・イン・ワン全てに通ずる物』の機能だしね。無関係のように見えて実は繋がってるんだよ」

「……………そうですか。実際に貴方を抱えて空から降りて来たところも直に見ましたし、彼女の何気ない身のこなしや所作、気の張り方から推察するに相当の実力がある事も解ります。全て、本当の事なのでしょぅね」

呆れ、疑問符、動揺、猜疑……………それらが無い交ぜになったような、複雑な表情を浮かべていたセイバーがそのままコクリとひとつ頷く。内心はどうあれ、完全にカズの事を肯定したのだ。

剣の英霊であり、生粋の騎士でもあるセイバーのお墨付き。

ならば実力の程は疑うべくもない……そういう事だ。

といっても、相変わらず違和感は抜けきらないんだけど、ね。

士郎も表情がどこか微妙だし。

はぁ……やれやれね、まったく。

第二十八夜 「深夜会議と野球少年（その4）」

side 凜

「……さて、カズの件はここまで。今一番に考えなくちゃいけないのは、今後の展望ね。……正直言って、現状がここまで切羽詰まったものになるとは思ってなかったわ」

「そうだな。特に、キャスターにこっちの戦力の手の内がいくつかわられたのが痛いな。セイバーとアーチャーはまだ底を見せていないからいいとして、俺は『サーヴァント・システム』まで使っちゃったしなあ」

「とりあえず、柳洞寺に関しては後回しにするしかありませんね。手の内がある程度知られた以上、こちらから仕掛けるのはかなり難しくなりました。こちらもそれ相応以上の準備をしなければ即座に全滅の憂き目に遭うでしょう」

「今頃は防衛網も強化されてるだろうしな。流石にキャスターもこれ以上は柳洞寺の結界を過信しない筈……くそっ、俺が拉致されなければ」

「今更悔やんでもしょうがないやんか。そもそもからして不可抗力なんやし。大事なのはこれからの事やる？ 過去を振り返ってばかりじゃ進歩せえへんで、少年？」

湯呑を傾けながら思考を広げ、大局の構成図を脳裏に描いていく。

話はカズの事からシフトし、わたし達の今後の動向へと移行している。

しかし芳しくない状況が次々と頭の中の図面に書き殴られていくため、今……物凄く頭が痛い。

あゝ、もう！

「リン、カリカリしていても仕方ないぞ。こういう時はむしろドン、と構えてないとな。頭抱えてるヒマがあつたらもうちょっと建設的な物の考え方をしないと、状況以前に精神が持たない」

「……解ってるわよ、そのくらい。でもランサーの事もあるしね」
ここ数時間の騒動の発端であるキャスターのインパクトに隠れがちだが、むしろこっちの方もある意味、大きな問題と言える。

柳洞寺から撤退中の小波を突如強襲して来た、柳洞寺を偵察中だったランサー……。

ここで重要な事は、ランサーがマスターの命令（令呪付）で威力偵察と斥候をしていたという事。

一見何でもない、普通の事のようにも見えるが、この裏をよく考えてみれば恐ろしい事実が隠されている可能性が浮かび上がってくる。

「ランサーの事……？ どういう意味だ？」

「あのねえ……つまり「ランサーは捨て駒かもしれない……」という事ですね」……セイバー、大正解」

「捨て駒？」

何も解っていないような土郎の言葉に若干イラツとしながら説明しようとしたところ、難しい顔をしながら瞑目するセイバーから簡潔な説明が入った。

それでも今ひとつよく解らなかったのか、土郎は首を傾げたままだ。

理解しているのはわたしとセイバー、スツと目を細くしている小波、カズは……よく解らない。

のほほんとした表情で暢気にお茶を啜っている……まあ、カズはある意味小波の単純戦力だから別にいいけど。

「ケルト神話の大英雄『クー・フリーン』に偵察をさせている……
そもそも偵察つていうのはある意味で『鉄砲玉』に近いの。一度飛
び出していったが最後、無事に戻ってこれるかどうかの保証はない
……頭に『威力』が付くのなら尚更ね。もつとも、生還する事も至
上命題のひとつなんだけど、逆に言うならその命題の達成のためな
らあらゆるリスクをも厭わない。それこそサーヴァントにとっての
鬼門である、自らの手の内を晒す事さえ。今までのランサーの行動
がまさにそれよ」

「まあ、その点はランサーのあの性格からして無理もないところだ
けど……つまりだよ、士郎君？　ランサーのマスターが、その多大
なリスクも承知の上で、あえてランサーを偵察に出していたとする
なら……」

「……するなら？」

ゴクリと士郎は喉を鳴らす。

ようやく事が深刻なものである事に気づいたようだ。

「　　ランサーのマスターには、ランサーという非常に強力なサ
ーヴァントを上回る程の『切り札』が存在する可能性がある、とい
う事です。シロウ」

「　　ッ！？」

そう、つまりはそういう事だ。

ランサーを威力偵察に出すという事は、裏を返せばランサーについての全てが暴かれようとも　あるいは殲滅されようとも構わないという事でもある。

まあ、ランサーの地力からして殲滅されるという事はまずないだろうし、令呪で生還を厳命されている以上は必要以上の生命のリスクを冒したりはしない（そもそも冒せない）。

戦闘狂の気があるとはいえ、そこまでバカではない筈だから退き際くらいはしっかり見極めるだろう。

しかし。

「全て計算づくで、何の躊躇いもなくランサーを尖兵として使う……という事は、たとえランサーを犠牲にしたとしても尚余りある別の『何か』をランサーのマスターが所持している可能性が高い。それが何なのかは情報が皆無だからまったく想像が付かないけど……仮にそうだとするなら、ランサーのマスターは底が知れない。ある意味、コイツが最大最強の敵かもしれないわね」

「」

士郎が絶句すると同時に、居間に重苦しい雰囲気立ち込める。

それだけ、この事実は重いという事だ。

バーサーカー、キャスター、ランサーと、次々に難題が降りかかってくるこの苦境に我知らず、溜息を漏らしそうになる。

どれもほぼ後手に回るしかないような状況ばかりだ。

正直、先の見通しが全くつかない。

「ま、落ち込んだって仕方ないやろ？ とりあえず、今日はこちらまでにしたらどうや？ 流石にランサーもキャスターも今すぐどうこう、って事はない筈やし。特にランサーはポッコボコにしまったしなあ」

と、ずっと一連の会話を静観していたカズが不意にそう言葉を発し、相手を崩す。

その表情は見ている者の胸をスツとさせる、気持ちのいい笑みだ。

「……………ふう。それもそうね」

「ああ、ま、そうだな」

「……………ええ、確かに言われてみればその通りですね」

その一言でお通夜のように静まり返っていた空気が瞬時に弛緩した。確かに不安要素にはかり気を取られていても仕方ない。

こっちにも多少ながらアドバンテージが 主に数の上で
あるんだし、キャスターも今頃は自陣の在り様の見直しと今後の対策に大わらわだろうしね。

それにランサーにしたって、マスターに「切り札」があつたとしても最低限、戦力としてもまだ有用なランサーを使い潰してもしない限りは投入して来ない筈。

そこまで猶予がある訳ではないが、かといって焦る必要も今のところはまだないのだ。

状況自体は確実に悪くなってはいるものの、最悪とまでは至っていない。

まだここから挽回出来る余地は十分にある。

「よし、じゃあ今日はもう寝よう。皆疲れてる筈だしな」

小波が立ち上がりながらそう言った事で、この場は締められた。

それぞれが伸びをしながら立ち上がり、士郎が全員の湯呑を回収している。

うっ、色々ありすぎたから流石に疲れたわ、眠い……。

「うっっ、んっ……と、よっしゃ！ ほな一緒に寝よか小波！」

「え！？ うわっ！？」

と、伸びをしていたカズがいきなりそんな事を言い出し、ガバツと背中から小波に抱きついた。

表情そのものは爽やかな笑顔だが、目が若干怪しい光を湛えている。さながら獲物を目前にしたライオンのような、獰猛な捕食者の目だ。

……って、え！？

ちよっと待った！ アンタらまさか……！？

「それはダメです」

不意に傍らから声が出たかと思うと次の瞬間には、カズが小波から引っぺがされていた。

よく見ると、カズの背後に右手を伸ばしたセイバーがいる。

どうやらカズの服の腰の部分を掴んで引っぺがしたらしい。

……普通だったら肩とか襟首を掴むけど、相手がカズじゃ流石に届かないもんねえ。

「ええ〜、ええやんかセイバー、イケズやなあ〜。……あつ、もしかしてセイバーが小波と一緒に寝たいんか？」

「違います!!」

不満気に唇を尖らせたカズの言葉を即座に否定するセイバー。

一見無表情だが、よく見てみると耳の部分が微かに赤く染まっている。

……ふーん、やっぱりセイバーも騎士であると同時に“女の子”って訳ね。

本人はきつと認めないだろうけど。

「まあまあセイバー、悪いけどカズは一旦引っ込んでくれるか？
今はアーチャーがいないから、歩哨代わりに別のヤツを呼びたいんだ」

と、セイバーの心情を知ってか知らずか、苦笑いを浮かべた小波が

カズの誘惑をスルーしながら提案する。

……あ、そういえばアーチャー、わたしの家に帰ってたんだっただ。

丁度その時、湯呑を軽く洗い終えてキッチンから居間に戻って来た士郎が手を拭きながら口を挟んだ。

「そういえばアーチャーは遠坂の家に戻ってたな。その穴を小波が何とかしてくれるならありがたいけど、その『サーヴァント・システム』って連続使用出来るのか？」

「ん？ まあ、一応は。もつとも、コストの関係で一度に呼び出せるのは一人だけだから、カズをコストに還元しないと再召喚は無理なんだ。という訳でカズ、選手交代だ」

「む……まあ、しゃあないか。あと二十時間ぐらいは現界してられるけど、ウチは歩哨向きやないしなあ。そっちのほうかええか。ほな、また何かあったら呼びい。いつでも力貸したるからな」

「ああ、ありがとう。その時は頼む」

不満顔だったカズだが、その説明に納得した様子で頷いたその途端、カズの身体が淡く発光し出す。

やがて身体が光の粒子に還元され、その全てが小波の握るバットに

吸い込まれていった。

「「「……………」」」

その光景に小波を除く全員が絶句する……………勿論わたしも。

今で僅かばかり残っていた疑念が完全に吹き飛んだ。

小波がカズを呼び出した……………そして自らと縁を持つ者をサーヴァントとして呼び出せるというのは、まさに掛け値なしの事実だったのだ。

「ふう。さて、居間じゃちょっとなんだし、庭で呼び出すか」

放心しているわたし達を置き去りに、小波はいそいそと窓から庭へと降りていく。

その数瞬後に覚醒したわたし達は、慌てて追いかけようとその場から一步踏み出したその瞬間、

「コード入力、『One for all, all for one
e (俺は一人じゃない)』」

そんな言葉が聞こえて来たと同時に開いた窓から荒れ狂った風が入り込み、庭では形容しがたい幾何学模様と共に異様な魔力の渦が創り出されていた。

幕間 「晝く闇と野球少年」

Interlude Extra 2 - 1

薄暗い廊下にコツコツ、と足音が反響する。

時刻は夜中の午前二時、草木も眠る丑三つ時と呼ばれる時間帯だ。

しかしこの住人は丑三つ時であろうが何だろうがお構いなしに、望む時に望む事をする。

もっともそれは決して自由奔放にという意味ではなく、とある意志と目的の下に時には昼夜の区別なく動き回るといふ事である。

955

「…………ふっ」

足音の主、青い長髪の男が歩を進めながら溜息を吐く。

ルビーのように紅い眼を気だるげに閉じ、半ば身体を無理矢理引きずるように歩いている。

男の纏う青のボディースーツは所々がうつすらと赤く染まり、銀の肩当ては至る所が無残に砕け、ひび割れ、もはや防具としての体裁を成していない。

おそらく服の下は相当悲惨な状態になっている事だろう。

だが男の纏う、猛禽類の如き鋭い雰囲気のお陰で、さながら『手負いの狼』といった、むしろどこか力強い印象を受けてしまう。

「……………」

やがてその男は、廊下の奥にある一室のドアの手前で立ち止まった。

目当ての人物は、今頃ならばこの部屋でワインに舌鼓を打っている頃だ。

男はノックもなしにドアノブに手を掛け、部屋へと入る。

目当ての人物は、その部屋の中央にいた。

やたらと背の高い、一人の男性だった。

「マスター」

「……………ランサーか」

“マスター”と呼ばれたその男は備え付けのソファーに腰掛け、赤い液体の入ったワイングラスを片手に部屋に入って来た男を見上げ

る。

対して入室した青の男……ランサーは僅かに肩の力を抜くとおもむろに口を開いた。

「命令通り全ての敵サーヴァントと交戦して来たぜ。まあ、キャスターだけは例外だけどよ、令呪の縛りがなくなったから別にいいだろ」

「そうか……しかし、お前ともあるう者が随分と派手にやられたな。そこまでの手傷を負わされるとは。……誰にやられた？」

そう言うて男はランサーの服の赤い部分に幾らかの関心の籠った視線を向ける。

ランサーの実力を男は無論知っている。

何せ男はマスターなのだ、サーヴァント従者の実力を知らないなど天地がひっくり返ろうがまず有り得る事ではない。

ましてランサーの正体は、ケルト神話において最も名の知れた半神半人の大英雄「クー・フリーリン」。

召喚された地がケルト神話と馴染みの薄い日本であったため、知名度的に幾分力が劣化しているとはいえそれでも強力な英霊である事に変わりはない。

それをここまで追い込んだという相手の事を知りたいと思うのは、至極当然の事であろう。

だが、

「…………イレギュラーだ」

「…………む？」

ランサーの答えが余程意外だったのか、男の目が僅かに見開かれる。

出会ってそれ程経っていないながらも男の平素を多少知っているランサーにとって、その反応は結構…………というか、かなり意外な物であった。

もっとも、以前に初めてイレギュラーサーヴァントについて報告した際の　特に容姿・格好についての　物とはまた雲泥の差ではあったのだが。

ランサーとしては、「あの表情を是非写真に納めておきたかった」とその報告後、廊下の片隅で悔やんでいたのは甚だ余談である。

「俺が任務遂行中、途中からどういう訳かリンクを切ってやがったからマスターは知らねえだろうけどな。アイツのデタラメな宝具に完膚なきまでにのされちまった」

「宝具？」

「ああ。規格外にも程があるな、あれは」

「ふむ……それでお前をのしたという、デタラメな宝具とは？」

どこか清々（すがすが）しい口調でのたまうランサーに対し、男は僅かに首を傾げる事でその先を促す。

仮面を被ったように無表情でありながらも、その下では明らかにベクトルを持った感情が蠢いている。

ただし、感情の“質”そのものは鉄面皮に覆い隠され、闇の中へと完璧に秘されてはいるのだが。

「あの晩俺が話した、あのバットだよ。イレギュラーを……真名は“小波”って言うらしいが……急襲した際、アイツは妙なパワードスーツ纏って、最初バットを拳銃や剣に形を変化させて戦ってたが、俺との戦闘前に怪我をしていてな。その後、バットを地面に突き立てて、召喚術を行使しやがった」

「召喚術だと？」

「ああ。で、その呼び出したヤツってのが……人間の女だった。ソイツは自分の事を“小波のサーヴァント”と言っていた。そしてイレギュラーはそいつの事を“ランサーのサーヴァント”と呼んでいた」

「……………」

ランサーの言葉が訥々と紡がれてゆく中、段々と男の目が細められてゆくがその表情に変化は見られない。

ただ、時折その瞳に何とも形容しがたい、一種異様な光が宿っては消えているように見えるのは果たして気のせいなのか。

しかしランサーが発した次の言葉は、その男に恐ろしく劇的な反応を与えた。

「で、ソイツが持ってやがった武器が……『ゲイ・ボルク』だった」

「……………なに!？」

鉄面皮が跡型もなく消え失せ、男は驚愕と衝撃に彩られた表情を浮き彫りにさせる。

『ゲイ・ボルク』と言えば、目の前にいるランサーこと『クー・フーリン』の代名詞である真紅の魔槍、過程と結果を逆転させる因果

の槍である。

槍を放つという『過程』と、心臓を穿つという『結果』。

本来の流れである“過程から結果へ”という因果を“逆転”させ、心臓を穿つという『結果』を前提とする事だとえどこに槍を放とうが確実に心臓を貫くという“呪い”をその身に宿す、一撃必殺の魔槍。

そんな一級品とも呼べる……いや、一級品と呼ぶ事すらも憚られる宝具を所持していたと、ランサーは言った。

男の反応もむべなるかな、むしろ至極当然の事であろう。

しかしこの男の精神はある意味で常軌を逸している……言い方を変えれば狂っている、あるいは壊れていると言っても過言ではない。

その異常性を一部でも見知っているランサーとしては、その反応はやはり普段とは真逆すぎて、思わずニヤリとしてしまいそうになるのを必死に堪えていた。

「これは推測だけだよ、あのバットはアイツが知ってる武器や防具なんかを再現出来る宝具なんじゃねえか？ それこそ知りあいの人間すらもな。そういう事ならサーヴァントと言った事も納得がいくし、『ゲイ・ボルク』を“宝具”として持っていた事にもある程度説明が付く」

自らの推測を語って聞かせるランサー。

あながち的外れでもないどころか完璧に的を得ている。

しかもど真ん中に、だ。

「…………ふん。『規格外』か、成る程。…………ククッ」

と、その時不意に男が微かな笑い声を漏らした。

その顔には、うつすらと笑みを湛えている。

普通、笑顔というのは見る者の心に安堵や和み、親近感といった物を齎す筈なのだが、この男の場合、その独特の薄暗い雰囲気の影響でむしろ恐怖や不安、おぞましさを煽りたててしまう。

歴戦の猛者であるランサーでさえ、その光景に思わずギョツとし、そこから一歩たじろいだ。

「…………なに笑ってんだよ？」

「クク…………いや、なに…………それで、その召喚されたサーヴァントにやられたのか」

笑みを引っ込め、男は続きを促す。

先程の不気味な空気は鳴りを潜め、元の状態に落ち着いている。

ランサーは気を取り直すと、悔しげに表情を歪めながら……しかしどこかさっぱりとした口調で言葉を続けた。

「……癩な事にな。槍の腕そのものは俺が上だったが、妙なプレッシャーで動きを鈍くされ、重力の方向を操る力で飛翔したアイツに制空権を取られた。結果ギリ貧の戦いしか出来なかった上に、最終的に『ゲイ・ホルク突き穿つ死翔の槍』の真名解放でトドメを刺された」

「ほう……よく死ななかったものだな」

「殺しが嫌いだから『不殺の誓い』を立ててるんだとよ。その御蔭で直撃を喰らっても生きていられたって訳だ。屈辱だったがああまでやられちゃあな、いつそ腹も立たねえ」

「……ふむ。それで、お前は再戦を望むか？」

ワイングラスを傾け、口内を潤した男が再び視線をランサーへと向ける。

それを受けて、ランサーはさも当然と言わんばかりに首を縦に振った。

敗北という汚名を雪がぬ事など、『クランの猛犬』の性格からして

まず有り得る事ではない。

そんな臆病者であったのなら、『クー・フリーン』の名などとうに
靡れていただろう。

まして相手はランサー自身が認め、しかも自らを納得させる強さを
持った猛者だ、思い出すだけでも戦士としての血が騒ぐ。

強者との死闘を望み、聖杯戦争の呼び出しに応じた身としてリベン
ジに燃えるのは当然の帰結。

しかし次に男が発した言葉は、ランサーの期待を見事に裏切るもの
であった。

「却下だ。お前はしばらくここから動くな。当面は様子見に徹する」

「……………なに？」

頭から冷水を被せられたかのようにランサーの高揚が一気に霧散し、
代わりに湧きおこって来たのは失望と憤怒。

眉をつり上げ、殺気混じりの鋭い眼光を飛ばすランサーに対し、男
はまるで意に介した様子もなく再度ワインを煽る。

「……………どういっつもりだ？」

「今はまだ動く時ではない。サーヴァントが一体も脱落していないのだからな。威力偵察は必要な事だったからさせたまで。判断を下すにもまずは材料が必要だ」

「……俺にそう言う割には、“アイツ”は何やら裏でコソコソやっているみてえだが」

「“アレ”の行動に関しては、私は何も関与していない。完全なる独断だ。もつとも、私に対して不利になるような行動を起こしていない以上、特に何も言う事はない。それとも何か？ お前は“アレ”と組んででも動きたいとも思っているのか？」

その言葉に、ランサーは露骨に眉を顰めると、

「死んでもお断りだ。あんな鼻持ちならねえヤツと組むぐらいなら、今すぐこの場で自害する事を選ぶ」

吐き捨てるように宣言した。

嫌悪感を剥き出しにしたその表情と言葉……余程に“ソレ”を嫌っているようだ。

男はそれを見てふん、と軽く鼻を鳴らすと、

「ならば言われた通りにしろ。いずれ再戦の機会が来る。アレはそう易々と敗退したりはせん」

どこか確信を含んだ声でそう断言した。

やけにはつきりと言う男に対し、ランサーは微かに眉を顰める。

「ほう……なんでそう言い切れるんだ？」

ランサーの疑問ももつともだ。

聖杯戦争を生き残るといふのは口で言うほど簡単なものではない。

たとえ他者と隔絶した実力の持ち主でも、一瞬の油断で即座に敗退……即ち命を落とすという事も珍しくはないのだ。

邪道を正道として、確定要素を不確定要素として、常識を非常識として、プラスをマイナスとして……過去の物も含めて聖杯戦争は動いている。

その中で、イレギュラーサーヴァントが果たして生き残れるかと問われれば、確率は『未知数』と言わざるを得ない。

イレギュラー自身の力は論外……だが逆境に強く、経験に裏打ちされた戦闘勘と技量を兼ね備え、なにより規格外であり使いようによつては『鬼札』ジョーカーとも呼べるその宝具が素直に恐ろしい。

加えて味方には『最優』のサーヴァントと称される剣の英霊、セイバーがついている。

ならば勝ち残れる可能性は高い……筈のだが、現実はあるがちそうとも言えない。

要であるマスター、衛宮士郎は半人前以下の未熟な魔術師であり、同盟関係にある遠坂凛のサーヴァント、アーチャーからは柳洞寺で裏切り同然の思わぬ襲撃を受けている。

いわば内に爆弾を抱え込んでいる状態なのだ。

その特殊性も相まって『弱い、だが強い』と称せる实力を持ったイレギュラーだが、内憂を抱えたまま外患を退け、そのまま聖杯に手が伸ばせるほどに聖杯戦争は甘くはない。

故に、敗退しないと断言したその根拠をランサーは知りたかった。

だが。

「……解らんか？」

僅かに首を傾げ、まるで「疑問を持つ事そのものが疑問である」と言わんばかりの表情を男は浮かべる。

実際はランサーの言い分の方に理があり、男の側が圧倒的に説明不足……どこるか説明など一切していないのだが、こうまでスパッと

言われると逆に「自分の方が間違っているのでは？」という錯覚に陥りそうになる。

「解る訳ねえだろ」

しかしランサーはその程度の事で物事の本質を見誤ったりはしない。

“キリキリ説明しろ”と念の込められた鋭い視線を男に向ける。

しかし男はその視線を受けて尚泰然と、ジッと静かにランサーを見つめ返すのみ。

瞳には何の感情も宿っておらず、いつそ空虚とも呼べるほどの空っぽの色を浮かべている。

その奥に一体何が秘されているのか、皆目見当もつかない。

「」
「」
「」
「」

一秒、五秒、十秒、三十秒……双方睨み合ったまま、時だけが徒に流れてゆく。

そしておよそ一分ほど過ぎたその時。

「……解ったよ、今はただ納得しておいてやる。気に食わねえとは

いえ、マスターの命令だしな。動かねえでいてやるよ　　言峰「

溜息を吐きつつランサーが折れた事で、この睨み合いに一応のピリオドが打たれた。

男　　聖杯戦争の監視役たる神父・言峰綺礼はツ、と不満げな表情を隠しもせず、乱暴に髪を掻きむしるランサーから視線を逸らし、

「……ふむ、流石に“聖杯に呼ばれた”管轄違いのサーヴァントには解らんか。イレギュラー……“サーヴァント・カオス”が“世界”から送り込まれた、この戦争の異物だという事には」

敵かに、だがランサーには聞こえぬよう小声でポツリと呟き、口元にうつすらと底冷えするような笑みを浮かべた。

I n t e r l u d e o u t

「キャスター」

「あらマスター、どうされたのですか？ こんな夜中に」

柳洞寺のとある一室、魔術師の英霊であるキャスターは突然の主の訪問に目を見開いた。

柳洞寺に身を寄せている一般人である主の朝は早く、既に眠っているものと思っていたからだ。

ここはキャスターの『工房』としての処理がなされた部屋……もつとも簡易の物ではあるが。

本格的な『工房』はこことは違う柳洞寺の別の所にあり、ここには机の上に直径15cm程度の水晶玉がひとつ、台座に乗せられて置いてあるのみである。

だが今はそれだけで事足りる。

この水晶は『遠見の水晶』。

簡潔に言えば監視カメラと録画機材を合わせたような機能を持った道具で、キャスターはこれで先程まで行われていた戦闘の模様を見直し、その目で分析していたのである。

「何やら外が騒がしかったようなのでな。何かあったか？」

部屋の戸から顔のみを出し、抑揚のない声で問うマスターに対して
キャスターは艶然と微笑むと、

「ええ少々……しかし問題ありませんわ。マスターの日常になんら
支障をきたしません。明日も学校なのでしょう？ ゆっくりお休み
になってください」

子供を寝かしつける母親のように、朗らかに告げた。

マスターはむっとりとした表情のままジッとキャスターを見ていた
が、やがてひとつ瞬きをすると、

「……………そうか。ならばいい」

ポツリとそう言い置いて部屋の戸を閉め、そのまま踵を返すと足音
も立てずに奥へと歩き去っていった。

この男……妙に気配に鋭い上に所作に隙がない。

動作ひとつ取っても明らかに唯者ではない事が解る。

そしてもうひとつ、例えて言うならば無色透明……とでも言うべき

か。

あらゆる物事に対して心にさざ波ひとつ起こさず、ただそこに居続けるだけのよう……そんな独特の存在感を纏っている。

しかしこれでも正真正銘、このキャスターのマスターは魔術を使えない、一般人なのだ。

ただ、その常人とはかなりかけ離れた感覚と性格のため、単に一般人と呼ぶには首を傾げざるを得ないが。

「ふふ……マスターは相変わらずですこと」

だがそれと知っていてキャスターは尚、笑顔を浮かべる。

この主従の間には、常人では計り知れないような深い信頼関係があるのかもしれない。

少なくとも、キャスターに関しては主に絶対なる忠誠を誓っているようだ。

もっとも、それ以外の感情もにわかに入められているようだ……。

「さて、と……」

主を見送ったキャスターは気を取り直すと、中断していた作業を再

開する。

何事かを呟き、水晶を起動させると部屋の壁に映写機よろしく映像を投影させた。

変身、『^{ヒーロー}五人の英雄・^{ピンク}桃の英雄』！ 続けて、ロード、『アポカリプス』、『デュアルガン』！！

……っ！？ くそっ……ロード、『干将・莫耶』！

だあっ！ リロード、『^{フラッシュ・グレネード}閃光弾』！

映し出されたのはイレギュラーvsランサーの戦い。

そのダイジェスト版であり、主にイレギュラーサーヴァントの宝具の展開の瞬間をピックアップしてある。

映像が進むにつれ、段々とキャスターの目が細められてゆく。

そして映像があるシーンにさしかかると、キャスターの唇が急角度で跳ね上がった。

……やっぱり即答か！ はあ…… キャスターの監視下で使いたくはなかったけど…… コード入力、『One for all, all for one（俺は一人じゃない）』

接続…… 完了、検索…… 該当、クラス…… 適合、召喚準備…… 完了！
来い！ “サーヴァント・ランサー”……！！

「…… 召喚術、いえ…… 違うわね。これは…… 聖杯戦争の『サーヴァント・システム』に近い。さしずめ、イレギュラー自体が『座』を内包しているようなものね」

淡々と一人、言葉を紡ぐキャスター。

映像を見つめる瞳にはある種の光が宿っている。

それは『確信』と『研究心』だ。

キャスターはイレギュラーサーヴァント…… 『一ノ瀬小波』の正体を、初見である程度察知している。

何しろ『魔術師』のサーヴァントだ、その手の事には誰よりも鼻が利くし、勘も推測も働く。

「ある意味、彼が“世界”そのもの……“小世界”とでも言うべきかしら。こんな力を持つ英霊も稀……どころじゃないわね。異端すぎるわ。こんなヤツがいたらまず間違いなく“世界”から修正の対象にされ、最悪はじき出されるか抹消される。それが無いという事は……“世界”がその存在を認めたといい事」

キャスターの推測は恐ろしい程の精度で、『一ノ瀬小波』を丸裸にしている。

現代の魔術師がどれほど足掻こうとも及ばない魔術・神秘の知識を持つキャスター。

その非凡なる頭脳は尚も回転を続け、思考を果てしなく広げていく。

「いえ、むしろ……“世界”が造り出した？ 彼は“カウンター聖杯外から送り込まれた”サーヴァント。この茶番劇に対する修正力であり、水面に投じられた一石。むしろそっちの可能性の方が……フッフ」

不気味な笑い声が薄暗い部屋に反響し、一種異様な雰囲気漂う。

異端の神に祈りを捧げる巫女のように、キャスターの表情はいつそ怪しいまでに陶然としていた。

「興味は尽きないわね……魔術師の端くれとしてぜひとも研究してみたいものだけど、今の私にはそれ以上に大切なものがある。それ

に、戦力として得るのならやはりセイバーね。彼はあまりにも特殊すぎるし、その点使い勝手はセイバーの方がいいわ。流石に今の状況で、多くは望めない、か……」

魔術師は誰しも“根源”に至るためにあらゆる可能性を模索し、外道・非道も辞さない研究に日夜没頭している。

キャスターも現代の魔術師同様、ある種の狂気を秘めているようだ。しかし幸か不幸か、彼女の確固たる優先順位によってイレギュラーサーヴァント『一ノ瀬小波』は、彼女のあらゆる選択肢から切り捨てられた。

もつとも、彼女を取り巻く状況にもつとゆとりがあれば、また違ったのだろうか……。

突き穿つ^{ゲイ}……死翔^{ボルク}の槍ウウー……ッ!!!!

そして最後、召喚された『一ノ瀬小波』のサーヴァントがランサーの所持する代物とまったく同じ魔槍、『ゲイ・ボルク』を解放したところでキャスターは映像を切った。

その顔は背筋が凍るような笑みを貼り付けたままだ。

「フフ……この茶番劇も、過去最高の物となりそうね。そして……
“終わり”はもう間もなく。“世界”は、この舞台の裏に潜む“モ
ノ”を許しはしない……」

歌うように呟かれた彼女の言葉は、静寂に染まった暗闇に溶けるよ
うに掻き消えていった……。

I n t e r l u d e o u t

オマケ

「ところで言峰」

「なんだ？」

「なぜ途中からリンクを切ってやがった？ お陰で柳洞寺での一件
は十分に伝わってねえ筈だが。アーチャーがあ坊主達を襲ったと
ころまでしか知らねえだろ？」

「……ちよっとした野暮用が入った。お前が知る必要はない」

「……そうかい。だったら　奥の机に置いてある、所々に赤いモノが付いてるあの皿とレンゲは一体なんだ？」

「……………」

「正直に言えや。言峰、お前　リンク切って麻婆豆腐食ってただろ？　ほんの少しだが匂いがするぜ？　麻婆の匂いは独特だからな。さながら食い終わって、ワインで口直ししていた時に俺が帰ってきたってところだろうが……はあ。まったく、聖杯戦争より麻婆が大事ってのはどういう事だ？」

「……ふん、『クランの猛犬』の嗅覚はまさに犬並みという事が」

「皮肉はいいからさっさと答えろ」

「……偶々『泰山』のレシピが手に入ったものでな。いい機会だから自作してみた。確か……“外道マーボー”と言ったか？　精緻な作業が伴う調理工程でな、集中するために邪魔なリンクを切った。実はまだ少し鍋に残っているのだが……食つか？」

「いらねえよ！ 冗談じゃねえ！ なんだその不吉すぎる名前は！
！ “アレ”が数日前に間違えてテメエの手製麻婆食って、辛さの
あまり七転八倒してたのをコツチは忘れちゃいねえぞ！！」

「……………」

「なんでちょっと悲しそうな顔してんだよ……………あー、もしかして自
信作だったのか？」

「……………ならば食つか？」

「お断りだ！！」

第二十九夜 「忍者と教導と野球少年（その1）」（前書き）

今回、三人目のポケサーヴァントが登場します。

第二十九夜 「忍者と教導と野球少年（その1）」

side 士郎

「……ん、むう」

意識が覚醒し、窓から僅かに射し込む陽の光で朝の到来を知覚する。傍らに置いてある時計を見ると、長針と短針は丁度正反対の方向にそれぞれ伸び、一本の線になっていた。

「あふ……六時か。習慣つてのは怖いな」

どんな状況でも、いつも通りに目が覚める。

便利であると同時に、異常事態でも普段と変わらない自分の神経に変な畏怖を感じてしまう。

ムクリと布団から身体を起こし、抜け出すとすぐさま服を着替える。

「セイバーは……まだ寝てるか」

上着に袖を通す傍ら、セイバーの居る隣の部屋に視線を移す。

規則正しい寝息が襖越しに聞こえて来、それがいまだ眠りから覚めていない事を教えてくれる。

……まあ、もうしばらく寝かせておいてやるかな。

昨夜は大変だったし。

「さて……朝飯を作るとするか。ちょっと遅くなったけど。桜はもう来てるのかな？」

着替えを終え、台所へ向かおうと襖に手を掛け、開く

「……む、起きたか」

「うわっ!?!」

と同時にいきなり目に飛び込んで来たそのあまりの光景に、思わず尻もちを付いてしまった。

び、びつくりした……！！

「じ、迅雷さん……でしたっけ？　なんで天井からぶら下がってるんですか!？」

「ふむ？　おかしい事を聞くものだな」

「いや、普通誰でも聞くと思っんですけど……」

むしろおかしいのはあなたの方です。

なんでわざわざ人の部屋の前で、天地逆さまの体勢で待機しているのか。

疑問を持たない人間なんてまずいない、いたらそいつの常識を疑う。

(……まあ、格好からして答えの予想は付くけどさ)

口元を覆うマフラーのような手拭いに片目が隠れるほどに伸ばされ、前方に流した前髪。

何よりその着ている服が、恐ろしい程の自己主張をしていて止まない。

「それは私が

忍者だからだ！」

黒の忍装束を身に纏い、逆さ吊り同然の体で腕組みしながら堂々と
言い放つ、小波が昨夜呼び出したサーヴァント・アサシン 迅^じ
雷隼人。んらいはやと

(忍者って……解るけど、忍んでないじゃん、全然……)

予想と寸分も違わない断言に、果てしない虚脱感を感じてしまった
俺はきつと悪くない……。

「おはよう、士郎」

居間に入ると、そこには既に遠坂がいた。

テーブルに頬杖をついて欠伸を噛み殺しつつ、ヒラヒラと手を振り
挨拶してくる。

昨日のあの幽鬼のような表情ではないところを見ると、結構前から起床していたのか。

「おはよう、早いな遠坂。小波はまだ寝てるのか？」

「まだ見てないから多分ね。昨夜一番苦労したのは小波だし、ケガが治っても体力はそうはいかないんでしょ？ もう少し寝かせといてあげなさいな」

「ああ、そうだな。……桜はまだ来てないのか。珍しいな、いつもならもう来てる筈なのに。藤ねえは所用で今日は来ないけど」

壁に掛っている時計を見ると時刻は六時十五分。

ここまで遅刻する桜も珍しい……というか、遅刻なんて一度もした事なかったんじゃないか？

だが答えは思わぬところから、思わぬ形で返ってきた。

「あー、桜ね。あの娘なら追い返したわ」

「はあっ!?!?」

思わず声を発した遠坂を振り返る。

「追いついたって……なんでさ？」

「あのね、あなたまさか自分が何をされたか忘れたの？　ここはもう安全地帯でもなんでもないので、むしろ紛争地帯の前線基地よ。そんなところに桜を置いておける？」

「む……」

確かに……そう言われてしまえば何も言い返せない。

出来れば桜にはこの戦争に関わって欲しくはない。

既にキャスターから干渉を受けてしまってる現状では、桜をここから遠ざけておくべきだ。

もつとも、兄である慎二がマスターである以上、まったく関わりがないとは言いきれないが慎二も強いて桜を巻き込もうとはしないだろう。

「すまん遠坂。また損な役回りをさせちゃったな。桜……怒ったか？」

「物凄い目つきで睨まれたわ。どことなく殺気すら混じってたわね。一応十日経ったら私は出ていくからその時までって言ったら、どうにか引き下がってくれたけど」

「……本当にすまん。桜の恨みを買うような事させて。顔見知りなのに」

「……別にいいわよ。あの娘が危険な目に遭わないのなら、恨みぐらいいくらでも買ってあげるわ」

頬杖をついたまま複雑な表情で呟く遠坂。

俺は黙ってその場で深々と頭を下げた。

それから一時間後、起床したセイバーと小波を交えて都合四人で、この家では割と遅めの朝食。

「……いただきます」「……」

今日の朝のメニューは豆腐とワカメの味噌汁と卵焼きにサラダ、鮭の切り身、そして炊き立てのご飯。

和風かつ質素なラインナップだが、まさしく日本の朝という感じがするので俺は結構気に入っていたりする。

「うん、やっぱり日本人の朝はご飯だよなあ……あ、これはワカメの味噌汁か。……これを見てるとどうしてもあの髪形を思い出すなあ。物凄く特徴的だったし……」

……イカン、俺も思い出してしまった。

桜の事があった後だからその繋がりで。

とりあえず、小波の言葉は聞かなかった事にしよう……。

「ちょっと小波、食欲が失せるような事言わないでよ。まったく……」

何気に酷い事を言いながら味噌汁を啜る遠坂。

……これ聞いたらアイツ、自暴自棄になったあげく自殺するんじゃないか？

ヘンにプライドが高いヤツだしなあ……本人には絶対に言うまい。

ちなみに遠坂も今日から学校を休んでこっちに専念するらしい。

一応結界監視のために、学校には使い魔を放っておくそつだ。

(…………あ、そう言えば)

卵焼きに箸を伸ばす傍ら、ふとある事を思い出し小波に尋ねる。

「なあ小波。迅雷さんの分、作らなくてよかったのか？ 本人に聞いたら「気持ちだけ受け取っておこう。如何なる時も警戒は必要だ、そしてそれが私の役目なのだからな」とか言ってたから用意しなかつたけど」

「ん？ ジンライコーチの？」

「…………コーチ？ うん、まあ…………」

小波の言い方に少々引つ掛かりを覚えたものの、些細な事なので頷いて先を促す。

小波は鮭の切り身を解していた手を止め、何かを考え込むように視線を宙に彷徨わせると口を開いた。

「本人がいらないって言ったんならいいんじゃないかな？ そもそも受肉してる俺、あとセイバーはともかく、サーヴァントには基本

的に食事は必要ないし、それはコーチも例外じゃない。それでももしお腹が空いたら、多分持つてる丸薬で済ませると思うよ。」

「丸薬って……それでいいのか？」

「格好見たら解ると思うけど忍者だし、あの人。しかも上忍レベルの」

アハハと苦笑しながら鮭の解体作業を再開する小波。

……あー、なんだ、とりあえず……あの人の事を深く考えるのはやめにしよう、うん。

「忍者だからな！」で全部説明出来る人、という事でひとつ。

「……傍目から見たらニンジャかぶれの変な男ですけどね」

サラダを頬張りつつ、サラリとキツイ一言を発するセイバー。

いや、確かにそうだが……それってセイバーが言えた義理じゃないよな？

他のサーヴァントも例に漏れず……だけどその点で言うなら小波はまだマシな方が。

見た目がどこにでもいそうな野球少年だからな。

「男？ ……まあ、いいか」

口に入れたご飯を咀嚼する傍ら、小波が怪訝な表情で何か呟いたようだったがよく聞き取れなかった。

第二十九夜 「忍者と教導と野球少年（その1）」（後書き）

『流し打ち』が身についた!!

ステータスが更新されました。

第三十夜 「忍者と教導と野球少年」(その2) 「(前書き)

士郎強化回です。

第三十夜 「忍者と教導と野球少年（その2）」

side 士郎

「ふむ、ようやく来たか。待ちくたびれたぞ」

「じ、迅雷さん！ …… ですか」

朝食を終え、昨日から恒例となったセイバーとの鍛錬のため道場へ赴くと、既にそこには迅雷さんがいた。

しかもまた天井からぶら下がった体勢で。

怪しさ満点のその光景にセイバーも一緒についてきた遠坂も啞然としている。

「ジンライコーチ」

「む、小波か」

ただ一人、彼を呼び出した張本人であり主でもある小波だけは平然

とじていた。

笑顔で逆さ吊りの忍者マニアに話しかけている。

恐ろしい程にこの状況に慣れている……まあ一応マスターだし、耐性があつて当たり前か。

……でもなんで“コーチ”って呼ぶんだ？

「例の“あれ”、用意出来てます？」

「うむ、一応用意した事はしたが……お前、本気か？」

「それぐらいやらないと、これから先はちょっとマズイと思うから……」

「しかし、その少年には少々キツイと思うのだが。お前ですらアしだっただろっ？」

「これに耐えられないようなら、遅かれ早かれ死ぬだけですよ。なら、少しくらいの無茶は覚悟して乗り越えて貰います。まあ死ぬほどのものでもないです。そもそも土郎君は相当無茶な性格してますから……」

「……お前が言えた義理ではなかるうに。まあそれはともかく、結局は少年の意思次第だな」

何やら不穏な会話が二人の間で交わされていたかと思うと、突然迅雷さんが視線をこちらに向けて来た。

射抜くような鋭い視線に思わず一歩たじろぐ。

前髪に隠れて片方の目が見えない分、余計に迫力がある。

「少年」

「は、はい!?!」

「セイバーとの鍛錬前に悪いのだが……私の教導を受けてみる気はないか?」

「きよ、教導?」

うむ、と頷きつつ逆さまの体勢からスタン、と華麗に着地を決め、足音も立てずこちらに近付いてくる迅雷さん。

この体捌きひとつとっても彼が常人離れた力量の持ち主なのだと解る。

そんな実力者が俺に教導を……？

「……それは忍者の修行つて事？」

放心状態から復帰して、今まで傍観に徹していた遠坂が迅雷さんに質問を飛ばす。

その顔は若干胡散臭げな表情だ。

「少しそれに近いものはあるがな、遠坂嬢。少年に受けて貰うのは早い話が“潜在能力を無理矢理引っ張り出す荒行”だ。もっともそっちがメインで、教導はその後にちよっとした事をやるだけなのだが」

「荒行……ですか？ しかしそれは失敗すれば命がなくなる、とかそういう類のものですか？」

セイバーが軽く首を傾げながらも警戒を露わにしている。

だが迅雷さんは首を横に振り、その可能性を否定した。

「いや、別に失敗したからとて死ぬというふうなものではない。むしろ失敗などない、と言っておこう。そもそも“潜在能力を無理矢

理引つ張り出す”と言ってもそれは向上のきつかけを作り出す程度の事でしかない」

「つまり伸びるにはあくまで本人の努力が必要だ、という事ですか？」

「うむ。といつてもその後の過程で梯子程度は用意してやるつもりだが。ちなみにこれは小波の頼みでもある。私を呼び出したのは歩哨のためだけではなく、その少年の成長を促すためでもあったのだ。そうでもしなければ、遠からず宵闇に屍をさらす事になりかねんからな」

「「確かに……」」

驚異のシンクロナ率でゆっくりと互いに頷きあつ遠坂とセイバー。

……もうなんでも言ってくれ。

こっちは既に悟りを開いているんだ “諦観” という名の悟りをな。

だから……辛くなんて、悔しくなんてないんだぞ……ッ！

目の前がなんか滲んで見えるのも気のせいだ！

「現実逃避はそこまでにしておけ少年。それで、どうする？ 私の
教導を受けるか否か、全てはお前の意思次第だ」

俺の葛藤を切って捨て、迅雷さんが真剣味を帯びた眼差しで最終確
認を迫ってくる。

……そんなもの、聞かれるまでもない。

俺の意思は既に決まっている。

昨夜痛感した、あの無力感を二度も味わいたくはない。

ならば……どれほど辛かろうとも、たとえ泥を啜ろうとも、全て乗
り越えてやる！

「……お願いします！」

決意を秘めた言葉と共に、迅雷さんに向かって勢いよく頭を下げた。

「で……これは何？」

「何って、リンの見たまんまの物だけど」

「ケーキ……ですか？」

「何故にケーキなんだ？」

そうして始まった迅雷さんの教導……だったのだが。

一番最初に出て来たのは迅雷さんに言われて小波がどこからか持ってきた、白い直方体の箱に入ったデコレーションケーキだった。

一般的なクリスマスケーキのような形をしたやつで、白い生クリームで綺麗にコーティングされ、上にイチゴが六つ乗っかっている。

「迅雷さん「コーチと呼べ」……迅雷コーチ、これは？」

背後に佇み、座った体勢のこちらを腕組みして見下ろしている迅雷さん……もとい迅雷コーチを振り仰ぐ。

何故か忍装束の上から、“M”のロゴマークが胸元に刺繍された赤黒基調のウインドブレーカーを羽織っている。

当然ながら、組み合わせがあまりにミスマッチ過ぎて違和感が否め

ない……善なのだが妙に着慣れている感じがするのでそれほど変だとは感じない。

というか、どこから取り出したんだろう……？

「見ての通り、ケーキだ」

「いえ、それは解るんですけど……そうじゃなくて、教導とケーキに何の関係が？」

「その疑問も解るが、まずは黙って食べ。心して、な」

「はあ……？」

言っている事が今一つ掴めず、首を傾げる。

どういう事だ？ このケーキを食べればパワーアップでもするのか？

……どこそのキノコみたいだな、それって。

「ええと……とにかく、これを食べればいいんですね？」

「うむ。心して、な」

「……あ、あの、私も食べてもよろしいでしょうか？」

と、ケーキをジッと見ていたセイバーがおそろおそろといった感じで迅雷コーチに尋ねる。

ああ……そういえばセイバーはまだケーキは食べた事なかったっけ。

誘惑に負けたか。

「あー……まあ、いいだろう。量としては、半分も食べればいいようにしたからな」

言っている事はよく解らないが、つまり俺はこれを最低半分は食べなければならぬって事か。

流石に朝食の後にこれはちょっとキツイが……仕方ないか。

……しかし、なんか微妙に返答の歯切れが悪かったような……？

「リン、あなたはどうしますか？」

「……せっかくだから頂くわ。小波はどうするの？」

「あ、ああ……俺は遠慮しとくよ。一度食べた事があるからな」

そうやんわりと断りを入れた小波だが、よく見ると何故か目が泳いでいる。

一体どうした……ん？ ちょっと待てよ、さっき迅雷コーチはなんて言った？

思い出せ……思い出せ……そうだ、確か……一回同じ事を言っていたよな。

「さて、それじゃ頂きましょうか」

「頂きます」

「え、あ、えっと……い、頂きます」

俺の思考を余所に二人の手がパン、と合わせられ、それにつられて慌てて俺も両手を合わせる。

目の前にはいつの間にか、四等分に切り分けられたケーキのうちの二つが紙皿に盛られて置かれていた。

皿の横に置かれたプラ製のフォークを手に取り、ケーキの一角を突

き崩す。

(……見た目は普通のケーキっぽいな。俺の気の回しすぎか?)

そして奇しくも三人同時にケーキを口の中へと放り込み、咀嚼する。

だが次の瞬間、

「「「……！！！！」」」

まるで雷に打たれたかのような衝撃に襲われ、フラッシュバックのように脳裏に迅雷コーチの言葉が甦った。

1004

心して、な。

(……そ、そういう……事、か)

二度、コーチから繰り返し告げられた言葉。

その真意を本当の意味で理解したと同時に、耳を劈つくような三つの

絶叫が道場内に響き渡った。

side 小波

「……こ、これは一体何なのよ。こんなのケーキじゃないわよ。ケーキという名の“物体X”よ、ケーキに謝りなさい……うええ」

「うう……し、舌が腐るかと思いました。ケーキというのは、これ程に不味い代物だったのですね……」

「いや、それは違うよセイバー。ケーキは本当は甘くておいしいお菓子だよ。ただ、これはちょっと、ね……」

フォークを取り落とし、涙目で蹲るセイバーとリンに苦笑を浮かべつつ、台所から持ってきた水を差し出す。

二人はそれをひったくるようにして受け取るとコップを勢いよく傾け、口の中を洗い流すようにゆすぎながら嚥下していく。

やがて水を飲み干すと落ち着いたのか、ホッと息を吐いた……と思つたら『キッ!』と鬼も裸足で逃げ出すだろっ恐ろしい目つきでこ

ちらを睨みつけてきた。

「ちょっとアンタねえ、これがこういうモノだって知ってたんだつたら止めなさいよ！ 死ぬかと思ったじゃない！」

「お、落ち着けリン！ そもそも止める前にもう食べちゃってたんだよ！ あとセイバー、殺気を飛ばすのはやめてくれ……怖いから」

「私にあんな毒物を食べさせるからです！」

いや、食べさせるも何も自分から進んで食べたんじゃないか……。

それにあれは厳密には毒じゃない。

毒と思っても仕方がない程……いや、むしろ毒に失礼な程不味いけど。

「……………」

そして口にしたもう一人はというと。

こっちはうつ伏せで冷たい板張りの床に倒れ伏し、大の字に投げ出した手足が時折ビクンビクン、と痙攣している。

おまけに顔面は蒼白を通り越して土気色、生気がまったく感じられない。

(……死後硬直?)

背筋に冷たいモノが流れる。

それをあえて無視し、俺はその尊い犠牲者に向き直るとビシッ、と踵を揃え、直立不動で最敬礼を送る。

士郎君……知らなかったとはいえアレを食した君は英雄だ。

願わくば、彼の者の永久とわの眠りが安らかならん事を。

「……って、勝手に殺すな！」

「うわっ、生きてる!?!」

「セイバーが消えてないんだから当たり前だろ！」

と、物言わぬ屍状態から一転、士郎君がガバツと跳ね起きた。

まだ顔が青褪めているものの、肩をいからせ目にキラキラとした獯猛な光を宿している。

そして眦を吊り上げたまま、ズカズカと俺の後ろにいるジンライコーチに詰め寄っていった。

「コーチ！ 一体あれは何なんですか！？ 危うく死ぬかと思いましたが！ というか、人が倒れているところに無理矢理ケーキを押し込まないでください！ 窒息するじゃないですか！」

そうなのだ。

あの特製ケーキは全て土郎君が食べ切った……というか、食べ切らされた。

最初の一口で三人がノックダウンするや否や、ジンライコーチは目にも止まらぬ早業で残ったケーキを回収すると、土郎君の口の中に次々と押し込み始めたのだ。

土郎君の元々の取り分は勿論、セイバーとリンの分まで全部。

白目を剥き、意識を完全に失っている土郎君の口を開いてケーキを放り込みモグモグと咀嚼させ、指先で筋肉を操って強制的に嚥下させる。

これを繰り返す事、およそ三分。

めでたくあのケーキは全て土郎君の胃袋に消えていった、という訳だ。

……コーチ、アンタは鬼か。

「お前が食わんとすべてが始まんからな。それから私は最初に言った筈だぞ？」
『心して』と」

「ええ、ええ、口に入れた瞬間思い知りましたけどね！でも最初に言ってくれてもよかったんじゃないですか？
『死ぬほど不味い
が堪える』って！」

「ふむ、では聞くが……言ったらお前は躊躇いなく食べたか？」

「いいえ」

「……即答しないで欲しいのだが……まあいい。とりあえず、タネ明かしと行こうか」

ジンライコーチはフウ、と溜息を吐くと徐に閉じていた目を開き、
士郎君を見据える。

「今お前が食ったのは、私が調査した秘薬を混ぜたケーキだ」

「秘薬？」

「うむ。私の故郷である忍者の里に代々伝わっている物でな。滋養強壮や肉体の活性化など、人体に様々な効果を齎す。ただし、知つてのように味が非常に残念なのが欠点でな。ケーキ等に混ぜるなどせんと、とても抵抗なく口に出来たものではない。ちなみに材料が何かは……聞かん方がいい」

「……………」

ヒクリ、と表情が強張る土郎君。

その顔には『なんて物を食わせてくれたんだ』とはつきりと書かれている。

ちなみに同じ苦味（誤字にあらず）を味わったセイバーもリンも思いつきり渋面だ。

無理もない、その想像を絶する不味さは『俺』も思い出したくない程だから……。

「とはいえ、一応既定の量を服用した以上は身体に何らかの変調が出る筈だ。即効性の代物だからな。どこか変わったところはないか？」

「そう言われても特には……んん？ 何だ、急に体が熱く……え、

何だこれ！？　力が漲ってくる……！？」

訝しげに首を傾げていた土郎君だったが、突如驚愕の表情で自分の身体を見回す。

よく観察してみるとさっきまで死人のような色をしていた肌に血色が戻り、心なしか目の光が強くなっている気がする。

「ようやく効果が顕れたか。今回使用した秘薬は肉体の活性化に重点を置いて調合している。今の状態を例えるなら、身体各所のリミッターが緩み切っている状態だな。壁が薄れていると言い換えてもいい」

「壁が……薄れている？」

ジンライコーチの説明にポカンとした表情を浮かべる土郎君。

コーチはひとつ頷いて、説明を続ける。

「つまり今の状態で鍛錬をすれば肉体的に伸び悩むという事がほぼない。私は門外漢だが、おそらく魔術の方もな。だからこの隙に効率よく徹底的にお前の身体を矯正し、あらゆる面で最適化するよう構成し直す。……という訳で次の教程だが、お前にはある特殊な身体を受けて貰う」

「整体……ですか？」

「うむ、“忍者整体”というのだが……ひとつだけ注意事項がある。整体をしている間は脱力したまま決して動くな。さもなければ効果がなくなるばかりか、身体が不随になる可能性がある」

「……えっ？」

「ではいくぞ」

「ちょ、ちょっと待……っ、あうっ！」

不穏な忠告に慌てて手を上げて制止する土郎君だったが、言い終わらないうちにジンライコーチが瞬時にその背後に回り込む。

そして両肩の付け根にそつと手を置くと、次の瞬間『メキメキ、カクン！』という異音と共にダラリ、と不自然な形で土郎君の両腕が力なく垂れ下がった。

まさに電光石火の早業、一瞬で両肩の関節を外したのだ。

その異様な手際の良さにセイバーとリンの顔色は若干青褪めている。

「いいか、そのまま筋一つ動かすなよ。両腕が動かなくなっても構わんのなら別だがな。……では、このまま外せる関節は全て外していくからな」

「いや、あの！　せめて心の準備をつ……アッー！」

再び道場に絶叫が木霊する。

「ギ、ギブ、ギブ……！」　「ダ、ダメ！　『キヤメルクラッチ』はダメ！」と、どこかで聞いたような悲鳴を上げ続ける土郎君。

『メキメキ……』『ゴキン！』『ボキッ！』とリアル過ぎる効果音と相まって、現場はかなり凄惨な光景と化している。

そして今の土郎君は、さながら空中にぶら下げられたマリオネットのような状態だ。

ジンライコーチの腕の中で全身が脱力しきり、あらゆる関節が有り得ないような曲がり方をしている。

それが人形ではなく、生身の人間……間違ってもお子様には見せられない。

「ふむ？　そこまで口が動かせるとは、まだまだ余裕があるようだな。ならば少しペースを上げるとするか、時間も押している事だしな……ふんっ！」

「はうつ！？ ……ぐがあああああつ！！ いつそ殺せええええええつ！！」

士郎君の断末魔の雄叫びは、それからあと30分は続いた。

第三十夜 「忍者と教導と野球少年（その2）」（後書き）

衛宮士郎の肉体が最適化された！！

衛宮士郎から『センスx』がなくなった！！

作者の中では士郎は『センスx』持ちです。

第三十一夜 「忍者と教導と野球少年（その3）」（前書き）

4月に突入して猛烈にプライベートが忙しくなっていました…
…。

現在、執筆スピードが極端に低下しています。

第三十一夜 「忍者と教導と野球少年」(その3)

Interlude 31-1

side 桜

「……………」

“どうして”

脳裏に浮かぶのは、ただそれだけだった。

どうして、あの人だけなのか。

あの方は、何もかもを持っている。

私にはない物をいくつも、私が望んでも手に入れられなかった物を、いくつも。

今日からこの家には絶対近付かないでちょうだい、桜。ただし期限付き。十日経ったらわたしは出ていくから、その時までね。

ちなみに前回みたく拒否は認めないから、そのつもりで。

有無を言わさぬ威圧感を纏ったあの人の言葉。

朝、先輩の家の玄関を開けた時、既にそこに立っていた遠坂先輩から一方的に告げられ、そして鼻先で扉を閉じられた。

ショックだった。

理解出来なかった。

認めたくなかった。

どうして、先輩の隣にあの人がいるのか。

どうして、我が物顔であの場所を取り仕切れるのか。

どうして 私から先輩を取り上げるような真似をするのか。

理由は……何となく解る。

私も、この町の異変には気付いている……というよりは、間接的にせよ関わっているから。

あのセイバーさんがいるというのが、先輩の事情を如実に教えてくれた。

きつと、先輩は危険な目に遭ったのだろう。

だからあの人は私を遠ざけた、巻き込まないために。

遠坂先輩のアレはきつと独断、先輩ならあんな対応はしないし、許さない。

でも考えてる事はおそらく同じ、だから逆らうつもりはない。

……でも。

(……嫌、本当はそんなの嫌。どうして……いつもあの人だけ)

頭で納得出来ても、感情だけはどうにもならない。

ドロドロとした暗い感情が胸の奥で渦巻いているのが自分で解る。

解ってしまっ。

そんな事を考えてしまう自分が嫌でたまらない。

自己嫌悪が更なる嫌悪を呼ぶ、悪循環。

高速回転する遠心分離機のようにグルグルと思考がループし、薄暗い感情が濃縮され“闇”から“黒”を創り出していく。

イヤ、ドウシテ、ナンデアノヒトダケ。フコウヘイダドウシテドウシテドウシテイヤソンナコトカンガエチャダメ……サイテイ

ダソンナキタナイワタシガキライキライキライダカラワタシハ、ア
ノヒトガ、ニク

「桐さん、間桐さん！」

「ッ!？」

声に思考が断ち切られ、ハッと顔を上げる。

視線の先に、細々と文章が書かれている黒板の前に、怪訝な表情を
した国語担当の先生がいた。

……そうだ、今は授業中だったのだ。

「どうしたの？ 顔色が悪いようだけど」

「あ……あの、すみません何でもありません」

「……そんな青い顔をされたままそう言われてもねえ、説得力がな
いわよ。具合が悪いなら保健室へ行って来なさい。ひどいようなら
早退してもいいけど」

首の辺りで束ねている茶色がかった長髪をフルフルと揺らしながら、

心配そうに言い放つ先生。

この学校は比較的若い先生が多いが、そんな中でこの先生はある意味異彩を放っている。

見た目は二十代半ば、だけどその柔和で親しみやすそうな雰囲気裏に一本芯の通った、しっかりとした自己を持っている。

それでいて優しく、包容力もあり且つ聡明な立派な先生だ。

私はこの先生を藤村先生と同じくらい尊敬している。

「え！？ い、いえ本当に大丈夫ですから！」

「病人の“大丈夫”はアテにはならないの。酔っ払いの“酔ってない”発言と一緒にいいからとっとと行って来なさい」

「あ、あの……はい、解りました」

これ以上、先生の言葉には逆らえない。

先生の言葉には、そう思わせるだけの力がある。

「うん、素直でよろしい。お大事にね、間桐さん」

「……はい、失礼します。沢井先生」

ニコツと笑った先生……沢井ようこ先生に頭を下げ、教室を出て保健室へと重い足取りで向かう。

結局、あまりに顔色が悪かったらしいせいか保健室で早退許可書を貰うハメになってしまった。

「……最低」

太陽が真上に差しかかるうとする頃、家路をのろのろとした歩みで辿る。

タールのようにどす黒いモノが、心の奥に僅かにこびりついて離れない。

心、身体、その全てが重く、鉛でも巻きつけられているかのようだ。

（とにかく、今日はもう休もう。帰ったら少し寝て、それから

ツ！？)

ドクリ

“ナニカ”が心臓の中で蠢いた、気がした。

ビクリとその場に立ち止まって慌てて胸に手を当て確かめるが、既にその不可思議な脈動の残滓は跡型もなく消え去っている。

ただ、今までになく嫌な感じの、それでいて心地いいような、そんな矛盾した余韻だけが胸中に僅かに残るのみだった。

(……何だったんだろう、今は)

首を捻るが、答えは出て来ない。

なら考えても仕方ないかと芽生えた疑問を脇に払い、思考を打ち切る。

そして止めていた足を再び動かし、抜けるような青空が広がる家路を行く。

頭上の蒼天とは真逆の、薄暗い不安を胸に抱えたまま。

I n t e r l u d e o u t

s i d e 士郎

「生きてる？ 士郎」

「……………ああ」

心配そうな遠坂の声に返答するものの、喉の奥から絞り出すような声しか出せない。

それだけの苦行だった訳だが……………何とか、乗り越えられた。

「遠坂も……………落ち着いたか」

「……ええ、何とかね。一応やり過ぎた事、謝っておくわ」

「……いや、それは別にいいけど」

現在時刻は十一時前、迅雷コーチの教導を受けておよそ三時間が経った。

死ぬほど不味い秘薬入りケーキと、全身の関節を外して再接合する忍者整体で一時間。

「反射神経からなる『見切り』の力を養うため」と称して母屋へ移動し、襖から襖へ飛び出すコーチを手裏剣で瞬時に撃ち落とす修行に一時間（ちなみに手裏剣は比較的投げやすい四方手裏剣だった。もっともコーチに当たる寸前に全て受け止められたがそれで良かったらしい。尚、手裏剣は本物だった……）。

その際、何故か襖の向こうの庭の木に縛り付けられた遠坂に手裏剣が当たりそうになって（フェイントなんかでタイミングを外した際に当たるように調整されていた。プレッシャーをかけるための処置だったらしい。運良く当たらなかったが二回ほど顔の近くを掠めてしまった）、終わった後にキレてガンドを乱射して追いかけてくる遠坂から逃げきるのに一時間。

今思い返せば一部が何か非常に間違っていた気がするが、最初のケーキと全体の衝撃で正常な判断が吹き飛んでしまっていたようで、中盤以降は「うああああっ！ もう何でも来いやあああ！」と、半ばヤケクソ気味になっていた。

そして現在、回り回って戻って来た道場の床に大の字になって疲弊した身体と精神を一旦休めている真つ最中だ。

「ふむ、一部予定と違ったところはあったが、まあこれで私の教導は終了だ。引き続き、セイバーなり遠坂嬢なりの鍛錬を受けるといい。秘薬と全体の効果で、伸びは今までの数倍は固いだろうからな。鉄は熱いうちに、だ」

「……あ、ありがとうございます……た」

頭上から降ってくる迅雷コーチの終了宣言。

息も絶え絶えに返答し、声のした方を振り向くと既に迅雷コーチの姿はなかった。

再び歩哨の任に就いたようだ。

その後、遠坂は母屋の自室へと戻っていった。

「ちょっとやっておく作業があつて籠るから、邪魔しないでね」「、だそうだ。

「お疲れ土郎君。はい、水」

「小波……ん、ありがとう」

遠坂と入れ替わる形で傍まで来ていた小波がコップを差し出してくる。

気だるさを振り払い、無理矢理上半身を起こすとコップを受け取り、一気に煽った。

冷たい滑らかな感触が喉を潤し、体内から次々と湧き上がる熱を宥めてくれる。

少しするといい具合に身体と心が弛緩し、徐々に落ち着いてきた……が。

「まあ、自分で頼んでおいて何だけでも耐えられたね、ジンライコーチの修行に。もっとも、途中からヤケクソになってたけど」

「そりゃあ、そうでもなければとても持たなかったからな。それに、秘薬の影響か精神が異様に昂ってたし。まあ今は割と落ち着いているけど。……それにしても、まだ体の熱が引かない……いや、どころか、力がどんどんあふれ出てくる感触がする」

感じる。

身体の奥底で、マグマのように熱いナニかが煮え滾り、それが普段以上の活力を全身に与えてくれる。

さっきまでの疲労感も倦怠感も瞬時に払拭され、じんわりと胸の奥が熱を帯びてくる。

今なら何でも成し遂げられる。

そんな全能感が身体中に漲り、身体を動かしたくてたまらなくなっている。

さっきまで（遠坂にガンドを浴びせられて）散々動き回っていたっていうのに……。

「まあ、味の代わりに効果は抜群だからなあ、あのケーキは。それに忍者全体の影響もあるんだろうね。全身を無駄なく矯正した事で、秘薬の効果が何倍にも高められてるんだ」

「へえ……って、やけに詳しいな。もしかして小波も喰らった事あるのか？」

「……うん。両方とも、土郎君の三割増しのヤツをね。一応、身体がまだ十分に出来てない土郎君には、ある程度手加減するようにってジンライコーチには頼んでおいたんだけど」

「……そ、そうか」

顔を蒼白に染めながら迷懐する小波、喜ぶべきか同情すべきか判断に迷う。

アレの三割増しか……ゾツとしないな。

よく耐えられたもんだ。

「さて、では次は私の番ですね。準備してください、シロウ」

「ん？」

声のした方を振り返ると、二本の竹刀を持ったセイバーがいた。

んん……規定事項だったとはいえ、今度はセイバーとの稽古か。

迅雷コーチが去ってからまだ五分程度……休憩時間が短すぎだけど、まあいいか。

鍛錬自体に否やはないし、疲れも全くと言っていいほど残ってない。

それに身体も疼いてる事だしな。

「……よし！ やるか！」

バシッ、と掌に拳を打ちつけ立ち上がると、セイバーが持っていた竹刀を投げ渡してきた。

慌てずにバシッと受け取り、セイバーに対して正眼に構え、見据える。

(……………)

互いに構え睨み合う最中、頭の片隅で思考を広げる。

今俺達を取り巻く状況は、薄氷を踏むが如く非常に危うい物だ。

昨日のような無様はもう出来ない、そんな余裕はどこにもない。

ならば　　今この時、ひとつ殻を破る！

今を置いて、成長すべき時は他にない。

俺が多少進歩したところで、この戦争の趨勢に何ら影響を及ぼす事はないだろう。

だけど…………もう、足手まといになるのだけはゴメンだ。

せめて、セイバーや小波、遠坂の足を引っ張る事のないように。

たとえ僅かでも、皆を助けられるように。

迷うな、今の己を信じて…………やってみせろ、衛宮士郎！

(…………ッ！)

身体の芯から湧き上がる熱と高揚を意思の力で制御、その全てを刹那の集中力へと還元し。

筋肉に無駄な力を入れる事なく、必要最小限の力のみを澱みなく抽出し、自然な動作で手繰り操る。

融通無碍の『自然体』…………己にとっての“最適”を、己の意思で肉体に落とし込み、体現する。

「…………ク」

己の期待に見事応えた己自身に対して我知らず、失笑が漏れる。

…………不思議な事だ、昨日は全く出来なかった動きが、今日は自然に行える。

たった一日で、決意のひとつでこれだけの進歩が出来る物なのか。

これもさっきの苦行の賜物…………だけではないな。

確かにそれも（主に肉体面で）大きな部分を占めるが、あくまでそれは切欠にすぎない。

その根幹は……一夜明けた今でも、鮮明に脳裏に思い描かれるあの時の光景。

思い出すだけでも虫唾が走る心地だが、何故か目に焼き付いて離れなかった。

俺の最も嫌いな、それでいてどこか近い物を覚える男……あの弓兵の戦う背中と、振るわれる泥臭い剣。

そして　その強靱な意志を宿す、鷹のような眼差し。

「む！ ……ふむ」

僅かにセイバーが目を細め、口の端がゆっくりと持ち上げられる。

表情が、喜びに彩られている。

「成る程……事ここに至ってひとつ、壁を越えましたね。正直、付け焼刃にすぎないこの鍛錬でしたが……意図はともかく、やった意味はあったようです。ですが、その成長がハリボテでは意味がない……来なさい、シロウ」

「……行くぞ、セイバー！」

叫び、一步を踏み出す。

昨日から今日、まだたった一日の師弟の間柄。

だがそれでも親愛なる我が剣の師匠に対して、己が成長の証を立てるために。

第三十二夜 「忍者と教導と野球少年（その4）」

Interlude 32-1

side セイバー

「……ここにいたのですか」

「む、セイバーか。私に何か用か？」

探し人は縁側にいた。

彼は足を外に投げ出して、ぼんやりと空を見上げている。

しかしそんな気の抜けるような体制でありながら、しっかりと意識を屋敷全体に張り巡らせている。

座しているその隣に腰を下ろし、並んで座るような恰好になる。

「あの少年と稽古をしていたのではないのか？」

「もう終わりました。今は昼食の準備をしています。……しかし、あなたが処置を施したほんの僅かの時間であそこまで劇的に進歩出来るものなのですか」

「これは私見だがな、あの少年は努力こそしていたがそれが空回りしていた。私がそれを矯正した事によって歯車が噛み合い、積み重ねた努力の成果がようやく現れ始めた。加えて、何かしらの心境の変化でもあったのだろう。それが成長の後押しをする事になった。そんなところだ」

空を見上げたまま、さして何でもない事のように語る隣人……迅雷隼人。

しかしその内容は決して軽い内容ではない。

そもそも会ってすぐの人間の力量・状況を、僅かに観察しただけで理解出来るものなのだろうか？

コナミから事前の説明くらいはあっただろうが、それにしただって尋常の事だとはとても思えない。

目の前の人物はかなり人を見る目……というよりは、人の力量や成長度合を把握する観察眼が肥えている。

おそらく、人に教えるという経験を多く積んできたのだろう。

その中で、今現在一体その人に何が必要なのか、何をしてやるべきかを見抜く観察力を身に付け、その人に見合った適確且つ独自の指

導方法を作り上げてきた。

きつとそういう事なのだ。

成る程、コナミがこの人物を“コーチ”と敬意を込めて呼んでいるのも頷ける。

おそらくコナミも、この人物に何らかの指導を受けたのだろう。

私自身、人に教えたりした経験はほとんどない。

ある意味、シロウが私の初めての弟子、とも言える。

私では短時間であそこまでシロウの力を引き出してやる事は出来なかった。

それが悔しくない、と言えば嘘になるが、結果的にシロウにとってプラスになるのならそれはそれで構わないとも思っている。

と、彼が空に向けていた視線をこちらに移し、前髪に隠れて片方しか見えない目を僅かに細めた。

「それで、本題は何だ？ わざわざ私を探していたくらいなのだから、それなりの事なのだろう？」

「少々、貴方にお聞きしたい事があります」

水を向けられた件の人物はさして表情も変えず、淡々と尋ね返してくる。

心に僅かの警戒心を抱きながら、私はその心を提示する。

「指、です。一見したところ貴方の指は、男性にしては細く、華奢すぎます。そしてもうひとつ、何気なく行っている動作のひとつひとつが、どこことなく丸みを帯びています。無論、二つとも私の受け取った印象による推測に過ぎませんが……あながち外れているとも思えません。私の直感には伊達ではありませんから」

「…………ク。“直感”、か。成る程な」

手拭いに覆われた口元が歪んでいる。

笑っているのだ。

私の乱暴な推測に対してか、下手に勘ぐられてしまった自分自身に対してか。

それが何に対しての、どういった理由で浮かべているものなのかは解らない。

「……頃合、という事か。まあいい、問いの答えを示そう」

その声が聞こえてきたと同時にボフツ、と突如視界が真っ白に染まった。

「な……ッ!? ゴホツ、ゴホツ! え、煙幕!？」

いきなりの事に煙を思い切り吸い込んでしまい、激しく咳き込んだ。慌てて口元を手で覆うが時既に遅し、苦しさのあまり目に涙が僅かに滲む。

毒などは細工されていないようだが……質問の返答になぜここまでする!？」

「無粋な疑問だな。忍びにとって煙幕を用いるのは常套手段だ。なら何も問題はなかるう?」

心を読まれた!？」

というか、完全に問題あるでしょう?」

戦闘中でもないのに煙幕を使用するのはどうかと思いますが……。

「さて……これで満足か? セイバー」

サア、と風に煽られ、煙が霧散して宙に消える。

そしてそこにいたのは、先程までの忍者装束の男ではなく……、

「コホッ……やはり、私の直感は間違っではいませんでしたか」

「いつかは明かそうと思っていたのだが、まさか見抜かれるとは思わなかった」

青のジャケットにデニムという、ラフな格好をした年齢不詳の美女だった。

……だが。

(……、予想通り。とはいえ……また女性ですか)

彼から彼女へと呼称が変わった途端、我知らず眉間に微かに皺が寄る。

一体何なのでしょうが、このどことなく落ち着かない気分は……。

『埼川珠子』と彼女は名乗った。

『迅雷隼人』というのは世を忍ぶ仮の姿であり、ペンネームであるらしい。

「気軽に『タマちゃん』とでも呼んでくれ」

「いえ、それは流石に……タマコ、とお呼びしても？」

「うむ、別に構わんが……固いな。まあ何だ、とりあえず茶でも飲むか？」

タマコはそう言つと首を傾け、いつの間にか傍らに置いてあつた湯呑と急須、それから電気ポット（コードレスタイプ）を指差す。

動いた拍子に、ポニーテールのように纏めた栗色の髪がサラサラと流れる。

触れればさぞかし柔らかい手触りであろう事が容易に想像出来る程の艶やかさだ。

「……頂きます」

コポコポとポットから急須に湯がそそがれ、瞬く間に湯呑に緑の液体が張られる。

差し出されたそれを謝して受け取ると、口へと運び一口。

香ばしくも熱い液体が喉を通り、身体全体に染みわたっていく感じが緊張していた心をほぐしてくれる。

「……ふう」

「茶を飲んで息を吐くなど、随分と年寄りくさいな。まだ若いというのに」

「む、年寄りくさいとは失敬な。まああなたがち外れてもいませんが。私はこれでも既に数十年を生きている身です。もつとも、英霊に年齢などあってないようなものですけどね」

「英霊は基本的に全盛期の姿で召喚されるからな。つまりそれがセイバーの全盛期の頃の姿だという事か」

全盛期の頃の姿、というよりはこの姿のまま全盛期を迎えてしまった、と言った方が正確なのだが。

何しろあの日以来、この身は成長する事を止めてしまったのだから。

……しかし。

「……うん、どうした？ いきなりジツと私を見つめてくるとは。顔に何か付いてでもいるのか？」

「……いえ、なぜコナミと繋がりのある人間は女性ばかりなのかと少々。といっても、見たのは貴女と大江和那の二人のみですが」

私の言葉に僅かに首を傾げるタマコ。

同性の私から見ても、彼女は美人だとはっきり言える。

意志の強い瞳にすっきりと整った顔立ち。

そして見事に均整のとれた女性らしい体付き。

男ならばすれ違っただけで誰しもが振り返り、女ならば大半が嫉妬するだろう眉目秀麗な容貌。

思えば大江和那も背の高さを除けば相当の美少女だった。

……かつてコナミの周りには、常にあれ程の女性達は何人も居たのでしょうか？

「クク、何だ、妬いているのか？ セイバーも純然たる騎士

であるかと思えばなかなかどうして、乙女なのだな」

「ッ！？　ち、違います！　私はただ……！」

「フフ、軽い冗談だ。気にするな。さて、疑問の答えだが……別に女性しかいなかった訳ではない。ただヤツの周囲には常に人がいたな、男女問わず。ヤツほどに人を惹きつける人間を、私は知らん」

私の動揺を尻目に空を見上げ、言葉を紡ぐタマコ。

まるで遠き日々に思いを馳せるように、その瞳には曇りのない輝きがあった。

「私もな、そんなヤツに惹き付けられた一人だ。ヤツとは野球のコーチとして女として、時には仲間として同じ時を過ごした。ああ、背中合わせで危地を潜り抜けた事もあったな」

「……………」

……………何故だろう。

胸がちりちりとする。

焦燥とも、不安とも違つ言い様のない感覚が全身を襲つ。

……ナゼ？

「それに、小波は私に……」

一瞬、言葉が途切れる。

そうして一呼吸置いた後、タマコが口を開きかけたその時、

「　　おいセイバー、昼飯が出来たから居間に……って、うわ
！？　誰だ！？」

間が悪くシロウの横槍が入った。

タマコを見て驚いたシロウが、今度はそつと私の方を見る。

視線を受けて、貴方にケーキと整体を与えた人物だと答えると訝し
げに、

「……女装？」

などと失礼極まりない眩きを漏らしたので、抜く手も見せずに投擲
された手裏剣であつという間に奥の壁に縫い付けられてしまった。

シロウ、それは女性に対して言うべき言葉ではありません。

たとえ変装のおかげで本当の性別の判断が付きづらかったとしても、女性にとってシロウの発言はまさに侮辱、怒って当然です。

「少年、軽拳妄動をすればかりでは命が幾つあっても足りんぞ。その事を肝に銘じておくのだな」

「ハ、ハイ……ワカリマシタ。ゴメンナサイ」

「今度そのような寝惚けた事を言ってみろ。お前を強制的に性転換させてやるからな。そうすれば私の屈辱の程も多少は理解出来るだろう」

にこやか且つ朗らかな声でそう告げるとタマコは徐に棒手裏剣をひとつ投擲。

シロウの股下1cmを掠めてスカアン、と音を立てて壁に突き刺さった。

血の気の引いた顔をさらに青褪めさせ、ブンブンと首を猛烈に上下させるシロウ。

流石、音に聞こえた影ニツツヤの者……恐ろしいまでに容赦がありませんね。

さて、そろそろ助け船を出すのでしょうか。

お腹も空いてきた事ですね。

「タマコ、もうその辺りで。流石に昼食前に流血沙汰はどうかと。食欲が失せます」

「……うむ、まあ今ので打ち止めだったのだが。それでは私は引き続き歩哨に立つとしよう。話の続きはまたいずれ、な」

タマコがそう告げたと同時に再びボン、と煙がその場から噴き出しタマコの全身を覆い隠す。

そして煙が晴れるとそこにはもうタマコの姿はなかった。

「……はああああ、ひどい目に遭った」

「自業自得です。あれでは女性に対して女性である事を否定しているも同然です」

「うっ……いや、それは本当に悪かったと思ってるんだけど、
な」

深々と息を吐き、縫い付けられた身体を壁から剥がしながら呟くシロウ。

まあ、女性に対して甘い所のあるシロウですからそれは紛れもない本心なのでしょう。

「そういえばセイバーは何であの人と話してたんだ？」

「まあ少々……と、そんな事よりもお昼なのでしょう？ 冷めないうちに頂きましょう」

「ん？ あ、ああ、そうだな」

身体を剥がし終わり、壁に突き刺さっていた手裏剣を全て回収し終えたシロウは、それを丁寧に布に包んでズボンの後ろポケットにしまった。

そしてパンパン、と軽く身体をはたくと、二人して居間へと向かって歩き出す。

「あ、そうだ。小波はさっき出掛けたから、飯は遠坂とセイバーと俺だけだぞ」

「出掛けた？ 一体どちらへ？」

「さあ？ 何でも少し気になる事があるんだってさ。しばらくしたら戻るらしいから」

「……………そう、ですか」

「？ どうした？」

「……………いえ、何でもありません」

訝しげに首を傾げるシロウを無視して先に行く。

……………我ながら、らしくないと思う。

たった一人の男の事で、こつも心が右へ左へと動かされてしまつては。

一体どうしてしまったのだろうか、私は……………。

I n t e r l u d e o u t

side 小波

じゃあね、コナミ！ 今日はあるがとう！ また明日ね！

昨日、別れ際に投げかけられた言葉が脳裏をよぎる。

士郎君とセイバーの鍛錬を見物していた時、ふとその事を思い出した。

その後昼食の用意に取りかかるうとしていた士郎君に断りを入れ、こうしてアスファルトの上をテクテク歩いているという訳だ。

ちなみに昼食を辞しているため、「とりあえずこれで昼飯食ってくれ」と士郎君からいくらかのお金を提供されている。

……そこ、ヒモって言うな。

「えーと……確かこの角を曲がって……あの辺りだったな」

マウント深山商店街外れの小さな公園。

そこで遭遇した偶然の邂逅。

さて今回の結果は……。

「……あ、リムジン。って事は、やっぱり今日も来てたのか」

公園の路肩に止められているリムジン。

彼女の存在証明がそこにあった。

公園の入り口をくぐると、昨日と同じように白の少女がベンチに腰掛けていた。

その横に座っているのはやっぱり昨日と同じ、白と黒のメイド服を着た紅眼の女性。

ただし、明らかに昨日と違うところが一点だけあった。

「ん……あれ？ 一人増えてる？」

「あ、コナミ！ よかった、来てくれたんだ！」

「こんにちはコナミ。ぐーてんたーく」

「えーと……ぐーてんたーく？ でいいのかな？ イリヤ、リス。それから……」

こちらに向かつて笑顔で駆けてくるイリヤと、起伏の少ない表情ながら僅かに微笑み、テクテクと歩み寄ってくるリズ。

そしてもう一人、ベンチの横に佇んだままこちらをジーッと嫌に細めた目で見つめてくる、リズと同じような服を着た女性。

何と言うか、いかにも不審人物を睥睨する類の視線のキツさだ。

イリヤとリズの時とは大違いの、猜疑と警戒を含んだ突き刺すような眼光。

思わずたじろぎそうになるが、それも失礼かもと思い直してグツと堪える。

「あなたがイチノセコナミですか。イレギュラーサーヴァントの。私はセラと申します。お嬢様の教育係などをさせて頂いております、アインツベルンのホムンクルスです」

やけに棘のある物言いで自己紹介をしてくるその女性。

あまりにもつつけんどんすぎる対応にイリヤは苦笑い、リズは相変わらずの無表情といった体だ。

それに対して俺はというと、

「あ……え、えーと。ご、ご丁寧にどうも、一ノ瀬小波です……っ
て、ん？ ホムンクルス？」

剥き出しの敵意に圧倒された結果、たどたどしく生返事と僅かの疑問符を返す事しか出来なかった。

そしてその疑問符も、結局は華麗に右から左へと流される事になる。

……前途は多難、か……はあ。

第三十三夜 「白の主従と野球少年」(その1) 「(前書き)」

お待たせいたしました。

やっところさ更新です。

新連載のFate x ドラえもんクロス小説もよろしくお願ひします。

第三十三夜 「白の主従と野球少年（その1）」

side 小波

「……何がどうしてこんな事に？」

事ここに至っても、まだ事態をしつかりと把握出来ていない。

解るのは、右手にある小さくも暖かいモノに身体が引つ張られているという感覚と、身を切るような冷たい冬の空気の辛さのみ。

ああ、一体いつから自分の頭はスポンジのようにスカスカになってしまったのだろうか。

お陰で理解力があの“バカ”並に劣化して……

「現実逃避はそのくらいになさる事ですネイチノセコナミ。それとも何ですか、お嬢様のお相手はそれほどまでに嫌だという事ですか？」

「いや、それ自体は別にいいんだけど……その、セラはいいのか？俺の事嫌ってたんじゃない……仮にもサーヴァントなんだし、しかもイレギュラー」

「お嬢様のお言葉と意思は可能な限り尊重致します。それが私たちの使命のひとつでもありますので。私がここにいるのは偏に万に備えての監視のため。それをお忘れなきよう」

そう言ってジトツと睨みつけてくるイリヤのメイドさん……セラ。

猜疑と警戒、敵意……はイリヤの手前込められていないが、それら無言のプレッシャーがこれでもかというくらい盛り沢山の尖った視線。

長時間晒されていれば胃が痛くなりそうだ。

改めてイリヤとリズの対応がどれだけ稀有な物だったのかを思い知らされる。

いや、二人の対応の方がむしろ異常、普通ならこんな対応が当たり前なのだ。

「イリヤ、笑ってる。セラは、イリヤの笑った顔を消したくない。私も、そう」

「リーゼリット！ 余計な事を言う必要はありません！」

リズはセラと並んでテクテクと歩きながら、いつもの無表情でそう

語る。

表情こそないが、イリヤを映すその目には穏やかな光が宿っている。その光と、何より焦ったようなセラの言葉がその述懐に信憑性を持たせていた。

「ほら、何してるの！？ 新都まで来たんだから楽しまないと！
せつかくのデートなんだから！」

そして件の少女、イリヤは俺の手を引きながら、花が咲いたような可憐な笑みを浮かべている。

もうこれだけで、イリヤに会いに来た甲斐があったというものだ。

やっぱりイリヤには笑顔が一番似合うな、うん。

しかし、デートね……まあ、いいけど。

「ホント……何でこうなったんだろ？」

イリヤの掌の温かさを感じながら視線を宙に漂わせ、つい数十分前の出来事を頭の片隅で思い返す。

「……えーと、つまりセラさんは、昨日イリヤがユニフォーム姿で着ていった服も持たずに帰って来たから、俺がイリヤに何かよからぬ事をしたと思ったと」

「私の事はセラで構いません。まあ、お嬢様からはそんな事はなかったとの説明がありました。たどえ何もなかったとしても貴方の行動は褒められた事ではありません。お嬢様の柔肌を見たとしてもあれでは言い逃れは出来なんでしょう」

「うぐ……あ、ああ。まあそれは……そうだよなあ」

公園のベンチで俺に向けて放たれた嫌味混じりの忠言。

あまりの正論にぐうの音も出ない。

「それで今度は私が共に出向いて妙な事が起きぬよう、監視する事に致しました。ご納得頂けましたか？」

「……はい」

あの唐突な自己紹介の後始まったのは、何故か俺へのお説教だった。

セラさん……もといセラは鋭い眼光で俺を睨みつけ、澀みなく苦言を呈してくる。

いちいちもつともなそれに対して、俺はただただ頭を下げ続けるしかなかった。

「セラ、もうその辺でいいでしょう？ このままじゃ日が暮れちゃうわよ。セラのお説教はただでさえ長いんだから」

「……そうですね。まだまだ言いたい事がありますが、お嬢様がそうおっしゃるのでしたら」

見かねたか、はたまた時間がもつたいなと思ったのかイリヤから提言が飛び、渋々矛を収めるセラ。

ちなみにイリヤとリズは俺が説教を受けてる間、ただジツと事の成り行きを静観しているだけだった。

多分、セラの気が済むならばと配慮したんだろう。

……こっちにしてみれば随分ハタ迷惑な配慮だ……別にいいけどさ。

「ふう……ところでイリヤ、今日は何をするんだ？ 昨日『また明日』ってイリヤが言ったから一応来てみたんだけどさ。またキャッチボールでもするか？」

「え？ ……うーん、それもいいけど……」

俺の問いにイリヤは俺から視線を外し、宙に視線を浮かせる。

やがて数回ほどパチパチと瞬きし、何故かニヤツといたずらっぽい笑みを浮かべるといきなりこんな事を言ってきた。

「フフ、そうね……せっかくだからデートしましょう、コナミ」

「……はあ？」

気の抜けたような返答が二つ、見事なシンクロ率で重なり合う。

ポカンとした表情を曝した俺と、それからセラの物だ。

「ちょっと待った、なんでデートなんだよ？ 流石にいきなりすぎるぞ」

「そうですねお嬢様！ 他のサーヴァントと密かに会うだけでも以ての外ですのに、あまつさえデートをしたいなどと、何を考えておいでなのですか！？」

「あら？ 気になるならセラ、アナタも来る？ リズはどう？」

「行く。コナミはいい人だから、好き」

「リーゼリット！ 貴女も何を言っているのですか!？」

果たして冗談なのか本気で言っているのか、イリヤの本音が今ひとつ解らない。

相変わらずニコニコと微笑みを浮かべ続けるイリヤに対して、思わず溜息が出そうになるが喉元でグツと堪える。

その後もやいのやいのとセラが反論の声を上げるが、イリヤはどこ吹く風といった体で涼しげに聞き流すだけ。

結局こちらの思考が追いつかないまま、イリヤが俺の手を引いて車へ向かって走り出した事でなし崩しの事が決まってしまった。

そのすぐ後ろをセラは溜息を吐きながらも渋々納得したといった体で、リズはデフォルトの無表情でテクテクとついてきた。

……あれ？ 俺の意思は？

「……こうして俺とイリヤとセラリス主従の、奇妙なデートが始まったのである」

「誰に向かって喋ってるの、コナミ?」

いきなり誰もいないところに向かって一人語る俺にイリヤから疑問の声が飛ぶ。

そこは気にしたら負けだぞ、イリヤ。

「で、新都に来たのはやっぱり娯楽施設が多いからか?」

「うん、それもあるけどこっちは一度も来た事なかったから」

「そうか、俺も本格的に来た事はないけど、まあ多分大丈夫だろう。さて、どこに行きたいんだ?」

「え? うーん……とりたてて行きたいなって決めてたところはないんだけど……あつ。ねえコナミ、あれって何のお店?」

「あれ?」

イリヤが指し示した方に視線を向けると、周囲の店とはどこことなく一線を画した、ごちんまりとした一軒のショップがあった。

ここ新都は近年でかなり開発が進んだ土地らしく、高級感や清潔感あふれる店が所狭しと立ち並んでいるのだが、その中にあるこの店だけは一昔前に建てられたようなくたびれた外観をしている。

とはいえ、別段古ぼけているとかそんな感じはないのだが、明らかに周囲から浮いているのは確かでその分悪目立ちしているから、イリヤの目を引いたんだろう。

「えーと……『HOBBY SHOP ISODA』？ ……ま、まさか!？」

看板の店名を読んだその時、得体の知れない感覚が身体全体を駆け巡った。

まさかそんな事が……い、いや待てよ、よく考えたらこっち^ここの店があったとしても絶対に有り得ない事じゃない。

いや、でも……。

「コナミどうしたの？ 何か難しい顔してるけど」

「えー!? い、いや何でもない! えっと、あの店だよな。まあ店

名からしておもちやを扱ってる店だろうな。ただ……うーん」

「ただ？ なに？」

「ああ、いや……まあいいか。とにかく、中に入れてみるか。百聞は一見に如かずって言うしな」

こういうのは口で説明するより実際に見た方が解りやすいものだ。

それに俺の予想がもし当たっていたとしたら……。

その確認のためには入って確かめるより他にない。

「さて……鬼が出るか蛇が出るか」

イリヤ達を伴っておそろのおそろの店のドアノブに手をかけ、ゆっくりと開く。

カランカラン、とドアベルの音が鳴り響くとそこには……、

「おう、いらっしやいー」

「うわっ、やっぱり“磯田さん”！？」

「うん？ 俺の事を知っているのか？ うむう、ボウズとは初対面の筈なんだかなあ……」

予感的中、エプロンを身に着けたやたらとガタイのいい、髭面の中年の男性がいた。

思わず口を突いて出てしまった俺の言葉に疑問を抱いたのか、怪訝な表情でしきりに首を捻っている。

しまった！ ……え、ええと……あ、そ、そうだ！

「あ、あの、以前プロ野球でコーチをされてました……よね？ どこかで見た顔だなと思ったら店の看板に名前が、それで……」

しどろもどろになりながらも、ある意味で口から出まかせの釈明をする。

「……こつちじゃこの人がどうなってるか解らなかったから、正直言っただけだったんだが……、」

「ああ、そういう事か。もう十年近く前だがモグラーズのコーチをやったからな、それでか。……しかしよく見てるなボウズ。普通コーチなんて、関係者以外そうそう覚えてないモンなんだが。それに俺がコーチをやった頃、ボウズはかなり小さかっただろうにな

あ。まあなんだ、見てるヤツは見てるって事なのかねえ」

どうやら勝ちの目が出たようだ。

心中でホッと安堵の吐息を漏らす。

……しかし、こっちにもあったのかモグラーズ。

現在の親会社が非常に気になるところだ。

覚えてたら後で調べてみるか。

「それで、コーチをしていた方が何でまたホビーショップを……？」

「ああ、それがなあ……プロでコーチをしていた頃、選手の一人が持っていたおもちゃをある事情から没収した事があったな。で、ある時そのおもちゃをジツと見てたら、その造形がすごくよく出来てる事に気づいたんだ。それ以来、こういう物に興味を持つようになってな。プロから遠ざかった際、いい機会だと思ってここに店を構えたという訳なんだ」

「へえ……」

成程、経緯まであつちとほぼ同じか。

うーん……。

「アンタ、この辺じゃ見ない顔だな。しかも野球のユニフォームって……まあいいか。今日はどういった物をお求めで？」

「え？ ああいや、実は今日初めてこの街に来たもので。どんな店があるのかなとぶらりと回ってたら、連れの女の子がここがどんな店なのか気になったみたいで、それで」

「ふーん、あの嬢ちゃん達か。見たところ外国人、しかもいいトコの人のようにだがそんなに店の商品が珍しいか？」

疑問符を浮かべながらそう言う磯田さんの視線の先には、

「うわー、こんなに丁寧に作られたお人形見た事ない！」

「……ほう。確かに、これはかなりの出来ですね」

「……可愛い」

ショーウィンドウの中に飾られた、数々のフィギュアを食い入るように眺めている白の主従三人がいた。

まさに興味津々といった風で、特にイリヤはガラスケースの前にしやがみ込んでキラキラと目を輝かせている。

まあ日本じゃこういうのは割とありふれてるけど、外国じゃ（一部を除いて）まだまだそうでもないしなあ。

ましてイリヤはかなりの箱入り娘みたいだし、こういうた『マニア』な代物に疎くてもおかしくはない、か。

流石日本が世界に誇るサブカルチャー、海外は上流階級の人間を即座に魅了するとは恐るべし。

そのうち世界を征服出来そうだ……って、それはなんかイヤだなあ。

「いや、この娘こういうの見るの初めてみたいで……」

「確かにそのようだが……うーむ、しかしあの年頃の女の子がこういう“マニアシヨップ”に出入りするのは、俺としてはあまり感心しないな。いや、後ろのメイドさん二人もある意味そうだが」

「へ？　なんでです？」

「なんでって、そりゃあ……」

頭をパリパリと掻きながら磯田さん……もとい磯田店長が口を開きかけたその時カランカラン、とドアベルが涼しげな音を立てた。

来客のようだ。

「いらっしやい」と接客の言葉を口にする店長。

そこには、

「むほ〜」

冬なのにシャツに汗を滲ませた、痘痕面のデブがいた。

げ！？ アイツはサ、“サイデン”……いや、“田西”！？

まさかコイツもこっち^こにいたのか！？

迂闊だった……！ 磯田さんがいるんなら、こっ^こという事も予想がついた筈なのに！

考えてみたら、マニアショップはコイツのテリトリーじゃないか！

「て、店長〜。ア、アレは入荷してるでおじやるか！？」

「ん？ あ、ああ。奥に置いてあるが……」

「ウム、了解ナリ。この時を待ちに待ったでゴザル！ いざ、突撃
〜！ ピルピルピルピル〜」

かなりイタイ言葉を羅列しながら、俺と店長の脇をすり抜け嬉々として商品が山と積まれている店の奥へと突撃していく“マニア”な男。

ほのかに……どころかかなりキツイ汗の臭いが周囲に漂う。

頭が痛くなりそうだ。

「……フウ」

客の手前、顔色ひとつ変えなかった店長だったが男が去った途端、露骨に顔を顰める。

流石の店長もこの鼻が曲がるような悪臭には耐えきれなかったようだ。

再び頭を掻きながら、店長は苦い表情でさっきの続きを口にする。

「……ああいうのがいるからだ。基本的に悪いヤツじゃないんだが、

あの嬢ちゃん達には確実に悪影響だ。色々とな。何がとは言わんが、あの手のヤツらの琴線に触れる物をいくつも持つてるからな、十中八九喰い付いてくるぞ。言ってる意味解るか？」

「はい！ 物凄く!!」

「えらい必死だな……ま、嬢ちゃん達がアイツの目に触れないでよかったな。触れてたら今頃大騒ぎだったろうから」

いや、多分それどころじゃ済まない気がする。

むしろ見つかったら見つかったでセラ辺りがガンドで殺しかねないかも……。

今見た限りじゃこつちでも性格は全く同じようだった。

あんなヤツでも、向こうで一度は共闘した仲だしなあ……額に風穴を開けさせるのは忍びない。

戻ってこないうちに、イリヤ達を連れて早々に退散しよう。

しかし俺はこの時、まだ知る由もなかった。

この新都にはまだまだ“懐かしき”、そして一部はある意味とんでもないヤツらが集まっていたという事を。

第三十三夜 「白の主従と野球少年（その1）」（後書き）

『逃げ球』が身についた！！

なんだか新都が大変な事になっています（笑）。

最初はこうなる筈ではなかったのですが……なぜこんな事に？

第三十四夜 「白の主従と野球少年」(その2) 「(前書き)

前回到引き続き、魔境と化した新都をお楽しみください。

第三十四夜 「白の主従と野球少年（その2）」

side 小波

ショーウィンドウに張り付いていた白の主従を引き剥がしてそっと店を出た後、再び新都をうろつき始めた。

始めたのだが……。

↳歩き始めて20分後↳

「コナミ、あれ、なに？」

「え？ んー……ああ、ネットカフェだよリス」

「ネットカフェ？」

「あれ？ あそこの交差点……」

「ん？ イリヤ、どうした？」

「え、うん。あそこに人だから……それに何か騒がしいような……」

「ああ、これは……歌？ 路上ライブかな？ うーん……どれどれ？ ちょっと耳を傾けて……」

『ラブ！ ラブ！』

『『『ビッグバアアン！……』』』

『あなたの〜事が、待ちきれない夜〜 ドキドキしてるハート！』

『うおおおおー！〜 ヒヨリンサイコー！……』

『ヒヨヒヨヒヨ……!!』

『むほおおお!! ヒヨタン萌えええ!!』

『みんな〜! 今日はありがとう〜!! じゃあ次は新曲! い
つくよ〜!!』

『『うおおおおお!!』』

「……………」

「コナミどうしたの? 歌を聴くなりいきなり固まったりして。そ
れに何か疲れた顔してない?」

「いや……………うん、何でもなし。まさかここでこの歌を聴くとは……………
うう、誤解を招かないためにも“星影ヒヨリ”は呼べないなあ。元
から呼ぶ気なかったけど。そして田西、いつの間にマニアシヨップ
からあそこまで……………直線距離でもかなりあった筈なのに。恐るべき
マニアの底力、あんなに荷物を抱えてよくもまあ……………」

「？ よく解らないけど……他の「下」行く？」

「……うん」

（そのさらに30分後）

「イチノセコナミ。そろそろ休憩にした方がよろしいのでは？ 始めから無計画だったとはいえ、流石に歩きっぱなしはどうかと思いますが。それに昼食の問題もあります。我々はともかく、お嬢様が空腹で倒れられでもすれば……」

「流石にそれは大げさだけど、セラの言う通り歩きっぱなしでちょっと疲れたし、お腹空いちちゃった。どうしようコナミ？」

「あー、うん、そうだな。まあ休憩も兼ねてお昼ご飯にしようか。エスコートする側だし、ここは俺が奢るよ。あんまり高いものはダメだけど。あそこの喫茶店でいいかな？」

「そこはお任せ致します」

「了解。さてと……ん？ 何だこの喫茶店？ どこかで見た事あるような……？ まあいいか、こんにちは〜」

『あ！ お帰りくださいませ、ご主人様！』

「笑顔で帰れって言いやがった！？ ってお前は“准”！？ とう事はここは……あのなんちゃってメイド喫茶か！？」

「ちょっと、アナタ来店早々失礼な事言わないでよ！ ここはそんなところじゃないわ！ 由緒正しきアンティーク喫茶よ！」

「その由緒正しきアンティーク喫茶になんでメイドさんがいるんだよ！？ 不自然だろ！？」

「ユニフォームで来店するアナタの方が不自然よ！ それにこれはこの店の制服！ ……自前だけど」

「自前かよ！？ そしてやっぱり答えがそれか！？」

「やっぱりって何よ!? とうかさつき私の名前呼んでたし、なに!? 私の事知ってるの!?!」

「え!? あ、いや、あのそれは……!?!」

「いい加減にきなさいお二方! イチノセコナミ! 貴方はこの店に口論をしに来たのですか!? それからその店員の方! お客様を口論を理由に待たせるのがこの決まりなのですか!?!」

「ゴ、ゴメンナサイ!」

「頭を下げるくらいなら始めから自分の役割を果たしてください、まったく……ん?」

「(じーっ)」

「……な、何ですか貴女? いきなりこちらをジッと見て……!?!? そこはかたなく不穏な感じがするのですが!?!」

「え? ……いやいや、まあそのですねえ。『その本格的なメイド服をちよつとよく見せて貰いたいなあ、一度でいいから着てみたいなあ』……なんて思ったりしてませんよ? お客様」

「思い切り口に出しているではないですか!？ あと手をワキワキと動かしながらにじり寄って来ないでください!」

「私、実は将来デザイナーになって自分の店を持ちたいと常々思っておりまして……こういった服飾には目がないんです。という訳で私の夢のために協力してくれやがりませ、お客様!」

「客に注文する店員がどこにいますかあああっ!?!?」

「うーん、わたしはサンドイッチセットとダーズリンかなあ……リズはどれが食べたいの?」

「……チョコレートパフェ」

「キミたち二人はマイペースだね……ハハ、もうなんと言えばいいのやら……はあ」

とまあ、そんなこんなで。

「つ、疲れた……」

ベンチに深々と腰かけ、大きく息を吐く。

ここは新都の外れにある大きな公園。

街を一頻り歩き回った後、精神的に疲れ果てて気が付いたらここに
入ってしまった。

俺はよつぽど休みたかったらしい。

……しかしまあ、何というか、新都が（ある意味で）人外魔境と化
していたとは思いつかなかった。

しかもあつちの濃いメンツが軒並み揃い踏み……。

一体どうなってるんだ？ 頭が痛くなりそうだよ。

もうなってるけど。

「大丈夫コナミ？ 何か疲れてない？」

「あはは……大丈夫だよイリヤ。ただちょっといろいろ予想外すぎ

たから……」

「だらしないですね、イチノセコナミ。お嬢様をエスコートしておいてへばるとは」

「……セラは、人の事言えない。あの喫茶店の店員に追いかけて、しばらくへばってた」

「リ、リーゼリット！ それは忘れなさい！ ……まったく、何だったんですかあの喫茶店は。店員には危うく剥かれるところでしたし……ふう」

二組のベンチを占領し、丸に『外』マークのたこ焼き屋から購入してきた特製たこ焼きを四人で頬張る。

ちなみに店主は強面の、一昔前の不良がつけているようなマスクが似合いそうな人だった。

……というか、まんま“外藤さん”本人だった。

まさかこの人まで、と思ってしまったが、俺にとって縁の深いこの人と話し込むうちに、かなり懐かしい気分になされた事には感謝している。

最初、イリヤが外藤さんの異様な迫力のある顔に怯えていたが、あ見えて意外にいい人なのでお代を払う頃には笑顔で手を振る程度

にまで打ち解けていた。

……こつちには極亜久高校、まだあるのかな？

「うん、うまい。やっぱりたこ焼きのタコは明石産だよなあ」

何気に、こつちしているこの時間が一番まったりしているのはどつちう訳だろう。

うーん……まあ、それだけあの街が強烈すぎたって事か。

「……それにしても」

改めて自分達のいる公園を見渡してみる。

この公園は深山にある公園と違い、かなり面積が広い。

キャンプやピクニックなど、レジャー目的で訪れても問題はないくらいだ。

一面に芝生が植えられ、樹木や生垣もしっかりと手入れされているのか、見てくれが良く見ていて気分がいい。

こつちところなら住民の憩いの場として賑わっていてもいい筈なのだが、どつちいう訳かここは閑散としていた。

それに何か、かすかに仄暗い雰囲気が漂っているような……？

「どうしたのヨナミ？」

「ん？ ああちょっと……なんか、この公園って変な感じがするな
って思ってたさ。違和感があるというか」

「それはそうよ。ここは前回の聖杯戦争の最終決戦場だったんだか
ら」

「……何だって!？」

何気なく告げられた衝撃の事実思わず隣のイリヤの方を振り向く。

イリヤは何でもないような表情で頬についたソースを拭っている。

だが、イリヤの纏う雰囲気はほんの少しだけ、暗い色に変色してい
る事に気づいた。

「聞きたい？ 十年前、ここで一体何があったのか。多分、
今回の聖杯戦争は十年前のこの場所から始まっていると思うから。
お兄ちゃんもリンも、ここと全く無関係という訳じゃない。そして
……私にとってもね。どうする？」

と、唐突にこちらを振り仰ぎ、そのまま消え去ってしまいそうな儂い微笑みを浮かべながらイリヤが問いかけてきた。

その瞳には正と負の、さまざまな感情が陽炎の如く揺らめいている。

「……うん、イリヤが話してくれるっていうのなら、お願いするよ」

俺は数秒の沈黙の後、イリヤの目をしっかりと見つめながら首を縦に振る。

ほんの少しでも、イリヤの抱えているものを知りたかったから。

ほんの少しでも、この儂く脆い白の少女の力になりたかったから。

第三十四夜 「白の主従と野球少年（その2）」（後書き）

新都には他にも、笑った顔が怖い野ピエロとか、地上でクロールだ
バタフライだと泳ぐスイマーとか、呪いの後遺症でオカルトにはま
っちゃった元キャプテンとかがきつとどこかにいます（笑）。

第三十五夜 「白の主従と野球少年（その3）」

Interlude 35 - 1

side 士郎

「ふう……これで五つ成功か」

コトリ、と強化し終えたランプを置く。

五つ並んだランプを見てみると、つい顔がニヤけてくるがそれも仕方ない。

俺の『強化』魔術の通算成功率が実に“毛”以下の単位から“割”代へと一気に上がっているのだから、それくらいは許されて然るべきだろう。

昼食の後、遠坂は再び自室に引きこもり、セイバーは魔力節約のため私室の布団へと赴いた。

前者は聞くところによると学校監視のための使い魔作成、後者はここ数日常に活動していたため、魔力の減りが著しいらしいからその対策だそうだ。

ならばという訳ではないが、俺は午後の時間を利用して一人、『強化』魔術の自主鍛錬へと取り組んだ次第。

遠坂から腐る程ランプを借り受け（まだ持って来てたとは……一体いくつ持つてるんだろう？）、土蔵にてそれら一つ一つに『強化』を集中して施していく。

驚くべき事に、開始一発目で『強化』が成功。

その後次から次に試してみたところ、十個に施して成功率五割というハイアベレージを打ち出した。

……今日の夕飯は赤飯だな、うん。

そして迅雷コーチには絶対足を向けて寝られない。

色々アレだったけど、迅雷大明神として神棚でも作って差し上げたいくらいだ。

しかし、コーチがまさか女だったとはなあ……。

間違いなく、小波は知ってて黙ってたな。

面白そうだから、とでも思ったんだろうなあ。

「……それにしても、果たしてこの先『強化』だけでやっていけるんだろうか……？」

十一個目のランプを手にする傍ら、ふとそんな事が口から洩れる。

聖杯戦争が始まってはや数日、常に頭の片隅で思い悩んでいた事だ。

俺が唯一まともに扱えるのは『強化』魔術。

物の構造を解析し、魔力の通りやすい箇所を見つけて魔力を流し込み、物の性能を“強化”する魔術だ。

刃物を『強化』すれば切れ味が増し、服を『強化』すれば鉄並みに固くなったりする。

おまけにこの魔術は比較的単純な魔術原理なので、魔力運用効率の面から見ても使い勝手がいい。

だから爺さんは俺にこの魔術の習得を奨めたんだろうけど……この魔術には一つだけ、致命的な欠陥がある。

それは、『常に手元に何かしらの物体が必要になる』という事だ。

「確かに『強化』があれば強力な武器が手に入るけど……それはあくまで『強化する物』が手元にあるのが前提なんだよな。俺の『強化』は自分の身体には使えない中途半端なものだし、武器が破壊されてしまえば完全にそこで終わる。……しかも、ここには『強化』したって役に立ちそうもない代物しかありやしねえ」

鉄パイプに角材、木刀、鍋の蓋にヤカン、ビデオデッキ……。

後半になるにつれて戦いと全く関係ないものが混じってきたがそれはさておいて。

とにかく、この土蔵の中には武器とするには心もとない物しかない。日本刀とか槍とか拳銃なんかがあれば別だけど、そんなものがあれば俺は今頃土蔵じゃなくてブタ箱の中だ。

ならばどうすればいいか。

答えはひとつ。

「なければ 創り出すまで」

『投影』。

俺が可能なもうひとつの、しかし出来損ないの魔術。

対象の物体を己が魔力で編み上げ、その複製品を創り出す。

これで武器を創り出せば、たとえ武器が破壊されてもすぐさま代わりを創り出せばいい。

ただし、俺が創り出せるのは中身のない、外側だけのハリボテだ。

これじゃ『強化』を施したところで意味はない。

ないのだが……。

「 やつぱり、諦めきれないよなあ……。『投影』が完璧に使えたら、俺ももう少しまとまとに動けるのに……。ま、ダメ元でひとつ、やってみるか。今なら丁度キリがいいし、息抜きにもなるしな」

手の中のランプを脇に置き、頭の中に設計図を思い浮かべる。

創り出すのは昨日の晩、生き延びるために無我夢中で振るった刀。

小波から貸与された名刀、正式名称『いずみのかみカネサダ和泉守兼定』。

幕末の剣客集団、『新撰組』副長・土方歳三の愛刀として有名な刀だ。

いつもの癖である時とつさに解析してしまったため、既に図面は頭の中にある。

「 『トレース投影・開始』 」

『トレース同調・開始』ではなく、『トレース投影・開始』。

『強化』と『投影』の過程は似ているが、『投影』は『強化』より踏む手順が多い。

これは俺の独自の魔術理論……と言つのもおこがましい程の理屈だが、『強化』と『投影』、共に必要なのは物体の詳細な構造図。

そのためこの二つの魔術は、前提となる『解析』の精度が物を言う。ただし、異なる点は構造図の用途。

『強化』は既に物体があるので、構造図は魔力を通しやすい経路を見つけ出すのに使用する。

一方『投影』は、無から魔力で物体を創り出すという原理であるため、構造図は物体を再現・構成する魔力を編み上げるのに使用する。

いわば『強化』は地図、『投影』は設計図なのだ。

だからこそ、『投影』は『強化』よりもより複雑で、それこそ微に入り細を穿つような繊細な工程を踏んで行かねばならない。

(まず最初は……)

と、『投影』の工程をいざ踏もうとしたまさにその時、

ブルルルルル

電話のベルが、土蔵に設置してある呼び鈴を通じて甲高く鳴り響いた。

「　　　と、誰だ？」

セイバーも遠坂も電話に出れる状況じゃないので、俺が出るしかない。

というか、どっちが受話器を取っても俺にとって不都合が生じる訳で、是が非でも俺が出なければならぬ。

頭に打ちこまれた撃鉄を外すイメージで以て魔術回路をOFFにし、急いで電話の設置してある廊下へと駆け上がる。

「はい、もしもし。衛宮です」

「　　　衛宮か？　　ふむ、何だ。元気そうではないか」

耳に当てた受話器の向こうから聞こえてきたのは、意外にして普段聞き慣れた男の声。

今学校にいる筈の穂群原学園生徒会長・柳洞一成だった。

「一成？　なんでまた家に電話なんか？　今の時間だと……休み時間か。だけど授業はまだ全部終わってない筈だろう？」

『いやなに、衛宮、昨日から休んでいるだろう？　それで心配になつて電話をかけてみたのだ。今なら時間が空いているのでな、葛木先生のご厚意で職員室の電話を使わせてもらった次第だ』

「そうか……つて、葛木先生？　一成、葛木先生と仲いいのか？」

意外な名前が一成の口から齎された。

葛木宗一郎。

穂群原学園の倫理担当教諭で、物凄く寡黙で異常に生真面目な先生だ。

どのくらい生真面目かというと、試験の最中に不備が見つかったからと突如試験を中止にするというぐらい。

ここまでくると生真面目を通り越して頭が固い、という感じがするのだが、その落ち着きがあつて何事もキツチリこなすという為人のため、学年が上に行くほど人気が出るという、珍しいタイプの教師

でもある。

確かあの人は生徒会の顧問をやっていたな、そのせいかな？

でもあの葛木先生だとそれだけじゃなあ……イマイチしくくりとこない。

『うむ。葛木先生は家に寄宿しているのでな。兄とも思い、師事している』

「寄宿？ そりゃまたなんで？」

『何やら住職の知り合いらしいのだが、詳しい事はよくは知らん。数年前から柳洞寺の一間で寝起きされている。数日前から婚約者の女性も一緒だが』

「婚約者？ あの葛木先生にか？」

これまた意外な事実。

あの葛木先生に婚約者がいたとは、予想の斜め上もいいところだ。

しかし……何というか、想像がつかないな。

正直なところ、めっちゃくちゃ違和感が拭えない。

『意外に思うかもしれないんが事実だ。しかも中々に綺麗で、淑やかな女性でな。淑女とはああいう方を言うのだろう。あの女狐とは大違いだ』

「女狐……？ ああ、遠坂か。一成、人の悪口はよくないぞ。寺の息子なら特にな」

『うむ、解ってはいるのだが……どうも昔から自分にとって奴は別枠らしくてな。意識せずとも口に出してしまうのだ。目溢しをしてもらえればありがたい。何故か奴も今日学校を休んでいるようだが』

「ふ、ふーん……」

努めて気のない風を装う。

米ソもかくやという遠坂と一成の関係。

ここに遠坂が住み込んでいるなどと知れたら、それはもう全面核戦争ばりの悲惨な光景が繰り広げられる可能性が大だ。

それは絶対に避けなければならぬ、お互いのために……そして俺の命のためにも。

遠坂は曲がりなりにも穂群原のアイドルなのだから。

(ないとは思うが) 万にひとつ一成から情報が洩れて、聖杯戦争と全く関係ないヤツら(主に穂群原男子一同)からの闇討ちで『THE END』なんて展開はあんまりすぎる。

「そ、それで一成。心配して電話をくれたのは嬉しいんだが、そろそろ授業が始まるんじゃないか? 用がないなら、もう切るぞ?」

『む、すまん。肝心の要件を伝え忘れていた。衛宮、先日配られた進路希望調査の提出の期限が今日までだ。残りは衛宮だけだぞ。出来れば今日中に持ってきてもらえるありがたいのだが……』

「進路希望調査……?」

……あ、そういえばそんなのがあったな。

特に思いつかなかったからまだ何も書いてないんだが……今日までだったか。

うーん……チャチャツと書いて、持って行った方がいいかな。

回収役の一成に迷惑がかかるし、確か収集先は藤ねえのところだ。

後でどやされたくはない。

「悪い、なら今から持っていく。授業中、教室には入れないから生徒会室に置いておけばいいよな？」

『うむ、了解だ。すまん急かすようで。こちらも卒業式が間近に迫っているので色々と立て込んでいてな。仕事は減らせるうちに来るだけ減らしておきたいのだ。それから二、三頼みたい事があったのだが、これは急ぎではないのでまた別の機会に頼むとしよう』

「また備品の修理か？ 解った、それはまた今度引き受ける」

『度々すまん。では』

通話が切れ、ガチャリと受話器を置くとサッと自室に戻る。

そして学校のカバンからプリントを一枚取り出すと文机に向かい、サラサラと思いつくままに文字を書き殴った。

……ま、これでいいか。

「……よしと。あ、一応書置きを残していくか」

もう一枚、今度はメモ用紙を机の引き出しから引っ張り出して再びペンを動かす。

一成からの用事で学校に赴く旨を書き終わると制服に着替え、今しがた書いたメモを居間のテーブルの上に置いておいた。

二人の邪魔はしたくないしな。

「しかし……学校か」

玄関で靴を履く傍ら、そんな言葉が口から洩れた。

学校に凶悪な爆弾が仕掛けられている事を忘れてはいない。

起動したが最後、中の生物全てを肉片一片まで魔力に還元する吸収型結界。

この爆弾を仕掛けたのは慎二だが、果たしてあれをどうする気なのやら……。

一応不干渉条約を締結しているから起動させる事はないと思う。

「……………ふう」

思うのだが……やはり不安は離れてはくれなかった。

遠坂の使い魔がいつ完成するのは解らないが、一応実際に自分の目で確認しておいた方がいいだろう。

後で鬼と化した麗人二名と忍者一名からお叱りを受けるかもしれないが……その覚悟は出来ている。

(……………、多分……………きっと。うん、大丈夫……………ダイジョウブ)

汗など出ない冬なのに、何故か背中 of 冷たい汗が止まらなかった。

そして訪れる、悪夢の光景。

聖杯戦争は、再び大きなうねりを見せる。

I
n
t
e
r
l
u
d
e

o
u
t

第三十六夜 「白の主従と野球少年（その4）」

side 小波

「……そうだったのか。十年前、ここに聖杯が……」

「そう、そして顕れた直後に破壊された。アインツベルン側の参加者である魔術師、衛宮切嗣エミヤキリツグ自身の手でね」

「衛宮……切嗣だって!? 士郎君のお父さんがか!？」

ある意味予想通りで、予想外の事実がイリヤの口から述べられた。

俺が一番考えたくなかった可能性だ。

という事は、養子になった士郎君はひよっとして……。

「士郎君は……戦災、孤児なのか？」

「戦災孤児……言い得て妙ね。そういう事よ。聞いた話だと、お兄ちゃんは最終決戦場だったこの地でキリツグに拾われたそうよ」

「……あの夢はやっぱり、士郎君の過去だったって訳か。って、あれ？ 待てよ……ここには聖杯が顕れたんだよな？」

「そつよ」

「じゃあ何でその後に火災が発生したんだ？ 最終決戦がどれだけ凄まじくても、あれだけの大火事が起こるとは考えにくいし」

それこそ広域破壊宝具同士のぶつかり合いが行われたのだったら解らないでもないけど、それにしたってこの辺一帯が丸ごと焦土になるとは考えにくい。

英霊の宝具は威力こそ様々な意味で桁外れだが、その衝突が火災の原因かと言われるとちよつと首を捻ってしまう。

そもそもその手の宝具がかち合う可能性自体、かなり低いしなあ。

「はつきりとは解らないわ。けど推測は出来る。おそらく顕れた直後に最終決戦で敗北したマスターが願ったんでしょうね、『すべて灰燼に帰せ』とでも。聖杯の破壊はその願いが叶えられた一瞬後。そついう事でしょう。それほど間違っではない筈よ」

「……成る程」

確かにそう言われれば納得出来なくもない。

はああ、物騒な願い事をするヤツもいるもんだなあ……。

その敗者が唯一出来た最後の悪あがきだったんだらうけど、それにしたってハタ迷惑だ。

あの火事で土郎君の肉親も亡くなったんだらうし、一体どれだけの人が犠牲になっただらう……。

でもこれで理解出来た。

この公園は、その犠牲者達の『墓標』なのだ。

そして魂は未だ成仏出来ず、苦しみながらこの場を漂っている。

昼間なのに閑散としているのも、住民が本能的に薄気味悪さを感じて寄り付かないからなんだらう。

「……けど、聖杯って一体何なんだらうな？ あらゆる願いを叶える万能の杯って言われてるけど……それがどついう物なのか、といふのはよく知らないし、それに……」

「キリツグはそれをどうして壊したか？」

「ん？ まあ……伝手をたどって聖杯戦争について調べてみたけど、どうしてもその辺りだけは解らなかった」

「伝手？」

「ああ。前に会った時に、アハト翁について“リンに聞いた”って言っただろ？ あれ、“遠坂凜”じゃなくて、知り合いの情報屋の名前なんだ。経緯は省くけど超一流の情報屋で、魔術関係は専門外だけど色々探ってきてくれた……ん？」

そこまで言った所でイリヤの表情が若干固くなっている事に気づいた。

まるで何かを気にしているような、恐れているような、そんな表情だ。

あ、もしかして……。

「イリヤと衛宮切嗣の関係についても、知ってる。リンが予備情報として探り出してきた」

ビクッ、とイリヤの肩が震えた。

そしてイリヤの向こう側から、生真面目な教育係の強烈な怒気が膨れ上がるのを感じる。

俺はそちらをなるべく見ないようにしながら、そのまま言葉を続けた。

「大丈夫、士郎君には言っていないよ。言うならイリヤの口からの方がいいだろうし、イリヤも……まだ心の整理がついてないんじゃないか？」

これは俺の勘だ。

多分、イリヤは（理由は解らないが）自分を捨てて士郎君と暮らしていた衛宮切嗣を憎んでいる。

でも士郎君に対しては、きっと憎しみを抱いていない。

衛宮切嗣に向ける憎悪と、衛宮士郎に感じる情。

近しい二人に対する二律背反の感情の狭間で、彼女は葛藤しているのだ。

でなければバーサーカーと戦ったあの晩、俺達を見逃す事なく何が何でも殺そうとしていた筈だから。

……つと、これは今は関係ない事だったな。

この問題がどんな形で決着がつくのかは解らないが、少なくとも部外者である俺がどうのこうのと口を出せる事じゃない。

あくまで当人同士の問題　　俺が出来る精一杯は、平穩無事な落着を祈る事のみだ。

もつとも、この状況下じゃ難しい話な訳だけど、それでもそう願わずにはられないのが人間心理の不思議な所……なのかな？

とにかく閑話休題、話を元に戻そう。

俯くイリヤの頭をポンポンと撫でながら、切った言葉の続きを語る。

「ま、それはともかくとして……話を戻すけど、なんで衛宮切嗣はせつかく顕れた聖杯を破壊したりなんかしたんだろう？　キャスタ―は聖杯について何か知ってたみたいだったけど、ヒントだけで結局教えてくれなかったしなあ」

というか、敵に裏事情を尋ねる事自体間違ってる訳だけど。

この戦争の厄介なところは、様々な要因が複雑に絡みすぎている難解さと不可解さにある。

全貌を解明し、このイカレた聖杯戦争の真実を見つけ出す事が現状
打破の鍵とはいえ、それだけでも一筋縄じゃいかない。

リンの情報は正確で信頼出来るんだけど、それだけじゃまだまだ材
料不足だからなあ。

せめて取っ掛かりが欲しい。

「……キャスター？ そう……あの魔女に会ったのね。確かにあの
神代の魔女なら、ある程度までは簡単に把握出来るでしょうね」

話を路線修正したのが幸いしたか、イリヤは再び顔を上げた。

まだ顔色が若干青いが、震えは止まっているようで何よりだ。

ちなみに向こう岸の怒りも同様、さらに何よりだ。

「神代の魔女？」

「そう、キャスターの正体は……おそらくギリシャ神話の裏切りの
魔女、『メディア』よ」

「メディア？」

『はて?』とつい、腕組みをしてしまった。

ギリシヤ神話にそんなヤツいたかな?

そもそもギリシヤ神話の内容を全部知ってる訳じゃないしなあ……。

メジャーな話とはかくとして。

「柳洞寺を強襲して、門番のサムライと戦ってた時に……顔見せかしらね? 姿を現したの。その時、わたしのバーサーカーに変な反応してたから」

「変な反応? って、柳洞寺に行ったのか!？」

「それは行くわよ。敵がいてもいなくても、あそこは重要拠点なんだから。一度見ておく必要があったの。それで、バーサーカーを見た時、キャスターはあからさまに狼狽えていたわ。あれは何か後ろめたい……というか、会いたくない人物に出くわしちゃった時の反応ね。『ヘラクレス』にちよつとも関係する女性の魔術師で、それでいて後ろめたいような事情を持つてる人物って言ったら、メデアくらいしか該当する人物がない。きっとアルゴ―船繋がりで見識があったのね」

へえ……何でも知ってるんだな、イリヤは。

いや、俺が知らなすぎるのか。

そもそも聖杯戦争のサーヴァントならその手の知識は聖杯から与えられる筈だしなあ。

何故か俺は例外で……って、ちょっと待て？

さっき、イリヤはなんて言った？

「……ヘラクレス？」

「そうよ、わたしのバーサーカーの真名は『ヘラクレス』。言わなかった？」

まるで「何言ってるの？」とでも言っような目をこちらに向けてくるイリヤ。

……いやあの、全然聞いてないんですけど？

『ヘラクレス』って……アレだよな。

ギリシャ神話最大級の英雄で、十二の偉業を成し遂げたっていう……。

その手の知識に疎い俺でも知ってる、超ビッグネームだ。

それがバーサーカーのサーヴァントで召喚されて、イリヤのパート

ナーって……何じゃそりゃ。

あまりの衝撃の事実にも二の句が継げない、とはこの事なのかと頭の片隅でボンヤリと他人事のように考えてしまう。

というか、その頭を回リボルバー転式拳銃の鉛弾一発でブチ抜いた俺（の宝具）も大概だよなあ、だからあれだけ驚いていた訳か。

まあ、俺自身の力は問題外な程弱いんだけどね。

「お嬢様、話がまた脱線していますが」

「あら、いけない。というか、セラは止めないのね。こんなに内部情報を漏らしてるのに」

「それがお嬢様の意思ならば最大限尊重いたしますし……事ここまですれば、既に半ば諦めてもいますので」

疲れたように深々と溜息を吐きながら路線修正を促すセラ。

なかなか苦勞してるんだなあ、と心の中で同情しつつ、再び耳をイリヤの方に傾ける。

何故ここまで情報を開示してくれるのかは解らないが、すすんで話してくれるのなら渡りに船、これに乗らない手はない。

ちなみにリズはこちらの会話を余所に、今だ外藤印のたこ焼きと熾烈な格闘を繰り広げている。

しかも目下、3パック目。

どこか幸せそうな表情（無表情だけど）をしているのでまあ、あのまま放っておいて問題はないだろう。

「えーと、どこまで話したかしら……あ、どうしてキリツグが聖杯を破壊したかって話だったわね。うーん……コナミは、この戦争に歪みが生じているのには気づいてる?」

「え? うん、それはまあ。キャスターは反英雄、アサシン……佐々木小次郎は架空の英雄だって自分から言ってたし、そもそも聖杯を破壊したっていう話からして何かしらの異常が起こってるらしい事には何となく気づいてた。キャスターが言うには、狂いが生じ始めたのは第三回かららしいけど」

「正確には第三回に呼ばれた“モノ”が関係してる訳だけど、その前にコナミは聖杯の正体が何なのか……って、あら?」

「ん? うわっ、何だこれ!？」

イリヤが俺の方を見ながら不思議そうに小首を傾げたのに気づいた次の瞬間、俺の身体の周囲に奇妙な幾何学模様が渦巻き始めた。

しかも何か背中の方からどこかに引つ張られるような感触が……
体何なんだ、これ!?

「多分、令呪による強制召喚……もうお別れ?」

パツと空になったたこ焼きのパックから顔を上げたリズの声。

若干、声のトーンが下がっている事が何となく気になったが、重要なのはそこじゃない。

令呪による召喚って……まさか士郎君に何か起こったのか!?

とりあえず抵抗はせずに、力に身を任せるようにして……おっと、その前に!

「い、ごめんイリヤ! そういつ訳だからまた明日!」

「あつ、ちょ、ちょっと待っ」

イリヤに片手を挙げながら急いで挨拶。

慌てた様子のイリヤがこちらに向かって手を伸ばしてきたが、それが触れようとした瞬間、いきなり目の前の場面が切り替わった。

一瞬の暗闇の後に映ったその光景。

そこは、どこまでも紅い世界だった。

第三十六夜 「白の主従と野球少年」(その4) 「(後書き)

『リリース』が身についた!!

次回、戦闘パートです。

第三十七夜 「学園の死闘と野球少年（その1）」（前書き）

やっとこさ更新。

私事の忙しさで執筆ペースが思うように上がらない……。

第三十七夜 「学園の死闘と野球少年（その1）」

side 小波

紅い、赤い、アカイ世界。

およそ赤らしい赤に彩られた、ひどく歪な空間。

漂う生暖かい空気は……鉄の味がした。

「小波っ！ 来たか！」

「ッ！？ 土郎君……ここは一体！？」

目の前には制服姿の土郎君がいた。

顔には焦燥と絶望、憤怒。

それらの感情が一緒くたになって、ちりばめられている。

「学校だ！ 校舎に入った途端に周囲が赤くなって……とにかく、外を見てくれ！ それで一発で状況が解る！」

「外……？」

首を動かし、左手にあった窓の外を見る。

血のように紅い柱が、檻の如く突き立っていた。

そしてそれは、学校をぐるりと取り囲むように幾つも立ち並んでいる。

例えるならこれは……『血の牢獄』。

つまり今の状況は……。

「結果！ ワカメのヤツ、遂に起動させたのか！」

いつか発動させると思っていたけど、このタイミングでか！

こつちと不干涉協定を結んでいたにも拘らず、やった。

多分、最初から裏切る気だったんだろうけど……だあーっ、もう！

三日もってないじゃないか、この協定！ 気が短すぎだろ！？

「頭掻き繕ってる場合じゃないぞ小波！ 何とかして結界を解かないと……！ 未完成だったせいかな、ざっと見た限りまだ誰も吸収さ

れてないみたいだ！ 今なら間に合う！」

「え、そうなのか！？ だったら……とにかく術者を見つける事が先決か。ワカメかライダーか……でもどこにいるんだ？」

「解らない！ けど多分校舎のどこかにいる筈だ！ じゃなきゃ、ああもタイミングよく発動させられないだろうからな！」

「解った、じゃあ手分けして探そう！ ……でもなんで俺だけで、セイバーは呼んでないんだ？ リンとアーチャーを呼べないのは解るけどさ。どっちも携帯とか持ってないし」

「セイバーは今まで魔力を使い過ぎだったから、今節約のために床に就いてる。俺からの魔力供給が出来ない以上、少しでも回復させないとこれから先が厳しいし……それに令呪があと二画しかない！」

成る程。

確かに今までから見ると、ここで無理をさせたら取り返しがつかない事になりかねないし、何より令呪は貴重だ。

それなら二つの意味でまだ余力のある俺一人を呼んだ方がいい、と判断したのか。

それにさっきからこう……ジワジワと、少しずつ身体から魔力が抜

けていく感触がする。

ただでさえ魔力に不安のあるセイバーの事。

令呪による召喚は、悪い結果に繋がる公算が高い。

ベストじゃないけど、限りなくベターな判断だ。

「よし、とにかく二手に分かれて、ワカメかライダーを「あれ？
衛宮じゃないか。何してるんだよこんな所で？」 ツ！？」

唐突に廊下に響き渡った、ひどく場違いな声に二人して思わず背後を振り返る。

校舎の二階は、その廊下の角。

「今日も学校、休んでた筈だろ？ 見る限り体調は悪くなさそうだし、サボっちゃダメじゃないか」

「し、慎二……！？」

そこに軽薄な笑い顔を張り付け、穂群原の制服を着込んだワカメへアーの少年が立っていた。

間桐慎二、ライダーのマスター。

この結界を発動させた、張本人。

「慎二、この結界を止める！ お前、自分が何をやってるか解ってるのか！？」

「んん？ おかしなことを聞くね、衛宮。なんでそんな事を僕に言うのさ？ 言つたる？ 結界を張つたのは僕じゃないって」

「この期に及んで何言ってるんだ！ 確かに張つたのはお前じゃないんだろうけど、お前のサーヴァントのライダーに張らせたんだろが！ 早く止める！ 手遅れになる前に！」

いきり立つ士郎君の怒声にもワカメは涼しげな表情を崩さない。

むしろ人を小馬鹿にしたような無遠慮な視線を、今度は俺に向けて送りつけてくる。

「隣の野球のユニフォーム着たソイツが衛宮のサーヴァントかい？
ライダーから話だけは聞いてるけど、そこまで大したヤツには見えないなあ」

「話を逸らすな慎二！ とにかくこのバカげた結界を」ところでさ
衛宮「！？」

突如、ニイイと不気味な笑みを浮かべたワカメに土郎君が一步たじろぐ。

ふとすれば立ち上るオーラが見えるような、ある種の異様な気迫がワカメから僅かに感じられた。

そしてその眼に宿るのは　　明らか敵意と、殺気。

「ここには僕一人がいる訳だけど　　さて、僕のライダーは今、どこにいると思う？」

瞬間、土郎君の背後に回り込み、眼と勘に任せて前方に鞘ごとバットをかざした。

それと同時にガンツ、と鈍い金属音が辺りに響き渡る。

仰角45度の斜め上から、何かが凄まじいスピードで飛来してきたのだ。

しかし、野球選手の動体視力を舐めてはいけない。

土郎君めがけて放たれたそれを、どうにか見切って防御する事に成功した。

もつとも、半分くらいは賭けの要素が強かったけど。

「……奇襲は失敗、ですか。喋りすぎですよシンジ？」

「悪い、ライダー。けど、そもそも今のは挨拶代りだから、既定事項だって解ってるだろう？ この位で死なれてもらっちゃ困るからね。さて、予定通りに頼むよライダー」

そう言つとワカメはサツと身を翻し、角の向こう側へと走り去ってゆく。

目の前に残されたのは、紫の長髪を靡かせた眼帯の美女　　ライ
ダーのみ。

さっきの奇襲は、おそらく天井に張り付いた状態から仕掛けてきたんだろう。

投擲してきたあの鎖付きの釘剣を手元に引き戻し、ただジツとこちらを見据え、佇んでいる。

「くっ………待て慎二！　小波、ライダーは任せた！　俺は慎二を追う！」

「あっ、ちょっと、士郎君!？」

引き留める間もなく、士郎君は剥き出しの感情もそのままにワカメの背中を追って駆け出していった。

後には俺とライダーだけが残される。

いや、戦力的に考えても確かにこれは妥当な選択なんだけど………相手はあのワカメだぞ？

さっきの口振りからして、何かがありそうな気が……。

でも今は何より、目の前のライダーだ。

「………行きましたか」

「よかったのか？ マスターを真っ先に消すのが常道なのに、自分の前から逃がして。さっき狙ってただろ？」

聖杯戦争の常道に則るのならこれは明らかに下策だ。

しかしライダーはそれを気にした風もなく、ただ俺だけに注意を払っている。

これの意味するところは………何となくだが、察しがつく。

「構いません、むしろこちらの目論見通りです。私は貴方を全力で

討ち果たすのみ。それがシンジからの指示ですので」

つまりは戦力の分断。

やっぱり、俺と士郎君を引き離すのが第一の目的だったって事か。

多分、ワカメに必勝の秘策ありって事なんだろうけど、確かアイツ
って……魔術が使えないんだったよな、魔術回路がないせいだ。

その上で士郎君に勝てるって踏んだ一手……解らない、全然想像がつかないぞ？

「思考に埋没していてよいのですか？ 隙だらけですよ？」

「ッ！？」

目を上げた瞬間眼前に迫る、鈍色の釘。

とっさにその場にしゃがみ込んでそれを避けるが、そのまま止ま
てはいけない。

伏せると同時にゴロゴロと横に回転しながら起き上がり、サツと鞘
から引き抜いた右手のバットを構える。

『五人の英雄』の展開は、この睨み合いの状況下では隙を作りやす
いから不可能。

使えるのは既に手元にある『オール・イン・ワン全てに通ずる物』のみ、但しコストは現在20しかない。

尚且つ、この状況下で有効な武器といえば……。

「いや、お前が相手をする必要はないぞ。そ奴は、私が引き受けよう」

「っ!!!?!?」

突如、どこからか飛来する数条の線。

それは俺とライダーの間合いを寸断し、危機に感づいたライダーがすぐさま飛び退ったおかげで彼我の距離が離れた。

カカカツ、と本来なら刺さる筈のないコンクリート製の床に突き刺さったそれは 四方・八方・棒状の手裏剣。

何よりも聞き覚えのありすぎるその声、誰なのかが一発で分かった。

……そうか、来てたんだ。

「タマちゃん!!」

その声を上げた瞬間、忍装束を身に纏った美女が俺の目の前にシュッ、と音もなく姿を現す。

眼には研ぎ澄まされた闘志と殺気を、マフラーで隠れた口元にはさながら狼のような獰猛な笑みを湛えていた。

第三十七夜 「学園の死闘と野球少年（その1）」（後書き）

筋力・技術・素早さが上がった！！

第三十八夜 「学園の死闘と野球少年（その2）」（前書き）

時間を……どうか私に執筆の時間をください。

切実なんです。

あと今回の話の中には多少の独自設定があり、さらにワカメが若干強化されています。

第三十八夜 「学園の死闘と野球少年（その2）」

side 小波

「タマちゃん！」

「小波、ここは私に任せて少年を追え！ どうもあの小僧、キナ臭い。少年一人で相手にさせるのは危険すぎる！ それにこの結界をどうにかするためにも、あの小僧は確保しなければならん！」

クナイを両の手に、しかも逆手に持って構えつつ指示を飛ばすタマちゃん。

多分、外に出た土郎君の後を隠れて追ってきたんだろう。

タマちゃんのいなくなった衛宮邸が現在どうなっているのか気にはなるが、今の状況下では素直にありがたい。

「……解った！ ありがとうタマちゃん！ 変身！ 『^{ヒーロー}五人の英雄、^{ブルー}青の英雄』！！」

後ろに向けて走り出しざま、『五人の英雄』を展開、纏う。

この『青の英雄』は直接戦闘能力こそそれほど高くはないものの、こついった特殊な状況下でその真価を発揮する。

特に今回は、色々と厄介な事態に陥りそうだから……。。

バランス重視で比較的強力な『赤の英雄』よりもこつちの方がいいとの判断だ。

「……貴女は何者ですか？」

「見ての通りの、しがない忍者だが？ ま、そんな事はどうでもいいではないか、ライダーのサーヴァントよ。私はお前の敵。それで十分だろう？」

「確かに戦うにはそれで十分かもしれませんが、しかしその前に……正体不明である貴女の素性を知りたいと思うのは何も不思議な事ではないでしょう？」

「ふむ。つまりどうあっても知りたいと？」

「是非とも」

「……まあ、いいだろう。私は小波のサーヴァント、クラスはアサシン。名を埼玉珠子という」

「サーヴァント？ ……どついう、意味ですか？」

「質問には答えたぞ。どう解釈するかはそちらの勝手だ。では、戦力の分断というそちらの目論見を見事外させて頂こう。尤も、こうしている時点で既に半ば達成しているようなものだがな」

「……………、もはや思慮は不要。行きます」

そうして金属同士がぶつかり合う音が響いた時、俺は階段を一足飛びに飛び降りていた。

「……………」

「があ……っ、はあっ」

ところどころの教室から漏れ聞こえてくる、何十という生徒・教師の苦悶の声。

しかし呻いていられる人間はまだいい。

問題は呻き声すらあげられず、1mmたりとも微動だにせず倒れ伏している人の方だ。

「……まずいな、思った以上に進行が早い」

横目で教室内を確認しつつ、廊下を駆ける。

死んだ魚のような、虚ろな目の色をしている女子生徒。

皮膚がところどころ爛れ始めている、男子生徒。

こういった症状が既に出始めているのは、総じて内在魔力の少ない魔術的抵抗力の低い人達だ。

魔力の塊として消化されかかっている。

急がないと……！

「……オ、オオ……」

と、右隣の教室からまたしても見知らぬ誰かの苦悶の声が上がる。

酷なようだけど、大元を潰さない限りこの現象を収める事は出来な
いから構っている暇は……。

「オオ……苦しい、苦しいデース……き、救急車を呼んでク
ダサーイ……救急車は英語でアンビュラスです……」

……訂正、思いっきり知ってる人でした。

生々しく『俺』の記憶に残る、なんか色々とアレな人物の苦悶の
声。

うげ……まさかコイツもいたとは、しかもこんなところに……『ア
ルベルト・安生・アズナブル』。

「ウウ……わ、ワタシは負けませーん……ワタシはこの教師。教
え子は何があっても守り通しまーす……べ、ベースボールの神よ、
ワタシに立ち上がる力をオオオ　アウツ!?　ほ、骨が!　骨
が折れてしまっただーす!!!」

『メキヤツ！ ボキボキボキボキン！！ ゴキツ、ゴキンツ！
！！』という思わず、耳を覆いたくなるような異音が響き渡る。

……どうやら『お約束』通りの展開になってしまったようだ。

ここでもそうなのか……まあ、放っておいても大丈夫かな。

スパイラル骨折をしたところで次の日にはアツサリ治ってるようなヤツだ、安心して放置しておける。

それになんだかんだいってまだまだ余裕ありそうだしなあ。

さて、士郎君とワカメは今どの辺りにいるんだろう？

side 士郎

「ハア、ハア……。慎二……！」

「やあ、やっと来たか衛宮。待ちくたびれたよ」

荒くなった呼吸を押さえつけ、視線を叩き付ける。

校舎の一階、廊下の突き当りに慎二はいた。

何がそんなにおかしいのか、顔に薄ら笑いを貼り付けて。

「慎二、お前……この戦争では動かない筈じゃなかったのか!？」

「ああ。確かにあの時言ったね、『積極的には』動かない、『自衛』くらいはする』って」

「だったら何でこんな真似をする!？ いきなり結界を発動させて学校の人間を犠牲にして……何考えてるんだ!？」

語気を荒くして問い詰めるが、相変わらずニタニタと笑っているだけでこちらの剣幕に欠片も動揺した様子も見せない。

いつそ傲慢なまでに飄々と、こちらに視線をぶつけるだけだ。

「ふん。衛宮、お前さ……『究極の自衛』って何だと思う?」

「はあ?」

「別に難しくないさ。自分に降りかかる死の危険を最大限取り払う方法は何なのかって話だよ」

「そんなもの……」

急に言われても、想像がつかない。

聖杯戦争では何時いかなる時でも、リスクは常に降りかかってくる。

それを最大限取り払うって事は……自分を狙う敵の数を減らすという事か？

事実、遠坂と同盟を組んだ事で（一時的にとはいえ）自分を狙う、あるいは自分が戦うべき敵が減った。

そういう意味で言っているのなら……ッ！？ コイツ、まさか！？

「ああ、その様子だと気づいたようだね。そう、極限までリスクを減らすという事は、敵の絶対数を減らすという事に他ならない。そしてそれはいつ裏切られるか解らない同盟や不可侵協定よりも……殲滅の方がより確実だ」

「……！ それじゃあ……あの時言った事も……！？」

「ブラフだよ。もっとも僕にとってはこれでも消極的な方だし、あの時言った事も半分以上は本当の事なんだけどね。やっぱりどこまで行っても衛宮は衛宮だ、こっちの狙い通り簡単に引っ掛かってくれた」

「 慎二イ……！」

一瞬身体から力が抜け、次いで頭が沸騰した。

コイツは……最初から俺を消す気で……嵌めた。

どれだけ疑わしい事実が露見しても、心のどこかではまだコイツの事を信じていた……信じたかったのだ。

それが今、すべて水泡に帰した。

絶望、そして嘔き上がる怒り。

烈火の如き衝動に身を任せ、慎二へ向かって駆け出す。

「慎二イイイイ……ッ!!」

「ッ!? ……ハッ」

慎二は刹那の間だけ、驚いたように目を見開く。

だがすぐに元の軽薄な薄笑いを浮かべると右手を持ち上げ、パチンと指を打ち鳴らした。

「　　ッ!？」

突如襲い来る、猛烈に肌を差す悪寒。

本能的に急ブレーキ、すぐさまバックステップでその場から離れる。

その一瞬後、黒い影が目の前を横切って行った。

ちよっと待て、今の影って……!？」

「チツ、外したか。勘がいいね衛宮。お前意外に沸点低くて、一旦キレたら周りが見えなくなるからあれで片が付くと思ったのに」

「………どういう事だ慎二。今の影……あれは魔術だろ？　目の前を通り過ぎた時、魔力を感じた。お前、魔術回路がないから魔術が使えないんじゃないのか？」

飛び退さった体勢のまま、油断なく慎二を観察しながら問う。

頭は今の衝撃で冷えた。

もっとも絶望に反比例した怒りだけは今だ燻り続けているが。

俺の問いに対し、慎二は今までとは打って変わった、質のまるで違う笑みを浮かべる。

さっきまでの嘲笑、対して今の笑みは……歓喜、か？

「そうだね、衛宮の言葉は間違っていない。僕には魔術を扱ったための魔術回路はない。だけど今の『影の刃』は間違いなく僕の放った魔術さ」

「なに………？」

矛盾する回答に理解が追いつかない。

魔術が扱えない、なのに魔術を放ったと言う。

一体どういう事だ？

「簡単な事だよ。『体内に魔術回路がないから魔術が扱えない』という事実は、魔術回路がなければ大気中の大源マナを吸収・制御する事が出来ない、あるいは体内の小源オトを生成・制御する事が出来ないという前提の上に成り立っている。魔力を生成・精製してコントロール出来なければ魔術は扱えないからね。そういう意味では間違っちゃいない」

「じゃあ一体……」

「なに、発想の逆転だよ。僕はこう考えたんだ。『もし何か別の方法で魔力の生成・精製・制御が出来れば、魔術回路がなくても魔術が扱えるんじゃないか？』ってね。その発想のもと、家の文献や資料を漁って色々と研究した。そしてその成果がこれさ」

慎二はそう言って制服の左胸ポケットから一冊の赤い表紙をした本を取り出した。

生徒手帳やメモ帳より少し大きめではあるものの、そこまで厚い物ではない。

……あれがマジックの種？

「コイツはいわば『外付けの魔術回路』。これに内蔵された特殊な回路と僕の中にある、枯れ果ててしまった魔術回路の名残である『回路の跡』。これらを接続して魔力を循環させる事で、魔術を扱う事を可能にした。元々は別の用途に使う魔術的な本アイテムだったんだけど、どうせ使うならこれの方が色々都合が良かったからね」

「外付けの……魔術回路！？ そんな物が……！？」

「もつとも、魔術自体はこれに記録されている物しか扱えないし、これはあくまで魔力を循環させる装置なんだ。魔力を生成する事は出来やしない。僕の中の小源オドを使う事も出来なくはないけど、絶対量が少ないから下手をすると死んじゃうし、これは論外。魔術を扱うにはもう一つ、潤沢な魔力を生成するファクターが必要となる。そこで……この結界さ！」

慎二はそこで言葉を切ると、両の手をブワツと大きく広げる。

己の偉業を誇示するかのように、狂気に近い笑みを顔に貼り付けて見慣れた友人の顔なのに、我知らず怖気を感じてしまう。

「この結界はライダーの宝具の一つ、『ブラッドフォート他者封印・鮮血神殿』。効果は……まあ解るだろう？ これで得られた魔力は本来ならライダーにしか行かないんだけど……この本の力で、ライダーが得る魔力の一部を僕自身に還元されるようにしたんだ。つまり、今なら僕は……」

慎二はそう言うと俺に向かって指を突き付けてくる。

狂気の笑みは最早慎二の顔を悪鬼のように歪ませている。

「衛宮を、一方的に魔術で甚振れるって事さ……！」

もう一度、パチンと指が鳴らされる。

高らかに叫ぶ慎二の表情は、どこまでも醜く捻じれて映った。

第三十九夜 「学園の死闘と野球少年（その3）」（前書き）

やっとこさ更新……。

いつになったらペースが上げられるのかなあ……。

第三十九夜 「学園の死闘と野球少年（その3）」

Interlude 39 - 1

「ふっ……っ！」

「ぬっ！」

迫り来る釘を、逆手で掴んだクナイで弾く。

返す刀で投擲された棒手裏剣を、鎖を器用に操り弾き落とす。

攻防は一進一退。

共にスピードを誇る者同士、同じ土俵で渡り合うその様相は互いの攻めの型こそ違えど、凄まじいの一言に尽きる。

「ふむ。スピードはほぼ互角……いえ、貴女の方が僅かに速い、ですか」

「そのようだな。しかし、ライダーというのはランサー並みのスピードの持ち主が呼び出されるのか？ 正直、私の動きについて来ら

れるとは思わなかったのだが」

「そういう訳ではないのですが、強いて言えば偶然の結果です。それに、私の本分はスピードではありませんよ？ 私はあくまで“騎^{イター}乗兵”なのですから」

お互いに会話を交わしながらの鏢迫り合い。

話の内容そのものは平坦なものだが、言葉を交わしつつ戦う二人の有様を見れば甚だ異様に映ってしまう。

何しろ 壁を蹴り、天井を駆け、床を疾走しながらにしての事なのだ。

穂群原の校舎の廊下、その壁・床・天井の三つの足場を目まぐるしく、自在に疾駆しながらの三次元高速戦闘。

さながら無重力の宇宙船の中で戦っているかのようだ。

壁には尋常でない踏込みによってあちらこちらにクレーターが形成され、機関銃でも撃ち込まれたかのような体を晒している。

しかしその力強い踏込みこそなければ、このような常軌を逸した戦闘光景など到底あり得る事ではない。

その只中で繰り出される攻撃はまさに必殺そのもの。

騎乗兵の繰り出す釘剣は敵の咽喉へと過たず射ち込まれ、忍者の放

つ手裏剣は的確に人体急所目掛け飛来する。

だがその必殺の一手は互いに必殺足り得ない。

命を刈り取らんと放たれたそれらは、共に悉く当たる直前に撃墜されていったからだ。

時に獲物を投げ放ち、時に鏢迫り合い、接近しては離れ切り結んでは離れを繰り返す。

戦況は千日手、学び舎を舞台にした戦舞は次第に決め手を欠く怠情な攻防へと成り下がっていく。

しかしそれならそれで構わなかった。

何故なら 両名とも、まだ切り札を一枚たりとも切っていないのだから。

「……はあ。こうまで状況に変化がないとは、いささか飽きてきてしまいますね」

「同感だな。……そこで提案するのだが、互いにカードを一枚切る、というのはどうだろうか？ 趨勢がどちらかに傾きこそすれ、退屈はせん筈だぞ？ いや、する暇などない、と言った方が正確か」

「……………成る程」

最早幾度目となるか解らない鍔迫り合い。

獲物同士がギリギリと火花を散らす、その間隙に交わされる交渉。

眼帯の美女は忍者からの提案にほんの少しだけ沈黙すると、

「……いいでしょう。では先にこちらが、手札を切りましょうか」

クナイを弾くように釘剣を強引に振るい、更にバックステップ。

鍔迫り合いの密着状態から脱却し、ひとまず彼我の距離が離れた。

そして徐に騎乗兵が眼帯に手を伸ばす。

「フレーカー『自己封印・ゴルゴーン暗黒神殿』」

言葉と共に眼帯が外され、アメジストの瞳が姿を現す。

その瞬間、忍者の身体が大きく震えた。

「ぐう……っ!? やはり、魔眼……! 解ってはいたが、ここまで強力な代物とは、な……伊達や酔狂で、眼帯を着けていた訳では……なかつたと、いう事かっ」

「……ほう。耐えますか、“キュベレイ”を。しかし、たとえ“石化”は免れても“重圧”はそうはいきませんよ。さて、次は貴女の番です。貴女のカードを、見せてください」

魔眼“キュベレイ”。

魅入られた者は、問答無用で物言わぬ石像と化す最高位の魔性の瞳。

無効化^{レジスト}するには、押し付けられる概念を打ち払う程に、自らが持つ内包魔力が高くなければならない。

幸いにして、忍者は“石化”する事を免れた。

しかしこの魔眼はその程度で終わるほど、底の浅い代物ではない。

“石化”を免れた者には、“重圧”が待っているのだ。

力を、動きを鈍重にされるといふ、スピードが突出している忍者にとつては致命的な効力。

歯を食い縛り、苦悶の表情を浮かべる逆境に立たされた忍者に、騎乗兵が薄く笑みを浮かべながら急かすように要求する。

それを受けた忍者は……、

「クク、是非もない。元より先に要求したのはこちらだ……そう焦らずとも、出し惜しみなどせんよ。それに、これも読めてい

た展開だ……我が愛しのマスターのお蔭でな」

プレッシャーに晒され、顔を歪めながらもニヤリと口の端を吊り上げ、

「 薙ぎ払え、『風神剣』」

ヒュッ、と右手で目の前の空間を斬り上げる。

……その瞬間、騎乗兵の右腕が、くるくると宙を舞った。

I n t e r l u d e o u t

side 士郎

「く……そっ!!」

「ハハハハハ！ どうした衛宮あ！ あれだけ人にギヤーギヤー言
つておいてそのザマかあ！？ あんまり僕をガツカリさせないでく
れよあ!!」

慎二の嘲笑を含んだ声が無性に気に障る。

はっきり言おう、アイツを一発ぶん殴りたい。

そしてこのバカげた結界をさっさと止めさせる。

……だが無情、現状では厳しいものがある。

つと、右、いや左からもか!?

「ぐう……っ、とおっ！」

慎二に接近しようとして前に進めていた足を無理矢理止め、急ブレーキ。

そして真後ろへ向かって全力でバックステップを踏む。

瞬間、目の前を二条の黒い影がすれ違った。

「ちっ……また外したか。いい加減しつこいね、衛宮。さっさと当たってくれないかなあ？」

「冗談言つな！ 当たったらタダじゃ済まないだろうが……って、また！ 今度は下からか！？」

即座に軌道を読み、左の方へ横っ飛び。

俺の右隣を、“影の刃”が駆け抜けていく。

……さっきからこの繰り返しだ。

慎二が放つ“影の刃”が四方八方からこちらに向かって飛んでくるものの、スピードはそこまで速いものではないから避けるのにそこまで苦労はしない。

だが避けたら避けたで“影の刃”は廊下の壁を伝って縦横無尽に駆

け回り方向転換、再び俺目掛けて飛んでくるものだから始末に負えない。

これが一本ならまだいい。

しかし慎二の出した“影の刃”は総数八本。

その全てで以て廊下の壁・天井・床を陣取り、俺を取り囲んでいる…… さながら鉄格子が回転鋸の刃で作られた牢獄のような状態だ。

八本全ての“影の刃”を一斉に俺に向かわせてしまえば勝負は早々につくのだが、慎二は何故か二、三本の“影の刃”でしか同時に俺を襲わせない。

こつちをナメてかかっているのか、はたまた余裕のつもりか……それなら解らなくもない。

何しろ今の俺は無手……両の手に武器を何も持ってはいないのだ。

悔りを覚えこそすれ、恐怖を感じると言うのはちょっと無理があるだろう。

しかしその悔りこそが、俺の命運を永らえさせてくれているのは純然たる事実。

そしてつけ入る隙がそこに出来ているのもまた事実だ。

ならば。

「いつけええええつ!!」

「ッ!? コイツ何を……!? ええい!!」

バック走で全速ダッシュ。

焦ったように背後から迫り来る複数の“影の刃”を手足を縮めたバツクジャンプで回避し、廊下の突き当りの角にある掃除用具の入ったロッカーまでちよつとよろめきながらも辿り着く。

仮に慎二が油断していなければ、即座に背中側に“影の刃”を密集隊形で組ませていただろう。

もしそうになっていたとしたら『ところてん式』にジ・エンドだった。

しかし実際に来たのは僅か三本、しかも位置がバラバラで隙間が大きく開いていた。

避けるのにさほど苦勞はなく、俺はロッカーのドアに手を掛けバン、と勢いよく開くと、中からモップを引っ張り出す。

そしてモップ本体と柄を素早く分離させると、頭に撃鉄を打ち下ろすイメージで以て魔術回路を起動させた。

「『^{トレース}同調・開始』!」

間、髪を入れずモツプの柄に『強化』魔術を施す、結果は成功。

刃を潰した日本刀並みに硬度を増したモツプの柄を振るい、慎二に向かつて特攻を仕掛ける。

「うち！ 戻れ、“影のや”遅い！！」 ツ！？」

対処のため、慎二が展開していた“影の刃”を自分の手元に戻そうとするがそんな事はさせない！

命令通り戻ろうとして一瞬動きを止めた近くの“影の刃”を、すかさずモツプの柄を振るって攻撃。

ガシャン、とガラスの碎けるような耳障りな音を立てて、“影の刃”が消滅した。

「でえええい！！」

続いて二つ目、返す刀で三つ目、更に返す刀で四つ目、最後にもう一つ。

計五つの“影の刃”を撃墜し、慎二へ向かって更に加速する。

「くそ、衛宮のくせにやるじゃないか……！！ 術式展開、“影の刃”！ 今度のはさっきみたいに脆くはないぞ！」

苛立ったように口汚く叫ぶ慎二。

左手に持った本を開き、指を鳴らすと慎二の両隣に二つ、今度はさっきの物よりもやや大きめの“影の刃”が現れた。

明らかに密度も魔力量もさっき砕いたものより上だ。

確かに、あれ相手に『強化』したとはいえこんな棒切れじゃ……いや、でも『あれ』なら案外いけるか？

「死ねえ、衛宮ー！」

“影の刃（強）”が今まさに動き出そうとする直前、制服のポケットに手を突っ込み、『ある物』をグツと握りしめ『強化』魔術を施す。

当然の如く成功……どうも俺って逆境に陥っていると、魔術の成功率が上がるみたいだな。

ちよつと複雑だけど、贅沢は言えない。

「おおりゃあああぁあつー！」

そして“影の刃（強）”が俺を標的にスタートを切ったと同時にポ

ケツトから素早く手を抜き出すと、握った二つのそれを両方の“影の刃（強）”目掛け思い切り投げつけた。

空気を切り裂きながら突き進むそれは“影の刃（強）”にあっという間に接触する。

その瞬間、“影の刃（強）”は実にアッサリと二つとも砕け散った。

「んなっ！？ ば、バカな！？」

目の前の現実が受け入れられないのか、目を大きく見開く慎二……これはチャンスだ。

この隙に、動揺のために動きにブレが生じた残り三本の“影の刃”を次々と切り払っていく。

しかし、ほんの僅かの時間でまさかここまで動けるようになるなんて……迅雷コーチ、本当にありがとうございます！

「衛宮、お前一体何をした！？ 僕の“影の刃”があんなにアッサリと砕けるなんて……！！」

「お前の足元をよく見てみるよ！ それが答えだ！」

「それ……って、これは、しゅ、手裏剣！？ なんでこんな物が！」

？ いや、なんでこんな物で！？ というか、コンクリートの床にザックリ突き刺さってるってどんだけだよ！！？」

残りの凶器を駆逐していく傍ら、示された（異様な）回答に更なる混乱に叩き落される慎二。

そう、俺が投げ放ったのは黒色に鈍く輝く鋭利な四方手裏剣
不用意な一言で迅雷コーチが俺を壁に縫い付けた時の代物だ。

あの後回収して何となくジーンズのポケットに入れていたのだが、
万一のために持ってきておいたのだ。

“小波のサーヴァント”という特殊事情があるにせよ一応これもサーヴァントの武器だから、神秘もそれなりにある。

その上『強化』魔術を施したのだから質も威力も底上げされ、結果
慎二が繰り出した“影の刃”も、いと簡単に破壊する事が出来た。
それに……慎二の魔術は魔力をただ使っているだけ、という印象の
強い代物で、例えるなら体積に対して密度が異様に低い、発泡スチ
ロールみたいな魔術なのだ。

そんな代物に密度の高い、固い石を投げつけたら果たしてどっちが
勝つか……結果は火を見るよりも明らか。

というか、『強化』済のサーヴァント謹製の武器とはいえ、あそこ
まで威力があるとは思わなかったぞ。

攻撃力は完全にこのモップの柄よりも上だったし……『強化』魔術

の強化効率も、感触からして手裏剣の方が良かったような気がする。いつもは木刀や角材なんかを『強化』させてたから解らなかつたけど、どういう事だ？

俺の魔術って、もしかして刃物関係と相性がいいんだらうか？

……いや、考えるのは後回しだ。

今はとにかく　　慎二のヤツを！

「慎二イイイイツ!!」

「ひ、ひいつ!?!」

“影の刃”すべてを破壊し、慎二の立つ場所まであと一歩という位置まで肉薄する。

そしてモップの柄を振りかぶり、怯む慎二目掛けて思いっきり振り下ろす　　が。

「ッ!?!　な、何だこれ!?!　壁か!?!」

「……ッ、は、ハハッ!　な、何だよ、そんなモンかよ衛宮!　“影の刃”は壊せても、この“影の障壁”はブチ抜けないみたいだな

「！」

俺の渾身の一撃は、俺と慎二の間に現れた黒い壁に阻まれた。

ガツキン、といやに硬質な音が辺りに響き渡り、更に運の悪い事に衝撃でモップの柄が真つ二つにへし折れてしまった。

壊れてしまった事で『強化』の効果も失われ、もう完全に使い物にならない。

どうやらこの“影の障壁”だけは、発泡スチロールの出来ではなかったようだ。

「くっ、武器が……ッ!? し、しまった!？」

「ふう……一瞬肝を冷やしたけど、あらかじめ“影の障壁”をオートガードで仕掛けておいてよかったよ。そして……この距離なら流石に避けられないだろ？」

形勢逆転と悟るや、慎二は半月状に唇を吊り上げると右手の指をすぐ目の前の俺に向かって突き付ける。

すぐさまバックステップを踏み、同時にガラクタと成り下がったモップの残骸を捨て、手裏剣の入ったポケットに手を突っ込む。

……だが無情、僅かに慎二の方が早かった。

「グッバイ、衛宮。術式展開」

勝利を確信した慎二が喜悦に歪んだ笑みを浮かべ、左手に握る本の力で魔力を回転させる。

そして今まさに“影の刃”が放たれようとしたその瞬間。

「術式展開、『エクспロード』!!」

そんな言葉が聞こえてきたかと思うと、直径三メートルはあろうかという巨大な火の球が慎二の身体を包み込んだ。

「ッ!? ぐあああああっ!?!」

完全に不意を突かれた形の慎二、衝撃と熱に耐えかね苦痛の悲鳴を上げる。

今の声は !

「士郎君ッ、無事か!?!」

「ッ!? 青いヒーロー……小波か!」

額の角が四本ある、青いパワードスーツに身を包んだ小波が廊下の向こう側から、こちらに向かって全力で駆けてきているのが見えた。

第三十九夜 「学園の死闘と野球少年（その3）」（後書き）

筋力・技術・素早さが上がった！！

第四十夜 「学園の死闘と野球少年（その4）」

Interlude 40-1

「ぐっつ……い、今は……!？」

両断された右腕を即座に回収しつつも、騎乗兵はひどい脂汗を流しながら呻く。

さしものサーヴァントも、腕を切断されて平気でいられるほど化け物染みてはいない。

曇りのない鏡のように綺麗な切断面からは血ワタが垂れ下がり、コンクリート製の廊下を結界とは違った意味で紅く染め上げる。

片腕を失って尚、臨戦態勢を崩さないその精神力は尋常ではない。

右腕を口に啜え、残った左腕のみで釘剣を構えるその様相はまるで悪鬼そのものだ。

「私の宝具の力に決まっているだろう？ もつとも、貴様の腕を斬り飛ばせるとまでは思っていないが……結果オーライといったところか」

「その……剣が、貴女の、宝具……ですか」

容赦なく襲い来る激痛に秀麗な顔を歪めながら、騎乗兵は問いかける。

それを受けた忍者は、実に飄々とした態度で右手に掴んだ諸刃剣を肩に担ぐとコクリ、とひとつ頷いた。

「うむ、銘を『風神剣』という。その効果は……貴様が身を以て知った以上、語る事はない」

随分と意地の悪い、と騎乗兵は心の中で毒づく。

確かに効果こそおよその見当はついたものの、確信には至らない。

肝心要の部分を、目の前の忍者ははぐらかしているのだから。

『風神剣』

埼玉珠子の持つ、風の力を宿した諸刃剣であり彼女の宝具。

一振りでも数人まとめて同時に屠ると謳われたこの名剣は、その実刀

身に宿る風の力を解放する事で斬撃を拡大、真空の刃として飛翔させる事を可能にする。

実際、騎乗兵と忍者の彼我の距離はかなり離れていたものの、この剣にかかれば互いの間合いの遠さなど、あつてないようなもの。

ただ空間を薙ぐだけで、相手をいとも容易く切り裂いてしまう。

もつとも欠陥もあり、斬撃を飛ばす度毎にその力は段々と弱まっていつてしまうのだ。

完全に切れてしまえば当然、斬撃を飛ばす事は出来ない。

力が回復するまでの間、『風神剣』はただの名剣と成り下がってしまふ。

だからこそ、それを補い得る『対』となる剣がある訳なのだ
が。

「ではお互いカードを切ったところで、死シ合い再開といこうか」

「ッ!？」

言葉と共に情け容赦なく振るわれる『風神剣』。

咄嗟に横に飛んだ騎乗兵の元いた空間の壁には、幾筋もの斬撃の跡

が残されていた。

どんなに辛かろうとも、動き回るしかない。

冷や汗に濡れた騎乗兵は、再び三面を利用しての跳躍移動を開始する。

己が魔眼による『重圧』で、スピードに関しては完全にアドバンテージを握っている……だからこそ、駆ける。

一歩一歩動く度にその美貌が辛そうに歪むが、手を緩めればあっという間に三枚に下ろされる以上そんな事は許されない。

躲す、躲す、躲す、躲す。

床、壁、天井にと、数えるのも億劫な程の刀傷が付けられる。

しかし騎乗兵は固定砲台と化した忍者の放つ真空の刃を悉く、ギリギリのところで躲していく。

「ほう？ 驚いたな。そのザマでまだそこまで動けるか。片腕を失って相当辛かろうに……」

「ど、同情をするくらいなら……剣を振るのを止めて、頂きたいものですな」

「うむ、それは出来ん相談だな。というか、腕を口に啜えた状態で

よく喋れるな。むしろそっちの方が驚きだ」

口元を覆う手拭の奥で笑みを浮かべながら、騎乗兵の言葉をバツサリ切り捨てる。

解っていたとはいえ、今の状況下でのその言葉は騎乗兵には相当に堪えるようだ。

腕の痛みとは別の意味で、騎乗兵の顔が歪められた。

「ならば……無理矢理、止めさせて頂くまで！」

「むっ!?!」

瞬間、『風神剣』に鎖がジャラジャラと絡みつく。

騎乗兵の死にももの狂いの力で以て投擲された釘剣、それが深々と床に突き立つと同時に、『風神剣』の挙動を完全に封じ込めた。

右腕諸共剣を絡め取られた忍者は、まさに鎖につながれた犬同然。

杭のようにコンクリートの床に突き立つ釘剣と、その反対側の釘剣を持つ騎乗兵の怪力で以て刀身が締め付けられ、ギリギリと歪な音を立てる。

同時に右腕からもギシギシと軋むような異音が響いていた。

「……ふむ、絡め取られたか。むう、中々にガツチリとしているな、馬鹿力め。痛いではないか」

「一応、褒め言葉として……受け取って、おきましようか」

満身創痍の身体を叱咤しながら巻き付けた鎖を引き絞る騎乗兵……しかし。

(解せない……何故ここまで余裕が?)

疑問が僅かに脳裏をよぎる。

そう、己が宝具を封じられても尚飄々としていられる程、忍者は余裕たっぷりだ。

確実に何かがある……だが一体何を狙っているのか。

騎乗兵は不可解だった。

「ぬっ……くっ……ちっ！これだけ動かして、結局は手しか抜けないとは。刀身部は完全に抑え込まれたか」

無理矢理右腕を振り回して鎖を解こうとした忍者であったが、辛うじて右手そのものの拘束を解く事が限界だった。

『風神剣』の刀身部分と鐔の部分は今だ鎖によって磔状態だ。

……しかし。

(やはりおかしい……今の状態ならあの剣から手を離せば攻撃を仕掛けられるものを……なぜそうしない?)

更なる疑問がよぎる。

だが騎乗兵は今の体勢を崩せない。

肉体的にも精神的にもそこまでの余裕がある訳ではないし、今『風神剣』の拘束を解けばさっきまでの斬撃乱舞がリプレイされてしまう。

そんな事になるうものなら『THE END』、騎乗兵はこの世からの退場を余儀なくされる。

それだけは出来ない、絶対に。

自分にはまだ、為すべき事があるのだから。

それ故に、騎乗兵は動けない。

騎乗兵の一瞬の逡巡、そこに忍者はつけ込んだ。

「ふん、ならばサービスだ。もう一枚、切り札を切ってやる。……唸り狂え、『雷神剣』」

「っぐ！？ がああああっ！！」

瞬間、騎乗兵の身体が紫電に焼かれ、ひきつけを起こしたかのように痙攣した。

全身からバチバチと火花が迸り、焦げ付くような臭いが辺りに漂う。

当然、そんな状態で鎖を引き絞っておく事など出来よう筈もない。

忍者が軽く右手を振るうだけで剣に自由が戻り、それとは反対に騎乗兵の鎖が力なくジャラリと地面にくずおれた。

「っ……ぐ……」

「む、『雷神剣』の電撃の直撃を受けてもまだ意識を保っているか。何ともしぶとい」

騎乗兵の長身ながらも華奢な身体が、片膝立ちで痙攣を無理矢理抑え込んでいるのに僅かに目を見張りながら忍者は右手の剣を構える。その剣は先程まで掴んでいた物とは明らかに形状が違っていた。

『雷神剣』

『風神剣』と対を成すこの宝具は、通常の剣とは構想的な点から一線を画しており、その内部にカラクリを仕込まれた、機械仕掛けの甚だ異質な剣である。

柄にあるスイッチ一つで刀身に高圧電流を流す事が可能となっており、一度斬り付ければ斬撃と電撃の、二重の攻撃を実現する。

稲妻のような黄色い鍔がその特性の象徴であり、忍者は固定された『風神剣』からこの『雷神剣』にスイッチし、鎖伝いに高圧電流を浴びせたのだ。

状況を最大限利用した、乾坤一擲のカウンターである。

もっとも彼女の持つ宝具はこれで打ち止め、宝具の全容を敵に知られてしまった訳なのだが忍者はそれほど気にしていなかった。

この二刀は絶対的な威力を誇っている武器ではなく、元来宝具に求

められる切り札的価値が相対的に低かった事もある。

それに忍者は宝具以上に、別な要素で騎乗兵に対する絶対優位なアドバンテージを保持していた。

むしろこちらこそがこの戦いにおいての切り札であるともいえる。

そして騎乗兵相手になら仮にそれが露見したところで、決して覆す事は出来ない。

そういう類の物なのだ。

「ふう……ふう……、く、やって、くれますね……。直接戦闘がそこまで得意でないとはいえ、まさかここまで圧されるとは……」

「……まあ、職業柄、お前のような輩の相手には慣れているのでな。単に相性の問題だろうよ」

「相性……?」

忍者の言っている事がよく解らず、騎乗兵は首を傾げる。

だが忍者が答えを告げた時、騎乗兵はこの場での敗北を悟った。

いや、悟らざるを得なかった。

「ああ、どこかの私は退魔師でもあるのだよ。専門はヴァンパイア・ハンター……つまり、お前のような吸血鬼とは抜群に相性がいいという事さ」

そして騎乗兵は、この穂群原からの即時撤退を決意した。

たとえ仮初のマスターが反対したとしても如何せん不利に過ぎるこの状況下、否やなどとは決して言わせない。

いまだ炯々と輝きを宿すそのアメジストの瞳は、そう物語っていた。

I
n
t
e
r
l
u
d
e

o
u
t

第四十夜 「学園の死闘と野球少年（その4）」（後書き）

話のストックが尽きてしまった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8800n/>

運命と出逢う野球少年

2011年7月31日22時04分発行